DS 851 A2R5 1940 v.2

Rikkokushi
Zoho Rikkokushi

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/zhorikkokushi028800

佐伯有義校訂標注

增補 六國史

卷貳

朝日新聞社藏版

LIBRARY
DEC 9 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

DS
851
A2R5
1940
v.2

日本書紀

卷下

日本書紀

巻十

校訂
標注

六國史第二卷目次

日本書紀下卷【自卷十六至卷卅】

卷第十六【武烈紀】

小泊瀨稚鷦鷯天皇（武烈天皇）

即位前紀……一
元年—四年……五
五年—八年……六

卷第十七【繼體紀】

男大迹天皇（繼體天皇）

即位前紀……九
元　年……一〇
二年—六年……一四
七　年……一六
八　年……一八
九年—十年……一九

十二年—廿一年……二〇
廿二年……二一
廿三年……二二
廿四年……二五
廿五年……二八

卷第十八【安閑紀・宣化紀】

廣國押武金日天皇（安閑天皇）
即位前紀—元年……二九
二　年……三三
武小廣國押盾天皇（宣化天皇）
即位前紀—元年……三五
二年—四年……三七

卷第十九【欽明紀】

天國排開廣庭天皇（欽明天皇）
即位前紀……三九
元　年……四〇

二年……四二
四年……四七
五年……四八
六年……五六
七年……五七
八年—九年……五八
十年—十一年……五九
十二年—十三年……六〇
十四年……六三
十五年……六五
十六年……六九
十七年—廿一年……七一
廿二年—廿三年……七二
廿六年……七六
廿八年—卅一年……七七
卅二年……七八

卷第廿【敏達紀】
渟中倉太珠敷天皇（敏達天皇）
卽位前紀——元年……八一
二年——三年……八三
四　年……八四
五　年……八五
六年——十年……八六
十一年——十二年……八七
十三年……九〇
十四年……九二
卷第廿一【用明紀崇峻紀】
橘豐日天皇（用明天皇）
卽位前紀……九五
元　年……九六
二　年……九八
泊瀨部天皇（崇峻天皇）

即位前紀……九九
元　年……一〇三
二年―三年……一〇四
四年―五年……一〇五

卷第廿二【推古紀】

豐御食炊屋姫天皇（推古天皇）

即位前紀―元年……一〇七
二年―三年……一〇八
四年―七年……一〇九
八年―九年……一一〇
十年……一一一
十一年……一一二
十二年……一一三
十三年―十四年……一一七
十五年……一一八
十六年……一一九

十七年——十八年……一二二
十九年……一二三
廿　年……一二四
廿一年……一二六
廿二年——廿五年……一二七
廿六年——廿八年……一二八
廿九年……一二九
卅一年……一三〇
卅二年……一三二
卅三年——卅六年……一三四

卷第廿三【舒明紀】

息長足日廣額天皇(舒明天皇)

卽位前紀……一三七
元年——二年……一四三
三年——四年……一四四
五年——八年……一四五

九年——十年……一四六
十一年——十二年……一四七
十三年……一四八

卷第廿四【皇極紀】

天豐財重日足姫天皇（皇極天皇）

即位前紀——元年……一四九
二　年……一五五
三　年……一六〇
四　年……一六四

卷第廿五【孝德紀】

天萬豐日天皇（孝德天皇）

即位前紀……一六九
大化元年……一七一
同　二年……一七七
同　三年……一九一
同　四年……一九三

大化五年……一九四
白雉元年……一九七
同　二年……二〇〇
同　三年……二〇一
同　四年……二〇二
同　五年……二〇四

卷第廿六【齊明紀】

天豐財重日足姫天皇（齊明天皇）

卽位前紀——元年……二〇七
二　年……二〇八
三　年……二〇九
四　年……二一〇
五　年……二一四
六　年……二一七
七　年……二二二

卷第廿七【天智紀】

天命開別天皇（天智天皇）
即位前紀……二二五
元年……二二七
二年……二二八
三年……二三〇
四年……二三二
五年……二三三
六年……二三四
七年……二三五
八年……二三八
九年……二四〇
十年……二四一

卷第廿八【天武紀上】

天淳中原瀛眞人天皇（天武天皇）
即位前紀……二四七
元年……二四八

卷第廿九【天武紀下】

天淳中原瀛眞人天皇(天武天皇)

二年……二六五
三年……二六八
四年……二六九
五年……二七三
六年……二七七
七年……二七九
八年……二八〇
九年……二八四
十年……二八六
十一年……二九〇
十二年……二九四
十三年……二九七
十四年……二〇三
朱鳥元年……三〇七

卷第卅【持統紀】

高天原廣野姫天皇（持統天皇）

即位前紀……三一五
元年……三一七
二年……三一九
三年……三二一
四年……三二五
五年……三二九
六年……三三三
七年……三三七
八年……三三九
九年……三四一
十年……三四三
十一年……三四四

附錄

一、日本書紀所見宮都並山陵一覽……一

二、書紀所見冠位並位階表……五
三、天武天皇紀賜姓一覽……六
四、書紀關係三韓官位一覽……一四
五、書紀所見韓國地名略攷……二二
扉題字……三上參次筆

【卽位前紀】

○長好刑理、以下斷獄得情に至る二十字は後漢書明帝紀に據れり刑理は罪人を刑罰し裁斷するを云法令分明は法令に明かなるを云日晏坐朝は晏は晩也時刻の遲くなるまで朝に坐して訴訟を聞食すなり幽枉必達云々は僥倖を得て罪を免るゝものなく判決實狀に叶へるを云○類造諸惡、按に武烈天皇を暴虐の君とせるは百濟の筍加等が末多王を誣て暴虐無道なりと奏上せし百濟記の文の轉じて本文となりしにて上代よりの誤傳なることを書紀類聚解（內山眞龍）に既に之を辨じ齋藤彥麻呂は武烈天皇暴虐正論を落合直澄氏は武烈天皇聖德考を著して之を細說せり水鏡正統記に天皇い崩御の御

日本書紀卷第十六

小泊瀨稚鷦鷯天皇　武烈天皇

小泊瀨稚鷦鷯天皇、億計天皇太子也、母曰春日大娘皇后、億計天皇七年、立爲皇太子、長好刑理、法令分明、日晏坐朝、幽枉必達、斷獄得情、又頻造諸惡、不脩一善、凡諸酷刑無不親覽、國內居人咸皆震怖、十一年八月、億計天皇崩、大臣平群眞鳥臣、專擅國政、欲王日本、陽爲太子營宮、了卽自居、觸事驕慢、都無臣節、於是太子思欲聘物部麁鹿火大連女影媛、遣媒人向影媛宅期會、影媛曾干眞鳥大臣男鮪、鮪、此云茲寐、恐違太子所期、報曰、妾望奉待海柘榴市巷、由是太子欲往期處、遣近侍舍人就平群大臣宅、奉太子命求索官馬、大臣戲言陽進曰、官馬爲誰飼養、隨命而已、久之不進、太子懷恨、忍不發顏、果之所期、立歌場衆、歌場、此云多我岐、執影媛袖躑躅從容、俄而鮪臣來、排

年を十八歳とし十歳にて御卽位ありしなれば紀に見ゆるが如き御所行のあるべきにあらず

○居人、人民を云毛詩鄭風に巷無居人と見ゆ

○營宮、宮の字は中イ本及集解に據て補ふ

○於是太子、寮本並に楓本太子の上に武烈天皇爲の五字、其下に時の字あり應本には太子の二字なし又記には影媛を菟田首の女大魚とし顯宗天皇の御事とす其方正しからむ

○聘、履中紀卽位前紀に納采をアトフルと訓り

○龐鹿火大連、記に荒甲之大連とあり物部氏纂記に饒速日命十二世孫木蓮子大連の孫にして麻佐良大連の子とあり

○媒人、ナカタチは中立の意、今仲人(ナカウド)と云媒は字書に謀也謀合二姓以成昏媾也とあり

○期會、字書に要約曰期とあり相會すべき日を約せしむるを云

○海柘榴市、大和志に城上郡金屋村地名尙存とあり(今磯城郡三輪村大字金屋)

太子與影媛間立、由是太子放影媛袖移廻向、前立直當鮪、歌曰、之哀世能、儺鳴理鳴彌黎麼、阿蘇寐俱屢、思寐我簸多泥爾、都摩陀氐理彌喩、一本以之哀世易儺斗、鮪答歌曰、飫瀰能古能、耶陛耶賀羅賀枳、瑜屢世登耶瀰古、太子歌曰、飫哀陀掇鳴、多黎播枳多掇氐、農哿儒登慕、須衞婆陀志氐謀、阿波夢登茹於謀賦、鮪答歌曰、飫哀枳瀰能、耶陛能矩瀰賀枳、哿賀梅騰謀、儺鳴阿摩之耳彌、哿々農俱彌柯枳、太子歌曰、於彌能姑能、耶賦能之魔柯枳、始陀騰余瀰、那爲我與釐據魔、耶黎夢之魔柯枳、一本以耶賦能之魔柯枳易耶陛賀羅賀枳、太子贈影媛歌曰、擧騰我瀰爾、枳謂屢箇噎比謎、拖摩儺羅磨、婀我哀屢拖摩能、婀波寐之羅陀魔、鮪臣爲影媛答歌曰、於哀枳瀰能、瀰於寐能之都波陀、夢須寐陀黎、陀黎耶始比登謀、阿避於謀婆儺俱爾、太子甫知鮪曾得影媛、悉覺父子無敬之狀、赫然大怒、此夜速向大伴金村連宅、會兵計策、大伴連將數千兵、儌之於路、戮鮪臣於乃樂山、一本云、鮪宿影媛舍、卽夜被戮、是

○官馬、公の馬なり
○大臣、原本大を太に作る諸本に據て改む
○歌場、多くの男女相集まり歌の贈答をなして樂しみ遊ぶを云萬葉九に登筑波嶺爲嬥歌會日作歌見え其注に嬥歌者東俗語曰賀我比とあり常陸風土記に嬥歌會を俗云宇太我岐又云加我毘と記したり記傳に歌(ウタ)加賀比の賀比を切めて伎と云るにて加賀比は又カグレアヒの切りたるなりカグレは妻をよばふ事を云古言なるべくカガとは互に歌をよみてカグレ交すよしの名なるべしと云ひ倭訓栞にはかけあふの義けあの反加也と言ひ言別にも歌を以て互に掛合をするなりと云りカヾヒとウタガキとは同じものなれど歌垣は人垣を作りて歌を謠ふより云ひカヾヒは歌を以て唱和し掛合をするよりいへるにて言の意は同じからず
○躑躅、タチアタリは影媛の前に當りて立給ふを云字書に行不進也また不能行貌とあり
○從容、字書に舒緩貌と

時、影媛逐行戮處、見是戮已、驚惶失所、悲涙盈目、遂作歌曰、伊須能箇瀰、賦屢鳴須擬底、舉慕摩矩羅、拖箇播志須擬、暮能娑幡爾、於哀野該須擬、播屢比能、箇須我鳴須擬、逗摩御暮屢、鳴佐哀鳴須擬、拖摩該爾播、伊比佐倍母理、拖摩暮比爾、瀰逗佐倍母理、儺岐曾哀遲喩俱謀、柯号比謎阿婆例、於是影媛收埋既畢、臨欲還家、悲鯁而言、苦哉、今日失我愛夫、卽便灑涕、愴矣纏心、歌曰、娜鳴爾與志、乃樂能婆娑摩爾、斯斯貳暮能、瀰逗矩陛御暮黎、瀰儺曾曾矩、思寐能和俱吾鳴、阿娑理逗那偉能古、冬十一月戊寅朔戊子、大伴金村連謂太子曰、眞鳥賊可擊、請討之、太子曰、天下將亂、非希世之雄不能濟也、能安之者其在連乎、卽與定謀、於是大伴大連率兵、自將圍大臣宅、縱火燔之、所攜雲靡、眞鳥大臣恨事不濟、知身難免、計窮望絶、廣指鹽詛、遂被殺戮、及其子弟詛時、唯忘角鹿海鹽不以爲詛、由是角鹿之鹽爲天皇所食、餘海之鹽爲天皇所忌、十二月、大伴金村連平定賊訖、反政太子、請上尊號曰、今億計天

皇子、唯有陛下、億兆欣歸、曾無與二、又賴皇天翼戴、淨除凶黨、英略雄斷、以盛天威、天祿日本必有主、主日本者、非陛下而誰、伏願、陛下仰答靈祇、弘宣景命、光宅日本、誕受銀鄕、於是太子命有司、設壇場於泊瀨列城、陟天皇位、遂定都焉、是日、以大伴金村連爲大連、

あり多くはオモムロニと訓るが此にタチホコルとあるは立誇にて威容を示し給ふ意に取れり　○之裒世能云々、潮瀨の波の高く立る處を見れば其處に游び來る鮪の鰭手に吾めづる妻は立てりとなり凡て海には潮の路ありて流るるものなればそを潮瀨と云ナヲリは波折にて波の高く立つ處を云抄龍魚部に鮪は鮪一名黃頰魚(之比)鰭は文選注云鰭(波太俗云比禮)魚背上鬣也とあり鮪に鮪臣を含め其側に妻の立るが見ゆるとなりタテルミユと云が普通の格なれどかくタテリミユといふも一の格なり麼は原本磨に作る寮本に據て改む都麻は原本に都の字一字衍れり楓本及釋紀に據て削る　○飫瀰能古能云々、臣之子は鮪自らを指せり臣の子の八重の韓垣を結ひめぐらせるを皇子は許せと宣給ふにやといひて鮪臣の影媛の前に立塞れるを君は許せと宣給ふにやと詰り問ひたるなりユルセは或は緩くせよにてもあるべし耶陛耶の下の耶は記傳に能とす　○飫裒陛椒鳴云々、大太刀を垂佩き立ちては皇子の佩き給ふを云今は之を拔ず暫時猶豫すれども若し我意に應ぜざればたとひ汝を殺しても影媛に遇はむとぞ思ふとなり　○飫裒枳瀰能云々、大王の爲に八重の組垣をかゝむかとも思へざるる必要もなければ組垣をばかゝず若し隔ての垣を除かむと欲せば除き給へとなりナヲアマシヾミは詳ならねど汝を甘しゞみにて甘しと思ふ故にの意か記傳言別を始め種々の解あれどいづれも解き得ず尙よく考ふべし　○於彌能姑能云々、オミノコは鮪臣を云臣の子の八節の柴垣は下動み地震がゆり來らば直に破るべき柴垣なりとなり、ヤフは八節にて柴垣の幾所も葛を以て結べるを云ひ下動みは柴垣の柱の朽ちて下の方のふら〳〵になれるを云　○擧騰我瀰儞云々、琴頭に來居る影媛玉ならば我が欲する玉の鮑眞珠なりと影媛の容姿の美しき狀をめでゝ詠みまぜるなり　○於裒枳瀰能云々、大王の御帶の倭文繒結垂れまでは誰と云む爲の序に置るなり誰やし人は誰れ人にてヤシは助辭、オモハナクニは思はぬになりナクはヌを延べて云り大王は妾をあはれと思召せど既に鮪臣と契りて今は誰人をも思はずとなり　○赫然、毛詩大雅の注に赫は怒意とありオモホテリは神代紀下に見ゆ中本に四字引合とあり赫然大怒の四字にてオモホテリと訓べしと云へり　○大伴金村連、錄左京神別神松造の條に道臣命八世孫金村大連公とあり室屋大連の子談の子なり(公卿補任)　○儆、字書に儆を要也遮也と注すれば儆字の意に用ひしなるべし名義抄にいづれもサイキルと訓り　○乃樂山、大和國添上郡　○伊須能箇瀰云々、此歌は鮪臣の誅せられしを悲しみて詠めるにて其喪をとむらはむと布留を過ぎ高橋を過ぎ大宅を過ぎ春日を過ぎ夫の籠る佐保をも過ぎて玉笥には飯を盛り玉鋺には水を盛り之を鮪臣に手向けむと遠路を泣きそぼち往くかもと云るなり、石上、薦枕、物多に、春日のは何れも枕詞なり、布留は山邊郡、高橋も同郡なるべし大宅、春日、佐保は何れも添上郡なり影媛は鮪臣を弔はむと其の本居の地なる山邊郡石上より添上郡乃樂山まで尋來りしなり、飯と水とは死者に供へむが爲に持來りしにて上古は喪を弔ふ時に之を携往くこと例なりしなるべし玉笥は笥は抄器皿部に禮器注云笥(介)盛食器也とあり玉鋺は神代紀下に見ゆ、ソボツは濡るゝを云ひカゲヒメアハレのアハレは歎息の辭　○悲鯁、字書に鯁哽通ずとあり哽は咽悲塞也とあり　○愴矣、原本愴を搶に作る北本楓本應本に據て改む　○纏心、ムスボレは思ひ亂れて晴れやらず氣の塞がるを云　○婀鳴儛與志云々、大伴連に對して奈良の谷間に葬れる鮪臣は罪人なれども之を求め出でゝ其墓を發掘すること勿れといへるにてアヲニヨシは奈良の枕詞奈良の谷間に猪鹿自物水漬隔籠り水灑ぐ鮪の稚子を求食出づること勿れとなり猪鹿自物云々は猪鹿の叢に隱るゝが如く深く葬りたる鮪臣をと云なり、水漬隔籠といひ水灑ぐと云は鮪の緣語なりミナソヽクは水動くなりとも云アサリは搜し求むるをいひツは出なりキノコは大伴連を云猪は山野にありて食物をあさり此處彼處を荒すもの故に之に譬へて云り　○

元年春三月丁丑朔戊寅、立春日娘子爲皇后、未詳娘子父是年也太歲己卯、

二年秋九月、刳孕婦之腹而觀其胎、

三年冬十月、解人指甲使掘署預、十一月、詔大伴室屋大連、發信濃國男丁作城像於水派邑、仍曰城上也、是月、百濟意多郎卒、葬於高田丘上、

四年夏四月、拔人頭髮使昇樹巔、斬倒樹本、落死昇者爲快、是歲、百濟末多王無道、暴虐百姓、國人遂除而立嶋王、是爲武寧王、

百濟新撰云、末多王無道、暴虐百姓、國人共除、武寧立、諱斯麻王、是混支王子之子、則末多王異母兄也、混支向倭時、至筑紫嶋、生斯麻王、自嶋還送、不至於京、產於嶋、故因名焉、今各羅海中有主嶋、王所產嶋、故百濟人號爲主嶋、今案嶋王是蓋鹵王之子也、末多王是混支王之子也、此曰異母兄未詳也、

【元年】(注)娘子父、原本父を文に作る楓本中本に據て改む集解に此六字を私記攙入とす

【二年】刳孕婦之腹云々、類聚解の說の如く百濟記の文なるべし此筆勢いかにも他の文中より拔抄せるものと思はる三年の文も亦同じ

【三年】指甲、指甲は爪なり抄形體部に爪甲四聲字苑云爪(豆米)手足指上甲也とあり ○署預、抄果蓏部に本草云薯蕷一名山芋(夜萬乃伊毛)とあり箋注に爾雅翼所引本草醫心方及廣雅唐書地理志等に署預に作るとあり原本署を薯に作る應本に據て改む ○城像、集解に像の字を傍訓攙入とす ○城上、廣瀨郡城戸郷あり萬葉に木瑞之宮木上宮とも見ゆ大和志に廣瀨郡所攜、攜は麈と同じ指揮するを云 ○雲靡、文選長楊賦の注に如雲靡々而進とあり ○廣指鹽詛、大王は鹽を聞食すべからずと廣く海の名を擧て詛ひ奉りしなり楓本詛をノコフ(ノロヒトコフの略か或はコはロの誤か)中本はノロフテ又トコフと訓り ○角鹿、越前國敦賀郡 ○爲天皇所食、契沖本爲の上得の字あり ○欣歸、文選勸進表に惟有陛下億兆攸歸曾無與二とあり欣は攸の訛ならむか應本は陛下を階下(下同じ)に欣歸を依歸に作る ○曾無與二、文選の注に無二心也とあり ○翼戴、字書に輔翼尊戴之意とあり ○英略、原本英を莫に作る寮本應本に據て改む ○景命、景は字書に大也とあり天下に君たるの大命なり ○誕受銀郷、誕は字書に大也とあり銀郷は韓國を云顯宗紀元年(卷上二九八頁)に金銀蓄國とあり ○泊瀨列城、編年記に泊瀨列城宮大和國城上郡、通證に在城上郡長谷寺南出雲村(今磯城郡朝倉村大字出雲)と云り

城上岡在大塚村とあり（今北葛城郡馬見村大字大塚）○高田丘、大和志に葛下郡百濟意多郎墓在岡崎村とあり（今北葛城郡陵西村大字岡崎）

【四年】斬、字書に斬也とあり　○末多王、雄略紀二十三年（卷上二八五頁）に出づ我國より立て、王と爲せし人なり　○國人逐除、三國史記に百濟東城王二十三年冬十一月熊川及泗沘に獵せしに其臣苩加人をして王を刺しむとあり二十三年は辛巳にて武烈天皇三年に當れば一年の差あり　○武寧王、雄略紀五年（卷上二六七頁）に出づ三國史記に武寧王諱斯摩牟大王之第二子也とあり紀の文と異れり　○（注）異母兄、集解雄略紀五年に據て母を父に改む○故因名焉、原本因を固に焉を鳥に作る固は應本中本に據て、鳥は北本應本中本に據て改む　○各羅、雄略紀五年（卷上二六七頁）に見ゆ

【五年】塘槭、字書に塘は池塘也圓曰池方曰塘とあり槭は抄天地部水土類に淮南子云決塘發槭（和名以飛）許愼曰槭所以通陂竇也とあり　○三及矛、此より外には見えず是も亦我國のものに非ず三韓のものなるべし

【六年】小泊瀨舍人、清寧紀二年白髮部舍人同膳夫同靱負を置かれし例に據て小泊瀨舍人を置せらる故に天皇の舊例に依てと云り卽ち子代の民なり孝德紀大化二年を參照すべし　○代號、此天皇小泊瀨稚鷦鷯天皇と申奉り泊瀨列城に天下を知食せば小泊瀨舍人と云るは御代の號を傳へむ爲に置かせられたりと申して聞ゆれど或說には代號は號代の轉倒せるにてナシロと訓むべしとも云り

【七年】胥族、東國通鑑に眞骨王族也とあり　○斯我君、蕃神考に聖明王の子とす　○倭君之祖、倭君は錄左京諸蕃に和朝臣出自百濟國孝墓王十八世孫武寧王也とあり武寧王の子は聖明王其子は斯我君にて其子倭君なれば武寧王の曾孫なり祖の字北本寮本中本先に作り寮本也の下未詳の二字あり

【八年】遊牝、抄毛群部に禮記云遊牝于野（此間云由比日本紀私記云豆流比）廐牧令義解に遊牝猶交接也とあり

（癸未）五年夏六月、使人伏入塘槭、流出於外、持三及矛、刺殺爲快、

（甲申）六年秋九月乙巳朔、詔曰、傳國之機、立子爲貴、朕無繼嗣、何以傳名、且依天皇舊例、置小泊瀨舍人、使爲代號、萬歲難忘者也、冬十月、百濟國遣麻那君進調、天皇以爲、百濟歷年不脩貢職、留而不放、

（乙酉）七年春二月、使人昇樹、以弓射墜而咲、夏四月、百濟王遣斯我君進調、別表曰、前進調使麻那者、非百濟國主之骨族也、故謹遣斯我奉事於朝、遂有子、曰法師君、是倭君之祖也、（ナリトシテ有）

（丙戌）八年春三月、使女躶形坐平板上、牽馬就前遊牝、觀女不淨、沾濕者殺、不濕者沒爲官婢、以此爲樂、及是時、穿池起苑、以盛禽獸、而好田獵、走狗

○苑、字書に畜養禽獸也とあり

○甚雨、ヒサメは垂仁紀五年に大雨を訓り倭名抄箋注にヒタアメの急呼ヒタメの轉なりと云

○衣溫、原本溫を濕に作る應本及紀略に據て改む

○侏儒倡優、字書に侏儒は短小人也倡優は女樂也とあり

○爛熳之樂、文選長笛賦の注に聲亂而多也とあり

○奇偉之戲、列女傳孽嬖傳に桀既棄禮義淫于婦人求美女積之於後宮收倡優侏儒狎徒能爲奇偉戲者娶之于旁造爛漫之樂とありアヤシクウタテと訓るアヤシクは奇怪なる意ウタテは穩ならず善からぬ所業を云

○靡靡之聲、タハシは字鏡に妖樂戲也嬉也就也太波志とあり淫聲を云なり尚書畢命の疏に韓宣子稱紂使師延作靡々之樂靡々者相隨從之意とあり

○沈湎、字書に沈湎溺於酒也とありエヒサマタレは字鏡に酩酊を惠比佐萬太古留と訓ると同じかるべし

○綾紈、紈は字書に素也また素之輕者也白熟也とあり

○天皇崩、大日本史に本書享年缺水鏡神皇正統記並曰年十八歷代皇紀皇年代略記皇代記帝王編年記並五十七今按主前說則帝未卽位挑彩媛時方十歲豈有此事哉主後說則帝在位八年應以四十九歲卽位仁賢帝壽五十或五十一是二三歲而生帝也豈復有此理二說共不可信とあり按るに仁賢天皇は顯宗天皇と共に早くより難を避けて身を隱し給ひしかば清寧天皇三年以前に御子のましますべき理なく之に依て推算すれば水鏡の說據ありといふべし

試馬、出入不時、不避大風甚雨、衣溫而忘百姓之寒、食美而忘天下之飢、大進侏儒倡優、爲爛熳之樂、設奇偉之戲、縱靡靡之聲、日夜常與宮人沈湎于酒、以錦繡爲席、衣以綾紈者衆、冬十二月壬辰朔己亥、天皇崩于列城宮、

日本書紀卷第十六

日本書紀卷第十七

男大迹天皇　繼體天皇

男大迹天皇、更名彦太尊　譽田天皇五世孫彦主人王之子也、母曰振媛、振媛活目天皇七世之孫也、天皇父聞振媛顏容姝妙甚有嬾色、自近江國高嶋郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、中此云那納以爲妃、遂産天皇、天皇幼年父王薨、振媛迺歎曰、妾今遠離桑梓、安能得膝養、余歸寧高向、高向者、越前國邑名、奉養天皇、天皇壯大、愛士禮賢、意豁如也、天皇年五十七歲、八年冬十二月己亥、小泊瀨天皇崩、元無男女、可絶繼嗣、壬子、大伴金村大連議曰、方今絶無繼嗣、天下何所繫心、白古迄今、禍由斯起、今足仲彦天皇五世孫、倭彦王、在丹波國桑田郡、請試設兵仗、夾衛乘輿、就而奉迎、立爲人主、大臣大連等一皆隨焉、奉迎如計、於是倭彦王遙望迎兵、懼然失色、仍遁山壑、不知所詣、

【卽位前紀】男大迹天皇、記に袁本杼命とあり北本中本大を太に作る　○彦主人王之子、紹運錄に應神天皇の御子稚渟毛二派皇子次に太郎子次彦大人王とあり、是は釋紀に引ける上宮記の傳へにて（異なるは彦大人王を汙斯王に作れり）正統記には隼總別皇子の子大迹王其子志毘王其子彦大人王とつゞけたるは傳の異れるなり王の下之の字原本なし前本北本に據て補ふ彦主人は比古宇志と訓むべしアルジ又ヌシトなど訓むは非なり　○七世之孫、釋紀所引の上宮記に伊波都久和希兒偉波智和希兒伊波己里和氣兒麻和加介兒阿加波智君兒乎波智君兒布利比彌命とあり之の字は前本北本に據て補ふ

○姝妙、端正と同訓なり原本姝を妹に作る北本舊紀に據て改む姝は字書に美好也とあり　○嬬、新撰字鏡に嬬媛同支良支良志字鏡集に嬬美同美良とあり　○三尾、抄に近江國高島郡三尾郷(今大溝村)とある是なり　○別業、別館なり仁德紀十一年に田宅を訓り業(ナリ)處の義、田に作りたる物の生(ナル)より出たる語にて田邊に家を造り居るを云　○三國坂中井、坂中井は越前國坂井郡なり三國は今も地名存せり按に上代は三國が大名なりしを坂名井を郡名とせしより三國は狹まりて郡に屬せり大日本史に古事記曰意富々杼王三國君等之祖也舊事紀曰二派王者三國君祖也姓氏錄曰三國眞人出自繼體皇子椀子王蓋天皇初在三國故其裔孫冒三國姓乎と云　○桑梓、顯宗紀二年(卷上三〇一頁)に出づ　○安能得勝養、前本得の字なし是なるに似たり　○歸寧、左傳莊廿七年の杜注に寧問父母安否とあり文字は毛詩周南に出づ　○高向、越前國坂井郡高向郷(今高椋村及丸岡町)是なり　○(注)高向、以下八字集解に私記攙入とす　○壬子、前本になし　○倭彦王、世系詳ならず　○兵仗、書言故事の注に兵仗兵甲隊仗也とあり　○隨焉、原本焉を爲に作る前本北本中本に據て改む　○懼然、舊紀懼を愕に作る

【元年】大伴金村大連、原本伴の下大連の二字あり前本北本に據て削る　○天緒、後漢書順帝紀及文選鵠元彦表に見ゆ　○勸進、集解に按文選有劉琨勸進表臣勸其主受禪卽尊謂之勸進また通證に今按俗謂化度爲勸進謂招禱爲勸請蓋借此義也とあり　○許勢男人、公卿補任に巨勢小柄宿禰四世孫父河上臣也とあり　○枝孫、字の如しミアナスエは景行紀四年(卷上一四四頁)に苗裔を訓り　○法駕、御輿なり後漢書輿服志に天子出有大駕有法駕有小駕と見ゆ　○警蹕、先を追ふを云集解に古今注輿服曰警蹕所以戒行徒也云々蹕路也謂行者皆警於途路也とあり

(丁亥)元年春正月辛酉朔甲子、大伴金村大連更籌議曰、男大迹王性慈仁孝順、可承天緒、冀慇懃勸進、紹隆帝業、物部麁鹿火大連、許勢男人大臣等僉曰、妙簡枝孫、賢者唯男大迹王也、丙寅、遣臣連等、持節以備法駕、奉迎三國、夾衛兵仗肅整容儀、警蹕前駈、奄然而至、於是男大迹天皇晏然自若、踞坐胡床、齊列陪臣、既如帝坐、持節使等由是敬憚、傾心委命、冀盡忠誠、然天皇意裏尙疑、久而不就、適知河內馬飼首荒籠密奉遣使、具述大臣大連等所以奉迎本意、留二日三夜、遂發、乃喟然而歎曰、懿哉馬飼首、汝若無遣使來告、殆取蚩於天下、世云勿論貴賤但重其心、蓋荒籠之謂乎、及至踐祚厚加荒籠寵待、甲申、天皇行至樟葉宮、二月辛卯朔甲午、大伴金村大連乃跪上天子鏡劍

○奄然、字書に奄は忽也遽也とあり
○憂然、漢書董仲舒傳の注に自安意也とあり
○胡床、抄調度部に風俗通云靈帝(後漢)好胡服京師皆作胡床(阿久良)とあり
○齊列、原本齊を齋に作る北本楓本中本に據て改む
○陪臣、左傳僖十二年の注に諸侯之臣曰陪臣また玉篇に家臣也とあり
○河内馬飼首、河内飼部のこと履中紀五年に見ゆ
○取蚩、字書に蚩は笑也とあり北本蚩を嗤に作る
○樟葉宮、河内志交野郡の條に古蹟在楠葉村と云今北河内郡に屬す
○鏡劍璽符、鏡劍の璽符なり此は鏡劍を璽符と申したるにて鏡劍と曲玉とにはあらず然らば何故に曲玉を省きたるかと云ふに神代紀には八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍を三種の神器として天祖より皇孫に傳へ給ひ次々に相傳へ給ひしを崇神天皇天祖親授の鏡劍を摸造ぜられ眞の鏡劍をば伊勢神宮及熱田神宮の御鎮代と齋ひ奉

璽符再拜、男大迹天皇謝曰、子民治國重事也、寡人不才、不足以稱、願請廻慮擇賢者、寡人不敢當、大伴大連伏地固請、男大迹天皇西向讓者三、南向讓者再、大伴大連等皆曰、臣伏計之、大王子民治國最宜稱、臣等爲宗廟社稷計不敢忽、幸藉衆願、乞垂聽納、男大迹天皇曰、大臣大連將相諸臣咸推寡人、寡人敢不承、乃受璽符、是日卽天皇位、以大伴金村大連爲大連、許勢男人大臣爲大臣、物部麁鹿火大連爲大連、並如故、是以大臣大連等各依職位焉、庚子、大伴大連奏請曰、臣聞、前王之宰世也、非維城之固、無以鎭其乾坤、非掖庭之親、無以繼其趺萼、是故白髮天皇無嗣、遣臣祖父大伴大連室屋、每州安置三種白髮部、言三種者、一白髮部舍人、二白髮部供膳、三白髮部靱負、以留後世之名、嗟夫可不愴歟、請立手白香皇女納爲皇后、遣神祇伯等敬祭神祇、求天皇息允、答民望、天皇曰、可矣、三月庚申朔、詔曰、神祇不可乏主、宇宙不可無君、天生黎庶、樹以元首、使司助養、令全性命、大連憂朕無息、披誠款以國家世々盡忠、豈唯

り御摸造の鏡劍なぞ齋部氏をして御卽位の時に奉らしめ八坂瓊曲玉は天皇御親ら次の天皇に傳へ給ふことゝなりしかば古語拾遺に以八咫鏡及草薙劍二種神寶授賜皇孫永爲天璽矛玉自從などと記せるが如く曲玉を鏡劍に附屬せし物の如く思ひ誤りしなり然るからに又紀中に神器の御事を記せる體區々にて清寧顯宗允恭紀等に天皇之璽とあるは論なきも本紀には上の如く記し推古紀舒明紀には天皇之璽印孝德紀には璽綬など記せり、是等は支那の天子の印章の名を借りたるまでにて後の制の符節鈐印などいふ類の物にあらず

○西向讓者云々、漢書文帝紀に出でたる文字にて數度謙讓し給ひしを潤飾せし記者の文なり

○大王子民云々、原本子民以下於二兄治後に至る三百十七字及細注二十八字錯亂して其三曰耳皇子一の下にあり前本北本楓本中本及類史に據て訂す

○不敢忽、原本忽を忽に

朕日歟、宜備禮儀奉迎手白香皇女、甲子、立皇后手白香皇女、脩教于內、遂生一男、是爲天國排開廣庭尊、波羅企、是嫡子而幼年、於二兄治後、有其天下、二兄者、廣國排武金日尊、與武小廣國押盾尊也、見下文、戊辰、詔曰、朕聞、士有當年而不耕者、則天下或受其飢矣、女有當年而不績者、天下或受其寒矣、故帝王躬耕而勸農業、后妃親蠶而勉桑序、況厥百寮、暨于萬族、廢棄農績而至殷富者乎、有司普告天下、令識朕懷、癸酉、納八妃、納八妃雖有先後、而此曰癸酉納者、據卽天位占擇良日、初拜後宮爲文、他皆效此、元妃尾張連草香女曰目子媛、更名色部、生二子、皆有天下、其一曰勾大兄皇子、是爲廣國排武金日尊、其二曰檜隈高田皇子、是爲武小廣國排盾尊、次妃三尾角折君妹曰稚子媛、生大郎皇子、與出雲皇子、次坂田大跨王女曰廣媛、生三女、長曰神前皇女、仲曰茨田皇女、少曰馬來田皇女、次息長眞手王女曰麻績娘子、生荳角皇女、荳角、此云是侍伊勢大神祠、次茨田連小望女、或曰妹、曰關媛、生三女、長曰茨田大娘皇女、仲曰白坂活日姬皇女、少曰小野稚郎皇女、更名長石姬、次

作る前本楓本北本に據て改む忽は名義抄字鏡並にイルカセと訓り　○幸藉衆願、原本藉を籍に作る諸本に據て改む　○敢不承、原本承を乖に作る前本北本に據て改む　○璽符、上に云る鏡劍璽符なり支那に所謂璽符は史記孝文紀に上天子璽符と見え唐六典節寶郎の注に玉璽は傳國璽也秦始皇取藍田玉刻而爲之其書李斯所制而文曰受命于天云々秦滅傳漢云々とあり符は其璽を符節とするなり、我三種の神器と同一視すべからず　○是日、原本日を曰に作る前本北本楓本中本に據て改む　○卽天皇位、大日本史に時年五十八注に據水鏡愚管抄皇代記及本書崩年八十二之文とあり　○以大伴金村人連爲大連云々、金村は武烈紀に帝卽位の日爲大連とあれど男人麁鹿火の大連となりしことは前に見えず公卿補任にも二人初任年月未詳とあり男人大臣の下なる爲大臣の三字麁鹿火大連の下なる爲大連の三字並に北本に無けれどなくては意通ぜず　○維城、訓の如く儲君をいふ、文字は毛詩大雅生民之什に宗子維城とあるを取る箋に宗子は王の適子を謂ふ懷德維寧宗子維城無俾城壞とあり民を治るに德を懷ひ酷虐の政なければ汝の國を安くす是を以て宗子の城となすとあり一轉して宗子の稱とす　○掖庭、訓の如く皇后を申す仁德紀卽位前紀(上二一三頁)に見ゆ　○趺蓼、趺は跗又樹に同じ字書に樹は花蓼之房也蓼は花未開時所藉以保護者在花瓣外部數片輪生亦稱蓼片とあり倭名抄にハナフサと訓り毛詩小雅に棠棣之華鄂不韡韡々、箋に承華者曰鄂不當作拊拊鄂足也鄂足得華之光明則韡々然盛興者、喻兄弟之以敬事兄兄以榮翼弟恩義之顯亦韡々然古聲不相同とあり樹蓼相俟て花の光明を得るが如く兄弟相親みて榮顯に至るの意なり、それより轉じて昭穆の意に用ひこゝは正嫡の意に用ひたりミツギは御繼嗣なり　○大伴大連室屋、大伴の二字は前本北本楓本に據て補ふ　○(注)白髮部舍人、以下清寧紀に詳なり北本供膳を供部に作り前本北本靫負の下に也の字あり　○手白香皇女、仁賢天皇の皇女　○神祇伯、記の神武の段に神八井耳命爲忌人而仕奉とある忌人は伯に當れりされば後の神祇伯に當る職掌は古くよりありしなるべし但し當時は未だ神祇伯とは言はず後の名を古へに廻らしていへるなり　○求天皇息、此は天皇の嫡子を求め給ふなり上に維城の固に非ざれば云々とあるに應ず此時既に勾大兄檜隈高田の二皇子坐せばたゞ皇子を求むるの意にはあらず　○神祇不可乏主、左傳桓五年に民神之主也今民各自心而鬼神乏主とあるに據れり主は民を云下文天生黎民の句に應ず　○元首、尙書益稷の注に元首君也とあり　○令全性命、集解令を各に作る　○朕日、朕が世の意　○脩敎于內、訓の意は內つ政事せしむなり內政は後べの政事卽ち後宮の事を云　○(注)波羅企、原本企を爾に作る前本北本中本に據て改む　○幼年、原本幼を多に作る前本北本中本に據て改む　○(注)二兄者云々、以下二十一字集解に私記攙入とす　○十有當年云々、以下三十一字は淮南子齊俗訓の文に據れり　○不績者、前本北本績を續に作る下同じ字書に續は與績同とあり又績者の下則の字あるべし　○帝王躬耕、禮記月令に見ゆ　○蠶、前本北本は蜃に作り原本蚕に作る今中本に從ふ蜃は蠶の俗字蚕は略字なるべし　○桑序、水本に序を事に作るべしと云　○萬族、人民を云　○目子媛、原本目を日に作る北本中本に據て改む北イ本に國とあり記に尾張連之祖凡連之妹目子郎女とあり　○三尾角折君、三尾君は垂仁紀に見ゆ角折は名なり　○稚子媛、記に若比賣とあり　○出雲皇子、原本子を女に作る北本に據て改む記にも出雲郎子とあり　○坂田大跨王女、錄左京皇別に坂田宿禰息長眞人同祖應神皇子稚渟毛二派王之後也とあり其同族なるべし　○廣媛、記に黑比賣と見ゆ　○少、前本

三尾君堅槭女曰倭媛、生二男二女、其一曰大娘子皇女、其二曰椀子皇子、是三國公之先也、其三曰耳皇子、其四曰赤姬皇女、次和珥臣河內女曰荑媛、生一男二女、其一曰稚綾姬皇女、其二曰圓娘皇女、其三曰厚皇子、次根王女曰廣媛、生二男、長曰菟皇子、是酒人公之先也、少曰中皇子、是坂田公之先也、是年也太歲丁亥、

小に作る　○馬來田皇女、記には漏る　○息長眞手王、大跨王と同族ならむ　○荑角皇女、記に佐々宜郎女と見ゆ倭名抄箋注に荑角は角荑の倒置なるべしと　○(注)娑佐凝、前本娑佐を沙左に作る　○白坂活日姫皇女、記には白坂活日子郎女とあり記傳に子字は衍字なるべしとて削る　○小野稚郎皇女、原本小を北に作る前本北本中本に據て改む記にも小野郎女とあり　○(注)更名長石姫、記には長日比賣とあり　○甲午、記に加多夫とあり　○大娘子皇女、記には大娘郎女とあり　○椀子皇子、記に丸高王とあり記傳に麻呂古と訓むべしと云　○三國公、錄左京皇別に三國眞人繼體天皇皇子椀子王之後也天武紀十三年眞人を賜ふ　○和珥臣、記に阿倍之波延比賣とあり和珥臣は孝昭紀六十八年に見ゆ　○稚綾姫皇女、原本稚を雅に作る前本北本に據て改む記に若屋郎女とあり　○圓娘皇女、記に都夫良郎女とあり　○厚皇子、記に阿豆王とあり　○根王、詳かならず　○菟皇子、記になし　○酒人公、錄左京皇別に酒人眞人繼體天皇皇子菟王之後也天武紀十三年に眞人を賜ふとあり　○中皇子、記に見えず舊紀に田中皇子に作れり　○坂田公、錄右京皇別に坂田眞人繼體皇子仲王之後也天武紀十三年眞人を賜ふ　○太歲、原本太を大に作る北本に據て改む

【二年】傍丘磐杯丘陵、諸陵式に大和國葛下郡とあり陵墓考覽に北葛城郡志津美村大字今泉と見ゆ　○耽羅、今の朝鮮全羅南道濟州島なり天智天武持統紀等に貢物を奉れることと見ゆ隋書百濟傳には其南海行三月有耽牟羅國附庸于百濟とあり

【三年】(注)久羅麻致支彌、原本彌を禰に作る前本中本に據て改む按に車持君は履中紀五年に見ゆ　○任那、原本那の字なし前本北本に據て補ふ　○日本縣邑、邦人の彼國に渡り住みて設けたる村邑なるべし　○絶貫、貫はへと訓む戸籍を云

【五年】筒城、原本筒を箇に作る前本北本に據て改む筒城は山城國綴喜郡

二年、冬十月辛亥、朔癸丑、葬小泊瀨稚鷦鷯天皇于傍丘磐杯丘陵、十二月、南海中耽羅人初通百濟國、

三年、春二月、遣使于百濟、百濟本記云、久羅麻致支彌從日本來、未詳、括出在任那、日本縣邑百濟百姓浮逃絶貫三四世者、並遷百濟附貫也、

五年、冬十月、遷都山背筒城、

六年、夏四月辛酉朔丙寅、遣穗積臣押山使於百濟、仍賜筑紫國馬四十匹、冬十二月、百濟遣使貢調、別表請任那國上哆唎、下哆唎、娑陀、牟婁四縣、哆唎國守穗積臣押山奏曰、此四縣近連百濟、遠隔日本、旦暮易通、鷄犬難別、今賜百濟、合爲同國、固存之策無以過此、然縱賜合國、後世猶危、況爲異場、幾年能守、大伴大連金村具得是言、同謨而奏、迺以

物部大連麁鹿火宛宣勅使、物部大連方欲發向難波館宣勅於百濟客、其妻固要曰、夫住吉大神初以海表金銀之國高麗百濟新羅任那等授訖胎中譽田天皇、故大后氣長足姫尊與大臣武内宿禰、每國初置官家、爲海表之蕃屏、其來尚矣、抑有由焉、縱削賜他、違本區域、綿世之刺詎離於口、大連報曰、教示合理、恐背天勅、其妻切諫云、稱疾莫宣、大連依諫、由是改使而宣勅、付賜物并制旨、依表賜任那四縣、大兄皇子前有緣事不關賜國、晩知宣勅、驚悔欲改、令曰、自胎中之帝置官家之國、輕隨蕃乞、輙尒賜乎、乃遣日鷹吉士改宣百濟客、使者答啓、父天皇圖計便宜勅賜既畢、子皇子豈違帝勅妄改而令、必是虛也、縱是實者、持杖大頭打、孰與持杖小頭打痛乎、遂罷、於是或有流言曰、大伴大連與哆唎國守穗積臣押山受百濟之賂矣、

なり古蹟は山城志に自多々羅林至水取村地名尚存すとあり今も同郡普賢寺村に都谷の名遺ると【六年】穗積臣、開化紀（卷上一〇九頁）に見ゆ　○上哆唎下哆唎、雄略紀二十一年に久麻那利者任那國下哆唎縣之別邑也とあり　○娑陀牟婁、上下哆唎と接近せる地にて蟾津江の東岸なるべし　○日本、紀略に大倭に作り北本には此二字なし集解之を日本府と解し官府の二字に改む　○鷄犬難別、其境の近きを云　○後世猶危、日本府に隔る地なれば後世に至らば尚危しとなり永く任那國として保存することの困難なるを云　○異場、原本場を塲に作る集解に據て改む場は字書に大界曰疆小界曰場とあり　○難波館、韓使を宿泊せしむる館舍なり抄居處部に唐韻云館（字亦作館太知日本紀私記云无路都美）客舍也とあり浪華名所圖會に難波館趾は攝津國東生郡眞田山の北に在り字を唐居殿といふとあり　○固要、要は字書に求也却也劾也とありイサムは諫むの義　○住吉大神、大の字は前本北本中本に據て補ふ　○授訖、訖は原本記に作る京極本託に作るとあれど未だ其書を見ざれば姑く中本に據る　○胎中、中本に中を内とす　○氣長足姫、前本氣を息に作る　○初置官家、神功紀攝政前紀征韓の條に因以定内官家と見ゆ　○區域、原本域を城に作る前本に據て改む　○綿世、永世に同じ　○切諫、原本切を功に作る前本楓本中本に據て改む　○不關賜國、原本關を聞に作る前本及釋紀に據て改む　○驚悔欲改、原本欲改令にて句とするは誤れり　○輙尒、原本尒を示に作る前本北本に據て改む・○日鷹、原本日を曰に作る諸本に據て改む　○子皇子、天皇の御子に坐す皇子の意

○持杖大頭云々、天皇の勅は重く皇子の令は輕しとの意に譬へしなり

【七年】五經博士、五經は白虎通に謂易尚書詩禮春秋也とあり五經博士は漢書武帝紀に建元五年に置くとあり
○伴跛國、釋紀に任那國之別種とあり慶尚南道蟾津江上流東岸の地にて百濟と境を接す
○己汶、錄左京皇別吉田連條に御間城入彥天皇御代任那國奏曰臣國東北有三己汶地(上己汶中己汶下己汶)地方三百里土地人民亦富饒與新羅國相爭彼此不能攝治兵戈相尋民不聊生臣請將軍令治此地即爲貴國之部也とあり文獻備考に忠淸道己汶縣本今勿今德山縣百濟時號今勿とあり今忠淸南道に屬す
○百濟太子淳陀、太子の訓は韓語なり淳陀は續紀延曆九年正月十四日條に百濟武寧王之子純陀太子とあり和氏の祖なり
○勾大兄皇子、上に大兄皇子とあり
○春日皇女、仁賢天皇皇女
○斐然之藻、斐然は論語

七年夏六月、百濟遣姐彌文貴將軍、洲利卽爾將軍、副穗積臣押山、百濟本記云、委意斯移麻岐彌貢五經博士段楊爾、別奏云、伴跛國略奪臣國己汶之地、伏請、天恩判還本屬、秋八月癸未朔戊申、百濟太子淳陀薨、九月、勾大兄皇子親聘春日皇女、於是月、夜淸談、不覺天曉、斐然之藻、忽形於言、乃口唱曰、野絁磨俱爾、都磨磨祁哿泥底、播屢比能、哿須我能俱爾々、俱婆絁謎鳴、阿唎等枳々底、與慮志謎鳴、阿唎等枳々底、莽紀佐俱、避能伊陀圖鳴、飫斯毗羅枳、倭例以梨魔志、阿都圖唎都磨怒唎絁底、魔俱囉圖唎都磨怒唎絁底、伊慕我堤鳴、倭例爾魔柯絁每、倭我堤鳴麼、伊慕爾魔柯絁每、磨左棄逗囉、多々企阿藏播梨、矢自矩矢盧、于魔伊爾矢度爾、爾播都等唎柯稽播儺俱儺梨、奴都等唎、枳蟻矢播等余武、婆絁稽矩謨、伊麻娜以幡孺底、阿開爾啓梨倭蟻慕、妃和唱曰、莒母唎矩能、簸都細能哿婆庾、那峨例俱屢馱開能、以矩美娜開余囊開、謨等陛鳴麼、莒等爾都俱

公冶長の注に文貌藻は尙書孔安國注に水草之有文者以喩文焉とあり　○口唱曰、此歌古事記に見ゆる八千矛神の御歌と甚よく相似たり　○野絙磨倶儛、八洲國にて大八洲國なり　○播磨比能、春日（カスガ）の枕詞なり　○帑須我能倶儛々、一鄕を國と云こと吉野國泊瀨國など云る類なり　○莽紀佐倶、槍の枕詞なり冠辭考に拆て板にも何にもすれば拆きたる槍といへり　○阿都圖唎都磨怒唎絙底、懇切を盡す意にて俗にいふ手取り足取りしてもてなすといふが如くにして春日皇女の待ち取り歡び給ふ狀を表はせり次句も同じ　○覽倶囉圖唎、枕と記せど御頭の意と見るべし　○伊摩我堤鳴、春日の皇女の手をばなり　○倭例儛覽柯絙母、繼くは手枕せしむるを云　○倭我堤鳴麼、原本麼を磨に作る前本中本に據て改む下同じ　○磨左棄逗囉、眞辟葛（マサキヅラ）は國史草木攷に今正木葛といふものに本草拾遺に載せたる扶芳藤なり俗につるまさきと云とあり此句は次句多々企を隔て、阿藏播梨にかゝれり　○多々企阿藏播梨、記上卷の歌にソタ、キタ、キマナカリとある曾陀多岐も素手抱きにてこゝに同じ字鏡集に糾にアザハルの訓ありアザナフと同義なり　○矢自矩矢盧、次句の枕詞、冠辭考に繁釧美（シ、クシロウマ）しとほむる語を熟寐し時と云ひかけたりと云り　○于覽伊禰矢度儛、熟睡寢し時になり彦儛を時にの意に用ひたるは萬葉十同十九に例あり　○儛播都等唎、庭つ鳥なり、萬葉に庭津鳥可鷄（カケ）乃垂尾などあり　○根蟻矢播等余武、ドヨムは鳴りひゞく

唎須衛陛鳴麼、府曳儛都倶唎府企儺須、美母盧我紆陪儛、能朋梨陀致、倭我彌細麼、都奴娑播符、以簸例能伊開能、美儺矢駄府紆鳴謨、紆陪儛堤々那嶋矩、野須美矢々、倭我於朋枳美能、於魔細屢、娑佐羅能美於寐能、武須彌陀例、駄例夜矢比等母、紆陪儛泥堤那嶋矩、冬十一月辛亥朔乙卯、於朝庭引列百濟姐彌文貴將軍、斯羅汶得至、安羅辛巳奚、及賁巴委佐、伴跛既殿奚、及竹汶至等、奉宣恩勅、以己汶帶沙賜百濟國、是月、伴跛國遣戢支、獻珍寶、乞己汶之地、而終不賜、十二月辛巳朔戊子、詔曰、朕承天緒、獲保宗廟、兢々業々、間者天下安靜、海內淸平、屢致豐年、頻使饒國、懿哉摩呂古、示朕心於八方、盛哉勾大兄、光吾風於萬國、日本邑々、名擅天下、秋津赫々、譽重王畿、所寶惟賢、爲善最樂、聖化憑茲遠扇、玄功藉此長懸、寔汝之力、宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕、

とゞろきひゞく意雄の鳴聲の健きを云　○婆絺稽矩謨、愛しけくもなりケリは明らかを明らけくといふに同じく古言の常なり、もは歎辭なり　○阿開儛啓梨、夜は明けぬとなり　○妃和唱曰、此御歌は前の御歌の和唱にはあらず言別に云るが如く天皇崩御の際の御愴みの歌なりかく見ざれば解き難し故に言別に據りて注す　○莒毋咧矩能、泊瀨の枕詞、雄略紀に出づ　○鏇都細能哥婆庚、ユはヨリなり古言にヨリをユともヨともいふ前本婆を波に作る　○以矩美娜開余曩開、イクミダケは記雄略の段の大御歌の句に毋登爾波伊久美陀氣淤斐須惠幣波多斯美陀氣淤斐と見え生茂りたる竹を云ヨタケは節竹又は吉竹にてもあるべし次の句に本方は琴に作り末方は笛に作りとあればいくみ竹とよ竹と名は異なれど一つものにて異なる竹にはあらざるべし　○謨等陛鳴麼、原本謨を漠に作る前本北本中本に據て改む又等一字衍れり前本に據て削る　○府企儺須、吹鳴すなり御霊を慰奉り又招魂の爲に琴を撫き笛を吹くを云　○美毋盧我紆陪儛、御室が上になり殯宮のある地の山の上を云　○都奴婆播符、磐余の枕詞　○具鏇例能伊開、磐余の池は大和國十市郡にあり原本鏇を斯に作る北本中本に據て改む　○美儺矢駄府紆鳴謨云々、水中の魚も上に出て歎くとなり　○野須美矢々、大君の枕詞　○於麗細麼、帶ぶるを延べていへり帶び給へるなり　○婆佐羅能美於寐能、細紋の御帶のなり允恭紀八年の御歌に注ぜり　○駄例夜矢比等母、誰人もにてヤシは助辭なり　○紆陪儛泥提那嘘矩、御前に出で歎くとなり　○斯羅、新羅なるべし集解に新羅傳曰魏時曰新盧宋時曰新羅或曰新羅と云　○汝得至、狩谷氏云至譌爲遲　○奉宣、宣の字は北本中本に據て補ふ　○帶沙、蟾津江卽ち帶沙江の上流東岸にあり伴跛の領地原本賜の下國の字あり前本寮本に據て削る　○天下、原本下を丁に作る前本楓本に據て改む　○摩呂古、安閑天皇の別號　○邕々、邕は雝と相通ず毛詩周頌の注に雝和也とあり　○所寶惟賢、尚書旅獒に出づ　○爲善最樂、後漢書蒼平王蒼の傳に出づ　○藉此、原本藉を籍に作る前本寮本中本に據る　○春宮、禮記の注に青宮一名春宮太子宮也とありミコノミヤと訓る例は古今集に見ゆ　○翼吾、原本吾を五に作る前本寮本中本に據て改む

【八年】

○惋痛、神代紀上四神出生章第四一書（卷上一一頁）に悶熱をアツカヒと訓り

○匝布、大和國添上郡佐保に同じ

○子呑、下文二十一年紀に已呑に作る洛東江の上

八年春正月、太子妃春日皇女、晨朝晏出、有異於常、太子意疑入殿而見、妃臥床涕泣、惋痛不能自勝、太子怪問曰、今旦涕泣有何恨乎、妃曰、非餘事也、唯妾所悲者、飛天之鳥爲愛養兒、樹巓作巢、其愛深矣、伏地之蟲爲護衛子、土中作窟、其護厚焉、乃至於人豈得無慮、無嗣之恨方鍾太子、妾名隨絶、於是太子感痛而奏天皇、詔曰、朕子麻呂古、汝妃之詞深稱於理、安得空爾無答慰乎、宜賜匝布屯倉、表妃名於萬代、三月、伴跛築城於子呑帶沙、而連滿奚、置烽候邸閣、以備日本、復

築城於爾列比麻須比、而細麻且奚推封、聚士卒兵器、以逼新羅、駈略子女、剝掠村邑、凶勢所加、罕有遺類、夫暴虐奢侈、惱害侵凌、誅殺尤多、不可詳載、

九年春二月甲戌朔丁丑、百濟使者文貴將軍等請罷、仍勑副物部連、闕名遣罷歸之、百濟本記云、物部至々連、是月、到于沙都嶋、傳聞、伴跛人懷恨銜毒、恃強縱虐、故物部連率舟師五百、直詣帶沙江、文貴將軍自新羅去、夏四月、物部連於帶沙江停住六日、伴跛興師往伐、逼脫衣裳、劫掠所賣、盡燒帷幕、物部連等怖畏逃遁、僅存身命、泊汶慕羅、汶慕羅、嶋名也、

十年夏五月、百濟遣前部木劦不麻甲背、迎勞物部連等於己汶、而引導入國、群臣各出衣裳斧鐵帛布、助加國物、積置朝廷、慰問慇懃、賞祿優節、秋九月、百濟遣州利卽次將軍、副物部連來謝、賜己汶之地、別貢五經博士漢高安茂、請代博士段楊爾、依請代之、十四戊寅、百濟遣灼莫古將軍日本斯那奴阿比多、副高麗使安定等來朝、結好、

流にて慶尙南道巨山縣附近の地
○烽候、抄燈火部に烽燧說文云烽燧(度布比)邊有警則舉之とあり通證に蓋飛火也飛謂速達如飛脚之飛也索隱(史記)墓要曰烽見敵則舉燧有難則焚烽主晝燧主夜とあり候は斥候なり
○邸閣、烽候の居所
○爾列比麻須比、前本爾の上に子呑の二字あり北本寮本中本須を次に作る
○麻且奚推封、未詳
【九年】文貴、原本父に作る前本北本中本に據て改む
○(注)物部至々連、下文に見えたる物部伊勢連父根とあると同人ならむか北本連の下也の字あり
○沙都嶋、詳ならねど帶沙江卽ち今の蟾津江口に近き嶋ならむ
○停住六日、集解日を月に作る
○逼脫、原本脫を晩に作る前本北本楓本に據て改む
○帷幕、通證に謂陣營也とあり
○汶慕羅、詳ならず
【十年】前部、後漢書東夷傳高勾麗條に有五族云々四曰南部二名前部北史百濟傳に都下有方爲五部曰上部中部下部前部後部とあり　○木劦

不麻甲背、劦は劦の誤り木劦は姓、不麻甲背は名なり　○迎勞、途上に迎て勞ふを云　○助加、キクヘテは古言ならむも用例他に見えず天智紀に側助なキイタスクとあり　キは牟(キ)にて物を添ふる義なり　○優節、通證に過ぎ於常時也とあり　○秋九月、前本寮本秋の字なし　○州利卽次、七年紀には次を爾に作れり　○漢高安茂、後年に見えず　○段楊爾、原本楊を陽に作る前本北次寮本に據て改む　○代之、之の字は前本中本に據て補ふ　○斯那奴阿比多、前本那を奈に作る御國の人の百濟にて生みし子の名にや

【十二年】弟國、山城國乙訓郡なり山城志に弟國故都連一百上羽井内上植野等に有二地名御垣本一今同郡乙訓村に弟國宮址と稱ふる所あり

【十七年】武寧薨、三國史記に武寧王二十三年五月至レ自二漢城一夏五月王薨謚曰二武寧一とあり

【十八年】太子明、三國史記に聖王諱明禮武寧王之子也武寧薨繼位國人稱爲二聖王一とあり欽明十五年新羅の爲に殺さる

【廿年】磐余玉穗、編年記に大和國十市郡とあり今の磯城郡安倍村池内の邊なるべし

【廿一年】近江毛野臣、記に波多八代宿禰者淡海臣祖とあれど此氏姓氏錄に見えず　○率衆、原本率を卒に作る諸本に據て改む　○復爲、原本爲復とあり前本寮本に據て改む　○南加羅喙己呑、南加羅喙國は神功紀（卷上一九

（戊戌）十二年春三月丙辰朔甲子、遷二都弟國一、

（己卯）十七年夏五月、百濟國王武寧薨、

（庚辰）十八年春正月、百濟太子明卽レ位、

（辛巳）廿年秋九月丁酉朔己酉、遷二都磐余玉穗一、一本云、十三年也、

（壬午）廿一年夏六月壬辰朔甲午、近江毛野臣率二衆六萬一、欲往任那一復爲興建新羅所レ破南加羅喙己呑一而合任那一、於是筑紫國造磐井陰謀叛逆、猶豫經レ年、恐事難成、恒伺二間隙一、新羅知是、密行貨賂于磐井所一、而勸防遏毛野臣軍一、於是磐井掩據火豐二國一、勿使修職、外邀海路一、誘致高麗百濟新羅任那等國年貢職船、內遮遣任那一毛野臣軍一、亂語揚言曰、今爲使者一、昔爲吾伴一、摩レ肩觸レ肘共器同食、安得卒爾爲使俾レ余自伏儛前一、遂戰而不レ受、驕而自衿、是以毛野臣乃見レ防遏一中途一淹滯、天皇詔二大伴

大連金村、物部大連麁鹿火、許勢大臣男人等曰、筑紫磐井反、掩有西戎之地、今誰可將者、大伴大連等僉曰、正直仁勇通於兵事、今無出於麁鹿火右、天皇曰、可、秋八月辛卯朔、詔曰、咨大連、惟茲磐井弗率、汝徂征、物部麁鹿火大連再拜言、嗟夫磐井、西戎之奸猾、負川阻而不庭、憑山峻而稱亂、敗德反道、侮嫚自賢、在昔道臣爰及室屋、助帝而罰、掠民塗炭、彼此一時、唯天所贊、臣恒所重、能不恭伐、詔曰、良將之軍也、施恩推惠、恕己治人、攻如河決、戰如風發、重詔曰、大將民之司命、社稷存亡於是乎在、勗哉恭行、天罰、天皇親操斧鉞、授大連曰、長門以東朕制之、筑紫以西汝制之、專行賞罰、勿煩頻奏、

○頁）に出で已呑は上に見ゆ　○而合任那、而は前本北本に據て補ふ　○筑紫國造磐井、國造本紀に筑志國造高穴穂朝御世阿倍臣同祖大彦命五世孫田道命定賜國造とあり此國造を君ともいへり記に筑紫君石井とあり其子葛子を此紀に筑紫君と記せり　○猶豫、ウラモヒは裏思ひなり心に思ひつゝ行はざるを云　○火豐二國、火は肥前肥後豐は豐前豐後なり　○誘致、訓ワカヅリは欽明紀に同じ　○嫚、下文に輕を續紀に無禮いづれもナメと訓みたれどナメリと訓るは見えず　○通於兵事、通の訓天武紀に有意を訓り　○弗率、原本率を卒に作る諸本に據て改む　○不庭、左傳隱十年の注に下之事上皆成禮於庭中とあり不庭は禮を庭中になさざるを云　○揉長塗炭、字書に塗は泥也炭は火也とあり民の泥に陷り火に嗽つるを揉ふを云尚書仲虺之誥に出つ　○彼此一時、時は異なれど功勞は同じきを云　○長將を軍也、以下戰如風發に至る二十一字は三略の文なり原文軍の上に統の字あり　○大將民之司命、此司孫子作戰に出づ　○親操斧鉞、漢文の潤飾なり　○功紀摠政前紀（卷上一七六頁）に親執斧鉞と見ゆるも亦同じ

【廿二年】賊帥、原本並に諸本賊帥に作る中本の修訂に據て改む　○筑紫御井郡、筑後國に屬す　○長渠相望云々、梁書侯景傳に出づ

廿二年冬十一月甲寅朔甲子、大將軍物部大連麁鹿火親與賊帥磐井交戰於筑紫御井郡、旗鼓相望、埃塵相接、決機兩陣之間、不避萬死之

地、遂斬磐井、果定堽場、十二月、筑紫君葛子恐坐父誅、獻糟屋屯倉、求贖死罪、

○決機云々、吳志孫策傳に出づ
○斬磐井、筑後風土記上妻縣の條に縣南二里有筑紫君磐井之墓墳云々古老傳云當雄大迹天皇之世筑紫君磐井豪强暴虐不偃皇風生平之時預造此墓俄而官軍動發欲襲之間知勢之不勝獨自遁于豐前國上膳縣終于南山峻嶺之曲於是官軍追尋失蹤士怒未泄擊折石人之手打墮石馬之頭古老傳云上妻縣多有篤疾蓋由茲歟とありて南山に終れりとす　○堽場、原本堽を場に作る前本北本中本に據て改む　○糟屋、筑前國糟屋郡　○贖死罪、葛子は父謀にくみせず由て恭順を表はさむがため屯倉を獻じて罪を贖むことを請ひしなり武藏國造の屯倉を獻りしと似たるを思ふに死罪を贖ふ古例と見えたり

【廿三年】嶋曲、訓の如く御埼なり
○加羅多沙津、加羅は卽ち任那國多沙は九年紀に出たる帶沙と同地なり此地は神功皇后五十年に百濟に賜ひしを今又改め賜はらむと奏請せるなり
○物部伊勢連、出自詳かならず天孫本紀に物部建彥連公伊勢荒田連祖とあり又伊勢國飯野郡物部神社あり
○吉士老、錄攝津皇別に吉士難波忌寸同祖大彥命後也とあり
○大嶋、此大島は多沙河口よりさまで遠からぬ南海島と河口との中間にある大島ならむ雄略紀七年にも見えたれど同じきか否やはよく考ふべし
○錄史、文書を掌る吏な

（己酉）廿三年春三月、百濟王謂下哆唎國守穗積押山臣曰、夫朝貢使者恒避嶋曲、謂海中嶋曲碕岸也、俗云美佐祁、每苦風波、因茲濕所賫、全壞無色、請以加羅多沙津爲臣朝貢津路、是以押山臣爲請聞奏、是月、遣物部伊勢連父根、吉士老等、以津賜百濟王、於是加羅王謂勅使云、此津從置官家以來、爲臣朝貢津涉、安得輒改賜隣國、違元所封限地、勅使父根等因斯難以面賜、却還大嶋、別遣錄史佐官果賜扶餘、由是加羅結儻新羅、生怨日本、加羅王娶新羅王女、遂有兒息、新羅初送女時、幷遣百人、爲女從、受而散置諸縣、令著新羅衣冠、阿利斯等嗔其變服、遣使徵還、新羅大羞、飜欲還女曰、前承汝聘吾便許婚、今旣若斯、請還王女、

り原本に佐官と傍書せるは後より及ぼしたる訓なり職員令に神祇曰史省曰録とあるは後の制なり

○扶餘、東國通鑑に漢鴻嘉三年百濟溫祚王元年改國號曰百濟系與高勾麗同出扶餘故以扶餘爲氏とあり卽ち百濟を云ふ其地名は忠淸南道扶餘郡に存し錦江の上流なり

○褻新羅王女、北本褻の下に於の字あり

○令著新羅衣冠、加羅國人と混ぜざらしめむが爲なり

○阿利斯等、垂仁紀二年に阿羅斯等と見ゆ王といふ韓語ならむ

○嗔其變服、女從の新羅服をやめて加羅服に變ぜしを嗔りしなり

○遣使徵還、原本徵を徵に作る中本に據て改む

○加羅已富利知伽、未詳

○(注)未詳、此二字集解に私記濫入とす

○刀伽古跛布那牟羅、刀伽・古跛、布那は三城の名、牟羅は梁書新羅傳に其俗呼城曰健牟羅とあり城の韓名なり、原本牟

加羅已富利知伽未詳報云、配合夫婦、安得更離、亦有息兒、棄之何往、遂於所經拔刀伽、古跛、布那牟羅三城、亦拔北境五城、是月、遣近江毛野臣、使于安羅、勅勸新羅更建南加羅、喙己呑、百濟遣將軍君尹貴、麻那、甲背、麻鹵等、往赴安羅、式聽詔勅、新羅恐破蕃國官家、不遣大人、而遣夫智奈麻禮、奚奈麻禮等、往赴安羅、式聽詔勅、於是安羅新起高堂、引昇勅使、國主隨後昇階、國內大人預昇堂者一二、百濟使將軍君等在於堂下、凡數月、再三謨謀乎堂上、將軍君等恨在庭焉、夏四月壬午朔戊子、任那王己能末多干岐來朝、言己能末多者、蓋阿利斯等也、啓大伴大連金村曰、夫海表諸蕃、自胎中天皇置內官家、不棄本土、因封其地、良有以也、今新羅違元所賜封限、數越境以來侵、請奏天皇、救助臣國、大伴大連依乞奏聞、是月、遣使送己能末多干岐、并詔在任那近江毛野臣、推問所奏、和解相疑、於是毛野臣次于熊川、一本云、次于任那久斯牟羅、召集新羅百濟二國之王、新羅王佐利遲遣久遲布禮、一本云、久禮爾師知于奈師麻里、百濟遣恩率彌騰利赴

集毛野臣所而二王不自來參、毛野臣大怒責問二國使云、以小事大、天之道也、一本云、大木端者以大木續之、小木端者以小木續之、何故二國之王不躬來集受天皇勅、輕遣使乎、今縱汝王自來聞勅、吾不肯勅、必追逐退、久遲布禮、恩率彌騰利、心懷怖畏、各歸召王、由是新羅改遣其上臣伊叱夫禮智干岐、新羅以大臣爲上臣、一本云、伊叱夫禮知奈末、率衆三千來請聽勅、毛野臣遙見、兵仗圍繞、衆數千人自熊川入任那己叱巳利城、伊叱夫禮智干岐次于多多羅原、不敢歸、待三月、頻請聞勅、終不肯宣、伊叱夫禮智所將士卒等、於聚落乞食、相遇毛野臣傭人河內馬飼首御狩、御狩入隱他門、待乞者過、捲手遙擊、乞者見云、謹待三月、佇聞勅旨、尙不肯宣、惱聽勅使、乃知欺誑誅戮上臣矣、乃以所見具述上臣、上臣抄掠四村、金官、背伐、安多、委陀、是爲四村、一本云、盡多多羅、須那羅、和多、費智爲四村也、盡將人物入其本國、或曰、多多羅等四村之所掠者、毛野臣之過也、秋九月、許勢男人大臣薨、

た宇に作る前本北本寮本等に據て改む　○安羅、任那の日本府ある地　○更建、原本建を遣に作る前本寮本楓本に據て改む　○尹貴麻那甲背麻鹵、四人の名なり欽明紀四年に佐平木劣麻那下佐平木尹貴と見え尹貴麻那は二人甲背は十年紀に前部木劣不麻甲背欽明紀二年に中佐平麻鹵城方甲背昧奴と見ゆ是また二人なり　○大人、官位高き人をいふ下文にも見ゆ　○夫智奈麻禮、奈麻禮は新羅十七等の官名の內にて第十一に當れり夫智、奚は氏なるべし　○國主、安羅卽ち任那王なり前本寮本主を王に作る　○預昇堂、原本預を賴に作る北本中本に據て改む　○凡數月、集解月を日に改む　○已能末多干岐、原本干を于とす下文に據て改む　○本土、原本土を王に作る北本に據て改む　○因封其土、因の字は前本北本中本に據て補ふ　○和解相疑、二國の相疑ふを和解せしむるなり原本にワキラヘトクと在はワはネの誤にてネキラヒは和(ナコ)め勞(ネギラ)ふ義なりアマナハシムは相和せしむるを云　○熊川、慶尙南道熊川　○(注)久斯牟羅、慶尙南道昌原地方ならむ　○佐利遲、新羅二十三世法興王に當る　○恩率、百濟の官位十六品中の第三位なり原本率を卒に作る北本中本に據て改む下同じ　○(汁)

大木端云々、大國は大國として仕ふべきに新羅百濟小國の分として大國の勅を受る爲に國王自ら來らざるは相應ぜざるを云　○湏逐退、集解に退を焉に改作る　○上臣、前本に私記に云上臣讀萬加利陁魯とあり韓語ならむ　○干岐、原本千を于に作るは訛れり前後の例に據て改む千岐の下の注は集解に私記攙入として削る　○率衆、原本率を卒に作る前本北本中本に據て改む　○己吐己利城、未詳　○多々羅原、神功紀五年に蹈鞴津とあると同地なり　○相遇、原本遇を過に作る北本に據て改む　○(注)金官、以下いづれも洛東江河口附近の地ならむ金官は駕洛にて今の金海府　○背伐、原本伐を戌に作る北本及釋紀に據て改む　○委陀、推古紀四年に見ゆ　○須那羅、推古紀に素奈羅とあり　○和多、原本知多に作る北本釋紀に據て改む　○賢智、敏達紀四年に發鬼、推古紀八年に弗智鬼とあり　○許勢男人大臣、原本許を臣に作る北本楓本中本に據て改む

【廿四年】詔曰、以下の詔文は後漢書崔寔傳に據れり　○道臣、大伴氏の祖　○大彦、大彦命にて阿倍氏等七族の祖　○繼體之君、アマツヒツギウクルキミと訓るが如く天位を受繼給ふ君の意にて男大迹天皇を直に指し奉れるにはあらず此文字は史記外戚世家に自古受命帝王及繼體守文之君とあるに據れり其注に謂非創業之主而是嫡子繼先帝之正體而立者也とあり漢風の御諡號は之を採れり　○隆平、原本平を乎に作る北本に據て改む　○漸蔽、集解蔽を敝に改作る　○豈非明佐、上に明哲之佐とあれどこの下脫字あらむ　○土壤、原本壤を脉に作る北本に據て改む前本壤

(廿四)年春二月丁未朔、詔曰、自磐余彦之帝、水間城之王、皆賴博物之臣、明哲之佐、故道臣陳謨、而神日本以盛、大彦申略、而膽瓊殖用隆、及乎繼體之君、欲立中興之功者、曷嘗不賴賢哲之謨謀乎、爰降小泊瀨天皇之王天下、幸承前聖、隆平日久、俗漸蔽而不寤、政浸衰而不改、但須其人各以類進、有大略者、不問其所短、有高才者不非其所失、故獲奉宗廟、不危社稷、由是觀之、豈非明佐、朕承帝業、於今廿四年、天下清泰、內外無虞、土壤膏腴、穀稼有實、竊恐元元由斯生俗、藉此成驕、故令人擧廉節、宣揚大道、流通鴻化、能官之事、自古爲難、爰暨朕身、豈不愼歟、秋九月、任那使人奏云、毛野臣遂於久斯牟羅、起造舍宅、淹留二歲、一本云、三歲者、連去來歲數也、懶聽政焉、爰以日本人與任那人、頻以兒息、諍訟難

を地に作る地壤意相通す
○元元、漢書文帝紀に元々之民、注に善意也とあり
○藉此、原本藉を籍に作る北本に據て改む藉の上に蒼生などの二字を脱せるか上の句と對せず
○宣揚大道、大道は惟神の道なり葦原の瑞穗國を千秋の長五百秋に平けく安けく知食さむ道は他國に之を求むるを得ずたゞ皇祖天神の神勅のまゝに行はせ給ふの外なし此詔古語のまゝならむにはいかに莊嚴ならむを漢語に移したる爲によく其神髓を發揚する事能はざれど之を熟讀し奉れば自ら往昔の狀の目前に髣髴としていとも尊き詔なり
○能官云々、ツカサメシは官召なり其人を得て官に任ずることは難しとなり
○任那使人、人の字は北本に據て補ふ
○久斯牟羅、前年四月の下に出づ
○(注)一本云々、北本連を違に作り前本北本年を歳に作る此注集解に私記攙入として削る

決、元　無能判、毛野臣樂置誓湯曰、實者不爛、虛者必爛、是以投湯爛死者衆、又殺吉備韓子那多利斯布利、大日本人娶蕃女所生爲韓子也、恒惱人民、終無和解、於是天皇聞其行狀、遣人徵入、而不肯來、顧以河內母樹馬飼首御狩、奉詣於京、而奏曰、臣未成勅旨、還入京鄉、勞往虛歸、慚惡安措、伏願陛下待成國命、入朝謝罪、奉使之後、更自謨曰、其調吉士、亦是皇華之使、若先吾取歸、依實奏聞、吾之罪過、必應重矣、乃遣調吉士、率衆守伊斯枳牟羅城、於是阿利斯等知其細碎爲事不務所期、頻勸歸朝、尙不聽還、由是悉知行迹、心生飜背、乃遣久禮斯己母、使于新羅請兵、奴須久利使于百濟請兵、毛野臣聞百濟兵來、迎討背評、背評地名、亦名能備己富里、傷死者半、百濟則捉奴須久利、杻械枷鏁而共新羅圍城、責罵阿利斯等曰、可出毛野臣、毛野臣嬰城自固、勢不可擒、於是二國圖度便地、淹留弦晦、築城而還、號曰久禮牟羅城、還時觸路拔騰利枳牟羅、布那牟羅、牟雌枳牟羅、阿夫羅、久知波多枳五城、冬十月、調吉士至

自任那奏言、毛野臣爲人、傲佷不閑治體、竟無和解、擾亂加羅、倜儻任意而思不防患、故遣日頰子徵召、是歲、毛野臣被召、到于對馬、逢疾而死、送葬尋河而入近江、其妻歌曰、比擺哿馱喩、輔曳輔枳能朋樓、阿符美能野、愷那能倭俱吾伊、輔曳府枳能朋樓、目頰子初到任那時、在彼鄕家等贈歌曰、柯羅屢儞嗚、以柯儞輔居等所、梅豆羅古枳馱樓、武哿左屢樓、以祇能和馱唎嗚、梅豆羅古枳馱樓、

○懶聽政、原本政を改に作る前本北本中本に據て改む　ヨソホシスは他所（ヨソ）にする義なるべし　○以兒息諍訟、日本人と任那人と生兒の種を爭ふなりアラガフは後撰集に誓ひてしこともゆゝしくあらがふなゆめと見ゆ　○誓湯、允恭紀四年（卷上二四六頁）に見ゆ　○（注）大日本人、通證に大は凡の誤とす　○遣人、原本遣を違に作る諸本に據て改む　○顧以、原本顧を領に作る北本中本に據て改む　○毋樹、地名なり神武紀戊午年に見ゆ　○勞往虛歸、赴任の時に人に勞はれて往き何の功績もなく空しく歸るを云　○慚惡安措、水本に惡疑當作愚とありオモナキコトは無面目ことなり　○調吉士、調は氏吉士は尸なり名は缺く錄左京蕃別に百濟國努理使主之後也とあり此の同族ならむ　○皇華之使、京よりの使なり　○率衆、原本率を卒に作る前本北本に據て改む　○伊斯枳牟羅、所在詳ならず　○所期、和解のことを契り居るを云　○背評、詳ならず熊川とあるは採り難し評は郡なり續紀一文武天皇四年六月大神宮儀式帳等に郡に評の字を用ひたり　○（注）亦名云々、名は前本北本に據て補ふ富里の下に前本北本中本也の字あり　○捉、カスキテは掠めてなり　○杠械柳鑠、抄調度部刑罰具に杠をテカシ械をアシカシ盤柳をクビカシ鑠をカナツガリと訓り鑠は前本北本に據て改む鑠は鎖に同じ　○責罵、原本罵を駡に作る諸本に據て改む　○嬰城、字書に閉城而守也とあり　○便地、原本便を使に作る諸本に據て改む地利よき所なり　○淹留弦晦、通證に言涉月也とあり　○久禮牟羅城、詳ならず或は慶尙南道宜寧郡嘉禮面ならむか　○觸路、沿道なり　○騰利枳牟羅、以下五城所在詳ならず　○傲佷、續後紀十九に世中乃伊須賀志態遠添餝利字鑠集名義抄等にヒスカシと訓み神武紀に愎佷をクスカシマと訓り不經の意　○倜儻、字鏡にメヅラシと注したれど釋紀にタカホニと訓り傲ぶる意なるべし又カタホとも訓り原本倜の上又の字あり前本寮本に據て削る　○思不防患、通證に思當作忍とあり殘忍の意　○徵召、原本此下日頰子未詳也の六字を分注とす前本寮本に據て削る　○尋河、淀川なり　○比擺哿馱喩、今河內國北河內郡枚方町ありそこなりユはヨリの意　○輔曳輔枳能朋樓、上代は喪中に舞樂をなして鎭を慰めしこと神代紀、允恭紀四十二年に見ゆ　○阿符美能野、爰は唯近江にて野は調を整ふる爲に添へたる辭　○愷那能倭俱吾伊、毛野の若子なり伊は助辭にて多く人名の下につく那をヌに用ひしは古音を取れり　○在彼鄕家等贈歌曰、原本鄕を卿に贈を賜に作る鄕は釋紀に據り贈は前本北本中本に據て改む　○以柯儞輔居等所、フはイフのイを略せるなり古語及今にてもトイフをチフといふ方言あるに異ならず　○梅豆羅古枳馱樓、上句韓國は訓の如く、カラクニにてそのカラは辛（カラ）に通ひて海山越えて行く辛き國なるに何と思ひてか珍らしき人の目頰子來るとの意　○武哿左屢樓、韓國は壹岐より遠く向へ離（サカ）り居ればなり、原本屢を屢に作る前本中本に據る

廿五年（辛亥）春二月、天皇病甚、丁未、天皇崩于磐余玉穗宮、時年八十二、冬十二月、丙申朔庚子、葬于藍野陵、或本云、天皇廿八年歲次甲寅崩、而此云廿五年歲次辛亥崩者、取百濟本記爲文、其文云、太歲辛亥三月、師進至于安羅、營乞乇城、是月、高麗弑其王安、又聞、日本天皇及太子皇子俱崩薨、由此而言、辛亥之歲、當廿五年矣、後勘校者知之也、

【廿五年】二月、安閑紀を考ふるにこゝに辛丑朔是月の五字あるべし　○崩于磐余玉穗宮、原本玉を土に作る北本中本に據て改む記には丁未年四月九日崩とあり丁未は二十一年なれば四年の差あり月日も異なれり　○年八十二、卽位前紀に武烈天皇八年御年五十七歲と見ゆれば八十四歲なるべし記に四十三歲とあるは由なし　○葬于藍野陵、式に攝津國嶋上郡攝津志に在嶋下郡太田村土人曰池上陵とあり郡名に異同あるは兩郡の境にある故まがへるなり今三島郡三島村に屬す

【注】或本云、以下九十三字集解に私記攙入とす二十八年崩とすれば安閑天皇元年大歲甲寅にて論なきも本文の如く二十五年崩とせば安閑天皇の太歲まで二年間空位となる此由は天書に二十六七の二年を空位とし源平盛衰記に帝位空しき例として繼體天皇二十五年辛亥崩ず安閑天皇元年甲寅卽位二年空しとあり何故の空位なるか他の書に見えねど、欽明天皇御卽位に當りて安閑天皇の皇后と御互に遜讓し給ひしを見れば、御兄には坐せど庶子なる安閑天皇が太子には立たせ給へれど嫡子に坐す欽明天皇に讓り給はむとし給へる中に二ケ年を過ごし給へるが傳に漏れたるか、然るに爲文と注せるは又二十五年崩御の說ありて撰者は之を採りしなり　○乞乇城、原本乇を亡に作る北本楓本に據て改む　○弑其王安、王安は高麗王名は安なり三國史記に五月高勾麗王興安薨號安藏王とある是なり　○俱崩薨、原本薨を葬に作る前本中本に據て改む此に太子皇子俱に薨ぜさせ給ふとあるは訛傳なり太子皇子遜讓の御事ありて空位二年に涉りしをひがめ傳へしなるべし

日本書紀卷第十七

日本書紀卷第十八

廣國押武金日天皇　安閑天皇
武小廣國押盾天皇　宣化天皇

廣國押武金日天皇　安閑天皇

勾大兄廣國押武金日天皇、男大迹天皇長子也、母曰目子媛、是天皇爲人、墻宇凝峻、不可得窺、桓々寛大、有人君之量、廿五年春二月辛丑朔丁未、男大迹天皇立大兄爲天皇、卽日、男大迹天皇崩、是月、以大伴大連物部麁鹿火大連爲大連、並如故、

【卽位前紀】勾大兄、勾は大和國高市郡の地名大兄は元よりの御名月下は後より稱へ奉れるなり　○墻宇、通證に器宇也とあり文選名臣序贊に墻宇高凝と見ゆ　○凝峻、晉書に風操凝峻是鼎卦注凝嚴整貌とあれば訓の如く御爲人嚴格の意なり中本峻を岐に作る　○桓々、尚書武成に桓々如虎注に威武貌とあり　○立大兄爲天皇、通證に之を以て我國御讓位の始なりといへるは後世を以て上代を測りし說にて非說なり我國には上古より御在位中に禪讓の事なし當時支那思想は傳はりたりしかど未だ厭世思想の佛教傳はらざりしかば御讓位のことなかるべし御讓位の始は皇極天皇なり是女帝なるに因れり然るに聖武天皇は男帝に坐しながら深く佛教を信ぜられしより祖宗の御掟に違ひ皇女に讓位し給ひて惡例を貽し給へれば鎌倉時代には三上皇も坐して皇室は益々式微せり　○大伴大連、金村なり北本應本中本連の下爲大連の三字あり

【元年】勾金橋、大和志に在高市郡曲川村　○綽采、仁德紀卽位前紀

元年春正月、遷都于大倭國勾金橋、因爲宮號、三月癸未朔戊子、有司爲

天皇納采億計天皇女春日山田皇女爲皇后、更名山田赤見皇女別立三妃、立許勢男人大臣女紗手媛、紗手媛弟香香有媛、物部木蓮子木蓮子、此云伊拖寨大連女宅媛、夏四月癸丑朔、內膳卿膳臣大麻呂奉勅、遣使求珠伊甚伊甚國造等詣京遲晚、踰時不進、膳臣大麻呂大怒收縛國造等、推問所由、國造稚子直等恐懼、逃匿後宮內寢、春日皇后不知直入、驚駭而顚、慚愧無已、稚子直等兼坐闌入罪當科重、謹專爲皇后獻伊甚屯倉、請贖闌入之罪、因定伊甚屯倉、今分爲郡、屬上總國、五月、百濟遣下部脩德嬭德孫、上部都德己州己婁等來貢常調、別上表、秋七月辛巳朔、詔曰、皇后雖體同天子、而內外之名殊隔、亦可以宛屯倉之地、式樹椒庭後代遺迹、廼差勅使簡擇良田、勅使奉勅、宣於大河內直味張更名黑梭曰、今汝宜奉進膏腴雌雉田、味張忽然悋惜、欺誑勅使曰、此田者、天旱難漑、水潦易浸、費功極多、收穫甚少、勅使依言服命無隱、冬十月庚戌朔甲子、天皇勅大伴大連金村曰、朕納四妻、至今無嗣、萬歲之後朕名絕矣、大伴伯父今作何

に見ゆ、春日皇女の大兄皇子の妃とならせられしことは已に繼體紀七年に見えたれば更に納采など書くべきにあらず舊紀には立春日皇女爲皇后とあり

○木蓮子、天孫本紀に布都久留大連の子とあり饒速日命十二世の孫

○內膳卿、職員令に內膳司奉膳二人掌總和御膳進食先嘗事とあり奉膳卽ち卿なり

○膳臣、錄左京皇別高橋朝臣の條に天武天皇十二年膳臣を改て高橋朝臣を賜ふとあり卽ち高橋朝臣を云磐鹿六獵命の後なり

○求珠、珠は眞珠なるべし

○伊甚國造、記に天菩比命之子建比良命伊自牟國造之祖也國造本紀に伊甚國造志賀高穴穗朝御世安房國造祖伊許保止命孫伊己侶止直定賜國造とあり伊甚は上總國夷灘郡今の夷隅郡是なり

○闌入之罪、漢書成帝紀の注に無符籍妄入宮曰闌とあり

○上總國、總國を分て上總下總とせしたるは大化改

新の時なるべし
○下部脩德嫡德孫、下部は北史百濟傳に都下有方領五部曰上部中部下部前部後部とある其一なり脩德は同書に官品十六等の七品將德なるべし
○秋七月辛巳朔、通釋にこの干支よく當れど此ここにありては下文に合はずと云り以下是に由て注す尙ほ下の今汝味張の條に記せり
○內外之名殊隔云々、皇后は後宮卽ち內に坐して御名を傳へ知らぬ人も多ければ屯倉を置きて御名を後世に遺し給はむとの意なり
○椒庭、內つ宮にて皇后の居を云文選外天行の注に椒庭取二其芳香一也とあり
○大河內直、神代紀瑞珠盟約章(卷上一二三頁)に大を凡に作る天津彦根命の後也
○(注)黑梭、原本黑を里に作る北本中本に據る
○汝宜、原本宜を宣に作る應本北本中本に據て改む
○蜷雉田、集解に河內國地名とあれど音映の田な

計、每念於茲憂慮何已、大伴大連金村奏曰、亦臣所憂也、夫我國家之王、天下者、不論有嗣無嗣、要須因物爲名、請爲皇后次妃、建立屯倉之地、使留後代、令顯前迹、詔曰、可矣、宜早安置、大伴大連金村奏稱、宜以小墾田屯倉與每國田部、給賜紗手媛、以櫻井屯倉(一本云、加賜茅渟山屯倉)與每國田部、給賜香香有媛、以難波屯倉與每郡鑊丁、給賜宅媛、以示於後、式觀乎昔、詔曰、依奏施行、閏十二月己卯朔壬午、行幸於三嶋、大伴大連金村從焉、天皇使大伴大連問(中)良田於縣主飯粒、縣主飯粒慶悅無限、謹敬盡誠、仍奉獻上御野、下御野、上桑原、下桑原、并竹村之地、凡合肆拾町、大伴大連奉勅宣曰、率土之下莫匪王封、普天之上莫匪王域、故先天皇、建顯號垂鴻名、廣大配乎乾坤、光華象乎日月、長駕遠撫、橫逸乎都外、瑩鏡區域、充塞乎無垠、上冠九垓、旁濟八表、制禮以告成功、作樂以彰治定、福應允臻、祥慶符合於往歲、矣、今汝味張、率土幽微百姓、忽爾奉惜王地、輕背使乎宣旨、味張自今以後、勿預郡司、於是縣主飯粒喜懼交懷

面以其子鳥樹、送大連爲僮豎焉、於是大河內直味張恐畏求悔、伏地汗流、啓大連曰、愚蒙百姓、罪當萬死、伏願每郡以鏁丁、春時五百丁、秋時五百丁、奉獻天皇、子孫不絕、藉此祈生、永爲鑒戒、別以狹井田六町、賂大伴大連、蓋三嶋竹村屯倉者、以河內縣部曲、爲田部之元、於是乎起、是月、廬城部連枳莒喩女幡媛、偷取物部大連尾輿瑠珞、獻春日皇后、事至發覺、枳莒喩以女幡媛、獻采女丁、（是春日部采女也）并獻安藝國過戶廬城部屯倉、以贖女罪、物部大連尾輿恐事由己、不得自安、乃獻十市部、伊勢國來狹狹、登伊、（來狹狹登伊、二邑名也、）贄土師部、筑紫國膽狹山部也、武藏國造笠原直使主、與同族小杵相爭國造、（使主小杵、皆名也、）經年難決也、小杵性阻有逆心、高無順、密就求援於上毛野君小熊、而謀殺使主、使主覺之走出、詣京言狀、朝庭臨斷、以使主爲國造、而誅小杵、國造使主悚意交懷、不能默已、謹爲國家奉置橫淳、橘花、多氷、倉樔、四處屯倉、是年也太歲甲寅、

るべし
○怪惜、怪は字書に恠に同じとあり
○水潦、潦は字書に雨水大貌又路上流水也一曰積水とありイサラミヅは少量の水の意ならむ
○易浸、コミは應神紀に澇を訓り浸は字書に漬也又潤也又沒也とあり
○收穫、原本穫を獲に作る獲穫通ず北本に據る
○服命無隱、服は復と通ず復命なり
○大伴伯父、伯父とは金村を親み寅給へるなりオキナドモは翁共の意なり
○因物爲名、御名代の民を云
○小墾田屯倉、大和國高市郡にあり
○田部、景行紀五十七年（卷上一六三頁）に見ゆ
○櫻井、河內國河內郡（今の中河內郡）櫻井鄕なり
○（注）茅渟山、茅は中本楓本に據て改む
○每郡鏁丁、原本鏁を鑼に作る集解に據て改む鏁丁は公田を作るに役せらるゝ民を云　○閏、北本潤に作る　○三嶋、攝津の郡名後島上島下の二郡に分る　○縣主飯粒、三島の縣主なり錄に三嶋宿禰神魂命十六世孫建日穗命之後也とあり　○飯粒慶悅、通釋に此の上に慶悅せし謂れの文あるべしと云り　○御野、抄に攝津國西成郡三野鄕あり是なり　○桑原、攝津國には見えず抄に大和國葛上郡桑原鄕とある是か考ふべし　○竹村、下に三嶋竹村屯倉とあると同所なり　○凡合、原本凡を元に作る集解に據て改む

○大伴大連奉勅宣曰、縣主飯粒並に味張を召し勅旨を宣示し給ひしならむ　○率土之下云々、率土は普天の誤普天は率土の誤なるべし毛詩小雅に溥天之下莫非王土率土之濱莫非王臣とあるに據れり字書に率は遵也又領也又皆也とあり溥は大也徧也又通作普とあり　○先天皇、先なば元に作るを北本中本に據て改む　○長駕遠撫、遠く行幸ありて民を愛撫し給ふを云以下旁濟八表までは都外の地に行幸あらせられ聖德の遠きに及ぶを稱へ奉れり　○無垠、垠は字書に地埒也岸也界限也とあり　○上冠九垓、垓は字書に重也とあり德は九重の天に達するを云　○旁濟八表、濟は醫本中本に據て補ふ北本滲に作るは濟の訛なるべし字書に表は外也とあり洽く八方の外まですくふを云　○允臻、原本臻を致に作る集解に據て改む　○制禮云々、制禮作樂は此に直據用なきが如し、此地にて樂を奏せしめ給ひしことありそれを指して云るか　○郡司、こゝに郡司とあるは孝德紀以後及び令制の郡司とは異なり國造のことを云ひしならむ　○於是縣主飯粒云々、今宣旨を承り味張が郡司を廢せられしを懼れ己が良田を獻りしことの勅旨に叶へるを喜びて、倘將來を思て其子を大連に送りしなるべし　○送大連爲僮豎、原本送を獻に作る北本に據て改む又請本豎を竪に作るは訛れり僮豎は字書に未冠也又婢妾之總稱豎は童僕之未冠者とありシトヘは倭訓栞に後執部ならむと云　○汗流、原本汗を汙に作る楓本に據て改む　○藉此、原本藉を籍に作る北本に據て改む　○狹井、大和國城上郡にあれどこゝは河內國なるべきか　○三島竹村屯倉云々、古より三島の竹村屯倉の御田を佃るには河內各縣の百姓を以て田部として使役するは味張が鑵丁を獻りしより起れりとなり河內縣とは味張が領せし郡を云部曲は我領內の民を云故にウチツヤツコと訓り　○廬城部連、雄略紀三年に見ゆ　○物部大連尾輿、天孫本紀に荒山大連子也とあり　○瓔珞、頸玉なり祖庭事苑に在頭曰瓔在身曰珞とあり　○采女丁、孝德紀二年に采女者從丁一人從女二人とあり采女の召使ふ女なり　○過戶、通釋にコシベとあれど過戶卽餘戶にてアマルベと訓べしと云　○十市部、大和國十市郡にあり大連の領せる部曲　○來狹狹、所在未詳登伊も同じく詳ならず雄略紀十七年に攝津國來狹々村とあれば或は伊勢は誤かとも云　○贄土師部、雄略紀十七年に見ゆ　○膳狹山部、抄に豐前國京都郡諫山鄕ありこゝの部民なり　○笠原直、抄に武藏國埼玉郡笠原鄕あり是なり　○性阻、訓義詳かならず　○橫淳、抄に武藏國橫見郡あり是なるべし　○橘花、同國橘樹郡あり　○多氷、通證に疑久良郡東鑑作海月郡と云されば氷は末の誤ならむか　○倉樔、通證に疑久良岐とあれば樔は樹の誤ならむか

【二年】閒者、類史に閒を向に作る　○飢饉、字鏡に饑を伊比爾宇々と訓り　○大酺、清寧紀四年に見ゆ史記始皇本紀に天下大酺注に酺衆樂大飲酒也とあり　○勾雪人部勾靱部、共に天皇の御名代　○阜波、筑前國阜波郡穗波鄕なり　○蹟、同國蹟麻郡是なり　○膳碕、通證に膳當作湊と云豐前國企救郡湊碕あり又社埼に作る今の

（乙卯）二年春正月戊申朔壬子、詔曰、閒者連年登穀、接境無虞、元元蒼生樂於稼穡、業業黔首免於飢饉、仁風暢乎宇宙、美聲塞乎乾坤、內外淸通、國家殷富、朕甚欣焉、可大酺五日、爲天下之歡、夏四月丁丑朔、置勾舍人部、勾靱部、五月丙午朔甲寅、置筑紫穗波屯倉、鍬屯倉、豐國膳碕屯倉、桑原屯倉、肝等屯倉、讀取音大拔屯倉、我鹿屯倉、我鹿此云阿柯火國春日部屯倉、播磨國越部屯倉、牛鹿屯倉、備後國後城屯倉、多禰屯倉、來履屯倉、葉

門司關なるべし
○桑原、豐前國築城郡（今の築上郡）桑田郷あり此地か
○胆等、豐前國京都郡菊田郷あり式に菊田驛あり胆等と音相近し此地ならむ
○大拔、豐前國企教郡貫庄あり今芝津村大字貫あり此地か
○我鹿、豐前國田川郡赤村あり彦山の麓なり此地か
○春日部、肥後國託麻郡（今の飽託郡）三宅郷あり此地ならむ
○越部、播磨國揖保郡越部郷是なり同國風土記に越部里舊名皇子代里所以號皇子代者勾宮天皇之世寵人但馬君小津蒙寵賜姓爲皇子代君而造三宅於此村令仕奉之故曰子代村後改號越部里　○牛鹿、播磨國飾磨郡ならむ記に針間國牛鹿臣見ゆ　○備後國後城、備中國後月郡あり是なり老牛餘喘に後城屯倉は高屋村後月谷にありと云北本備の上吉の字あり　○多禰、後月郡種村にあり　○葉稚、同國小田郡大江村にあり今波良加と云と　○河音、後月郡江原村にあり今加夫登と云　○婀娜國膽殖、備後國安那郡なり抄に夜須奈と訓るは後に音を訓に換たるなり此郡は後月郡小田郡に接す膽殖は小田郡大江村に伊夜と云地ある是なるべしと（以上老牛餘喘）　○膽年部、北本年を半に作る備後國安那郡（今の深安郡）大宅郷あり福山東北の地是ならむ　○春日部、阿波志に那賀郡宮倉村（今羽浦村大字宮倉）なりと云　○經湍、名草郡布施屋（今の海草郡和佐村の大字）是なり紀之川に近し　○（注）經湍云々、原本湍の字なく世を矣に作る湍は北本中本に據て補ひ世は楓本中本に據て改む　○河邊、名草郡川邊村（今海草郡川永村の大字となる）紀之川を隔てゝ布施屋と相對す　○蘇斯岐、丹波國桑田郡三宅村（今南桑田郡龜岡村の大字となる）是か　○葦浦、栗太郡葦浦郷葦浦村（今常盤村大字となる）あり是か　○間敷、中島郡三宅郷あり今も三宅村あり又海部郡にも三宅郷あり此の内ならむ　○入鹿、未詳集解に丹後郡蟲鹿莊入鹿池あり古の入鹿邑卽此とあり　○緣野、上野國緣野郡是なり　○稚贄、富士郡生贄川また牲淵あり此地かといへど詳ならず集解に筑紫至陵河國十三國列國無次疑有錯亂と云　○國々犬養部、集解に蓋爲屯倉畜犬以防偷盜と云　○櫻井田部連、應神紀二年に見ゆ　○縣犬養連、錄左京神別に縣犬養宿禰神魂命八世孫阿居太都命之後也とあり天武天皇十三年に宿禰を賜ふ　○難波吉士、雄略紀八年に見ゆ　○屯倉之稅、稅はチカラともオホチカラとも云令義解に新嶮曰租經貯曰稅とあり田部連は田部に關する事を犬養は犬養に關する事を難波吉士は簿記計算する事を各自に分擔せしめられしなり此は屯倉の數の俄

稚屯倉、河音屯倉、婀娜國膽殖屯倉、膽年部屯倉、阿波國春日部屯倉、紀國經湍屯倉、經湍、此云府世、河邊屯倉、丹波國蘇斯岐屯倉、皆取音近江國葦浦屯倉、尾張國間敷屯倉、入鹿屯倉、上毛野國緣野屯倉、駿河國稚贄屯倉、秋八月乙亥朔、詔置國國犬養部、九月甲辰朔丙午、詔櫻井田部連、縣犬養連、難波吉士等、主掌屯倉之稅、　丙辰、別勅大連云、宜放牛於難波大隅嶋與媛嶋、松原、冀垂名於後世、冬十二月癸酉朔己丑、天皇崩于勾金橋宮、時年七十、是月、葬天皇于河內舊市高屋丘陵、以皇后春日山田皇女、及天皇妹神前皇女合葬于是陵、

に増加せしよりかく定められしこて此には説とあれどそれのみにはあらざるべし難波吉士等とあれば任官せられし人も尙此以外にありしならむ ○勅大連云、集 に云を日に改む ○難波大隅島、應神紀二十二年に見ゆ ○媛島松原、姫島攝津國西成郡にあり續紀七に靈龜二年令攝津國罷大隅媛島二牧とあり ○垂名於後世、世に北本に據て補ふ ○天皇崩、紀には乙卯年三月十二(イ三)日崩とあり ○時年七十、紀には御年を記さず ○舊市高屋丘陵、諸陵式に河内國古市郡とあり陵墓要覽に南河内郡古市村大字古市とあり河内志には高屋村とす

【卽位前紀】武小廣國押盾天皇、御 は檜隈高田皇子と申し奉る ○使卽天皇之位、大日本史に時の六十九とあり正統記には明年の卽位とす ○不以才地矜人爲王、オホキミノオモヘリは大君振りし給はずとなり按るに王は恐らくは士の誤にて爲士の二字下句に屬し爲士君子所服と句讀すべし

【元年】檜隈廬入野、大和國高市郡檜前郷是なり今も坂合村の大字に檜前あり此天皇を檜隈高田皇子と申し奉れば元より此地に坐しゝなるべし ○物部麁鹿火大連爲大連、大日本史に此下に物部尾輿亦爲大連 郡 故說見安閑紀とあり ○蘇我稻目宿禰、錄有京皇別田中朝臣の條に武內宿禰五世孫稻目宿禰之後

武小廣國押盾天皇　宣化天皇

武小廣國押盾天皇、男大迹天皇第二子也、勾大兄廣國押武金日天皇之同母弟也、二年十二月、勾大兄廣國押武金日天皇崩無嗣、群臣奏上劍鏡於武小廣國押盾尊、使卽天皇之位焉、是天皇爲人器宇清通、神襟朗邁、不以才地矜人爲王、君子所服、

(丙辰)元年春正月、遷都于檜隈廬入野、因爲宮號也、二月壬申朔、以大伴金村大連爲大連、物部麁鹿火大連爲大連、並如故、又以蘇我稻目宿禰爲大臣、阿倍大麻呂臣爲大夫、三月壬寅朔、有司請立皇后、己酉、詔曰、立前正妃億計天皇女橘仲皇女爲皇后、是生一男三女、長曰石姫皇女、次曰小石姫皇女、次曰倉稚綾姫皇女、次曰上殖葉皇子、亦名椀子、是丹比公、偉那公、凡二姓之先也、前庶妃大河內稚子媛生一男、是曰火焰皇

とあり公卿補任に父は高麗と見ゆ　○阿倍大麻呂臣、大は原本に火とあり北本中本に據て改む阿倍臣は大彦命の後なり　○大夫、訓の如く大臣大連に亞ぐの執政官なるべし天智紀に左右大臣の外に御史大夫を置かれたりそれと似たる職にて後の納言の如きものならむ　○立前正妃云々、前正妃と書する例始めて見ゆ伴信友は仲皇女は此時既に薨去ありて世に坐さぬを今新に皇后に立つべき妃もまさゞれば皇后の號を前妃に贈り給へるものか次文に前庶姬とあるも卽位前に亡せ給ひしなるべしと云　○石姬、欽明天皇皇后と爲給ふ　○小石姬皇女、欽明天皇妃と爲給ふ　○倉稚綾姬皇女、記に倉之若江王と記し男王とす　○上殖葉皇子、記には上の字なく御母も異れり　○丹比公、天武天皇十三年十月姓眞人を賜ふ故に姓氏錄には多治比眞人とあり三代實錄十二貞觀八年二月廿一日條に左中辨丹墀眞人貞峯の上表に宣化天皇皇子加美惠波皇子生十市王十市王生多治比古王此王生產之夕忽多治比花乘浮湯沐釜以斯冥歷名多治比王成長之後固執謙退奏請求姓因賜姓多治比公とあり　○僧那公、錄右京皇別に爲名眞人宣化天皇皇子火焰王之後也とあり同攝津皇別亦同じ記紀の傳と違へり　○火焰皇子、攝津志に河邊郡東桑津村に火焰皇子墓ありと云　○椎田君、記に志比陀君とあり此姓他書に見えず椎田は攝津國河邊郡の地名なり　○黃金萬貫云々、漢書景帝紀に農天下之本也黃金珠玉飢不可食寒不可衣云々とあり　○冷、字書に寒也とありコイはコゞユに同じ　○筑紫國、通證に此專指太宰府といへど然らず太宰府の事は次にいふべし　○關門、抄居處部に蔡邕月令章句云關(日本紀私記云關門世岐度)在境所以察出禦入也とあり　○候海水、次の望天雲と對句にて天候を窺ひ風波を察するを云　○收藏穀稼云々、後の所謂義倉の設備を爲し凶年に備ふるを云　○阿蘇仍君、河內國の人ならむと思へど詳ならず　○茨田郡屯倉、仁

子、是椎田君之先也、夏五月辛丑朔、詔曰、食者天下之本也、黃金萬貫不可療飢、白玉千箱何能救冷、夫筑紫國者、遐邇之所朝屆、去來之所關門、是以海表之國候海水以來賓、望天雲而奉貢、自胎中之帝洎于朕身、收藏穀稼、蓄積儲粮、遙設凶年、厚饗良客、安國之方、更無過此、故朕遣阿蘇仍君未詳也加運河內國茨田郡屯倉之穀、蘇我大臣稻目宿禰宜遣尾張連運尾張國屯倉之穀、物部大連麁鹿火、宜遣新家連運新家屯倉之穀、阿倍臣、宜遣伊賀臣運伊賀國屯倉之穀、脩造官家那津之口、又其筑紫肥豐三國屯倉、散在懸隔、運輸遙阻、儻如須要、難以備卒、亦宜課諸郡分移、聚建那津之口、以備非常、永爲民命、早下郡縣令知朕心、秋七月、物部麁鹿火大連薨、是年也太歲丙辰、

德紀十三年に見ゆ　○尾張國屯倉、前紀二年に見ゆ　○新家連、錄河内未定に新家首汙麻惠足尼命（百樹云汙麻斯麻尼足尼命之誤）之後と見ゆ　○新家屯倉、鈴木重胤氏説に尾張と伊賀との間に載せられたれば伊勢國なり同國壹志郡に新家村あり式に同郡物部神社あり又度會郡に新家屯倉を移すと孝德紀に見えたれば伊勢國なりと云　○阿倍臣、阿倍大麻呂　○伊賀臣、阿倍氏と同祖にて孝元紀七年に見ゆ　○官家、原本官を宮に作る應本楓本に據て改む　○邨津之口、筑前國那珂郡にあり仲哀紀八年に儺縣、齊明紀七年に娜大津を改て長津と云と見え今の博多の古名　○筑紫肥豐三國屯倉、前紀二年に見ゆ當時は分國以前なりし故に筑紫肥豐國と云　○懸隔、原本懸を縣に作る北本楓本中本に據て改む　○難以備卒、卒は急卒なり急卒に準備し難しとなり原本卒を率に作る北本に據て改む　○永爲民命、永く人民の生命を繫ぐべしとなり　○物部麁鹿火大連薨、武烈、繼體、安閑、宣化四帝に歷仕し大連たること三十餘年なりき

【二年】狹手彦、三代實錄五眞觀三年八月十九日伴大田宿禰常雄の欵に謹稽家牒伴大田宿禰同祖金村大連公第三男狹手彦之後也とあり金村の三男なり

【四年】時年七十三、記に御年を記さず　○身狹桃花鳥坂上陵、諸陵式に大和國高市郡陵墓要覽に同郡白橿村大字鳥屋とあり　○孺子、詳ならず此は皇后の御子にて既に薨去ありしを遺詔などありて合葬し給へるなるべし

二年冬十月壬辰朔、天皇以新羅寇於任那、詔大伴金村大連、遣其子磐與狹手彦以助任那、是時、磐留筑紫、執其國政、以備三韓、狹手彦往鎭任那、加救百濟、

四年春二月乙酉朔甲午、天皇崩于檜隈廬入野宮、時年七十三、冬十一月庚戌朔丙寅、葬天皇于大倭國身狹桃花鳥坂上陵、以皇后橘皇女及其孺子合葬于是陵、皇后崩年傳記無載、孺子者蓋未成人而薨歟、

日本書紀卷第十八

日本書紀卷第十九

天國排開廣庭天皇　欽明天皇

天國排開廣庭天皇、男大迹天皇嫡子也、母曰手白香皇后、天皇愛之、常置左右、天皇幼時夢、有人云、天皇寵愛秦大津父者、及壯大必有天下、寤驚遣使普求、得自山背國紀伊郡深草里、姓字果如所夢、於是忻喜遍身、歎未曾夢、乃告之曰、汝有何事、答云、無也、但臣向伊勢商價來還、山逢二狼相鬬汙血、乃下馬洗漱口手、祈請曰、汝是貴神、而樂麁行、儻逢獵士、見禽尤速、乃抑止相鬬、拭洗血毛、遂遣放之、俱令全命、天皇曰、必此報也、乃令近侍優寵日新、大致饒富、及至踐祚、拜大藏省、四年冬十月、武小廣國押盾天皇崩、皇子天國排開廣庭天皇令群臣曰、余幼年淺識、未閑政事、山田皇后明閑百揆、

【即位前紀】

○天國排開廣庭天皇、記には天國押波流岐廣庭命とあり之に據らば開はハルキと訓べきなり

○秦大津父、秦氏なること明なれど尸なも記さゞれば一商人にて賤しきものなりしなるべし

○寤驚、原本寤を寐に作る舊紀集解に據て改む字書に寤は寐覺也とあり寐は臥也息也とありて通ぜず

○紀伊郡、北本伊の字なし

○深草里、倭名抄に紀伊郡深草郷見ゆ即是なり（今深草村大字深草）

○忻喜、原本忻を所に作る國本中本に據て改む

○商價、原本價を商に作る商は和也本也とあれば誤なり依て今正す字書に

請就而決、山田皇后怖謝曰、妾蒙恩寵、山海詎同、萬機之難、婦女安預、今皇子者、敬老慈少、禮下賢者、日中不食以待士、加以幼而穎脫、早擅嘉聲、性是寬和、務存矜宥、請諸臣等、早令登位、光臨天下、冬十二月庚辰朔甲申、天國排開廣庭皇子卽天皇位、時年若干、尊皇后曰皇太后、大伴金村大連、物部尾輿大連爲大連、及蘇我稻目宿禰大臣、爲大臣、並如故、

行日商處曰賈とあり價は賈と通用すアキナヒは東雅に古は每歲之秋布穀之類飢に成し後に、商價の道通じたれば百貨を以て布帛に代るをアキモノスと云とあり　○狼、倭名抄に於保加美と訓り卽ち大神の義　○汙血、原本汙を汚に作る北本楓本中本に據て改む　○貴神、神代紀(三七頁)に大虵を可畏之(カシコキ)神、下文六年の下に虎を威神と云ると同じ　○見禽、字書に擒通作レ禽捉也とあり　○拜大藏省、秦氏は大藏の官に深き關係あり(雄略紀十五年參照)故に特にこの省に任ぜられむ事を希望して任官ぜしなるべし　○皇子、天皇は繼體天皇の皇子にて先帝とは御兄弟に坐す　○未閑、閑は字書に習也とあり、熟練の意　○山田皇后、仁賢天皇の皇女にて安閑天皇の皇后に坐す　○百揆、尙書舜典の注に揆度也度二百事一總二百官一とあり原本揆を揆に作る中本に據て改む　○山海詎同、原本詎を誰に作る北本中本に據て改む恩寵を蒙ること山より高く海より深くして山海も同じからずとなり　○敬老云々、以下以待士まで十五字は史記周本紀の文に據れり　○穎脫、原本穎を頴に作る中本に據て改む穎穎の俗、字書に穎錐末也言其末全體脫出非二止微見一喻能自顯其才一也とあり　○令登位、原本令の下に臨の字あり北本中本に據て削る　○時年若干、北本及原本傍書に此四字を分注とす集解に蓋後人攙入として削る

【元年】

○箭田珠勝大兄、記に八田王に作る　○笠縫皇女、記に笠縫王に作る　○投化、賦役令義解に投化猶二歸化一也とあり　○山村、大和國添上郡山村鄕あり大和志に山村一

(庚申)元年春正月庚戌朔甲子、有司請立皇后、詔曰、立正妃武小廣國押盾天皇女石姬爲皇后、是生二男一女、長曰箭田珠勝大兄皇子、仲曰譯語田渟中倉太珠敷尊、少曰笠縫皇女、(更名狹田毛皇女)二月、百濟人己知部投化、置倭國添上郡山村、今山村己知部之先也、三月、蝦夷隼人

名己知山（今屬二八島郷一）山村に百濟己知部宅趾ありと云（今帶解村）○山村己知部、錄大和諸蕃に山村忌寸己智同祖古禮公之後也續紀三十四に寶龜八年七月甲子山村許智大足等四人賜二姓山村忌寸一と見えたり

○磯城郡、城上城下の二郡となしたるは和銅の頃なるが明治廿九年合せてまた磯城郡とす

○磯城島、地理志料に據るに城上郡上市郷に屬す

○金刺宮、大和志に城上郡金刺宮在二金屋村西南初瀬川南一とあり聖德太子傳評注には玉林曰三輪山邊有二一郷一曰二磯城島一竹原中有二小社一相傳宮蹟と云

○大藏掾、原本掾を椽に作る中本に據て改む集解に按前年所任秦大津父也とあれど證とすべきものなし

○秦伴造、秦伴は秦人の部曲造は其首長なり諸處に分散する秦部をば造をして統率せしむるなり

○祝津宮、攝津志に河邊郡祝津宮在二西難波村一今有二八幡小祠古梅樹一株一とあり ○許勢臣稻持、錄右京皇別に巨勢朝臣巨勢綜柄宿禰之後也とあり天武紀十三年に朝臣の姓を賜ふ通證に疑巨勢男人大臣之子とあり ○上哆唎、以下の四縣は繼體紀六年に出づ ○怨曠、魏志蔣濟傳に怨曠積年と見ゆ字書に曠は空也廢也久遠也とあり ○大伴大連金村、大連の二字樞本中本に據て補ふ ○住吉宅、攝津志に住吉郡大伴金村第古蹟在二堺北莊高洲

並率衆歸附、秋七月丙子朔己丑、遷都倭國磯城郡磯城嶋、仍號爲磯城嶋金刺宮、八月、高麗、百濟、新羅、任那、並遣使獻、並脩貢職、召集秦人漢人等諸蕃投化者、安置國郡、編貫戶籍、秦人戶數惣七千五十三戶、以大藏掾爲秦伴造、九月乙亥朔己卯、幸難波祝津宮、大伴大連金村、許勢臣稻持、物部大連尾輿等從焉、天皇問諸臣曰、幾許軍卒伐得新羅、物部大連尾輿等奏曰、少許軍卒不可易征、曩者、男大迹天皇六年、百濟遣使表請任那上哆唎、下哆唎、娑陀、牟婁四縣、大伴大連金村輙依表請許賜所求、由是新羅怨曠積年、不可輕爾而伐、於是大伴大連金村居住吉宅、稱疾不朝、天皇遣青海夫人勾子、慰問慇懃、大連怖謝曰、臣所疾者非餘事也、今諸臣等謂臣滅任那、故恐怖不朝耳、乃以鞍馬贈使、厚相資敬、青海夫人依實顯奏、詔曰、久竭忠誠、莫恤衆口、遂不爲罪、優寵彌深、是年也太歲庚申、

濱東」とあり　○青海夫人、原本人の字なし北本中本に據て補ふ夫人は反正紀元年（卷上二四二頁）に出づ　○鞍馬、鞍を置さて飾れる馬推古紀に鞍騎莊馬とも見ゆ　○童歌、通證に以物表敬意也とあり此句文選補遺碑文に出づ

【二年】稚綾姫、宣化天皇々女、宣化紀元年に倉稚綾姫とあり　○日影皇女、小石姫皇女の一名か編年記には稚綾姫の次に山下日影皇女を載せたれど恐らくは本紀に據て補へるならむ　○（注）此日皇后弟云々、集解に私記攙入として削る檜隈高田天皇は宣化天皇なり　○磐隈皇女、諸陵式に龍田苑部墓石前皇女在大和國平群郡と見ゆ　○皇子茨城、下に見ゆ　○解、解職なり齋宮を下り給ふを云　○臘嘴鳥皇子、原本嘴の字なし北本に據て補ふ中本雌に作る記に足取王とあり倭名抄には鶺子鳥をアトリと訓り　○椀子皇子、繼體天皇々子に同名あり記に麻呂古王に作る　○大宅皇女、記に大宅王　○石上部皇子、記に伊美賀古王　○山背皇子、記に山代王　○大伴皇女、記に大伴王

（辛酉）二年春三月、納五妃、元妃、皇后弟曰稚綾姫皇女、是生石上皇子、次有皇后弟、曰日影皇女、（此曰皇后弟、明是檜隈高田天皇女、而列后妃之名、不見母妃姓與皇女名字、不知出何書、後勘者知之）是生倉皇子、次蘇我大臣稲目宿禰女、曰堅鹽媛、（堅鹽、此云岐拖志）生七男六女、其一曰大兄皇子、是爲橘豐日尊、其二曰磐隈皇女、（更名夢皇女）初侍祀於伊勢大神、後坐于（用明）女王、皇子茨城解、其三曰臘嘴鳥皇子、其四曰豐御食炊屋姫尊、其五曰椀子皇子、其六曰大宅皇女、其七曰石上部皇子、其八曰山背皇子、其九曰大伴皇女、其十曰櫻井皇子、其十一曰肩野皇女、其十二曰橘本稚皇子、其十三曰舍人皇女、次堅鹽媛同母弟曰小姉君、生四男一女、其一曰茨城皇子、其二曰葛城皇子、其三曰渥部穴穗部皇女、其四曰渥部穴穗部皇子、（更名天香子皇子、一書云、更名住迹皇子）其五曰泊瀨部皇子、（樂瞻）

一書云、其一曰茨城皇子、其二曰渥部穴穗部皇女、其三曰渥部穴穗部皇子、更名住迹皇子、其四曰葛城皇子、其五曰泊瀨部皇子、一書云、其一曰茨城皇子、其

諸陵式に押坂内墓大伴皇女在二大和國城上郡押坂陵域内一とあり
○櫻井皇子、記に櫻井之玄王
○肩野皇女、記に麻呰王
○橘本稚皇子、記に橘本之若子王
○舍人皇女、記に渥杼王
○小姉君、記に岐多志比賣命之姨小兄比賣
○茨城皇子、記に馬木王
○葛城皇子、記に葛木王
○泥部穴穂部皇女、用明天皇の皇后用明紀元年に穴穂部間人皇女とあり
○泥部穴穂部皇子、記に間人穴太部王
○(注)更名云々、集解に私記攙入として削る
○泊瀬部皇子、記に長谷部若雀命
(注)天香子、集解此下に皇子の二字を補ふ
○帝王本紀、推古紀に所謂天皇記にして厩戸太子の撰
○古字、通證に謂二古名字一とあり
○撰集之人屢經遷易、日本紀撰錄に至るまで幾度か遷し易へたりとなり
○兄弟參差、參差は公式令義解に猶二不齊一也とあ

二曰二住迹皇子一、其三曰二泥部穴穂部皇女一、其四曰二泥部穴穂部皇子一、更名天香子、其五曰二泊瀬部皇子一、帝王本紀多有二古字一、撰集之人、屢經二遷易一、後人習讀、以レ意刊改、傳寫既多、遂致二舛雜一、前後失レ次、兄弟參差、今則考二覈古今一、歸二其眞正一、一往難レ識者、且依レ一撰而注詳其異一、他皆效レ此、

次春日日抓臣女曰二糠子一、生二春日山田皇女一、與二橘麻呂皇子一、夏四月、安羅次旱岐夷呑奚、大不孫、久取柔利、加羅上首位古殿奚、卒麻旱岐、散半奚、旱岐兒、多羅下旱岐夷他、斯二岐旱岐兒、子他旱岐等、與二任那日本府吉備臣一、闕名字一往赴百濟一、俱聽二詔書一、百濟聖明王謂二任那旱岐等一言、日本天皇所レ詔者、全以復二建任那一、今用何策一、起二建任那一、盡各盡レ忠、奉レ展二聖懷一、任那旱岐等對曰、前再三廻、與二新羅一議而無二答報一、所レ圖之旨、更告二新羅一、尙無レ所レ報、今宜俱遣使往奏二天皇一、夫建二任那一者、爰在二大王之意一、祇承二教旨一、誰敢問言、然任那境接二新羅一、恐致二卓淳等禍一、等謂二喙己呑加羅一、言卓淳等國有二敗亡之禍一、聖明王曰、昔我先祖速古王貴首王之世、安羅加羅卓淳旱岐等、初遣レ使相通、厚結二親好一、以爲二子弟一、冀可二恒隆一、而今被二訕二新羅一、使二天皇一忿怒一、而任那

憤恨、寡人之過也、我深懲悔、而遣下部中佐平麻鹵城方甲背味奴等、赴加羅、會于任那日本府、相盟、以後繫念、相續圖建任那、旦夕無忘、今天皇詔稱、速建任那、由是欲共爾曹謨計樹立任那國、宜善圖之、又於任那境徵召新羅、問聽與不、乃俱遣使、奏聞天皇、恭承示教、儻如使人未還之際、新羅候隙侵逼任那、我當往救、不足爲憂、然善守備、謹警無忘、別汝所喜、恐致卓淳等禍、非新羅自強、故所能爲也、其喙己呑居加羅與新羅境際、而被連年攻敗、任那無能救援、由是見亡、其南加羅、蕞爾狹小、不能卒備、不知所託、由是見亡、其卓淳上下携貳、主欲自附、內應新羅、由是見亡、因斯而觀、三國之敗、良有以也、昔新羅請援於高麗、而攻擊任那與百濟、尙不剋之、新羅安獨滅任那乎、今寡人與汝戮力并心、翳賴天皇、任那必起、因贈物各有差、忻忻而還、秋七月、百濟聞安羅日本府與新羅通計、遣前部奈率鼻利莫古、奈率宣文、中部奈率木劦味淳、紀臣奈率彌麻沙等、紀臣奈率者、蓋是紀臣娶韓婦所生、因留百濟爲奈率者也、未詳其父、他皆效此、

り御兄弟の順序の違へるを云

○考覈、原本覈を竅に作る中本に據て改む覈は類篇に考事而笮邀遮其辭得實曰覈とありアナグルは齊明紀四年に撿覈を舒明紀に探を字鏡集に撿及括を訓り（以上注）

○春日日杵臣女云々、杵は北本中本抓に作り記には爪に作る集解に按玉篇抓測孝切木刺（ハリ）名以義宜訓觸とあり仁賢紀に見ゆる日爪一本に日觸とあるに據れば之に從ふべきか仁賢紀元年（卷上三〇四頁）に和珥臣日爪女糠君娘生一女是爲春日山田皇女とあり此條と頗る相似たり

○安羅次旱岐、安羅は任那十國の一神功紀四十九年に出づ加羅多羅亦同じ次旱岐は爵名

○夷呑奚、大不孫、久取柔利、三人の名

○卒麻、散半奚、斯二岐、子他、皆任那十國中の國名なり卒麻は慶尙南道統營郡沙等面（巨濟島）散半奚は三嘉附近、斯二岐は泗川、子他は晉州なりと云

○上首位、旱岐、下旱岐、皆爵名なり
○(注)闕名字、集解に私記攙入とす
○奉展聖懷、聖懷は聖慮に同じ聖慮をのべ奉るを云通證には展をカサヒと訓り
○而無答報、通證に旬也舊讀誤とあり今之に據る
○尙無所報、所の字は北本中イ本に據て補ふ
○爰在大王之意、原本爰を奚に作る北本中イ本に據て改む
○誰敢問言、問言は言をさしはさむを云敎旨は謹で之を奉じて言を差挾むことなしとなり
○(注)已呑、原本已答に作る北本中本に據て改む
○忿怒、原本怒を恕に作る楓本中本に據て改む
○下部中佐平、原本下部を下郡に作る北本中本に據て改む下部は安閑紀元年に出づ佐平は東國通鑑に百濟古爾王二十七年置六佐平井一品とあり
○麻鹵城万甲背味奴、中本背を背に作る通證通釋に四人の名とし集解標注に麻鹵、味奴の二人とす
○汝所導、原本導を導に

使于安羅、召到新羅任那執事、謨建任那、別以安羅日本府河內直通計新羅、深責罵之、百濟本記云、加不至費直阿賢移那斯、佐魯麻都等、未詳也、乃謂任那曰、昔我先祖速古王、貴首王、與故旱岐等、始約和親、式爲兄弟、於是我以汝爲子弟、汝以我爲父兄、共事天皇、俱距强敵、安國全家、至于今日、言念、先祖與舊旱岐、和親之詞、有如咬日、自茲以降、勤修隣好、遂敦與國、恩踰骨肉、善始有終、寡人之所恒願、未審何緣輕用浮辭、數歲之間慨然失志、古人云、追悔無及、此之謂也、上達雲際、下及泉中、誓神乎今、改咎乎昔、一無隱匿、發露所爲、精誠通靈、深自克責、亦所宜取、蓋聞、爲人後者、貴能負荷先軌、克昌堂構、以成勳業也、故今追崇先世和親之好、敬順天皇詔勅之詞、拔取新羅所折之國、南加羅、喙己呑等、還屬本貫、遷實任那、永作父兄、恒朝日本、此寡人之所食、不甘味、寢不安席、悔往戒今之所勞、想也、夫新羅甘言希誑天下之所知也、汝等安信既墮人欺、方今任那境接新羅、宜常設備、豈能施柝、爰恐陷羅誣欺網穽、喪國

作る北本に據て改む
○其喙己呑、原本呑を苔に作る北本中本に據て改む
○蕞爾、字書に小貌とあり
○携貳、周語韋昭注に携離也貳二心也とあり
○主欲自附、原本主を至に作る北本中本に據て改む
○前部奈率、中部奈率、前部中部は五部の一、奈率は六品の官
○(注)紀臣奈率云々、集解に私記攙入とすれど恐らくは本注ならむ次の百濟本記云々の注亦同じ原本効此の下也の字あり北本に據て削る
○深責罵之、原本罵を駡に作る北本楓本中本に據て改む
○(注)費直、二字にてアタヘと訓む其例は稀なれど費の一字を訓めるは稱德紀(神護景雲元年)光仁紀(寶龜四年)等に見ゆ
○言念、字書に言は我也とあり
○晈日、晈は字書に與皎同とあり皎は白也明也と注す
○誓神乎今改咎乎昔、今

亡家爲人繫虜、寡人念茲、勞想而不能自安矣、竊聞、任那與新羅連策席際、現蜂蛇惟、亦衆所知、且夫妖祥所以戒行、灾異所以悟人、當是明天告戒、先靈之徵表者也、禍至追悔、滅後思興、孰云及矣、今汝遊余、聽天皇勅可立任那、何患不成、若欲長存本土永御舊民、其謨在茲、可不愼也、聖明王更謂任那日本府曰、天皇詔稱、任那若滅汝則無資、任那若興汝則有援、今宜興建任那、使如舊日、以爲汝助、撫養黎民、謹承詔勅、悚懼塡胷、誓効丹誠、冀隆任那、永事天皇、猶如往日、先慮未然、然後康樂、今日本府復能依詔救助任那、是爲天皇所必褒讚、汝身所當賞祿、又日本卿等、久住任那之國、近接新羅之境、新羅情狀亦是所知、毒害任那、謨防日本、其來尙矣、匪唯今年、而不敢動者、近羞百濟、遠恐天皇、誘事朝廷、僞和任那、如斯感激任那日本府者、以未禽任那之間、僞示伏從之狀、顧今候其間隙、詰其不備、一擧兵而取之、天皇以詔勅勸立南加羅喙己呑、非但數十年、而新羅一不聽命

亦卿所知、且夫信敬天皇、爲立任那、豈若是乎、恐卿等輙信甘言、輕被謾語、滅任那國、奉辱天皇、卿其戒之、勿爲他欺、秋七月、百濟遣紀臣奈率彌麻沙、中部奈率己連、來奏下韓任那之政、并上表之、

神に晉て昔の咎を悔改めむとなり　○爲人後者云々、以下成勳業也まで十九字は吳志張昭傳に據れり　○堂構、尚書大誥に若考作室既底、法厥子乃弗肯堂、矧肯構、孔傳に以作室喩治政也父已致法子乃不肯爲堂基況肯構立屋乎不爲其易則難者可知とあり　○永作父兄、永は原本求に作る北本中本に據て改む　○既墮人權、權は權謀なり　○施柝、原本柝を析に作る楓本に據て改む字書に柝は戒夜者所擊とあり水訂本施を弛に改作る　○席際現蜂蛇怪、蜂蛇は室內にあるべきものにあらず然るに蜂蛇の怪席際に現れたりとなり　○明天告戒、明天の下疑らくは之の字を脫す　○丹誠、文選勸進表の注に丹誠赤心也　○詁其不備、原本詁を諾に作る楓本中本に據て改む詁は恐らくは估の訛、字書に估は覘と同とあり　○以詔勅、以は北本楓本中本に據て補ふ　○秋七月、集解に秋の上に三年の二字を補ひ原直書秋七月而係二年二年既上書秋七月今照前後二年以接四年脫三年明矣と云下文紀臣奈率彌麻沙の罷歸りしは四年四月なるを思ふに集解の說是なるべし　○下韓、下哆唎に同じ馬山府附近なるべきか

【四年】

○護德、固德に同じきか固德は九品の官（附錄參照）　○物部施德麻帑牟、施德は八品の官（同上）麻帑牟は名なり　○扶南、晉書南蠻扶南國傳に扶南西去林邑三千餘里在海大灣中と見ゆ今の暹羅の地なりと云　○奴二口、奴の字は北本中本及紀略に據て補ふ　○津守連、名闕く、神功紀攝政前紀（卷上一八一頁）に見ゆ　○郡令、下文に郡領とあ

四年夏四月、百濟紀臣奈率彌麻沙等罷之、秋九月、百濟聖明王遣前部奈率眞牟貴文、護德己州己婁與物部施德麻帑牟等、來獻扶南財物與奴二口、冬十一月丁亥朔甲午、遣津守連詔百濟曰、在任那之下韓百濟郡令城主、宜附日本府、并持詔書、宣曰、爾屢抗表、稱當建任那十餘年矣、表奏如此、尚未成之、且夫任那者爲爾國之棟梁、如折棟梁、詎成屋宇、朕念在茲、爾須早建、汝若早建任那、河內直等見上文、自當止退、豈足云乎、是日、聖明王聞宣勅已、歷問三佐平內頭及諸臣曰、詔勅

り郡司なり
○抗表、原本抗を搆に作る北本中本に據て改む抗は字書に擧也とあり
○詎成、原本詎を誰に作る北本中本に據て改む
○早建、原本早一字衍れり北本楓本中本に據て除く
○内頭、東國通鑑（古爾王二十七年）に百濟置二内頭佐平一掌二庫藏事一とあり
○上佐平、東國通鑑に百濟腆支王四年に始て置くとあり
○德率、德率は四品の官（附錄參照）
○移那斯麻都、蓋二人なり上文に引く百濟本記に阿賢移那斯、佐魯麻都とあり
○高分、北イ本に分を文に作る
○正旦、正月元旦なり
【五年】祭神時到、祭神の時とは正月を指せるか支那にては四時孟月に祭祀を行ふ三韓も亦然るか

如是、當復何如、三佐平等答曰、在下韓之我郡令城主　不可出之、建國之事、宜早聽聖勅、十二月、百濟聖明王復以前詔、普示群臣曰、天皇詔勅如是、當復何如、上佐平沙宅己婁、中佐平木劦麻那、下佐平木尹貴、德率鼻利莫古、德率東城道天、德率木劦昧淳、德率國雖多、奈率燕比善那等同議曰、臣等稟性愚闇、都無智略、詔建任那、早須奉勅、今宜召任那執事國國旱岐等、俱謀同計、抗表述志、又河内直、移那斯、麻都等猶住安羅、任那恐難建之、故亦并表乞移本處也、聖明王曰、群臣所議甚稱寡人之心、是月、乃遣施德高分、召任那執事與日本府執事、俱答言、過正旦而往聽焉、

（甲子）五年春正月、百濟國遣使召任那執事與日本府執事、俱答言、祭神時到、祭了而往、是月、百濟復遣使召任那執事與日本府執事、日本府任那俱不遣執事而遣微者、由是百濟不得俱謀建任那國、二月、百濟遣施德馬武、施德高分屋、施德斯那奴次酒等、使于任那、謂日本府與任那旱岐

○用歌多、北本中本及釋紀歌を奇に作る

○(注)百濟本記、原本記を紀に作る北本に據て改む

○河內直、集解此下に曰の字を補ふ

○爲哥可君、注に爲哥岐彌、下文に印哥臣とあり可の字衍ならむ原本哥を歌に作る楓本中本に據りて改む下同じ

○(注)有非岐、北本岐を跛に作る

○聽汝之由、集解に此四字衍として削る

○汝等、楓本等の字無し

○連延、原本延を近に作る北本楓本に據て改む

等曰、我遣紀臣奈率彌麻沙、奈率己連、物部連奈率用歌多、朝謁天皇、彌麻沙等還白日本、以詔書宣曰、汝等宜共在彼日本府、早建良圖、副朕所望、爾其戒之、勿被他誑、又津守連從日本來、百濟本記云、津守連己麻奴跪、而語訛不正、未詳、宣詔勅而問任那之政、故將欲共日本府任那執事、議定任那之政、奉奏天皇、遣召三廻、尙不來到、由是不得共論圖計任那之政、奉奏天皇矣、今欲請留津守連、別以疾使具申情狀、遣奏天皇、當以三月十日發遣使於日本、此使便到、天皇必須問汝、汝日本府卿、任那旱岐等、各宜發使共我使人往聽、天皇所宣之詔、別謂河內直、百濟本記云、河內直移那斯、自昔迄今、唯聞汝惡、汝先祖等、百濟本記云、汝先那干陀甲背、加臘直岐甲背、亦云、那哥陀甲背、鷹哥岐彌、語訛未詳、俱懷干僞、誘說、爲哥可君、百濟本記云、爲哥岐彌、名有非岐、專信其言、不憂國難、乖背吾心、縱肆暴虐、由是見逐、職汝之由、汝等來住任那、恒行不善、任那日損、職汝之由、汝是雖微、譬猶小火燒焚山野、連延村邑、由汝行惡、當敗任那、遂使海西諸國官家不得長奉、天皇之闕、今遣奏天皇、乞移汝等還、其本處、汝

亦往聞、マキデウケ玉ハレト云　又謂日本府卿、任那旱岐等曰、夫建任那之國、不假天皇之威、ミイキホヒテカ　誰能建也、故我思欲就天皇、請將士而助任那之國、將士之粮、我當須運、將士之數、未限若干、運粮之處、亦難自決、願居一處、俱論可不、擇從其善、將奏天皇、故頻遣召、汝猶不來、不得議也、日本府答曰、任那執事不赴召者、是由吾不遣、不得往之、吾遣奏天皇、還使宣曰、朕當以印哥臣語訛未詳遣於新羅、以津守連遣於百濟、汝待聞勅際、莫自勞往新羅百濟也、宣勅如是、會聞印哥臣使於新羅、乃追遣問天皇所宣詔曰、日本臣與任那執事、應就新羅聽天皇勅、而不宣就百濟聽命也、後津守連遂來、過此謂之曰、今余被遣於百濟者、將出在下韓之百濟郡令城主、唯聞此說、不聞任那與日本府、會於百濟聽天皇勅、故不往焉、非任那意、於是任那旱岐等曰、由使來召、便欲往參、日本府卿不肯發遣、故不往焉、大王爲建任那、觸情曉示、覩茲忻喜、難可具申、三月、百濟遣奈率阿毛得文、許勢奈率哥麻、物部奈率哥非等、上表曰、奈

○印哥臣、北本哥を奇に作る下同じ

○阿毛得文、原本毛を亡に作る北本楓本に據て改む

○(注)烏胡跛臣、原本烏を焉に作る中本及水本に據て改む
○祭時與至、原本祭を奈に作る中本に據て改む

○的臣吉備臣、安羅及任那の日本府の卿なるべし
○指攜、指揮に同じ
○遣疾使、疾の字は北本中本に據て補ふ

率彌麻沙、奈率己連等、至臣蕃、奉詔書曰、爾等宜共在彼日本府、同謀善計、早建任那、爾其戒之、勿被他誑、又津守連等至臣蕃、奉勅書問建任那、恭承來勅、不敢停時、爲欲共謀、乃遣使召日本府百濟本記云、遣召烏胡跛臣、蓋是的臣也、與任那、俱對言、新年既至、願過而往、久而不就、復遣使召、俱對言、祭時既至、願過而往、久而不就、復遣使召、而由遣微者、不得同計、夫任那之不赴召者、非其意焉、是阿賢移那斯、佐魯麻都二人名也、カタマシク已見上文、女女ツラヘルガ、干倭之所作也、夫任那者以安羅爲兄、唯從其意、安羅人者以日本府爲天、唯從其意、百濟本記云、以安羅爲父、以日本府爲本也、今的臣、吉備臣、河內直等、咸從移那斯、麻都指攜而已、移那斯、麻都雖是小家微者、專擅日本府之政、又制任那、障而勿遣、由是不得同計奏答　天皇、故留己麻奴跪、蓋是津守連也、別遣疾使迅如飛鳥、奉奏天皇、假使二人、二人者移那斯與麻都也、在於安羅、多行干倭、任那難建、海西諸國、必不獲事、　伏請移此二人、還其本處、勅喻日本府與任那、而圖建任那、故臣遣奈率彌麻沙、奈率己連等、副己麻奴脆、上表以聞、於是詔曰、

的臣等（等者、謂吉備弟君河内直等也、）往來新羅、非朕心也、曩者印支彌（未詳）與阿鹵旱岐在時、爲新羅所逼、而不得耕種、百濟路迥、不能救急、由的臣等往來新羅、方得耕種、朕所曾聞、若已建任那、移那斯、麻都、自然却退、豈足云乎、伏承此詔、喜懼兼懷、而新羅誑朝、知匪天勅、新羅春取喙淳、仍擯出我久禮山戍、而遂有之、近安羅處安羅耕種、近久禮山處新羅耕種、各自耕之不相侵奪、而移那斯、麻都、過耕他界、六月逃去、於印支彌後來許勢臣時、（百濟本記云我留印支彌之後、至佐魯臣時、皆未詳、）新羅無復侵逼他境、安羅不言爲新羅逼不得耕種、臣嘗聞、新羅每春秋多聚兵甲、欲襲安羅與荷山、或聞、當襲加羅、頃得書信、便遣將上擁守任那、無懈怠也、頻發銳兵應時往救、是以任那隨序耕種、新羅不敢侵逼、而奏百濟路迥不能救急、由的臣等往來新羅方得耕種、是上欺天朝、轉成奸佞也、曉然若是、尙欺天朝、自餘虛妄、必多有之、的臣等猶住安羅、任那之國恐難建立、宜早退却、臣深懼之、佐魯麻都雖是韓腹、位居大連、廟日本執事之間、入榮班

○（注）弟君、原本君の下臣の字あり北本に據て削る集解に此の分注十二字を私記攙入とす
○印支彌、下文十一月の條に印岐彌謂在任那日本臣名也とあり
○不能救急、急を楓本にマタイコト中本にマタキコと訓りマタキは未時にて景行紀四十年に像をマタキと訓ると同じく未然に救ふこと能はざる意か
○喙淳、集解に按喙蓋卓謂卓淳、卓淳之滅已見于二年紀、蓋至此取以爲新羅之地、照五年十一月紀爲卓淳明矣と云
○久禮山戍、戍は原本戎に作る北本に據て改む
○（注）旣酒臣、許勢臣なり
○荷山、慶尙南道陶城郡閑山島か東國通鑑百濟膳支王三年の條に遣女于荷山島とあり
○頃得書信、原本頃を項に作る中本に據て改む
○懈怠、原本怠を息に作る北本に據て改む
○曉然、アラハニと訓るが如き意、字書に曉は明也とあり
○位居大連、通證に謂

貴盛之例、而今反著新羅奈麻禮冠、卽身心歸附、於他易照、熟觀所作、都無怖畏、故前奏惡行、具錄聞訖、今猶著他服、日赴新羅域、公私往還、都無所憚、夫喙國之滅、匪由他也、喙國之函跛旱岐貳心加羅、而內應新羅、加羅自外合戰、由是滅焉、若使函跛旱岐不爲內應、喙國雖小、未必亡也、至於卓淳、亦復然之、假使卓淳國主不爲內應新羅、招寇豈至滅乎、歷觀諸國敗亡之禍、皆由內應貳心人者、今麻都等腹心新羅、遂著其服、往還旦夕、陰搆奸心、乃恐任那由茲永滅、任那若滅、臣國孤危、思欲朝之、豈復得耶、伏願天皇玄鑒遠察、速移本處、以安任那、冬十月、百濟使人奈率得文、奈率哥麻等罷歸、百濟本記云、冬十月、奈率得文、奈率哥麻等還自日本、日、所奏河內直移那斯、麻都等事、無報勅也、十一月、百濟遣使召日本府臣、任那執事曰、遣朝天皇奈率得文、許勢奈率哥麻、物部奈率哥非等、還自日本、今日本府臣及任那國執事、宜來聽勅同議、任那、日本吉備臣、安羅下旱岐大不孫、久取柔利、加羅上首位古殿奚、卒麻君、斯二岐君、散半奚君兒、多羅二首位訖乾

執政事也とあり
○廟、字書に間也雜也とあり
○貴盛之例、原本之一字脫れり北本楓本に據て削る例は例と通用す
○奈麻禮冠、奈麻は新羅の官十七等の第十一（附錄參照）禮冠は禮式に用ふる冠なるべし
○於他易照、その心骨の趣く所自ら彼が所行に照して見易しとなり
○新羅域、北本楓本中本域を城に作る
○喙國之滅、繼體紀二十一年（二〇八具）に見ゆ
○加羅、原本羅の下國の字あり北本に據て削る
○難小、原本小を少に作る北本に據て改む
○安羅下旱岐、原本安を新に作る北本楓本中本に據て改む二年紀に下を次に作る
○二首位、通證に二恐上

字之謬とあり
○久嵯、慶尙南道固城地方なりと云

○印岐彌、原本彌を禰に作る北本に據て改む
○旣計新羅、原本計を討に作る北本に據て改む
○伐我、原本伐を代に作る北本中本に據て改む
○印岐彌、原本岐を支に作る北本中本に據て改む
○(注)未詳、此二字集解に私記攙入として削る
○食言、爾雅釋詁に食僞也とあり食言の字左傳哀二十五年に出づ
○滅卓淳股肱之國云々、此句義詳ならず通證に滅卓淳を句として股肱之國欲快返悔と讀み卓淳滅則任那諸國皆急矣言雖爲新羅股肱耳目之國而悞其蠶食逼己故欲快返悔也といひ集解は舊の儘に滅卓淳股肱之國と讀み股肱之國は卽

智、子他旱岐、久嵯旱岐、仍赴百濟、於是百濟王聖明略、以詔書示曰、吾遣奈率彌麻佐、奈率己連、奈率用哥多等、朝於日本、詔曰、早建任那、又津守連奉勅、問成任那、故遣召之、當復何如能建任那、請各陳謀、吉備臣、任那旱岐等曰、夫建任那國、唯在大王、欲冀遵王俱奏聽勅、聖明王謂之曰、任那之國、與吾百濟、自古以來、約爲子弟、今日本府印岐彌(謂在任那日本臣名也)、旣計新羅、更將伐我、又樂聽新羅虛誕謾語也、夫遣印岐彌於任那者、本非侵害其國、(未詳)往古來今新羅无道、食言違信而滅卓淳、股肱之國欲快返悔、故遣召到、俱承恩詔、欲冀興繼任那之國、猶如舊日、永爲兄弟、竊聞、新羅安羅兩國之境、有大江水、要害之地也、吾欲據此脩繕六城、謹請天皇三千兵士、每城充以五百、并我兵士、勿使作田而逼惱者、久禮山之五城庶自投兵降首、卓淳之國、亦復當興、所請兵士、吾給衣粮、欲奏天皇、其策一也、猶於南韓、置郡令城主者、豈欲違背天皇遮斷貢調之路、唯庶克濟多難、殲撲强敵、凡厥凶黨、誰不謀附、

百濟自言也欲快返悔は報恨乎新羅也とあれど兩說共によく通ぜず
○大江水、洛東江を云
○六城、北本六の下に地の字あり
○作田而逼惱、六城を守る兵士をして作田の爲に逼惱せしむることなく專ら防禦に當らしむれば久禮山五城の兵は自ら投降すべしとの意なるべし集解に令新羅不得耕也とあるはいかゞ此句も尙よく考ふべし
○久禮山、繼體紀二十四年に見ゆ
○降首、後漢書西域傳注に首猶服也とあり
○北敵、原本北を此に作る北本楓本中本に據て改む北敵は高麗なり
○奏於天皇、奏の上恐らくは欲の字を脫す
○此誠云々、以下十六字吳志胡綜傳に出づ
○佐度島、原本度を渡に作る北本に據て改む當時佐度嶋は越國に屬し越前越中越後分國の後も尙越後に屬す
○御名部、佐渡志に加茂郡南片部村に充てたれど吉田氏の說に同島最北端

北敵強大、我國微弱、若不置南韓郡領城主、脩理防護、不可以禦此強敵、亦不可以制新羅、故猶置之、攻逼新羅、撫存任那、若不爾者、恐見滅亡、不得朝聘、欲奏天皇、其策二也、又吉備臣、河內直、移那斯、麻都、猶在任那國者、天皇雖詔建成任那、不可得也、請移此四人、各遣還其本邑、奏於天皇、其策三也、宜與日本臣、任那旱岐等、俱奉遣使、同奏天皇、乞聽恩詔、於是吉備臣、旱岐等曰、大王所述三策、亦協愚情而已、今願歸以敬諮日本大臣、謂在任那日本府之大臣也、安羅王、加羅王、俱遣使同奏天皇、此誠千載一會之期、可不深思而熟計歟、十二月、越國言、於佐度嶋北御名部之碕岸、有肅愼人、乘一船舶而淹留、春夏捕魚充食、彼嶋之人言非人也、亦言鬼魅不敢近之、嶋東禹武邑人採拾椎子爲欲熟喫、著灰裏炮、其皮甲化成二人、飛騰火上二尺餘許、經時相鬪、邑人深以爲異、取置於庭、亦如前飛相鬪不已、有人占云、是邑人必爲魅鬼所迷惑、不久如言被其抄掠、於是肅愼人移就瀨波河浦、浦神嚴忌、人不敢近、渴飲其水、

死者且半、骨積於巖岫、俗呼肅愼隈也、

の鷲崎願浦なりと云
○肅愼、朝鮮の東北郎ち今の滿洲吉林省及露領沿海洲の地に古へ在りし國の名にて周代に肅愼と云ひ漢代には挹婁、隋唐の代に靺鞨、遼代に女眞と稱す續紀八養老四年に遣渡島津輕津司從七位上諸君綱男等六人於靺鞨國觀其風俗又多賀城碑にも去靺鞨國界二千里と見ゆ　○禹武邑、釋紀に禹武邑者羽茂郡也佐渡志に禹武は羽茂に轉ず今ほ又ハモチと讀換たるなりと云るを吉田氏の說に舊加茂郡梅津のウメはウモの轉にて同地なりと云り　○瀨波河、原本波の字なし北本中本に據て補ふ　○浦神、式に佐渡國羽茂郡護津神社(現に國幣小社)あり釋紀に浦神若此度津神社歟と云ひ吉田氏は阿津久志彥神社なりと云　○嚴忌、イチハヤシは稜威速の義嚴威の速なるを云

【六年】遣膳臣巴提便、天書に百濟援兵を請ひしに依て巴提便を遣すとあり便を使に作る　○奈率、原本率を卒に作る北本中本に據て改む下同じ　○其悛、楓本悛を捘に作り七年紀に已連とあり　○用歌多、北本及釋紀歌を奇に作る下同じ　○造丈六佛像、觀佛三昧經に釋迦牟尼佛身長丈六圓光七尺とあり一丈六尺の釋迦の像なりホトケは梵語佛陀の轉、ケは韓語を添たるものならむと云祖庭事苑に浮圖梵語佛陀或云浮圖或云部多或云母馱或沒陀皆五天語今並譯爲覺とあり　○願文、コトチカヒ文とあり立願の趣旨を述べたる文　○功德、僧尼令義解に謂

(乙丑)六年春三月、遣膳臣巴提便、使于百濟、夏五月、百濟遣奈率其悛、奈率用歌多、施德次酒等上表、秋九月、百濟遣中部護德菩提等、使于任那、「贈吳財於日本府臣及諸旱岐、各有差、是月、百濟造丈六佛像、製願文曰、蓋聞造丈六佛、功德甚大、今敬造、以此功德、願天皇獲勝善之德、天皇所用彌移居國、俱蒙福祐、又願普天之下、一切衆生、皆蒙解脫、故造之矣、冬十一月、膳臣巴提便還自百濟、言、臣被遣使、妻子相逐去、行至百濟濱、濱海濱也日晚停宿、小兒忽亡、不知所之、其夜大雪、天曉始求、有虎連跡、臣乃帶刀擐甲、尋至巖岫、拔刀曰、敬受絲綸、劬勞陸海、櫛風沐雨、藉草班荊者、爲愛其子、令紹父業也、惟汝威神、愛子一也、今夜兒亡、追蹤覓至、不畏亡命、欲報故來、既而其虎進前、開口欲

修善也又修二營功德一の條に謂書寫經典莊嚴佛像之類也とあり
○甚大、オキロはオキは奥ロは助辭幽深の意
○勝善之德、原本勝を膳に作る北本中本及紀略に據て改む勝れて善き德を云
○一切衆生、シカシナガラはサナガラと云に同じく有の盡くと云が如し　○解脫、醯譯名義集に心得自在不爲不能所縛故曰解脫とあり煩惱を脫がれば心自ら安し故に其意を得てヤスラカナリと訓り　○虎、抄毛群部に虎說文云虎(乎古反止良)山獸之君也箋注に按宣四年左傳云楚人謂虎於菟方言虎江淮南楚之間或謂之[於麗王念孫曰今江南山邊呼虎爲麗則知於麗之於發語然則和名止良之止卽麗良助語也とあり言海に朝鮮語ならむと云　○擐甲、擐は字書に貫也とあり甲を身に著くるを云　○絲綸、文選齊竟陵王文宣王行狀に絲綸允緝、注に善曰禮記(緇衣)曰王言如絲其出如綸翰曰絲綸天子之言也とあり　○劬勞、毛詩邶風凱風の傳に劬勞病苦也とあり　○櫛風沐雨、魏志鮑勛傳に出づ風に髮を櫛けづり雨に頭を洗ふを云倭訓栞にゆするはゆすぐに同じと云ひ字書に沐は濯髮也とあり　○藉草、原本藉を籍に作る北本中本に據て改む字書に身之所依曰藉とありシキモノ、シクと訓り班と相對してマクラと訓り　○班荊、左傳襄廿六年に出づ杜注に班布也とありシクと訓り　○嘘神、萬葉十六に韓國乃虎云神乎生取爾八頭取持來と見ゆ
○(注)細群龍群、詳ならず　○官門、北本中本宮門に作る　○狛國香岡上王、狛は高麗なり國香岡の國の字は原本鵠に作る中本及釋紀に據て改む北本には國の字なし三國史記に廣開土王好太王碑には國岡上廣開土境平安好太王とあり朱蒙十七世の孫なり

【七年】己連、上に出し其悛なり
○一十隻、原本隻を雙に作る北本中本に據て改む
○今來郡、坂上系圖所引姓氏錄廿三阿智王奏建今來郡後改號高市郡とあり
○川原、高市郡高市村大字川原
○民直、錄和泉神別に民直天兒屋根命之後也又天穗日命十七世孫若桑足尼之後也と見ゆ

噬巴提便忽申左手、執其虎舌、右手刺殺、剝取皮還、是歲、高麗大亂被誅殺者衆、

百濟本記云、十二月甲午、高麗國細群與麁群戰于官門、伐鼓戰鬪、細群敗不解兵三日、盡捕誅細群子孫、戊戌、狛國香岡上王薨也、

(丙寅)七年春正月甲辰朔丙午、百濟使人中部奈率己連等罷歸、仍賜以良馬七十匹、船一十隻、夏六月壬申朔癸未、百濟遣中部奈率掠葉禮等獻調、秋七月、倭國今來郡言、於五年春、川原民直宮名登樓騁望、乃見良駒、紀伊國漁者負贄草馬之子也、睨影高鳴、輕超母脊、就而買取、襲養兼年、及壯鴻驚龍翥、別輩越群、服御隨心、馳驟合度、超渡大內丘之壑十八丈焉、川原民直

宮、檜隈邑人也、是歲、高麗大亂、凡鬬死者二千餘、

百濟本記云、高麗以正月丙午、立中夫人子爲王、年八歲、狛王有三夫人、正夫人無子、中夫人生世子、其舅氏麁群也、小夫人生子、其舅氏細群也、及狛王疾篤、細群麁群各欲立其夫人之子、故細群死者二千餘人也、

○(注)紀伊國云々、集解に紀伊以下十二字原爲レ注、蓋轉寫者偶或脫字因補爲二小書一耳と云て本文とす　○草馬、字書に牝馬也とあり抄牛馬部に牝馬一名騍馬上音草和名米萬と見ゆ　○睨影高鳴、文選赭白馬賦に出づ注に睨視也馬有二視影高鳴一者良馬也とあり　○襲養兼年、同賦序に出づ注に襲受也とあり　○鴻驚云々、以下合度までは同賦及序中の句、原文隨心馳驟を順志馳驟に作る翥は字書に飛舉也とあり　○大內丘、大和國高市郡、諸陵式に檜隈大內陵と見え檜隈の內なり今畝傍町大字五條野なりと云北本丘を岳に作る　○檜隈邑、高市郡檜前鄕是なり　○二千餘、通釋考本に據て餘の下人の字を補ふ　○(注)中夫人、オリケは杜氏通典に百濟王號二於羅瑕一夏言王也王妻號二於陸一夏言妃也とあり　○世子、マカリトモも韓語なるべし

【八年】德率、百濟第四品の官

(丁卯)八年夏四月、百濟遣前部德率眞慕宣文、奈率哥麻等乞救軍、仍貢下部東城子言、代德率汝休麻那、

(戊辰)九年春正月癸巳朔乙未、百濟使人前部德率眞慕宣文等請罷、因詔曰、所乞救軍必當遣救、宜速報王、夏四月壬戌朔甲子、百濟遣中部杆率掠葉禮等奏曰、德率宣文等奉勅、至臣蕃曰、所乞救兵、應時遣送、祇承恩詔、喜慶無限、然馬津城之役、正月辛丑、高麗率衆圍馬津城、虜謂之曰、由安羅國與日本府招來勸罰、以事准況、寔當相似、然三廻欲審其言、遣召、而並不來、

【九年】眞慕、原本眞を直に作る北本及上文に據て改む　○杆率、百濟第五品の官

○喜慶、原本喜を嘉に作る北本に據て改む　○馬津城、文獻備考に馬津縣本孤山按今禮山縣百濟時號二鳥山一斯羅改名二孤

山」とあれど三國史記百濟本記に聖王廿六年春正月高勾麗王平成與、濊謀攻漢北獨山城とあり此獨山城なるべし其地詳ならざれど今の京城に近き所ならむか

○(注)正月辛丑、集解此上に一本云の三字を補ふ

○准況、字書に准は比照之意況は譬也とあり

○三廻、集解に其言の下にあり

○當復何如、原本此下に消息何如の四字あり北本に據て削る

○策勵、通證に倒置なるべしと云

○得爾辛、詳ならず馬津城の附近か

【十年】將德、百濟第七品の官位

○久貴、原本久を文に作る北本に據て改む

○延那斯、上文に移那斯とあり

【十一年】(注)阿比多率三叔舟、原本率を卒に作り叔い字なし北本中本に據て補訂す叔は中本舟に作る三以下誤あるべし

○將德、北本施德に作る

○大市頭、未詳、錄左京

故深勞念、伏願、可畏天皇(西蕃皆稱日本天皇、爲可畏天皇)先爲勘當、暫停所乞救兵、待臣遣報、詔曰、式聞皇奏、爰覩所憂、日本府與安羅、不救隣難、亦朕所疾也、又復密使于高麗者、不可信也、朕命卽白遣之、不命何容可得、願王開襟緩帶、恬然自安、勿深疑懼、宜共任那依前勅、戮力俱防北敵、各守所封、朕當遣送若干人、充實安羅逃亡空地、六月辛酉朔壬戌、遣使詔于百濟曰、德率宣文取歸以後、當復何如、朕聞、汝國爲狛賊所害、宜共任那策勵、同謀如前防距、閏七月庚申朔辛未、百濟使人掠葉禮等罷歸、冬十月、遣三百七十人於百濟、助築城於得爾辛、

(己巳)十年夏六月乙酉朔辛卯、將德久貴、固德馬次文等請罷歸、因詔曰、延那斯、麻都、陰私遣使高麗者、朕當遣問虛實、所乞軍者依願停之、

(庚午)十一年春二月辛巳朔庚寅、遣使詔于百濟(百濟本記云、三月十二日辛酉、日本使人阿比多率三叔舟來至都下、)曰、朕依將德久貴、固德馬進文等所上表意、一一教示如視掌中、思欲具情、冀將盡抱、大市頭歸後、如常無異、今但欲審報辭、故遣使之、又

復朕聞、奈率馬武、是王之股肱臣也、納上傳下、甚協王心、而爲王佐、若欲國家無事、長作官家、永奉天皇、宜以馬武爲大使、遣朝而已、重詔曰、朕聞、北敵强暴、故賜矢卅具、庶防一處、夏四月庚辰朔、在百濟日本王人方欲還之、百濟本記云、四月一日庚辰、日本阿比多還也、百濟王聖明謂王人曰、任那之事奉勅堅守、延那斯、麻都之事、問與不問、唯從勅之、因獻高麗奴六口、別贈王人奴一口、皆攻爾林所禽奴也、乙未、百濟遣中部奈率皮久斤、下部施德灼干那等、獻狛虜十口、

（辛未）十二年春三月、以麥種一千斛賜百濟王、是歲、百濟聖明王親率衆、及二國兵、二國、謂新羅任那也、往伐高麗、獲漢城之地、又進軍討平壤、凡六郡之地、遂復故地、

（壬申）十三年夏四月、箭田珠勝大兄皇子薨、五月戊辰朔乙亥、百濟加羅安羅遣中部德率木劦今敦、河內部阿斯比多等、奏曰、高麗與新羅、通和并勢、

蕃別に大市首用明紀二年に大市造等見ゆれば姓か通證に一說市當作刀浣水續談古詩太刀頭註大刀頭鐶還也歸字疑衍旁註誤入本文者蓋大刀頭後如常無異四字爲句言使人還後王無恙耶とあり　○又復朕聞、朕の字は北本中本に據て補ふ　○矢卅具、類聚三代格に以十隻爲一具兵庫式に五十隻爲一具とあり　○王人、公羊傳莊六年に出づ王命を含みて四方に使する人を云　○(注)百濟本記、原本記を紀に作る北本中本に據て改む　○延那斯、原本延を近に作る北本に據て改む　○(注)皆攻爾林云々、爾林は顯宗紀三年（卷上三〇二頁）に出づ禽は原本會に作る北本中本に據て改む　○施德、原本施を他に作る北本中本に據て改む　○高麗、原本麗を麗に作る北本中本に據て改む　○往伐高麗、三國史記新羅本記眞興王十二年に命居柒夫等侵高句麗乘勝取十郡とあり　○漢城、南漢山城にて今の京畿道廣州の地なり　○平壤、北漢山城にて今の京城なり　○遂復故地、遂の字は北本中本に據て補ふ

【十二年】麥種、種とあれば食糧にはあらず種子として賜はりしなり　○斛、楓本中本にサカと訓み北本にはツカと訓り顯宗紀二年（卷上三〇一頁）に見ゆ　○往伐高麗、三國史記新羅本記眞興王十二年に命居柒夫等侵高句麗乘勝取十郡とあり　○漢城、南漢山城にて今の京城なり　○平壤、北漢山城にて今の京城なり　○遂復故地、遂の字は北本中本に據て補ふ

【十三年】箭田珠勝大兄皇子、天皇の第一皇子元年紀に出づ　○河內部、通證に蓋日本府河內直之部屬と云り

○冬十月、一代要記此下に十三日辛酉の五字あり
○西部姫氏達率、西部は部曲の名姫氏は通證に乃所出之本姓とあり達率は百濟第二品の官
○釋迦佛金銅像、釋譯名義集に本起經釋迦爲能仁とあり金銅像とは金と銅とを和ぜて鑄造せるを云
○幡蓋、抄調度部伽藍具に幡を波太、蓋を岐沼加散と訓り
○經論、佛經祖論に聖哲傳訓曰經述經叙理曰論とありて經は經典論は釋氏要覽に有二論一宗論卽宗大小乘經造也二釋論釋大小乘經也とあり
○是法於諸法中云々、以下四十二字は金光明最勝王經如來壽量品に據れり
○菩提、釋譯名義集に道之極者稱曰菩提とあり
○譬如人懷隨意寶云々、楞嚴經に據れり
○天竺、唐書西域傳に天竺國漢身毒國也或曰摩伽陀曰憍薩羅門とあり印度を云
○陪臣、百濟は我國に臣として仕へり其臣なれば

謀滅臣國與任那、故謹求請救兵、先攻不意、軍之多少隨天皇勅詔曰、今百濟王、安羅王、加羅王、與日本府臣等、俱遣使奏狀聞訖、亦宜共任那、并心一力、猶尙若茲、必蒙上天擁護之福、亦賴可畏天皇之靈也、冬十月、百濟聖明王更名聖王遣西部姫氏達率怒唎斯致契等、獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷、別表讃流通禮拜功德云、是法於諸法中最爲殊勝、難解難入、周公孔子尙不能知、此法能生無量無邊福德果報、乃至成辨無上菩提、譬如人懷隨意寶、逐所須用盡、依情、此妙法寶亦復然、祈願依情無所乏、且夫遠自天竺爰洎三韓、依教奉持、無不尊敬、由是百濟王臣明謹遣陪臣怒唎斯致契、奉傳帝國、流通幾內、果佛所記我法東流、是日、天皇聞已歡喜踊躍、詔使者云、朕從昔來、未曾得聞如是微妙之法、然朕不自決、乃歷問群臣曰、西蕃獻佛相貌端嚴、全未曾看、可禮以不、蘇我大臣稻目宿禰奏曰、西蕃諸國一皆禮之、豐秋日本豈獨背也、物部大連尾輿、中臣連鎌子同奏曰、我國家之

王（キミト坐スハキミタルハ）天下者、恒以天地社稷百八十神、春夏秋冬、祭拜爲事、方今改拜蕃神、恐致國神之怒、天皇曰、宜付情願人稻目宿禰、試令禮拜、大臣跪受而忻悅、安置小墾田家、懃脩出世業爲因、淨捨向原家爲寺、於後國行疫氣、民致夭殘、久而愈多、不能治療、物部大連尾輿、中臣連鎌子、同奏曰、昔日不須臣計、致斯病死、今不遠而復、必當有慶、宜早投棄、懃求後福、天皇曰、依奏、有司乃以佛像、流棄難波堀江、復縱火於伽藍、燒燼更無餘、於是天無風雲、忽災大殿、是歲、百濟棄漢城與平壤、新羅因此入居漢城、今新羅之牛頭方、尼彌方也、地名未詳

陪臣と云

○怒唎斯致契、契は北本楓本及上文に據て補ふ

○帝國、此文字始て見ゆ

○果佛所記云々、大般若經雜聞功德品に甚深般若波羅密多我滅度已後時後分後五百歲於東北方當廣流布云々とあり通釋に記を傍訓によりて說に改む是なるが如し敷田氏の說に此上表百十九字は恐らくは推古天皇後に追作たるものなるを親王（舍人親王）是を信じ眞の上表ならむと撰入たる事こそ疑はしけれ此表中に是法云々とあるは最勝王經の語なるが此經は唐にて譯せしものなり此十三年は唐の初代より數へても六十五年前なれば其語の表中にあるべき理なし云々とさて佛敎の支那に入りしは後漢明帝永平十年にて本年に至るまで四百八十八年其百濟に入りしは枕流王元年（東晉太元九年）仁德天皇七十二年にて欽明天皇十三年より百八十餘年以前なり　○從昔來、集解來の上に以の字を補ふ　○歷問、トナメテは問並めてなり　○端嚴、北本嚴を麗に作る　○豐秋日本、大日本豐秋津洲を漢譯したるなり　○中臣連鎌子、中臣系譜に天兒屋根命十七世の孫鎌大夫公あり是なるべし子は方子國子御食子など世々此家の通稱となれり故に鎌足をも鎌子と云り　○天地社稷百八十神、天地社稷にてアマツヤシロクニツヤシロと訓べし百八十神は汎數にて正數にはあらず當時神祇官に祭り官幣に預りし座數なりしにやと云說あれど然らずこゝはたゞおほらかに官にて祭らせ給ふ總ての天津社國津社を指奉りてかく申せるなり　○祭拜爲事、祭は神祇令及延喜式等に載する四時の祭祀を云天社國社を定め四時に之を祭祀し給ふを以て重要なる事と爲給ふを云禁中作法先神事後他事と禁祕御抄に記させ給ひしは是なり　○蕃神、隣國の神の意卽ち佛を云　○小墾田、大和國高市郡　○懃脩出世業、略記及濫觴抄懃を勤に作り世の下に之の字あり是なるに似たり　○淨捨、通證に當訓須且と云　○向原家、大和志に高市郡廣嚴寺在豐浦村舊作向原又名豐浦寺と見ゆ寺址今飛鳥村大字豐浦にあり　○爲寺、テラは韓語なり　○不遠而復、易復卦の象に初九不遠復无祇悔吉とあり一度之を失ふも久からずして元に復するを云　○難波堀江、通證に寺島氏曰豐浦寺東飛鳥川西也さいひ平氏傳雜勘文抄にも其事見ゆれど尙攝津國の難波堀江ならむと思はるよく考ふべし　○伽藍　謙譯名義集に僧伽藍譯爲衆園僧史略云爲衆人園圃園囿生植之所佛弟子則生殖道芽聖果也とあり

【十四年】

○中部德率木劦今敦、原本德を杆に作る釋紀及上文に據て改む

○戊辰朔、通證に當作壬戌朔戊辰七日也とあり

○泉郡、當時和泉國は河內國に屬す

○茅渟海、古は和泉日根大鳥の三郡に亘て茅渟と云り

○梵音、歌讚の聲なり法苑珠林に魏陳思王曹子建游魚山忽聞空中梵天之音乃摹其節寫爲梵唄梵音玆爲始也と見ゆ

○溝邊直、姓氏錄に見えず右京諸蕃に雲梯(ウナテ)連寶德公之後也と見ゆれど是とは別なるべし

○吉野寺、編年記に現光寺字檜曾、大和志に吉野郡比蘇寺池田莊比曾村一名現光寺又名吉野寺と見ゆ元享釋書に此寺を聖德太子の建立とす

○內臣、錄大和皇別に內臣孝元天皇皇子彥太忍信命之後也とあり

○同船、皇極紀元年の訓注にも同船母慮紀舟とあ

(癸酉)十四年春正月甲子朔乙亥、百濟遣上部德率科野次酒、杆率禮塞敦等乞軍兵、戊寅、百濟使人中部德率木劦今敦、河內部阿斯比多等罷歸、夏五月戊辰朔、河內國言、泉郡茅渟海中有梵音、震響若雷聲、光彩晃曜如日色、天皇心異之、遣溝邊直(此但曰直不書名字、蓋是傳寫誤失矣、)入海求訪、是月、溝邊直入海果見樟木浮海玲瓏、遂取而獻、天皇命畫工造佛像二軀、今吉野寺放光樟像也、六月、遣內臣(闕名)使於百濟、仍賜良馬二疋、同船二隻、弓五十張、箭五十具、勅云、所請軍者隨王所須、別勅醫博士易博士、曆博士等宜依番上下、今上件色人、正當相代年月、宜付還使相代、又卜書、曆本種種藥物可付送、秋七月辛酉朔甲子、幸樟勾宮、蘇我大臣稻目宿禰奉勅、遣王辰爾數錄船賦、卽以王辰爾爲船長、因賜姓爲船史、今船連之先也、八月辛卯朔丁酉、百濟遣上部奈率科野、新羅下部固德汶休帶山等上表曰、去年臣等同議、遣內臣德率次酒、任那大夫等奏海表諸彌移居之事、伏待恩詔、如春草之仰甘雨也、今年忽聞、新羅與狛

國通謀云、百濟與任那頻詣日本、意謂是乞軍兵伐我國歟、事若實者、國之敗亡可企踵而待、庶先日本軍兵未發之間、伐取安羅絶日本路、其謀若是、臣等聞茲深懷危懼、卽遣疾使、輕舟馳表以聞、伏願、天慈速遣前軍後軍、相續來救、逮于秋節、以固海表、彌移居也、若遲晚者、噬臍無及矣、所遣軍衆來到臣國、衣糧之費、臣當充給、來到任那、亦復如是、若不堪給、臣必助充、令無乏少、別的臣敬受天勅、來撫臣蕃夙夜乾乾、勤修庶務、由是海表諸蕃、皆稱其善、謂當萬歲肅清海表、不幸云亡、深用追痛、今任那之事、誰可修治、伏願天慈速遣其代、以鎭任那、又復海表諸國甚乏弓馬、自古迄今、受之天皇、以禦强敵、伏願天慈多賜弓馬、冬十月庚寅朔己酉、百濟王子餘昌（明王子威德王也）悉發國中兵、向高麗國、築百合野塞、眠食軍士、是夕觀覽、鉅野塡映、平原瀰迤、人跡罕見、犬聲蔑聞、俄而儵忽之際、聞鼓吹之聲、餘昌乃大驚打鼓相應、通夜固守、凌晨起見、曠野之中、覆如青山、旌旗充滿、會明有著頸鎧者一

り抄舟車部に游艇を渡師不鞱と訓り鞱は字書に艇音同或作艇（短船）とあれば此の字の意にて用ひしか

○醫博士、職員令典藥寮に醫博士一人掌諸藥方脈經教授醫生等とあり職掌略之に類せしなるべし

○易博士、令制（陰陽寮）の陰陽博士に類せしものなるべし

○曆博士、職員令陰陽寮に曆博士一人掌造曆及教曆生等とあり

○依爵上下、職務の繁閑と人數の多少に依て當番を定めて奉仕するを云

○今、原本令に作る北本中本及釋紀に據て改む

○卜書曆本、支那の卜筮及曆の書なりコヨミは倭訓栞に日讀の義二日三日と數へて其事を考へ見るものなれば名とせりタメシは俗に事の手本などいふ是也とありト占は神代より存し曆法も古くより固有のものありしかど參考の爲に獻らしめ給ひしなり

○樟勾宮、所在未詳

○壬辰爾、續紀四十延曆

騎、挿鐃者（鐃字未詳）二騎、珥豹尾者二騎并五騎、連轡到來問曰、小兒等言、於吾野中客人有在、何得不迎禮也、今欲早知、與吾可以禮問、答者姓名年位、餘昌對曰、姓是同姓、位是杆率、年廿九矣、百濟反問、亦如前法、而對答焉、遂乃立標而合戰、於是百濟以鉾刺墮高麗勇士於馬斬首、仍刺擧頭於鉾末、還入示衆、高麗軍將憤怒益甚、是時百濟歡叫之聲、可裂天地、復其偏將打鼓疾鬪、追却高麗王於東聖山之上、

○船長、職員令に主船司正一人掌公私舟檝及舟具事とある是なるべし　○船連、天武天皇十二年船史に連の姓を賜ふ　○新羅、正月乙亥の條に科野次酒とあり音近きに由て誤れるか新羅の二字は疑はし　○固德、原本固を因に作る北本中本に據て改む　○遏謀云、集解に云を曰に改作る　○企躋、文選劇秦美新の注に企擧也躋足也とあり　○曠臍、左傳莊六年注に若齧腹齊（與臍通）喻不可及とあり　○軍兵、軍の字は北本に據て補ふ　○的臣、仁德紀十二年に見ゆ　○乾々、易乾卦に出づ字書に自强不息貌とあり　○速遣、原本速を連に作る北本中本に據て改む　○（注）威德王、原本威を盛に作る北イ本及下文に據て改む　○百合野塞、三國史記に此事見えず十五年十月高勾麗熊川城（公州）を攻めし事見えたれば其誤かよく考ふべし百合野塞は詳ならざれど公州附近なるべし　○鉾野、鉾は字書に與巨同大也とあり　○墳腴、墳は字書に土膏肥也とあり　○瀰迤、文選蕪城賦の注に瀰（與彌同）相遠邇平之貌とあり迤は字書に與迤同地勢斜延曰迤と見ゆ　○蔑聞、蔑は字書に無也とあり　○頸鎧、說文に鎧鍜頸鎧也釋紀に頸鎧者俗號與多利加氣之物也とあり　○鐃、鐃は說文に小鉦也軍法卒長執鐃とあり　○（注）鐃字未詳、此四字釋紀に私記曰可削委解別記とあり　○珥豹尾、珥は字書に挿也とあり豹は原本狗に作る北本に據て改む抄毛群部に豹似虎而圓文者也日本紀私記云奈賀豆可美と見ゆ　○與吾、北本楓イ本に與の下德の字あり　○問答者、集解に答の字を客に改む通釋は者は其字の誤にあらざるかと云　○杆率、第五品の官　○標、字書に旌旗也とあり　○東聖山、詳ならず

【十五年】日佐、錄山城皇別に武內宿禰之後也欽明天皇御世奉同族四人國民三十五人歸化天皇殆以其遠來勅稱珍勳

（甲戌）十五年春正月戊子朔甲午、立皇子渟中倉太珠敷尊爲皇太子、丙申、百濟遣中部木劦施德文次、前部施德曰佐分屋等於筑紫、諮內臣佐伯連

臣爲三十九人之譯時人號曰譯氏云々とあり中本水訂本日を日に作る
○閏月、集解に按十四年十一月とあり
○來年、原本今年に作る北本に據て改む
○營壁、壁は字書に軍壘也とあり
○奉聞、原本聞奉に作る北本に據て改む
○來詣、原本來を未に作る北本中本に據て改む
○令遣、原本令を命に遣を遣に作る北本中本に據て改む
○前番奈率東城子言、本紀八年に百濟より貢する所なり
○曇惠、諸本惠を慧に作る
○採藥師、職員令典藥寮に藥園師掌知藥性色目種採藥園諸草及教藥園生とあり
○樂人、職員令雅樂寮に百濟樂師四人とあり其四人は笛師箜篌師莫目師儛師なり
○施德三斤、原本施の字なし北本中本に據て補ふ
○汶斯干奴、北本干を于に作る
○斯羅、北本楓本斯を新

等曰、德率次酒、杆率塞敦等以去年閏月四日到來云、臣等（臣等者、謂內臣也、）以來年正月到、如此言而未審來不也、又軍數幾何、願聞若干預治營壁、別諮、方奉聞可畏天皇之詔、來詣筑紫看送賜軍、聞之歡喜無能比者、此年之役甚危於前、願遣賜軍使、逮正月、於是內臣奉勅而答報曰、卽令遣助軍數一千、馬一百疋、船四十隻、二月、百濟遣下部杆率將軍三貴、上部奈率物部烏等乞救兵、仍貢德率東城子莫古、代前番奈率東城子言、五經博士王柳貴代固德馬丁安、僧曇惠等九人代僧道深等七人、別奉勅貢易博士施德王道良、曆博士固德王保孫、醫博士奈率王有悛陀、採藥師施德潘量豐、固德丁有陁、樂人施德三斤、季德己麻次、季德進奴、對德進陀、皆依請代之、三月丁亥朔、百濟使人中部木劦施德文次等罷歸、夏五月丙戌朔戊子、內臣率舟師詣于百濟、冬十二月、百濟遣下部杆率汶斯干奴上表曰、百濟王臣明及在安羅諸倭臣等、任那諸國旱岐等奏、以斯羅無道、不畏天皇、與狛同心、欲殘

滅海北彌移居、臣等共議遣有至臣等仰乞軍士征伐斯羅、而天皇遣有至臣、帥軍以六月至來、臣等深用歡喜、以十二月九日遣攻斯羅、臣先遣東方領物部莫哥武連領其方軍士攻函山城、有至臣所將來民、竹斯物部莫奇委沙奇能射火箭、蒙天皇威靈、以月九日酉時焚城拔之、故遣單使馳船奏聞、別奏、若但斯羅者、有至臣所將軍士亦可足矣、今狛與斯羅同心戮力、難可成功、伏願速遣竹斯嶋上諸軍士來助臣國、又助任那、則事可成、又奏、臣別遣軍士萬人助任那、并以奏聞、今事方急、單船遣奏、但奉好錦二疋、羆皮一領、斧三百口、及所獲城民男二女五、輕薄追用悚懼、餘昌謀伐新羅、耆老諫曰、天未與、懼禍及、餘昌曰、老矣何怯也、我事大國、有何懼也、遂入新羅國、築久陁牟羅塞、其父明王憂慮餘昌長苦行陣、久廢眠養、父慈多闕、子孝希成、乃自往迎慰勞、新羅聞明王親來、悉發國中兵、斷道擊破、是時新羅謂佐知村飼馬奴苦都（更名谷智）曰、苦都賤奴也、明王名主也、今使賤奴殺名主、冀傳後世、莫忘、於口、已而苦都乃獲明王、再拜曰、請斬王首、明王對

に作る斯羅卽ち新羅なり
○有至臣、釋紀に私記曰案假名本作內臣とあり通釋に此五字衍又次の天皇遣有至臣の紛れ入りしものなるべしと云るは然るべし
○東方領、百濟の東方を領り掌る職なり
○莫哥武連、北本哥を奇に作る
○函山城、函山は下文に久陁牟羅塞とある久陁牟羅に同じ三國史記に管山城とあり忠淸北道沃川地方なり
○竹斯物部、竹斯は原本筑紫に作る北本中本に據て改む百濟にて筑紫を竹斯と書きし事下文にも竹斯嶋とあるにて明なり筑紫物部は舊事紀に筑紫聞物部同貴田物部見ゆ莫奇委沙奇は詳ならず
○火箭、魏志諸葛誕傳に臨高以發石車火箭逆燒其攻具とあり國史に於ては此に始て見ゆ三才圖會に火箭施火藥於箭者とあれど詳ならず
○酉時、今の午後六時
○單使、其事のみに就ての使を云
○竹斯嶋上、竹斯は筑紫

曰、王頭不合受奴手、苦都曰、我國法違背所盟、雖曰國王當受奴手、一本云、明王乘跏胡床、解授佩刀於谷知令斬、明王仰天大息涕泣、許諾曰、寡人每念、常痛入骨髓、顧計不可苟活、乃延首受斬、苦都斬首而殺、掘坎而埋、一本云、新羅葬理明王頭骨、而以禮送餘骨於百濟、今新羅王埋明王骨於北廳階下、名此廳曰都堂、餘昌遂見圍繞、欲出不得、士卒遑駭不知所圖、有能射人筑紫國造、進而彎弓占擬、射落新羅騎卒最勇壯者、發箭之利、通所乘鞍前後橋、及其被甲領會也、復續發箭如雨、彌厲不懈、射却圍軍、由是餘昌及諸將等得從間道逃歸、餘昌讃國造射却圍軍、尊而名曰鞍橋君、矩羅賦、於是新羅將等具知百濟疲盡、遂欲謀滅無餘、有一將云、不可、日本天皇以任那事、屢責吾國、況復謀滅百濟官家、必招後患、故止之、

嶋上は嶋のほとりなるべし　○筑前斯麻郡とした る説あれど採り難し　○單船、原本單を草に作る北本中本に據て改む單は單使の單に同じ　○毳毳、北本中本に毳毳玉篇云毛爲席また抄調度紀坐臥具に毳（賀毛）毛席撚毛爲席也と見え毛を以て作れる席なり傍訓アリカモとあれど中本にはヲリカモとも訓り天武紀の訓を併考るにオリカモと訓む方よきか　○一領、ヒトキは一匹（ヒトヒキ）なるべしと通釋にいへどいかゞあらむキの義未詳　○追用悚懼、通證に以上表文今按此下疑有脫簡と云り　○大國、北史倭國傳に新羅百濟皆以倭爲大國と見ゆ　○久陁牟羅塞、上に見ゆる函山城の附近に築きしものなるべし　○行陣、原本陣を陳に作る諸本に據て改む　○佐知村、三國史記に三年山郡とあるに同じきか三年山郡は忠淸北道報恩地方　○苦都、三國史記に高干都刀とあり　○已而、原本已卯に作る通釋に據て改む　○入骨髓、原本入を人に作る北本中本に據て改む　○顧、原本願に作る北本中本に據て改む　○明王云々延首受斬、此事三國史記百濟本紀に聖王三十二年七月王欲襲新羅親帥歩騎五十夜至狗川新羅伏兵發與戰爲亂兵所害薨とあり同新羅本紀には眞興王十五年七月修築明活城百濟王明禮與加良來攻管山城軍主角干于德伊湌眈知等逆戰失利新州軍士金武力以州兵赴之及交戰裨將三年山郡高干都刀急擊殺百濟王於是諸軍乘勝大克之斬佐平四人卒二萬九千六百人匹馬無反者と見ゆ　○掘坎、原本掘を堀に作る北本中本に據て改む　○（注）都堂、唐制尚書省（我太政官）の正中の廳を都堂と稱す之に據て名けしなるべし　○遑駭、遑は字書に急也又後漢書に諸郡遑急と見え注に急迫は驚懼也とあり依てアハテと訓す　○筑紫國造、孝元紀七年に出づ大彦命の後なり　○占擬、字書に占は視也擬は度也謂揣度以待也とあり　○鞍前後橋、雄略紀九年に出づ　○被甲領會、著たる甲の領

會なり領會は中本にシキアハセと訓み事跡抄に鑑ノ引合也胄ト云ハ惡シと云中本に會を胄に講述抄に胄に作るに據りて領胄なりと云る說あれど胄に領と云こと例なく北本楓本共に會とあれば原本に據れり　○彌厲不懈、原本厲を屬に作る北本楓本中本に據て改む厲は字書に嚴也又烈也猛也とあり　○鞍橋君、鴨祐之の說に筑前國に鞍手郡あり此射手の舊地なりと云注にクラヂとあるはクラは馬の鞍ヂは琴柱のヂにて鞍をば矢もて射貫き琴柱の動かぬが如くにしたるに因れりと云

【十六年】王子餘昌、子は衍なるべしとも云へど未だ卽位せざるによりて王子と書けるなるべし

○(注)威德王、餘昌なり

○爲當、萬葉一に爲當(ハタ)やこよひも我びとりねむと見えハタに爲當の字を充つ

○考王、考は父也字書に生曰レ父死曰レ考とあり

○眇然、字書に眇は遠也

○昇遐、天子の崩御を登遐と云之に同じ

○玄室、墓室を云

○哀、アカラシキはアカラサマに同じきか中本には昇遐の傍訓にもアカラシキテとあり急に又は俄にの意なるべし哀を訓るは義訓なるべし

○何術、術をバケと訓みたれど當らずミチと訓む方穩なるべし

○蘇我卿、詳ならず

○汝國爲高麗所逼、雄略紀二十年(卷上二八四頁參照)

○策、タ、マと訓るは義

(乙丙)

十六年春二月、百濟王子餘昌遣王子惠(王子惠者、威德王之弟也)奏曰、聖明王爲賊見殺(十五年、爲新羅所殺、故今奏之)、天皇聞而傷恨、廼遣使者迎津慰問、於是許勢臣問王子惠曰、爲當欲留此間、爲當欲向本鄉、惠答曰、依憑天皇之德、冀報考王之讎、若垂哀憐、多賜兵革、雪垢復讎、臣之願也、臣之去留敢不唯命是從、俄而蘇我臣問訊曰、聖王妙達天道地理、名流四表八方、意謂、永保安寧、統領海西蕃國、千年萬歲奉事天皇、豈圖一旦眇然昇遐、與水無歸、卽安玄室、何痛之酷、何悲之哀、凡在含情誰不傷悼、當復何咎、致茲禍也、今復何術用鎭國家、惠報答之曰、臣稟性愚蒙、不知大計、何況禍福所倚、國家存亡者乎、蘇我卿曰、昔在天皇大泊瀨之世(雄略)、汝國爲高麗所逼、危甚累卵、於是天皇命神祇伯、敬受策於神祇、祝者廼託神語報曰、屈請建邦之神、往救將亡之主、必當國家謐靖、

人物乂安、由是請神往救、所以社稷安寧、原夫建邦神者、天地剖判之代、草木言語之時、自天降來造立國家之神也、頃聞、汝國輟而不祀、方今悛悔前過、脩理神宮、奉祭神靈、國可昌盛、汝當莫忘、秋七月己卯朔壬午、遣蘇我大臣稻目宿禰、穗積磐弓臣等、使于吉備五郡置白猪屯倉、八月、百濟餘昌謂諸臣等曰、少子今願奉爲考王、出家脩道、諸臣百姓報言、今君王欲得出家脩道者、且奉教也、嗟夫前慮不定、後有大患、誰之過歟、夫百濟國者、高麗新羅之所爭欲滅、自始開國迄于是歲、今此國宗將授何國、要須道理分明應教、縱使能用者老之言、豈至於此、請悛前過、無勞出俗、如欲果願、須度國民、餘昌對曰、諾、卽就圖於臣下、臣下遂用相議、爲度百人、多造幡蓋種種功德云々、

詳ならず中本にハカリコトと訓るに從ふべし　○屈請、通證に枉屈招請也請訓麻世敏達紀舒明紀同とありマセは令坐なり　○乂安、原本乂を又に作るは非なり講述鈔に據て改む乂は字書に治也とあり　○建邦神、清在講述鈔に古事記韓國征伐ノ段ニ以墨江之荒御魂爲國守神而祭鎭還渡也ト云然レバ韓國降伏以後此國ノ神ヲ祭ラシタル古文尙シと云通證には此專指素戔嗚尊也兼方以爲大己貴命恐不是とあり　○草木言語之時、神代紀天孫降臨章（卷上四三頁）に草木咸能言語とあり　○汝國輟而不祀、此文に據て考るに百濟にても雄略天皇以來建邦の神卽ち天降來まして國家を造立せられし神靈をば神宮を造立して齋祀りしを其後佛敎などを信ぜし結果にや捨てゝ祀らずなりしなり依て舊の如く神宮を修理して神靈を祭り奉れと諭されしなり　○白猪屯倉、吉備國には白猪と云る地名聞えず續紀稱德紀天平神護二年十二月に美作國人白猪臣大足、神護景雲二年五月美作國大庭郡人白猪臣見ゆれば今の美作國（古の備前の內和銅六年分國）の內ならむか　○諸臣等、原本諸の字なし北本中本に據て補ふ　○少子、通證に少當作小とあり　○國宗、宗は字書に人所尊祭者曰宗父尊祖廟也とあり此は傍訓の如く國の祭卽ち宗廟の祭祀を何れの國に授けむとするかと云るなり　○出俗、北本俗の下家の字あり　○須度國民、度は化度なり自ら出家せむよりは國民を出家せしめよと云なり　○就圖於臣下、諸臣の企圖に從ふを云　○功德、佛敎にて念佛誦經布施供養等の諸事を稱す

（丙子）十七年春正月、百濟王子惠請罷、仍賜兵仗良馬甚多、亦頻賞祿、衆所欽歎、於是遣阿倍臣、佐伯連、播磨直、率筑紫國舟師、衛送達國、別遣筑紫火君、（百濟本記云、筑紫君兒、火中君弟、）率勇士一千、衛送彌氏、（彌氏津名）因令守津路要害之地焉、秋七月甲戌朔己卯、遣蘇我大臣稻目宿禰等於備前兒嶋郡置屯倉、以葛城山田直瑞子爲田令、（田令、此云陀豆歌毗）冬十月、遣蘇我大臣稻目宿禰等、於倭國高市郡置韓人大身狹屯倉、（言韓人者、百濟也、）高麗人小身狹屯倉、紀國置海部屯倉、（一本云、以處處韓人爲大身狹屯倉田部、高麗人爲小身狹屯倉田部、是卽以韓人高麗人爲田部、故因爲屯倉之號也、）

（丁丑）十八年春三月庚子朔、百濟王子餘昌嗣立、是爲威德王、

（庚辰）廿一年秋九月、新羅遣彌至己知奈末獻調賦、饗賜邁常、奈末喜歡而罷曰、調賦使者國家之所貴重、而私議之所輕賤、行李者百姓之所懸命、而選用之所卑下、王政之弊未必不由此也、請差良家子爲使者、不可以卑賤爲使、

【十七年】衆所欽歎、通證に言天皇頻加賞賜故衆美歎其優待舊讐非と云

○筑紫火君、記に神八井耳命者火君之祖とあり原本火を大に作る北本中本及紀略に據て改む

○彌氏、天智紀二年に牟弖とあり全羅南道高敞郡茂長面なるべし

○置屯倉、抄に兒島郡三家（ミヤケ）郷あり是なり

○葛城山田直、未詳

○田令、屯田の首なりツカヒと云は屯倉の首として京より差遣さるゝによれる名なり

○大身狹屯倉、式に高市郡牟佐坐神社あり大和志に三瀨村に在りと云卽其地なり身狹は今畝傍町大字見瀨の地、大身狹小身狹は相對して云　○（注）言韓人云々、韓は三韓の總稱にて百濟も其一なるが高麗は北方に遙かに距りて三韓の內にあらず故に此は高麗人に對して百濟人を韓人と云るなり

○海部屯倉、海部は紀伊國海部郡（今海草郡に入る）なり

【十八年】威德王、三國史記に甲戌年卽ち欽明天皇十五年に威德王諱昌繼位とあり十八年は卽位四年なり然るに此に嗣立とあるは此年卽位の式を行ひしにや

【廿一年】奈末、諸本末を未に作る南國通鑑に據て改む下同じ

○調賦使者云々、以下未必不由此也までは魏

（辛巳）廿二年、新羅遣久禮叱及伐干貢調賦、司賓饗遇、禮數減常、及伐干忿恨而罷、是歲、復遣奴氏大舍獻前調賦、於難波大郡、次序諸蕃、掌客額田部連、葛城直等、使列于百濟之下、而引導、大舍怒還、不入館舍、乘船歸至穴門、於是脩治穴門館、大舍問曰、爲誰客造、工匠河內馬飼首押勝欺紿曰、遣問西方無禮使者之所停宿處也、大舍還國告其所言、故新羅築城於阿羅波斯山以備日本、

志銜覬傳に據れり原文に調賦使を刑法に、行李を獄吏に作り選用の下者の字あり　○行李、左傳僖三十年杜注に行李は使人とあり　○懸、北本縣に作る縣懸通用す　○差、字書に使也如差遣とあり

【廿二年】久禮叱及伐干貢調賦、此事も三國史記に見えず及伐干はまた級伐飡に作る第九位の官　○司賓、下文に見ゆる掌客に同じ唐書百官志に司賓典賓掌賓各二人と見ゆ　○大舍、新羅第十二位の官　○難波大郡、攝津志に東生郡高津宮一名大郡宮とあり國郡沿革考に和銅中國郡の名を定むるに及び東生を稱せしなるべしと云　○掌客、治部式蕃客入朝の條に掌客二人掌在京雜事と見ゆ　○穴門館、後の長門館にて所謂臨海館なり赤間關の地にありしものなれど舊址詳ならず　○阿羅波斯山、詳ならず或は慶尙南道東萊郡南面附近ならむか釋紀阿を何に作る

（壬午）廿三年春正月、新羅打滅任那官家、一本云、廿一年、任那滅焉、物言任那、別言加羅國、安羅國、斯二岐國、多羅國、卒麻國、古嗟國、子他國、散半下國、乞食國、稔禮國、合十國、夏六月、詔曰、新羅西羌小醜、逆天無狀、違我恩義、破我官家、毒害我黎民、誅殘我郡縣、我氣長足姬尊靈聖聰明、周行天下、劬勞群庶、饗育萬民、哀新羅所窮見歸、全新羅王將戮之首、授新羅要害之地、崇新羅非次之榮、我氣長足姬尊於新羅何薄、我百姓於新羅何怨、

【廿三年】新羅打滅任那官家、東國通鑑に新羅眞興王二十三年秋九月新羅滅大加耶とあり　○（注）廿一年任那滅焉、此一本の說は誤なるべし　○任那十國、加羅以下八國は二年及五年紀に出づ　○古嗟、上文に久嗟とあり　○子他、北本子の上に古の字あり　○散半下、上文に散半奚とあり

○乞飡國、按に史記に居漆山郡とある地にて慶尙南道東萊方面ならむか
○稔禮國、按に五年紀に荷山とあると同じ地にあらざるかよく考ふべし
○詔曰、此詔文は梁書王僧辯傳の盟誓の文に據りて書せり
○西羌、說文に羌は西戎牧羊人也とあり
○黎民、原本黎を犂に作る諸本に據て改む
○哀新羅所窮見歸、皇后御征韓の時新羅王降服の事を云るなるべし
○非次之榮、文選羊祜讓開府表の注に謂不依班次とあり班次に依らず優待せらるゝを云
○凌蹙、原本蹙を戚に作る北本中本に據て改む
○距牙、距は巨と通ず集解には文選吳都賦に據て鋸に改め作る
○含靈、人民を云廣く生物の意にも及ぶ
○百姓以還、通證に言諸侯以及萬民也と云
○率土之濱、原本率を卒に濱を賓に作る率は北本中本に據り濱は集解に據て改む
○乍、集解に私記攙入と

而新羅長戟强弩、凌蹙任那、距牙鉤爪、殘虐含靈、刳肝斬趾、不厭其快、曝骨焚屍、不謂其酷、任那族姓百姓以還、窮刀極俎、既屠且膾、豈有率土之濱謂爲王臣、乍食人之禾、飲人之水、熟忍聞此而不悼心、況乎太子大臣處趺萼之親、泣血銜寃之寄、當蕃屏之任、摩頂至踵之恩、世受前朝之德、身當後代之位、而不能瀝膽抽腸、共誅奸逆、雪天地之痛酷、報君父之仇讎、則死有恨、臣子之道不成、是月、或有譖馬飼首歌依曰、歌依之妻逢臣讃岐、鞍韉有異、熟而熟視、皇后御鞍也、卽收付廷尉、鞫問極切、馬飼首歌依乃揚言誓曰、虛也非實、若是實者、必被天災、遂因苦問伏地而死、死未經時、急災於殿、廷尉收縛其子守石與中瀨氷、守石、名瀨氷、皆名也、將投火中、古之制也、投火爲刑、蓋咒曰、非吾手、投以祝手投、咒訖欲投火、守石之母祈請曰、投兒火裏、天災果臻、請付祝人、使作神奴、乃依母請、許沒神奴、秋七月己巳朔、新羅遣使獻調賦、其使人知新羅滅任那、恥背國恩、不敢請罷、遂留不歸本土、例同國家百姓、今河內國更荒郡、

して削る
○熟、通證に當作孰と云
○悼心、原本悼を憚に作る北本中本に據て改む
○跌蓼、繼體紀元年に見ゆミアナスエと訓るが如く子孫の意此句は主として太子に係て見るべし
○衒寃之寄、北本中本寃を怨に作り梁善哀に作る之の字は北本中本に據て補ふ
○當蕃屏之任、此句は主として大臣に係れり
○摩頂至踵之恩、文選廣絶交論の注に言盡心也とあり頂より踵に至るまで摩でゝ愛撫するを云
○瀝膽抽腸、忠を盡すを云原本膽を瞻に作る中本に據て改む
○譖、原本讒に作る北本に據て改む
○逢臣讒岐、舊訓に逢臣讒岐とあるを通釋に逢臣は氏讒岐は名なりと云
○韉、抄調度部に唐韻云韉(之太久良)鞍韉也とあり說文に馬鞍具と見ゆ通證に新井氏曰今云切付也と云
○熟而熟視、楓本熟而の

鷓鴣野邑新羅人之先也、是月、遣大將軍紀男麻呂宿禰、將兵出哆唎、副將河邊臣瓊缶出居曾山、而欲問新羅攻任那之狀、遂到任那、以薦集部首登弭、遣於百濟約束軍計、登弭仍宿妻家、落印書弓箭於路、新羅具知軍計、卒起大兵、尋屬敗亡、乞降歸附、紀男麻呂宿禰取勝旋師、入百濟營、令軍中曰、夫勝不忘敗、安必慮危、古之善教也、今處疆畔、豺狼交接、而可輕忽不思變難哉、況復平安之世、刀劍不離於身、蓋君子之武備不可以已、宜深警戒、務崇斯令、士卒皆委心而服事焉、河邊臣瓊缶獨進轉鬪、所向皆拔、新羅更擧白旗投兵降首、河邊臣瓊缶元不曉兵、對擧白旗空爾獨進、新羅鬪將曰、將軍河邊臣今欲降矣、乃進軍逆戰、盡銳遄攻破之、前鋒所傷甚衆、倭國造手彥自知難救、棄軍遁逃、新羅鬪將手持鉤戟、追至城洫、運戟擊之、手彥因騎駿馬、超渡城洫、僅以身免、鬪將臨城洫而歎曰、久須尼自利、此新羅語未詳也於是河邊臣遂引兵、退急營於野、於是士卒盡相欺蔑、莫有遵承、鬪將自就營中、悉生虜河邊、

二字なし熟而の熟は恐らくは就の誤なるべし或は既の誤ならむとも云
○收付廷尉、漢書百官表に廷尉掌刑辟とあり職員令に囚獄司正一人掌禁囚罪人徒役功程及配決事と見ゆ後世檢非違使の佐の唐名を廷尉と稱したれど此はそれにはあらざるべし付は北本中本及紀略に據て補ふ
○鞫問、字書に鞫は窮理罪人とあり
○急、北本忽に作る
○中瀨氷、中本中を名に作る
○非吾手投以祝手投、以より下の四字北本楓本に據て補ふ
○天災、原本天を大に作る楓本中本に據て改む
○祝人、神社の祝部なり
○神奴、神社に使役する賤民なり又神賤とも云鹿島神宮住吉神社等に之を附ぜらる
○更荒郡、讃良郡（今北河内郡に入る）なり
○鷄鳴野邑、今詳ならず
○紀男麻呂宿禰、崇峻紀即位前紀及四年紀に見ゆ
○哆唎、繼體紀六年（一四頁）に見ゆ

臣瓊缶等及其隨婦、于時父子夫婦不能相恤、鬪將問河邊臣曰、汝命與婦、孰與尤愛、答曰、何愛一女以取禍乎、如何不過命也、遂許爲妾、鬪將遂於露地、汁其婦女、婦女後還、河邊臣欲就談之、婦人甚以慚恨而不隨、曰、昔君輕賣妾身、今何面目以相遇、遂不肯言、是婦人者坂本臣女、曰甘美媛、同時所虜調吉士伊企儺、爲人勇烈、終不降服、新羅鬪將拔刀欲斬、逼而脫褌、追令以尻臀向日本、大號叫曰、日本將囓我膽腫、卽號叫曰、新羅王昭我膽腫、雖被苦逼、尙如前叫、由是見殺、其子舅子亦抱其父而死、伊企儺辭旨難奪、皆如此、由此特爲諸將帥所痛惜、其妻大葉子亦並見禽、愴然而歌曰、柯羅倶爾能、基能陪爾陁致底、於譜磨故幡、比例甫囉須母、耶魔等陛武岐底、或有和曰、柯羅倶爾能、基能陪爾陁陁志、於譜磨故幡、比禮甫羅須彌喩、那爾婆陛武岐底、八月、天皇遣大將軍大伴連狹手彦、領兵數萬伐于高麗、狹手彦乃用百濟計、打破高麗、其王踰墻而逃、狹手彦遂乘勝以入宮、盡得珍寶貨賂七織帳鐵

屋ニ還來、舊本云、鐵屋在ニ高麗西高樓上ニ織帳張ニ於高麗王內寢、以ニ七織帳ヲ奉ニ獻於天皇ニ、以ニ甲二領、金飾刀二口、銅鏤鐘三口、五色幡二竿、美女媛媛、名也、并其從女吾田子、送ニ於蘇我稻目宿禰大臣ニ、於是大臣遂納ニ二女ヲ以爲ニ妻、居ニ輕曲殿、鐵屋在ニ長安寺、是寺不知在ニ何國ニ、一本云、十一年、大伴狹手彥連共ニ百濟國ニ斬ニ却高麗王陽香於比津留都ニ、冬十一月、新羅遣ニ使、獻ニ并貢調賦ニ、使人悉知ニ國家憤ニ、新羅滅ニ任那ニ、不敢請ニ罷、恐致ニ刑戮ニ、不歸ニ本土ニ、例同ニ百姓ニ、今攝津國三嶋郡埴廬新羅人之先祖也、

○河邊臣、記に蘇我石河宿禰者川邊臣之祖也とあり錄有京皇別に河邊朝臣（天武紀十三年朝臣を賜ふ）武內宿禰四世孫宗我宿禰之後也と見ゆ　○居曾山、詳ならず　○鷹集部首、錄大和未定雜姓に鷹集造天津彥根命之後と見ゆれば或はその同族か　○印書、釋名に印信也所ニ以封ニ物爲ニ信驗ニ也とあり　○尋屬敗亡、新羅大兵を起して至りしも程なく敗亡したるを云　○夫勝不忘敗云々、以下務崇ニ斯令ニ、までは吳志吳主傳黃初二年八月の下令の文に據れり原本必を心に作る北本楓本中本に據て改む　○不可以已、可の字は北本中本に據て補ふ　○空爾、原本爾を示に作る北本中本に據て改む　○鈎戟、漢書陳勝傳贊の注に戟及勾曲者也と云　○城洫、洫は字書に城池也とあり　○釪、集解姦に作る　○坂本臣、安康紀元年（卷上二五六頁）に見ゆ　○調吉士、繼體紀二十四年（二六頁）に見ゆ　○號叫、原本叫の下叫咷也の三字を注す攙入なること明なれば削る　○臆雁、字書に臆は臀也尻也雁は尻骨也又臀謂ニ之雁ニとあり　○舅子、子の名なり　○抱、ムダカヘテはムダキなり萬葉にもイダキをムダキと云り　○柯羅俱爾能云々、一首の意は聞えたるが如し比例甫囉須母は領巾振るなり領巾は抄裝束部にたるが如し、二首共に愛國憂憤の情語句の上に歷々たり　○大伴連狹手彥、宣化紀二年（三七頁）に見ゆ　○其王、高麗平原王四年　○貺、貨の異體なるべし　○七織帳、七綵を織出せし帳なるべし　○鐵屋、集解に按今寺中所ニ在置ニ舍利等ニ小寶塔之類とあり　○金飾刀、金を以て裝飾せる刀なり　○銅鏤鐘、原本鐘を鍾に作る北本及釋紀に據て改む鏤は字書に彫刻也とあり銅の彫刻せる鐘を云　○（注）媛名也、集解に私記攙入として削る　○輕曲殿、大和國高市郡懿德紀二年（卷上一〇四頁）に見ゆ　○（注）長安寺、扶桑略記に長安寺在ニ近江國栗太郡ニ多他郎寺是也と云通證に百濟大寺謂ニ之大官大寺ニ名大安寺在ニ高市郡ニ疑長安寺亦此也とあり　○十一年、集解には十の上に二の字を脫すと云　○高麗王陽香、二十一年は高麗平原王陽成二年に當る陽成を陽香に云しか　○比津留都、詳ならず　○埴廬、抄に島上郡土室（ハムロ）鄕あり是なるべしと云（今三島郡阿武野）原本廬を盧に作る北本中本に據て改む

【廿六年】畝原、未詳　○奈羅、抄に久世郡那羅鄕あり（今綴喜郡都々城

（乙酉）廿六年夏五月、高麗人頭霧唎耶陛等投ニ化於筑紫ニ、置ニ山背國ニ、今畝原、奈

村）
○山村、錄山城皇別曰佐の注に山代國相樂郡山村とあれど今詳ならず
【廿八年】郡國、信友云郡疑くは諸の誤なるべし
【卅年】田部、景行紀五十七年（卷上一六三頁）に見ゆ
○年甫十餘、戸令に男女十六以下爲小二十以下爲中男二十一爲丁とあり此御代の頃にも之に類せし規定ありしなるべし
○脫籍免課、戸籍を脫して課役を免かるゝを云
○白猪田部、白猪屯倉は十六年紀に見ゆ
○成田戸、田部の戸籍を成就せるを云
○白猪史、續紀養老四年改二白猪史氏一賜二葛井連姓一と見ゆ
○爲瑞子之副、十七年紀に見ゆ北本副の下也の字あり
【廿一年】蘇我大臣稻目宿禰薨、宣化元年大臣となり此年まで三十五年、一代要記に年六十五とあり
○泊瀨柴籬宮、大和國城上郡なるも宮址は未詳
○江渟臣、國造本紀に江

羅、山村、高麗人之先祖也、

（丁亥）廿八年、郡國大水、飢、或人相食、轉傍郡、穀以相救、

（己丑）卅年春正月辛卯朔、詔曰、量置田部、其來尙矣、年甫十餘、脫籍免課者衆、宜遣膽津（膽津者、王辰爾之甥也）撿定白猪田部丁籍、夏四月、膽津撿閱白猪田部丁者、依詔、定籍、果成田戸、天皇嘉膽津定籍之功、賜姓爲白猪史、尋拜田令、爲瑞子之副（瑞子見上）

（庚寅）卅一年春三月甲申朔、蘇我大臣稻目宿禰薨、夏四月甲申朔乙酉、幸泊瀨柴籬宮、越人江渟臣裙代詣京奏曰、高麗使人辛苦風浪、迷失浦津、任水漂流、忽到著岸、郡司隱匿、故臣顯奏、詔曰、朕承帝業若干年、高麗迷路始到越岸、雖苦漂溺、尙全性命、豈非徽猷廣被、至德巍巍、仁化傍通、洪恩蕩々者哉、有司宜於山城國相樂郡起館、淨治、厚相資養、是月、乘輿至自泊瀨柴籬宮、遣東漢氏直糠兒、葛城直難波、迎召高麗使人、五月、遣膳臣傾子於越（傾子、此云阿陁部古）饗高麗使、大使審知膳臣是皇華使、

乃謂道君曰、汝非天皇果如我疑、汝既伏拜膳臣、倍復足知百姓、而前詐余取調入己、宜速還之、莫煩飾語、膳臣聞之、使人探索其調、具爲與之、還京復命、秋七月壬子朔、高麗使到于近江、是月、遣許勢臣猿與吉士赤鳩、發自難波津、控引船於狹狹波山、而裝飾船乃往迎於近江北山、遂引入山背高槻館、則遣東漢坂上直子麻呂、錦部首大石以爲守護、更饗高麗使者於相樂館、

沼國造柴垣朝御世蘇我臣同祖武内宿禰四世孫志波勝足尼定賜國造とあり三代格に弘仁十四年割越前國江沼加賀二郡爲加賀國と見ゆ江沼は越國分國の後越前に屬せしが嵯峨天皇弘仁年中加賀國を建てられしかば加賀に屬するに至れり　○徽猷、毛詩小雅角弓の傳に徽美也箋に猷道也とあり　○巍々、原本巍を魏に作る中本に據て改む字書に巍々は高大之貌とあり　○蕩々、字書に廣大也とあり　○東漢氏直、雄略紀七年(卷上二七〇頁)に見ゆ氏字は衍か　○葛城直、二十二年紀に出づ　○膳臣、孝元紀七年(卷上一〇九頁)に見ゆ　○(注)軻陁部古、原本陁を施に作る北本に據て改む　○道君、錄右京皇別に道公大彦命孫彦屋主田心命之後とあり釋紀道君の上に越郡司の三字あり是なる似たり　○吉士、もと新羅國の官名より出で、藩國に仕奉れる人の稱に用られたるなり繼體紀に吉士老など見ゆ　○探索、原本探を採に作る北本中本に據て改む　○許勢臣、繼體紀元年(一〇頁)に見ゆ　○控引船、難波にて船をよそほひ淀川より宇治川を控き上り勢多までの間に難所あれば其處々々に船を控きて狹々波山まで至りしなるべし　○狹々波山、近江國志賀郡　○近江北山、通證に北山與越前接界也とあり　○高槻館、釋紀に私記曰案假名日本紀作高麗裴乃多知とあれば高の下麗の字を脫したるか山城志に相樂郡高槻館古蹟在上狛村と見ゆ　○東漢坂上直、東漢は大和國の漢人なり河内なる西漢に對して云錄右京諸蕃に坂上大宿禰出自後漢靈帝男延王とあり　○錦部首、仁德紀四十一年(卷上二二八頁)に見ゆ　○相樂館、卽ち高槻館なり

【卅二年】坂田君、繼體紀元年(一三頁)に見ゆ　○驛馬召到、以下屬汝までは魏志明帝紀景初三年の文に據れり　○臥内、漢書金日磾傳注に臥内天子臥處とあり　○打新羅、集解打を伐に

卅二年春三月戊申朔壬子、遣坂田耳子郎君、使於新羅、問任那滅由、是月、高麗獻物并表未得上奏、經歷數旬、占待良日、夏四月戊寅朔壬辰、天皇寢疾不豫、皇太子向外不在、驛馬召到、引入臥内、執其手詔曰、朕

(辛卯)

作る
○造夫婦、文選東都賦に天地革命四海之内更造夫婦とあり任那と夫婦の縁ふが如く相和するを云中本造夫婦をヤツコヲトメと訓み楓本並に原本も造をヤツコと訓めど當らず
○是月、集解月を日に作る
○時年若干、大日本史に本書享年闕一代要記皇年代略記並曰六十二皇代紀曰六十三神皇正統記曰八十一未知孰是とあり
○殯、神代紀上四神出生章第九一書(卷上一七頁)に見ゆる殯宮は喪屋にて御陵を作畢るまで御柩を納め奉りて仕奉る所を云
○河内古市、古市は河内國古市郡古市郷なり山陵は高市郡檜隈に造られしに磯城島金刺宮より遠く距れる河内國に殯宮を作りて仕奉りしは故あることなるべし
○未叱子失消、原本子を號に作る楓本中本の傍注及傍訓に據て改む標注通釋亦同じく子に改む
○檜隈坂合陵、諸陵式に大和國高市郡、大和志に

疾甚、以後事屬汝、汝須打新羅、封建任那、更造夫婦、惟如舊日、死無恨之、是月、天皇遂崩于内寢、時年若干、五月、殯于河内古市、秋八月丙子朔、新羅遣弔使未叱子失消等奉哀於殯、是月、未叱子失消等罷、九月、葬于檜隈坂合陵、

在平田村俗呼梅山陵
墓要覽に高市郡阪合村大
字平田と見ゆ

日本書紀卷第十九

【即位前紀】淳中倉太珠敷天皇、法皇帝説に怒那久良布刀多麻斯支天皇法隆寺曼陀羅銘文に薩奈久羅乃布等多麻斯支乃彌己等と乃の字を加へたり

○(注)石姫皇后云々、集解に此十四字を私記の攙入とす

○文史、文書史籍なり

○立爲皇太子、欽明紀には十五年立爲皇太子とあり

【元年】即天皇位、大日本史に皇年代略記云年三十五按本書享年缺故不書とあり

○皇后、皇后の上母字あるべし

○百濟大井、河内國錦部郡百濟郷あり河内志に同郡大井村あれば同村なるべし今南河内郡彼方村に屬す

日本書紀卷第廿

淳中倉太珠敷天皇　敏達天皇

淳中倉太珠敷天皇、天國排開廣庭天皇第二子也、母曰石姫皇后、石姫皇后、武小廣國押盾天皇女也、天皇不信佛法、而愛文史、廿九年立爲皇太子、卅二年四月、天國排開廣庭天皇崩、

(壬辰)元年夏四月壬申朔甲戌、皇太子卽天皇位、尊皇后曰皇太后、是月、宮于百濟大井、以物部弓削守屋大連爲大連、如故、以蘇我馬子宿禰爲大臣、五月壬寅朔、天皇問皇子與大臣曰、高麗使人今何在、大臣奉對曰、在於相樂館、天皇聞之、傷惻極甚、愀然而歎曰、悲哉此使人等、名既奏聞於先考天皇矣、乃遣群臣相樂館、撿錄所獻調物、令送京師、丙辰、天皇執高麗表疏、授於大臣、召聚諸史、令讀解之、是時諸史於三日內皆不

○物部弓削守屋大連、守屋は舊事紀に饒速日命十三世孫尾輿連公の子とあり公卿補任亦同じ
○蘇我馬子宿禰、稻目の子なり
○問皇子與大臣、皇子は彦人皇子竹田皇子を指すかと云(春海說)大連なきは脫せるか
○愀然、集韻に容色變也とあり
○王辰爾、欽明紀十四年(六二頁)に見ゆ
○不愛於學、學をマナブルと云るは後の歌集なから千載集にうつりゆく影だにたしと思ふ身の學ぶる道に年の暮ぬると見ゆ
○近侍、前本近を進に作る
○東西諸史、學令に大學生取五位以上子孫及東西史部子爲之義解に謂居在皇城左右故曰東西也前代以來奕世繼業或爲史官或爲博士因以賜姓總謂之史也とあり皇城の左は大和右は河内にて大和は東河内は西に當れば東をヤマト西をカウチと云東史は漢人阿知使主の後西史は韓人王

能讀、爰有船史祖王辰爾、能奉讀釋、由是天皇與大臣俱爲讚美曰、勤乎辰爾、懿哉辰爾、汝若不愛於學、誰能讀解、宜從今始近侍殿中、既而詔東西諸史曰、汝等所習之業何故不就、汝等雖衆、不及辰爾、又高麗上表疏書于烏羽、字隨羽黑、既無識者、辰爾乃蒸羽於飯氣、以帛印羽、悉寫其字、朝庭悉異之、六月、高麗大使謂副使等曰、磯城嶋天皇時、汝等違吾所議、被欺於他、妄分國調、輙與微者、豈非汝等過歟、其若我國王聞、必誅汝等、副使等自相謂之曰、若吾等至國時、大使顯導吾過、是不祥事也、思欲偸殺而斷其口、是夕謀泄、大使知之、裝束衣帶、獨自潛行、立館中庭、不知所計、時有賊一人、以杖出來打大使頭、而退、次有賊一人、直向大使、打頭與手而退、大使尙嘿然立地而拭面血、更有賊一人、執刀急來刺大使腹、而退、是時、大使恐伏地拜、後有賊一人、既殺而去、明旦領客東漢坂上直子麻呂等推問其由、副使等乃作矯詐曰、天皇賜妻於大使、大使違勅不受、無禮茲甚、是以臣等爲天皇殺焉、有司以禮收

仁が裔なり
○書于烏羽字隨羽黑、吳語に烏羽之矰と見え烏羽の如き矰もて矢をよそひたるを云、こゝも眞の烏の羽に書したるにはあらで烏羽もて織れるものに書したるなり、高麗國がかゝる物に書きたる表を上りしは鐵盾鐵的を奉りて我武備を試みし故智を襲ひて文事の狀を試みむとせしなり字をナと訓るは允恭紀に欲レ知二姓字一（卷上二四八頁）とあり今カナといへるも假字（カリナ）の略にて之に對して漢字をば眞字（マナ）といへり　○飯氣、飯を炊ぐ時に立上る氣なり　○大使、オホツカヒはソヒツカヒに對する稱オホキミはオホオミの誤なるべし　○磯城島天皇時云々、前紀三十一年に見ゆ　○鞦與徽者、郡司道君の輩に與ふるを云　○其若、前本其の字なし　○自相謂之、副使以下なり　○以禮收葬、大使の格式もて葬りたるなり　○是年也、也は前本に據て補ふ

葬、秋七月、高麗使人罷歸、是年也太歲壬辰、

【二年】

○吉備海部直、雄略紀七年（卷上二六九頁）に見ゆ
○相議、原本議を識に作る前本北本中本に據て改む
○大嶋首、詳ならず
○丘首、是も詳ならず
○大有遮、活本有を集に作る
○駈使於官、沒して官奴とし駈使するを云

【三年】

二年夏五月丙寅朔戊辰、高麗使人泊于越海之岸、破船溺死者衆、朝庭猜頻迷路、不饗放還、仍勅吉備海部直難波送高麗使、秋七月乙丑朔、於越海岸、難波與高麗使等相議以送使難波船人大嶋首磐日狹、丘首間狹、令乘高麗使船、以高麗一人令乘送使船、如此互乘以備奸志、俱時發船至數里許、送使難波乃恐畏波浪、執高麗二人擲入於海、八月甲午朔丁未、送使難波還來復命曰、海裏鯨魚大有遮、齧船與檝櫂、難波等恐魚呑船、不得入海、天皇聞之、識其謾語、駈使於官、不放還國、

三年夏五月庚申朔甲子、高麗使人泊于越海之岸、秋七月己未朔戊寅、高麗使人入京奏曰、臣等去年相逐送使罷歸於國、臣等先至臣蕃、臣

○磐日狹、原本狹の字を脱す上文に據て補ふ下同じ
○請問、原本問を聞に作る前本北本に據て改む
○臣使、通證に臣は送の誤なるべしと云
○白猪屯倉、欽明紀十六年(七〇頁)に見ゆ
○膽津、原本膽を瞻に作る北本中本に據て改む
○王辰爾、原本王を壬に作る中本に據て改む
○津史、錄右京諸蕃に津宿禰菅野朝臣同祖鹽君男麻侶君之後也又續紀廿一に津史秋主等三十四人言船、葛井、津、本是一祖別爲三氏其二氏蒙連姓訖唯秋主等未蒙改姓請改史字於是賜姓津連云々

【四年】息長眞手王、繼體紀元年(一二一頁)に見ゆ
○押坂彦人大兄皇子、記に忍坂日子人太子とあり紀に立太子のこと見えず用明紀二年に太子彦人皇子と記せるは舒明天皇の大御父なれば追尊せられ

蕃卽准使人之禮、禮饗大嶋首磐日狹等、高麗國王別以厚禮禮之、既而送使之船至今未到、故更謹遣使人并磐日狹等、請問臣使不來之意、天皇聞卽數難波罪曰、欺誑朝庭、一也、溺殺隣使、二也、以茲大罪不合放還、以斷其罪、冬十月戊子朔丙申、遣蘇我馬子大臣於吉備國、增益白猪屯倉與田部、卽以田部名籍授于白猪史膽津、戊戌、詔船史王辰爾弟牛、賜姓爲津史、十一月、新羅遣使進調、

(乙未)四年春正月丙辰朔甲子、立息長眞手王女廣姬爲皇后、是生一男二女、其一曰押坂彦人大兄皇子、更名麻呂古皇子其二曰逆登皇女、其三曰菟道磯津貝皇女、是月、立一夫人、春日臣仲君女、曰老女子夫人、更名樂君娘也生三男一女、其一曰難波皇子、其二曰春日皇子、其三曰桑田皇女、其四曰大派皇子、次采女伊勢大鹿首小熊女、曰菟名子夫人、生太姬皇女、更名櫻井皇女與糠手姬皇女、更名田村皇女二月丙戌朔壬辰、馬子宿禰大臣還于京師、復命屯倉之事、三月乙卯朔乙丑、百濟遣使進調多益恒歲、天皇以新羅未建任那、

しなるべし諸陵式に成相墓押坂彦人大兄皇子在大和國廣瀬郡とあり
○逆登皇女、記に坂騰王とあり
○菟道磯津貝皇女、記に宇遲王とあり記傳に此皇女と豐御食炊屋姫尊の生み給へる菟道貝鮹皇女と傳の紛れたるなるべしと云
○春日臣仲君、記に春日臣中若子に作る

詔皇子與大臣曰、莫懶懈於任那之事、夏四月乙酉朔庚寅、遣吉士金子使於新羅、吉士木蓮子使於任那、吉士譯語彦使於百濟、六月、新羅遣使進調、多益常例、并進多々羅、須奈羅、和陀、發鬼四邑之調、是歲、命卜者占海部王家地與絲井王家地、卜便襲吉、遂營宮於譯語田、是謂幸玉宮、冬十一月、皇后廣姫薨、

○老女子夫人、原本子を君に作る諸本及記に據て改む　○(注)樂君娘、原本娘の下也の字あり前本に據て削る記傳に此君も訓コとあれば子の誤なるかと云　○難波皇子、記に難波王とあり錄左京皇別に守山眞人、路眞人、飛多眞人、英多眞人、大宅眞人、橘朝臣、右京皇別に甘南眞人等皆此皇子の後と見ゆ　○春日皇子、記には桑田王次に春日王と次第違へり　○大派皇子、記に大俣王　○伊勢大鹿首、錄右京未定雜姓に津速魂命三世孫天兒屋根命之後也とあり　○菟名子夫人、記には大鹿首之女小熊子郎女　○太姫皇女、記に布斗比賣命　○糠手姫皇女、記に寶王亦名糠手比賣王　○田村皇女、記には御子の序次に見えず日子人太子の妃の處に庶妹田村王とあり舒明天皇の御母なり　○丙戌朔壬辰、原本壬辰朔とあるは誤、集解に據て改む壬辰は七日　○三月乙卯朔、此五字集解に據て補ふ　○多々羅云々、繼體紀に和陀發鬼を知多費智に推古紀に委陀弗知鬼に作る四邑とも本任那の地なり　○卜便襲吉、原本便を使に作る前本北本中本に據て改む襲は字書に因也禮記曲禮に卜筮不相襲とあり　○譯語田、式に大和國城上郡他田坐天照御魂神社とある地是なり大和志に城上郡在太田村(今磯城郡纒向村大字太田)とあり　○廣姫薨、諸陵式に息長墓、舒明天皇之祖母名曰廣姫在近江國坂田郡(今同郡大原村大字居田)とあり

【五年】
○菟道貝鮹皇女、上の磯津貝皇女の菟道と混へたるなるべしと記傳に云注の更名も亦同じ
○是嫁於東宮聖德、東宮は令義解に謂太子所居とあり聖德は倒に據れば厩戸皇子とあるべきなり
○竹田皇子、記に竹田王

五年(丙申)春三月己卯朔戊子、有司請立皇后、詔立豐御食炊屋姫尊(推古)爲皇后、是生二男五女、其一曰菟道貝鮹皇女、更名菟道磯津貝皇女也、是嫁於東宮聖德、其二曰竹田皇子、其三曰小墾田皇女、是嫁於彦人大兄皇子、其四曰鸕鷀守皇女、更名輕守皇女、其五曰尾張皇子、其六曰田眼皇女、是嫁於息長足日廣

額天皇、其七日櫻井弓張皇女、

六年春二月甲辰朔、詔置日祀部、私部、夏五月癸酉朔丁丑、遣大別王與小黑吉士、宰於百濟國、主人奉命爲使三韓、自稱爲宰、言宰於韓、蓋古之典乎、如今言使也、餘皆倣此、大別王未詳所出也、冬十一月庚午朔、百濟國王付還使大別王等、獻經論若干卷、并律師、禪師、比丘尼、呪禁師、造佛工、造寺工六人、遂安置難波大別王等寺、

亦名小貝王
○小墾田皇女、記に小治田王
○鵠守皇女、記に宇毛理王
○尾張皇子、記に小治王
○田眼皇女、記に多米王
○櫻井弓張皇女、記に櫻井玄王とあり

【六年】
○日祀部、原本に日祀をヒノとよめるは誤なるべし日祀と云こと詳らかなれど、日奉連とあり日奉に同じく、日々供物を安きて神祭りする部かよく考ふべし　○私部、后部なり后に私の字を當てたるは、漢書張敞傳に大官私官と見え注に私官皇后之官とあるを取れり、皇后廣姬の部曲として設けしなるべし原本の訓キサイチとあるは後世に私市と云る氏のあるより混ひたるならむ丹波國何鹽郡、因幡國八上郡其他に私部郷あり　○大別王、所出詳ならず　○小黑吉士、詳ならず　○律師、涅槃經に如是能知佛法所作善能解說是名禪師とあり善く戒律を解する者を云僧官の律師とは異なれり　○禪師、三教指歸に修心靜慮曰禪師とあり禪定を修する師を云　○比丘尼、倶舍光記に苾芻唐言乞士舊云比丘訛也尼女聲また慧琳音義に苾芻尼出家女之總名とあり女子の出家して具足戒を受けし者の通稱なり　○呪禁師、印明を結誦して加持祈禱を作す法師を云ふ呪は陀羅尼を云　○大別王等寺、等の字は北本楓本中本に據て補ふ紀略には等の字なし

【七年】池邊皇子、詳ならず

七年春三月戊辰朔壬申、以菟道皇女侍伊勢祠、卽奸池邊皇子、事顯而解、

八年冬十月、新羅遣枳叱政奈末進調、并送佛像、

九年夏六月、新羅遣安刀奈末、失消奈末進調、不納以還之、

十年春潤二月、蝦夷數千寇於邊境、由是召其魁帥綾糟等、毛人也大詔曰、

【八年】枳叱政奈末、奈末は新羅の冠名

【九年】不納以還之、前年に受けて今年却けたるは由あるべし

【十年】潤、楓本閏に作る

○邊境、陸奥國を指す
○(注)大毛人、毛人に數種あり大毛人は其中の一種なり此毛人は今の北海道なる蝦夷にはあらで陸奥出羽に住めるものなるべし
○爾、神武紀戊午年(卷上八六頁)に爾(オレ)自居之、注に爾此云飫例とあり他を卑めて云るなり
○慢然、字書に慢驚也とあり原本慢に誤る集解に從て改む
○泊瀨中流、泊瀨川は大和國葛城郡にあり泊瀨川の中流に下るは禊の爲なり
○面三諸岳、三輪大神を遙拜するなり
○(注)八十綿連、原本連一字衍れり北本楓イ本に據て削る
○天闕、字書に王者之居也とあり

【十一年】十一年云々、新羅の進調を再度退けられしなるべし

【十二年】
○神謀、先考天皇の御謀を云
○火葦北國造、葦北は肥後國葦北郡なり國造本紀に章分國造繼向日代朝吉

惟爾蝦夷者、大足彦天皇之世合殺者斬、應原者赦、今朕遵彼前例欲誅元惡、於是綾糟等懼然恐懼、乃下泊瀨中流、面三諸岳漱水而盟曰、臣等蝦夷、自今以後子々孫々、古語云生兒八十綿連用清明心事奉天闕、臣等若違盟者、天地諸神及天皇靈、絶滅臣種矣、

十一年(壬寅)冬十月、新羅遣安刀奈末、失消奈末進調、不納以還之、

十二年(癸卯)秋七月丁酉朔、詔曰、屬我先考天皇之世、新羅滅內官家之國、天國排開廣庭天皇廿三年、任那爲新羅所滅、故云新羅滅我內官家也、先考天皇謀復任那、不果而崩、不成其志、是以朕當奉助神謀、復興任那、今在百濟火葦北國造阿利斯登子、達率日羅賢而有勇、故朕欲與其人相計、乃遣紀國造押勝與吉備海部直羽嶋、喚於百濟、冬十月、紀國造押勝等還自百濟、復命於朝曰、百濟國主奉惜日羅不肯聽上、是歲復遣吉備海部直羽嶋、召日羅於百濟、羽嶋既之百濟、欲先私見日羅、獨自向家門底、俄而有家裏來韓婦、用韓語言、以汝之根入我根內、卽入家去、羽嶋便覺其意隨後而入、於是日羅迎來、把

備彦命兒三井根命定賜國造とあり
○達率日羅、達率は二品の位なり
○紀國造、國造本紀に紀伊國造橿原朝神皇產靈命五世孫道根命定賜國造とあり
○吉備海部直、雄略紀七年(卷上二六九頁)に見ゆ
○百濟國主、北本主を王と訓み楓本に爾補と訓り
○奉惜、天皇に白し奉る故に奉惜と書けり
○遣吉備海部直羽嶋、原本直字を脫す上文に據て補ふ
○門底、底は字書に下也とあり
○以汝之根入我根內、韓語を國語に譯せしなれば詳ならねど根とは身體の事にて家の內に入るべしとの意なるべし羽嶋に密事を語るに人の聽くを恐れて謎の如くに韓婦に言はしめしなり
○百濟國主、北本主を王に作る
○恩率德爾、余怒、哥奴知、通證に恩率三品此爲正使德爾余怒哥奴知三人名隸屬日羅恩率者

手使坐於座、密告之曰、僕竊聞之、百濟國主奉疑天朝、奉遣臣後、留而弗還、所以奉惜、不肯奉進、宣宣勅時、現嚴猛色、催急召焉、羽嶋乃依其計而召日羅、於是百濟國主怖畏天朝、不敢違勅、奉遣以日羅、恩率德爾、余怒、哥奴知、參官、梅師德率次干德、水手等若干人、日羅等行到吉備兒嶋屯倉、朝庭遣大伴糠手子連而慰勞焉、復遣大夫等於難波館、使訪日羅、是時、日羅被甲乘馬、到門底下、乃進廳前、進退跪拜歎恨而曰、於檜隈宮御寓天皇之世、我君大伴金村大連奉爲國家使於海表火葦北國造刑部靫部阿利斯登之子、臣達率日羅、聞天皇召恐畏來朝、乃解其甲、奉於天皇、乃營館於阿斗桑市、使住日羅、供給隨欲、復遣阿倍目臣、物部贄子連、大伴糠手子連、而問國政於日羅、日羅對言、天皇所以治天下政、要須護養黎民、何遽興兵、翻將失滅、故今合議者、仕奉朝列臣連二造、二造者、國造伴造也下及百姓、悉皆饒富、令無所乏、如此三年、足食足兵、以悅使民、不懼水火、同恤國難、然後多造船舶、每津列置、使觀客人、令

故先舉レ之と云
○參官、原本官を宮に作る北本楓本中本並に原本の訓に據て改む通證に參官猶二參軍一謂二副使一也と云
○梅師、集解に水手の上に移すべしと云
○德率次干德、德率は百濟四品の位
○兒嶋屯倉、備前國兒嶋郡
○難波館、難波にある客館
○門底下、通證に舒明紀作二門下一卽闕下といへり
○鄰前、抄居處部に鄰日本紀私記云萬都利古度々乃とあり後世の政所なり
○歎恨、原本歎を難に作る前本北本中本に據て改む
○御寓、原本寓を寓に作る北本楓本中本に據て改む
○我君大伴金村大連、下文に日羅自ら申せる言に葦北國造刑部靱部阿利斯登之子とあり祖先より代々大伴氏に靱部として仕へし故に尊びて我君と云しなるべし
○刑部靱部、通證に國造兼二帶刑部靱部一者也と云

生恐懼爾乃以能使使於百濟召其國王若不來者召其太佐平王子等來卽自然心生欽伏後應問罪又奏言百濟人謀言有船三百欲請筑紫若其實請宜陽賜予然則百濟欲新造國必先以女人小子載船而至國家望於此時壹伎對馬多置伏兵候至而殺莫翻被詐每於要害之所堅築壘塞矣於是恩率參官臨罷國時舊本以恩率爲一人以參官爲一人也竊語德爾等言計吾過筑紫許汝等偸殺日羅者吾具白王當賜高爵身及妻子垂榮於後德爾余奴皆聽許焉參官等遂發途於血鹿於是日羅自桑市村遷難波館德爾等晝夜相計將欲殺時日羅身光有如火焰由是德爾等恐而不殺遂於十二月晦候失光殺日羅更蘇生曰此是我駈使奴等所爲非新羅也言畢而死是時有新羅使故云爾也天皇詔贄子大連糠手子連令收葬於小郡西畔丘前以其妻子水手等居于石川於是大伴糠手子連議曰聚居一處恐生其變乃以妻子居于石川百濟村水手等居于石川大伴村收縛德爾等置於下百濟河田村遣數大夫推

問其事、德爾等伏罪言、信、是恩率參官教使爲也、僕等爲人之下不敢違矣、由是下獄復命於朝庭、乃遣使於葦北、悉召日羅眷屬、賜德爾等、任情決罪、是時葦北君等受而皆殺、投彌賣嶋、彌賣島、蓋姫島也以日羅移葬於葦北、於後海畔者言、恩率之船、被風沒海、參官之船、漂泊津嶋、乃始得歸、

○解其甲云々、異國の製にて珍らしければ天皇に奉りしなるべし　○阿斗桑市、阿斗は攝津國にも河内國にも亦大和國城下郡にもあれど此時の狀より見れば河内國澁川郡跡部（今中河内郡下太子）にて物部守屋大連の領地なる別業所在地の阿斗なるべし攝津の阿斗は所在詳ならず　○物部贄子連、舊事紀に物部石上贄古連公守屋大連之弟とあり　○國政、三韓の政治を諮はせ給ふなり　○合議者、原本合を令に作る前本北本に據て改む　○悉皆饒富云々、此語に由て當時内政振はず武備足らず人民疲勞し力を外に用ふるの秋にあらざりしことを知るべし　○以悅使民、此語孝德紀にも見ゆ　○能使、通證に謂「不辱命之使臣」とあり　○太佐平、佐平は百濟の官十六等中の第一に當り太佐平は同官五人中の執政の臣を云　○壬子、釋紀秘訓にセシムとありオレムはセシムの誤か神功紀四十九年にも見ゆ　○謀言、百濟人等我國を窺はむ謀をめぐらすを云　○欲請筑紫、通證に言百濟三百船人將「投化日本」故欲「請筑紫地」以居住也と云り水本には請を詣に作る　○宜陽賜予、通證に言佯聽以賜「與居宅之地」也と云　○欲新造國、百濟人筑紫に移住し新に一國を造立せむと欲するなり　○壹伎、原本伎を岐に作る前本北本楓本に據て改む　○候至而殺云々、百濟人の至るを窺ひて殺せなり通證に今按日羅議不「及於新羅」而反毒「百濟」如「此甚何耶蓋當「此時」百濟有「異心」故不「肯」建「任那」日羅知「之心」忠告也と云り　○壘墓、天智紀即位前紀には壘の一字をソコと訓り抄天地部に塞（和名曾古）險要之處所「以隔「内外」也とあり　○（注）舊本云々、集解に私記攙入として削る　○計吾過筑紫許、德爾等の筑紫國を經過せる頃を見計らひて日羅を殺せとなり　○參官等遂發途、德爾等は遺り留まり參官のみ歸國せしなり　○血鹿、肥前國松浦郡値嘉鄕（今の五島列島）これなり古へは韓國の往來に皆此島に寄りしなり　○贄子大連、上文に大の字なし此人大連に任ぜられしこと本紀に見えず　○小郡、攝津志に西成郡上古難波小郡また衛日羅墓在「大坂天滿同心町」とあり　○石川、河内國石川郡に石川村あり今南河内郡石川村　○百濟村、河内國錦部郡百濟鄕あり石川錦部は境を接すれば上古百濟村は石川郡に屬せしなるべし今南河内郡彼方村の内ならむ　○大伴村、河内志石川郡に南北大友の二村あり今南河内郡大伴村大字に北大伴見ゆ　○河田村、原本河を阿に作る前本北本に據て改む同志に同郡畑村とあり今南河内郡川西村大字甲田あり是なり　○數大夫、公式令に司及中國以下五位稱「大夫」とあれどこゝはたゞ刑部の官人を指して云　○（注）姫島、安閑紀二年（三四頁）に媛嶋見ゆ　○以日羅、以の字は前本北本中本に據て補ふ　○葦北、通證に井深氏曰今葦北郡有「久多良木」舊名百濟來此葬「日羅」地也と云　○津嶋、對馬島なり

【十三年】難波吉士木蓮子、四年紀に出づ

十三年春二月癸巳朔庚子、遣「難波吉士木蓮子」使「於新羅」、遂之「任那」、

（甲辰）

秋九月、從百濟來鹿深臣（闕名字）有彌勒石像一軀、佐伯連（闕名字）有佛像一軀、是歲、蘇我馬子宿禰請其佛像二軀、乃遣鞍部村主司馬達等、池邊直氷田、使於四方訪覓修行者、於是唯於播磨國得僧還俗者、名高麗惠便、大臣乃以爲師、令度司馬達等女嶋、曰善信尼、年十一歲又度善信尼弟子二人、其一漢人夜菩之女豐女、名曰禪藏尼、其二錦織壺之女石女、名曰惠善尼、壺、此云都符、馬子獨依佛法、崇敬三尼、乃以三尼付氷田直與達等、令供衣食、經營佛殿於宅東方、安置彌勒石像、屈請三尼、大會設齋、此時達等得佛舍利於齋食上、卽以舍利獻於馬子宿禰、馬子宿禰試以舍利置鐵質中、振鐵鎚打、其質與鎚悉被摧壞、而舍利不可摧毀、又投舍利於水、舍利隨心所願、浮沈於水、由是馬子宿禰、池邊氷田、司馬達等、深信佛法、修行不懈、馬子宿禰亦於石川宅、脩治佛殿、佛法之初、自茲而作、

○鹿深臣、詳ならず　○彌勒、通證に魏書老釋志曰將來有彌勒佛繼釋迦而降世西域記曰梅唎邏耶、唐云慈氏、卽姓也舊曰彌勒訛也平氏太子傳曰彌勒石像今在右京之元興寺東金堂と云　○鞍部村主、河內志に鞍作故居河內國澁川郡鞍作村百濟工人多須那歸化賜姓鞍作其子都理善造佛像世稱倉佛師太子慨戶寵而居此とあり　○司馬達等、元亨釋書に司馬達等南梁人繼體天皇十六年來朝とあれば鞍部村主と氏尸を賜はりし後も舊の氏名を稱したるなるべし　○池邊直氷田、錄和泉諸蕃に池田直坂上大宿禰同祖阿智王之後也とあり氷田は原本水田に作る北本中本に據て改む　○使、原本便に作る北本楓本中本に據て改む　○還俗、佛道に入りしものが又元の俗人に還るをいふ　○高麗惠便、元亨釋書に見ゆ　○善信尼、尼は釋紀に私記曰阿闍者梵語也、飜譯名義集比丘尼の條に尼者女也とあり是我國に於ける尼の始なり　○漢人夜菩、漢人は姓夜菩は名　○錦織、錄右京諸蕃に錦織村主韓國人波努志之後也とあり山城及河內諸蕃にも同姓見ゆ　○（注）都符、原本都を部に作る前本北本中本に據て改む　○獨依佛法、原本獨を猶に作る前本北本に據て改む　○屈請、敬意を表して招請するを云、原本にイナセとあるはイマセの誤なりイマセは令坐の意　○設齋、原本齋を齊に作る中本に據て改む齋は身口意の三をつゝしむを云、設齋は齋會を設くるなり　○佛舍利、名義集に舍利此云骨身又云靈骨とあり　○齋食、イミヒのイミは文字の如く清淨にしてつゝしむを云ヒは飯なり傳曆に此齋食の上に舍

利を得たるは十四年の事とす　○卽、北本中本及紀略に據て補ふ　○鐵寶、寶は金どこなり鐵を打鍛へる時の聲なり云　○深信、原本深を保に作る北本に據て改む　○石川宅、大和志に高市郡石川村（今畝傍町大字石川）勝鬘舍今有本明寺及石浮屠高丈許云々とあり

【十四年】塔、釋氏要覽に梵語塔婆此謂高顯今略稱塔也とあり　○大野丘、大和志に廣大野丘塔在高市郡和田村礎石猶存とあり此事は平氏傳綜勘文抄南遊行靈抄等にも詳しく見ゆ　○前所獲、前の字は前本北本に據て補ふ　○柱頭、塔の心柱の下也　○佛神、釋紀に私記曰神字不讀今按西域記謂佛爲佛神とありナカコは中子の意　○父神、父の時に祭れる佛なり云　○石像、上に鹿深臣が持歸りたるものなり　○中臣勝海大夫、系詳ならず集解には蓋鎌子之子と云り　○陛下、樞本中本階下に作る　○難波掘江、欽明紀十三年（六二頁）に見ゆ豐浦寺にありといへど攝津の難波なるべし北本掘を堀に作る　○雨衣、雨具なり　○佐伯造、仁賢紀五年

（乙巳）十四年春二月戊子朔壬寅、蘇我大臣馬子宿禰、起塔於大野丘北、大會設齋、卽以達等前所獲舍利藏塔柱頭、辛亥、蘇我大臣患疾、問於卜者、卜者對言、祟於父時所祭佛神之心也、大臣卽遣子弟奏其占狀、詔曰、宜依卜者之言、祭祠父神、大臣奉詔、禮拜石像、乞延壽命、是時國行疫疾、民死者衆、三月丁巳朔、物部弓削守屋大連、與中臣勝海大夫奏曰、何故不肯用臣言、自考天皇及於陛下、疫疾流行、國民可絕、豈非專由蘇我臣之興行佛法歟、詔曰、灼然、宜斷佛法、丙戌、物部弓削守屋大連自詣於寺、踞坐胡床、斫倒其塔、縱火燔之、幷燒佛像與佛殿、既而取所燒餘佛像、令棄難波堀江、是日無雲風雨、大連被雨衣、訶責馬子宿禰與從行法侶、令牛毀辱之心、乃遣佐伯造御室、更名於閻礎也喚馬子宿禰所供善信等尼、由是馬子宿禰不敢違命、惻愴啼泣、喚出尼等、付於御室、有司便奪尼等三衣、禁錮楚撻　海石榴市亭、天皇思建任那、差坂田耳

（卷上三〇五頁）に出づ御室は刑部の官人なるべし
○三衣、僧の著する三種の衣服卽ち三種の袈裟なり諸乘法數に僧伽梨上衣九條二十五條鬱多羅僧中衣七條安陀會下衣卽五條とあり
○楚撻、シリカタウチは尻方打なるべし楚は禮記學記の注に荊也朴撻犯禮者撻は字書に打擊也とあり
○海石榴市、武烈紀卽位前紀（一頁）に見ゆ
○亭、ウマヤタチは驛館なり亭は驛と同じ
○坂田耳子王、欽明紀三十二年坂田耳子郎君とあり王は君の誤なるべし
○卒患於瘡、原本卒を率に作る卽本北本中本に據て改む天皇と大臣と餓に瘡瘡に罹らせ給ひしなり
○其患瘡者云々、此時世の人未だ瘡瘡の名を知ず故に驚き恐れ遂に佛の祟と爲すに至れり
○三寶、佛寶法寶僧寶の三なり
○頂禮、卽度古代の最敬禮なり尊者の前に俯伏し頂を地に著けて其人の足下に拜するを云

子王爲使、屬此之時、天皇與大連卒患於瘡、故不果遣、詔橘豐日皇子曰、不可違背考天皇勅、可勤修乎任那之政也、又發瘡死者、充盈於國、其患瘡者言、身如被燒被打被摧、啼泣而死、老少竊相謂曰、是燒佛像之罪矣、夏六月、馬子宿禰奏曰、臣之疾病至今未愈、不蒙三寶之力、難可救治、於是詔馬子宿禰曰、汝可獨行佛法、宜斷餘人、乃以三尼還付馬子宿禰、馬子宿禰受而歡悅、嘆未曾有、頂禮三尼、新營精舍、迎入供養、或本云、物部弓削守屋大連、大三輪逆君、中臣磐余連、俱謀滅佛法、欲燒寺塔并棄佛像、馬子宿禰諍而不從、秋八月乙酉朔己亥、天皇病彌留、崩于大殿、是時、起殯宮於廣瀨、馬子宿禰大臣佩刀而誄、物部弓削守屋大連听然而咲曰、如中獵箭之雀鳥焉、次弓削守屋大連手脚搖震而誄、馬子宿禰大臣咲曰、可懸鈴矣、由是二臣微生怨恨、三輪君逆使隼人相距於殯庭、穴穗部皇子欲取天下、發憤稱曰、何故事死王之庭、弗事生王之所也、

○精舍、寺院を云釋氏要覽に精舍釋迦譜云息心所レ棲曰二精舍一とあり智德を精練せる修行者の舍宅の意

○(注)中臣磐余連、系詳ならず

○彌留、文選王仲宣誄の注に彌終也とあり病の既にひさしきに彌りて危篤なる義雄略紀廿三年(卷上二八六頁)にも見ゆ

○崩于大殿、此天皇崩年のこと帝說は紀に同じく古事記には甲辰年四月六日崩とあり實算は大日本史に本書享年缺神皇正統記如是院年代記並曰六十一皇代記皇年代略記歷代皇紀皇胤紹運錄並四十八未レ知二孰是一水鏡愚管抄作二二十四一誤とあり

○廣瀨、大和國廣瀨郡なり

○誄、シノビコトは偲び辭にて死者生前の功績を偲びて述ぶる辭なり誄は周禮の注に誄謂二積二累生時德行一也また文選の注に濟曰誄者累也言人死後累二其德行一也とあり德行を累ねて述ぶる意とす　○佩刀而誄、これも儀式のありしなるべし　○中獵箭之雀鳥、獵箭は猪鹿を射る矢なり雀が獵箭を負へるが如く佩刀長大にして體に適はざるを云　○手脚搖震而誄、恐懼せしなるべし原本誄の下に搖震戰慄也の五字を注す攙入なること明なれば削る　○可懸鈴、搖震甚しく鈴を懸くればよく鳴るべしとて嘲咲せるなり　○三輪君云々、以下の事は用明紀に詳なり同紀に夏五月穴穗部皇子欲レ奸二炊屋皇后一而自强入二殯宮一寵臣三輪君逆乃喚二兵衞一重二環宮門一拒不レ入云々とあり　○穴穗部皇子、天皇の異母弟に坐す　○生王、穴穗部皇子自らを云

日本書紀卷第廿

日本書紀卷第廿一

橘豐日天皇　用明天皇
泊瀨部天皇　崇峻天皇

橘豐日天皇　用明天皇

橘豐日天皇、天國排開廣庭天皇、第四子也、母曰堅鹽媛、天皇信佛、法尊神道、十四年秋八月、渟中倉太珠敷天皇崩、九月甲寅朔戊午、天皇卽天皇位、宮於磐余、名曰池邊雙槻宮、以蘇我馬子宿禰爲大臣、物部弓削守屋連爲大連、並如故、壬申、詔曰云々、以酢香手姬皇女、拜伊勢神宮、奉日神祀、是皇女自此天皇時、逮于炊屋姬天皇之世、奉日神祀、自退葛城、而薨、見炊屋姬天皇紀、或本云、卅七年間、奉日神祀、自退而薨、

【卽位前紀】用明天皇、北本寮本此四字なし　○橘豐日天皇、法王帝說に多至波奈等（ヨ）比乃彌己等とあり。○堅鹽媛、蘇我稻目の女　○神道、神道の文字始めて此に見ゆ皇祖天神の立給ひし道なり周易に聖人以神道設教而天下服矣とあれどそれにはあらで儒佛に對して皇祖天神の定め給へるまゝに祖神を崇敬し祭祀を尊重するを云　○卽天皇位、大日本史に皇年代略記云年六十七按本書享年闕故不書とあり　○宮於磐余、原本宮を館に作る北本寮本中本に據て改む舊事紀には都に作る　○池邊雙槻宮、帝說に伊波禮池邊宮記にはたゞ池邊宮とあり其地大和志に十市郡安部長門邑とす今磯城郡安倍村　○守屋連、集解連の上に大の字を補ふ　○詔曰云々、集解に按轉寫者省文不載其文遂滅以下紀及三代實錄等往々有之と云り敷田氏は凡宣命は大字小字を交へ書ける物なれば然記しては此紀の體裁を案ず故に宣命の文を省きたるなりと云　○酢香手姬皇女、天皇の皇女なり記には須賀志呂古郎子とあり　○（注）是皇女云々、以下類史一本に本文とせり　○日神祀、原本神一字衍れり北本に據て削る　○退葛城、皇女の御母廣子葛城直磐村女なるが故なり　○卅七年間云々、帝說に此王

拜祭伊勢神前至于三天皇也とあり三代は用明崇峻推古なり

【元年】穴穂部間人皇女、天皇の御異母妹
○厩戸皇子、推古紀元年に橘豐日天皇第二子也とあり田目皇子（帝說に聖王庶子とあり）を第一皇子とするなり
○（注）豐耳聰、原本豐の字なし北本寮本中本に據て補ふ
○聖德、私記に音讀とあり
○豐聰耳、記に上宮之厩戸豐聰耳とあり推古紀に生而能言有聖智及壯一聞十人訴以勿失云々とあり此義なり
○法大王、潛確居類書方外部佛號曰法王法華經法王無上尊とあり
○法主王、原本主を王に作る北本楓本中本に據て改む
○是皇子、原本是を此に作り其下に之の字あり諸本に據て改訂す
○上宮、大和志に十市郡上宮（ウヘノミヤ）村あり是上宮の在りし地なりされば傍訓にカムツミヤとあれどウヘノミヤと訓べ

（丙午）元年春正月壬子朔、立穴穂部間人皇女爲皇后、是生四男、其一曰厩戸皇子、更名豐耳聰聖德、或名豐聰耳法大王、或云法主王、是皇子初居上宮、後移斑鳩、於豐御食炊屋姬天皇世、位居東宮、總攝萬機、行天皇事、語見豐御食炊屋姬天皇紀、其二曰來目皇子、其三曰殖栗皇子、其四曰茨田皇子、立蘇我大臣稻目宿禰女石寸名爲嬪、是生田目皇子、更名豐浦皇子葛城直磐村女廣子生一男一女、男曰麻呂子皇子、此當麻公之先也、女曰酢香手姬皇女、歷三代以奉日神、夏五月、穴穂部皇子欲奸炊屋姬皇后、而自强入於殯宮、寵臣三輪君逆乃喚兵衞、重璅宮門、拒而勿入、穴穂部皇子問曰、何人在此、兵衞答曰、三輪君逆在焉、七呼開門、遂不聽入、於是穴穂部皇子謂大臣與大連曰、逆頻無禮矣、於殯庭誅曰、不荒朝庭、淨如鏡面、臣治平奉仕、卽是無禮、方今天皇子弟多在、兩大臣侍、誰得恣情專言奉仕、又余觀殯內、拒不聽入、自呼開門七廻不應、願欲斬之、兩大

し（記傳及帝說證注）○斑鳩、平群（今生駒）郡法隆寺村　○來目皇子、記に久米王　○殖栗皇子、記に殖栗王　○茨田皇子、記に脫ぜり　○石寸名、帝說に伊志吉郎女に作る　○嬪、後宮職員令に妃夫人の次に嬪四員あり履中紀六年（卷上二四一頁）に見ゆ　○田目皇子、記に多米王　○葛城直、飲明紀廿二年に見ゆ　○麻呂子皇子、北本及類史子の字なし帝說に平麻呂古王に作り記に當麻王とあり　○當麻公、錄右京皇別に當麻眞人用明天皇々子麻呂古王之後也天武紀十三年當麻公賜姓曰眞人とあり神名帳に當麻都比古神社二座とあり麻呂古王を祭ると云　○兵衞、職員令左右兵衞府に兵衞八百人とあれどこゝは令制の兵衞にあらず敏達紀十四年に三輪公逆使隼人相拒於殯庭とあれば隼人なり　○雷壤、說文に壤鑛本字又鑛鎖門關也とあり　○誅、原本誅に作る北本寮本に據て改む　○不荒朝庭云々、以下の句いかにも專恣の情明白なり　○兩大臣、馬子と守屋を指す　○在於殺逆君、左を存に作る　○磐余池邊、皇宮の地なり　○隱於三諸之岳、三輪氏なればなり　○隱於後宮、於の字は北本中本に據て補ふ　○（注）海石榴市宮、大和國十市郡、此分注後人の攙入なるべし　○（注）泊瀨部皇子、崇峻天皇なり　○門底、皇子の門底なり此下の注も攙入なるべし　○將之大連所、之かむとせしは穴穗皇子なり　○王者不近刑人、公羊傳に君子不近刑人近刑人則輕死之道也とあるを採れり刑人は逆を指す　○卽便隨去、皇子の門底を去るをいふ　○（注）行至於池邊也、是亦私記の攙入　○切諫、上文に穴穗皇子云々欲斬之兩大臣曰隨命とあり馬子も逆を殺すことに同意せしが更に

臣曰、隨命、於是穴穗部皇子陰謀王天下之事、而口詐在於殺逆君、遂與物部守屋大連、率兵圍繞磐余池邊、逆君知之隱於三諸之岳、是日、夜半潛自山出、隱於後宮、謂炊屋姬皇后之別業是名海石榴市宮、逆之同姓白堤與横山、言逆君在處、穴穗部皇子卽遣守屋大連或本云、穴穗部皇子、與泊瀨部皇子相計而遣守屋大連、曰、汝應往討逆君并其二子、大連遂率兵去、蘇我馬子宿禰外聞斯計、詣皇子所、卽逢門底、謂皇子家門也將之大連所、時諫曰、王者不近刑人、不可自往、皇子不聽而行、馬子宿禰卽便隨去、到於磐余行至於池邊也而切諫之、皇子乃從諫止、仍於此處跼坐、胡床待大連焉、大連良久而至、率衆報命曰、斬逆等訖、或本云、穴穗部皇子自行射殺、於是馬子宿禰惻然頹歎曰、天下之亂不久矣、大連聞而答曰、汝小臣之所不識也、此三輪君逆者、譯語田天皇之所寵愛、委內外之事焉、由是炊屋姬皇后與馬子宿禰俱發恨於穴穗部皇子也、是年也太歲丙午、

之を變じて殺すことを諫止せしなり敷田氏の說に是は馬子が姦策もて殺すべく促して他の見聞の爲に諫めたる其慮防惡むべきなりと云り　○頼歎、中本歎を難に作る　○天下之亂不久矣、守屋の勅許を得ずして逆を誅せしを云るか　○汝小臣之所不識也、逆を誅せしは誅すべき理由ありてなり然るに天下の亂は久からずなど云へど我が行ふ所は汝の知らざる所なりと嘲りしなり　○(注)此三輪君云々、小山田與清の說に此四十四字は本文なりしが誤りて細注となりしならむと云り

【二年】丙午、諸本午を子に作る通證に考長曆子當作午二日也と云今之に據る　○御新嘗於磐余河上、舒明紀十一年にも正月に新嘗を行はれしこと見ゆ延引の理由は集解に蓋以亂也と云り　○違詔誣曰云々、平田翁曰く違詔とは、あるまじきことなり天皇佛敎に歸依せむか否かを決し兼れて諸詢せさせ給ひしなれば各自に意見を上るは當然のことなりと云り　○(注)皇弟皇子者云々、私記の攙入なるべし　○豐國法師、法師の名此に始めて見ゆ元亨釋書便蒙に或曰百濟人墓我國化來是時佛法未周故寓豐後民間史失其名以國呼之と云り　○卿、ウシは大人なり尊敬して云り　○押坂部史、押坂は刑部か詳ならず史とあれば蕃

(丁未)二年夏四月乙巳朔丙午、御新嘗於磐余河上、是日、天皇得病還入於宮、群臣侍焉、天皇詔群臣曰、朕思欲歸三寶、卿等議之、群臣入朝而議、物部守屋大連與中臣勝海連、違詔議曰、何背國神敬他神也、由來不識若斯事矣、蘇我馬子宿禰大臣曰、可隨詔而奉助、誰生異計、於是皇弟皇子(皇弟皇子者、穴穗部皇子、卽天皇庶弟、)引豐國法師(闕名也)入於內裏、物部守屋大連耶睨大怒、是時押坂部史毛屎急來密語大連曰、今群臣圖卿、復將斷路大連聞之、卽退於阿都(阿都、大連之別業所在地名也、)集聚人焉、中臣勝海連於家集衆隨助大連、遂作太子彥人皇子像與竹田皇子像厭之、俄而知事難濟、歸附彥人皇子於水派宮(水派、此云美麻多、)舍人迹見赤檮伺勝海連、自彥人皇子所退、拔刀而殺、(迹見姓也、赤檮名也、赤檮、此云伊知比、)大連從阿都家使物部八坂、大市造小坂、漆部造兄、謂馬子大臣曰、吾聞群臣謀我、我故退焉、馬子大臣乃使土師、

別なるべし ○斷路、大連が內裏より退出の路を斷ちて害せむとするを云 ○阿都、抄に河內國澁川郡跡部郷あり是なり今中河內郡龍華村の古名と云 ○(注)阿都云々、十二字私記の攙入 ○隨助、天智紀六年に側助を、齊明紀六年に引の字をキイと訓ると同じ意なり

八嶋連於大伴毗羅夫連所、具述大連之語、由是毗羅夫連、手執弓箭皮楯、就槻曲家、不離晝夜守護大臣、槻曲家者、大臣家也天皇之瘡轉盛、將欲終、時鞍部多須奈司馬達等子也進而奏曰、臣奉爲天皇出家脩道、又奉造丈六佛像及寺、天皇爲之悲慟、今南淵坂田寺、木丈六佛像、挾侍菩薩是也、癸丑、天皇崩于大殿、秋七月甲戌朔甲午、葬于磐余池上陵、

○作太子彦人皇子像云々、二皇子共に敏達天皇の皇子なり彦人皇子は此時未だ太子に坐さず追記せしなり二皇子を厭ひしは守屋勝海共に穴穂皇子を擁立し奉らむとし此二皇子ましては障碍たるべき故に呪詛し奉れるか ○於水派宮、水派宮は武烈紀三年(五頁)に見ゆ原本於の字なし諸本に據て補ふ ○舍人、太子の舍人 ○赤檮、原本檮を檮に作る應本中本に據て改む下同じ ○(注)迹見姓也云々、以下八字は私記の攙入なるべし ○物部八坂、詳ならず ○太市造小坂、錄左京諸蕃に太市首任那國人都努賀阿羅斯止之後也あり是と同じきか北本楓本小の下に市の字あり ○漆部造、天孫本紀に字麻志麻治命四世孫三見宿禰命漆部連等祖とあり、天武紀十二年に姓宿禰を賜ふ尸異なれば別なるべし ○皮楯、總てを皮にて造り持運びに便よくしたるものなるべし ○槻曲、詳ならず ○南淵、大和國高市郡、今高市村大字稻淵是なり或は蜷淵とも云 ○坂田寺、大和志に高市郡金剛寺在坂田村舊名小墾田坂田尼寺とあり今高市村大字坂田に舊趾あり ○挾侍、脇立なり本尊佛の左右に置く佛を云 ○菩薩、金剛經の注に菩薩也普濟衆生故曰菩薩猶儒者仁人君子之稱と云 ○秋七月、秋の字は北本に據て補ふ ○磐余池上陵、大和志に十市郡石寸腋上荒川陵在谷長門二邑と見え記に此天皇御陵在石寸掖上後選科長中陵也とあり推古紀元年改葬の條を參考すべし ○崩、大日本史に本書享年闕神皇正統記如是院年代記倭漢合符並曰四十一、皇代略紀皇年代略記並六十九未知孰是とあり

【卽位前紀】崇峻天皇、寮本此四字なし ○泊瀨部天皇、記に長谷部若雀天皇とあり ○第十二子、紀略舊紀及太子傳二を五に作る大日本史に按爲事紀聖德太子

泊瀨部天皇　崇峻天皇

泊瀨部天皇、天國排開廣庭天皇第十二子也、母曰小姉君也、已見上文、二年夏四月、橘豐日天皇崩、五月、物部大連軍衆三度驚駭、大連元欲去

傳曆愚管鈔皇年代略記帝王編年記爲第十五子一歷代皇紀第十六子一代要記第六子水鏡神皇正統記與本書合

○(注)稻目宿禰云々、私記の攙入なるべし

○三度驚駭、度をヨリとよめるは推古紀に時をヨリ〳〵と訓るに同じ驚駭は太子傳拾遺所引元興寺緣起文に大連軍衆三度驚駭天皇喪とあり

○替立、通證に僭譌作替讀亦誤とあり

○謀泄、獵に言寄(コトヨ)せて穴穗部皇子を誘ひて事謀らむとする祕策の泄れしなり

○奉炊屋姬尊、通證に今案以太后令也日炊屋姬母出于蘇我故馬子奉以擅權也と云り

○殿、原本にヨクテとあるはヨソヒテの誤なり

○宅部皇子、太子傳曆扶桑略記紹運錄に欽明天皇の皇子とあれど此には檜前天皇の子とあり檜前天皇は宣化天皇なれど同天皇の皇子にも見えず故に日本史は本書に據て未詳とす

○衛士、用明紀に兵衛と

餘皇子等、而立穴穗部皇子爲天皇、及至於今、望因遊獵而謀替立、密使人於穴穗部皇子曰、願與皇子將馳獵於淡路、謀泄、六月甲辰朔庚戌、蘇我馬子宿禰等奉炊屋姬尊、詔佐伯連丹經手、土師連磐村、的臣眞嚙曰、汝等嚴兵、速往誅殺穴穗部皇子、與宅部皇子、是日夜半、佐伯連丹經手等、圍穴穗部皇子宮、於是衛士先登樓上、擊穴穗部皇子肩、皇子落於樓下、走入偏室、衛士等擧燭而誅、辛亥、誅宅部皇子、宅部皇子檜隈天皇之子、上女王之父也、未詳、善穴穗部皇子、故誅、甲子、善信阿尼等謂大臣曰、家出之途、以戒爲本、願向百濟學受戒法、是月、百濟調使來朝、大臣謂使人曰、率此尼等、將渡汝國令學戒法、了時發遣、使人答曰、臣等歸蕃、先導國王、而後發遣、亦不遲也、秋七月、蘇我馬子宿禰大臣勸諸皇子與群臣、謀滅物部守屋大連、泊瀨部皇子、竹田皇子、厩戸皇子、難波皇子、春日皇子、蘇我馬子宿禰大臣、紀臣男麻呂宿禰、巨勢臣比良夫、膳臣賀拖夫、葛城臣烏那羅、俱率軍旅進討大連、大伴連嚙、阿陪臣人、平群臣神手、坂本臣糠手、春日臣、闕名字俱率軍兵、從志紀郡到澁河家、大連親率子弟與奴軍、築

ある同じ兵士なり令制軍防令に凡兵士向京師者名衛士とあり
○(注)檜隈天皇、宣化天皇なり
○上女王、詳ならず
○善信阿尼、善信は司馬達等の女阿尼は尼なり阿は親みて云り
○以戒爲本、優婆塞戒經に戒者名制能制一切不善法故とあり佛敎にては八戒十戒など種々の名稱を設け戒と云ことを最も尊重ず
○國王、北本寮本中本王を主に作る
○亦不遲、原本亦を久に作る中本に據て改む
○竹田皇子、以下難波皇子春日皇子は敏達天皇の皇子
○紀臣男麻呂、原本男の字なし北本寮本應本に據て補ふ中本には宿禰の二字なし
○葛城臣、姓氏錄に見えず同左京皇別に葛城朝臣葛城襲津彦命之後也とあり同姓か考ふべし
○大伴連囓、推古紀に咋、公卿補任に咋子に作る
○春日臣、詳ならず

稻城(イナキ)而戰(フ)、於是(ニ)大連昇(リナ)衣揩朴枝間(キヌスリノエノキノマタニ)臨射(ミルシ)如(レ)雨(ノ)、其軍強盛(ニノミチニ)塡(レ)家溢(レ)野(タリニ)、皇子等(ノト)軍與(ノイクサオ)群臣衆(デオソレテ)怯弱恐怖(ミタビシリゾク)、三廻却還(ノ)、是時、厩戸皇子(ノ)束髮於額(ヒサゴハナニシナ)、古俗年少兒年十五(ヒサゴハナノ(縣))

六間、束髮於額、十七八間、分爲角子、今亦然之、而隨(ヒノウシロニ)軍後(ラハカリテ)、自(ク)祈(ニ)度曰(ラムル)、將(ラズバ)無見敗(レ)、非願(ニ)難成(ラ)、乃(チ)斷(キリトリテ)取白膠(スリテノ)木(キヲトク)、疾作(リテ)四天王像(ノミカタチ)、置(タキフサニ)於頂髮(タテ玉ハクウケヒラ(北))而發(ツ)誓言(ヒ)、白膠木、此云農利渥、今若使(シノ)我勝(レ)敵(タ)、必(ズ)當奉(オホム)爲護世四王(タメニゴセシワウノ)起(ツ)立寺塔(タテムテ)、蘇我馬子(ノ)大臣又發(ツ)誓言(チ)、凡諸天王大神王等、助(ケ)衛(リテ)於我(チ)、使(メバ)獲(レ)利益(カツコトヲ)、願(ハ)當奉(ニ)爲諸天與(ト)大神王(ノ)、起(テ)立寺塔(チ)流(ツタヘム)通三寶(ヲ)、誓已(チハリテ)嚴(イツクシクノ)種種兵(チ)而進討伐(テウツ)、爰(ニ)有(リ)迹見(ト)首(ミノ)赤檮(イチヒ)、射墮(シテ)大連(ヲ)於枝下(エノモトニ)、而誅(ス)大連并(チ)其子等(ノ)、由(テ)是(ニ)大連之軍忽然(ニ)自敗(ラレ)、合(コソリテ)軍悉(フツクニ)被(テ)皂衣(クロキヌヲカリスルマチシテ)、馳(ニ)獵廣瀨勾原(マガリノニ)而散(ミアレヌノニ)、是役(ニ)、大連(ノ)兒息與眷屬(トヤカラ)、或有(リ)逃匿(ダレテ)葦原(ニ)、改(メ)姓換(ルヲ)名者(ハ)、或有(ニ)逃亡(ゲウセテ)不(ル)知(ラ)所(ヲ)向(ニケム)者、時(ノ)人相謂(カタリテク)曰、蘇我(ノ)大臣之妻(ハレ)、是物部(ノ)守屋(ノ)大連之妹(イロトナリ)也、大臣妄(リニ)用(テ)妻(ノ)計(ヲ)而殺(ストテ)大連(ヲ)矣、平(ケテ)亂(ヲ)之後、於(ニ)攝津(ノ)國(ニリ)造四天王寺(ヲ)、分(ケテ)大連(ノ)奴半與宅(ナカバトヲ)、爲(スニ)大寺(ノ)奴田莊(タドコロトテ)、以(テ)田(ノ)一萬頃(ヨロヅシロヲ)、賜(フ)迹見(ト)首(ノ)赤檮(イチヒニ)、蘇我(ノ)大臣亦依(ニ)本願(ニネガヒノ)、於(テ)飛鳥(アスカノ)地(ニ)起(ツ)法興寺(ヲ)、物部(ノ)守屋(ノ)大連資人(ツカヒト)捕(トリ)、鳥部萬(ベノヨロヅ萬、名也)將(テモ)一百人(アマリノヲ)守(ル)難波宅(ニ)、而(ノ)

聞大連滅、騎馬夜逃、向茅渟縣有眞香邑、仍過婦宅而遂匿山、朝庭議曰、萬懷逆心、故隱此山中、早須滅族、可不怠歟、萬衣裳弊坼、形色憔悴、持弓帶劍、獨自出來、有司遣數百衛士圍萬、萬卽驚匿篁藂、以繩繫竹引動、令他惑己所入、衛士等被詐、指搖竹馳言、萬在此、萬卽發箭一無不中、衛士等恐不敢近、萬便弛弓挾腋、向山走去、衛士等卽夾河追射、皆不能中、於是有一衛士、疾馳先萬、而伏河側、擬射中膝、萬卽拔箭、張弓發箭、伏地而號曰、萬爲天皇之楯、將効其勇、不推問、翻致逼迫於此窮矣、可共語者來、願聞殺虜之際、衛士等競馳射萬、萬便拂捍飛矢、殺卅餘人、仍以持劍三截其弓、還屈其劍投河水裏、別以刀子刺頸死焉、河內國司、以萬死狀、牒上朝庭、朝庭下符偁、斬之八段、散梟八國、河內國司、卽依符旨、臨斬梟時、雷鳴大雨、爰有萬養白犬、俯仰廻吠於其屍側、遂嚙擧頭、收置古冢、横臥枕側、飢死於前、河內國司尤異其犬、牒上朝庭、朝庭哀不忍聽、下符稱曰、此犬世所希聞、可觀於後、須使

○從志紀郡到澁河家、志紀澁河共に河內國の郡名澁河家は上に見えたる阿都の家なり

○稻城、垂仁紀五年（卷上一二九頁）に見ゆ河內志に稻城址在弓削村（志紀郡）とあり

○衣揩朴枝間、衣揩は地名にて河內志に澁川郡衣摺村あり今長瀨村の大字に存す傳曆に登大榎木今存云とあり

○束髮於額、ヒサゴハナは瓠花なり瓠の花の如く髮を結ふを云十五六歲の男子の髮の狀なり此時太子は御年十六歲なればよく適へり

○（注）古俗云々、集解に私記の攙入とす今亦然之の亦然の二字北本寮本之爲に作る

○角子、通證に角子卽總角所謂左右髻也今天王寺太子像亦如此とあり

○將無見敗、敵强くして敗らるゝこと無からむとなり

○非願難成、佛に願ふに非ざれば成就し難しとなり

○白膠木、抄草木部に樗（本草云沼天）惡木也辨色

萬族作墓而葬、由是萬族雙起墓於有眞香邑、葬萬犬焉、河內國司言、於餌香川原有被斬人、計將數百、頭身既爛、姓字難知、但以衣色收取其身者、爰有櫻井田部連膽渟所養之犬、嚙續身頭伏側固守、使收己主、乃起行之、八月癸卯朔甲辰、炊屋姬尊與群臣勸進天皇、卽天皇之位、以蘇我馬子宿禰爲大臣、如故、卿大夫之位亦如故、是月、宮於倉梯、

立成云白膠木(和名同上)箋注に按白膠木卽楓樹本草云楓香脂一名白膠香是也而楓香脂在上品樗木在下品其不同可知也崇峻紀云白膠木此云農利塑與辨色立成略同云々とあり一名を勝軍木といふ　○四天王、長阿含經に東方天王名云陀羅吒(持國)南方天王名毘瑠璃(增長)西方天王名毘留博叉(廣目)北方天王名毘沙門とあり　○項髮、景行紀四十年に頭髻を訓り髮をたばねて一つにするを云後世タブサと稱す　○(注)農利塑、原本農利塑、原本に據て改む　○蘇我馬子、北本寮本我の下臣の字あり　○枝下、北本下を中に作る　○忽然、原本忽然に作る北本應本楓本に據て改本に據て補ふ　○大臣妄用妻計、通證に考皇極二年紀則妻計謂以私欲滅宗家也與馬子弑逆滔天大罪豈容天誅哉と云り　○皂衣、字書に皂は黑緇也とあり　○廣瀨勾原、廣瀨は大和國の郡名勾は今聞えず　○葦原、守屋が領地の一なり　○或有逃亡、有の字北本應市天王寺區にあり推古紀元年に云べし　○田莊、田處なり又ナリドコロとも云　○一萬頃、抄天地部に唐令云畝百爲頃とあり　○飛鳥、大和國高市郡の地名法興寺のことは推古紀に云　○資人、朝廷より大官重臣に充て賜へる人なり軍防令に資人一位百人二位八十人三位六十人云々又釋王に帳內諸臣に資人など云にて知るべし　○捕鳥部、垂仁紀廿三年(卷上一三二頁)に見ゆ姓氏錄鳥取部に作る　○(注)萬名也、此三字私記の攙入なるべし　○難波宅、攝津志に東生郡森神祠の條に森村卽此有守屋難波第址とあり　○茅渟縣有眞香邑、茅渟は前に出づ有眞香は式に和泉國和泉郡阿理莫神社あり和泉志に泉南郡阿間河莊とある是なり今同郡麻生鄕村に地名存せり　○憔悴、生氣なく委縮すること　○擬射、發射すべく用意することを云　○天皇之楯、之の字は北本中本に據て補ふ萬葉二十防人歌に祁布與利波可敝里見奈久豆煮富岐美乃之許乃美多豆等伊波多都和例波とあるは萬の眞心と同じ意を表はせり　○殺虜之際、原本際を除に作る中本に據て改む、誅せらるべき理由を聞かむとなり　○刀子、抄調度部細工具に楊氏漢語抄云刀子(賀太奈)とあり　○牒上、唐志尙書省下達上有六牒其一也とあり　○下符、符は訓の如く押手なり手形とも云唐六典に凡上之所以逮下其制有六曰制敕冊令敎符、注に尙書省下於州州下於縣縣下於鄕皆曰符とあり後の制は公式令にも見ゆ　○散梟、字書に梟懸首於木也とありクシサセは串刺にて串に刺して高く揭ぐる意なるべし　○葬萬與犬、和泉志に泉南郡阿間河莊捕鳥部萬墓在八田村狗墓在萬墓北とありオクは置なり　○河內國司、司の字は北本楓本中本に據て補ふ　○餌香川原、河內國古市(今南河內)郡　○櫻井田部連、上に見ゆ　○犬、ウヌと訓るは通音なり　○嚙續身頭、身と頭と別の處にありしを嚙來て同じ處に置て續ぎ合するを云　○使收己主、原本主を至に作る北本寮本に據て改む　○卽天皇之位、大日本史に皇年代略記一代要記並云年六十九按本書享年缺故不書とあり　○宮於倉梯、記に倉梯柴垣宮とあり大和國十市郡に倉橋村(今磯城郡多武峯村大字倉梯)あり大和志に同村金福寺卽此舊蹟と云

【元年】蜂子皇子、今羽前國東田川郡手向村羽黑

元年(戊申)春三月、立大伴糠手連女小手子爲妃、是生蜂子皇子與錦代皇女、

是歲、百濟國遣使并僧惠摠、令斤、惠寔等、獻佛舍利、百濟國遣恩率首信、德率蓋文、那率福富味身等、進調、并獻佛舍利、僧聆照律師、令威、惠衆、惠宿、道嚴、令開等、寺工太良未太、文賈古子、鑪盤博士將德白昧淳、瓦博士麻奈父奴、陽貴文、陵貴文、昔麻帝彌、畫工白加蘇我馬子宿禰請百濟僧等、問受戒之法、以善信尼等付百濟國使恩率首信等、發遣學問、壞飛鳥衣縫造祖樹葉之家、始作法興寺、此地名飛鳥眞神原、亦名飛鳥苫田、

是年也太歲戊申、

二年秋七月壬辰、朔、遣近江臣滿於東山道、使觀蝦夷國境、遣宍人臣鴈於東海道、使觀東方濱海諸國境、遣阿倍臣於北陸道、使觀越等諸國境、

山上に出羽神社攝社として蜂子神社あり御墓も同社境内に在りと云　○令斤、傳曆斤を欣に作る　○聆照、拾遺記聆を令に作る　○鑪盤博士、傳曆に鑪盤師とあり鑪盤は抄佛塔具に露盤とあると同じく塔の頂に高く立つる物銅製にて層をなす輪を貫きたるが如く見ゆ之を鑄造製作する人を博士と云　○瓦博士、傳曆に造瓦師とあり瓦は抄居處部に切韻云瓦(和名加波良)燒泥爲之蓋屋宇上とあり　○畫工、佛畫師なり　○飛鳥衣縫造、雄略紀十四年(卷上二八〇頁)に見ゆ　○始作法興寺、始作とは建築に著手せるを云竣工せしは推古天皇四年なり此寺元興寺とも飛鳥寺とも云　○飛鳥眞神原、大和國高市郡飛鳥村神奈備山の麓　○苫田、通證に今尙存地名苫田と云　○是年也、也の字北本寮本に據て補ふ　【二年】近江臣滿、記に波多八代宿禰者淡海臣之祖とあり滿は傳曆に蒲と見ゆ蒲生郡の蒲を以て名とせるか　○東山道、遣されし國々は近江より陸奥に及び蝦夷の國境をも觀察せしめられしに據れば後の制の東山道の始と見るべし　○宍人臣、錄左京皇別に宍人朝臣阿部朝臣同祖大彥命男彥背立大稻腰命之後也とあり天武紀十三年朝臣の姓を賜ふ　○阿倍臣、傳曆に阿部臣枚吹(ヒラフキ)とあり　○北陸道、今のと同じ

三年春三月、學問尼善信等、自百濟還、住櫻井寺、冬十月、入山取寺材、是歲度尼、大伴狹手彥連女善德、大伴狛夫人新羅媛善妙、百濟媛妙光、

【三年】櫻井寺、元興寺緣起に櫻井寺は今豐浦寺也と見ゆ大和志に高市郡廣嚴寺在豐浦村舊作向原又名豐浦寺傍有井曰

櫻井」とあり 寺名此に起れり
○大伴狛夫人、大伴の二字は北本中本に據て補ふ狛夫人は蓋狭手彦が高麗を伐し時虜にせるなり
○德齊法師、中本齊を濟に作る元亨釋書に釋德濟樂人司馬達等之子也與漢人善聰等八人同出家とあり
【四年】磯長陵、諸陵式に河内國石川郡河内志に在石川郡半室村西と見え陵墓要覽に南河内郡磯長村大字太子とあり
○妣皇后、御母石姫なり
○十一月、原本一を二に作る北本寮本中本及紀略に據て改む傳暦亦同じ
○紀男麻呂宿禰、水本及傳暦に紀の下臣の字あり
○巨勢猿臣、原本勢の下に臣比良夫の四字あり又猿を狭に作る北本寮本に據て改む傳暦にも巨勢臣猿とあり
○葛城烏奈良臣、傳暦に葛木小檜とあり蘇我氏と同族なり、
○吉士金、推古紀五年(一〇九頁)に磐金とあり磐の字を脱ぜるか
【五年】山猪、野猪なり

又漢人善聰、善通、妙德、法定照、善智聰、善智惠、善光等、鞍部司馬達等、子多須奈、同時出家、名曰德齊法師、

四年夏四月壬子、朔甲子、葬譯語田天皇於磯長陵、是其妣皇后所葬之陵也、秋八月庚戌、朔天皇詔群臣曰、朕思欲建任那、卿等何如、群臣奏言、可建任那官家、皆同陛下所詔、冬十一月己卯、朔壬午、差紀男麻呂宿禰、巨勢猿臣、大伴囓連、葛城烏奈良臣、爲大將軍、率氏々臣連、爲裨將部隊、領二萬餘軍、出居筑紫、遣吉士金於新羅、遣吉士木蓮子於任那、問任那事、

五年冬十月癸酉、朔丙子、有獻山猪、天皇指猪詔曰、何時如斷此猪之頭、斷朕所嫌之人、多設兵仗、有異於常、壬午、蘇我馬子宿禰聞天皇所詔、恐嫌於己、招聚儻者、謀弑天皇、是月、起大法興寺佛堂與步廊、

十一月癸卯、朔乙巳、馬子宿禰詐於群臣曰、今日進東國之調、乃使東漢直駒弑于天皇、或本云、東漢直駒、磐井子也是日、葬天皇于倉梯岡陵、或本云、大伴嶺小手子恨寵之衰使人於

蘇我馬子宿禰曰、頃者有獻山猪、天皇指猪而詔曰、如斷猪頸、何時斷朕思人、且於内裏大作兵仗、於是馬子宿禰聽而驚之、丁未、遣驛使於筑紫將軍所曰、依於内亂莫怠外事、是月、東漢直駒、偸隱蘇我娘嬪河上娘爲妻、河上娘蘇我馬子宿禰女也馬子宿禰忽不知河上娘爲駒所偸、而謂死去、駒奸女嬪事顯、爲大臣所殺、

通證に獻之者供御之用とあり　○猪之頭、原本頭を頸に作る北本及類史に據て改む　○斷朕所嫌之人、通證云今按以此詔考之馬子既有弑逆之幾也然則前年出諸將於筑紫亦是馬子空内以逞惡之隱謀耳と云　○起大法興寺、大法興寺は他所に見えず起大は大逆の顚倒ならむか　○歩廊、抄居處部に廊唐韵云廊（漢語抄云保曾度能）殿下外屋也とあり　○東漢直駒、東漢直は應神紀廿年（卷上二〇四頁）に見ゆ歸化人なり歸化人を唆して弑逆を行はしめしなるべし　○弑于天皇、原本弑を殺に作る中本に據て改む此文に就て傳曆に委しく記せり天皇の崩年は大日本史に本書享年闕水鏡神皇正統記皇代記一代要記並曰七十二皇胤紹運錄皇年代略記歷代皇紀七十三未知孰是とあり　○是日葬、天皇崩御卽日に葬り奉れること古今に例なし馬子が專恣纂戾推して知るべし　○倉梯岡陵、諸陵式に在大和國十市郡無陵地並陵戸大和志に在十市郡倉橋村東今曰赤坂とあり今磯城郡多武峯村に屬す　○遣驛使云々、按に馬子己が大逆を責められむことを恐れ出征將士の心を專ら外征に向けしめむとの猾黠の心より出でしにて此驛使は蓋馬子が遣はしゝなり　○蘇我娘嬪、中本娘の字なし傳曆に天皇嬪とあり娘恐らくは衍ならむ　○奸、北本寮本中本汗に作る

日本書紀卷第廿一

【即位前紀】豐御食炊屋姫天皇、帝説に止余美氣加支夜比賣天皇とあり此御名はいかなる由にて稱へ奉りけむ厩戸皇子の御名の類にやと思はるれど證とすべきもの聞えず

○推古天皇、北本天皇の二字なし

○執制、成務紀（卷上一六五頁）に幹了な孝德紀大化二年に明直なヲサヲサシと訓り長々（ナガ〳〵）しの義立優りて甲斐〳〵しき意なり

○太珠敷、原本珠を玉に作る上下の文に據て改む

○見殺、舊紀殺を弑に作る

○淳名倉、原本倉を食に作る諸本に據て改む

○即天皇位、太日本史に按本書天皇年十八立爲皇后三十四敏達帝崩三十九崇峻帝崩又天皇崩下注云七十五今推干支敏之前後年紀自相反蓋有

日本書紀卷第廿二

豐御食炊屋姫天皇　推古天皇

豐御食炊屋姫天皇、天國排開廣庭、天皇、中女也、橘豐日天皇、同母妹也、幼曰額田部皇女、姿色端麗、進止軌制、年十八歲、立爲淳中倉太珠敷天皇之皇后、卅四歲淳中倉太珠敷天皇崩、卅九歲當于泊瀨部天皇五年十一月、天皇爲大臣馬子宿禰見殺、嗣位既空、群臣請淳中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女、以將令踐祚、皇后辭讓之、百寮上表勸進、至于三、乃從之、因以奉天皇璽印、冬十二月壬申朔己卯、皇后即天皇位於豐浦宮、

元年春正月壬寅朔丙辰、以佛舍利置于法興寺刹柱礎中、丁巳、建刹柱、夏四月庚午朔己卯、立廐戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、橘豐日天皇第二子也、母皇后曰穴穗部間人皇女、皇后懷

姙開胎之日、巡行禁中、監察諸司、至于馬官、乃當廐戸、而不勞忽產之、生而能言、有聖智、及壯一聞十人訴、以勿失能辨、兼知未然、且習內教於高麗僧慧慈、學外典於博士覺哿、並悉達矣、父天皇愛之、令居宮南上殿、故稱其名、謂上宮廐戸豐聰耳太子、秋九月、改葬橘豐日天皇於河內磯長陵、是歲、始造四天王寺於難波荒陵、是年也太歲癸丑、

一誤ニ故今不レ書ト云リ　○豐浦宮、大和志ニ高市郡古蹟豐浦宮在ニ豐浦村ニ　とあり今飛鳥村の大字となる

【元年】刹柱、刹は標に同じ佛塔中心の柱なり釋紀に私記曰刹字音讀玉篇刹刹柱也また抄調度部佛塔具に標四聲字苑云標（俗云心乃波之良）佛塔中心柱也箋注に標玄應音義云刹又作レ標同音察梵言ニ差多羅ニ又云刹書無ニ此字ニ　卽刹字略也依レ之擦本梵語差多羅之訛略無ニ其字ニ故借用ニ刹字ニ訛作レ刹後又木旁諸ニ察聲ニ作レ標遂與ニ木名標字ニ混無レ別也とあり　○錄攝政、字書に錄は總也とあり攝政は神功皇后紀に出づ　○以萬機悉委、正統記に廐戸皇子を皇太子として萬機の政を任せ給ふ攝政と申しき太子の監國といふこともあれどそれは暫の事なりこれは偏に天下を治め給ひけりとあり　○馬官、令制の左右馬寮ならむ　○產之、此事傳曆に詳なり　○內敎、佛典をいふ　○慧慈、原本慧を惠に作る諸本に據て改む下同じ　○外典、儒書をいふ　○並悉達矣、原本並を兼に作る岩本寮本應本に據て改む　○上宮、カムツミヤとあれどウヘノミヤとよむべし　○磯長陵、諸陵式に河內國石川郡河內志に石川郡春日村とあり今の南河內郡磯長村大字春日なり磯長中陵と云　○始造四天王寺云々、崇峻紀卽位前紀に平レ亂之後於ニ攝津國ニ造ニ四天王寺ニ　また太子傳補闕記に於ニ玉造之東岸上ニ卽以營ニ四天王寺ニ始立ニ垣ニ基ニ　とある如く始め玉造に建られしを今度此に移し立てたるなり扶桑略記に四天王寺法號荒陵寺荒陵鄕東建立故以ニ處村ニ號レ寺攝津志に四天王寺天王寺村山號荒陵一名三津寺又名難波大寺又稱ニ法華園ニ又名ニ敬田院ニ云々推古天皇元年正月始造ニ寺於難波荒陵ニ とあり

【二年】謂寺、事物紀原に攝摩騰自ニ西域ニ白馬馱レ經來初止ニ鴻臚寺ニ遂取ニ寺名ニ爲レ創ニ立白馬寺ニ後名ニ浮屠所ニ居皆曰レ寺とあり

【三年】沈水、通證に卽沈香李時珍曰木之心節置レ水則沈故名ニ沈水ニ今按世稱ニ名香第一ニ者有ニ太子ニ

二年春二月丙寅朔、詔ニ皇太子及大臣ニ、令レ興ニ隆三寶ニ、是時、諸臣連等、各爲ニ君親之恩ニ、競造ニ佛舍ニ、卽是謂ニ寺焉、

（甲寅）

三年夏四月、沈水漂ニ著於淡路嶋ニ、其大一圍、嶋人不レ知ニ沈水ニ、以交レ薪燒ニ於竈ニ、其烟氣遠薰、則異以獻之、五月戊午朔丁卯、高麗僧慧慈歸化、則皇

（乙卯）

一名法隆寺有二剛奢侍一名東大寺香道祕傳曰法隆寺者聖德太子得二之天竺一以藏二寶庫一蓋謬二傳此事一乎とあり信友校本水を木に作る

○僧慧聰、僧の字は岩本北本應本及類史に據て補ふ

○將軍等、崇峻紀四年に發せしめし人々なり

【四年】法興寺、崇峻紀五年に此寺を造り始めし事見え此年に至りて成る

○寺司、集解に按猶如二後世置造興福寺長官一とあり

○慧聰、原本慧を惠に作る諸本及上文に據て改む

【五年】甲午、原本甲子に作る集解に從て改む

【六年】鵲、抄羽族部に鵲本草云鵲（和名加佐々岐）飛驗馬泥鵲腦名也また本草綱目に李時珍曰鵲烏屬也大如レ鴉而長尾尖觜黑爪綠背白腹尾翮黑白駁雜上下飛鳴と見ゆ

○二隻、原本隻を侯に作る岩本應本中本に據て改む下同じ

○難波杜、通證に東生郡有二森林一卽此今有二神祠一云々とあれど生國魂神社を難波大社ともいへば生國魂社の舊社地の森なるべしひしなるべし杜は史記周本紀に畢在二鎬東南杜中一と見え注に徐廣曰杜一作レ社とあり岩本寮本共に社に作るモリは說文に森、木多貌とあり木多くして籠れる意

○孔雀、抄羽族部に兼名苑注云孔雀（俗云音宮尺）毛端圓一寸者謂二之珠毛一毛文如レ畫云々とあり

○白鹿、仁德紀五十三年（卷上二二九頁）に見ゆ

【七年】舍屋、ヤカスは家棲（ヤカス）なるべし抄居處部には宇を夜賀須と訓り

○地震神、陰陽道の祭祀に地震祭あり此神も陰陽

太子師ノ之、是歲、百濟僧慧聰來之、此兩僧、弘演佛教、並爲三寶之棟梁、秋七月、將軍等至レ自筑紫、

四年冬十一月、法興寺造竟、則以大臣男善德臣拜寺司、是日、慧慈慧聰二僧始住於法興寺、

五年夏四月丁丑朔、百濟王遣王子阿佐朝貢、冬十一月癸酉朔甲午、遣吉士磐金於新羅、

六年夏四月、難波吉士磐金至レ自新羅而獻鵲二隻、乃俾レ養於難波杜、因以巢レ枝而產之、秋八月己亥朔、新羅貢孔雀一隻、冬十月戊戌朔丁未、越國獻白鹿一頭、

七年夏四月乙未朔辛酉、地動、舍屋悉破、則令四方俾レ祭地震神、秋九月癸亥朔、百濟貢駱駝一匹、驢一匹、羊二頭、白雉一隻、

道の神なるべし　○駱駝、抄牛馬部に駱駝本草云駱駝(良久太乃宇末)周書云駱駝(駝卽駞字也)有肉鞍能負重致遠者也とあり　○匹、原本疋に作る岩本北本寮本に據て改む下同じ　○驢、抄牛馬部に驢說文云驢(宇佐岐无末)似馬長耳とあり　○羊、抄毛群部に兼名苑云羝一名遞(比都と)羊也とあり　○白雉、治部式祥瑞に白雉岱宗之精也とあり中瑞とす

【八年】境部臣、錄攝津皇別に坂合部連大彦命之後、允恭天皇御世造立國境之標因賜姓坂合連とあり境部坂合部は同じかれど臣と連と姓を異にすれば此境部臣はそれか知り難し馬子の弟に境部臣摩理勢あれどそれとも定め難し　○穗積臣、開化紀卽位前紀(卷上一〇九頁)に見ゆ　○大將軍副將軍、軍防令に凡將帥出征滿一萬人以上將軍一人副將軍二人とあり　○於是直指新羅、原本此六字重複す岩本北本楓本等に據て削る　○多々羅、以下四城は繼體紀廿三年(一二三頁)に出づ但し弗知鬼を費智とす　○南迦羅阿羅等、南迦羅阿羅は神功紀四十九年(卷上一九〇頁)に出づ原本等を々に作る通證所引一本に據て改む　○神、原本の傍訓ミネは三禾の誤なり　○新羅任那二國、原本任那の下王の字あり北イ本中本に據て削る　○天上有神云々、此語新羅の諛辭のみにはあるまじ彼國人古くよりかゝる信念を懷きしなるべし上の字恐くは衍　○船柂、原本柂を拖に作る岩本に據て改む

【九年】斑鳩、大和國平群郡

(庚申)八年春二月、新羅與任那相攻、天皇欲救任那、是歲、命境部臣爲大將軍、以穗積臣爲副將軍、並闕則將萬餘衆、爲任那擊新羅、於是直指新羅、以泛海往之、乃到于新羅、攻五城而拔、於是新羅王惶之、擧白旗到于將軍之麾下、而立割多々羅、素奈羅、弗知鬼、委陀、南迦羅、阿羅等六城、以請服、時將軍共議曰、新羅知罪服之、强擊不可、則奏上、爰天皇更遣難波吉師神於新羅、復遣難波吉士木蓮子於任那、並檢挍事狀、爰新羅任那二國、遣使貢調、仍奏表之曰、天上有神、地有天皇、除是二神、何亦有畏乎、自今以後、不有相攻、且不乾船柂、每歲必朝、則遣使以召還將軍、將軍等至自新羅、卽新羅亦侵任那、

(辛酉)九年春二月、皇太子初興宮室于斑鳩、三月甲申朔戊子、遣大伴連囓

○耳梨行宮、大和志に十市郡木原村とあり今磯城郡耳成村大字木原是なり ○大雨、原本大を火に作る岩本以下諸本及下文に據て改む ○間諜者、ウカミは窺見(ウカミ)なり通鑑の注に間諜間視也今謂細作蓋俗言走報軍情飛泄密事之人也と云

【十年】來目皇子、用明天皇々子にて太子の同母弟 ○諸神部、中臣忌部猿女鏡作等總べて神事に關係する事を掌る部屬なり之を授けしは軍中にて祭祀祈請を行ふ爲にて古制に則りしものなり ○國造、原本造を遣に作る諸本に據て改む ○嶋郡、筑前國志摩郡なり ○觀勒、三十一年紀及三代實錄貞觀三年六月條にも見ゆ ○貢曆本云々、曆は通證に一條兼良公の說を擧げて隋開皇二十年(推古天皇八年)に成りし皇極曆なりとす遁甲は後漢書方術傳の注に遁甲推六甲之陰而隱遁也今書七志有遁甲經とあり方術は天文醫卜の類を云 ○陽胡史、錄左京諸蕃に隋煬帝の後とあれど推古天皇十年は煬帝の父文帝仁壽二年に當れば是とは別なるべし ○大友村主、姓氏錄に見えず同書に大友史とあるは異姓なり ○山背臣、詳ならず姓氏錄諸蕃に山背忌寸あれど異姓なり ○日立、原本日の下に並の字あり前本及傳曆に據て削る ○僧々隆、々の字疑はし隆は岩本阿に作る

于高麗、遣坂本臣糠手于百濟、以詔之曰、急救任那、夏五月、天皇居于耳梨行宮、是時大雨、河水漂蕩、滿于宮庭、秋九月辛巳朔戊子、新羅之間諜者迦摩多到對馬、則捕以貢之、流于上野、冬十一月庚辰朔甲申、議攻新羅、

十年春二月己酉朔、來目皇子爲擊新羅將軍、授諸神部、及國造伴造等、并軍衆二萬五千人、夏四月戊申朔、將軍來目皇子到于筑紫、乃進屯嶋郡、而聚船舶、運軍粮、六月丁未朔己酉、大伴連囓、坂本臣糠手、共至自百濟、是時、來目皇子臥病以不果征討、冬十月、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本及天文地理書、并遁甲方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳習曆法、大友村主高聰學天文遁甲、山背臣日立學方術、皆學以成業、閏十月乙亥朔己丑、高麗僧々隆、雲聰、共來歸、

【十一年】皇太子、信友校本に子の下及の字あるべしと云
○謂之曰、謂は詔の誤なるべし
○婆婆、周防國佐波郡
○土師連、此氏歷世喪事を司る故に之を遣されしなり
○婆婆連、皇極紀二年に見ゆ
○埴生山岡上、河内國名所圖會に河内志に丹比郡大塚村にありと云は非なり埴生山は羽曳山の山脈にて野々上など云邊なり西は野村と云ほとり坂を登れば其所に古墳あり此墳恐くは來目皇子のならむと云陵墓要覽に今南河内郡埴生村大字埴生野とあり
○當麻皇子、岩本麻を摩に作る下同じ
○赤石檜笠岡上、播磨國赤石郡にあり萬葉七に印南野者往過奴良志天傳日笠浦波立見とあり通釋に或人云今官道の和坂(カニカサカ)の高き所をひかさ岡と云卽坂より北方に姫の御墓あり又御祠もありて檜笠社と稱すと云
○小墾田宮、大和國高市

(癸亥)十一年春二月癸酉朔丙子、來目皇子薨於筑紫、仍驛使以奏上、爰天皇聞之大驚、則召皇太子蘇我大臣、謂之曰、征新羅大將軍來目皇子薨之、其臨大事而不遂矣、甚悲乎、仍殯于周芳娑婆、乃遣土師連猪手令掌殯事、故猪手連之孫、曰娑婆連、其是之緣也、後葬於河内埴生山岡上、夏四月壬申朔、更以來目皇子之兄當麻皇子爲征新羅將軍、秋七月辛丑朔癸卯、當麻皇子自難波發船、丙午、當麻皇子到播磨時、從妻舍人姫王薨於赤石、仍葬于赤石檜笠岡上、乃當麻皇子返之、遂不征討、冬十月己巳朔壬申、遷于小墾田宮、十一月己亥朔、皇太子謂諸大夫曰、我有尊佛像、誰得是像、以恭拜、時秦造河勝進曰、臣拜之、便受佛像、因以造蜂岡寺、是月、皇太子請于天皇、以作大楯及靫、靫、此云由岐、又繪于旗幟、十二月戊辰朔壬申、始行冠位、大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智、并十二階、並以當色絁縫之、頂撮揔如囊、而著緣焉、唯元日著髻華、髻華、此云于孺、

郡豐浦村　○秦造河勝、皇極紀三年に此人を禹都麻佐云々と謂へり　○蜂岡寺、山城國葛野郡太秦村に在り廣隆寺と云緣起に推古天皇壬午之歲奉爲聖德太子所建立とあり壬午は三十年なりされば其創立の功を畢りしは同年ならむか　○大楯及靱、儀仗に用ふるなり　○繪于旗幟、是も亦式日或は儀仗に用ふ繪は後世の元日及卽位時等に建つる仗旗殿前烏像幢左日像幢次朱雀次青龍旗右月像幢次白虎次玄武旗などの類なるべし　○始行冠位、冠は神代より被りしこと古事記及風土記に徵して明なれど之を被りて品位を區別する事は此に始まれり　○大德云云、帝說に准五行定爵位也また傳曆に太子始製五行位德仁義禮智信各有大小德攝五行也故置頭首とあり五行は木火土金水なり之を五常に配當すれば仁は木禮は火信は土義は金智は水なり故に德仁禮信義智と叙列したるなり　○當色絁、當色とは位階に相當の色なり五行を五方に配當すれば仁は木にて東禮は火にて南信は土にて中央義は金にて西智は水にて北なり東は春にて其色青南は夏にて赤中央は土用にて黃西は秋にて白北は冬にて黑色なれば之を用ひ德は五行を統べたる名なれば陰陽を合せたる紫色を之に配當し深淺を以て大小を區別せり絁は抄布帛部に絁唐韻云絁（阿之岐沼）繒似布也箋注に按今俗太織絹是類也とあり　○頂撮摠如囊、詳なることは知り難けれど大略は此文にて推測せらる通釋に此時冠を定められしのみならず髮の樣をも改めしなるべし古代は男は左右の髻に結ゐを今は一つに總束れて髻とし囊の如き冠の內に入るべくせしものと聞えたりと云るさることなり　○著緣、緣をモトホリと訓るは廻るを云古言なりへりを云　○髻華、景行紀十七年の思邦歌に見えたれど其當時のものは花木の枝を髮に挿したるをこゝなるは金銀を以て華を鏤めたるものを冠に添て著たるなり北史倭國傳に其王始制冠以錦綵爲飾とある是なり

【十二年】賜冠位、冠を賜ひしなり位は自ら其冠に備れば冠を賜ふは卽ち位を賜ふなり　○憲法、字書に謂法度也國語に賞善罰姦國之憲法也とあり此意にて制定せられしなるべし傳曆に太子肇制憲法十七條手書奏之とあり　○以和爲貴、第一條は上下和睦を以て第一とすべきことを論されたり以和爲貴は論語學而篇に禮之用、和爲貴とあるに據れり　○無忤爲宗、人に忤ひ背くことなきを專一とすると云　○人皆有黨、人皆各々好む所を以て交り朋黨を立

（甲子）十二年春正月戊戌朔、始賜冠位於諸臣、各有差、夏四月丙寅朔戊辰、皇太子親肇作憲法十七條、一曰、以和爲貴、無忤爲宗、人皆有黨、亦少達者、是以或不順君父、乍違于隣里、然上和下睦、諧於論事、則事理自通、何事不成、二曰、篤敬三寶、三寶者佛法僧也、則四生之終歸、萬國之極宗、何世何人非貴是法、人鮮尤惡、能教從之、其不歸三寶、何以直枉、三曰、承詔必謹、君則天之、臣則地之、天覆地載、四時順行、萬氣得通、地欲覆天、則致壞耳、是以君言臣承、上行下靡、故承詔必愼、不謹自敗、四曰、群卿百寮、以禮爲本、其治民之本、要在乎禮、

上不レ禮而下非レ齊、下無レ禮以必有レ罪、是以君臣有レ禮、位次不レ亂、百姓有レ禮、國家自治、五曰、絶レ餐　棄レ欲、明辨二訴訟一、其百姓之訟、一日千事、一日尚爾、況乎累レ歲、頃治訟者、得レ利爲レ常、見レ賄聽レ獻、便有レ財之訟、如二石投レ水、乏者之訟、似二水投レ石、是以貧民則不レ知二所由一、臣道亦於焉闕、六曰、懲レ惡勸レ善、古之良典、是以無レ匿二人善一、見レ惡必匡、其諂詐者、則爲二覆レ國家一之利器、爲レ絶二人民一之鋒劍、亦佞媚者、對レ上則好説下過一、逢レ下則誹謗上失一、其如此人、皆無レ忠於君、無レ仁於民、是大亂之本也、七曰、人各有レ任、掌宜不レ濫、其賢哲任レ官、頌音則起、干者有レ官、禍亂則繁、世少二生知一、尅念作レ聖、事無二大少一、得レ人必治、時無二急緩一、遇賢自寛、因レ此國家永久、社稷勿レ危、故古聖王、爲レ官以求レ人、爲レ人不レ求レ官、八曰、群卿百寮、早朝晏退、公事靡レ盬、終日難レ盡、是以遲朝不レ逮二于急一、早退必事不レ盡、九曰、信是義本、每レ事有レ信、其善惡成敗、要在二于信一、群臣共信、何事不レ成、群臣無レ信、萬事悉敗、十曰、絶レ忿　棄レ瞋、不レ怒二人違一、人皆

つるを云
○上和下睦、孝經に民用和睦上下無レ怨とあるに據れり
○諸於論軍云々、君臣上下相和し相諧(カナ)ひて萬事を相論する時は事理自ら通じ何事も成らざるは無からむとなり
○篤敬三寶、二條は佛法を信仰すべき事を諭されたり
○佛法僧也、此の四字通證に拾芥抄作二細注一宜レ從といひ集解は後人の加ふる所として削る
○四生之終歸、法華經隨喜功德品に四生衆生卵生、胎生、濕生、化生とあり一切の生物を云ひ歸は悉く歸依するを云
○萬國之極宗、萬國にて此上もなき大本の敎と云意
○承詔必謹、三條は謹みて詔勅を奉ずべきことを諭されたり
○君則天之云々、管子に君臣者天地之位也また禮郊特牲に天先二乎地一君先二乎臣一其義一也とある如く天は上にして君に比し地は下にして臣に比す
○四時順行、四季の順氣

適に宜しきにしたがふ意
○萬氣得通、原本萬を方に作る北本魔本及傳曆に據て改む萬氣は人畜草木の氣にて其氣が四時順行に由て通ずることを得たなり
○地欲覆天云々、地として天を覆へさむとする時は地も亦必ず壞るゝものなりとなり君は臣を惠み臣は君を天として敬し君臣相和して萬事成り臣として君命に背く時は其身も壞ると云譬なり
○君言臣承云々、說苑に上之化下猶風靡草とあり上たる人善を行へば萬民其善に傚ふこと風の草を靡かすが如しとなり
○以禮爲本云々、四條は民を治むるの本は禮にあることを諭されたり傳曆乎を于に作る
○上不禮而下非齊云々、韓詩外傳に上無禮則不免乎刑下無禮則不免乎刑論語に齊之以禮とあり上たるもの禮を行はざれば下たるもの違亂を致して國家齊はず下たるもの上に對して無禮を致さば刑罰に處せらるることなり傳曆に而の字なく非を

有心、心各有執、彼是則我非、我是則彼非、我必非聖、彼必非愚、共是凡夫耳、是非之理、詎能可定、相共賢愚、如鐶无端、是以彼人雖瞋、還恐我失、我獨雖得、從衆同舉、十一曰、明察功過、賞罰必當、日者賞不在功、罰不在罪、執事群卿、宜明賞罰、十二曰、國司國造、勿斂百姓、國靡二君、民無兩主、率土兆民、以王爲主、所任官司、皆是王臣、何敢與公賦斂百姓、十三曰、諸任官者、同知職掌、或病或使、有闕於事、然得知之日、和如曾識、其以非與聞、勿妨公務、十四曰、群臣百寮、無有嫉妬、我既嫉人、人亦嫉我、嫉妬之患、不知其極、所以智勝於己、則不悅、才優於己、則嫉妬、是以五百歲之後、乃今遇賢、千載以難待一聖、其不得賢聖、何以治國、十五曰、背私向公、是臣之道矣、凡人有私必有恨、有憾必非同、非同則以私妨公、憾起則違制害法、故初章云、上下和諧、其亦是情歟、十六曰、使民以時、古之良典、故冬月有間、以可使民、從春至秋、農桑之節、不可使民、其不農何食、不桑何服、十七曰、

不に作る
○絶饕棄欲、五條は貪欲を去るべき事を諭されたり原本饕を饗に作る岩本中本及傳暦に據て改む左傳文十八年の注に貪財爲饕食爲饕とあり名利を貪る欲を絶ち棄てよとなり
○頃治訟者云々、訴ふる者より財利を貪るを常とし賄賂を取て罪を決するを云讞は正韻に議罪と注せり諸本頃を須に作る水本集解引一本に據て改む　○有財之訟云々、文選運命論に據れり財ある者の訟は石を水に投ずる如く必ず應報あり貧者の訟は水を石に撒する如く徒勞にして少しも聽き入るゝことなしとの意　○懲惡勸善古之良典、六條は勸善懲惡の必要なることを諭さる此句は左傳成十四年に出づ　○其諂詐者云々、後漢書虞詡傳に出づ　○人各有任云々、七條は凡そ人を任命するには特に注意し人の爲に官を設くべからざる事を諭さる　○世少生知云々、生知は論語季子に生而知之上也とあるに據り尅念作聖は尚書多方に惟聖罔念作狂惟狂克念作聖とあるに據れり尅は傳暦克に作る　○大少、傳暦拾芥抄少を小に作る少小相通ず　○爲人不求官、原本爲人の二字なし岩本北本應本及傳暦に據て補ふ　○早朝晏退、八條はよく王事に勤勞すべき事を諭されたり　○公事靡鹽、原本鹽を鹽に作る前本岩本應本及傳暦に據て改む毛詩唐風に王事靡盬注に盬不堅牢也とあり　○信是義本、九條は信義を守るべき事を諭さる信は仁義禮智信の信なり之を五行に配すれば義は秋にして金なり信は土にして土用に當る四季の運行も土用なければ行はれず人倫も仁義禮智の四を行はむとすれど信なき時は用に立たず故に信は義の本たりと云　○群臣共信、原本群を君に作る前本岩本等諸本及傳暦に據て改む下同じ　○絕忿棄瞋云々、十條は忿瞋を絕棄すべき事を諭さる忿は心の怒瞋は表に露はれたる怒なり忿瞋を絕棄て他人の道に違へるを咎めざるを云　○心各有執、執は我執なり人何れも心あり其心に直妄の二心あり執とは妄心を眞心と思ひ固く之を執て放たざるなり　○凡夫、釋氏要覽に大威德陀羅尼經曰於二生死一迷惑流轉住二不正道一故名二凡夫一とあり　○如鐶无端、傳暦に鐶を環に作る正字通に鐶通作環とあり環は圓成無端者と見ゆ我も彼も共に凡夫なれば是非の理詎れかよく之を定めむや環の端なくして終始なきが如く何れを賢何れを愚とも定め難しとなり　○明察功過云々、十一條は賞罰を明にすべき事を諭さる　○賞不在功云々、原本罪を罰に作る岩本中本傳暦に據て改む暗君は賞すべき功なくとも賞し罰すべき罪過なくとも罰するもの多しとなり　○執事群卿、君主を輔けて事を執る群卿を云　○國司國造勿歛百姓、十二條は國司國造の收歛することを戒められたり國司國造を並稱すること此に始てなり國司國造たるもの官給の外に私に百姓より稅を歛め取ること勿れとなり　○國靡二君云々、諸本靡を非に作る傳暦に據て改む禮記曾子問に天無二日一土無二王一とあるに據れり從來部曲の民は我私有の如く信ぜしを其弊を革めて率土の萬民を悉く王臣なりと定められしなり　○賦歛百姓、天子より任命する國司國造は皆是朝廷の臣なれば何ぞ敢て天子と同じく百姓を賦歛せむやとなり賦は課役を命ずること歛は稅を取上ぐることなり　○諸任官者云々、十三條は凡そ官に任ぜられし者は各々其職掌を知て之を守るべしとなり　○得知之日云々、原本妨を防に作る水本及傳暦に據て改む宣癒え或は使を果し還りて官衙に出勤の日は同僚と和合して不參中の事も曾てより議れるが如くにせよ我は之を與聞せなど云て公務を妨ぐること勿れとなり水本和を知に作る　○無有嫉妬、十四條は嫉妬を戒められたり　○五百歲之後云々、原本百の字及後の字を脫す中本水本及傳暦に據て補ふ又原本今を合に作る中イ本及傳暦に據て改む賢者には五百歲に一度僅に遇ふを得れど聖人には千歲の間にも遇ひ難し聖賢に遇ふことは斯の如く難きを之を嫉妬するは非なりとの意　○背私向公云々、十五條は私心を擲て公に盡すが臣たるの道なりと諭されたり　○凡人有私、原本凡の下夫の字あり岩本寮本應本及傳暦に據て削る

大事不可獨斷、必與衆宜論、少事是輕、不可必衆、唯逮論大事、若疑有失、故與衆相辨、辭則得理、秋九月、改朝禮、因以詔之曰、凡出入宮門、以兩手押地、兩脚跪之、越梱則立行、是月、始定黃書畫師、山背畫師、

○使民以時云々、十六條は人民を使役するに定まれる時を以てすべきことを諭されたり使民以時は論語學而篇に見ゆ　○大事不可獨斷、十七條は大事は擅に獨斷すべからざる事を戒めらる原本大を夫に作る傳曆に據て改む　○辭則得理、傳曆に得理の下矣の字あり　○改朝禮、古來よりの禮法を改められしなり　○出入宮門、宮衛令義解に衛門所守謂之宮門兵衛所守謂之閤門又衛門府督一人掌諸門禁衛出入禮儀とあり　○以兩手押地、通證に中務式女官降座再拜用拔地拜謂著兩手於地首不至乎地とあり兩手を地に著るを云　○兩脚跪之云々、梱を越ゆるに當りて跪き手をつきて跨くなり　○並書書師、錄山城諸蕃に黃文連高麗人久斯那王之後也とあり是か　○山背畫師、詳ならず

【十三年】錦繡丈六佛像、銅は金銅、繡は抄布帛部に繡蔣勦切韻云繡（訓沼无毛乃）以五色絲刺萬物形狀也とあり卽ち刺繡なり　○鞍作鳥、世に所謂鳥佛師なり　○大興王、三國史記に嬰陽王（一云平陽）諱元とあり　○三百兩、通證に兩訓古呂持統紀同拾芥鈔六銖爲一分四分爲一兩今按此據唐制乃十匊也とあり　○褶、天武紀十一年二月に褶をヒラと又ヒラすビと訓り衣服令皇太子の禮服に深紫紗褶義解に謂褶者所以加袴上故云袴褶集解に褶謂似婦人裳也褶訓枚帶也又云褶著袴上也ともあり　ヒラオビは平帶の意之をヒラミと云はヒラビの轉訛ぜるなり

【十四年】金堂、抄調度部に金堂楊氏云佛殿金堂也禮堂金堂前名とあり禮堂に同じ金堂と稱するは金箔を以て塗れるに由れり　○設齋、齋は齋會なりヲカミスは爲拜にて佛を禮拜するによれり　○四月八日、釋迦誕生の日にて灌佛會の初なり　○七月十五日、盂蘭盆會

（乙丑）十三年夏四月辛酉朔、天皇詔皇太子大臣及諸王諸臣、共同發誓願、以始造銅繡丈六佛像各一軀、乃命鞍作鳥爲造佛之工、是時高麗國大興王、聞日本國天皇造佛像、貢上黃金三百兩、閏七月己未朔、皇太子命諸王諸臣俾著褶、冬十月、皇太子居斑鳩宮、

（甲寅）十四年夏四月乙酉朔壬辰、銅繡丈六佛像並造竟、是日也、丈六銅像坐於元興寺金堂、時佛像高於金堂戶、以不得納堂、於是諸工人等議曰、破堂戶而納之、然鞍作鳥之秀工、以不壞戶得入堂、卽日設齋、於是會集人衆不可勝數、自是年初每寺、四月八日、七月十五日設齋、五月甲寅朔戊午、勅鞍作鳥曰、朕欲興隆內典、方將建佛刹、肇求舍利、時汝祖

父司馬達等、便獻舍利、又於國無僧尼、於是汝父多須那爲橘豐日天皇出家、恭敬佛法、又汝姨嶋女、初出家爲諸尼導者、以修行釋教、今朕爲造丈六佛、以求好佛像、汝之所獻佛本、則合朕心、又造佛像既訖、不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戶、然汝不破戶而得入、此皆汝之功也、卽賜大仁位、因以給近江國坂田郡水田廿町焉、鳥以此田爲天皇作金剛寺、是今謂南淵坂田尼寺、秋七月、天皇請皇太子、令講勝鬘經、三日說竟之、是歲、皇太子亦講法華經於岡本宮、天皇大喜之、播磨國水田百町施于皇太子、因以納于斑鳩寺、

○將建佛刹、元興寺の建立を云　○佛本、集解に造佛像圖本也とあり　○大仁、第三位なり　○南淵坂田尼寺、用明紀二年に見ゆ　○請皇太子、原本にマキセテとあるは誤なり北本楓本にマギテ又マセテとあり何れにてもよしマキは求マギなり　○勝鬘經、明三藏聖敎目錄大乘經寶積部に勝鬘師子吼一乘大方便廣經一卷拔求那跋陀羅譯とあり　○法華經、妙法蓮華經の略稱、秦の羅什譯す太子の講ぜられしは七卷本なり後普門品を加へて八卷とす　○岡本宮、傳曆に岡基宮とあり同書に法隆寺は與宮同基在宮之西也とあるに據れば其の東に在りしなるべし通證に平群郡三井岡本邑隣法隆寺村とあり今昔十六に大和國平群郡の鵤(イカルカ)村に岡本寺と云ふ寺有りと記せり此地なり舒明紀齊明紀等に見ゆる岡本宮は高市郡なれば之と別なり　○大喜、原本大を太に作る諸本に據て改む　○播磨國水田、帝說に天皇布施聖王播磨國揖保郡佐勢地五十萬代とある是なり　○斑鳩寺、法隆寺なり

【十五年】壬生部、皇太子の壬生部なり　○詔曰、皇太子及蘇我馬子等崇佛にのみ心を傾けて建國以來の國風たる敬神の道を忽諸にし給ひしより特に此詔を下し給ひしなるべし

(丁卯)十五年春二月庚辰朔、定壬生部、戊子、詔曰、朕聞之、曩者我皇祖天皇等宰世也、跼天蹐地、敦禮神祇、周祠山川、幽通乾坤、是以陰陽開和、造化共調、今當朕世、祭祀神祇、豈有怠乎、故群臣共爲竭心、宜拜神

祇、甲午、皇太子及大臣率百寮以祭拜神祇、秋七月戊申朔庚戌、大禮小野臣妹子遣於大唐、以鞍作福利爲通事、是歲冬、於倭國作高市池、藤原池、肩岡池、菅原池、山背國掘大溝於栗隈、且河內國作戶苅池、依網池、亦每國置屯倉、

○識者、字書に識は昔也又久也とあり ○蹋天蹈地、文選謝平原內史表に出づ字書に蹋は不伸又促也曲也蹣は小步也累足也とあり 恐懼の貌なり ○屈祠山川、尚書堯典に出づ支那にては名山大川を祭れど我國にてはさることなし山川の神を祀れるなかく漢文のまゝに書けるなり ○幽通乾坤、天皇誠敬の大御心の天神地祇に感通するを云 ○陰陽開和云々、夏冬の季候調和して萬物よく生成するを云 ○共爲竭心、共の字は諸本に據て補ふ ○小野臣、記の孝昭天皇の段に天押帶日子彥命者小野臣之祖也、錄左京皇別に小野朝臣(中略)敏達天皇御世大德小野臣妹子家于近江國滋賀郡小野村因以爲氏天武紀十三年小野臣賜姓曰朝臣と見ゆ ○大唐、十五年は隋煬帝大業三年に當る通證に今按我邦以漢唐專爲西土稱故書爲大唐蓋記者之詞也とあり大字を冠するは今歐米諸國を泰西と云に同じモロコシは諸越の義其は支那南方に閩越、駱越、南越、粵越などありて之を惣べて百越とも諸越とも云ひ其諸越をモロコシと訓みて支那國一圓の惣名とせるなり ○鞍作福利、通證に蓋司馬達等之族福利字見梵書とあり ○通事、通譯なり雄略紀七年(卷上二一七〇頁)に譯語とあるに同じ ○高市池、古此詳ならず大和國高市郡なるべし ○藤原池、同上 ○肩岡池、大和志に葛下郡蓮田池在王寺村一名片岡池とあり ○菅原池、添下郡、今生駒郡伏見村にあるべし ○栗隈、山城國久世郡に在り既に仁德紀十二年(卷上二一九頁)に出づ ○戶苅池、河內志に古市郡戶苅池在藏內村とあり ○依網池、同志に丹比郡池田池在池內村或曰依羅池とあり

【十六年】蘇因高、通證に小妹子之訛也とあり ○裴世清、北史倭傳に文林郎裴世清とあり ○吉士、原本士を師に作る北本應本中本に據て改む ○難波高麗館、攝津志に東生郡三韓館在安國坂上とあり ○江口、舒明紀四年にも見ゆ數田氏標注に江口は淀川の江口にて今大阪の

十六年夏四月、小野臣妹子至自大唐、唐國號妹子臣曰蘇因高、卽大唐使人裴世清、下客十二人、從妹子臣至於筑紫、遣難波吉士雄成、召大唐客裴世清等、爲唐客更造新館於難波高麗館之上、六月壬寅朔丙辰、客等泊于難波津、是日、以飾船卅艘、迎客等于江口、安置新館、於是以中臣宮地連摩呂、大河內直糠手、船史王平爲掌客、爰妹子臣奏之曰、

中島邊なりしとおぼし到館前とあるを見るべしと云遊女記に江口とあるは是とは別なりと云

○中臣宮地連　錄左京神別に中臣宮處連大中臣同祖天兒屋根命十世孫巨知人命之後也とあり

○摩呂、原本摩を磨に作る北本中本に據て改む二十年紀に中臣宮地連烏摩侶と見ゆるは同人ならむか考ふべし

○大河內直糠手、通證に北史倭傳に小德何輩鞋とあるは河內直の訛なるべし

○掌客、欽明紀廿二年（七二頁）に出づ

○唐帝以書授臣云々、馭戎慨言にこは我國より彼に遣はしゝ國書を見て隋帝悅ばずとあれば是が返牒とあらむには必す禮なき文辭を陳れしなるべしさるものを上りたらむには天皇の受容れ給ふまじければ百濟にて掠取られしなどゝ僞りて申立てしなるべし云々と云りさもあるべし

○飾騎、下文に莊馬とあり美しき鞍を著せたる馬なり飾馬の事江家次第御

臣參還之時、唐帝以書授臣、然經過百濟國之日、百濟人探以掠取、是以不得上、於是群臣議之曰、夫使人雖死之不失旨、是使矣、何怠之失大國之書哉、則坐流刑、時天皇勅之曰、妹子雖有失書之罪、輒不可罪、其大國客等聞之亦不良、乃赦之不坐也、秋八月辛丑朔癸卯、唐客入京、是日、遣飾騎七十五匹、而迎唐客於海石榴市衢、額田部連比羅夫以告禮辭焉、壬子、召唐客於朝庭、令奏使旨、時阿倍臣、物部依網連抱二人爲客之導者也、於是大唐之國信物置於庭中、時使主裴世清親持書、兩度再拜言上使旨而立之、其書曰、皇帝問倭皇、使人長吏大禮蘇因高等至具懷、朕欽承寶命、臨仰區宇、思弘德化、覃被含靈、愛育之情、無隔遐邇、知皇介居海表、撫寧民庶、境內安樂、風俗融和、深氣至誠、遠脩朝貢、丹欵之美、朕有嘉焉、稍暄、比如常也、故遣鴻臚寺掌客裴世清等、指宣往意、并送物如別、時阿倍臣出庭以受其書而進行、大伴囓連迎出、承書置於大門前机上而奏之、事畢而退焉、是時、皇

禊日及賀茂祭使條等に見ゆ　○海石榴市、大和國城上郡なり武烈紀敏達紀等に見ゆ　○額田部連、欽明紀二十二年に掌客額田部連と見ゆ北史に人禮哥多毗金二百餘騎郊勞辛彼都とあり　○阿倍鳥臣、下に阿倍鳥子臣又阿倍內臣鳥とあるも同人なり　○物部依網連、錄河內神別に物部依羅連神饒速日命之後也とあり　○其書曰、此國書につきて馭戒僭言に經籍後傳記に小治田朝十二年云々其書曰皇帝問倭王聖德太子甚惡其黷天子之號爲倭王而不賞其使とあるぞ實なりけむを書紀には王とおさし申せる事をきらひて皇の字に改めてのせられたるなるべし然るを太子傳曆に此隋王が書の事をいかにと天皇の問はせ玉へる太子の御答に天子賜諸侯王書式也然皇帝之字天下一耳而用倭皇字彼有其禮應恭而修と申し玉へるよし記せるは書紀の皇字につきて作れること聞えたりすべて此傳曆にはかゝる類のつくり言多くてうけがたし云々と云り　○長吏、北本寮本吏を史に作る　○具懷、國寶記に懷を狀に作る集解之に從ふ　○臨仰、通釋以文校本及大日本史に據て臨御に改作る　○含靈、通證に謂有情也とあり　○介居、原本介を命に作る岩本北本寮本等に據て改む介は左傳の注に間也とあり　○遠俯四貢、太子が斯くの如き無禮なる信書を受容られしは國體を辱めたりと云べし　○稍暄、原本稍を稱に作る諸本に據て改む　○鴻臚寺、通證に漢書曰奏爲典客云々漢改爲大鴻臚釋名鴻大也臚陳也欲大以禮序陳賓客也とあり　○指宣、原本指を稍に作る國寶記に據て改む　○出處、原本庭を進に作る北本に據て改む　○金髻華、金を以て花葉を造りしなり髻華の事上に出づ　○大郡、欽明紀廿二年（七二頁）に見ゆ　○東天皇敬白、傳曆に白を問とせり、義には日出處天子日沒處天子と云文字を用ひしに隋煬帝の不快を買ひしことを顧慮して今回は文字を改められしなるべし　○尊、隋皇を指す尊の下國寶記に候字あり　○清念、原本念を念に作る岩本鹿本楓本に據て改む念は字書に喜也とあり　○平那利、雄成にては訓み難かるべしとて假名を用ひしなり　○奈羅譯語、續紀卅四に裕曰佐河內等賜姓長岡忌寸錄大和諸蕃に長岡忌寸己智同祖諸蕃王之後とあり

子諸王諸臣悉以金髻華著頭、亦衣服皆用錦紫繡織及五色綾羅一云、皆用冠色、丙辰、饗唐客等於朝、九月辛未朔乙亥、饗客等於難波大郡、辛巳、唐客裴世清罷歸、則復以小野妹子臣爲大使、吉士雄成爲小使、福利爲通事、副于唐客而遣之、爰天皇聘唐帝、其辭曰、東天皇敬白西皇帝、使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解、季秋薄冷、尊何如、想清念、此卽如常、今遣大禮蘇因高、大禮乎那利等往、謹白不具、是時、遣於唐國學生、倭漢直福因、奈羅譯語惠明、高向漢人玄理、新漢人大國、學問僧新漢人日文、南淵漢人請安、志賀漢人慧隱、新漢人廣齊等、幷八人也、是歲、新羅人多化來、

（己智は秦太子胡亥之後也）奈羅は大和國添上郡今の奈良なり譯語は雄略紀七年に出づ　○高向漢人玄理、高向は錦部郡の村名漢人は姓なり孝德紀二年には高向博士黑麻呂とあり　○新漢人、雄略紀七年（卷上二七〇頁）に出づ　○日文、孝德紀元年に旻の一字に作る　○南淵、大和國高市郡の地名　○志賀、近江國志賀郡又大和國吉野郡に志賀村あり何れか判ち難し　○慧隱、原本慧を惠に作る諸本に據て改む　○新漢人廣齊、新の字は諸本に據て補ふ齊は岩本中本濟に作る

【十七年】筑紫大宰、大宰の文字始て此に見ゆ是令制大宰府の起源なり雄略天皇の頃より我國威韓土に振はす任那日本府の威令も行はれすなり欽明の朝日本府の所在地にして我酋屬の任那すら新羅に滅されし故に屢々出兵して復興を計りしかど成らす日本府も內地へ引揚ぐるに至れり宣化紀元年（三六頁）に脩造官家那津之口と見えたるは大宰府の始にてやがて令制の大宰府となり再遷して後の鎭西府となれり　○一十人、釋紀一を二に作る　○俗人、シロキヌと白衣なり儕侶　黑衣に對して云　○葦北、景行紀十八年（卷上一四九頁）に見ゆ　○吳國、集解に按江南吳地と云　○本鄕、北本本國に作る　○以歡喜、集解傍訓に據り以の上に是の字を補ふ　○道人、智度論に得道者名爲道人餘出家者未得道者亦名道人とあり水本に道人疑當作道欣と云　○十一、通證に一を人に作るべしと云　○妹子等、等の字は北本應本中本に據て補ふ

（己巳）十七年夏四月丁酉朔庚子、筑紫大宰奏上言、百濟僧道欣、惠彌爲首、一十人、俗人七十五人、泊于肥後國葦北津、是時遣難波吉士德摩呂、船史龍、以問之曰、何來也、對曰、百濟王命以遣於吳國、其國有亂不得入、更返於本鄕、忽逢暴風、漂蕩海中、然有大幸而泊于聖帝之邊境、以歡喜、五月丁卯朔壬午、德摩呂等復奏之、則返德摩呂龍二人、而副百濟人等送本國、至于對馬、以道人等十一皆請之欲留、乃上表而留之、因令住元興寺、秋九月、小野臣妹子等至自大唐、唯通事福利不來、

【十八年】紙墨、始て見ゆ　○碾磑、職員令主殿寮の義解に水碓也作米曰碾作麵曰磑とあり　○蓋造碾磑云々、以下九字分注誤連書者と信友云

（庚午）十八年春三月、高麗王貢上僧曇徵、法定、曇徵知五經、且能作彩色及紙墨、并造碾磑、蓋造碾磑始于是時歟、秋七月、新羅使人沙喙部奈末竹世士、與任那使人喙部大舍首智買、到于筑紫、九月、遣使召新羅任那使

人、冬十月己丑朔丙申、新羅任那、使人臻於京、是日、命額田部連比羅夫、爲迎新羅客、莊馬之長、以膳臣大伴、爲迎任那客、莊馬之長、卽安置阿斗河邊館、丁酉、客等拜朝廷、於是命秦造河勝、土部連菟、爲新羅導者、以間人連鹽蓋、阿閉臣大籠、爲任那導者、共引以自南門入之、立于庭中、時大伴咋連、蘇我豐浦蝦夷臣、坂本糠手臣、阿倍鳥子臣、共自位起之、進伏于庭、於是兩國客等各再拜、以奏使旨、乃四大夫起進啓於大臣、時大臣自位起、立聽前而聽焉、旣而賜祿諸客、各有差、乙巳、饗使人等於朝、以河內漢直贄、爲新羅共食者、錦織首久僧、爲任那共食者、辛亥、客等禮畢以歸焉、

○沙喙部、沙喙は地名にして部は部曲を云　○奈末竹世士、奈末は新羅の官、原本末を未に作る通鑑に據て改む又原本士を土に作る若本應本中本に據て改む　○喙部、集解に按喙上脫沙字とあり　○大舍、新羅の官　○莊馬、騎に同じ原本庄馬とす莊の俗字なり　○阿斗、敏達紀十二年（九〇頁）に出づ　○間人連、錄左京皇別に間人宿禰仲哀天皇皇子譽屋別命之後也とあり天武紀十三年に宿禰の姓を賜ふ　○咋連、上に咋を嘴に作る　○蘇我豐浦蝦夷臣、馬子の子、帝說に蘇我豐浦毛人（エミシ）に作る　○各有差、原本各の字なし北本楓本中本に據て補ふ　○河內漢直、中本に河內を西の一字とす天武紀十二年に川內漢直賜姓曰忌寸とあり錄河內諸蕃に漢河內忌寸山城忌寸同祖魯國白龍王之後也とあり　○共食者、雄略紀十四年（卷上二八〇頁）に出づ　○錦織首、欽明紀卅一年（七八頁）に錦部首とあり　○客等、等の字は中本に據て補ふ

【十九年】五月五日、干支を以て書すべきを藥獵の日なれば目安からむ爲に古記のまゝに記されたるなるべし　○藥獵、鹿の若角を採らむ爲の獵なり萬葉十六に

十九年夏五月五日、藥獵於菟田野、取鷄鳴時集于藤原池上、以會明乃往之、粟田細目臣爲前部領、額田部比羅夫連爲後部領、是日、諸臣服色皆隨冠色、各著誓華、則大德小德並用金、大仁小仁用豹尾、大禮

四月與五月間爾采獵仕流時爾云々と見ゆ　○菟田野、大和志に宇陀郡足立村と見ゆ　○藤原池、大和國高市郡　○賣田細目臣、錄有京皇別に粟田朝臣天足彦國忍人命之後也天武紀十三年粟田臣賜姓曰朝臣と見ゆ　○部領、コトリは事執りの意ならむと通證に云り　○用金、集解に按鏤金爲華とあり　○豹尾、欽明紀十四年（六五頁）にも見ゆ　○鳥尾、通證に事物起原曰上黨諸山中多鷄似雉而大青色頂有毛角鬬至死而已古之爲將士者取其毛尾插於冑上今軍中插雉尾卽此也と云り　○吳羅遣、原本遣を造に作る諸本に據て改む　○北叱智、岩本北を比に作る　○習部、上の沙喙部の類なり其の類に習比部あり習の下或は比の字を脫せるか（附錄參照）

以下用鳥尾、秋八月、新羅遣沙喙部奈末北叱智、任那遣習部大舍親智周智、共朝貢、

【廿年】上壽、後漢書の注に壽者人之所欲故卑下奉觴進酒皆言上壽とあり故に此に大御酒奉ると訓り　○夜須瀰志斯、瀰は原本彌に作る諸本に據て改む下同じ　○訶句理摩須、祝詞に天之御蔭日之御蔭と隱坐とあるに同じく天日の御影に覆はれて其中に隱坐す由なり　○阿摩能椰蘇訶礙、天日の光を云かもとにて移して天皇の御舍のことに云　○異泥多々須、御座に出御し給ふを云　○瀰蘇羅烏瀰禮麼、天皇の坐す御宮の形容なり　○瀰禮麼、原本麼を摩に作る北本中本及類史に據

（壬申）廿年春正月辛巳朔丁亥、置酒宴群卿、是日、大臣上壽、歌曰、夜須瀰志斯、和餓於朋耆瀰能、訶句理摩須、阿摩能椰蘇訶礙、異泥多々須、瀰蘇羅烏瀰禮麼、豫呂豆余珥、訶句志茂餓茂、知余珥茂、訶句志茂餓茂、知余珥茂訶句志茂餓茂、訶之胡瀰豆、菟伽陪摩都羅武、烏呂餓瀰豆、菟伽陪摩都羅武、宇多豆紀摩都流、天皇和曰、摩蘇餓豫、蘇餓能古羅破、宇摩奈羅麼、譬武伽能古摩、多智奈羅麼、句禮能摩差比、宇倍之訶茂、蘇餓能古羅烏、於朋枳瀰能、菟伽破須羅志枳、二月辛亥朔庚午、改葬皇太夫人堅鹽媛於檜隈大陵、是日、誄於輕街、第一阿倍內臣烏誄天皇之命、則

て改む下同じ ○知余珥茂訶句志茂餓茂、通證に類聚國史無此二句疑衍と云 ○宇多豆紀麼都流、ウタツキは宴の杯なり御盞を奉るを云 ○摩蘇餓璞、次句を呼出す辭 ○句禮能摩差比、鋤サビは劍のことなり神武紀戊午年(卷上八四頁)に鋤持神ありさて刀劍は支那國のは我國には遠く及ばざれどこゝは遠來の物を珍しく思ひて出せしなり ○蘇餓能古羅烏、蘇我の子等と子をつけたるは親みていへるなり ○譬武加、原本譬の辟に作る諸本及類史に據て改む ○菟伽破須羅志枳、ラシは推量の辭キは過去の辭なれど現在にても強めて云ふ時に用ふ ○皇太夫人、原本太を大に作る諸本及類史に據て改む清寧紀元年(卷上二九〇頁)に出づ ○堅磐媛、蘇我稻目の女にて天皇の御母なり ○檜隈大陵 欽明天皇の御陵なり、此下に原本第一の二字あり岩本中本及類史に據て削る ○輕街、高市郡 ○天皇之命、天皇の大詔命なり宣命使として誄を奉るなり ○奠靈、集解に原本脫塗車芻靈三字靈訓爲神靈非禮記檀弓曰塗車芻靈目占有之鄭註芻靈束茅爲人馬謂之靈者神之類とあり ○明器、アケホノと訓るはミケツモノの誤にて御食器ミケツモノとなり禮記檀弓に其曰明器神明之とあり ○明衣、景行紀四十年(卷上一六〇頁)に出づ ○大臣之辭、大臣の誄を代て申すなり ○八腹臣、腹とは氏の支別を云其例は續紀延曆三年十二月に土師氏忠有四腹云々自餘三腹者云々と見ゆ此は蘇我氏の支族を云八は大數を擧げしにて正數にあらず ○境部臣摩理勢、傳曆に據るに馬子の兄弟なり ○誄氏姓之本、蘇我氏の本を述て誄詞とせるなり ○五月五日、己卯朔癸未 ○羽田、履

奠靈明器明衣之類萬五千種也、第二諸皇子等以次第各誄之、第三中臣宮地連烏摩侶誄大臣之辭、第四大臣引率八腹臣等、便以境部臣摩理勢、令誄氏姓之本矣、時人云、摩理勢烏摩侶二人能誄、唯烏臣不能誄也、夏五月五日、藥獵之集于羽田、以相連參趣於朝、其裝束如菟田之獵、是歲、自百濟國有化來者、其面身皆斑白、若有白癩者乎、惡其異於人、欲棄海中嶋、然其人曰、若惡臣之斑皮者、白斑牛馬不可畜於國中、亦臣有小才、能構山岳之形、其留臣而用、則爲國有利、何空之棄海嶋耶、於是聽其辭以不棄、仍令構須彌山形及吳橋於南庭、時人號其人曰路子工、亦名芝耆摩呂、又百濟人味摩之歸化、曰、學于吳得伎樂儛、則安置櫻井而集少年令習伎樂儛、於是眞野首弟子、新漢齊文二人、習之傳其儛、此今大市首、辟田首等祖也、

中紀五年(卷上二四〇頁)に出づ　○菟田之縣、前年五月五日の下に見ゆ　○白癩、抄疾病部に白癩、之良波太)人面及身頸皮肉色變白亦不痛癢者也とあり　○有利、クボサは字鏡集名義抄等に癩なクブサと訓り說文に癩は有餘賈利也と注すれば同じ意なり　○須彌山、通志に長阿含經曰四洲地心卽須彌山西域記曰蘇迷盧山唐言妙高山舊曰須彌又曰須彌婁若訛瑯邪代醉曰崑崙山一名鐵圍卽佛家之須彌と云　○吳橋、通證に今所謂唐橋と云高く反りたるさまの橋なるべし　○路子工、詳ならねど路子は名なるべし　○芝耆摩呂、酒摩呂ならむ　○伎樂儛、吳の舞樂なり通證に伎樂見後漢志久禮訓取于吳令雅樂寮伎樂師一人義解伎樂謂吳樂とあり　○櫻井、大和志十市郡に櫻井村あり是なるべし　○百野首弟子、錄有京蕃別に眞野造百濟國人速古王之後也とあり此族ならむ弟子は名なり　○新漢齊文、漢の下人の字を脫せるか中本齊を濟に寮本文を父に作る　○此今云々、以下十一字中本に據て補ふ錄左京諸蕃に大市首仁那國人都怒我阿羅斯日之後也とあり

【廿一年】十一月、楓本應本十月とす　○掖上池、大和志に在葛上郡井戸村とあり今南葛城郡葛城村大字江戸　○畝傍池、大和國高市郡　○和珥池、大和志に添上郡和珥池在池田村一名光臺寺池と云仁德紀十三年(卷上二一九頁)に見ゆ　○置大道、此御世の京は大和國高市郡小墾田なれば大道は今の竹內街なるべしと云　○片岡、大和志に葛下郡片岡在片岡莊今泉村とあり今北葛城郡王寺村志都美村上牧村等に亘れる汎稱なり今泉村は今志都美村の大字となれり　○道垂、道の傍なり垂は邊垂の垂に同じ　○斯那提流、傳曆に支那照耶とあり、片岡の枕詞　○伊比爾惠豆、惠はウエの約りたるにて飢の意

(癸酉)廿一年冬十一月、作掖上ノ池、畝傍ノ池、和珥ノ池ヲ、又自難波ヲ至京ニ置大道ヲ、十二月庚午朔、皇太子遊行ス於片岡ニ、時ニ飢者臥セリ道垂ニ、仍問フ姓名ヲ、而不言サ、皇太子視テ之ヲ與ヘ飲食ヲ、卽脫シ衣裳ヲ覆ヒ飢者ニ、而言ハク、安臥セ也、則歌ヒテ之ヲ曰ハク、斯那提流、箇多烏箇夜摩爾、伊比爾惠豆、許夜勢屢、諸能多比等、阿波禮、於夜那斯爾、那禮那理鷄迷夜、佐須陀氣能、枳彌波夜那祇、伊比爾惠豆、許夜勢留、諸能多比等、阿波禮、辛未、皇太子遣使令視ム飢者ヲ、使者還來テ之ヲ曰ハク、飢者既死ス、爰ニ皇太子大悲ミ之ヲ、則因テ以葬ム埋於當處ニ、墓固封ス也、數日之後、皇太子召近習者ヲ謂ヒテ之ヲ曰ハク、先日臥セル于道ニ飢者、其ハ非ス凡人ニ、爲ム必眞人ニ也、遣使令視ム、於是使者還來テ之ヲ曰ハク、到テ於墓所ニ而視レバ之、封埋カタメウヅメルトコロズ勿レ動カ、乃開テ以見レバ屍骨ニ既空シクナリタリ、唯衣服疊ミテ置ク棺上ニ、於是皇太子復ノ返シ使者ヲ、令レ取ラ其ノ衣ヲ、如ク常ノ且服タ矣、

時人大異之曰、聖之知聖其實哉、逾惶、

○許夜勢應、寢臥をコヤスといへるは記上卷伊那那美命火神を生坐せる條及萬葉九に見ゆ　○那禮那理礙迷夜、親なしに汝は生り出で來しかさはあるまじとの意　○佐須陛氣能、次句の枕詞　○枳彌波夜那祇、枳彌は大君の意ならむと守部云い傳暦に飢人起レ首逢二答歌一曰斑鳩之富小河之絶者社我王之御名者忘目々あれどこれは誤にて帝說に上宮聖時巨勢三杖大夫歌伊加留我乃止美能乎何波乃々叡波社曾和何於保支美乃爾奈和何真叡米とあるが正し　○墓固封、續異記に崗本村法林寺東北角有二守部山一作レ墓而收名曰二人木墓一云々とあり　○近習者、原本習の下衍字あり岩本中本に據て削る　○爲必眞人、岩本中本爲の字なし眞人は史記始皇本紀に眞人者入レ水不レ濡入レ火不レ爇、說文に眞人仙人變レ形而登レ天也とあり此眞人を編年記に達摩和尙とし清輔の袋草紙に文殊菩薩とするは無稽レ說なり

【廿二年】五月、壬寅なり

○犬上君、君の字は岩本北本應本に據て補ふ景行紀五十一年（卷上一六一頁）に出づ

○矢田部造、崇神紀六十年（卷上一二一頁）に矢田部造祖武諸隅とあり舊事紀に詔二大仁矢田部御嬬連公一改レ姓命一造則遣二大唐一使復大禮犬上君御田鍬爲小使一とあり此に從へば矢田部造は大使なり

【廿三年】七月、北本中本九月に作る

○百濟客矣、應本中本矣の字なし

○慧慈、原本慧を惠に作る諸本に據て改む下同じ

【廿四年】掖玖人、掖玖は式神名帳に大隅國馭謨郡一座（小、益救神社あり馭謨郡は本國を距百二十里西南海中に在りて周囲百二十六里今屋久嶋と云久上代掖玖といひしは今の屋久にあらで琉球國を指せりと云說あり　○夜句　掖玖に同じ　○朴井、和泉志泉南郡の條に榎井池在二西内村一とあれば此地なるべし　○秋七月、此三字恐くは衍なるべし　○貢佛像、傳暦にも見ゆ　【廿五年】神、郡、神門郡なるべし　○瓜、諸本　に作る名義抄に瓜俗とあり瓜の俗字なり　○如缶、抄器皿部に盆唐韻云盆（比良加）瓦器也爾雅云瓮〈甕注云按瓮瓮同字）謂之缶（音不訓二保度岐一）主計式に缶三口受二五斗一瓮（ホトキ）二口受二三斗一と

【廿二年】

（甲戌）廿二年夏五月五日、藥獵也、六月丁卯朔己卯、遣二犬上君御田鍬、矢田部造名一於大唐、秋八月、大臣臥病、爲二大臣一而男女并一千人出家、

（乙亥）廿三年秋七月、犬上君御田鍬、矢田部造、至自大唐、百濟使則從二犬上君一而來朝、十一月己丑朔庚寅、饗二百濟客矣、癸卯、高麗僧慧慈歸二于國一、

（丙子）廿四年春正月、桃李實之、三月、掖玖人三口歸化、夏五月、夜句人七口來之、秋七月、亦掖玖人廿口來之、先後并卅人、皆安置於朴井、未及還、皆死焉、秋七月、新羅遣二奈末竹世士一貢二佛像一、

（丁丑）廿五年夏六月、出雲國言、於二神戸郡一有瓜、大如缶、是歲、五穀登之、

あり字鏡に弐盆盍甌甌甕寿の諸字を保止支と注せり

【廿六年】興卅萬衆攻我、隋書煬帝紀大業八年正月の條に親總六師用申九伐云々一百一十三萬三千八百二百萬其餽運者倍之、三月の條に軍爲賊所拒右屯衛大將軍云々皆死と、七月の條に九軍並陷將帥奔還云々とあり此年は推古天皇二十年に當れり　○弩抛石、抄調度部に弩を於ネ由美と注す軍防令に發弩抛石、義解に抛者猶擲也とあり又抄調度部にも（以之波之岐）建大木置石其上發機以投敵也とあり原本抛を扰に作る集解に據て改む　○是年、是歳とあるが例なり　○河邊臣、錄右京皇別に川邊朝臣武内宿禰之後也とあり天武紀十三年に朝臣の姓を賜ふ注に闕名とあれど下に河邊臣禰受見え孝德紀に河邊臣磐管、百依、磯泊、麻呂など見ゆれば何れかの内なるべし　○舶材、舶をツムと訓るは神功紀（卷上一七七頁）に見ゆ　○霹靂、神功紀攝政前紀（卷上一七八頁）に出づ　○奉幣帛、奉は原本祭に作る集解に據て改む

【廿七年】蒲生河、蒲生は近江國の郡名なり　○形如兒云々、釋紀に兼名苑曰人魚一名鮫魚身人面者也とあり

【廿八年】砂礫、抄天地部に細石說文云礫（和名佐々禮以之）水中細石也また砂聲類云砂（和名以

（戊寅）廿六年秋八月癸酉朔、高麗遣使貢方物、因以言、隋煬帝興卅萬衆攻我、返之爲我所破、故貢獻俘虜貞公普通二人、及鼓吹弩抛石之類十物、并土物駱駝一疋、是年、遣河邊臣名於安藝國令造舶、至山覓舶材、便得好材、以名將伐、時有人曰、霹靂木也、不可伐、河邊臣曰、其雖雷神、豈逆皇命耶、多奉幣帛、遣人夫令伐、則大雨雷電之、爰河邊臣案劍曰、雷神無犯人夫、當傷我身而仰待之、雖十餘霹靂、不得犯河邊臣、卽化少魚以挾樹枝、卽取魚焚之、遂脩理其舶、

（己卯）廿七年夏四月己亥朔壬寅、近江國言、於蒲生河有物、其形如人、秋七月、攝津國有漁父、沈罟於堀江、有物入罟、其形如兒、非魚非人、不知所名、

（庚辰）廿八年秋八月、掖玖人二口流來於伊豆嶋、冬十月、以砂礫葺檜隈陵上、則域外積土成山、仍每氏科之、建大柱於土山上、時倭漢坂上直樹柱勝

之太高、故時人號之曰大柱直也、十二月庚寅朔、天有赤氣、長一丈餘、形似雉尾、是歲、皇太子、嶋大臣共議之、錄天皇記、及國記、臣連伴造國造百八十部、并公民等本記、

佐古一云須奈古）水中細礫也とあり
○檜隈陵、廿年紀に出づ
○倭漢坂上直、欽明紀卅一年に出づ
○太高、原本太を大に作る中本類史に據て改む
○大柱直、集解に菅聞大稲人平尙重曰高市郡檜隈郷下平田村東北有陵俗呼曰梅山此陵大和志爲欽明天皇陵是陵域有癈渠曰池田有石像四軀俗呼曰猿遂稱猿山明和辛卯大旱土人穿小池深數十尺得一被大柱餘一大十圍長三尺越村人服部某獲而珍之藏于家所謂坂上直所樹大柱者蓋是とあり　○雉尾、原本雉を確に作る中本に據て改む　○嶋大臣、馬子なり嶋大臣と稱する由は卅四年紀に見ゆ　○天皇記及國記云々、釋紀に先代舊事本紀は也とあれど舊事本紀は僞書にて信じ難し此に擧げたる諸記の中に天皇記國記のみは皇極紀四年に蘇我臣蝦夷等臨誅悉燒天皇記國記珍寶と見えたれど其他はいかになりしか詳ならずされば其內容も知り難けれど試にいはゞ天皇記は列聖の皇位御繼承の事を始め御降誕立太子寶算等を記し奉りしものにて古事記序文に帝皇日繼とある是なるべし國記は先代の舊辭及諸國に關する事三韓統御に關する事等を洽く網羅して記せるものなるべく臣連伴造國造百八十部并公民等本記は現存の國造本記に據て大體を推察せらるべし

【廿九年】厩戸豐聰耳皇子命薨、考本命を尊に作る此皇子薨去の年月日に就て異說あり法隆寺金堂釋迦佛光後銘文には法興元三十二年二月二十二日（此紀の三十年壬午なり）とし帝說は壬午年二月二十二日とし扶桑略記は二十九年とすれど二月二十二日とす傳曆には二十九年春二月として日を記さず時年四十九或說壬午年者誤也と斷定すれど法隆寺釋迦佛後銘文の如きも確實なるものなれば職く是非を決め難し
○如亡、原本亡を已に作

（辛巳）廿九年春二月己丑朔癸巳、半夜廐戸豐聰耳皇子命薨于斑鳩宮、是時諸王諸臣及天下百姓悉、長老如失愛兒、而鹽酢之味、在口不嘗、少幼者如亡慈父母、以哭泣之聲、滿於行路、乃耕夫止耜、舂女不杵、皆曰、日月失輝、天地既崩、自今以後誰恃哉、是月、葬上宮太子於磯長陵、當是時、高麗僧慧慈聞上宮皇太子薨以大悲之、爲皇太子、請僧而設齋、仍親說經之日、誓願曰、於日本國有聖人、曰上宮豐聰耳皇子、固天攸縱、以玄聖之德生日本之國、苞貫三統、纂先聖之宏猷、恭敬三寶、救黎元

る應本中本に據て改む　○止耜、原本耜を耕に作る岩本中本に據て改む　○皆曰、曰の字は中本及傳暦に據て補ふ　○磯長陵、諸陵式に磯長墓橘豐日天皇之太子名曰聖德在河内國石川郡河内志に叡福寺山號科長又呼御墓山因廐戸太子墓也今南河内郡磯長村大字太子にあり　○固天攸縫、原本攸を欣に作る岩本北本寮本等に據て改む天縫は論語子罕に固天縱之將聖とあるに據る　○玄聖、文選遊天台山賦の注に玄は遠也とあり　○三統、漢書の注に師古曰天地人是爲三統とあり　○大聖、原本大を太に作る岩本北本中本に據て改む　○斷金、易繫辭に二人同心其利斷金とあり　○某、岩本其に作る　○有何益哉、北本應本有の字なし哉は原本矣に作る北本に據て改む　○奈末伊彌買、原本末を未に作る水本集解に據て改む下同じ　○凡新羅上表云々、恐くは分注なるべし

【卅一年】大灌頂幡、原本灌を觀に作る水本集解に據て改む下同じ　○葛野秦寺、蜂岡寺を云　○惠濟、原本濟を齊に作る北本寮本楓本等に據て改む　○醫惠日、續紀卷廿天平寶字二年三月藥師奈良等言遠祖德來本高麗人德來五世孫惠日小治田朝廷御世被遣唐學醫術因聖德藥師伏願改藥師字蒙難波連許之（節略）とあり

之厄、是實大聖也、今太子既薨之、我雖異國心在斷金、某獨生之、有何益哉、我以來年二月五日必死、因以遇上宮太子於淨土、以共化衆生、於是慧慈當于期日、而死之、是以時人之彼此共言、其獨非上宮太子之聖、慧慈亦聖也、是歲、新羅遣奈末伊彌買朝貢、仍以表書奏使旨、凡新羅上表、蓋始起于此時歟、

卅一年（癸未）秋七月、新羅遣大使奈末智洗爾、任那遣達率奈末智、並來朝、仍貢佛像一具、及金塔并舍利、且大灌頂幡一具、小幡十二條、卽佛像居於葛野秦寺（北）、以餘舍利金塔灌頂幡等、皆納于四天王寺、是時、大唐學問者僧惠濟、惠光、及醫惠日、福因等並從智洗爾等來之、於是惠日等共奏聞曰、留于唐國學者、皆學以成業、應喚、且其大唐國者法式備定珍國也、常須達、是歲、新羅伐任那、任那附新羅、於是天皇將討新羅、謀及大臣詢

○田中臣、錄右京皇別に田中臣武內宿禰五世孫稻目宿禰之後也とあり
○中臣連國、續紀三十九延曆七年六月大中臣朝臣清麻呂の傳に曾祖國子とあるは此人なるべし
○戎旅、字書に戎は兵也旅は衆也五百人爲レ旅とあり

○八大夫、寮本應本大を丈に作る

○因以約曰、以の字北本寮本楓本に據て補ふ
○附庸、訓義詳ならず禮記王制に附二于諸侯一曰二附庸一晉書地理志に伯七十里子男五十里不レ能二五十里一者不レ達二於天子一附二於諸侯一曰二附庸一とあり
○遣奈末智洗遲、遣の字は北本楓本中本等に據て補ふ
○中臣連國、寮本國の下に子い字あり
○波多臣、錄右京皇別に八多朝臣武內宿禰命之後也天武紀十三年波多臣賜レ姓曰二朝臣一とあり
○近江脚身臣、近江臣と

于群卿二田中臣一對曰、不レ可二急討一、先察二狀以知一逆、後擊之不レ晚也、請試遣レ使覘二其消息一、中臣連國曰、任那是元我內官家、今新羅人伐而有之、請戒二戎旅一、征伐新羅、以取二任那一、附二百濟一、寧非レ益レ有二于新羅一乎、田中臣曰、不然、百濟是多反覆之國、道路之間、尙詐之、凡彼所レ請皆非之、故不レ可レ附二百濟一、則不レ果レ征焉、爰遣二吉士磐金一於新羅一、遣二吉士倉下一於任那一、令レ問二任那之事一、時新羅國主、遣二八大夫一、啓二新羅國事於磐金一、且啓二任那國事於倉下一、因以約曰、任那小國、天皇附庸、何新羅輒有之、隨レ常定二內官家一、願無レ煩矣、則遣二奈末智洗遲一、副於吉士磐金一、復以任那人達率奈末遲副於吉士倉下一、仍貢二兩國之調一、然磐金等未レ及二于還一、卽年以大德境部臣雄摩侶、小德中臣連國爲二大將軍一、以小德河邊臣禰受、小德物部依網連乙等、小德波多臣廣庭、小德近江脚身臣飯蓋、小德平群臣宇志、小德大伴連、名闕小德大宅臣軍爲二副將軍一、率二數萬衆一、以征二討新羅一、時磐金等共會於津一、將發船、以候二風波一、於是船師滿二海多至一、兩國使人望瞻之愕然、乃還留

同族ならむも姓氏錄に見えず
○大宅臣、反正紀元年（卷上二四二頁）に出づ
○大舍、原本舍を倉に作る岩本に據て改む大舍は新羅十二等の位なり
○新羅國王、岩本王を主に作る
○阿曇連、上文に見えず
○早征伐耳、集解に按八年境部臣征伐新羅蓋其時新羅多納幣物以賂境部臣而請服也又將得賂故再勸征伐前期而發軍也と云
○海津、原本津を浦に作る北本楓本に據て改む
○其新羅云々、以下十三字疑らくは分注か
【卅二年】卅二年、中イ本に二を一に作り北本三に作る通證に以長曆考之月朔有差蓋是三十一也といひ集解は卅一に改めたれど大日本史には疑を存す

焉、更代堪遲大舍爲任那調使而貢上、於是磐金等相謂之曰、是軍起之、既違前期、是以任那之事、今亦不成矣、則發船而渡之、唯將軍等始到任那、而議之欲襲新羅、於是新羅國王聞軍多至、而豫懼之請服、時將軍等共議以上表之、天皇聽矣、冬十一月、磐金倉下等至自新羅、時大臣問其狀、對曰、新羅奉命以驚懼之、則並差專使、因以貢兩國之調、然見船師至、而朝貢使人更還耳、但調猶貢上、爰大臣曰、悔乎早遣師矣、時人曰、是軍事者、境部臣、阿曇連、先多得新羅幣物之故、又勸大臣、是以未待使旨、而早征伐耳、初磐金等渡新羅之日、比及津、莊船一艘迎於海津、磐金問之曰、是船者何國迎船、對曰、新羅船也、磐金亦曰、曷無任那之迎船、卽時更爲任那加一船、其新羅以迎船二艘始于是時、歟自春至秋、霖雨大水、五穀不登焉、

卅二年夏四月丙午朔戊申、有一僧、執斧毆祖父、時天皇聞之召大臣、詔之曰、夫出家者、頓歸三寶、具懷戒法、何無懺忌、輙犯惡逆、今朕聞、有僧以毆祖父、故悉聚諸寺僧尼、以推問之、若事實者重罪之、於是集諸僧尼

○詔之、北本詔を謂に作る
○頓歸、原本頓を賴に作る岩本北本中本及傳曆に據て改む
○經三百歲、佛の漢土に來りしは後漢明帝永平十年にて其百濟に入りしは枕流王元年なれば此間三百五十年なり
○僅一百年、枕流王元年より聖明王三十年卽ち我欽明天皇十五年までは百六十八年なり一百年とは大數を云るなれど少しく當らず
○我王、百濟聖明王なり
○以外僧尼、原本尼の字なし岩本中本に據て補ふ
○僧正、我朝僧官い始なり僧官とは僧正僧都律師以下のもの僧位とは法印法眼法橋以下の階級を云僧正僧都律師を總稱して僧綱と云僧正は支那にもあり僧史略に僧正何也正政也自正正人とあり僧尼の非違を正す官にて其長官なり
○僧都、支那にては之を僧統と云統を改て都とせるなり都は統なり僧正に亞で僧侶を都る官なり
○法頭、元亨釋書資治表

而推之、則惡逆僧及諸尼並將罪、於是百濟觀勒僧表上以言、夫佛法自西國至于漢、經三百歲、乃傳之至於百濟國、而僅一百年矣、然我王聞日本天皇之賢哲、而貢上佛像及內典、未滿百歲、故當今時、以僧尼未習法律、輒犯惡逆、是以諸僧尼惶懼、以不知所如、仰願、其除惡逆者以外僧尼、悉赦而勿罪、是大功德也、天皇乃聽之、戊午、詔曰、夫道人尚犯法、何以誨俗人、故自今已後、任僧正僧都、仍應檢挍僧尼、壬戌、以觀勒僧爲僧正、以鞍部德積爲僧都、卽日、以阿曇連闕名爲法頭、秋九月甲戌朔丙子、挍寺及僧尼、具錄其寺所造之緣、亦僧尼入道之緣、及度之年月日也、當是時、有寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、并一千三百八十五人、冬十月癸卯朔、大臣遣阿曇連闕名阿倍臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、葛城縣者、元臣之本居也、故因其縣爲姓名、是以冀之、常得其縣以欲爲臣之封縣、於是天皇詔曰、今朕則自蘇我出之、大臣亦爲朕舅也、故大臣之言、夜言矣夜不明、日言矣則日不晩、何辭不用、然今當朕之

世、頓失是縣、後君曰、愚癡婦人臨天下、以頓亡其縣、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後葉之惡名、則不聽、

に置寺司一曰法頭一後世支蕃察所掌職也とあり
○所造之縁、縁起を云
○入道之縁、度縁なり
○度之年月日、得度の年月日なり
○大臣、馬子なり　○葛城縣、大和國葛城郡なり神武紀(卷上九四頁)に出づ　○本居、ウブスナは產土なり　○因其縣爲姓名、葛城縣を馬子が本居の地といふは同族葛城襲津彥其地に住み又其御女磐之媛皇后のため葛城部を置き襲津彥孫玉田宿禰其子圓臣も葛城に住しかばしか言立てしならむ
○朕卽自蘇我出之、按に天皇の御母堅鹽媛は稻目の女にて馬子も稻目の子なれば朕は蘇我氏より出て大臣は朕が舅なりと宣給へり舅は抄人倫部に母之昆弟爲舅母方乃乎知とあり北本察本蘇我を蘇何に作る　○則日不晩、北本則の字なし　○亡其縣、原本亡を已に作る應本北本に據て改む　○不聽、女帝に坐しましながら外舅の請奏を聽し給はざりしは畏き大御心と申奉るべし

【卅三年】卅三年、中本傍書に交本卅二年とあり
○惠灌、三論宗の祖なり
【卅四年】花之、原本花を華に作る諸本に據て改む
○桃原、雄略紀七年(卷上二七一頁)に上桃原下桃原とあり大和國高市郡なり
○家於飛鳥河之傍、大和志に高市郡飛鳥村島莊村有二島宮古蹟一とあり
○强盜竊盜、抄人倫部に偷兒(和名奴須比止)竊盜(和名美曾加奴須比止)群盜一云强盜見二唐律一賊盜律に强盜凡强盜謂下以二威若力一而取二其財一先强後盜先盜後强等上とあり
【卅五年】狢、抄毛群部に狢(漢語抄云无之奈)似

卅三年春正月壬申朔戊寅、高麗王貢僧惠灌、仍任僧正、
卅四年春正月、桃李花之、三月、寒以霜降、夏五月戊子朔丁未、大臣薨、仍葬于桃原墓、大臣則稻目宿禰之子也、性有武略、亦有辨才、以恭敬三寶、家於飛鳥河之傍、乃庭中開小池、仍興小嶋於池中、故時人曰嶋大臣、
六月、雪也、是歲、自三月至七月霖雨、天下大飢、老者噉草根而死、子道垂、幼者含乳、以母子共死、又强盜竊盜並大起之不可止、
卅五年春二月、陸奥國有狢化人以歌之、夏五月、有蠅聚集、其凝累十丈之、浮虛以越信濃坂、鳴音如雷、則東至上野國而自散、
卅六年春二月戊寅朔甲辰、天皇臥病、三月丁未朔戊申、日有蝕盡之、

狐而善睡者也本草啓蒙に狸の一種にして頭尖り鼻出目青色身は黄黑褐色とあり

○化人、原本化を比に作る北本中本及紀略に據て改む

○信濃坂、信濃國西筑摩郡と美濃國惠奈郡との堺なる坂なり

【卅六年】日有蝕、日蝕始て爰に見ゆ

○不可諱、御病の癒えざるを云

○田村皇子、敏達天皇の皇孫にて押坂彦人皇子の御子卽ち舒明天皇に坐す

○不可輙言、應本楓本中本輙を輕に作る傳曆に二月天皇不悆遺詔曰田村皇子宜纂大業仍詔山背大兄王曰汝年少宜從群臣卽崩于大殿とあり

○山背大兄、廐戸皇子の御子なり後入鹿の爲に弑せられ給ふ

○肝稚、心稚しと云に同じ未熟なるを云　○癸丑、記には戊子年三月十五日癸丑崩とあり年月と干支は紀に合ひ日は違へり記傳に此記注に干支を記せること例なければ書紀に依て後に加へたるにや又若しもとよりの文ならば書紀と干支の傳の異なるなりと云　○(注)時年七十三、原本三を五に作る岩本に據て改む大日本史に崩下不書享年注曰本書注時年七十五水鏡皇胤紹運錄皇代略記皇年代略記愚管抄一代要記並曰七十三今從皇代略記丙子歲生算之則實爲七十三從本書十八歲立爲皇后之文則七十六年也未知孰是とあれど諸書何れも七十三とありて岩本に合へり故に今之に從ふ　○壬午朔、信友校本及集解長曆を推して壬午を丁丑に改めたれど尙よく考ふべし　○乙巳朔戊午、原本に己巳朔戊子とあり通證に當作乙巳朔戊午といひ乙を己、午を子に誤れりと思へば之に從ふ　○喪禮、原本喪を哀に作る諸本に據て改む　○比年、原本比を此に作る諸本に據て改む　○竹田皇子、天皇の皇子なり諸陵式に磯長山田陵推古天皇在河內國石川郡とあり河內志に南山田村とす今南河內郡山田村に屬す

壬子、天皇病甚之不可諱、則召田村皇子謂之曰、昇天位而經綸鴻基、馭萬機以亭育黎元、本非輙言、恒之所重、故汝愼以察之、不可輙言、卽日召山背大兄、敎之曰、汝肝稚之若雖心望、而勿諠言、必待群言以宜從、癸丑、天皇崩之、時年七十三卽殯於南庭、夏四月壬午朔辛卯、雹零、大如桃子、壬辰、雹零、大如李子、自春至夏旱之、秋九月乙巳朔戊午、始起天皇喪禮、是時群臣各誄於殯宮、先是、天皇遺詔於群臣曰、比年五穀不登、百姓太飢、其爲朕興陵、以勿厚葬、便宜葬于竹田皇子之陵、壬辰、葬竹田皇子之陵、

日本書紀卷第廿二

【卽位前紀】息長足日廣額天皇、息長は天皇の御祖母は息長眞手王の女なれば御母方によれる御名足日は用明天皇を橘豐日尊皇極天皇を天豐財重日足姫尊と申奉ると同じ意の稱へ名廣額は御容貌に據れるなるべし
○彥人大兄皇子、敏達天皇の御子
○糠手姫皇女、彥人大兄皇子の御異母妹更名は田村皇女
○散、北本楓本等にアカレと訓るはよし原本ミアレとあるはワカレの誤か通釋にアレムとあるもいかゞ
○詎王、通證に詎當レ作誰と云
○諠讙、原本讙を護に作る諸本に據て改むナリトヨクは響騰くなり字書に諠も讙も譁也と注す
○采女臣、錄有京神別に采女朝臣神饌逸日命六世

日本書紀卷第廿三

息長足日廣額天皇　舒明天皇

息長足日廣額天皇、淳中倉太珠敷天皇孫、彥人大兄皇子之子也、母曰糠手姫皇女、豐御食炊屋姫天皇（敏達）廿九年、皇太子豐聰耳尊薨、而未立皇太子、以卅六年三月天皇崩、九月葬禮畢之、嗣位未定、當是時蘇我蝦夷臣爲大臣、獨欲定嗣位、顧畏群臣不從、則與阿倍麻呂臣議、而聚群臣饗於大臣家、食訖將散、大臣令阿倍臣語群臣曰、今天皇既崩無嗣、若急不計、畏有亂乎、今以詎王爲嗣、天皇臥病之日、詔田村皇子曰、天下大任、本非輙言、爾田村皇子愼以察之、不可緩、次詔山背大兄王曰、汝獨莫諠讙、必從群言、愼以勿違、則是天皇遺言焉、今誰爲天皇、時群臣嘿之無答、亦問之、非答、强且問之、於是大伴鯨連進曰、既從天皇遺命耳、更不可待群言、阿倍臣則問曰、何謂也、開其意、對曰、天皇曷思歟、詔

孫大水口宿禰之後也とあり天武紀十三年十一月朝臣姓を賜ふ
○高向臣、錄右京皇別に高向朝臣武內宿禰六世孫猪子臣之後也とあり天武紀十三年十一月朝臣姓を賜ふ
○中臣連彌氣、御食子なり中臣本系帳に御食子鎌足公の父可多能祐大連の子とあり
○難波吉士、安閑紀二年八月(三四頁)に出づ
○許勢臣大麻呂、許勢臣は崇峻紀卽位前紀に出づ原本麻を摩に作る中本に據て改む
○佐伯連、崇峻紀卽位前紀に出づ
○紀臣、同上
○蘇我倉麻呂、公卿補任に馬子之子倉山田麻呂之父とあり原本麻を摩に作る北本中本に據て改む
○(注)雄當、公卿補任に雄正に作る
○境部摩理勢臣、推古紀二十年二月に出づ
○櫻井臣、錄左京皇別に櫻井朝臣蘇我石川宿禰四世孫稻目宿禰大臣之後也とあり天武紀十三年十一月朝臣姓を賜ふ

田村皇子、曰、天下大任也不可緩、因此而言、皇位既定、誰人異言、時采女臣摩禮志、高向臣宇摩、中臣連彌氣、難波吉士身刺四臣曰、隨大伴連言、更無異、許勢臣大麻呂、佐伯連東人、紀臣鹽手三人進曰、山背大兄王、是宜爲天皇、唯蘇我倉麻呂臣更名雄當、獨曰、臣也當時不得便言、更思之後啓、爰大臣知群臣不和、而不能成事退之、先是大臣獨問境部摩理勢臣曰、今天皇崩無嗣、誰爲天皇、對曰、擧山背大兄爲天皇、是時山背大兄居於斑鳩宮、漏聆是議、卽遣三國王、櫻井臣和慈古二人、密謂大臣曰、傳聞之、叔父以田村皇子欲爲天皇、我聞此言、立思矣居思矣、未得其理、願分明欲知叔父之意、於是大臣得山背大兄之告、而不能獨對、則喚阿倍臣、中臣連、紀臣、河邊臣、高向臣、采女臣、大伴連、許勢臣等、仍曲擧山背大兄之語、既而便且謂大夫等曰、汝大夫等、共詣於斑鳩宮、當啓山背大兄王曰、賤臣何之獨輙定嗣位、唯擧天皇之遺詔、以告于群臣、群臣並言、如遺言、田村皇子自當嗣位、更詎異言、是群卿言

○叔父、集解に按太子傳大兄之母馬子之女蝦夷卽外叔父也とあり眞の叔父ならずとも叔父と稱する例多し
○謂大夫等、北本謂を語に作る
○面日、通證に面訓末禰婆卒蓋古語也釋同とあれど北本にはマウアハムとあり楓本にも左傍にはマウアハムとあればマウはマヰにて參會むなるべしマネハムにては意通ぜず按にネはヒアの訛なるむか
○啓於山背大兄、兄の字は北本應本中本に據て補ふ
○來之國政、之の字は北本中本に據て補ふ來は通證に謂將來也とあり
○遣重臣等、原本遣を遣に作る北本中本に據て改む
○少々、原本小々に作る北本中本に據て改む
○禁省、禁中と云に同じ
○閤門、宮衛令義解に衛門所守謂之宮門兵衛所守謂之閤門とあり又字書に閤は內中小門唐制天子御便殿見群臣謂之入閤とあり奧向にある

也、特非臣心、但雖有臣私意、而惶之不得傳啓、乃面日親啓焉、爰群大夫等受大臣之言、共詣于斑鳩宮、使三國王、櫻井臣、以大臣之辭、啓於山背大兄、時大兄王使傳問群大夫等曰、天皇遺詔奈之何、對曰、臣等不知其深、唯得大臣語狀稱、天皇臥病之日、詔田村皇子曰、非輕輙言來之國政、是以爾田村皇子愼以言之、不可緩、次詔大兄王曰、汝肝稚而勿諠言、必宜從群言、是乃近侍諸女王及采女等悉知之、且大王所察、於是大兄王且令問之曰、是遺詔也、專誰人聆焉、答曰、臣等不知其密、旣而更亦令告群大夫等曰、愛之叔父勞思、非一介之使、遣重臣等、而敎覺、是大恩也、然今群卿所遵天皇遺命者、少々違我之所聆、吾聞天皇臥病、而馳上之侍于門下、時中臣連彌氣自禁省出之曰、天皇命以喚之、則參進向于閤門、亦栗隈采女黑女迎於庭中、引入大殿、於是近習者栗下女王爲首、女孺鮪女等八人、并數十人侍於天皇之側、且田村皇子在焉、時天皇沈病不能覩我、乃栗下女王奏曰、所喚山

門なり故にウチツミカドと訓り
○栗隈采女、山城國久世郡栗隈より出し采女、黒女は名なり
○栗下女王、父祖詳ならず
○女孺、後宮職員令内侍司に女孺一百人とあり司中の雜役に充つ此女孺より采女にも補する例類史四十天長七年に見ゆ
○側、原本にオホトとあるはオモトの誤なるべしオモトは御許なり
○蒙是大恩、嗣位を授け給へる詔を蒙り給ふを云
○豐浦寺、大和志に添下郡豐浦廢寺豐浦村初名向原寺一名建興寺舊在高市郡とあり
○遣八口采女、原本遣を遣に作る北本中本に據て改む八口は地名なるべけれど詳ならず
○爲汝叔父、中本爲の字なし
○餐、字書に貪也とあり
○天神地祇云々、天神地祇にかけて誓ふなり此時の遺詔田村皇子と山背大兄王との御言何れが眞なるか容易に定め難きも下文に先王臨沒謂諸子等

背大兄王參赴、卽天皇起臨之、詔曰、朕以寡薄久勞大業、今曆運將終、以病不可諱、故汝本爲朕之心腹、愛寵之情不可爲比、其國家大基是非朕世、自本務之、汝雖肝稚、愼以言、乃當時侍之近習者悉知焉、故我蒙是大恩、而一則以懼、一則以悲、踊躍歡喜、不知所如、仍以爲、社稷宗廟重事也、我眇少以不賢、何敢當焉、當是時思欲語叔父及群卿等、然未有可導之時、於今非言耳、吾曾將訊叔父之病、向京而居豐浦寺、是日、天皇遣八口采女鮪女、詔之曰、爲汝叔父大臣常爲汝愁言、百歲之後、嗣位非當汝乎、故愼以自愛矣、既分明有是事、何疑也、然我豈餐天下、唯顯聆事耳、則天神地祇共證之、是以冀正欲知天皇之遺勅、亦大臣所遣群卿者、從來如嚴矛（嚴矛、此云伊箇之保虛、）取中事而奏請人等也、故能宜白叔父、既而泊瀨仲王、別喚中臣連、河邊臣、謂之曰、我等父子並白蘇我出之、天下所知、是以如高山恃之、願嗣位勿輙言、則令三國王、櫻井臣、副群卿而遣之曰、欲聞還言、時大臣遣紀臣、大伴連、謂三國王、櫻井臣、

曰云々と宣給ひ又入鹿に攻められて困苦し給ひし時の御言に以二身之故一豈煩二萬民一云々とあるにても山背大兄王は僞など宣給はざる御性質の如く拜せらる通釋に此王は聖德太子の御子に坐て御威勢盛なりしかば蝦夷の爲には御外甥ながら忌まれ給ひしなるべし故に田村皇子に心を寄て遺詔をあらぬ狀に取餝りて言出しかど群卿の思ふ所も如何と其心を引見しなりと云るが如く恐くは蝦夷が己の非望を遂げむ爲に田村皇子に對する遺詔を僞りしによりてかゝる爭を生じたるなるべし

○鐵矛云々、釋紀に私記曰凡取矛立地之時必取二其中一故云とあり不偏不黨にして公平に奏請する也云

○泊瀨仲王、聖德太子の御子大兄王の異母弟なり

○我等父子云々、御父聖德太子はもとより蘇我の出なれども此王は膳氏の女の生たるなれば父子蘇我出とは申難し按に後に馬子女子刀目古郎女の御養となりなどし給ひし事

曰、先日言訖、更無異矣、然臣敢之輕誰王也、重誰王也、於是數日之後、山背大兄亦遣櫻井臣、告大臣曰、先日之事陳聞耳、寧違叔父哉、是日、大臣病動、以不能面言於櫻井臣、明日、大臣喚櫻井臣、卽遣阿倍臣、中臣連、河邊臣、小墾田臣、大伴連、啓山背大兄言、自磯城嶋宮御宇天皇之世、及近世者、群卿皆賢哲也、唯今臣不賢而遇當乏人之時、誤居群臣上耳、是以不得定基、然是事重也、不能傳導、故老臣雖勞、面啓之、其唯不誤遺勅者也、非臣私意、既而大臣傳阿倍臣、中臣連、更問境部臣曰、誰王爲天皇、對曰、先是大臣親問之日、僕啓既訖之、今何更亦傳以告耶、乃大忿而起行之、適是時、蘇我氏諸族等悉集、爲嶋大臣造墓而次于墓所、爰摩理勢臣壞墓所之廬、退蘇我田家而不仕、時大臣慍之、遣身狹君勝牛、錦織首赤猪而誨曰、吾知汝言之非、以干支之義不得害、唯他非汝是、我必忤他從汝、若他是汝非、我當乖汝從他、是以汝遂有不從者、我與汝有瑕、則國亦亂、然乃後生言之、吾二人破國也、是後葉之惡名焉、汝愼以勿起逆心、然猶不從、而遂赴于斑鳩、住於泊瀨王宮、於是大

臣益怒、乃遣群卿、請于山背大兄曰、頃者摩理勢違臣匿於泊瀨王宮、願得摩理勢、欲推其所由、爰大兄王答曰、摩理勢素聖皇所好、而暫來耳、豈違叔父之情耶、願勿瑕、則謂摩理勢曰、汝不忘先王之恩而來、甚愛矣、然其因汝一人、而天下應亂、亦先王臨沒、謂諸子等曰、諸惡莫作、諸善奉行、余承斯言、以爲永戒、是以雖有私情、忍以無怨、復我不能違叔父、願自今以後勿憚改意、從群而无退、是時、大夫等且誨摩理勢臣之曰、不可違大兄王之命、於是摩理勢臣進無所歸、乃泣哭更還之、居於家十餘日、泊瀨王忽發病薨、爰摩理勢臣曰、我生之誰恃矣、大臣將殺境部臣、而興兵遣之、境部臣聞軍至、率仲子阿椰出于門、坐胡床而待、時軍至乃令來目物部伊區比以絞之、父子共死、乃埋同處、唯兄子毛津逃匿于尼寺、瓦舍、卽扞一二尼、於是一尼嫉妬令顯、圍寺將捕、乃出之入畝傍山、因以探山、毛津走無所入、刺頸而死、山中、時人歌曰、于泥備椰摩、虛多智于須家苔、多能彌介茂、氣莵能和區吳能、虛茂邏勢利祁

ありてかく言へるかと通釋に云り
○陳聞耳、集解に陳下疑脫所字と云
○小墾田臣、錄右京皇別に小治田朝臣武內宿禰五世孫稻目宿禰之後也とあり天武紀十三年十一月に朝臣姓を賜ふ
○遇當乏人之時、釋紀遇を適に作る是なるに似たり之の字は北本中本に據て補ふ
○非臣私意、北本非の下唯の字あり
○造墓、馬子が桃原の墓なり
○蘇我田家、蘇我は地名、田家は田宅田莊と同じく別莊なり
○身狹君、原本に狹身に作る中本引一本に據て改む錄攝津未定雜姓に牟佐吳公吳國王青淸王之後とある此氏なるべし記に天押足日子命牟邪臣之祖也また雄略紀二年（卷上二六三頁）に身狹村主とあれど此は別姓なるべし
○錦織首、仁德紀四十一年（卷上二二八頁）に出づ
○干支之義、仁德紀四十年（卷上二二六頁）に友于之義とあるを北本中本等

に干支に作れり
○有瑕、瑕は隙也心の合はざるを云、物語類にも仲惡しきをひまありと云り ○頃者、原本頃を項に作る楓本中本に據て改む ○聖皇、推古天皇を申奉れるならむ ○不忘、原本忘を忌に作る應本中本に據て改む ○先王、聖德太子なり ○臨沒、原本沒を設に作る北本中本に據て改む ○諸惡莫作云々、此二句涅槃經增一阿含經に見ゆ ○來目物部、來目は職名、物部は姓なり來目部は雄略紀二年(卷上二六二頁)に出づ ○兄子、通證に胄子也と云 ○瓦舍、通證に此時雖寺非佛殿不用瓦故有此名と ○紐一二尼、此事は摩理勢父子に寃を負せたる讒言なること下の歌に明なり ○刺頸、原本刺を刻に作る中本に據て改む ○于泥備椰麻云々、宇部云此は山に籠れりし程の歌にて未自刺頸死ざりし程に時人の歌ひしなれば山を探りし間日比經たるべし一首の意は畝火山の木立は薄けれどせめて其を憑みとしてか毛津壯子が籠らせりけむ可惜壯子を救助くる人はなきか蝦夷が惡を懲す人はなきかと下に含めたるなり原本苦を苦に作る北本中本に據て改む

【元年】以天皇之璽印云々、去年三月先帝崩御の後嗣位定まらず衆議紛々たりしが大臣蘇我蝦夷は田村皇子を立むと欲し境部摩理勢は山背大兄皇子を立つべしと主張し遂に其身を滅すに至れりかくて蝦夷の意行はれ田村皇子は遂に卽位し給ひぬ ○鍾愛、原本メグシをメグミとす中本に據て訂す ○皇綜、集解に皇綜未知所出疑統誤とあり ○田部連、舊紀に物部小前宿禰連公田部連等祖とあり ○掖玖、推古紀二十四年(一二七頁)に見ゆ

【二年】寶皇女、皇極天皇に坐す ○大海皇子、天武紀に大海人皇子とあり

牟、

元年春正月癸卯朔丙午、大臣及群卿共以天皇之璽印、獻於田村皇子、則辭之曰、宗廟重事矣、寡人不賢、何敢當乎、群臣伏固請曰、大王先朝鍾愛、幽顯屬心、宜纂皇綜、光臨億兆、卽日卽天皇位、夏四月辛未朔、遣田部連岡名於掖玖、是年也太歲己丑、

二年春正月丁卯朔戊寅、立寶皇女爲皇后、后生二男一女、一曰葛城皇子、近江大津宮御宇天皇 二曰間人皇女、三曰大海皇子、淨御原宮御宇天皇 夫人蘇我嶋大臣女法提郎媛生古人皇子、更名大兄皇子 又娶吉備國蚊屋采女生蚊屋皇子、三月丙寅朔、高麗大使宴子拔、小使若德、百濟大使恩率素子、小使德率武德、共朝貢、秋八月癸巳朔丁酉、以大仁犬上君三田耜、大仁藥師惠日、

遣於大唐、庚子、饗高麗百濟客於朝、九月癸亥朔丙寅、高麗百濟客歸于國、是月、田部連等至自掖玖、冬十月壬辰朔癸卯、天皇遷於飛鳥岡傍、是謂岡本宮、是歲、改脩理難波大郡及三韓館、

三年春二月辛卯朔庚子、掖玖人歸化、三月庚申朔、百濟王義慈入王子豐章爲質、秋九月丁巳朔乙亥、幸于津國、有間溫湯、冬十二月丙戌朔戊戌、天皇至自溫湯、

○蚊屋、備中國賀夜郡
○犬上君三田耜、推古紀二十二年に出づ
○藥師惠日、同紀二十一年に出づ
○岡本宮、大和志に高市郡岡本宮岡村（今高市村大字岡）とあり
○難波大郡及云々、北本及な乃に作る傍訓を本文に寫入たるか大郡は欽明紀二十二年に出づ唐客の爲に新館を造れる事推古紀十六年四月（一一九頁）に見ゆ攝津志に東成郡三韓館在二安國寺坂上一とあり
【三年】百濟王義慈、三年辛卯は武王璋三十二年にて此時義慈未だ卽位せず其卽位は十三年辛丑にて十年の後なり　○王子豐章、皇極紀二年に百濟太子餘豐とあると同人なるべしされば章は衍にて王子豐とあるべきなり　○津國、原本津の上攝の字あり北本應本及紀略に據て削る　○有間溫湯、有馬郡にあり釋紀所引の攝津風土記に有馬郡有二鹽原山一此邊有二鹽湯一因以爲名とあり

四年秋八月、大唐遣高表仁送三田耜、共泊于對馬、是時學問僧靈雲、僧旻、及勝鳥養、新羅送使等從之、冬十月辛亥朔甲寅、唐國使人高表仁等泊于難波津、則遣大伴連馬養迎於江口、船卅二艘及鼓吹旗幟皆具整飭、便告高表仁等曰、聞天子所命之使、到于天皇朝、迎之、時高表仁對曰、風寒之日、飭整船艘、以賜迎之、歡愧也、於是令難波吉士小槻、大河內直矢伏、爲導者、到于館前、乃遣伊岐史乙等、難波吉士八牛引客等、

【四年】大唐云々、此年唐太宗貞觀六年なり
○靈雲、前に見えず
○僧旻、推古紀十六年（一一一頁）に出づ
○勝、錄山城諸蕃に勝百濟人多利須々之後也とあり
○泊于難波津、原本泊を到に作る諸本に據て改む
○大伴連馬養、大日本史大伴金村傳に據るに金村の孫咋の長子なり
○江口、推古紀十六年（一一九頁）に出づ

入於館、卽日給神酒、

五年春正月己卯朔甲辰、大唐客高表仁等歸國、送使吉士雄摩呂、黑摩呂等、到對馬而還之、

六年秋八月、長星見南方、時人曰彗星、

七年春正月、彗星廻見于東、夏六月乙丑朔甲戌、百濟遣達率柔等朝貢、秋七月乙未朔辛丑、饗百濟客於朝、是月、瑞蓮生於劍池、一莖二花、

○歃愧、北本愧を悅に作る
○大河內直、推古紀十六年六月（一一九頁）に出づ
○到于館前、于の字は諸本に據て補ふ
○伊岐史、錄左京諸蕃に伊吉連出自長安人劉楊雍也とあり天武紀十二年十月に連姓を賜ふ
○給神酒、私記に神酒和語云美和また玄蕃式に新羅客入朝者給神酒とあり

【五年】高表仁等歸國、舊唐書に遣新州刺史高表仁持節往之表仁無綏遠之才與王爭禮不宣朝命而還とあり按に紀に十月難波の館に入て神酒を給りし事見えたるのみにて他の記事なきに據れば唐王の命を述べずして歸りしは事實なるべし【六年】彗星、抄天地部に彗星兼名苑注云彗星（和名波々岐保之）言其形如箒也とあり【七年】正月、北本寮本中本及紀略に三月とあり　○廻、原本迴に作る中本に據て改む　○瑞蓮、抄草木部に藕爾雅云其根藕（波知須乃禰）また蓮爾雅云其木蓮（波知須乃波比）郭璞曰莖下白蒻在泥中者也蓮爾雅云其子蓮其中薏郭璞曰蓮謂房也菂蓮中子也とありハチスは蜂巢にて房を云り　○劍池、大和國高市郡萬葉に御佩を劍池の蓮葉に云々と見ゆ　○一莖二花、群芳譜に竝頭蓮晉泰和間生於玄圃謂之嘉蓮今所在見之とあり

八年春正月壬辰朔、日蝕之、三月、悉劾汗采女者皆罪之、是時三輪君小鳥鷄苦其推鞠、刺頸而死、夏五月、霖雨大水、六月、災岡本宮、天皇遷居田中宮、秋七月己丑朔、大派王謂豐浦大臣曰、群卿及百寮朝參已懈、自今以後、卯始朝之、巳後退之、因以鍾爲節、然大臣不從、是歲大旱、天下飢之、

【八年】日蝕之、之の字は北本寮本に據て補ふ　○劾、原本紘に作る北本及通證集解に據て改む廣韻に劾推窮罪人とあり　○三輪君、用明紀元年正月（九六頁）に出づ　○推鞠、北本鞠を鞫に作る鞠鞫同じ考異令義解に鞫者窮罪也とあり　○刺頸、原本刺を判に作る北本寮本中本に據て改

む
○田中宮、大和志に高市郡田中宮在二田中村一とあり
○大派王、敏達紀四年に大派皇子とあり
○豐浦大臣、蝦夷なり
○卯始朝之、參朝時制此に始て見ゆ
○因以鍾爲節、北本因の下之の字あり鍾は鐘と同じ古字通用す鐘を撞きて合圖とするを云是も唐六典に見えて彼に採給ひしなり

【九年】流星、抄天部に兼名苑云流星一名奔星（和名與八比保之）また宋書天文志に流星天使也自レ上而降曰レ流自レ下而升曰レ飛大者曰レ奔亦流星也とあり此星の奔る音を以て名付たるにて呼（ヨバヒ）星の義か　○地雷、神代紀（卷上一八頁）に土雷の名あれど異り史記天官書に天鼓有レ音如レ雷非レ電音在レ地而下及レ地其所往者兵發二其下一とある是なるべし　○僧旻僧、下の僧字は通證に疑衍とし集解は削る　○天狗、史記天官書に天狗狀如二大奔星一其下止地類レ狗所レ墮及炎火望レ之如二火光一炎々衝レ天また山海經に天門山有二赤犬一名曰二天狗一其光飛レ天流而爲レ星長數十丈其疾如レ風其聲如レ雷其光如レ電とありアマツキツネと訓るは傳曆に僧旻法師曰是謂二天狐一也とあるに據れるか　○乙酉朔、原本酉を丑に作る北本楓本に據て改む　○上毛野君、崇神紀四十八年（卷上一二一頁）に出づ　○壘、字書に軍壁也とありソコは通釋に底に同じと云　○不知所如、原本如を知に作る北本寮本中本に據て改む　○則謂夫曰、則は中本及紀略に據て補ふ　○汝祖等云々、上毛野君の祖等が武功を建てしこと景行紀五十五、六年神功紀四十九年仁德紀五十三年等に見ゆ　○水表政、水表は海外なり政は通釋考本京極本信友所校一古本に據て敵の字に改む　○令飲夫、令の字は北本中本に據て補ふ　○數十人、人の字は北本に據て補ふ　○取仗、原本仗の上に伏の字あり北本應本中本に據て削る　○振旅、左傳成七年の注に振は整也旅は衆也とあり亂れたる軍衆の整へるを云

【十年】桃李、原本李を季に作る諸本に據て改む

（丁酉）九年春二月丙辰朔戊寅、大星從レ東流レ西、便有レ音似レ雷、時人曰、流星之音、亦曰、地雷、於是僧旻僧曰、非二流星一、是天狗也、其吠聲似レ雷耳、三月乙酉朔丙戌、日蝕之、是歲、蝦夷叛以不レ朝、卽拜二大仁上毛野君形名一、爲二將軍一、令レ討、還爲二蝦夷一見レ敗而走入レ壘、遂爲賊所レ圍、軍衆悉漏城空之、將軍迷不知二所如一、時日暮踰レ垣欲レ逃、爰方名君妻歎曰、慷哉、爲二蝦夷一將見レ殺、則謂夫曰、汝祖等、渡二蒼海一、跨二萬里一、平二水表政一、以威武傳二於後葉一、今汝頓屈二先祖之名一、必爲二後世一見レ嗤、乃酌レ酒强之令レ飲夫、而親佩二夫之劍一、張二十弓一、令二女人數十人一、俾レ鳴レ弦、旣而夫更起之取レ仗而進之、蝦夷以爲、軍衆猶多、而稍引退之、於是、散卒更聚、亦振旅焉、擊二蝦夷一、大敗以悉虜、

（戊戌）十年秋七月丁未朔乙丑、大風之、折レ木發レ屋、九月、霖雨、桃李華、冬十月、

幸有間溫湯宮、是歲、百濟新羅任那並朝貢、

十一年春正月乙巳朔壬子、車駕還自溫湯、乙卯、新營、蓋因幸有間、以闕新營歟、丙辰、無雲而雷、丙寅、大風而雨、己巳、長星見西北、時妥師曰、彗星也、見則飢之、秋七月、詔曰、今年造作大宮及大寺、則以百濟川側爲宮處、是以西民造宮、東民作寺、便以書直縣爲大匠、秋九月、大唐學問僧惠隱、惠雲、從新羅送使入京、冬十一月庚子朔、饗新羅客於朝、因給冠位一級、十二月己巳朔壬午、幸于伊豫溫湯宮、是月、於百濟川側建九重塔、

○有馬溫湯宮、攝津志に有馬郡有馬行宮在湯山村杉谷とあり

【十一年】新營、通證に記不時也とあるが如く例に違へるに依て書せるなりされば毎年十一月に新營の行はれしこと此文にて推知すべし

○蓋因幸云々、以下歟に至る十字集解に私記攙入として削る

○見則飢之、晏子春秋に彗星之出天爲民之亂見之とあり

○大宮、百濟宮なり大和志に十市郡百濟宮飯高村故地今半入廣瀨郡とあり

○大寺、大和志に廣瀨郡百濟寺在百濟屬邑二條隣十市郡三代實錄爲十市郡また三代實錄廿八に元慶四年十月廿日彼寺（大安寺）三綱申牒爾、昔日聖德太子創建平群郡熊凝道場飛鳥岡本天皇遷建十市郡百濟川邊號曰百濟大寺と見ゆ　○川側、原本側を測に作る北本楓本に據て改む大和志に廣瀨郡百濟川自高市郡流於郡東界至于河合入廣瀨川とあり　○書直、天武紀十年十二月に書直智德賜姓曰連と見ゆ　○秋九月、秋の字衍か　○惠隱、推古紀十六年（一二一頁）に慧隱とあり　○伊豫溫湯宮、伊豫國溫泉郡にあり萬葉三山邊赤人の歌に伊豫の高嶺の射狹庭の岡に立して云々と見え萬葉釋に立湯岡側碑文處曰伊社邇波之岡也とあるに據れば此行幸の古蹟は湯岡の側なる伊社邇波と云處なるべし　○九重塔、百濟寺の塔なりコシは通證に越也層級之義と云

【十二年】廐坂宮、大和志に高市郡廐坂宮在所未詳とあり

○无量壽經、編年記に觀無量壽經一卷允恭天皇十三年宋元嘉中西域三藏畺良耶舍譯とあり是なるべ

十二年春二月戊辰朔甲戌、星入月、夏四月丁卯朔壬午、天皇至自伊豫、便居廐坂宮、五月丁酉朔辛丑、大設齋、因以請惠隱僧、令說无量壽經、冬十月乙丑朔乙亥、大唐學問僧清安、學生高向漢人玄理、傳新羅

し
○清安、推古紀十六年に南淵漢人請安と見ゆ
○支理、推古紀十六年（一二三頁）に出づる高向漢人支理なり
○傳新羅、新羅を經て本國に歸るは順路にあらず事故ありしなるべし
○賜爵一級、賜冠位一級と云に同じ
【十三年】崩、大日本史に本書享年闕皇胤紹運錄愚管抄正統記皇代略記一代要記亜日卽位年三十七崩年四十九水鏡曰卽位年四十七未知孰是とあり
○百濟大殯、大は敬稱なるべし大內大宮などの大に同じ

而至之、仍百濟新羅、朝貢之使共從來之、則各賜爵一級、是月、徙於百濟宮、

十三年冬十月己丑朔丁酉、天皇崩于百濟宮、丙午、殯於宮北、是謂百濟大殯、是時、東宮開別皇子年十六而誄之、

日本書紀卷第廿三

【卽位前紀】天豐財重日足姬、天豐は美稱財は天皇の御名を寶皇女と申奉るによれり重日足姬は後に稱奉りし美稱なり
○茅渟王、諸陵式に片岡葦田墓茅渟皇子在二大和國葛下郡一とあり
○吉備姬王、紹運錄に欽明天皇孫櫻井皇子の女とあり吉備島皇祖母命とも申奉る
○順考古道云々、我國の古道卽ち惟神の道に順ひて政事を聞食したりとなり
【元年】(正月)恐懾、原本懾を攝に作る諸本に據て改むヒシケは倭訓栞にひしくは壓字をよめり引歟の義なるべしと云
○路不拾遺、此語淮南子氾論訓に出づ
(二月)阿曇連比羅夫、始て出づ、阿曇連は應神紀三年(卷上一九六頁)に出づ推古紀三十一年に參

日本書紀卷第廿四

天豐財重日足姬天皇　皇極天皇

天豐財重日足姬天皇、淳中倉太珠敷天皇曾孫、押坂彥人大兄皇子孫、茅渟王女也、母曰吉備姬王、天皇順考古道而爲政也、息長足日廣額天皇崩、

元年春正月丁巳朔辛未、皇后卽天皇位、以蘇我臣蝦夷爲大臣、如故、大臣兒入鹿更名鞍作自執國政、威勝於父、由是盜賊恐懾、路不拾遺、乙酉、百濟使人大仁阿曇連比羅夫、從筑紫國乘驛馬來言、百濟國聞天皇崩、奉遣弔使臣隨弔使、共到筑紫、而臣望仕於葬、故先獨來也、然其國者今大亂矣、二月丁亥朔戊子、遣阿曇山背連比良夫、草壁吉士磐金、倭漢書直縣遣百濟弔使所、問彼消息、弔使報言、百濟國主謂臣言、塞上恒作惡之、請付還使、天朝不許、百濟弔使傔人等言、去年十一

月、大佐平智積卒、又百濟使人擲ニ崐崘使ヲ於海裏ニ、今年正月國主母薨、又弟王子兒翹岐、及其母妹　女子四人、內佐平岐味、有ニ高名ニ之人卌餘被ル放ニ於嶋ニ、壬辰、高麗使人泊ニ難波津ニ、丁未、遣ニ諸大夫於難波郡ニ、檢高麗國所貢金銀等并其獻物、使人貢獻既訖而詔云、去年六月、弟王子薨、秋九月、大臣伊梨柯須彌弑ニ大王ニ、并殺ニ伊梨渠世斯等百八十餘人、仍以弟王子兒爲王、以己同姓都須流金流爲大臣、戊申、饗ニ高麗百濟客於難波郡ニ、詔ニ大臣ニ曰、以ニ津守連大海ニ可レ使ニ於高麗ニ、以ニ國勝吉士水鷄ニ可レ使ニ於百濟ニ、水雞、此云ニ俱比那ニ、以ニ草壁吉士眞跡ニ可レ使ニ於新羅ニ、以ニ坂本吉士長兄ニ可レ使ニ於任那ニ、庚戌、召ニ翹岐ニ安置於安曇山背連家ニ、辛亥、饗ニ高麗百濟客ニ、癸丑、高麗使人百濟使人並罷歸、三月丙辰朔戊午、無雲而雨、辛酉、新羅遣ニ賀騰極使與弔喪使ニ、庚午、新羅使人罷歸、是月、霖雨、夏四月丙戌朔癸巳、太使翹岐將其從者ニ拜朝、乙未、蘇我大臣於畝傍家ニ、喚ニ百濟翹岐等ニ、親對語話、仍賜ニ良馬一疋鐵二十鋌ニ、唯不レ喚ニ塞上ニ、是月霖雨、五月乙卯

看せよ
○驛馬、早馬なり驛馬の制孝德紀二年正月に見ゆ
○今大亂、傳曆に二月百濟使弔ニ天皇之喪ニ使人言國內大亂弟王子兒翹岐及男女並內佐平高名人等四十餘人爲ニ島王ニ所レ殺云々緣レ斯國則大亂也とあり
○阿蘇山背連比良夫、阿曇連比羅夫に同じ、山背の二字集解には衍とす
○草壁吉士、雄略紀十四年（卷上二八一頁）に大草香部吉士見え天武紀十二年に草壁吉士賜レ姓曰レ連と見ゆ
○書直縣、舒明紀十一年（一四七頁）に見ゆ
○遣百濟、遣の字衍か又は於などの誤ならむ
○塞上、百濟王の弟の名なり孝德紀白雉元年十月に見ゆ當時既に我國に來り本國の爲に惡しき事など爲し故に授給へと申請ひしなるべし
○傔人、從者なり繼體紀廿三年（一一四頁）に見ゆ
○大佐平智積卒、下文七月の條に智積來朝の事見ゆれば卒とあるは傔人等の誤聞なるべし大佐平は百濟の執政なり

○崐崘使、尙書禹貢の注に崐崘在臨羌西西戎西域也舊唐書南蕃傳に自林邑以南皆卷髮黑身通號爲崑崙とあり林邑は西域記十三摩呾吒國の條に東有摩訶瞻波國卽此云林邑是也と見ゆ此使は其國より百濟に來れる使人か或は我國に來りしを百濟の使が同船して海に擲げしか何れかならむ

○內佐平、新唐書に內臣佐平宣納號令とあり

○被放於嶋、傳曆には爲島王所殺とあり

○難波郡、通證に謂大郡之館とあり信友校本には一作館とあれど次にも難波郡とあれば誤にあらず

○伊梨柯須彌弑大王、原本弑を殺に作る岩本中本に據て改む伊梨柯須彌は傳曆に入霞と書り此事史記高麗本紀に二十五年十月蓋蘇文弑王とあり柯蘇彌は蓋蘇文、伊梨は官名にて大兄なるべし二十五年は壬寅にて皇極天皇元年なり此に去年六月とあるは一年の差あり

○以弟王子兒爲王、子は岩本中本及傳曆に據て補

朔己未、於河內國、依網屯倉前、召翹岐等、令觀射獵、庚午、百濟國調使、船、與吉士船、俱泊于難波津、（蓋吉士前奉使於百濟乎、）壬申、百濟使人進調、吉士服命、乙亥、翹岐、從者一人死去、丙子、翹岐兒死去、是時翹岐、與妻畏忌兒死、果不臨喪、凡百濟新羅風俗、有死亡者、雖父母兄弟夫婦姉妹、永不自看、以此而觀、無慈之甚、豈別禽獸、丁丑、熟稻始見、戊寅、翹岐將其妻子、移於百濟大井家、乃遣人葬兒於石川、六月乙酉朔庚子、微雨、是月、大旱、秋七月甲寅朔壬戌、客星入月、乙亥、饗百濟使人大佐平智積等於朝、（或本云、百濟使人大佐平智積及兒達率、闕名、恩率軍善、）乃命健兒相撲、於翹岐前、智積等宴畢、而退拜翹岐門、丙子、蘇我臣入鹿、豎者獲白雀子、是日、同時有人、以白雀、納籠而送蘇我大臣、戊寅、群臣相語之曰、隨村々祝部所教、或殺牛馬祭諸社神、或頻移市、或禱河伯、旣無所効、蘇我大臣報曰、可於寺々轉讀大乘經典、悔過如佛所說、敬而祈雨、庚辰、於大寺南庭嚴佛菩薩像與四天王像、屈請衆僧、讀大雲經等、于時蘇我大臣手執香鑪、燒香發願、辛巳、微雨、壬午、不能祈雨、故停讀經、八月甲申朔、天皇幸南淵河上、

跪拜四方、仰天而祈、卽雷大雨、遂雨五日、溥潤天下、或本云、五日連雨、九穀登熟、於是天下、百姓俱稱萬歲曰至德天皇、己丑、百濟使參官等罷歸、仍賜大船與同船三艘、同船母慮紀舟、是日、夜半雷鳴於西南角、而風雨、參官等所乘船舶觸岸而破、丙申、以小德授百濟質達率長福、中客以下授位一級、賜物各有差、戊戌、以船賜百濟參官等、發遣、己亥、高麗使人罷歸、己酉、百濟新羅使人罷歸、九月癸丑朔乙卯、天皇詔大臣曰、朕思欲起造大寺、宜發近江與越之丁、復課諸國使造船舶、辛未、天皇詔大臣曰、起是月限十二月以來、欲營宮室、可於國々取殿屋材、然束限遠江、西限安藝、發造宮丁、癸酉、越邊蝦夷數千內附、冬十月癸未朔庚寅、地震而雨、辛卯、地震、是夜、地震而風、甲午、饗蝦夷於朝、丁酉、蘇我大臣設蝦夷於家、而躬慰問、是日、新羅弔使船、與賀騰極使船、泊于壹岐嶋、丙午、夜中地震、是月、行夏令、無雲而雨、十一月壬子朔癸丑、大雨雷、丙辰、夜半雷一鳴於西北角、己未、雷五鳴於西北角、庚申、天暖如春氣、辛酉、雨下、壬戌、天暖、

ふ爲王とあるは寶藏王を指せり同王は史記に建武王弟大陽王之子也とあり弟王子兒とあるに適へり
○都須流金流、都須流は官名にて對盧、金流は名なるべし
○高麗百濟客、客の字は北本楓本に據て補ふ
○津守連大海、津守連は欽明紀四年(四七頁)に見ゆ通證に田裳見宿禰十四代廣麻呂弟とあり
○國勝吉士水鷄、詳ならず齊明紀二年に難波吉士國勝等自百濟還とあるは別人か考ふべし
○坂本吉士、詳ならず
○安曇、岩本中本安を阿に作る
(三月)辛酉、諸本に據て補ふ
○賀騰極使、騰極は登極に同じ卽位を賀する使
(四月)太使、中本には大使とあり私記に太を渾(コニ)と訓り
○於畝傍家、原本於の字なく畝を敏に作る岩本北本應本等に據て補ひ訂す
○鐵、北本寮本錢に作る恐くは非なり
○不喚塞上、翹岐等の冠となるもの故に喚されざ

るなり

（五月）依網屯倉、仁德紀四十三年に出づ丹北郡三宅村にあり

○射獵、己未は五日なれば樂獵なるべし通證に端午騎射之始とあれど延喜式に凡五月五日天皇觀騎射走馬設御座於武德殿とある騎射なりとは見るべからず

○調使船、調の字は諸本に據て補ふ

○（注）蓋吉士云々、集解に此十字私記攙入とす

○服命、服復通用す天智紀にも見ゆ

○丙子、原本子を申に作る岩本中本に據て改む

○姉妹、原本妹姉に作る中本に據て改む

○熟稻始見、始は岩本北本應本等に據て補ふ五月熟稻始て見ゆるは祥瑞として擧げたるならむ

○百濟大井家、敏達紀元年（八一頁）に見ゆ河內國錦織郡百濟鄕にあり

○石川、河內國石川郡

（七月）客星、史記天官書に客星出天廷有奇命また隋書天文志に客星者周伯、老子、王蓬絮、國皇、溫星、凡五星皆

如春氣、甲子、雷一鳴於北方而風發、丁卯、天皇御新嘗、是日、皇子大臣各自新嘗、十二月壬午朔、天暖如春氣、甲申、雷五鳴於晝、二鳴於夜、甲午、初發息長足日廣額天皇喪、是日、小德巨勢臣德太代大派皇子而誄、次小德粟田臣細目代輕皇子而誄、次小德大伴連馬飼代大臣而誄、乙未、息長山田公奉誄日嗣、辛丑、雷三鳴於東北角、庚寅、雷二鳴於東而風雨、壬寅、葬息長足日廣額天皇于滑谷岡、是日、天皇遷移於小墾田宮、或本云、遷於東宮南庭之櫨宮、甲辰、雷一鳴於夜、其聲若裂、辛亥、天暖如春氣、是歲、蘇我大臣蝦夷立己祖廟於葛城高宮、而爲八佾之儛、遂作歌曰、野麻騰能、飫斯能毗稜栖鳴、倭拖羅務騰、阿庸比拖豆矩梨、擧始豆矩羅苻母、又盡發擧國之民并百八十部曲、預造雙墓於今來、一曰大陵、爲大臣、墓、一曰小陵、爲入鹿臣墓、望死之後、勿使勞人、更悉聚上宮乳部之民、乳部、此云美父、役使營兆所、於是上宮大娘姬王發憤而歎曰、蘇我臣專擅國政、多行無禮、天無二日、國無二王、何由任意悉役封民、自茲結恨、遂

客星也とあり
○大佐平智積、按に上文既に卒去とあり此に使人として來朝せるを見れば傳人の言は誤聞なりしなるべし　○健兒、續紀廢帝紀に天平寶字六年二月簡二點郡司子弟百姓年四十以下二十已上練習弓馬者一以爲二健兒一とみえて其人數は兵部式に見えたれど此はそれとは異なりて訓に見えたる如したゞ力者なりされば此時は諸國より出しにもあるべからず　○相撲、抄術藝部に相撲漢武故事云角觝今之相撲也王隱晉書云相撲(和名須末比)下伎也スマヒは言海に爭(スマ)ひの義二人力を鬪はする技と云通證に此七月相撲節之始也とあるが如く是は古へ禁中にて毎年七月に行はれし相撲節の始なり　○拜翹岐、翹岐は弟王子の兒なれば智積等敬禮して退けるなるべし　○豎者、抄人倫部に童禮記云童(和良波)未一冠之稱也また儀子文選東京賦注云儀子(師說和良波閇)童男童女也と見え字書に豎童僕之未一冠者と見ゆ入鹿が家に召使ひたる童僕なるべし　○白雀子、治部式に中瑞とす、蘇我氏かゝる祥瑞を得て悅びしは內心に欲する事あるが故なるべし　○相語、原本語を謂に作る岩本北本中本に據て改む　○殺牛馬祭云々、是は漢土の風の移れるなり漢書于定國傳に郡中枯旱三年卜一筮其故一于公曰孝婦不一當一死前太守彌斷之咎黨在一是乎於是太守殺一牛祭一孝婦冢一因表一其墓一天立大雨歲熟とあり　○移市、市場を異處に移し市廛の門を閉て集り來る人を內に入れざらしむる祭と見えたり後漢書禮儀志に請雨の注に董仲舒春秋繁露曰大旱雩祭而請一雨又曰諸巫母一大小一皆相一聚於郭門一爲一小壇一以一脯酒一祭一女獨擇一寬大便處一移一市市使一無一內一丈夫一丈夫無一得一相一從飲食一令一吏妻一各往視其夫皆到卽起一雨注而已とあり同書郎顗傳にも自一冬涉一春訖無一嘉澤一云々薦一祭山川一暴一龍移一市と見えたり　○禱河伯、是も皇國風の祭にはあらじ河伯は史記正義に河伯華陽潼鄉人姓馮氏名夷浴一於河中一而溺死遂爲一河伯一と見ゆ　○轉讀、大部の經を處々摘みて讀むを云眞讀に對して云　○大乘經典、佛敎に大乘小乘の別あり天台四敎義に究竟大乘無一過一華嚴大集大品法華涅槃一五部大乘經自一此起とあり　○大寺、舒明紀十一年に造れる百濟大寺なり　○四天王、崇峻紀卽位前紀(一〇一頁)に出づ　○大雲經、原本雲を乘に作る岩本北本寮本に據て改む佛說大雲請雨經を云　○香鑪、抄調度部に香鑪小品經云以一白銀香爐一燒一黑沈水一供養般若とあり　○燒香、香は抄香藥部に香樓炭經曰凡雜香有一四十二種一と見え沈香以下種々の香名を擧ぐ萬葉十六に香塗流(コリヌレル)塔爾莫依云々香をコリとよめるはカヲリの約か或は烟の凝る意かと云　○不能祈雨、通證に謂一無一雨也一と云　(八月)南淵河上、大和志云高市郡男淵女淵在一畑村南淵卽此　○跪拜四方、通證に四方拜始見とあれど後世の四方拜とは異なり此は天地四方を拜して雨を天神地祇に祈給ふなり　○(注)九穀、五雜俎に九穀者黍稷麻麥稻粱菽大小豆、古今注に九穀黍稷稻粱三豆二麥とあり水本には九を五とす　○至德天皇、論語泰伯に子曰泰伯其可一謂一至德とあり　○參官、敏達紀十二年(八九頁)に出づ　○大船、ツムは神功紀卽位前紀(卷上一七七頁)に出づ　○同船、欽明紀十四年(六三頁)に出づ　○(注)母慮紀舟、應本藤本慮を盧に作る　○鳴於西南角、於は北本寮本中本に據て補ふ　○小德、原本小を少に作る北本中本に據て改む　○中客、上客に對して云　○戊戌、原本戊辰に作る岩本中本に據て改む干支を推すに戊辰は九月十六日にて此月戊辰なし　○新羅使人、集解に新羅二字を削る按に上文三月庚午新羅使既に歸り其後來朝の事見えざるに由れり　(九月)起造大寺、集解云舒明天皇十一年詔曰造一作大宮及大寺一蓋未一落成一而天皇崩故有一此擧一大寺は大安寺卽ち百濟寺を云　○越之丁、原本此下百濟大寺の四字を分注す攙入なること明なれば削る　○船舶、原本舶を舫に作る岩本北本應本等に據て改む　○限十二月以來、通釋に以來をコナタと訓るを思に十二箇月の內に造り畢へむとの詔なるべしと云　○欲營宮室、北本營の下造の字あり此宮室は飛鳥板葺の宮なり　○殿屋材、原本材を村に作る岩本北本應本等に據て改む　○蝦蟆、北本楓本等蟆を夷に作る集解云檢一字書一無一蟆字一蓋因一蟆字一誤同施一虫而唐書亦作一蟆同書日本傳には蝦蟆と見ゆれば何れにてもよし　(十月)設、饗應するを云　○泊于壹岐嶋、集解に二月庚午所一罷歸一蓋途中遲留以一是日一至一壹岐島一とあり寮本藤本岐を伎に岩本藝に作る　○行夏令、夏の氣候の流行するなり禮記月令に孟冬行一夏令一則國多一暴風一方冬不一寒蟄虫復出とあり　○無雲而雨、而の字諸本に據て補ふ　(十一月)壬子、岩本北本中本に據て補ふ　○御新嘗、丁卯は十六日にて中卯なり神祇令云仲冬下卯大嘗祭新嘗祭は神代以來の舊儀なれど十一月中卯を用る例は正しく此に見えたり　○皇子、原本皇の下太の字あり岩本以下諸本及類史に據て削る　○各自新嘗、上代は家毎に新嘗祭を行ひし事此の記事及常陸風土記萬葉十四に見えたる上總國歌にて明なり　(十二月)發息長足日廣額天皇喪、舒明天皇は十三年十月崩御し給ひしに十五箇月を經て喪を發せらる　○巨勢臣德太、原本臣を巨に作る岩本北本應本等に據て改む公卿補任に德太雄柄宿禰七世孫

取俱亡、是年也太歲壬寅、

父胡孫子也男人大臣之後大化五年四月甲午任二左大臣一年五十一任二右大臣一年月未詳とあり　○大派皇子、敏達天皇の皇子　○粟田臣細目、推古紀十九年(一二三頁)に出つ　○輕皇子、孝德天皇　○大伴連馬飼、金村大臣の曾孫咋子連の子孝德紀卽位前紀に大伴長德連字馬飼又大化五年紀に授二大紫爲二右大臣一とあり　○息長山田公、應神天皇々子稚渟毛二俣王の後、息長は近江國坂田郡の地名なり姓氏錄左京皇別に息長眞人と見ゆ　○奉誄日嗣、持統紀二年に當麻眞人智德奉二誄一皇祖等之騰極次第一とあるに同じ　○庚寅、九日なり十三日甲午の前にあるべきなり集解信友校本には此條を前に移せり　○滑谷、三才圖會に滑谷在二大和國高市郡冬野村邊一とあり　○小墾田宮、高市郡にあり　○(注)東宮、中本東を當に作る　○己祖廟、北本寮本楓本に己の字なし支那の廟制に倣ひて作りしものなるべし　○葛城高宮、大和志に葛上郡高宮已廢存二宮戸森脇二村一高丘廟在二森脇村一(今南葛城郡吐田鄕村大字となる)とあり葛城は此氏の本居なり　○八佾之儛、論語八佾に子謂二季子一八佾舞二於庭一注に馬融曰佾列也天子八佾諸侯六魯以二周公故一受二王者禮樂一有二八佾舞一今季桓子僭二於家廟一舞之故孔子譏之とあり是も支那の俗を摸したるものなれど僭越の甚しきなり　○遂作歌、北本遂の字なし守部云八佾の儛れるのみならず遂にかゝるおふけなき歌をさへよめると云意なり　○飫斯能毗稜栖鳴云々、歌の表は倭の忍海の河の廣き瀨を渡らむと足結手刷り腰のわたりまでも引揚げて身の用意すといひて裏には今間なく大八洲を廣く押領せむそれ故にまづ先祖の廟をも天子と等しく祭りおくぞとなり(守部の解)　○百八十部曲、洽く諸氏の有せる部民なり　○造雙墓於今來、於は北本中本に據て補ふ大和志に葛上郡今木雙墓在二古瀨水泥邑一與二吉野郡今木村一隣とあり　○乳部之民、ミフベは御產(ミウブ)部なり宮乳部は聖德太子の爲に定め置かれたる乳部の民を云　○(注)美父、原本父を文に作る北本中本に據て改む　○營兆、中本營を塋に作る　○上宮大娘姬王、聖德太子の御女　○天無二日云々、禮記曾子問に出づ　○取俱亡、考本信友校本取を所に作る

【二年】寅、東北方なり　○雹、抄天地部に陸詞曰雹(和名阿良禮)雨氷也とあり　○雨氷、原本氷雨に作る岩本北本應本等に據て改む　○國內巫覡云々、以下不可悉聽までは三年紀にも出づ巫覡は抄人倫部に巫覡說文云巫(和名加无奈岐)祝女也文字集略云覡(乎乃古加牟奈岐)男祝也とありカムナキは神を和(チヨ)し奉る意なり原本覡を親に作る岩本に據て改む　○折取枝葉、枝葉は賢本の枝葉にて後に云玉串な

(癸卯)二年春正月壬子朔旦、五色大雲滿覆於天、而闕於寅、一色青霧周起於地、辛酉大風、二月辛巳朔庚子、桃華始見、乙巳雹、傷草木華葉、是月、風雷雨氷、行冬令、國內巫覡等折取枝葉、懸挂木綿、伺候大臣渡橋之時、爭陳神語入微之說、其巫甚多不可悉聽、三月辛亥朔癸亥、災難波百濟客館堂與民家室、乙亥、霜傷草木華葉、是月、風雷雨氷、行冬令、夏四月庚辰朔丙戌、大風而雨、丁亥、風起天寒、己亥、西風而雹、天寒人著綿袍三領、庚子、筑紫大宰馳驛奏曰、百濟國主兒翹岐弟王子

るべし
○渡橋之時、通釋に上の忍の廣瀬を渡らむとさある歌は廣瀬に大橋をわたし其橋を亘るさまを水を渡るが如くに詠るなるべし其今渡らむとする前驅を伺候ひて巫覡どもが大臣の喜ぶべき祥瑞を神語に托して爭ひ陳しなるべしと云
○家室、中本室を屋に作る
○綿袍、通證に溫袍也とあり
○丁未、類史遷御條に此日を庚子とす
○飛鳥板蓋新宮、扶桑略記に一說云同年移都於飛鳥板蓋新宮是大和國高市郡丘本宮同地也とあり大和志に高市郡板蓋宮川原宮俱在岡飛鳥二村間と見ゆ
○甲辰、大日本史に此條を上の丁未の上に移して今推干支訂之と注す
○相謂之曰、相の字は岩本中本に據て補ふ
○己亥年、己亥は舒明天皇十一年にて今年まで五年なり
○背違、岩本寮本背を皆に作る

共調使來、丁未、自權宮移幸飛鳥板蓋新宮、甲辰、近江國言、雹下、其大徑一寸、五月庚戌朔乙丑、月有蝕之、六月己卯朔辛卯、筑紫大宰馳驛奏曰、高麗遣使來朝、群卿聞而相謂之曰、高麗自己亥年不朝、而今年朝也、辛丑、百濟進調船泊于難波津、秋七月己酉朔辛亥、遣數大夫於難波郡、撿百濟國調與獻物、於是大夫問調使曰、所進國調欠少前例、送大臣物不改去年所還之色、送群卿物亦全不將來、背違前例、其狀何也、大使達率自斯、副使恩率軍善、俱答諮曰、卽今可備、自斯質達率武子之子、是月、茨田池水大臭、少虫覆水、其虫口黑而身白、八月戊申朔壬戌、茨田池水變如藍汁、死虫覆水、溝瀆之流亦復凝結、厚三四寸、大小魚臭如夏爛死、由是不中喫焉、九月丁丑朔壬午、葬息長足日廣額天皇于押坂陵、或本云、呼廣額天皇爲高市天皇也、丁亥、吉備嶋皇祖母命薨、癸巳、詔土師娑婆連猪手、視皇祖母命喪、天皇自皇祖母命臥病、及至發喪、不避床側、視養無倦、乙未、葬皇祖母命于檀弓崗、是日、大雨而雹、丙午、

○武子之子、岩本中本子の下に也の字あり
○茨田池、河内國茨田郡平池村(今北河内郡友呂岐村大字)
○八月、原本此下に戊月の二字あり諸本に據て削る
○葬、改葬なり
○押坂陵、諸陵式に押坂内陵在大和國城上郡大和志に在忍坂村上今稱丹冢陵墓要覽に磯城郡城島村大字忍坂とあり
○吉備嶋皇祖母命、吉備姫王卽ち天皇並孝德天皇の大御母に坐す島は高市郡の地名祖母は親母の義なり
○土師婆婆連猪手、推古紀十一年に見ゆ
○皇祖母命喪、命の字は諸本に據て補ふ
○檜弓岡、諸陵式に檜隈墓吉備姫王在高市郡檜隈陵域内陵墓要覽に坂合村大字平田とあり
○漸變、岩本寮本中本等漸の下一の漸の字あり
○如前所勅、國司等に從前の如く任所に赴きて其國を治めよと宣給ひしなり
○紫冠、大德の冠なるべ

罷造皇祖母命墓役、仍賜臣連伴造帛布各有差、是月、茨田池水漸變成白色、亦無臭氣、冬十月丁未朔己酉、饗賜群臣伴造於朝堂庭、而議授位之事、遂詔國司、如前所勅、更無改換、宜之厥任、愼爾所治、壬子、蘇我大臣蝦夷緣病、不朝、私授紫冠於子入鹿、擬大臣位、復呼其弟曰物部大臣、大臣之祖母、物部弓削大連之妹、故因母財取威於世、戊午、蘇我臣入鹿獨謀將廢上宮王等而立古人大兄爲天皇、于時有童謠曰、伊波能杯儞、古佐屢渠梅野倶、渠梅多儞母、多礙底騰哀羅栖、歌麻之之能烏賦、蘇我臣入鹿深忌上宮王等威名振於天下、獨謨僭立、是月、茨田池水還清、十一月丙子朔、蘇我臣入鹿遣小德巨勢德太臣、大仁土師婆婆連、掩山背大兄王等於斑鳩、或本云、以巨勢德太臣、佐馬飼首爲將軍、於是奴三成與數十舍人出而拒戰、土師婆婆連中箭而死、軍衆恐退、軍中之人相謂之曰、一人當千、謂三成歟、山背大兄仍取馬骨投置內寢、遂率其妃并子弟等、得間逃出、隱膽駒山、三輪文屋君、舍人田目連、及其女菟田諸石、伊勢阿部堅經從焉、巨勢德太

し

○復呼其弟云々、諸本に弟をオト、と訓めど傳曆に復呼二其第字一曰二物部大臣一とあり又姓氏錄布留宿禰の條に齊明天皇(皇極の誤なるべし)御世宗我蝦夷大臣號武藏臣物部首并神主首とありされば其とは蝦夷を指せるにて蝦夷の第の名を物部大臣の第とも呼ばしめしならむ本文に見ゆるが如く外戚の關係より物部守屋大連の遺產を領し併せて其姓氏をも冒せしなるべし

○古人大兄、舒明天皇の皇子にて母は蘇我馬子の女法提郎媛なるが故に之を立むとしたるなり

○童謠、字鏡に謠徒歌爲二謠是也和佐宇太とあり守部云童謠は時の異變を善惡共に神の謠はしめ給ふを云和邪は神態の和邪なりと

○伊波能杯爾云々、一首の解下文に見ゆ

○古佐屢渠梅野俱、守部はコメに子妻を含めたりと云

○渠梅多爾母、俗に米なりともと云が如し

臣等燒二斑鳩宮一灰中見レ骨、誤謂二王死一、解レ圍退出、由レ是山背大兄王等、四五日間淹留於山、不二得喫飲一、三輪文屋君進而勸曰、請移二向於深草屯倉一、從レ茲乘レ馬、詣二東國一、以乳部爲レ本、興師還戰、其勝必矣、山背大兄王等對曰、如二卿所一レ言、其勝必然、但吾情冀十年不役二百姓一、以二一身之故一豈煩二勞萬民一、又於二後世一、不レ欲二民言一、由二吾之故一喪二己父母一、豈其戰勝之後、方言二丈夫一哉、夫損レ身固レ國、不二亦丈夫者一歟、有レ人遙見二上宮王等於山中一、還導二蘇我臣入鹿一、入鹿聞而大懼、速發二軍旅一、述二王所一レ在、於高向臣國押一曰、速可二向レ山求一捉彼王、國押報曰、僕守二天皇宮一不敢出外、入鹿卽將二自往一、于時古人大兄皇子喘息而來、問、向二何處一、入鹿具說所由、古人皇子曰、鼠伏レ穴而生、失レ穴而死、入鹿由レ是止レ行、遣二軍將等一求二於膽駒一、竟不レ能レ覓、於是山背大兄王等自レ山還入二斑鳩寺一、軍將等卽以レ兵圍レ寺、於是山背大兄王使三輪文屋君一謂二軍將等一曰、吾起レ兵伐二入鹿一者、其勝定之、然由二一身之故一、不レ欲レ傷二殘百姓一、是以吾之一身賜二於入

鹿、終與子弟妃妾一時自經俱死也、于時五色幡蓋、種種伎樂、照灼於空、臨垂於寺、衆人仰觀稱嘆、遂指示於入鹿、其幡蓋等變爲黑雲、由是入鹿不能得見、蘇我大臣蝦夷聞山背大兄王等惣被亡於入鹿、而嗔罵曰、噫入鹿極甚愚癡、專行暴惡、爾之身命不亦殆乎、時人說前謠之應曰、以伊波能杯爾而喩上宮、以古佐屢而喩林臣、林臣、入鹿也、以渠梅野俱而喩燒上宮、以渠梅拖爾母陀礙底騰哀羅栖柯麻之之能鳴賦而喩山背王之頭髮班雜毛似山羊、又曰、棄捨其宮匿深山相也、是歲、百濟太子餘豐以蜜蜂房四枚放養於三輪山而終不蕃息、

○多礙底騰哀羅栖、飲食ふことを古くタゲと云トホラセは通り給へなり山背王の山に隱り給むにせめて米なりとも喫て通らせとの意、下文に四五日間淹留於山不得喫飲とある前兆なり

○歌麻之々能烏賦、山羊の老翁にて山背王に喩ふ

○（注）蘇我臣、北本楓本臣を大臣に作る

○獨謨、原本謨を謀に作る

○北本應本中本及釋紀に據て改む

○僭立、ヒトコロヒと訓るは通證に獨擅之意と云（以上注）

○（注）倭馬飼首、孝德紀大化元年に馬飼造續紀天平十一年に養得馬飼連乙麻呂見ゆ皆同姓なるべし　○奴、大兄王に召使はるゝ奴なるべし　○山背大兄、大兄の下王の字を脫せるか　○內寢、ヨドノは夜殿なり寢室を云　○三輪文屋君、三輪君は舒明紀八年（一四五頁）に出づ　○田目連、錄大和神別に多米宿禰天日鷲命二十二世孫意保止命之後也とある是か天武紀十三年に田目連賜姓曰宿禰とあり　○伊勢阿部、通證に多氣郡有敢氏人見續日本紀今安濃郡有阿部村と云　○德太臣、諸本太を大に作る　○見骨、傍訓ミテ、は見出而の義なり　○退出、中本出を去に作る　○淹留、ヘスムは經住の意なるべし　○不得喫飲、モノモエマキノボラズは食物も得參上らずにて聞食すを得ざるを云　○深草屯倉、山城國紀伊郡深草にあり　○乳部、上宮太子の乳部と定置れたる民の東國に多く在しなるべし　○十年不役百姓、何か故ありて誓はれしなるべし　○丈夫、原本大夫に作る岩本北本に據て改む下同じ　○還遣、原本導に作る諸本に據て改む　○高向臣國押、高向臣は舒明紀卽位前紀（一三八頁）に出づ續紀四和銅元年八月攝津大夫高向朝臣麻呂蘆難波朝廷刑部尙書國忍之子也とあり　○求捉、原本捉を投に作る岩本中本に據て改むカスウ、カスキイは齊明紀天武紀にも出づ北本にはカスムと訓り　○喘息、イワケは雄略紀（卷上二六〇頁）に駭た訓るに同じ字書に喘は疾息也とあり　○臥伏穴云々、集解に按言喩入鹿莫自往と云　○定之、ウツナシは通證に蓋不虛也とあり或は疑なしの意か　○傷殘、中本殘害に作る　○自經俱死、原本經を縊に作る北本應本に據て改む　傳曆に一說曰癸卯年十二月十一日丙戌亥時蘇我大臣兒林臣入鹿致奴王子兒名輕王巨勢德太臣大伴馬甘連中臣鹽屋連枚夫等六人發惡逆計太子々孫男女二十三人王無罪被害と云ひ山背大兄王以下の御名を列擧せり　○寺、斑鳩寺なり山背大兄王の御墓此地にあり式に北岡墓とある是也大和志に在平群郡法隆寺墓上有寺曰法積寺四畔圓丘五とあり大兄王のみならず此時俱に死給ひし廿三人の御屍をも此處に葬りしなるべし　○爾之身命、爾は爾に同じイガのイはイマシのイに同じ神武紀に見ゆ　○

（注）林臣入鹿也、傳曆に蘇我大臣兒林臣入鹿とあり此五字私記の攙入なるべし　○班雜、フ、キは源順集に黑かみのふゝきになればと見ゆフ、セは誤なるべし　○山羊、抄毛群部に麋羊爾雅注云麋羊（和名加万之師）大於羊而大角字鏡に狹をよみ康賴本草に羚角を訓り名義は通證に麋鹿也と云　○蜜蜂房、抄蟲豸部に蜜蜂方言注云蜜蜂（和名美知波知）黑蜂在竹木爲孔又有室者也、飲食部に密說文云蜜（音密俗云美知）甘飴也野王按蜂採百花釀蜜所成也とあり房は巢なり

【三年】中臣鎌子連、錄左京神別に藤原朝臣天兒屋根命二十三世孫內大臣大織冠中臣連鎌子とあり孝德紀白雉五年には鎌足に作れり大鏡に鎌足常陸に生るとあれど家傳には內大臣諱鎌足字中郎大倭國高市郡人也云々美氣古卿之長子也母曰大伴夫人とあり　○神祇伯、繼體紀元年にも見え神祇の長官なり伯とあるは追稱なるべし　○三嶋、攝津國嶋上郡にあり安閑紀元年に出づ此氏の別業ありし處にして家傳に詳なり　○阿倍氏、孝德紀大化元年に見ゆる元妃阿倍倉梯麻呂大臣女小足媛なるべし原本倍を陪に作る岩本北本臚本に據て改む　○（注）充舍人、原本充を宛に作る岩本中本に據て改む　○忠正、原本忠を惠に作る岩本中本及紀略に據て

（甲辰）三年春正月乙亥朔、以中臣鎌子連、拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三嶋、于時輕皇子患脚不朝、中臣鎌子連曾善於輕皇子、故詣彼宮而將侍宿、輕皇子深識中臣鎌子連之意氣高逸容止難犯、乃使寵妃阿倍氏、淨掃別殿高鋪新蓐、靡不具給、敬重特異、中臣鎌子連便感所遇、而語舍人曰、殊奉恩澤、過前所望、誰能不使王天下耶、（謂充舍人爲駈使也）舍人便以所語陳於皇子、皇子大悅、中臣鎌子連爲人忠正、有匡濟心、乃憤蘇我臣入鹿失君臣長幼之序、挾闘社稷之權、歷試接於王宗之中、而求可立功名哲主、便附心於中大兄、疏然未獲展其幽抱、偶預中大兄於法興寺槻樹之下打毬之侶、而候皮鞋隨毬脫落、取置掌中、前跪恭奉中大兄、對跪敬執、自茲相善、俱述所懷、既無所匿、復恐他嫌頻接、而俱手把黃卷、自

學周孔之教於南淵先生所、遂於路上往還之間、並肩潛圖、無不相協、於是中臣鎌子連議曰、謀大事者不如有輔、請納蘇我倉山田麻呂長女爲妃、而成婚姻之昵、然後陳說欲與計事、成功之路莫近於茲、中大兄聞而大悅、曲從所議、中臣鎌子連卽自往媒要訖、而長女所期之夜被偸於族、族、謂身狹臣也、由是倉山田臣憂惶、仰臥不知所爲、少女恠父憂惶、就而問曰、憂惶何也、父陳其由、少女曰、願勿爲憂、以我奉進、亦復不晚、父便大悅、遂進其女、奉以赤心、更無所忌、中臣鎌子連擧佐伯連子麻呂、葛木稚犬養連網田於中大兄、曰、云々、三月、休留休留、茅鴟也、産子於豐浦大臣大津宅倉、倭國言、頃者菟田郡人押坂直闕名將一童子欣遊雪上、登菟田山、便見紫菌挺雪而生、高六寸餘、滿四町許、乃使童子採取、還示隣家、摠言不知、且疑毒物、於是押坂直與童子煑而食之、大有氣味、明日、往見都不在焉、押坂直與童子因喫菌羹、無病而壽、或人云、蓋俗不知芝草、而妄言菌耶、夏六月癸卯朔、大伴馬飼連獻百

故む
○匡濟心、字書に匡は正也又方正也又救也とあり濟は成也又贖救也又相助也とあり
○蘇我臣、北本臣の上大の字あり
○闕闕、字書に私視也
○歷試、字書に歷は過也經也行也又次也とあり經過して試むるなり歷をツタヒと訓るは傳ひの意
○接於王宗之中、王宗は通證に謂王家之同宗也とあり於の字は北本中本に據て補ふ
○哲主、集解に原作主非と云て王に改む
○疏然、通釋に本のまゝにても聞ゆれど按に疏は雖の字の誤にもあるべしと云
○法興寺、崇峻紀卽位前紀推古紀四年に見ゆ
○打毬、蹴鞠を云抄術藝部に打毬唐韻云毬(音求打毬內典或謂之拍毬云末利宇知)毛丸打者也劉向別錄云打毬昔黃帝所造本因兵勢而爲之また蹴鞠傳玄彈棊賦序云漢成帝好蹴鞠、此間云末利古由公羊傳注云以足逆蹋也)とあり此に打毬

の字を用ひたれど卽ち蹴鞠なり
○皮鞋、倭名抄に見えず釋名に鞋解也者時縮其上如履然解其上則舒解也とあり
○黃卷、成語考に縑緗黃卷總謂經書代醉編に古人寫書皆用黃紙以蘗染之所以辟蠹也故名書曰黃卷と見ゆ
○周孔之敎、周公孔子を云て總て聖賢の敎の意
○南淵先生、通證に先生未詳其名疑南淵朝臣之先也以先生爲推古十六年所謂南淵漢人請安按是學問僧非學生也と云集解には學問僧南淵漢人請安是也此時釋氏兼儒如孝德天皇之時是法師任國博士是也と云り大和志に南淵先生墓在(高市郡)稻淵村今稱明神冢と見ゆ
○蘇我倉山田麻呂、原本山倉田に作る岩本北本應本等に據て改む公卿補任に馬子大臣之孫雄正子臣之子也とあり蝦夷の姪にして入鹿とは從父兄弟なり家傳に知山田臣與鞍作相忌曰中大兄曰察山田臣之爲人剛毅果敢

合花、其莖長八尺、其本異而末連、乙巳、志紀上郡言、有人、於三輪山見猿、晝睡、竊執其臂、不害其身、猿猶合眼歌曰、武舸都烏爾、陀底屢制羅我、爾古禰擧曾、倭我底鳴騰羅每、拖我佐基泥、佐基泥曾母野、倭我底騰羅須謀野、其人驚怪猿歌、放捨而去、此是經歷數年、上宮王等爲蘇我鞍作圍於膽駒山之兆也、戊申、於劍池蓮中有一莖二萼者、豐浦大臣妄推曰、是蘇我臣將榮之瑞也、卽以金墨書而獻大法興寺丈六佛、是月、國內巫覡等折取枝葉、懸掛木綿、伺大臣度橋之時、爭陳神語入微之說、其巫甚多、不可具聽、老人等曰、移風之兆也、于時有謠歌三首、其一曰、波波魯魯爾、渠騰曾枳擧喩屢、之麻能野父播羅、其二曰、烏智可拖能、阿婆努能枳枳始、騰余謀作儒、倭例播禰始柯騰、比騰曾騰余謀須、其三曰、烏麼野始儞、倭例烏比岐例底、制始比騰能、於謀提母始羅孺、伊弊母始羅孺母也、秋七月、東國不盡河邊人大生部多、勸祭虫於村里之人曰、此者常世神也、祭此神者致富與壽、巫覡等遂詐託於神語曰、祭常世神者、

貧人致富、老人還少、由是加勸捨民家財寶、陳酒菜六畜於路側、而使呼曰、新富入來、都鄙之人、取常世虫、置於清座、歌儛求福、棄捨珍財、都無所益、損費極甚、於是葛野秦造河勝惡民所惑、打大生部多、其巫覡等恐休其勸祭、時人便作歌曰、禹都麻佐波、柯微騰母柯微騰、枳擧曳倶屢、騰擧預能柯微乎、宇智岐多麻須母、此虫者常生於橘樹、或生於曼椒、曼椒、此云常世、其長四寸餘、其大如頭指許、其色綠而有黑點、其貌全似養蠶、冬十一月、蘇我大臣蝦夷兒入鹿臣、雙起家於甘檮岡、稱大臣家曰宮門、入鹿家曰谷宮門、谷、此云波佐麻、稱男女曰王子、家外作城柵、門傍作兵庫、每門置盛水舟一、木鉤數十、以備火災、恒使力人持兵守家、大臣使長直於大丹穗山、造桙削寺、更起家於畝傍山東、穿池爲城、起庫儲箭、恒將五十兵士繞身出入、名健人曰東方儐從者、氏々人等入侍其門、名曰祖子孺者、漢直等全侍二門、

威望亦高若得其意事必須成請先作婚姻之昵然後布心膂之策と見ゆ　○婚姻、爾雅釋親に婿之父爲姻婦之父爲婚婦之父母壻之父母相謂爲婚姻とあり　○媒要、原本媒を謀に作る岩本北本中本等に據て改む　○(注)身狹臣、孝德紀大化五年に據るに山田麻呂の異母弟なり　○恠父憂惶、岩本惶を色に作る　○憂惶何也、岩本北本楓本等憂を悔に作る　○遂進其女、天智紀に遠智娘と見ゆ持統天皇の御母なり　○佐伯連、欽明紀二十五年(六五頁)に出づ　○稚犬養連、錄攝津神別に若犬養宿禰火明命十六世孫尾綱根命之後也、天武紀十三年に賜姓曰宿禰と見ゆ　○云々、集解に按轉寫之人省功不載遂缺其文と云　○休留、抄羽族部に鵂鶹張華博物志云鵂鶹鳥休留二音漢語抄云以比止與)とあり其偏傍を省るなり通證に蓋言響イヒトヨム之義其鳴聲似人語今俗所謂布久呂布也と云　○豐浦大臣、蘇我蝦夷なり　○大津宅、和泉志に和泉郡大津とあり蓋豐浦大臣の別邸なり　○倭國言、次に志紀上郡とある如く倭國司より言上せし

なり　○頃者、原本頃を項に作る楓本中本に據て改む　○押坂直、錄左京未定雜姓に忍坂連火明命之後とあり　○紫菌、本草綱目に一名木芝本經氣味甘溫無毒とあり　○芝草、說文に芝神芝也本草に有青赤黃白黑紫六色注に芝爲瑞草服之とあり治部式に形似珊瑚枝葉連結或丹或紫或黑或金色或隨四時變色一云一年三華食之令眉壽とありて下瑞とす　○百合花、百合は抄草木部に百合本草云百合一名摩蕩(音麗和名由里)とあり原本花を華に作る今諸本に從ふ　○志紀上郡、大和國城上郡なり城上郡司の上申せしなり　○合眼、目を塞ぐを云ヒシキテは上に恐懾をヒシテと訓るヒシに同じ　○武舸都烏爾云々、一首の表の意は向の峰に立る我夫のにこやか(柔)なる手を以てこそ我手を取らめ誰か醜の拆手(恐しき手)を以て荒けなく我手を取るぞと臂を執へし人を猿の告めて云るにて裏の心は山背王をば柔かにいたはり奉るべきに入鹿が强暴なる軍將を遣して弑し奉るとは何事ぞやと告めたるなり原本佐基泥曾母野を基佐泥曾母野に作る集解に據て改む　○此是經歷數年云々、之を言上したるは三年六月なれど此猿怪ありしは二年十一月以前の事なれば其由を此に注記したるなり　○劍池蓮、舒明紀七年(一四五頁)にも見ゆ　○將榮、原本將來に作る諸本に據て改む　○金墨、金泥なり　○國內巫覡云々、以下不可具聽まで二年紀二月の條に出で類史にも二年二月の事とす　○其一曰、波波魯魯爾と書たるは上古の書法なり此意は神の彈き給ふ琴の音の遙に聞ゆるは今こそ蘇我大臣の宅地となりてあれ此島の地はやがて神の領し給べき藪原となるべしとなり島は馬子の時より宅地として島大臣と呼しなり尙歌の意は四年六月に見ゆ　○其二曰、上宮王は御性質女々しく入鹿の罪をも鳴らし給ず彼方の粟野の雉の如く音も立ずして臥しまし、かど天道是を許さず中大兄鎌子をして其罪を鳴して誅せしめ給むとなり岩本中本阿婆野を阿娑野に作儒を佐儒に作る阿娑野ならば朝野なるべし　○其三曰、林に我を引入れて巧を爲す人の面も其家も知らずとなり入鹿が已れを大極殿に欺き引入れて殺さむと企つる人のあるに其人の面も家も知らず居ることの愚かさよとの意なり尙歌の意は下文に出づ原本麼を麻に作る岩本中本に據て改む　○不盡河、駿河國にあり今の富士川なり　○大生部、姓氏錄に見えず續紀卷九神龜元年二月に大生部直三穗麻呂と云人見えたる外には史に見えず　○常世神、常世國の神を云常世は絕域の地を云るか　○陳酒菜、原本酒の下陳の字あり集解に據て削る　○六畜、爾雅釋畜に馬牛羊豕犬雞謂之六畜とあり　○清座、シキキは敷居なり常世虫を祀る座を淸らかに設くるを云　○葛野、山城國葛野郡卽ち秦氏の居地なり　○秦造、推古紀十一年(一一二頁)に出づ　○禹都麻佐波云々、太秦は、卽ち秦造河勝はもよ世の流言に聞え渡れる常世の神を打懲めましぬることよとの意なり河勝が打たるは多なれど多を打てば其神の根を斷つに依りてかく云るなり　○生於橘樹、於は北本藤本中本に據て補ふ　○曼椒、抄草木部に蔓椒(伊多知波之加美一云保曾岐)通證に今云犬山椒とあり延喜式(齋宮)には椒と書けり　(十一月)甘樫岡、高市郡豐浦村にあり　○谷宮門、谷は上に滑谷崗とあり　○兵庫、抄居處部に唐令云諸軍器在庫(漢語抄云豆八毛能久良)皆造棚閣安置別異とありヤクラは櫓の字を訓みて唐韻云櫓(夜久良)城上守禦樓とありされば ツハモノクラと訓べきか下文には然訓り　○盛水舟、俗に云ふ用水桶　○木鉤、淮南子氾論訓注に高誘曰鉤鎌也とあり　○長直、錄和泉神別に長公積羽八重事代主命之後也とあり　○大丹穗山、三代實錄元慶二年二月式外大和國大仁保神に從五位下を授くとあるを志に在高市郡入谷村(今稱春日)と見ゆされば此山高市郡にあるべし　○桙削寺、大和志に高市郡廢寺桙削寺古蹟在丹生谷村とあり　○健人、垂仁紀七年(卷上一二〇頁)に力士を上文に健兒をよめり　○東方儀從者、古より坂東の兵士の勇猛なる事世に聞えたれば之を採用せしなるべしシトリべは後取部なり安閑紀元年に僮豎をシトヘワラハと訓るも同じ　○氏々人、諸氏の人なり　○祖子孺者、通證に此號猶史記所謂家子一人とあり集解に按祖卽蝦蟆子孺昵近之義とあり　○漢直、此氏は古より蘇我氏と特殊の關係あるに據て全ら二門を守らしめしなり二門は宮門と谷宮門となり

【四年】阜嶺、たゞ山嶺(ミネ)なりチカノタケと訓は惡し　○宮寺、原本宮を官に作る北本應本楓本等に據り

(乙巳)四年春正月、或於阜嶺(チカタケニ)、或於河邊(ノホトリニ)、或於宮寺之間(ニ)、遙見(ニルニテ)有物而聽猿(ノサマヨフオトニ)吟、或一十許(ハトヲアマリバカリハ)、或廿許(ハタチ)、就(テ)而視之、物便不見(エホ)、尙聞(クナリ)鳴嘯(ウソフクオトヲ)之響、不能(ハミルコト)獲(ヲ)覩其身(ヲ)、舊本

改む
○(注)舊本云々、京を難波に移すことは孝德紀大化元年に見えたり兆の下也の字は諸本に據て補ふ
○伊勢大神之使也、景行紀四十年(卷上五八頁)に荒神之使也と云事見えたりそれと同じ後世熊野の烏八幡の鳩日吉の猿なども神使と云も皆同じ

(四月)鞍作、推古紀十四年(一一七頁)に出づ
○以虎爲友、虎の怪を爲す事太平廣記等に例多し
○黃地、黃は說文に地之色也とあり此はたゞ地と云に同じ
○白水、泉なり此はたゞ水の意
○大極殿、抄居處部に大極殿朝堂院正殿名也とあり但し此に大極殿とあるは追稱にて當時は大安(ヤスミ)殿と云しなり大極殿をオホヤスミドノと訓べき由玉勝間に見ゆ
○俳優、字書に雜戲也とありワザヒトはワザヲキビトの略なり神代紀(卷上二八頁)に見ゆ
○方便、翻譯名義集に能巧用諸法隨機利物故曰方便とあり

云、是歲移京於難波、而板蓋宮爲墟之兆也、時人曰、此是伊勢大神之使也、夏四月戊戌朔、高麗學問僧等言、同學鞍作得志、以虎爲友、學取其術、或使枯山變爲青山、或使黃地變爲白水、種々奇術不可殫究、又虎授其針曰、愼矣愼矣、勿令人知、以此治之、病無不愈、果如所言、治無不差、得志恒以其針、隱置柱中、於後虎折其柱、取針走去、高麗國知得志欲歸之意、與毒殺之、六月丁酉朔甲辰、中大兄密謂倉山田麻呂臣曰、三韓進調之日、必將使卿讀唱其表、遂陳欲斬入鹿之謀、麻呂臣奉許焉、戊申、天皇御大極殿、古人大兄侍焉、中臣鎌子連知蘇我入鹿臣爲人多疑、晝夜持劍、而敎俳優方便令解、入鹿臣咲而解劍、入侍于座、倉山田麻呂臣進而讀唱三韓表文、於是中大兄戒衞門府、一時俱鏁十二通門、勿使往來、召聚衞門府於一所、將給祿、時中大兄卽自執長槍、隱於殿側、中臣鎌子連等、持弓矢而爲助衞、使海犬養連勝麻呂授箱中兩劍於佐伯連子麻呂與葛城稚犬養連網田曰、努力努力、急須應斬、子麻呂等、以水送飯、恐而反吐、

○衛門府、職員令に衛門府督一人掌諸門禁衛出入禮義以時巡檢及隼人門籍門牓事とあり抄職官部に衛門府を由介比乃豆加佐と訓り靫を負ひて仕奉る由の名なり

○十二通門、宮城には四方に各三門あり合せて十二門なり拾芥抄に正南二門なり拾芥抄に正南曰朱雀南之左曰美福右曰皇嘉北曰偉鑒北之東曰達智西曰安嘉東曰待賢東之南曰郁芳北曰陽明西曰藻壁西之南曰談天北曰殿富とあり但し是は延暦以後平安城の名稱にて當時は如何にありしか知り難し

○召聚衛門府云々、異變を生ぜしめざる爲なり入鹿の威に怖れて彼に從ふもの多ければ之を懸念し給ふなり

○海犬養連、錄右京神別に海犬養海神綿積命之後也とありて姓なし天武紀十三年十二月海犬養連賜姓曰宿禰と見ゆ

○授箱中兩劍、原本授を投に作る諸本に據て改む

○急須、急に瞬間にの意なり

中臣鎌子連嘖而使勵、倉山田麻呂臣恐唱表文將盡而子麻呂等不來流汗浹身、亂聲動手、鞍作臣怪而問曰、何故掉戰、山田麻呂對曰、恐近天皇、不覺流汗、中大兄見子麻呂等畏入鹿威、便旋不進、曰咄嗟、卽共子麻呂等出其不意、以劍傷割入鹿頭肩、入鹿驚起、子麻呂運手揮劍、傷其一脚、入鹿轉就御座叩頭曰、當居嗣位、天之子也、臣不知罪、乞垂審察、天皇大驚詔中大兄曰、不知所作、有何事耶、中大兄伏地奏曰、鞍作盡滅天宗、將傾日位、豈以天孫代鞍作耶、蘇我臣入鹿、更名鞍作、天皇卽起入於殿中、佐伯連子麻呂、稚犬養連網田斬入鹿臣、是日雨下潦水溢庭、以席障子覆鞍作屍、古人大兄見走入私宮、謂於人曰、韓人殺鞍作臣、謂因韓政而誅吾心痛矣、卽入臥內杜門不出、中大兄卽入法興寺、爲城而備、凡諸皇子、諸王、諸卿大夫、臣連伴造國造、悉皆隨侍、使人賜鞍作臣屍於大臣蝦夷、於是漢直等摠聚眷屬、擐甲持兵、將助大臣、處設軍陣、中大兄使將軍巨勢德陀臣、以天地開闢君臣始有、說於賊黨令

○以水送飯、水をかけて飯を食ふなり云字鏡に糒幡等を伊比須久と訓み糒は米和漢也幡は字書に米汁と云り字穗に穀を斷ち鹽斷ちて木實松の葉をすきて源氏にさるべきもの作りてすかせ奉ると見ゆ
○反吐、タマヒは抄疾病部に歐吐字亦作嘔倍止都久又太萬比とあり
○浹身、原本浹を沃に作る諸本及紀略に據て改む浹は字書に洽也とあり
○便旋、メクラヒは徘徊(メクリ)の延びたるなり
○咄嗟、原本咄を吐に作る岩本に據て改む字書に呵吐之義とあり
○天之子也云々、天之子は天神の御子と申すが如し正しく日嗣の位に坐す天神の御子なればかゝる事件の曲直は神ながら知看すべし審察を仰ぎ奉るとの意なり
○天宗、天綜天統など云に同じ皇統の意也集解に按謂天子宗室也とあり
○席障子、席は抄調度部坐臥具に筵疏文云疏和名無之呂竹席也唐韻云席同上障子は同部屏障具に障子漢語鈔云障子

知所赴、於是高向臣國押謂漢直等曰、吾等由君大郎應當被戮、大臣亦於今日明日立　俟其誅決矣、然則爲誰空戰、盡被刑乎、言畢解劍、投弓捨矢、此而去、賊徒亦隨散走、己酉、蘇我臣蝦夷等臨誅、悉燒天皇記國記珍寶、船史惠尺卽疾取所燒、國記而奉獻中大兄、是日、蘇我臣蝦夷及鞍作屍許葬、於墓、復許哭泣、於是或人說第一謠歌曰、其歌所謂、波魯波魯儛、渠騰曾枳擧喩屢、之麻能野文播羅、此卽宮殿接起於嶋大臣家、而中大兄與中臣鎌子連、密圖大義謀、戮入鹿之兆也、說第二謠歌曰、其歌所謂烏智可拖能、阿婆努能枳枳始、騰余謀佐儒、倭例播禰始柯騰、比騰曾騰余謀須、此卽上宮王等、性順都無有罪、而爲入鹿見害、雖不自報、天使人誅之兆也、說第三謠歌曰、其歌所謂烏麼野始儛、倭例烏比岐以例底、制始比騰能、於謀提母始羅孺、伊弊母始羅孺母也、此卽入鹿臣、忽於宮中、爲佐伯連子麻呂、稚犬養連網田、所斬之兆也、庚戌、讓位於輕皇子、立中大兄爲皇太子、

（屏風之屬也）とありて訓なしシトミは同居處部に篆周禮注云篆（字亦作）部和名之度美、覆（暖障）光者也とあるを採りしなるべし通釋は敷田氏の標注に據て席を張たる障子なるべしと云ひたれど障子は衝立なり故に屏風の屬と云此は大極殿にての事にて席張りたる障子なるべくも思はれねば集解の說の如く席を以て屍を覆ひ障子を以て之を圍みしなるべし

○私宮、古人大兄の住給ふ宮なり

○韓人殺鞍作云々、敷田氏は古人大兄皇子禍の身に及む事を懼れ韓人に托して面從せしにこそと云ひ通釋には僞り造れる韓人等も共に立ちて之に預れるか又は大兄のあわてまして眞の韓人が殺せりと見給ひしまゝに宣給へるかと云　○撰甲、原本撰を懷に作る岩本寮本中本に據て改む　○將助大臣、將は岩本中本及家傳に據て補ふ　○處設、處は岩本北本に據て補ふ處或は遽の誤か　○令知所赴、賊黨卽ち漢直等の眷屬は元來唐人の種なれば革命の國風に慣れ反賊にも與せしを我國の君臣の名分を說諭して赴くべき所を知らしめ給ひしなり原本赴を起に作る岩本水本に據て改む　○高向臣國押、二年紀に出づ　○君大郎、入鹿の字なり傳曆に入鹿時人稱二太郎一とあり太郎は嫡子の稱にて君太郎とは太郎君と云が如し　○悉燒天皇記國記、馬子以來世々大臣となり殊に寵榮を抱きたれば祕府の珍寶は悉く其家に預り居たりしならむ此記等の事は推古紀廿八年（一二九頁）に見ゆ　○船史惠尺、續紀文武紀四年に道照和尙物化俗姓船連父惠釋小錦下とあり　○奉獻、獻の字岩本中本に據て補ふ　○許葬於墓、通證に所謂今木雙墓也とあり通釋には蝦夷父子大罪ありて戮せられし者なれば其死屍を散梟すべきを宥めて墓に葬り又哭泣を許されしにいかでか豫て作置る大陵小陵などに葬ることを得む必ず別處に假初に作りしなるべしと云り　○哭泣、ネツカへは哭奉仕なり泣きて尸に仕るを云　○以例氏、上文以の字なし　○讓位、我國にて讓位の始なり

日本書紀卷第廿四

【卽位前紀】天萬豐日天皇、日によそへて稱へ奉れる美稱、始は輕皇子後に輕萬德（マトコ）皇子とも申奉る

○尊佛法輕神道、此六字本紀の文例に違へり後人の加筆なるべしと云

○（注）生國魂社、式に攝津國東生郡難波坐生國咲國魂神社とある是なり攝津志に舊在玉造生玉庄府城地一天正中太閤遷祠郡戸（コヲツ）南加祭田とあり官幣大社生國魂神社是なり

○詔曰云々、宣命の文を略したるなり

○古人大兄、下文に古人太子とあれば此時皇太子に坐ししなるべし

○殿下、儀制令に於三后皇太子上啓稱殿下

○殿下之舅、御母の御弟にまさばかく云

○禪位、集解には活字本に據て此下に於輕皇子の四字を補ふ

○爾輕皇子云々、是も亦宣命の語を省けるなり

○（注）古人大市皇子、大市は大和國城上郡大市是なるべし

○拱手、手を左右にして

日本書紀卷第廿五（ハタチアマリイツマキニアタルマキ）

天萬豐日天皇　孝德天皇

天萬豐日天皇（アメヨロヅトヨヒノハアメノトヨタカライカシヒタラシノスメラミコト）、天豐財重日足姫天皇（アメトヨタカライカシヒタラシノヒメノスメラミコト）の同母弟（ハラノイロト）也、尊佛法（ミノリヲアナヅリタフノ）輕神道（カルノカミノミチ）、斷生國魂（ハヤフクニタマ）社樹之類是也、爲人柔仁好儒（ヒトトナリヤハラカニ）、不擇貴賤（ムトヒトニ）、頻降恩勅（シキリニメグミノミコトノリ）、天豐財重日足姫天皇四年六月十四庚戌、天豐財重日足姫天皇、思欲傳位於中大兄（オモホシテヘタマハムトテ）、而詔曰（シカクイヘリ）、云々、中大兄退語於中臣鎌子連（カマコノムラジ）、中臣鎌子連議曰（クフルヒト）、古人大兄殿下之兄也（イロネナリ）、輕皇子殿下之舅也（ハキミノラヂナリ）、方今古人大兄在而殿下（マシマスルヲ）陟天皇位（アマツヒツギシラセバ）、便違人弟恭遜之心（ウヤシミシタガフ）、且立舅（マタテカナハバ）以答民望（タヨカラニ）、不亦可乎（ヤ）、於是中大兄深嘉（クヨミシ玉ヒ）厥議（チシノビニテマウシタマフ）、密以奏聞（ヒソカニ）、天豐財重日足姫天皇授璽綬禪位（タマヒテミシルシヲリ玉フ）、策曰（オホミ「ニクア、イマシノミコシカクイヘリノミコトノリシ）、咨爾輕皇子云々、輕皇子再三固辭（シキリニイナビテ）、轉讓於古人大兄（更名古人大市皇子）曰（ク）、大兄命是昔天皇所生（ハレサキノミコナリ）、而又年長（タ、オイタリ）、以斯二理（コヽリリチシ）、可居天位（マスタカミクラニ）、於是古人大兄避座（テシキホヲシリゾキテ）、逡巡（コマヌキテ）、拱手辭曰（ウケ玉ハリシタガハム）、奉順（ノオホミ「ニ）天皇聖旨（ソイタハシク）、何勞推讓於臣（ユヅリ玉ハム）、臣願出家入于吉野（ヤツコニハコフ）、勸修佛道（ヒトトナラムケ）、奉祐天皇（ヒ）、辭訖（テヌキテ）、解所

佩刀、投擲於地、亦命帳內、皆令解刀、卽白詣於法興寺佛殿與塔間、別除髯髮、披著袈裟、由是輕皇子不得固辭、昇壇卽祚、于時大伴長德字馬飼連帶金靱、立於壇右、犬上健部君帶金靱、立於壇左、百官臣連國造伴造百八十部羅列匝拜、是日、奉號於豐財天皇曰皇祖母尊、以中大兄爲皇太子、以阿倍內麻呂臣爲左大臣、蘇我倉山田石川麻呂臣爲右大臣、以大錦冠授中臣鎌子連爲內臣、增封若干戶云々、中臣鎌子連、懷至忠之誠、據宰臣之勢、處官司之上、故進退廢置、計從事立云々、以沙門旻法師、高向史玄理爲國博士、辛亥、以金策、賜阿倍倉梯麻呂大臣與蘇我山田石川麻呂大臣、或本云、十九賜練金、乙卯、天皇皇祖母尊皇太子、於大槻樹之下、召集群臣盟曰、告天神地祇曰、天覆地載、帝道唯一、而末代澆薄、君臣失序、皇天假手於我、誅殄暴逆、今共瀝心血、而自今以後、君無二政、臣無貳朝、若貳此盟、天災地妖、鬼誅人伐、皎如日月也、改天豐財重日足姬天皇四年、爲大化元年、

抱くなコマヌクといへど禮容に非ず左傍にツクルと訓るが如く手を正しうし給ふ狀なり　○投擲於地、通釋に古人大兄は先帝の長子にませば當然卽位し給ふべきを中大兄の其を超えて位を踐み給はむと思ぼす下心ましまして先づ御身を位に卽け參らせむとするは其計略なることを知食せば甚く之を憤り給ひ何勞推讓於臣と宣ひて佩刀なさへ地に投擲ち給ふなり是後日此皇子の吉野にて謀反し給ふことの張本なりと云　○卽自、集解自を日に作る應本卽の字なし　○髯、北本鬚に作る　○袈裟、抄調度部僧坊具に袈裟(俗云介佐)天竺語也、此云無垢衣又功德衣孫愛曰傳法衣卽沙門之服也翻譯名義集に袈裟具云迦羅沙曳、此云不正色、從色得名章服儀云袈裟之目因於衣色如經中壞色衣也とあり　○昇壇、原本昇を升に作る北本に據て改む　○大伴長德、公卿補任に白雉二年七月甍字馬養或鳥養金村大臣之曾孫父咋子連也とあり　○金靱、金にて飾れる靱なり　○犬上健部君、景行紀五十一年(卷上一六一頁)に出づ日本武尊の後なり　○奉號、原本號於を顚倒せり北本應本に據て改む　○豐財天皇、天豐財重日足姬天皇を略きて書けり　○阿倍內麻呂、次に倉梯麻呂とあるも同人也　○左右大臣、始て見ゆ抄職官部に大臣於保伊萬宇智岐美とあり此時の大臣は令制の左右大臣の如くならで臣姓なる阿倍氏蘇我氏を大臣とせられしなれば名は同じくして實は異れる所あり　○大錦冠、此時未だ此冠なし特に製りて賜へりしなるべし大化三年に至て七色十三階の冠を制し給ふ其中第七階に大錦冠あり　○內臣、扶桑

略記抄本に年三十一、又云内臣准大臣位也とあり鎌足公は連姓なれば此内臣の臣は阿倍氏等の大臣の臣と異なり内々にありて天皇の御諮詢に應ずる前つ君の意なり内大臣に進みても然なり　○増封、封は戸人（ヘトヒト）なり賦役令に凡封戸者皆以課戸充調全給其田租爲二分二分入官一分給主とあり補任に鎌足は此時二千戸を封ずと見えたれば是までの封戸に加へて二千戸を増給せられしなり　○云々、集解に云々二字不レ穩疑詔曰二字誤といへど是は封を増し給ふ宣命を略けるなるべし　○懷至忠之誠、以下計從事立に至る廿四字は魏志武帝紀伊尹懷至忠之誠云々の文を取て鎌足を伊尹霍光に比て賞せしなり　○沙門、翻譯名義集に佛法及外道凡出家者皆名沙門とあり　○國博士、こゝは令制の國々の博士ならで日本全體としての博士と見るべし　○金策、金を以て作りたる書札なり文選遊天台山賦に出つ　○（注）練金、コマカネとあるは誤なり釋紀にコナカネとあるぞ宜き熟金（コナカネ）なり　○盟曰、楓本中本所引の旁書に曰を焉に作る　○（注）告天神地祇、以下如日月也に至る六十八字は本文に續けて大書すべきなり此文を熟讀するに蘇我氏の如き驕傲の臣の再出せむことを恐れ諸臣をして忠誠ならむことを神祇に盟はしめ給へるなり　○誅殄暴逆、蘇我入鹿を除き給ふを云　○大化、釋紀に兼方案之誅殄入鹿臣之暴逆天下安寧政化敷行故號元於大化とあり之を年號の見えし始めとすれど繼體天皇の御代に善記い號ありしこと濫觴抄二中歷等に見えたれば内々には既に用ひられし事ありしも洽く行はれざりしが此に至りて公に元號を定め汎く世に行はしめられしなり

【大化元年】小足媛、編年記に男足に作る　○調使、原本使を進に作る北本中本に據て改む　○進任那調、進の字は中本水本に據て補ふ　○津館、難波館なり　○巨勢德太臣、通證に上當レ有二以字一と云　○明神云々、續紀一に現御神萬葉に明津神吾皇之等あるも皆同じ意にて明かに見え給ふ神の義なり令詔書式に明神御宇日本天皇詔旨義解に謂以二大事宣一於蕃國使一之辭也とあり　○日本、通釋に詔命の時はヒノモトとよまず御宇日本（シロシメス ヒノモト）と音讀にするが例なりと云　○高麗神子、獨り御國人

大化元年秋七月丁卯朔戊辰、立二息長足日廣額（舒明）天皇女間人皇女（ハシヒト）一爲二皇后一、立二妃（ミメ）一、元妃阿倍倉梯麻呂大臣女曰小足媛（タラシ）、生有二間皇子一、次妃蘇我山田石川麻呂大臣女曰乳娘（チイラツメ）、丙子、高麗、百濟、新羅、並遣使進調、百濟調使兼領（カネアヅカリ）任那使、進任那調、唯百濟大使佐平緣福遇病、留津館（ムロツミヤコ）而不入於京（ミヤコニ）、巨勢德太臣詔於高麗使曰、明神御宇日本天皇詔旨、天皇所遣之使、與高麗神子奉遣之使、既往短而將來長、是故可以溫和之心相繼往來而已、又詔於百濟使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠皇祖之世、以百濟國爲內官家、譬如三絞之綱、中間以任那國屬賜

百濟、後遣三輪栗隈君東人、觀察任那國堺、是故百濟王隨勅悉示其堺、而調有闕、由是却還其調、任那所出物者、天皇之所明覽、夫自今以後、可具題國與所出調、汝佐平等、不易面來、早須明報、今重遣三輪君東人、馬飼造名闕又勅可送遣鬼部達率意斯妻子等、戊寅、天皇詔阿倍倉梯萬侶大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、當遵上古聖王之跡而治天下、復當有信可治天下、己卯、天皇詔阿倍倉梯麻呂大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、可歷問大夫與百伴造等、以悅使民之路、庚辰、蘇我石川麻呂大臣奏曰、先以祭鎭神祇、然後應議政事、是日、遣倭漢直比羅夫於尾張國、忌部首子麻呂於美濃國、課供神之幣、八月丙申朔庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、隨天神之所奉寄、方今始將修萬國、凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之任、皆作戶籍、及校田畝、其薗池水陸之利、與百姓俱、又國司等在國不得判罪、不得取他貨賂、令致民於貧苦、上京之時、不得多從百姓於己、唯得使從國造郡領、但以公事往來之時、得

のみならず外國の人をも神の子なりと申さるゝは內外を隔てぬ廣き御心と申すべし
○既往短云々、集解に按使至之日短不至日長故曰可以相繼而至朝廷也と云
○三絞之綱、ミセはミツヨリの誤ならむ出雲風土記に三百(ミツヨリ)之綱打掛而とあれば三筋搓り合せて絡ひたるを云其意は高麗百濟新羅は三絞の綱の如く心を一にして我朝に仕へ奉れとの譬に出しなり
○三輪栗隈君、集解に按三輪氏在栗隈者也と云栗隈は山城國久世郡にあり
○不易面、壯健にして姿の何時も變らぬを云
○鬼部、高麗の部名なれど他に見えず
○上古聖王、我皇祖皇宗を申奉る
○以悅使民、是れ御歷代天皇の人民を威壓することなく心の中より悅び服はせ給ふ大御心なるが此御諮詢に答奉りし石川麻呂の心も亦いとめでたし
○先以云々、禁祕抄に禁

中作法先神事後他事とあり太政官式に凡内外諸司所レ申庶務辨官惣勘申二太政官一其史讀申皆依二司次一若申二數事一各先二神事一云々と見えしなど皆同じ意なり

○供神之幣、集解に齋大嘗祭神幣也と云かく見れば上の美濃尾張の二國が悠紀主基兩國と卜定せられしならむ

《八月》隨天神之所奉寄、所奉寄は大祓詞に事依奉伎如此依志奉志などある如く大政を寄せ授け給はりしを云

○國家所有公民、朝廷の所有し給ふ公民にて公領の人々なり

○大小所領人衆、臣連伴造等の領する人衆にて上向に對して私領の人民を云

○之任、任國に罷るを云

○皆作戸籍、戸籍は允恭紀に注す大政を一新せむには先づ戸數人口を調査せざるべからず然れば崇神天皇が四道將軍に復命後校二人民一さあるも此の作二戸籍一さあるも同意なり

○校田畝、田畠を調査す

騎部内之馬、得飡部内之飯、介以上奉法、必須哀賞、違法當降爵位、判官以下、取他貨賂、二倍徵之、遂以輕重科罪、其長官從者九人、次官從者七人、主典從者五人、若違限外將者、主與所從之人、並當科罪、若有求名之人、元非國造伴造縣稻置而輙詐訴言、自我祖時領此官家、治是郡縣、汝等國司、不得隨詐便牒於朝、審得實狀而後可申、又於閑曠之所、起造兵庫、收聚國郡刀甲弓矢、邊國近與蝦夷接境處者、可盡數集其兵、而猶假授本主、其於倭國六縣被遣使者、宜造戸籍、并校田畝、謂檢覈墾田頃畝及民戸口年紀、汝等國司、可明聽退、卽賜帛布各有差、是日、設鍾匱於朝而詔曰、若憂訴之人有伴、造者、其伴造先勘當而奏、有尊長者、其尊長先勘當而奏、若其伴造尊長不審所訴、收牒納匱、以其罪々之、其收牒者、昧旦執牒奏於内裏、朕題年月便示群卿、或懈怠不理、或阿黨有曲、訴者可以撞鍾、由是懸鍾置匱於朝、天下之民咸知朕意、又男女之法者、良男良女共所生子配其父、若良男娶婢所生子配其母、若良女嫁

奴所生子配其父若兩家奴婢所生子配其母若寺家仕丁之子者如
良人法若別入奴婢者如奴婢法今克見人爲制之始癸卯遣使於大
寺喚聚僧尼而詔曰於磯城嶋宮御宇天皇十三年中百濟明王奉傳佛
法於我大倭是時群臣俱不欲傳而蘇我稻目宿禰獨信其法天皇乃
詔稻目宿禰使奉其法於譯語田宮御宇天皇之世蘇我馬子宿禰迫遵
考父之風猶重能仁之教而餘臣不信此典幾亡天皇詔馬子宿禰而
使奉其法於小墾田宮御宇天皇之世馬子宿禰奉爲天皇造丈六繡像
丈六銅像顯揚佛教恭敬僧尼朕更復思崇正教光啓大猷故以沙門
狛大法師福亮惠雲常安靈雲惠至寺主僧旻道登惠隣惠妙而爲十師
別以惠妙法師爲百濟寺々主此十師等宜能教導衆僧脩行釋教
要使如法凡自天皇至于伴造所造之寺不能營者朕皆助作今拜寺
司等與寺主巡行諸寺驗僧尼奴婢田畝之實而盡顯奏卽以來日臣
闕名三輪色夫君額田部連甥爲法頭九月丙寅朔遣使者於諸國治兵本或

る を云ふ
○蘭池、蔬菜菓樹の生する地なり
○水陸之利云々、百姓と共に其利を分ち國司獨り其利を占むることを得ざれとなり凡國造は皇別と功臣とを任じ神代の國主（クニヌシ）の遺風なりしを此に至りて郡縣の制に一變せるなり
○判官以下、官職に四等を建つる事此に始て見ゆ判官は國にありては掾と云ひ郡にては主政と云
○次官從者七人、此下に判官從者六人の六字を脫せしならむ
○求名之人、門地を僞りて榮名を求むる人を云
○縣稻置、縣の下恐らくは主の字を脫す
○閑曠之所、字書に閑は散也冗也曠は空也虛也とありて空地を云
○蝦夷、原本夷を蛾に作る今諸本に從ふ
○數集其兵、兵器の數を調査して集むるを云
○假授本主、授の字は北本應本中本に據て補ふ
○倭國六縣、祝詞式祈年祭の條に御縣爾坐云々高市、葛木、十市、志貴、

山邊、曾布とあり此六縣は天皇の御料地にて戸籍なども確かなるものなく田畠の歩數なども精確ならざりし故に特に使者を差して戸籍を造り田畠を檢挍せしめられしなり

○(注)謂檢覈云々、通證に墾田所開墾之田、頃畝田數也魯讀恐非戸計也口生齒也年紀令義解猶云年歳也とあり集解は此十三字爲私記據後漢書光武紀文所注後遂攙入とす云

○設鍾匱於朝而、鍾は鐘に通ず匱は字書に匣也とあり抄器皿部に匱(和名比都)似厨而上開闔器也と見ゆ姦吏の爲に訴を曲げらるゝ時は鐘を撞きもし伴造尊長の者其寃罪を審にせざる時は其旨を記して匱に納よとなり而の字は北本中本及類史に據て補ふ

○勘當而奏、伴造尊長が先づ勘當して奏すべきものは之を奏したるなり此事後世まで因襲して平安朝までは氏長者武家時代になりては總領之を勘當せり是上古氏族制の遺風なり

云、從六月、至于九月、遣使者於四方國、集種種兵器、戊辰、古人皇子與蘇我田口臣川掘、物部朴井連椎子、吉備笠臣垂、倭漢文直麻呂、朴市秦造田來津謀反、(或本云、古人太子、或本云古人大兄、此皇子入吉野山、故或云吉野太子、垂、此云之娜麼)丁丑、吉備笠臣垂自首於中大兄曰、吉野古人皇子、與蘇我田口臣川掘等謀反、臣預其徒、(或本云、吉備笠臣垂言於阿倍大臣與蘇我大臣曰、臣預於吉野皇子謀反之徒、故今自首也、)中大兄卽使蒐田朴室古、高麗宮知、將兵若干討古人大市皇子等、(或本云、十一月甲午卅日、中大兄使阿倍渠曾倍臣、佐伯部子麻呂二人、將兵卅人、攻古人大兄、斬古人大兄、與子、其妃妾自經死、或本云、十一月、吉野大兄王謀反、事覺伏誅也、)甲申、遣使者於諸國、錄民元數、仍詔曰、自古以降、每天皇時、置標代民、垂名於後、其臣連等伴造國造各置己民、恣情駈使、又割國縣山海林野池田、以爲己財、爭戰不已、或者兼并數萬頃田、或者全無容針少地、進調賦時、其臣連伴造等先自收斂、然後分進、修治宮殿、築造園陵、各率己民隨事而作、易曰、損上益下、節以制度、不傷財不害民、方今百姓猶乏、而有勢者分割水陸、以爲私地、賣與百姓、年索其價、從今以後不得賣地、勿妄作主、兼并劣弱、百姓大悅、冬十二月乙未朔癸卯、天皇遷都難波長柄豐碕、老

人等相謂之曰、自春至夏、鼠向難波、遷都之兆也、戊午、越國言、海畔枯査向東移去、沙上有跡、如耕田狀、是年也太歲乙巳、

○題年月、公式令詔書式に年月御畫日とある起因なり

○阿黨、靈異記に償加太知波比とあり片幸（カタチハ）とにて俗に最貧と云が如し僧尼令義解には阿曲朋黨とあり　○於朝、類史此二字なし　○男女之法云々、豫め男女の奸濫を拒ぎ絶たむとの法なり　○良男良女、民に良賤あることは上に見ゆ　○良男娶婢所生子配其母、戶令に凡官戶、陵戶、家人、公私奴婢與良人爲夫妻所生男女不知情者從良皆離之其逃亡所生男女皆從賤とあり　○寺家仕丁之子云々、諸寺の仕丁となる者にて官の仕丁と別なる由を云るなり　○別入奴婢、寺家の仕丁にして奴婢となる者は良人法と異なりとなり　○今克見人爲制之始、通證に言使人々知爲制之始也と云北本中本克を剋に作る　○大寺、百濟大寺にて上に出づ　○能仁之敎、能仁は祖庭事苑に梵云釋迦此言能仁とあり釋迦を云原本仁の下世の字あり北本應本中本に據て削る　○小墾田宮御宇天皇、天皇の二字は中本に據て補ふ　○狛大法師福亮、狛は高麗大法師は僧綱の位なり貞觀六年二月紀に制定僧綱位階詔曰國典所載僧位之制本有三階滿位、法師位、大法師位是也とあり　○惠雲、舒明紀十一年（一四七頁）に出づ○常安、舒明紀十二年（一四七頁）清安に作る　○靈雲、同紀四年（一四四頁）に出づ　○惠至、白雉二年に惠資とあると同人か　○寺主僧旻、原本寺主を細注とす釋紀に據て大書す僧旻は前に出づ　○道登、白雉元年に出づ扶桑略記に此僧孝德紀二年宇治橋を造るとあり　○惠憐、詳ならず　○惠妙、中本及釋紀に據て補ふ此下に集解は惠隱の二字を補て曰福亮以下九人なり慧隱は舒明天皇十二年に出づ十師中にありし事明なり故に補ふと　○十師、續紀卅二寶龜三年三月に十禪師を置くとあり之に同じ　○天皇、先代の天皇を申す　○不能營、修覆することを能はざるを云　○今拜、原本今を令に作る中本交本（楓本傍注）に據て改む　○來目臣、天武紀十三年來目臣賜姓曰朝臣とあり錄右京皇別に久米朝臣武內宿禰五世孫稻目宿禰之後也とある同氏か、○額田部連、推古紀十八年（一二二頁）に出づ　○法頭、同紀三十二年（一二三頁）に出づ　（九月）治兵、兵は兵器なり　○（注）至于九月、于は諸本に據て補ふ　○蘇我田口臣川掘、錄左京皇別に田口朝臣武內宿禰之後也蝙蝠臣豐御食炊屋姬天皇御世家於大和國高市郡田口村仍號田口臣　○物部朴井連椎子、連の字は北本應本中本に據て補ふ又椎の下に中本之の字あり、椎子の訓は齊明紀四年に物部朴井連鮪に作ればシヒコとよむべきなり舊紀に物部荒猪連公榎井臣等祖とあり　○吉備笠臣垂、臣の字は北本應本中本及下文に據て補ふ笠臣は應神紀廿二年（卷上二〇五頁）に出づ　○倭漢文直、皇極紀元年（一四九頁）に出づ　○朴市秦造田來津、天智紀卽位前紀に出づ　○（注）古人太子、原本太を大に作る北本應本中本に據て改む　○自首、正字通に有咎自陳及告人罪曰首とあり　○（注）阿倍大臣、阿倍倉麻呂　○蘇我大臣、蘇我山田石河麻呂　○蒐田朴室古、錄左京神別に榎室連火明命十七世孫吳足尼之後也とあり　○高麗宮知、高麗は氏宮知は名なり　○（注）卌日、傍注の攙入なるべし　○阿倍渠曾倍臣、錄左京皇別に許曾倍朝臣大彥命之後也とあり　○兵卌人、北本應本楓本中本卅を卌に作る　○錄民元數、元數は大數にて全國の戶口を錄するなり　○標代民、通證に言置標題代號之民也と云訓は栗田博士のミナシロと訓むべしと云れしに從ふべし　○臣連等、等の字は國造の下にあるべきなり　○進調賦時、原本進の上に及の字あり　北本楓本應本に據て削る　○園陵、字書に帝王陵寢曰園とあり御陵を云　○率己民云々、宮殿園陵の築造修繕等に臣連等私民を率ゐて赴くを云　○易曰云々、易の益卦の象に益損上益下民悅无疆とあり之を引きたるは臣連を損し百姓の闕乏を益せしめむとての御意なり　○不害民、不の字は中本に據て補ふ　○水陸、水田陸田なり

（十二月）長柄、攝津志に西成郡今有南長柄北長柄二村とあり（今大坂市東淀川區南北長柄町）　○豐碕、此宮趾を攝津志に在本莊村今有小祠と記せり敷田氏標注に按に同郡山口村惣社の地蓋豐碕宮の舊趾ならむと云　○相謂、北本中本謂を語に作り應本楓本原本に同じ　○枯査、抄舟車部に査唐韵云楂（字亦作査槎和名宇岐々）水中浮木也とあり

【大化二年】賀正禮、始て見ゆ所謂元日朝拜なり大日本史に公事根源曰元日朝賀始一于神武天皇元年正月一至此又見可以爲朝拜之原始とあり

○改新之詔、通證に謂與民更始也とあり

（其一）子代之民、古へ天皇皇后皇子等御子坐さゞる時に部民を置て御名を永世に傳へられしを云亦之を御名代の民とも云

○別、景行紀四年（卷上一四四頁）に七十餘子皆封國郡各如其國故當今時謂諸國之別者其別王之苗裔とある別なり

○村首、下文首長とあるに同じ

○部曲、安閑紀元年（三二頁）に見ゆ

○田庄、字書に莊は田舍也また庄俗借作莊とあり田庄は後世の庄園なり庄園の沿革は栗田博士の莊園考に詳なり

○食封、ヘヒトはへは戸ヒトは人なり土地を賜はらず官位の高下に依て民戸を賜はり封ずる所の戸口の租庸調にて食せしむ故に食封と云是より先土地を賜はり其地に住る民

日本書紀卷第廿五　孝德天皇　大化二年

（丙午）二年春正月、甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣連伴造國造村首所有部曲之民、處處田庄、仍賜食封大夫以上、各有差、降以布帛賜官人百姓有差、又曰、大夫所使治民也、能盡其治則民賴之、故重其祿、所以爲民也、其二曰、初脩京師、置畿內國司郡司、關塞斥候防人、驛馬傳馬、及造鈴契、定山河、凡京每坊置長一人、四坊置令一人、掌按檢戶口、督察奸非、其坊令取坊內明廉强直堪時務者充、里坊長並取里坊百姓淸正强幹者充、若當里坊無人、聽於比里坊簡用、凡畿內、東自名墾橫河以來、南自紀伊兄山以來、兄此云制、西自赤石櫛淵以來、北自近江狹々波合坂山以來、爲畿內國、凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡、其郡司並取國造性識淸廉堪時務者、爲大領少領、强幹聰敏工書筆者爲主政主帳、凡給驛馬傳馬、皆依鈴傳符剋數、凡諸國及關給鈴契、並長官執、無次官執、

の租庸調を以て生活したるを土地を賜はる事をば全く廢して戸口のみを賜はる事に改められしなり　○大夫、公式令に於ニ太政官三位以上稱ニ大夫一司及中國以下五位稱ニ大夫一とあり此大夫は五位以上なりされど此時には未だ四位五位の名目なし　○官人百姓、通釋に栗田寛云官人百寮と云が如し

（其二）初脩京師、京師を始て定めたるにあらず其位置を改修したるあり　○關塞、抄道路具に關は世岐塞は曾古とあれど周禮關の注に界上之門也とありこゝは關塞を合せて關と云り　○斥候、原本斥を片に作る北本に據て改むウカミは推古紀九年に間諜者をウカミヒトと訓るウカミに同じく窺見なり職員令大國の條に兼ニ知饗給征討斥候一義解に斥逐也言ニ候逐非常一也と云　○防人、埼守にて邊要の地に置きて外寇を防ぐ兵士なり軍防令に凡防人在ニ防守固之外各量ニ防人多少一於ニ當處側近一給ニ空閑地一逐ニ水陸所宜掛ニ營種并雜菜以供ニ防人食一云々とあり　○驛馬、萬葉に波由馬とあり早馬なり主として官の急使の乘用に充つるものなり　○傳馬、ツタハリウマの訓は他に見えず北本中本にはツタヘウマと訓り厩牧令に凡諸道置ニ傳馬一大路二十匹中路十匹小路五匹使稀之處國司量置不ニ必須一足皆取ニ筋骨强壯者一充每ニ馬各令ニ中中戸養飼一若馬有ニ闕失一者卽以ニ驛稻一市替其傳馬每ニ郡各五皆用ニ官馬一云々とあり傳馬は主として租調運搬の用に充つるものなり　○鈴契、鈴は令を傳ふるの具契は契符なり鈴は驛鈴をいひ其他の鈴をも云公式令に車駕巡ニ幸京師一留守官給ニ鈴契一とある類是なり契は木契にて俗に云割符なり　○定山河、成務紀五年（卷上一六五頁）にも見えたれど此時再び定め給ひしなり　○凡京云々、上文の脩ニ京師一の目なり以下對非に至る二十三字は戸令と同文にて按檢を撿按と改めしのみ　○每坊、通證に和名抄坊未知唐武德制鄉保隣里在ニ城邑一曰ニ坊田野曰一村とあり　○長一人、一の字は北本應本中本及類史に據て補ふ　○令、ウナカシは上より課するにて下文催駈の訓も同義なり　○凡畿內云々、原本畿を幾に作る北本應本楓本に據て改む下同じ以下畿內に關する目なり　○名張横河、名張は伊賀國名張郡なり横河は今の長田川なるべしと云　○紀伊兄山、紀伊國那賀郡にあり　○赤石櫛淵、赤石は播磨國明石郡なれど櫛淵は詳ならず　○狹々波、近江國滋賀郡、神功紀攝政元年（卷上一八四頁）に出つ　○合坂山、神功紀（同上）に逢坂に作り今も逢坂山と云　○爲畿內國、以上の區域内を畿內國と定めたるにて後世に所謂畿內國とは異り　○凡郡云々、以下郡司を置くの目なり　○四十里、里は下文に凡五十戸とあり四十里卽ち二千戸を大郡と爲す中郡小之に準ず但し大寶令には之を改て大上中下小の五等とす戸令に凡郡以ニ二十里一以下十六里以上爲ニ大郡一十二里以上爲ニ上郡一八里以上爲ニ中郡一四里以上爲ニ下郡一二里以上爲ニ小郡一と見ゆ　○郡司、類史延曆十七年三月詔に昔難波朝廷始置ニ諸郡一仍擇ニ有ニ勞補ニ郡領一子孫相襲永任ニ其官一云々宜其譜第之選永從ニ停廢一取ニ藝業著聞堪ニ理一郡者爲之とあり大化の改新は族制封建制の如き政體を變じて隋唐郡縣の制を取り世職を停めて更迭遷轉の官吏を任命せられたれど民に親み化を行ふ郡司には祖先以來土著の國造を取て世襲せしめしなりこは中央政府の左右大臣も尙ほ臣姓なる阿倍蘇我氏を任ぜられし如く舊慣を俄に變ずることは人心の動搖を恐れて爲さざりしなり　○大領少領、抄職官部に長官郡曰ニ大領一加美次官郡曰ニ少領一須介とあり　○書手、書は文字を書くをいひ算は算なり計算するを云　○主政主帳、抄職官部に判官郡曰ニ主政一萬豆利古止比止佐官郡曰ニ主帳一とありフミビトは書記なり郡司以下此に至るまで選叙令の文に同じく大領以下主帳に至るまでの所掌は職員令に詳なり　○凡給云々、以下驛傳を置くの目なり　○皆依鈴傳符剋數、此文公式令に同じ原本皆依轉倒す令に據て訂す鈴は驛鈴なり官命にて遠國に急行する時驛馬を徵し之に乘りて振りつゝ行くなり鈴には剋ありて五剋ならば驛馬五匹六剋ならば六匹を出さしむるなり傳符は傳馬を出さする符にて此符にも剋あること公式令に見ゆ　○凡諸國云々、是は鈴契を給ふ目なり鈴を給ふ數は公式令に凡諸國給ニ鈴者大宰府二十口三關及陸奥國各四口大上國三口中下國二口其三關國各給ニ關契二枚一云々とあり

（其三）初造戸籍、戸籍を造る事は允恭紀四年（卷上二四六頁）に見ゆ此に初とあるは形式を改正せられし故にかく云るなるべし造籍の事は戸令に詳なり

其三曰、初造戸籍、計帳班田收授之法、凡五十戸爲里、每里置長一人、掌按撿戸口、課殖農桑、禁察非違、催駈賦役、若山谷阻險、地遠人稀之處、隨便量置、凡田長、卅步、廣十二步爲段、十段爲町、段租稻二束二把、町租

○計帳、調庸の事を記せる帳なりフムタは文札にて籍に同じ計帳の事は主計式に詳なり
○班田收授之法、田令に凡田六年一班神田寺田不在此限若以身死應退田每至班年即從收授と見え其他班田に關する事詳に見ゆ大化の改新は天皇皇子御自の土地と權臣等の始め上より賜はりし土地を私有し公民をも私役せしを悉く國土人民を公地公民とし其收めし田島を滿六歲に達せし男女に下し賜ひしなり
○凡五十戶爲里、通證に今按是漢制也晁錯五家爲伍伍有長十長一里里有假士唐令曰諸戶以百戶爲里五里爲鄉此紀不言鄉蓋古者不別置鄉故鄉里相通稱之其訓亦同とあり全く唐制の制を取れりとするは非なれど大に之を參考せしことは明なり　○催駈賦役、賦役令義解に賦者餘也調庸及義倉諸國貢獻者等爲賦也役者使也歲役雜徭等爲役也また通證に萬葉集楚取五十戶良我許惠波、此言催駈賦役也とあり　○若山谷阻險、以下十五字原本下文に稻二十二束の下にあり戶令に據るに此にあるべし故に改む　○凡田長卅步云々、以下廿二束まで田令の文に同じ步は字書に六尺曰步於荄抄に田以方六尺爲一步卅六步爲一畦頭三百六十步爲一段積二と云　○租稻二束二把、神祇令田租の義解に新輸曰租經貯曰稅也田令の義解に段地獲稻五十束束稻舂得米五升也即穀町者須得五百束也とあり　(其四)罷舊賦役云々、崇神天皇以來今同改新以前までの賦役を廢し其代として田の調即ち租稻の外に其地方に出つる布帛を納めしむるを云　○凡絹絁云々、以下十一字賦役令の文に同じ但令には綿の下布の字あり是は必ずあるべきなり絹絁は同令の義解に細爲絹也麁爲絁也とあり堅く細かに織りたるを絹といひ糸も太く麁目に織りたるを絁と云　○四町成匹、原本匹を疋に作る今北本應本に據る字彙に匹曰四丈則八端故从儿匚象束帛之形借爲匹偶字別用疋非とあり類聚名義抄に疋は匹の俗字といひ字類抄にも匹は疋之正字也と云　○半、イツキは五寸なり　○絁二丈、賦役令には正丁一人絹絁八尺五寸六丁成匹長五丈一尺廣二尺二寸とあり　○長廣同絹絁、廣い字は類史に據て補ふ　○端、ムラは詳ならず通證に小爾雅倍丈謂之端通典准武德制曰其絹絁爲匹布爲端此紀蓋據此令式等皆亦同今俗布帛通曰端曰疋此古

稻廿二束、其四曰、罷舊賦役而行田之調、凡絹絁絲綿並隨鄉土所出、田一町絹一丈、四町成匹、長四丈、廣二尺半、絁二丈、二町成疋、長廣同絹、布四丈、長廣同絹絁、一町成端、絲綿絇屯、諸處不見、別收戶別之調、一戶貲布一丈二尺、凡調副物鹽贄、亦隨鄉土所出、凡官馬者、中馬每一百戶輸一疋、若細馬每二百戶輸一疋、其買馬直者、一戶布一丈二尺、凡兵者、人身輸刀甲弓矢幡鼓、凡仕丁者、改舊每卌戶一人、以一人充賦、而每五十戶一人以一人充賦、以充諸司、以五十戶充仕丁一人之粮、一戶庸布一丈二尺、庸米五斗、凡采女者貢郡、少領以上姉妹及子女形容端正者、從丁一人、從女二人、以一百戶充采女一人之粮、庸布庸米皆、准仕丁、

制也云々とあり　○、注、絲綿約屯云々、集解は私記の攙入として削り按此不載絲綿約屯之制蓋脫文也と云ひ通證に約副目屯天武紀訓阿世倭名鈔俗一屯讀飛度毛知とあり賦役令に絲八兩綿一斤布二丈六尺並二丁成約屯端云々釋解に絲十六兩曰約綿二斤曰屯とあり　○異別之調、續紀三に准令京及畿內人身輸調宜罷以身之布輸戶別之調乃異外國之長以優內國之日云々賦役令に此條なし　○貲布、原本貲を皆に作る通證集解に據て改む抄布帛部に貲布齊式云貲布(楊氏漢語抄云佐與美乃沼能)とあり狹讀の義絲を數ふるに緩讀といふ經絲の數の少きを云なり　○調副物、譚庸の外に貢るものなり賦役令に詳なり義解に謂此唯爲正丁不及次丁中男也とあり　○驪贄、調副物の外に次の鄕土所出雜物の中に出づ贄は魚類なり　○官馬、原本馬を長に誤る北本中本に據て改む　○細馬、廐牧令の義解に細馬者上馬也とあり　○(注)斷、原本厠に作る中本楓本所引突本及傍訓に據て改む下同じ賦役令義解に斷猶使也言給使於汲炊卽與火頭同也とあり　○庸布、賦役令に凡正丁歲役十日若須收庸者布二丈六尺とありチカラシロノヌノと訓るは庸卽ち力役の代りに貢るを云　○庸米、上の庸布の義に同じ賦役令に主計計庸多少充衛士仕丁采女女丁等食義解に除當年須役人之外皆悉給庸充衛士女丁食並役民雇直及食也とあり　○采女、仁德紀四十年(卷上二二七頁)に出づ　○(注)從丁一人、采女司式に凡采女各充樵丁一人守廬丁一人とあり　○從女二人、賦役令に所謂女丁是なり　○一人之粮、之の字は類史に據て補ふ

○子代離宮、下の注に見ゆ

○兵庫、國郡每に兵庫ありしこと續紀以下の國史に見ゆ

○蝦夷親附、原本夷を姨に作る諸本に據て改む栗田博士の說に上文に於閑曠之所起造兵庫收取國郡刀甲弓矢云々また遣使者治兵此に至てまた遣使者云々とありさて蝦夷親附と云るは武器は民を威して治むる所以のものなり故に最治兵の道を重じ給ひしかは果して其効見えて招かざるに蝦夷の親附せしなりと

○(注)狹屋部邑、攝津國西成郡讃楊サヤ鄕是なり攝津志に十廛而三番村存とあり今の大阪市東淀川區豐里三番町附近なるべ

是月、天皇御子代離宮、遣使者、詔郡國脩營兵庫、蝦夷親附(或本云、壞難波狹屋部邑子代屯倉、而起行宮)

二月甲午朔戊申、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇詔於集侍卿等臣連、國造、伴造、及諸百姓、朕聞、明哲之御民者、懸鍾於門而觀百姓之憂、作屋於衢而聽路行之謗、雖芻蕘之說親問爲師、由是朕前下詔曰、古之治天下、朝有進善之旌、誹謗之木、所以通治道而來諫者也、皆所以廣詢于下也、管子曰、黃帝立明堂之議者、上觀於賢也、堯有衢室之問者、下聽於民也、舜有告善之旌而主不蔽也、禹立建鼓於朝而備訊望也、湯有總術之廷、以觀民非也、武王有靈臺之囿、而賢者進也、此故聖帝明王所以有而勿失、得而勿亡也、所以

し

(二月)宮東門、于代離宮の東門

○明神御宇日本倭根子天皇、公式令詔書式に明神御宇日本倭根子天皇、以大事宣於蕃國使之辭也とあり蕃國へ宣する詔書の式には倭根子の文字を省けど王臣以下に詔し給ふ時には此文字あるなり明神の訓舊訓にアラミカミとあれど詔詞解に云るが如くアキツカミと訓べし類史に倭の字なし

○集侍、續紀の宣命式の祝詞等に多く見ゆ

○諸百姓、宣命には多く公民と書けり

○懸鍾於門、中本及類史門を闕に作る

○作屋於衢云々、下文に衢室之間とある是なり

○雖芻蕘之說、原本雖を難に誤る北本楓本應本及類史に據て改む芻は說文に刈草也蕘は、草薪也草刈り薪採る賤しき人を云北本應本芻を芻に作る字書に芻の俗字とあり

○古之治天下云々、以下廿五字溪書文帝紀の文に據れり

○進善之旌、通證に應劭

懸鍾設匱、拜收表人、使憂諫人納表于匱、詔收表人毎旦奏請、朕得奏請、仍示群卿、便使勘當、庶無留滯、如群卿等、或懈怠不勤、或阿黨比周、朕復不肯聽諫、憂訴之人當可撞鍾、詔已如此、既而有民明直、心懷國士之風、切諫陳疏、納於設匱、故今顯示集在黎民、其表稱、緣奉國政、到於京民、官留使於雜役云々、朕猶以之傷惻、民豈復思至此、然遷都未久、還似于賓、由是不得不使、而强役之、毎念於斯、未嘗安寢、朕觀此表、嘉歎難休、故隨所諫之言、罷處々之雜役、昔詔曰、諫者題名、而不隨詔命者、自非求利、而將助國、不言題不諫、朕廢忘、又詔、集在國民、所訴多在、今將解理、諦聽所宣、其欲決疑、入京朝集者、且莫退散、聚侍於朝、高麗百濟任那新羅、並遣使貢獻調賦、乙卯、天皇還自子代離宮、三月癸亥朔甲子、詔東國々司等曰、集侍羣卿大夫、及臣連國造伴造、并諸百姓等、咸可聽之、夫君於天地之間、而宰萬民者、不可獨制、要須臣翼、由是代々之我皇祖等、共卿祖考俱治、朕復思欲蒙神護力、共卿等治、

曰旌旛也堯設之五達之道令民進善也如淳曰欲有進者立於旌下言之とあり
○誹謗之木、通證に應劭曰橋梁邊板所以書政治之愆失也古今註曰堯設誹謗之木今之華表也以横木交柱頭狀如華形如桔槔大路交衢悉施焉とあり
○明堂、管子（卷十八桓公問）明臺に作る鄭玄曰明堂者明政教堂とあり
○民、管子人に作る
○不蔽、原本蔽を弊に作る管子及集解に據て改む
○建鼓、漢書何並傳に拔刀剝其建鼓注に一名植鼓建立也謂植木而旁懸鼓とあり
○訊望、管子に訊を唉に作り注に唉は驚問也とあり
○總術、通證に術音遂萬二千五百家曰遂管子廣地篇里十爲術とあり管子に總街に作る
○民非、管子に人誹に作る
○靈臺之囿、毛詩大雅に文王經靈臺疏に所以觀祲氣之祆祥也とあり管子に囿を復に作り白也

故前以良家大夫使治東方八道既而國司之任六人奉法二人違令毀譽各聞朕便美厥奉法疾斯違令凡將治者若君如臣先當正己而後正他如不自正何能正人是以不自正者不擇君臣乃可受殃豈不愼矣汝率而正孰敢不正今隨前勅而處斷之辛巳詔東國朝集使等曰集侍群卿大夫及國造伴造并諸百姓等咸可聽之以去年八月朕親誨曰莫因官勢取公私物可喫部內之食可騎部內之馬若違所誨次官以上降其爵位主典以下決其笞杖入己物者倍而徵之詔既若斯今問朝集使及諸國造等國司至任奉所誨不於是朝集使等具陳其狀穗積臣咋所犯者於百姓中每戶求索仍悔還物而不盡與其介富制臣（闕名）巨勢臣紫檀二人之過者不正其上云々凡以下官人咸有過也其巨勢德禰臣所犯者於百姓中每戶求索仍悔還物而不盡與復取田部之馬其介朴井連押坂連（並闕名）二人者不正其上所失而飜共求己利復取國造之馬臺直須彌初雖諫上而遂俱濁凡以下官人咸有過也其紀

と注す
○此故、管子故を古に作る
○勿亡也、管子に勿忘者也に作る以上管子の文なり
○仍示群卿、原本仍の下に又の字あり楓本應本及類史に據て削る
○不懃、類史懃を勤に作る
○懐國士之風、原本士を士に作る文選司馬遷報任少卿一書に國士之風とあるに據て集解士を士に改む今之に據る楓本には王に作る
○到於京民、公役の爲に京に至れる民なり
○官留、原本官一字衍れり北本應本中本及類史に據て削る
○還以于賓、新に都を遷せるが故に他國より來たる人の如くなりとなり
○不言題不、題の有無を言はずとなり
○諫朕廢忘、原本忘を忌に作る楓本中本に據て改む廢忘は捨て忘るゝにて意るとに云に同じ
○朝集者、考課令に凡大貳以下及國司每年分番朝集義解に謂目以上とある

麻利者拖臣所犯者、使人於朝倉君井上君二人之所、而爲牽來其馬視之、復使朝倉君作刀、復得朝倉君之弓布、復以國造所送兵代之物、不明還主、妄傳國造、復於所任之國、被他偸刀、復於倭國、被他偸刀、是其紀臣、其介三輪君大口、河邊臣百依等過也、其以下官人河邊臣磯泊、丹比深目、百舌鳥長兄、葛城福草、難波癬倶毗柯梅亀犬養五十君、伊岐史麻呂、丹比大眼、凡是八人等咸有過也、其阿曇連名所犯者、和德史有所患時、言於國造使送官物、復取湯部之馬、其介膳部臣百依所犯者、草代之物、收置於家、復取國造之馬、而換他馬來、河邊臣磐管、湯麻呂兄弟二人、亦有過也、大市連名所犯者、違於前詔、前詔曰、國司等莫於任所自斷民之所訴、輙違斯詔、自判蒐礪人之所訴、及中臣德奴事、中臣德亦是同罪也、涯田臣名闕之過者、在於倭國被偸官刀、是不謹也、小綠臣、丹波臣名並闕是拙而無犯、忌部木菓、中臣連正月二人亦有過也、羽田臣、田口臣二人、名闕並無過也、平羣臣名闕所犯者、三國人所訴有而未問、以此觀之、紀麻利者拖、

臣、巨勢德爾臣、穗積咋臣、汝等三人所忘拙也、念斯違詔、豈不勞情、夫爲君臣以牧民者、自率而正、孰敢不直、若君或臣、不正心者、當受其罪、追悔何及、是以凡諸國司、隨過輕重、考而罰之、又諸國造違詔、送財於己國司、遂俱求利、恒懷穢惡、不可不治、念雖若是、始處新宮、將幣諸神、屬乎今歲、又於農月不合使民、緣造新宮、固不獲已、深感二途、大赦天下、自今以後、國司郡司、勉之勗之、勿爲放逸、宜遣使者、諸國流人及獄中囚一皆放捨、別鹽屋鯛魚、魚此云カミコノシロ、舉能之盧、神社福草、朝倉君、椀子連、三河大伴直、蘆尾直四人並闕名此六人奉順天皇、朕深讚美厥心、宜罷官司處々屯田及吉備嶋皇祖母處々佃稻、以其屯田班賜群臣及伴造等、又於脫籍寺、入田與山、壬午、皇太子使使奏請曰、昔在天皇等世、混齊天下而治、及逮于今、分離失業、謂國業也屬天皇我皇可牧萬民之運、天人合應、厥政惟新、是故慶之尊之、頂戴伏奏、現爲明神御八嶋國天皇問於臣曰、其群臣連及伴造國造所有、昔在天皇日所置子代入部、皇子等私有御名入部、皇

是なり
○棄待、中本侍を待に作る
(三月)共卿祖考、卿の下に等の字あるべきか六字の句なるが故に或は省けるにもあるべし
○蒙神護力、天神地祇の擁護を蒙りてとなり
○以良家大夫、中本以を差に作る
○東方八道、八道は八箇國と云に同じ古事記崇神天皇の段に東方十二道とある道に同じ
○笞杖、原本笞を笞に作る北本應本中本に據て改む抄刑罰具に唐令云笞(音知之毛度)大頭二分小頭一分半杖唐令云諸杖(音仗和名都惠)皆削去節目長三尺五寸許とありシモトは茂本の義にて木の細枝を云ズハエは直生の義なるべしと云杖をフトキズハエと訓るは笞よりは太きに由る
○每戶求索、上文に因官勢取公私物とある是なり
○富制臣、錄左京皇別に布勢朝臣阿部朝臣同祖とあり
○巨勢臣紫檀、天武紀に

祖大兄御名入部、謂彦人大兄也及其屯倉、猶如古代而置以不、臣卽恭承所詔、奉答而曰、天無雙日、國無二王、是故兼并天下、可使萬民、唯天皇耳、別以入部及所封民、簡宛仕丁、從前處分、自餘以外、恐私駈役、故獻入部五百廿四口、屯倉一百八十一所、

巨勢朝臣辛檀努と見ゆ　○不正其上、上は長官を指すなり　○德禰臣、集解に按德陀古之親族也　○朴井連、大化元年九月紀に出づ　○押坂連、皇極紀三年三月紀に押坂直とづ　○巨直、錄攝津諸蕃に漢釋吉王之後也とあり　○朝倉君、井上君、共に詳ならず　○兵代之物、北本楓本應本代を伐に作る集解に代蓋貿なり借兵以物爲貿と云　○河邊臣、舒明紀卽位前紀(一四一頁)に出づ　○難波癩龜、錄河內皇別に難波大彦命孫波多武命之後也とあり　○(注)俱毗柯梅、訓注の例にも違ひ癩をクヒと訓るし疑はしければ姑く舊に從ふ　○犬養五十君、錄攝津神別に犬養神魂命十九世孫田根連之後也とあり　○大眼、原本犬に作る北本應本中本に據て改む　○和德史、原本和字なし集解に續紀神龜二年和德史龍麻呂改賜大縣史及錄右京諸蕃に大縣史百濟人和德之後也とあるに據て和の字を補ふに從ふ　○言於國造、言の字は北本應本中本に據て補ふ　○使送官物、和德史が病める時に國造に命じ官物を私用せしめしを云　○湯部、雄略紀(卷上一六四頁)に湯人、五年紀(一九五頁)に湯坐とある是等の部民なるべし　○草代之物、厩牧令に凡馬戶分番上下其調草正丁二百圍次丁一百圍中男五十五圍とある調草なるべし　○大市連、用明紀二年に見ゆ　○菟礪、駿河國有庵郡あり和泉國日根郡に茅渟菟砥あれば孰とも定め難し　○德奴、中本德の下之の字あり　○涯田臣、錄右京皇別に岸田朝臣武內宿禰五世孫稻目宿禰之後也男小祚臣孫耳高家居岸田村因負岸田臣號天武紀十三年朝臣の姓を賜ふ　○小綠臣、丹波臣、共に詳ならず　○(注)並闕名、原本無犯の下にありしを例に據て此に移す　○羽田臣、推古紀三十年に見ゆ　○田口臣、元年紀に蘇我田口臣見ゆ　○三國、越前國坂井郡にあり繼體紀元年(一三頁)に見ゆ　○始處新宮、子代離宮を云　○將幣諸神、遷都に因れる奉幣か屬於今歲とあれば臨時の奉幣なるべし　○感二途、原本感を減に作る集解に據て改む二途は幣諸神と造新宮を云　○大敎、此に始て見ゆ　○故逸、アタメクは仇めくにて心に引締りなきを云　○神社福草、詳ならず通證に社訓古曾一出于此萬葉集乞字亦訓古曾一蓋神社則人之所爲祈願故訓社爲古曾とあり　○椀子連、錄大和神別に伊丸子(ワニコ)日臣命九世孫金林大連之後也とあり椀子は後丸子と書けり　○三河大伴直、詳ならず　○蘆尾直、尾直の二字は北本應本中本及釋紀に據て補ふ系詳ならず　○吉備島皇祖母、皇極天皇の御母にて同紀二年に見ゆ　○佃稻、佃は貸の字の古體天武紀に貸稅とあり靈異記に息利を伊良之字末波利と訓りイラシは人に貸すことウマハリは利息を取るを云　○脫籍寺、定額に漏れたる寺なり其寺に山と田とを賜へよとなり　○奏請、原本請を淸に作る諸本に據て改む　○混齊、通證に混一均齊なりと云　○(注)謂國業也、集解に私記攙入とす　○伴造國造所有、上文に據るに此に處々田庄の四字を補ひ見るべしと平田翁云り　○子代入部、御名入部とあるも同じ入部の入はイラ、イリ、イロと活きて親しむ意なり　○御名入部、御名は皇子の御名にて所謂御名代部なり　○皇祖大兄、舒明天皇の御父は彦人皇子に坐せば孝德天皇よりは皇祖と申されしなり　○所封民、前文に所言臣連等所有及子代入部の類なり　○從前處分、每二五十戶一出二仕丁一人一とある是なり

甲申、詔曰、朕聞、西土之君戒其民曰、古之葬者、因高爲墓、不封不樹、棺槨

○因高爲墓、原本因を困に作る北本應本中本に據て改む因高とは丘陵の上

足以朽骨、衣衿足以朽肉、完而已、故吾營此丘墟不食之地、欲使易代之後不知其所、無藏金銀銅鐵、一以瓦器、合古塗車芻靈之義、棺漆際會、奠三過飯、含無以珠玉、無施珠襦玉柙、諸愚俗所爲也、又曰、夫葬者藏也、欲人之不得見也、迺者我民貧絕、專由營墓、爰陳其制、尊卑使別、夫王以上之墓者、其內長九尺、濶五尺、其外域方九尋、高五尋、役一千人、七日使訖、其葬時帷帳等用白布、有轜車、上臣之墓者、其內長濶及高皆准於上、其外域方七尋、高三尋、役五百人、五日使訖、其葬時帷帳等用白布、擔而行之、蓋此以肩擔輿而送之乎下臣之墓者、其內長濶及高皆准於上、其外域方五尋、高二尋半、役二百五十人、三日使訖、其葬時帷帳等用白布、亦准於上、大仁小仁之墓者、其內長九尺、高濶各四尺、不封使平、役一百人、一日使訖、大禮以下小智以上之墓者、皆准大仁、役五十人、一日使訖、凡王以下、小智以上之墓者、宜用小石、其帷帳等宜用白布、庶民亡時、收埋於地、其帷帳等可用麁布、一日莫停、凡王以下、及至庶民、不得

に造るを云
○不封不樹、土を聚めて築き樹木を植ゑざるを云
○棺槨云々、以下不得見也に至るまで魏志文帝紀の文に據れり故に我國の史實に適合せざるものあり其心して見るべし
○一以瓦器、原本以一字衍れり北本應本に據て削る
○塗車芻靈、禮記檀弓の注に塗車以泥爲車也束草爲人形以爲死者之從衛謂之芻靈略似人形而已とあり芻を中本芻に原本菑に作る菑菑は俗字なり此に中本に據て改む
○奠三過、文公家禮に祝盥手洗盞斟酒奠于尸東通證に淮南子曰天地三月而爲一時故祭祀三飯以爲禮とあり
○飯含無以珠玉、抄葬送具に唐韻云琀々玉送終口中玉也、唐書禮樂志に一品至于三品飯用粱用璧云々、後漢書禮儀志に飯含珠玉如禮とあり
○珠襦玉柙、原本柙を押に作る北本に據て改む珠襦は短衣にて腰衣なり玉柙は色葉字類抄に柙をヨ

ロヒと注せり漢書董賢傳の注に珠襦以珠爲襦如鎧狀連綴之以黃金爲縷要以下玉爲押至足亦綴以黃金爲縷とあり
○夫葬者云々、禮記檀弓の語、夫の字は北本應本中本に據て補ふ
○濶五尺、下文に據るに此下高幾尺の句を脫すと通證に云り
○高五尋、尋は字書に八尺也とあり
○帷帳、抄調度部に帷(加太比良)圍也以自障圍也又帳(俗音長)張也施張於床上也とありカイシロは垣代の義、葬送の時に棺を障へ蔽ふ幕の如き物なり古き葬送の圖に見ゆ
○轜車、喪葬令に方相轜車義解に葬車也とありキクルマは柩車なり
○墓者、者の字は中本に據て補ふ
○方七尋、原本七の下に等の字あり北本應本中本に據て削る
○擔而行之、轜車を用ふるものに對して云肩輿の濫觴なり
○(注)蓋此云々、集解に私記の攙入として削る

營殯、凡自畿內及諸國等、宜定一所而使收埋、不得汗穢散埋處々、凡人死亡之時、若經自殉、或絞人殉、及强殉亡人之馬、或爲亡人藏寶於墓、或爲亡人斷髮刺股而誄、如此舊俗、一皆悉斷、或本云、無藏金銀錦綾五經、又曰、凡自諸臣及至于民、不得用金銀、縱有違詔犯所禁者、必罪其族、復有見言不見、不見言見、聞言不聞、不聞言聞、都無正語、正見巧詐者多、復有奴婢、欺主貧困、自託勢家求活、勢家仍强留買不送本主者多、復有妻妾爲夫被放之日、經年之後、適他恒理、而此前夫、三四年後、貪求後夫財物、爲己利者甚衆、復有恃勢之男、浪要他女、而未納際、女自適人、其浪要者嗔求兩家財物、爲己利者甚衆、復有亡夫之婦、若經十年及廿年、適人爲婦、幷未嫁之女、始適人時、於是妬斯夫婦、使祓除多、復有爲妻被嫌離者、特由慙愧所惱、强爲事瑕之婢、事瑕、此云居騰作柯復有屢嫌己婦、干他、好向官司請決、假使得明三證、而俱顯陳、然後可諮、詎生浪訴、復有被役邊畔之民、事了還鄉之日、忽然得疾、臥死路頭、於是路頭之家、乃謂之曰、何故使人死於余路、

○其内長九尺、原本内を外に作り九の字一字衍れり北本應本中本に據て訂す　○宜用小石、喪葬令に凡墓皆立碑記具官姓名之墓とあり碑は小石を用ふべしとなり　○其帷帳等宜用白布、集解に王以下用白布と既に上文に見えたれば衍文なりとて此八字を削れり　○庶民、原本庶人に作る北本應本中本に據て改む　○不得營殯、古來一般に殯殿して墓を造り畢りしを墳墓の制を簡略にすると共に殯を營むことを禁ぜられしなり　○不得汗穢散埋處々、原本埋を理に作る諸本に據て改む從來墓地は各處に散在せしを一定の場所に埋葬することに定められしなり喪葬令に凡皇親及道路側近並不得葬埋とあり禁斷の地を指定せらる　○經白殉、殉死は垂仁天皇の御世に禁じ給ひしかど未だ遺風の存せしなるべし　○絞殉死、他より強ひて殉死せしむるなり　○爲亡人斷髮、夫死すれば妻髮を斷る類是なり　○刺股而誄、此以外に見えず如此して殉死に代へしにや集解に魏志倉慈傳曰西

因留死者友伴、強使祓除、由是兄雖臥死於路、其弟不收者多、復有百姓溺死於河、逢者、乃謂之曰、何故於我使遇溺人、因留溺者友伴、強使祓除、由是兄雖溺死於河、其弟不救者衆、復有被役之民、路頭炊飯、於是路頭之家乃謂之曰、何故任情炊飯余路、強使祓除、復有百姓就他借甑炊飯、其甑觸物而覆、於是甑主乃使祓除、如是等類、愚俗所染、今悉除斷、勿使復爲、復有百姓臨向京日、恐所乘馬疲瘦不行、以布二尋麻二束送參河尾張兩國之人雇令養飼、乃入于京、於還鄉日送鍬一口、而參河人等不能養飼、翻令瘦死、若是細馬、卽生貪愛、工作謾語、言被偷失、若是牝馬孕於己家、便使祓除、遂奪其馬、飛聞若是、故今立制、凡養馬於路傍國者、將被雇人、審告村首也長方授訓物、其還鄉日不須更報、如致疲損不合得物、縱違斯詔、將科重罪、罷市司要路津濟渡子之調賦給與田地、凡始畿內及四方國、當農作月早務營田、不合使喫美物與酒、宜差清廉使者告於畿內、其四方諸國國造等、宜擇善使依詔催勤、

秋八月庚申朔癸酉、詔曰、原夫天地陰陽不使四時相亂、惟此天地生乎萬物、萬物之內、人是最靈、最靈之間、聖爲人主、是以聖主天皇、則天御寓、思人獲所、斷不廢胷、而始王之名々、臣連伴造國造、分其品部別彼名々、復以其民品部交雜使居國縣、遂使父子易姓、兄弟異宗、夫婦更互殊名、一家五分六割、由是爭競之訟、盈國充朝、終不見治、相亂彌盛、粤以始於今之御寓天皇及臣連等、所有品部、宜悉皆罷、爲國家民、其假借王名爲伴造、其襲據祖名爲臣連、斯等深不悟情、忽聞若是所宣、當

（八月）是以、原本是を見に作る中本楓本引交本に據て改む　○聖主、北本主を王に作る　○思人獲所、人々其所を得其業を樂まむ事を念とし給ふなり　○始王之名々云々、王の御名〳〵より始めとして臣連伴造國造等の名も皆品部の名となれりとなり　○以其民品部云々、別れて民となれる品部が國縣に雜居して蕃衍すとなり　○父子易姓云々、集解に譽父則爲譽津部之民、而負譽津部、而子則爲武部

域諸胡聞慈死悉共會聚哀或有以刃畫面以明血誠と見ゆ此類か　○復有奴婢、復の字は集解に據て補ふ奴婢は吏學指南に古以罪沒爲奴婢故有官私奴婢之限也とあり　○欺主、本來の主家の貧困なるを欺くなり　○留置云々、奴婢の欺言を質さず留め置き買取て本主に還さぬを云　○被放之日、集解に之日の二字を衍とす　○浪愛他女、コトムスビは言結びなり約束するを云　○亡夫之婦、之の字は北本應本中本に據て補ふ　○妬斯夫婦云々、上古は夫死れば再嫁を許さず十年二十年の後若し再嫁する時は被除せしめしなり又處女の始て婚する時も被除せしめたるが其理由は詳ならず　○事瑕之婢、事は上文の要（コトムスビ）のコト瑕は天離（アマサカル）遠ざかるなどのサカと同じく離るゝ意にて夫に離緣せられたれど尚之を慕ひて夫婦の要（ヂギリ）はさかりても其許に留りて婢となれるを云るか　○已婦釁他、婦の字は北本應本中本に據て補ふ　○明三證、三つの爭ふべからざる明白なる證據を云　○邊畔之民、之の字は北本應本中本に據て補ふ　○因留死者友伴云々、行倒れの人あれば埋葬等に惱され且死穢に觸るゝを以て其友伴に被除を負はしむるなり被除は其人より被物を出さしめて之を行ふ例なるが之に四種の區別ありて其制延曆二十年五月の格文に見ゆ因は原本困に作る北本應本中本に據て改む下同じ　○溺死於河、此は儀式帳に見ゆる國罪の中なる川入なるべし　○借甑云々、抄器皿部に甑（吾勝古之岐）炊飯器也とあり蒸籠の事なり古は飯は甑にて蒸したるなり神宮にては今も尙然り借甑云々の事に至る迄被除せしむるは全く被除の精神を忘れ之に託して貪慾を充たさむとするものなり　○布二尋、周禮注に八尺曰尋倍尋曰常とあり　○麻二束、十把爲束とあり　○參河人等、小山田與清云河の下疑らくは屋張の二字を脫す　○訓物、訓は酬に同じ前に見ゆる布麻の類を云　○不須更報、原本更を臾に作る應本楓本中本に據て改む報は報酬の意　○市司要路云々、市司は市司に屬隸のもの、要路は要害の地を守るものにて關守の類津濟渡子は津濟の渡子なり市司以下の者は從來其職業を以てやがて調賦としたるを之を廢して其人々にも一般人民と同じく班田に預らしめ給ひしなり　○美物、イヲは魚なり古書に魚類を美物と書ける例多し中本及標注にウマキモノと訓るは非なり

思、祖名所借名滅、由是預宣、使聽知朕所懷、王者之兒、相續御寓、信知時帝與祖皇名、不可見忘於世、而以王名輕掛川野、呼名百姓、誠可畏焉、凡王者之號、將隨日月遠流、祖子之名、可共天地長往、如是思故宣之、始於祖子奉仕卿大夫臣連伴造氏々人等、或本云、名名王民咸可聽聞、今以汝等使仕狀者、改去舊職、新設百官、及著位階、以官位叙、今發遣國司并彼國造、可以奉聞、去年付於朝集之政者、隨前處分、以收數田、均給於民、勿生彼我、凡給田者、其百姓家、近接於田、必先於近、如此奉宣、凡調賦者、可收男身調、凡仕丁者每五十戶一人、宜觀國々壇堺、或書或圖、持來奉示、國縣之名、來時將定、國々可築堤地、可穿溝所、可墾田間、均給使造、當聞解　此所宣、九月、遣小德高向博士黑麻呂於新羅、而使貢質、遂罷任那之調、黑麻呂更名支理是月、天皇御蝦蟇行宮、或本云、離宮是歲、越國之鼠、晝夜相連、向東移去、

之民貢武部兄弟夫婦互如此異矣とあるが如し　上古は氏名卽ち職業なればかく別れては其職業も自ら別るゝものなれば是爭ひの原因となれりと　○及臣連等、中本等の下に筆謂國造伴造の六字を分注とせり北本楓本共に之を頭注とす　○假借王名爲伴造、穴穗部自髮部造の類なり　○所借名、名の字は中本に據て補ふ祖名も借れる名も共に滅びむとなり　○不可見忘、原本忘を忌に作る諸本に據て改む　○祖子之名、祖子は祖皇（ミオヤ）に對して書たるものにて皇子皇孫なり次に始於祖子とある祖子も亦同じ　○（注）名々、氏々と云に同じ　○收數田、收め數へたる田なり一に收めたる數多の田なりとも云　○失於近、田令に凡給口分田務從便近不得隔越義解に謂從其家居便近而給也とあり　○調賦、賦役令に凡調絹絲綿布並隨鄉土所出とあり賦は義解に歛也とあり　○可收男身調、上文正月の詔に行田之調收戶別之調とありしを改めて男身の調に替へ給ひしなり戶別の調は男女及人口の別なかりしを男子にのみ課することゝせられしなり（記傳に據る）　○凡仕丁云々、以下十字は上文に既に見ゆ恐らくは重出なるべし　○或書或圖、通證に今按民部省圖帳之原始也また職原抄民部省の條に有圖帳國郡簿示載以明白謂之民部省圖帳とあり　○國縣之名云々、國縣の名は圖書を持參の後に改め定めむとなり　（九月）蝦蟇行宮、大阪なる高津なるべし攝

津志に東成郡東高津王子記作郡戸（カウヅ）また西成郡西高津或作郡戸雜糅大阪呼曰高津町とあり　○越國、下文に據るに越後なり　○晝夜、原本夜一字衍れり北本應本及紀略に據て削る

【三年】射於朝庭、雜令に凡大射者正月中旬親王以下初位以上皆射とある是なり

○惟神、下文には隨在天神また魚葉二には神隨とあり神のまゝなるを云神のまゝとは天孫降臨の時に皇祖大神の詔し給ひしまゝに毫も私意を加へずして此國を知食すを惟神しろしめすと云

○（注）惟神云々、中本には亦の下に謂の字あり諸本原本に同じ集解に此十三字は後人所加又不爲語と云て削去り通釋も信に然りと云へど北本を始め諸本同じければ輒く削り難し注の意義神道に隨ふとは皇祖天神の御敎のまゝに爲給ふを云亦自有神道とは支那の如く忠義仁義など云事々しき文字はなくとも神勅を奉じて其儘にすれば自ら治まる是れ道あればなりと云

○我子應治故寄、神代紀に天照大神勅皇孫曰豐葦原千五百秋之瑞穗國是

（丁未）三年春正月戊子朔壬寅、射於朝庭、是日、高麗新羅並遣使貢獻調賦、夏四月丁巳朔壬午、詔曰、惟神惟神者、謂隨神道亦自有神道也我子應治故寄、是以與天地之初、君臨之國也、自始治國皇祖之時、天下大同、都無彼此者也、既而頃者、始於神名天皇名々、或別爲臣連之氏、或別爲造等之色、由是率土民心、固執彼此、深生我汝、各守名々、又拙弱臣連、伴造國造、以彼爲姓神名王名、逐自心之所歸、妄付前々處々、前々、猶謂人々也爰以神名王名、爲人賂物之故、入他奴婢、穢汗清名、遂卽民心不整、國政難治、是故今者、隨在天神、屬可治平之運、使悟斯等而治國治民、是先是後、今日明日、次而續詔、然素賴天皇聖化、而習舊俗之民、未詔之間、必當難待、故始於皇子、群臣及諸百姓、將賜庸調、是歲、壞小郡而營宮、天皇處小郡宮而定禮法、其制曰、凡有位者、要於寅時、南門之外、左右羅列、候日初出、就庭再拜、乃侍于廳、若晚參者、不得入侍、臨到午時、聽鍾而罷、其擊鍾吏者、垂赤

吾子孫可王之地也と宣給ひしを云
○始治國皇祖、神武天皇を申す
○大同、字書に同は齊也和也とあり大に和平なるを云
○固執彼此云々、或は神爲なりと云ひ或は皇孫なりとて自ら高ぶり人を卑む卽ち矜惜貴重の義
○前々、注の如く人々なり講述鈔に今俗ニ神幾座ヲ神何前ト云ヒ及御前ト云手前ト云皆是ヨリ來ル其舊キヲ觀ルベシと云
○(注)前々云々、集解に私記攙入とす
○以神名王名云々、賄賂を取て神名王名を以て奴婢の名にさへ爲るものありとなり
○治國、中本治の上に將の字あり
○將賜庸調、集解に按以庸調爲賜以定執舊拒新人心所危懼也とあり
○壞小郡而營宮、攝津志に西成郡上古難波小郡と云とあり壞は民家を壞つならむ而の字は北本中本に據て補ふ
○臨到午時、原本臨一字

巾於前、其鍾臺者、起於中庭、工人大山位倭漢直荒田井比羅夫誤穿溝瀆控引難波、而改穿疲勞百姓、爰有上疏切諫者、天皇詔曰、妄聽比羅夫所詐、而空穿瀆、朕之過也、卽日罷役、冬十月甲寅朔甲子、天皇幸有間溫湯、左右大臣羣卿大夫從焉、十二月晦、天皇還自溫湯、而停武庫、行宮、武庫、地名也、是日、災皇太子宮、時人大驚怪、是歲、制七色一十三階之冠、一曰、織冠、有大小二階、以織爲之、以繡裁冠之緣、服色並用深紫、二曰、繡冠、有大小二階、以繡爲之、其冠之緣、服色並同織冠、三曰、紫冠、有大小二階、以紫爲之、以織裁冠之緣、服色用淺紫、四曰、錦冠、有大小二階、其大錦冠、以大伯仙錦爲之、以織裁冠之緣、其小錦冠、以小伯仙錦爲之、以大伯仙錦裁冠之緣、服色並用眞緋、五曰、青冠、以青絹爲之、有大小二階、其大青冠、以大伯仙錦裁冠之緣、其小青冠、以小伯仙錦裁冠之緣、服色並用紺、六曰、黑冠、有大小二階、其大黑冠、以車形錦裁冠之緣、其小黑冠、以菱形錦裁冠之緣、服色並用綠、七曰、建武、初位、又名立身、以黑絹爲之、以紺裁冠之緣、別有鐙冠、以黑絹爲之、其冠之背、張漆羅、以緣與鈿、異其高

下、形似於蟬、小錦冠以上之鈿雜金銀爲之、大小青冠之鈿以銀爲之、大小黑冠之鈿以銅爲之、建武之冠無鈿也、此冠者大會、饗客、四月七月、齋時所著焉、新羅遣上臣大阿飡金春秋等、送博士小德高向黑麻呂、小山中中臣連押熊、來獻孔雀一隻、鸚鵡一隻、仍以春秋爲質、春秋美姿顏善談咲、造渟足柵置柵戶、老人等相謂之曰、數年、鼠向東行、此造柵之兆乎、

衍れり北本應本中本に據て削る　○鐘而麗、公式令に凡京官諸門前上開門後下義解に謂ふ二開門鼓前退朝鼓後也とあり　○鈴鐘吏、守辰丁なり　○赤巾、集解に按赤巾蓋絳幘鶏人之類蒙首衣也非謂敝膝爲巾之巾也といひ抄裝束部に幗知岐利加字不利今老嫗戴之)覆髻上者也と見ゆ　○改穿、此二字集解に攙入として削る　○切諫、切は北本應本中本に據て補ふ　○有間溫湯、攝津國有間郡　○晦、辛巳に當る十二月の下朔干支を脫せしなるべし　○武庫行宮、攝津志に在武庫郡藏入村と云　○(注)武庫地名也、集解に攙入とす　○時人大驚怪、何事か深き事由ありしなるべし　○七色一十三階之冠、推古紀十一年に冠位十二階を定められしより四十四年なり　○織冠、集解に按織卽錦綺之屬とあり　○繡、抄布帛部に繡以五色絲刺萬物形狀也とあり　○以紫爲之、山田以文の說に紫の下綾の字を脫せしならむと云　○淺紫、ウスムラサキとよむべし　○人伯仙錦、大伯仙は其文を云小伯仙亦同じ　○眞緋、原本眞を直に作る北本應本楓本に據て改む　○紺、フカキハナダは深縹なり　○車形綿、車形は文を云　○菱形綿、菱の紋形の綿なり　○建武、通證に通典曰鶡冠一名建冠云々蓋取之而名也鶡性雄健武毅故改曰建武耶とあり　○(注)初位又名立身、初位とは身を立つるの初建武を初位とも立身とも云るなるべし五年紀十九階には立身の本名とぜり　○以黑絹、以の字は集解に據て補ふ　○鐙冠、冠の形鐙に似たるを以て名く鐙をツボと訓めるは古代の鐙の狀壺に似たるに因れり　○鈿、髻華なり推古紀十一年(一一二頁)に出づ　○形似於蟬、似の字は北本應本中本に據て補ふ蟬をカザリクシと訓めるは飾串にて蟬の形を作りて串に付けしなるべし是も支那風なり　○大會、卽位朝拜等を云　○饗客、唐及三韓人參聘時の饗なり　○齋時、四月八日七月十五日なり　○人阿飡、原本飡を飡に作る中本に據て改む大阿飡は新羅の官名　○小山中、小山は上下ありて中なければ中は上又は下の誤なるべし　○善談咲、ホダキは俗に云ホザキの意なるべし言多きを云　○渟足柵、越後國沼垂郡(今中蒲原郡)にあり　○柵戶、陵戶官戶などの戶に同じく柵に屬する民戶なり

【大化四年】難波碕宮、豐碕宮に同じ前後の文を按るに或は豐の字を脫ぜしか又或は略稱ならむか　(二月)三韓、中本此下

(癸申)四年春正月壬午朔、賀正焉、是夕、天皇幸于難波碕宮、二月壬子朔、於三韓遣學問僧、己未、阿倍大臣、請四衆於四天王寺、迎佛像四軀、使

坐于塔内、造靈鷲山像、累積皷爲之、夏四月辛亥朔、罷古冠、左右大臣、猶著古冠、是歲、新羅遣使貢調、治磐舟柵以備蝦夷、遂選越與信濃之民、始置柵戶、

五年春正月丙午朔、賀正焉、二月、制冠十九階、一曰大織、二曰小織、三曰大繡、四曰小繡、五曰大紫、六曰小紫、七曰大花上、八曰大花下、九曰小花上、十曰小花下、十一曰大山上、十二曰大山下、十三曰小山上、十四曰小山下、十五曰大乙上、十六曰大乙下、十七曰小乙上、十八曰小乙下、十九曰立身、是月、詔博士高向玄理與釋僧旻置八省百官、三月乙巳朔辛酉、阿倍大臣薨、天皇幸朱雀門、擧哀而慟、皇祖母尊、皇太子等、及諸公卿、悉隨哀哭、戊辰、蘇我臣日向（日向字身刺）詣倉山田大臣於皇太子、曰、僕之異母兄麻呂、伺皇太子遊於海濱而將害之、將反其不久、皇太子信之、天皇使大伴狛連、三國麻呂公、穗積臣於蘇我倉山田麻呂大臣所、而問反之虛實、大臣答曰、被問之報、僕面當陳天皇之

に三韓謂高麗百濟新羅の九字を分注す
○遣、中本於の上にあり
○己未、原本未を來に作る中本及類史に據て改む
○四衆、翻譯名義集に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷爲四衆と見ゆ
○靈鷲山、西域記に耆闍崛山有兩峰雙立鷲鳥常居其嶺山遠望如鷲形故爲靈鷲山とあり
【大化五年】制冠十九階、三年改定の七色十三階に六階を增したれど大紫小紫以上は前に同じく花、山、乙は新制、立身は前の建武の名を改めしなり
○大織、楓本中本には織をショク又シキ、シクと訓めりシクの訓誤れりシキの方正し常にはダイショクと云
○大花、原本花を華に作る何れにてもあるべけれど今諸本に從ふ下同じ
○乙、鷁の音を取たれば此の訓イツとあるが理なれどなほ舊訓オツと訓めるがあり
○八省、八省は中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大蔵、宮内を云唐

の六部に准じて尚ほ二省を増したるなり令制の八省の源をなせるなり省は字書に禁署也とあり
○朱雀門、拾芥抄に伴氏造之二階中間戸五間號朱雀御門とあり南面中央の大門なり
○譖、字鏡に譖志己豆とあり醜シコつの意
○麻呂、倉山田麻呂を云
○赤猪、原本猪を狛に作る北本楓本應本及釋紀に據て改む
○(注)秦、原本奏に作る楓本引交本及中本に據て改む
○茅渟道、茅渟は和泉國なり
○長子、エコは他に見えれど古訓なるべし
○(注)山田之家、大和國十市郡にあり
○今來、高市郡の舊名なり新漢とも書けり
○大槻近、近は邊の誤にて邊(ホトリ)なるべし下同じ
○逆拒、原本逆を送に作る中本に據て改む
○(注)宮謂小墾田宮、集解攙入とす
○夫爲人臣、原本夫を大に作る諸本及紀略に據て

所天皇更遣三國麻呂公、穗積噛臣、審其反狀、麻呂大臣、亦如前答、天皇乃將興軍圍大臣宅、大臣乃將二子法師與赤猪(更名秦)自茅渟道逃向於倭國境、大臣長子興志、先是在倭、(謂在山田之家)營造其寺、今忽聞父逃來之事、迎於今來大槻近、就前行入寺、顧謂大臣曰、興志請自直進逆拒來軍、大臣不許焉、是夜、興志意欲燒宮、猶聚士卒、(宮、謂小墾田宮)己巳、大臣謂長子興志曰、汝愛身乎、興志對曰不愛也、大臣仍陳說於山田寺衆僧及長子興志與數十人曰、夫爲人臣者、安搆逆於君、何失孝於父、凡此伽藍者元非自身故造、奉爲天皇誓作、今我見讒身刺、而恐横誅、聊望黃泉、尙懷忠退、所以來寺、使易終時、言畢開佛殿之戶、仰而發誓曰、願我生々世々不怨君王、誓訖自經而死、妻子殉死者八、是日、以大伴狛連與蘇我日向臣、爲將領、衆使追大臣、將軍大伴連等及到黑山、土師連身采女臣使主麻呂、從山田寺馳來告曰、蘇我大臣既與三男一女俱自經死、由是將軍等從丹比坂歸、庚午、山田大臣之妻子及隨

身者、亦自經死者衆、穗積臣嚙捉聚大臣伴黨田口臣筑紫等、著枷反縛、是夕、木臣麻呂、蘇我臣日向、穗積臣嚙、以軍圍寺、喚物部二田造鹽、使斬大臣之頭、於是二田鹽仍拔大刀刺擧其完、叱咤啼叫而始斬之、甲戌、坐蘇我山田大臣而被戮者、田口臣筑紫、耳梨道德、高田醜（醜、此云之渠）雄、額田部湯坐連、闕名秦吾寺等凡十四人、被絞者九人、被流者十五人、是月、遣使者收山田大臣資財、資財之中、於好書上題皇太子書、於重寶上、題皇太子物、使者還申所收之狀、皇太子始知大臣心猶貞淨、追生悔耻、哀歎難休、卽拜日向臣於筑紫大宰帥、世人相謂之曰、是隱流乎、皇太子妃蘇我造媛聞父大臣爲鹽所斬、傷心痛惋、惡聞鹽名、所以近侍於造媛者、諱稱鹽名、改曰堅鹽、造媛遂因傷心而致死焉、皇太子聞造媛徂逝、愴然傷怛、哀泣極甚、於是野中川原史滿進而奉歌、歌曰、耶麻鵝播爾、烏志賦拖都威底、陀虞毗預俱、陀虞陛屢伊慕乎、多例柯威爾雞武、其模騰渠等爾、婆那播左該騰摸、那爾騰柯母、于都俱之伊

改む
○身刺、原本刺を判に作る諸本に據て改む
○仰而發誓、原本仰を作に作り而の字なし北本應本中本に據て改め補ふ
○殉死者八、中本に據れりとて下に人の字を補るは非なり同本になし
○黑山、河內志に丹南郡黑山村とあり今南河內郡黑山村是なり
○土師連身、身は名なり當時は身、目などいふ名ありたり
○丹比坂、丹南郡にあり今南河內郡丹比村に屬す
○亦自、亦の字は中本に據て補ふ
○田口臣筑紫、二年紀に見ゆ
○著枷、抄調度部刑罰具に無、鉗者著盤枷（日本紀私記云久比加之）とあり
○二田造鹽、天孫本紀に五部造一曰二田造又錄右京未定雜姓に二田物部と見ゆ
○叱咤啼叫、原本叱を吒に作る北本に從て改む啼は號の誤なるべし
○始、イマシは今シにてシは助辭なり

母我、磨陀左枳涅渠農、其二皇太子慨然頽歎褒美曰、善矣悲矣、乃授御琴、而使唱、賜絹四疋、布廿端、綿二斤、夏四月乙亥朔甲午、於小紫巨勢徳陀古臣授大紫爲左大臣、於小紫大伴長徳連授大紫爲右大臣、五月癸卯朔、遣小花下三輪君色夫、大山上掃部連角麻呂等於新羅、是歳、新羅王遣沙喙部沙飡金多遂爲質、從者卅七人、僧一人、侍郎二人、丞一人、達官一人、中客五人、才伎十人、譯語一人、雜傭人十六人、并卅七人也、

○耳梨、大和國十市郡の地名
○高田、錄右京諸蕃に高田首出自高麗人多高子使主とある同氏か
○(注)醜此云々、醜の字は中本に據て補ふ
○額田部湯坐連、錄左京神別に天彦根命子明立天御影命之後也とあり
○收山田大臣資財、賊盜律に謀反及大逆者資財田宅並沒官とある是なり
○相謂之、北本謂を語に作る
○是隱流乎、通證に陽進拜而退遷之也と云り
○痛惋、字書に惋は駭恨也とあり原本にミツカフと訓るミはアの誤なり北本に據て改む
○諱稱鹽名、原本諱を名に作る北本中本に據て改む
○野中、河內國丹比郡野中鄕あり河內志に野中村見ゆ是なり
○川原史、錄右京皇別に野中彥國葺命之後也又河內諸蕃に河原連見ゆ皇別蕃別何れか詳ならず
○烏志賦拖都威底、鴛鴦を皇太子と造媛とに喩へたり
○多例柯威爾雞武、何人か死に誘ひしとの意
○模騰渠等爾、木をたゞにモトと云ること他の歌にも見ゆ花一もとなど是なり
○磨陀左枳涅渠農、木毎に花は咲けるが何とて我が愛づる造媛はまだ開きて來ぬのであらうと媛の身失せましゝを皇太子の悲しみまさせる其御心を想ひ奉りて詠めるなり
○善矣悲矣、此歌を一は美はしとめで又悲ませ給へる意なるべし
○綿二斤、斤は通證に蒲貲(カマス)也編蒲爲袋也と云
○乙亥、原本乙卯に作れり集解に長曆に據て改めたるに從ふ
○癸卯朔、長曆を推すに甲辰に當り一日の差あり
○掃部連、錄和泉神別に掃部連振魂命四世孫天忍人命之後也とあり
○沙喙部、推古紀十八年(一二二頁)に見ゆ
○沙飡、原本飡を食に作る應本中本に據て改む新羅の官十七等の第八等
○卅七人、七の字は北本應本中本に據て補ふ
○(注)侍郎、後漢書百官志に侍郎三十六人主作文書起草とあり
○丞、原本承に作る集解に據て改む
○達官郎、禮記檀弓に諸達官之長杖注に受命於君者其名達於上故謂之達官とあり
○十六人、人の字は中本に據て補ふ

【白雉元年】味經宮、攝津國東生郡味原鄕あり攝津志に東生郡味原方廢味生原存今屬島下郡又云味經宮別府味舌二村卽其故趾延喜式所謂味原牧爲家牛牧亦卽此とあり

白雉元年春正月辛丑朔、車駕幸味經宮觀賀正禮、味經此云是日、車駕還宮、二月庚午朔戊寅、穴戸國司草壁連醜經獻白雉曰、國造首之同族贄、正月九日於麻山獲焉、於是問諸百濟君、百濟君曰、後漢明帝永平

○（注）阿賦賦、原本賦を賦に作る北本中本に據て改む
○穴門國、長門國なり
○草壁連、日下部連に同じ顯宗紀即位前紀、卷上二九二頁）に出づ
○國造首、國造本紀に穴門國造鑿向日代朝御世櫻井田部連同姓謝伎都美命四世孫速都鳥命定賜國造とあり
○麻山、詳ならず近藤清石の說に麻山は一の山名にあらで麻と云地の山なり蓋し今の美祢郡大嶺村なるべしと云
○百濟君曰、下文に豐璋とあり此百濟君の三字原本になし北本楓本中本に據て補ふ
○白雉所在見焉、後漢書明帝紀に麒麟白雉醴泉嘉禾所在出焉と見ゆ、原本所在を在所に作る後漢書に據て改む
○沙門等、等の字は北本中本及類史に據て補ふ
○耳所未聞、原本所未を未所と倒置す北本中本及類史に據て改む
○道登、大化元年紀に見ゆ
○白鹿圓寺、釋氏要覽に

十一年、白雉所在見焉云々、又問沙門等、沙門等對曰、耳所未聞、目所未覩、宜赦天下、使悅民心、道登法師曰、昔高麗欲營伽藍、無地不覽、便於一所白鹿徐行、遂於此地營造伽藍、名白鹿圓寺、住持佛法、又白雀見于一寺田莊、國人僉曰、休祥、又遣大唐使者持死三足烏來、國人亦曰、休祥、斯等雖微、尙謂祥物、況復白雉、僧旻法師曰、此謂休祥、足爲希物、伏聞、王者旁流四表、則白雉見、又王者祭祀不相踰、宴食衣服有節則至、又王者清素則山出白雉、又王者仁聖　則見、又周成王時、越裳氏來獻白雉、曰、吾聞國之黃耇曰、久矣無烈風淫雨、江海不波溢、三年於茲矣、意中國有聖人乎、蓋往朝之、故重三譯而至、又晉武帝咸寧元年、見松滋、是則休祥、可赦天下、是以白雉使放于園、甲申、朝庭隊仗如元會儀、左右大臣百官人等、爲四列於紫門外、以粟田臣飯虫等四人、使執雉輿、而在前去、左右大臣乃率百官及百濟君豐璋、其弟塞城忠勝、高麗侍醫毛治、新羅侍學士等、而至中庭、使三國公麻呂、猪名公高見、三輪君甕穗、紀臣乎

鹿苑又名鹿林在波羅奈國佛成道初轉法輪度憍陳如等五比丘處とあり白鹿園寺の名此に据れるなるべし

○三足烏、治部式祥瑞に三足烏日之精也とあり上瑞とす

○此謂休祥、北本楓本應本休を佳に作る字書に休は美善也慶也とあり

○旁流、太子傳所引感情符に王者德流四表則白雉見とあり

○王者祭祀云々、孝經援神契に見ゆ

○又周成王時、又の字は北本應本中本及類史に據て補ふ

○越裳氏、後漢書南蠻傳に交阯之南有越裳國とあり

○黃耇、儀禮士冠禮に黃耇無疆受天慶注に黃黃髮也耇凍梨也皆壽徵也と

○烈風淫雨、原本烈を別に作る類史に據て改む淫雨は字書に久雨也とあり

○松滋、通證に松滋縣在江陵江陵府屬湖北即荊州とあり

○隊仗、宮衛令義解に隊仗者衛士陣謂之隊也兵衛內舍人陣謂之仗とあ

麻呂岐太四人、代執雉輿而進殿前、時左右大臣就執輿前頭、伊勢王、三國公麻呂、倉臣小屎、執輿後頭、置於御座之前、天皇卽召皇太子、共執而觀、皇太子退而再拜、使巨勢大臣奉賀曰、公卿百官人等奉賀、陛下以清平之德、治天下之故、爰有白雉、自西方出、乃是陛下及至千秋萬歲、淨治四方大八嶋、公卿百官及諸百姓等、冀馨忠誠勤將事、奉賀訖再拜、詔曰、聖王出世治天下時、天則應之、示其祥瑞、曩者西土之君周成王世與漢明帝時、白雉爰見、我日本國譽田天皇之世、白烏樔宮、大鷦鷯帝之時、龍馬西見、是以自古迄今、祥瑞時見、以應有德、其類多矣、所謂鳳凰騏驎白雉白烏、若斯鳥獸及于草木、有符應者、皆是天地所生休祥嘉瑞也、夫明聖之君獲斯祥瑞、適其宜也、朕惟虛薄、何以享斯、蓋此專由扶翼公卿臣連伴造國造等、各盡丹誠、奉遵制度之所致也、是故始於公卿及百官等、以清白意、敬奉神祇、並受休祥、令榮天下、又詔曰、四方諸國郡等、由天委付之故、朕總臨而御寓、今我親神祖之所知、穴戸國中、有此嘉瑞、所以大赦天下、改元白雉、仍禁放鷹於穴戸境堺、賜

公卿大夫以下至于令史各有差、於是、褒美國司草壁連醜經授大山位、
并大給祿、復穴戸三年調役、夏四月、新羅遣使貢調、或本云、是天皇世、高麗百濟新羅三國、每年遣使貢獻也、
冬十月、爲入宮地所壞丘墓及被遷人者、賜物各有差、卽遣將作大匠荒
田井直比羅夫、立宮堺標、是月、始造丈六繡像俠侍八部等四十六像、
是歲、漢山口直大口奉詔刻千佛像、遣倭漢直縣、白髮部連鐙、難波吉士
胡床於安藝國、使造百濟舶二隻、

り
○如元會儀、元會は正月元旦の節會を云　○紫門、天に紫微宮あり、上帝の居處なり王者之に象て宮を立つ依て紫宮といい其門を紫門と云なり　○葉城、皇極紀（一五〇頁）に塞上とあり　○忠勝、齊明紀（二二〇頁）に豐璋の叔父とあり　○猪名公、宣化紀元年（二五頁）に偉那公と見ゆ　○紀臣乎麻呂岐太、北本應本乎を手に作る集解に乎字衍據二年紀刪二年紀曰紀麻利耆拖臣卽此とあり通證には乎麻呂を一人の名とし岐太は新羅侍學士の名ならむと云　○伊勢王、詳ならず　○倉臣、錄和泉神別に椋連天香山命之後也とあれど同族か詳ならず　○巨勢大臣、德太臣なり　○奉賀、ヨゴトは賀詞なり　○清平之德、之の字は北本及類史に據て補ふ　○淨治、原本治を倡とす北本應本中本に據て改む又中本淨を清に作る　○漢明帝、類史漢の上後の字あり　○白烏、原本烏を鳥に作る下文に據て改む樔は巢と同じ　○龍馬、治部式祥瑞に龍馬を上瑞とす白烏龍馬の事共に本紀に見えざれど據あるべし　○鳳凰、治部式に鳳狀如鶴五綵以文云々とあり大瑞とす　○麒麟、抄毛群部に瑞應圖云麒麟共隣二音又作騏驎仁獸也牡曰麒牝曰麟也治部式に麟仁獸也麋身羊頭牛尾一角端有肉とあり大瑞とす　○我親神祖、祝詞に皇親神魯伎神魯美命とあるに同じ神魯伎神は神祖とまします男神、神魯美神は神祖とまします女神の意なるがこゝは仲哀天皇神功皇后を申奉れるなるか其は仲哀天皇神功皇后が熊襲御親征の時行宮を穴門に造りまし〳〵し事のあればなり　○禁放鷹、瑞鳥の栖めばなるべし　○穴戸境堺、堺の字は類史に據て補ふ　○令史、抄職官部に司曰令史佐官也とあり　○大山、上に見えし冠位にて上下あれば上或は下の字あるべきなり　○大給祿、祿の字は類史に據て補ふ原本祿の下各有差の三字あり衍なれば削る　○復、調役を免すなり正韻に復除也、漢書の注に不徭役也とあり　○（注）天皇世、世の字は北本中本に據て補ふ　○將作大匠、通證に舊秦官唐依之三年作工人とあり　○荒田井直、上文に倭漢直荒田井とあり　○俠侍、俠は挾に同じ脇立なり　○八部、翻譯名義集に一天二龍三夜叉四乾闥婆五阿脩羅六迦樓羅七緊那羅八摩睺羅伽とあり　○漢山口直、錄有京諸蕃山口宿禰後漢靈帝四世孫都黃（つき）直之後也とあり是なるべし　○白髮部連、濤寧紀（卷上二九〇頁）に出づ錄有京皇別に眞髮部稚武彥男吉備武彥之後也また山城神別に眞髮部造神饒速日命七世孫大賣布乃命之後也とあり二氏の內なるべし白髮部を眞髮部と改めたる事續紀二十八延曆四年五月の詔に見ゆ　○胡床、楓本床を麻に作る

【白雉二年】十師、大化元年紀に出づ　○六月、文例に據るに此

二年春三月甲午朔丁未、丈六繡像等成、戊申、皇祖母尊請十師等設齋、
（辛亥）

上に夏の字あるべし
○一切經、亦大藏經と云唐玄宗開元十年沙門智昇開元釋教目錄二十卷を著し經論章疏を詮次す凡て五千四十八卷是れ大藏定數の始めなり
○安宅土側等經、釋紀に或說地鎭之經也或曰側當作測とあり
○難波長柄豐碕宮、大化元年紀に遷都難波長柄豐碕とあれば此に至て造營全く成れるなり
○知万沙飡、知万は名沙飡は新羅の官なり
○追還、集解追を逐に作る

【白雉三年】自正月至是月、通證に考此文則此上脫二月並支干といひし橫山由清氏は集解に是月爲二月誤非班田之事は二ケ月間に能訖ふべきにあらず按に大化二年正月に定班田收授之法とありて漸次に之を諸國に行ひ當年に至りて全國班田の事全く訖りしが故に此に載せたるなり自正月の三字は自大化二年正月の誤にて數字を脫せるなりと云
○(注)段租稻云々、集解

六月、百濟新羅遣使、貢調獻物、冬十二月、晦、於味經宮、請二千一百餘僧尼、使讀一切經、是夕、燃一千七百餘燈、於朝庭內、使讀安宅土側等經、於是天皇從於大郡遷居新宮、號曰難波長柄豐碕宮、是歲、新羅貢調使知万沙飡等、著唐國服、泊于筑紫、朝庭惡恣移俗、訶嘖追還、于時巨勢大臣奏請之曰、方今不伐新羅、於後必當有悔、其伐之狀、不須擧力、自難波津、至于筑紫海裏、相接浮盈艫舳、召新羅問其罪者、可易得焉、

三年(壬子)春正月己未朔、元日禮訖、車駕幸大郡宮、自正月至是月、班田既訖、凡田長卅步爲段、十段爲町、段租稻一束半、町租稻十五束、三月戊午朔、丙寅、車駕還宮、夏四月戊子朔、壬寅、請沙門惠隱於內裏、使講無量壽經、以沙門惠資爲論議者、以沙門一千爲作聽衆、丁未、罷講、自於此日、初連雨水、至于九日、損壞宅屋、傷害田苗、人及牛馬、溺死者衆、是月造戶籍、凡五十戶爲里、每里長一人、凡戶主皆以家長爲之、凡戶皆五家相保、一人爲長、以相檢察、新羅百濟遣使貢調獻物、秋九月、造宮已訖、其宮殿之狀、不可殫論、冬十

に二年制段租稻二束二把町租稻二十二束至此改制薄租也と云り檜山氏の說に此集解の說によらば租法改制の事を載せざるは租法を緩めたるにはあらず蓋上古令前段租は其實大化二年の租法と同じきが故に撰者の注したるなり本紀の撰進は大寶制令以前にあるが故に令前租法を以て注したるなり又上古五十代二百五十歩の地大化に歩積を改めて一段を三百六十歩と爲すと雖も民間に於てはなほ從來のまゝに代の名をもて稱し歩積も舊に仍れるが多く稻の束把穀の斗升も亦從て改まらざりしに因れり近江令撰定の頃などに改めて歩積を舊の高麗尺の方六尺に復し其二百五十歩を以て段とし十段二千五百歩を以て一町とせしならむ是上古の制に全く同じ持統天皇三年に令を諸司に頒ち同六年に班田使を遣して町段を定めしことあるか令前租法の稱あると段積を三百六十歩とし更に改めて二百五十歩とし重ねて復改めて三百六十歩と爲しことあるを以て此制ありしことを證すべしと云　○惠隱　舒明紀十一年に見ゆ　○惠資、集解に按大化元年紀有二東至一蓋同人也　○雨水、水は氷の誤なるべし　○宅屋、ヤカスは宅柄なるべし推古紀七年（一〇九頁）に舍屋を訓り　○長一人、長の上置の字あるべし　○殫論、原本殫を彈に作る小寺本集解に據て改む殫は說文に極盡也とあり　○晦、原本皆に作る通證集解に從て改む通證に僧史略曰漢法本內傳曰西域十二月三十日是此方正月望謂二之大神變月一漢明帝令レ燒レ燈表二佛法大明一也とあり　○大捨燃燈、傳燈錄に內外身心一時俱捨隨レ力應レ物能所二背忘一謂二大捨一譬喩經に眞至心割捨然二燈佛前一所レ獲福德難レ可二稱量一也とあり大捨の訓カキテは掻捨なるべし

二月晦、請二天下僧尼一於內裏設齋大捨燃燈、

【白雉四年】道嚴、崇峻紀元年に見ゆ　○道光、持統紀八年に見ゆ　○弁正、懷風藻に傳あり　○道昭、續紀一道昭傳に和尙河內國丹比郡人也俗姓船連王辰爾之裔惠釋之子也尙扶桑略記元亨釋書等に委し　○定惠、定慧傳あり元亨釋書に大織冠之長子也云々白雉四年隨二遣唐使一浮レ海乃到二長安城一師二慧日寺神泰一習學始十歲調露元年伴二百濟使一而至とあり　○（注）中臣渠每連、大中臣本系帳に糠手子大連公一男有大臣大錦上金二男

（癸丑）四年夏五月辛亥朔壬戌、發遣大唐大使小山上吉士長丹、副使小乙上吉士駒、駒更名糸、學問僧道嚴、道通、道光、惠施、覺勝、弁正、惠照、僧忍、知聰、道昭、定惠、定惠、內大臣之長子也、安達、安達、中臣渠每連之子、道觀、道觀、春日粟田臣百濟之子、學生巨勢臣藥、藥、豐足臣之子氷連老人、老人、眞玉之子、或本、以學問僧知辨、義德、學生坂合部連磐積一而增焉、并一百廿一人、俱乘二一船一、以二室原首御田一爲送使、又大使大山下高田首根麻呂、更名八掬脛副使小乙上掃守連小麻呂、學問僧道福、義向、并一百廿人俱乘二一船一、以二土師連八手一爲送使、是月、天皇幸二旻法師房一而問二其疾一、遂口勅二恩命一、或本、於二五年七月一云、僧旻法師臥二病於阿曇寺一、於是天皇幸而問之、仍執二其手一曰、若法師今日亡者、朕從明日亡、六月、百濟新羅遣レ使貢調獻物、脩二治處々大道一、

許米とあり
○百濟之子、中本子の下俗名眞人の四字あり
○氷連、河内神別に氷連石上部臣同祖饒速日命十世孫伊己灯(イコト)宿禰之後也とあり天武紀十三年氷連賜姓曰宿禰とあり老人は持統紀に出づ
○(注)養德、持統紀四年亂世のこと見ゆ
○并一百廿一人、并一の二字は北本應本中本に據て補ふ
○室原首、詳ならず
○高田首、五年紀に出づ
○(注)阿曇寺、攝津志に西成郡安曇廢寺大坂安堂寺町地藏石像尙存卽此とあり
○天皇、原本大皇に作る北本應本楓本に據て改む
○若法師、原本若を苦に作る北本中本に據て改む
○狛堅部子麻呂、原本堅を竪に作る中本小寺本に據て改む姓氏錄に堅部は見えず右京未定雜姓に堅祖氏百濟國人堅祖爲知之後者とあれど百濟人なれば狛と云るに叶はず續紀稱德紀に堅部使主石前とあるは蓋同族なるべし　○鯽魚戸直、詳ならず錄右京諸蕃道祖史百濟王孫許里公之後也とあるは同族か　○川原寺、大和志に高市郡廢川原寺川原村一名弘福寺唯大悲堂一宇尙存とあり今高市郡高市村大字川原　○竹島之間、原本間を門に作る北本應本中本及紀略に據て改む竹島は地理纂考に山川港より海上十三里硫黃島に隸、硫黃島は當島より南の方三里に在りとあり、薩麻之畔竹嶋之間とあれば薩摩國と竹嶋との中間にて船の沈沒せしなるべし　○門部金　錄入和神別に門部連卒須比命兒安卒須比命之後也とあり天武紀十年に門部直大島賜姓曰連と見ゆ　○筏、抄舟車部に桴筏論語注云桴〻竹木一大曰筏小曰桴以賀多とあり　○神嶋、集解に按地圖肥前國西南海中有神島蓋是とあれど地理に合はず蓋薩摩國甑島列島の內なる上甑島なるべし神をシトキと訓るは抄祭祀具に粟〻之度岐〻祭餅也とあるに據れるか　○奉皇祖母尊、釋紀に奉の下率の字あれど五年十月の條を參考するに無きを可とす　○皇弟、天武天皇なり　○飛鳥河邊行宮、大和志に在高市郡飛鳥村南傍有井名行幸井とあり　○山碕、山城國乙訓郡山

天皇聞旻法師命終、而遣使弔、并多送贈、皇祖母尊及皇太子等、皆遣使弔旻法師喪、遂爲法師命畫工狛堅部子麻呂、鯽魚戸直等、多造佛菩薩像、安置於川原寺、或本云、在山田寺、秋七月、被遣大唐使人高田根麻呂等、於薩麻之曲、竹嶋之間、合船沒死、唯有五人、繫胷一板、流遇竹嶋、不知所計、五人之中、門部金採竹爲筏、泊于神嶋、凡此五人經六日六夜、而全不食飯、於是褒美金進位給祿、是歲、太子奏請曰、欲冀遷于倭京、天皇不許焉、皇太子乃奉皇祖母尊、間人皇后、并率皇弟等、往居于倭飛鳥河邊行宮、于時公卿大夫百官人等皆隨而遷、由是天皇恨欲捨於國位、令造宮於山碕、乃送歌於間人皇后曰、舸娜紀都該、阿我柯賦古麻播、比枳涅世儒、阿我柯賦古麻乎、比騰瀰都羅武箇、

崎郷（今の山崎）なるべし　○送歌、此大御歌は皇后の御心を疑ひ坐して詠みて贈らせ給ひしなりと荒木田久老云り　○舸娜紀都該云々、カナキは鉗なり抄刑罰具に鉗（和名加奈岐）以鐵束頸也とあり皇后を馬に讐へ馬に鉗をつけて絆す如く皇后を宮中より出し給はずして深く愛し給ひしを今天皇の大御許を去て一人倭に行啓し給ひしは或は他人が見て引出でしにはあらずやと疑はしく思はるとなり

【白雉五年】鎌足、錄左京神別に藤原朝臣の下に中臣連鎌子古記曰鎌足とあり以前皆鎌子と書きしを此に至りて鎌足とあるは改めしなるべし　○遣大唐押使、押使の押は總の意なり　○宮道、原本道を首に作る中本に據て改む宮道氏は舊事紀に稚武王宮道君祖とあり記には日本武尊の御子建貝兒王者宮首之祖とあれば宮首にてもミヤヂと訓べきなり阿彌陀は名なり衣縫造孔子文忌り釋迦の類あり　○崗君、錄右京諸蕃に崗連曰圖王男安貴之後也とある是か　○置始連、錄右京神別に大椋置始連、左京神別に長谷置始連見え出自各別なれば何れとも定め難し　○中臣間人連、錄左京神別に間人宿禰神魂命五世孫玉櫛比古命之後也とあれど中臣氏にあらざれば別なるべし　○巢州、唐書地理志に河

（甲寅）五年春正月戊申朔、夜、鼠向倭都而遷、壬子、以紫冠授中臣鎌足連、增封若干戸、二月、遣大唐押使大錦上高向史玄理、或本云、夏五月、遣大唐押使大花下高向玄理、大使小錦下河邊臣麻呂、副使大山下藥師惠日、判官大乙上書直麻呂、宮道阿彌陀、或本云、判官小山下書直麻呂、小乙上崗君宜、置始連大伯、小乙下中臣間人連老、老、此云於喩、田邊史鳥等、分乘二船、留連數月、取新羅道、泊于萊州、遂到于京、奉覲天子、於是東宮監門郭文舉悉問日本國之地里及國初之神名、皆隨問而答、押使高向玄理卒於大唐、伊吉博得言、學問僧惠妙於唐死、知聰於海死、智國於海死、智宗以庚寅年付新羅船歸、覺勝於唐死、義通於海死、定惠以乙丑年付劉德高等船歸、妙位、法勝、學生氷連老人、高黃金并十二人、別倭種韓智興趙元寶、今年共使人歸、夏四月、吐火羅國男二人女二人、舍衛女一人、被風流來于日向、秋七月甲戌朔丁酉、西海使吉士長丹等、共百濟新羅送使、泊于筑紫、是月、褒美西海使等奉對唐國天子、多得文書寶物、授小山上大使吉士長丹以少花下、賜封二百戸、賜姓爲吳氏、授小乙上副使吉士駒以小山上、冬十月癸卯朔、皇太子聞天

皇病疾、乃奉皇祖母尊間人、皇后、并率皇弟公卿等、赴難波宮、壬子、天皇崩于正寢、仍起殯於南庭、以小山上百舌鳥土師連土德主殯宮之事、十二月壬寅朔己酉、葬于大坂磯長陵、是日、皇太子奉皇祖母尊、遷居倭河邊行宮、老者語之曰、鼠向倭都、遷都之兆也、是歳、高麗百濟新羅並遣使奉弔、

日本書紀卷第廿五

南道萊州とあり　○奉覲天子、唐高宗なり　唐書日本傳に永徽初年其王孝德卽位改元曰白雉獻琥珀大如斗碼碯者五升器とあり　○東宮監門、唐書百官志に太子左右監門率府率各一人副率各二人掌諸門禁衛とあり　○郭文舉、應本中本文を大に作り北本楓本丈に作る　○地里、里は理と通ず　○（注）伊吉博得言、錄左京諸蕃に伊吉連出自長安人劉楊雍也とあり續紀二には博德に作れり律令撰定に預りて封戶功田を賜はりし人なり言は下文に據るに書の誤なるべし　○惠妙、集解に按大化元年紀有惠妙云々以天武天皇五年卒然則與此別妙疑誤字蓋白雉四年所遣之僧とあり　○知聰、白雉四年に遣さる　○智國智宗、共に詳ならず　○庚寅年、持統天皇四年に當る　○覺勝、白雉四年に遣さる　○乙丑年、天智天皇四年に當る　○劉德高、天智紀（一一三三頁）に出づ　○妙位、中本位を信に作る　○氷連老人、上に見ゆ　○高黃金、詳ならず　○別倭種、我邦人彼國の女を娶て生せたる子を云　○韓智興、齊明紀に見ゆ　○趙元寶、詳ならず（以上注）　○吐火羅國、齊明紀三年に覩貨邏國とあり隋書西域傳に吐火羅國都葱嶺西五百里與挹怛雜居都城方二里勝兵者十萬人皆習戰共倫奉佛兄弟同妻迭寢焉云々とあり　○舍衛、淵鑑類函邊塞部に扶南傳曰舍衛國隸屬天竺伽尸國一名波羅奈國亦名波羅國奈斯國とあり　○西海使、卽ち遣唐使　○新羅送使、原本送を遣に作る北本應本中本及紀略に據て改む　○小山上大使、四年の例によるに大使小山上とあるべし小乙上副使亦同じ　○吳氏、錄有京未定雜姓に百濟人德率吳伎側之後者とあり　○小乙上、原本上を下に作る四年五月紀に據て改む　○赴難波宮、曩に天皇合遷宮於山崎とあれど未だ造り畢へざる給はぬ中に御病に罹らせ給へるならむ　○天皇崩、大日本史に本書享年闕神皇正統記如是院年代記並曰五十九他無所考とあり　○百舌鳥土師連、百舌鳥も土師も和泉國大鳥（今泉北）郡の鄕名なり此地に住みしなるべし　○大坂磯長陵、原本磯を機に作る楓本中本及紀略に據て改む諸陵式に大坂磯長陵在河內國石川郡河內志に在山田村と見え陵墓要覽に南河內郡山田村大字山田とあり　○奉皇祖母尊、原本奉の上母の字あり北本中本に據て削る　○倭河邊行宮、飛鳥河邊行宮を云　○並遣使奉弔、並の字は中本に據て補ふ

【卽位前紀】齊明天皇、天皇の二字は中本に據て補ふ、皇極天皇の御重祚我朝重祚の始なり
○高向王、紹運錄に用明天皇の皇子とす孰が正しき
○漢皇子、詳ならず
○後五年云々、此文紛はし按に皇極天皇御讓位の後五年十月に孝德天皇崩御し給ひし由なるべし

【元年】飛鳥板蓋宮、大和國高市郡にあり大和志に在岡飛鳥二村間と見ゆ
○乘龍者、中本頭注に時人言豐浦大臣之靈也とあり
○青油笠、青き絹に油を塗りて作れる笠なり油を塗れる絹絁は延喜縫殿寮

日本書紀卷第廿六

天豐財重日足姬天皇　齊明天皇

天豐財重日足姬天皇、初適於橘豐日天皇之孫高向王而生漢皇子、後適於息長足日廣額天皇而生二男一女、二年立爲皇后、見息長足日廣額天皇紀、十三年冬十月、息長足日廣額天皇崩、明年正月、皇后卽天皇位改元、四年六月、讓位於天萬豐日天皇、稱天豐財重日足姬天皇、曰皇祖母尊、天萬豐日天皇後五年十月崩、

元年春正月壬申朔甲戌、皇祖母尊卽天皇位於飛鳥板蓋宮、夏五月庚午朔、空中有乘龍者、貌似唐人、著青油笠、而自葛城嶺馳隱膽駒山、及至午時、從於住吉松嶺之上、西向馳去、秋七月己巳朔己卯、於難波朝、饗北越蝦夷九十九人、東陸奥蝦夷九十五人、并設百濟調使一百

五十人、仍授柵養蝦夷九人、津刈蝦夷六人、冠各二階、八月戊戌朔、河邊臣麻呂等自大唐還、冬十月丁酉朔己酉、於小墾田造起宮闕、擬將瓦覆、又於深山廣谷、擬造宮殿之材、朽爛者多、遂止弗作、是冬、災飛鳥板蓋宮、故遷居飛鳥川原宮、是歲、高麗百濟新羅並遣使進調、百濟大使西部達率余宜受、副使東部恩率調信仁、凡一百餘人、蝦夷隼人率衆內屬、詣闕朝獻、新羅別以及飡彌武爲質、以十二人爲才伎者、彌武遇疾而死、是年也太歲乙卯、

式其他に見ゆ北本油の下に絹の字ありて消せり傍訓の本文となれるなるべし　○住吉松嶺、住吉は攝津國住吉なり嶺は嶺と云に同じ集解に此字を削り皇圓略記無蓋與葛城嶺之嶺相涉加耳と云　○西向、中本向西とあり　○設、アヘタマフと訓むべし饗應し給ふを云　○柵養、柵にて養はるゝ蝦夷を云　○津刈蝦夷、夷は原本蛾に作る北本楓本中本に據て改む今の陸奥國津輕の邊に住みし蝦夷なり　○造起宮闕、小墾田宮は推古紀皇極紀にも見えたれば此は造り改め給へるなるべし　○擬將瓦覆、上古は皇宮と雖も茅葺にて板蓋は稀しかりし故に板蓋宮と宮號にも用ひられしが更に寺院の如く瓦葺にさせ給はむとし給ひしなり　○飛鳥川原宮、孝德紀に見ゆ高市郡なり　○(注)百濟大使云々、細注廿三字本文とすべきか西部東部は附錄に見ゆ　○率衆內屬、畿內に移住するを云　○及飡、中本及を汲に作る新羅官等の名附錄に見ゆ　○太歲、原本太を大に作る例に據て改む

【二年】(注)大使云々、此細注も本文とすべきなり　○磐鍬、五年紀に石布とあり　○犬上君、原本犬を大に作る應本中本に據て改む　○大藏衣縫造、姓氏錄に見えざれど內藏氏と同族なること古語拾遺にて明かなり錄有京諸蕃に內藏宿禰坂上大宿禰同祖都賀直四世孫東人直之後也と

(丙辰)二年秋八月癸巳朔庚子、高麗遣達沙等進調、大使達沙、副使伊利之、總八十一人、九月、遣高麗大使膳臣葉積、副使坂合部連磐鍬、大判官犬上君白麻呂、中判官河內書首闕名小判官大藏衣縫造麻呂、是歲、於飛鳥岡本更定宮地、時高麗百濟新羅、並遣使進調、爲張紺幕於此宮地而饗焉、遂起宮室、天皇乃遷、號曰後飛鳥岡本宮、於田身嶺冠以周垣、田身山名、此云大嶺、復於嶺上兩

あり衣縫は集解に按應神天皇四十一年阿智使主奉詔往吳國挙工女吳衣縫蚊屋衣縫祖等而來是所以大藏氏爲衣縫造也とあり

○飛鳥岡本、大和國高市郡高市村大字岡是なり

○紺幕、紺は深縹なり幕は抄調度部屏障具に幕和名萬玖幄和名阿計波利とあれど此には幕をアケハリと訓たりアケハリは揚張にて平張に對する名なり

○田身嶺、多武峯なり大和國十市(今磯城)郡にあり

○(注)大務、考本大を太に作る

○兩槻、フタツキは誤れり靈異記に双槻を奈彌つ紀と訓めば之に從ふべし

○兩槻宮、大和志に十市郡兩槻宮多武峯西北有レ地名根槻卽此とあり

○石上山、是を山邊郡なる石上とすれば地理懸隔せり五郡神名帳略解石寸水分神社の下に大和國山川名所記を引きて石寸(イハレ)山亦曰石村(イハレ)山多武峯西並在香山南東齊明紀所載天皇使水工穿渠自香山西至石上(訓石上云伊波加美)山是也とあり信ど難き事ある書なれど暫くこに據る

○功夫、原本功を切に作る北本楓本中本に據て改む

○山椒、スヱは末なり山頂を云文選月賦に山頂曰椒とあり

○作吉野宮、吉野山には應神天皇雄略天皇の行幸ありしこと見ゆ大和志に行宮五所一池田莊麻志口村(雄略天皇行幸)一在大瀧村一在宮瀧村一在下市村又御吉野村とあり

槻樹邊起觀、號爲兩槻宮、亦曰天宮、時好興事、迺使水工穿渠、自香山西至石上山、以舟二百隻載石上山石、順流控引於宮東山、累石爲垣、時人謗曰狂心渠損費功夫三萬餘矣、費損造垣功夫七萬餘矣、宮材爛矣、山椒埋矣、又謗曰作石山丘、隨作自破、若據未成之時作此謗乎、又作吉野宮、西海使佐伯連栲繩、闕位階級小山下難波吉士國勝等、自百濟還獻鸚鵡一隻、災岡本宮、

【三年】觀貨邏國、孝德紀白雉五年に見ゆる吐火羅國に同じ

○男二人、原本二を一に作る北本應本楓本に據て改む

○海見嶋、天武紀に阿麻彌文武紀に菴美元明紀に南島菴美とあり南嶋志に大島在德島東北十八里琉球北界也(續文獻通考

(丁巳)三年秋七月丁亥朔己丑、覩貨邏國男二人女四人漂泊于筑紫、言、臣等初漂泊于海見嶋、乃以驛召、辛丑、作須彌山像於飛鳥寺西、且設盂蘭盆會、暮饗覩貨邏人、或本云、吐羅人、九月、有間皇子性黠陽狂云々、往牟婁溫湯僞療病、來蕩國體勢曰、纔觀彼地、病自蠲消云々、天皇聞悅、思欲往

謂之琉球北山（是也）國史所謂阿麻彌島或作奄美或作奄美並皆謂此阿麻彌者上世神人名也云々後稱爲大島其周廻五十九里十町とあり今大隅國大島郡首島たり　○孟闌弘會、翻譯名義集四に孟闌西域之語轉此翻倒懸（益是此方貯食之器三藏云盆羅百味式貫二尊仰大衆之恩光救到懸之窘急義當救到懸器）とあり弘は盆と通す　○觀貨羅人、原本觀を都に作る中本に據て改む　○有間皇子、孝德天皇の皇子　○性黠陽狂云々、云々は事實を記さむとして除かれたるなるべしウホリクルヒはウハベクルヒにて表面狂はしき意なるべし　○牟婁温湯、紀伊國牟婁郡（今西牟婁郡瀬戸鉛山村湯崎）にあり　○間人連、推古紀十八年に間人連鹽蓋と見ゆ　○依網連、推古紀十六年に見ゆ　○還歸、楓本歸を鄉に作る　○津臣、津連津宿禰等と同じく王辰爾の子孫ならむか　○傴僂、通證に俱豆麻未詳今俗謂之背虫新猿樂記訓久々世蓋曲背ゝセ也左傳一命而僂再命而傴六書故曲背也とあり曲津身、クツマの義なるべし　○白狐、治部式に白狐を上瑞とす

觀、是歲、使使於新羅曰、欲將沙門智達、間人連御廐、依網連稚子等、付汝國使令送到大唐、新羅不肯聽送、由是沙門智達等還歸、西海使小花下阿曇連頰垂、小山下津臣傴僂、傴僂、此云俱豆麻、自百濟還、獻駱駝一箇、驢二箇、石見國言、白狐見、

【四年】德太臣、原本太を大に作る北本に據て改む補任に在官十年歲六十六とあり　○阿倍臣、注に闕名とあれど下文越國守阿倍引田臣比羅夫とあり倍は原本に陪に作る中本及紀略に據て改む　○齶田、抄國郡部に出羽國秋田郡阿伊多是なり上代にはアギタと濁音に唱へしが後に秋田と清音に唱ふるに至れり　○渟代、今羽後國山本郡に能代港あり此の邊を云しなるべし郡領とあれど

四年（戊午）春正月甲申朔丙申、左大臣巨勢德太臣薨、夏四月、阿倍臣闕名率船師一百八十艘伐蝦夷、齶田渟代二郡蝦夷望怖乞降、於是勒軍陳船於齶田浦、齶田蝦夷恩荷進而誓曰、不爲官軍、故持弓矢、但奴等性食肉故持、若爲官軍、以儲弓矢、齶田浦神知矣、將清白心仕官朝矣、仍授恩荷以小乙上、定渟代津輕二郡、遂於有間濱召聚渡嶋蝦夷等、大饗而歸、五月、皇孫建王八歲薨、今城谷上起殯而收、天皇本以皇

孫有順而器重之、故不忍哀傷慟極甚、詔群臣曰、萬歲千秋之後、要合葬於朕陵、輙作歌曰、伊磨紀那屢、乎武例我禹杯爾、倶謨娜尼母、旨屢倶之多多婆、那爾柯那磑柯武、一、伊喩之々乎、都那遇何播杯能、倭柯短婆能、倭柯倶阿利岐騰、阿我謨婆儺倶爾、二、阿須箇我播、瀰儺蟻羅毗都都、喩短瀰都能、阿比娜謨儺倶母、於母保喩屢柯母、三、天皇時々唱而悲哭、秋七月辛巳朔甲申、蝦夷二百餘、詣闕朝獻、饗賜贍給有加於常、仍授柵養蝦夷二人位一階、渟代郡大領沙尼具那小乙下、或本云、授位二階使檢戸口、少領宇婆左建武、勇健者二人位一階、別賜沙尼具那等鮹旗廿頭、皷二面、弓矢二具、鎧二領、授津輕郡大領馬武大乙上、少領青蒜小乙下、勇健者二人位一階、別賜馬武等鮹旗廿頭、皷二面、弓矢二具、鎧二領、授都岐沙羅柵造位二階、判官位一階、授渟足柵造大伴君稲積小乙下、又詔渟代郡大領沙奈具那、檢覈蝦夷戸口、與虜戸口、是月、沙門智通、智達、奉勅乘新羅船往大唐國、受無性衆生義於玄奘法師所、冬十月庚戌

渟代と云郡名は延喜式に見えず古くありて後に廢れしなるべし

○勒軍、原本勒を勤に作る北本中本に據て改む

○鶴田浦神、神祇志料に今秋田郡小繋村にあり七座神社と云卽此神なりと云

○有間濱、陸奥國津輕郡西濱北濱の地か

○渡嶋、今の北海道を云一說には鮫澤港十三浦小泊等に擬すべしとも云持統紀に越渡嶋蝦夷とあるも同じ

○建王、天智天皇の皇子

○宇城谷上、大和志に建王墳冢今曰法具良冢云々在宇木村とあり今吉野郡大淀町の大字に今木あり是なり

○轍、北本中本廻に作る

○伊磨紀那屢云々、乎武例は山名大和志に吉野郡今木村上方有乎武例山廻隈葛城郡とあり一說に樹群が上になりとも云旨屢倶之多々婆、原本屢を居に作る北本應本楓本に據て改む著しく立たばなり一首の意は御孫を葬りし山上にせめて雲なりとも著しく立たば形見と

見て慰めむとなり
○伊喩之々乎云々、伊喩之々は私記に言「被」射之鹿」也とあり都那遇は繋なり繋とは獵夫に射られし猪鹿の逃げ走りて河邊の若草を喰みそれに繋がるゝを云又認の字を字鏡集字類抄等にツナグと注せる其意なりとも云初句より三句若草のまでは若くと云む序に置きしなり倭柯倶阿利岐騰の騰は原本謄に作る北本楓本中本に據て改む一首の意は私記に我孫幽雖「童稚」有「老成之意」故彌追感慕乎とあるが如し
○阿須箇我播云々、瀰儺蟻羅毗は漲るなりキラヒはキルの延びたるなり一首の意は飛鳥川の水烟を立てゝ勢よく流行く水の絶間なきが如く間斷なく御孫の上を思はせ給ふとなり

(七月)蝦夷、原本夷を蛾に作る諸本に據て改む
○贍給、原本贍を瞻に作るを訂す
○(注)或本云、原本本を閲するに所に作る北本を閲するに所の字の轉訛せしなるべし故に釋紀一本及集解に

朔甲子、幸紀溫湯、天皇憶皇孫建王、愴爾悲泣、乃口號曰、耶麻古曳底、于瀰倭拖留騰母、於母之樓枳、伊麻紀能禹知播倭須羅庾麻旨珥、一、瀰儺度能、于之哀能知、娜利、于那倶娜梨、于之廬母倶例尼、飫岐底舸庾舸武、其二、于都倶之枳、阿餓倭柯枳古弘、飫岐底舸庾舸武、其三、詔秦大藏造萬里曰、傳斯歌勿令忘於世、十一月庚辰朔壬午、留守官蘇我赤兄臣、語有間皇子曰、天皇所治政事有三失矣、大起倉庫積聚民財、一也、長穿渠水損費公糧、二也、於舟載石運積爲丘、三也、有間皇子乃知赤兄之善己而欣然報答之曰、吾年始可用兵時矣、甲申、有間皇子向赤兄家、登樓而謀、夾膝自斷、於是知相之不祥、俱盟而止、皇子歸而宿之、是夜半赤兄遣物部朴井連鮪、率造宮丁圍有間皇子於市經家、便遣驛使奏天皇所、戊子、捉有間皇子與守君大石、坂合部連薬、鹽屋連鰤魚、送紀溫湯、舍人新田部連米麻呂從焉、於是皇太子親問有間皇子曰、何故謀反、答曰、天與赤兄知、吾全不解、庚寅、遣丹比小澤連國襲、絞

據て改む
○述武、北本の武は字體辨じ難きも武に非ず楓本は戊に作る
○鮹旗、釋紀に私記云師說未詳其躰師後說云今現在此旗之頭如鮹故名とあり
○沙尼具那、北本那を娜に作る
○都岐沙羅柵、地理を按ずるに渟足磐船の柵より津輕に至る沿岸の地なること明なれど何所とも定め難し越後出羽との境なる念種關かと云說ありよく考ふべし
○沙奈具那、上文に奈を尼に作る
○掩覆、原本覆を覆に作る中本に據て改む
○習通、元亨釋書に見ゆ
○智達、上に出づ
○無性衆生義、通證に元亨釋書作「唯識楞嚴經偈云諸幻成無性」六祖壇經曰無性亦無生とあり
○々非、翻譯名義集一に河南洛陽人俗姓陳氏潁川陳仲弓之後云々既展梵境壽諸無倦云々畢究其妙」法師討論一十七周遊覽百有餘國一貞觀十九年廻「靺上京勅弘福寺翻譯

有間皇子於藤白坂、是日、斬鹽屋連鯛魚、舍人新田部連米麻呂於藤白坂、鹽屋連鯛魚臨レ誅言、願令右手作國寶器、流守君大石於上毛野國、坂合部連藥於尾張國、

或本云、有間皇子與蘇我臣赤兄、鹽屋連小戈、守君大石、坂合部連藥、取短籍卜謀反之事、或本云、有間皇子曰、先燔宮室、以五百人、一日兩夜、邀牟婁津、疾以船師斷淡路國、使如牢固、其事易成、或人諫曰、不可也、所計既然而无德矣、方今皇子年始十九、未及成人、可至成人而待其德、他日有間皇子與一判事謀反之時、皇子案机之脚、无故自斷、其謨不止、遂被誅戮也、

是歲、越國守阿倍引田臣比羅夫討肅慎、獻生羆二、羆皮七十枚、沙門智踰造指南車、出雲國言、於北海濱魚死而積、厚三尺許、其大如鮐、雀喙針鱗、々長數寸、俗曰、雀入於海化而爲魚、名曰雀魚、或本云、至庚申年七月、百濟遣使奏言、大唐新羅并力伐我、既以義慈王、々后太子爲虜而去、由是國家以兵士甲卒陣西北畔、繕修城柵、斷塞山川之兆、又西海使小花下阿曇連頰垂自百濟還言、百濟伐新羅還、時馬自行道於寺金堂、晝夜勿息、唯食草時止、本或云、至庚申年爲敵所滅之應也、

と見ゆ　(十月)耶麻古曳而云々、於母之樓枳は懐しく墓はしき意伊麻紀能禹知は建王の墓所云原本倭須羅庚麻旨珥の庚を庚に旨を百に作る北本中本と見ゆ　(十月)耶麻古曳而云々、於母之樓枳は懐しく墓はしき意伊麻紀能禹知は建王の墓所云原本倭須羅庚麻旨珥の庚を庚に旨を百に作る北本中本に據て改む又珥を中本耳に作る一首の意は山を越え海を渡りて遠く距ても懐かしく墓はしき建王の事は忘られずとなり　○瀰儺度能云々、于之裒能矩娜利は引く潮に船を下すを云于那倶娜梨は海下りにて潮の下りと云も同じく紀國へ大御母の下り行きますを云原本于之盧母倶例尼の例を側に作る北本應本楓本に據て改む後のことの氣遣しく心にかゝるを云原本飫岐底舸庚舸武の舸を婀に庚を庚に作る舸は中本に據り庚は北本楓本に據て改む建王を今城に置きて遠く行くべきやは行きかぬるとなり　○于都倶之枳云々、以下三句は上の句の意を繰返して歌へり　○秦大藏造、秦氏にて大藏を掌る故に秦大藏造と云錄左京諸蕃に秦長藏連見ゆ同氏なり　(十一月)留守官、行幸中京に留まりて之を守る官なり此に始めて見ゆ　○蘇我赤兄臣、雄正の子にて馬子の孫なり　○吾年始可用兵、吾年齢始めて兵を用ふべきに達せりとなり皇子此時御年十九歲に成りませり　○爽膝、抄調度部坐臥具に几西京雜記云漢制天子玉几公侯皆以竹木爲几(和名於之(萬都岐今案几屬又有脇息之名云々)とありオシマツキは押座机(オシマシツキ)なりと云脇息も同物にて座側に置き臂をかけて休むる具なり　○物部朴井連鮪、孝德紀大化元年に鮪を椎子とせり　○市經家、大和志に平群郡一分村(今生駒郡南生駒村大字一分)　○守君、景行紀四十年に見ゆ　○坂合部連、合の字は北本中本に據て補ふ　○鹽屋連、孝德紀大化二年に見ゆ　○新田部連米麻呂、連は釋紀及下文に據て補ふ原本米を未に作る北本中本に據て改む下同じ錄左京皇別に新田部宿禰安寧天皇皇子磯城津彦之後也天武紀十三年新田部連賜姓曰宿禰とあり　○謀反、原本反を人に作る諸本に據て改む　○天與赤兄知、天神と赤兄と知れるのみにて吾は全く知らずとなり此事情は赤兄の最もよく知れる所なれば同人に聞くべしと云ひ赤兄にそゝのかされしことを悟られしなるべし　○丹比小澤連、大化二年紀に見ゆ錄河內神別に丹比連火明命之後也とあり小澤連も同族なるべし　○藤白坂、紀伊郡海部郡にあり今海草郡內海町大字藤白あり此地なり　○作國寶器、米麻呂技工に巧みなりしかば右手を存し寶器を作らしめよとなるべし　○坂合部連、原本連の字を脫す上文に據て補ふ

【注】小戈、大日本史に小代に作る戈は代の誤かと思へど姑く舊に從ふ　○守君、君の字は北本中本に據て補ふ　○短籍、ヒネリブミは拈り文なり通證に此今俗所謂楪籤也とあり　○牟婁津、紀伊國西牟婁郡田邊町ならむ津とあれば船舶の停泊すべき地なるが他に良港なければ此處なるべし　○使知牢固、一方には牟婁津を遮り一方には船師を遣して淡路國を占領すれば牟婁湯は兵器糧食を得る由なく獄舍に同じとなり　○待其德、原本待を得に作る北本應本中本に據て改む　○他日、原本日を日に作る北本應本中本に據て改む　○一判事、判事は刑部省に屬する職名なれどこゝはそれにはあらで事を判定する人の意ならむ敷田氏の說には蘇我赤兄を指し當時此人判事なりしにやと云り　○自禱、原本自を旨に作る諸本に據て改む(以上注)　○越國守、原本越を起に作る北本應本中本に據て改む　○阿倍引田臣、原本阿を河に倍を部に作る中本に據て改む阿倍臣は孝元紀に見え引田は大和國城上郡乘田(ヒキダ)神社あれば其處の地名なり　○鼎懼、欽明紀五年に見ゆ　○羆、抄毛群部に爾雅集注云羆(和名之久萬)似熊而黃白又猛烈多力能拔樹木者也とあり　○沙門智踰云々、天智紀五年にも沙門知由獻指南車とあり指南車は鬼谷子謀篇に鄭人之取玉也載司南之車爲其不惑也と見え古今注に指南車起黃帝舊說周公所作也周公治致太平越裳氏重譯來貢使者迷其歸路周公錫以輧車五乘皆爲司南之制使越裳氏載之以南暮年而至其國(節略)とあり　○鮐、抄鱗介部に鱣魚文字集略云鱣和名衣比(似鱣而青長鼻骨者也とあり然るに箋注に之を誤とし韶陽魚(古米)味甘小冷貌似鱉而無用曰在腹下者也とある是なりと云　○雀魚、通證に松岡翁曰雀魚即本草所謂海牛也今按雀魚東海希有之狀類雀而首短額有一小角尾向上而四鰭腹背方而四稜無鱗如鮫皮而成龜甲紋其色灰色大不過三四寸也とあり　○(注)庚申年、六年なり　○義慈王云々、義慈王以下俘虜となりし事六年の紀に詳なり　○陣、楓本中本陳に作る　○之兆、中本兆の下也の字を補ふ　○頰垂、三年百濟より歸りしこと前に見ゆ其後更に遣されしなるべし　○行道、佛を敬禮する爲に其周圍を往廻るを云馬が其如くに金堂の周圍を廻りしなり

【五年】吉野、萬葉の注に引けるには野の下宮の字あり

五年春正月己卯朔辛巳(三)、天皇至(テ)自紀温湯、三月戊寅朔(二)、天皇幸(テ)吉野(ニ)而

○肆宴、字書に肆は放也恣也とあり心のまゝに打寛ぎて宴する意
○平浦、近江國滋賀郡にあり
○甘檮丘、允恭紀四年に味橿丘とあり大和國高市郡なり
○越蝦夷、原本夷を蝦に作る北本楓本中本に據て改む下同じ中本奥の下に蝦夷の二字あり
○膽振鉏、詳ならず
○綵帛、神功紀四十六年に見ゆ
○肉入籠、詳ならず
○後方羊蹄、北海道志に後志國本洲ノ山鎮ヲ後方羊蹄ト曰フ往昔齊明天皇五年阿倍比羅夫政所ヲ建テ郡領ヲ置シ所ナリと云又陸奥國東津輕郡青森堤川の東方に松森村あり此地方こそ昔時よりシリベチと稱して阿倍臣の政所を置きし所なれと云說あれど同名異地なるべし
○(注)蝦夷郡乎、伴信友氏の說に郡乎は郡家の誤ならむとありさも有べし
○主政、抄職官部に判官郡曰二主政一萬豆利古止比止とあり
○七月、原本月の下朔の

肆宴爲、庚辰、天皇幸近江之平浦、平、此云十毗羅、丁亥、吐火羅人共妻舍衛婦人來、甲午、甘檮丘東之川上、造須彌山而饗陸奥與越蝦夷、檮、此云柯之川上、此云箇播羅、是月、遣阿倍臣、闕名率船師一百八十艘討蝦夷國、阿倍臣簡集飽田渟代二郡、蝦夷二百四十一人、其虜卌一人、津輕郡、蝦夷一百十二人、其虜四人、膽振鉏蝦夷廿人於一所、而大饗賜祿、膽振鉏、此云伊浮梨娑陛、卽以船一隻、與五色綵帛、祭彼地神、至肉入籠、時問瓮蝦夷膽鹿嶋、瓮穗名二人進曰、可以後方羊蹄爲政所焉、肉入籠、此云之之梨姑、問瓮、此云塗毗宇、瓮穗名、此云宇保那、後方羊蹄、此云斯梨蔽之、政所、蓋蝦夷郡乎、隨膽鹿嶋等語、遂置郡領而歸、授道奥與越國司位各二階、郡領與主政各一階、或本云、阿倍引田臣比羅夫與肅愼戰而歸、獻虜卌九人、秋七月丙子朔戊寅、遣小錦下坂合部連石布、大山下津守連吉祥、使於唐國、仍以道奥蝦夷男女二人示唐天子、

伊吉連博德書曰、同天皇之世、小錦下坂合部石布連、大山下津守吉祥連等二船、奉使吳唐之路、以己未年七月三日、發自難波三津之浦、八月十一日、發自筑紫大津之浦、九月十三日、行到百濟南畔之嶋、々名毋分明、以十四日寅時、二船相從放出大海、十五日日入之時、石布連船、橫遭逆風、漂到南海之嶋、々名

字あるは衍北本應本に據て削る
○石布、續紀十九に坂合部宿禰石敷に作る
○大山下、原本山を仙に作る北本引一本及小寺本に據て改む
○道奥、原本道の上に陸の字あり北本應本楓本に據て削る
○示唐天子、唐書日本傳に天智立明年使者與蝦夷人皆朝云々とある或は是と同じきか
（注）吳唐之路、通證に以三國鼎立之遺名一併稱之也とあり敷田氏は吳は我に近き地なれば唐に加へて吳唐とは書きしにやと云
○己未年、五年なり
○三津浦、仁賢紀六年に御津に作る
○大津之浦、筑前國博多津なり下文娜大津とあるに同じ
○母分明、私記に母無也とあり分明ならざるを云
○爾加委、詳ならず
○漢長直、皇極紀三年（一六三頁）に見ゆ
○稻積、白雉四年に磐積とあり
○括州、唐書地理志に江

爾加委、仍爲嶋人所滅、便東漢長直阿利麻、坂合部連稻積等五人、盜乘嶋人之船、逃到括州、々縣官人送到洛陽之京、十六日夜半之時、吉祥連船、行到越州會稽縣須岸山、東北風、風太急、廿三日、行到餘姚縣、所乘大船及諸調度之物留着彼處、閏十月一日、行到越州之底、十五日、乘驛入京、廿九日、馳到東京、天子在東京、卅日、天子相見問訊之、日本國天皇平安以不、使人謹答、天地合德、自得平安、天子問曰、執事卿等好在以不、使人謹答、天皇憐重亦得好在、天子問曰、國內平不、使人謹答、治稱天地、萬民無事、天子問曰、此等蝦夷國有何方、使人謹答、國有東北、天子問曰、蝦夷幾種、使人謹答、類有三種、遠者名都加留、次者麁蝦夷、近者名熟蝦夷、今此熟蝦夷每歲入貢、本國之朝、天子問曰、其國有五穀、使人謹答、無之、食肉存活、天子問曰、國有屋舍、使人謹答、無之、深山之中止住樹本、天子重曰、朕見蝦夷身面之異、極理喜怪、使人遠來辛苦、退在館裏、後更相見、十一月一日、朝有冬至之會、々日亦覲、所朝諸蕃之中、倭客最勝、後由出火之亂、棄而不復撿、十二月三日、韓智興傭人西漢大麻呂扛讒我客、々等獲罪唐朝、已決流罪、前流智興於三千里之外、客中有伊吉連博德奏、因卽免罪、事了後勅旨、國家來年必有海東之政、汝等倭客不得東歸、遂逗西京、幽

置別處、閉戸防禁、不許東西、困苦經年、難波吉士男人書曰、向大唐大使、觸嶋而覆、副使親覲天子、奉示蝦夷、於是蝦夷以白鹿皮一、弓三、箭八十、獻于天子、

十五庚寅、詔群臣、於京内諸寺、勸講盂蘭盆經、使報七世父母、是歲、命出雲國造、一名修嚴神之宮、狐嚙斷於友郡役丁所執葛末而去、又狗嚙置死人手臂於言屋社、言屋、此云伊浮琉、天子崩兆、又高麗使人持羆皮一枚稱其價曰、綿六十斤、市司咲而避去、高麗畫師子麻呂設同姓賓於私家、日、借官羆皮七十枚、而爲賓席、客等羞恠而退、

南道處州縉雲郡本括州永嘉郡云々大曆十四年更州名」とあり　○洛陽之京、同志に河南道東都隋置武德四年廢貞觀六年號洛陽宮顯慶二年曰東都光宅元年曰神都神龍元年復曰東都天寶元年曰東京云々とあり　○須岸山、集解に江南道越州會稽郡有南鎭會稽山有祠とあり　○廿三日、北本應本楓本中本三を二に作る　○餘姚縣、唐書地理志に江南道越州餘姚縣あり　○越州之底、集解に底疑府誤とあり　○十五日、原本十五日の上に十月の二字あり釋紀に據て削る　○東京、上の洛陽之京の注下に出づ　○問訊之、原本訊を說に作る北本應本に據て改む　○治稱、原本稱を講に作る中本及釋紀に據て改む　○麁蝦夷、未だ内地の風に慣れず皇化に順はぬものを云　○熟蝦夷、皇化に順ひ内地の風に慣れたる者を云　○國有屋舍、北本國の上其の字あり　○止住樹下、原本下を本に作る北本に據て改む　○喜恠、集解喜を奇に改作る○冬至之會、朔旦冬至を賀する會なり○失火、ミヅナガレと訓るは水流にて火災を忌みたる反語なり　○韓智興、孝德紀白雉五年に見ゆ　○傔人、原本倫人に作る中本に據て改む　○大麻呂、北本大を火に作る　○海東之政、百濟を伐たむとするを云るなるべし　○逗西京、應本中本逗を匿に作る西京は唐書地理志に關内道上都初曰京城天寶元年曰西京とあり　○不許東西、私記に東西をカニカクと訓り　○經年、北本巡年に作る　○難波吉士、原本士を出に作る北本に據て改む　○觸嶋而覆、而の字は北本に據て補ふ(以上注)　○盂蘭盆經、晉竺法護譯　○七世父母、盂蘭盆經に見ゆ漢土七世廟の說を取りて造れる佛說かと伴信友氏云り　○修嚴神之宮、舊讀誤れり神の宮を莊嚴にすべしとの意神之宮は出雲大社なり　○於友郡、出雲國意宇郡なり友は子の誤なるべしと敷田氏云り　○言屋社、式に意宇郡揖夜神社あり是なり　○(注)天子崩兆、集解に攙入として削る　○市司、職員令に市司正一人掌財貨交易器物直價度量輕重賣買估價禁察非違事とあり　○高麗畫師子麻呂、姓氏錄に見えず子の字は北本中本に據て補ふ　○借、原本倩に作る北本應本中本に據て改む　○客等、等の字は北本應本中本に據て補ふ

【六年】阿倍臣、原本陪に作る北本楓本中本に據て改む下同じ

六年(庚申)春正月壬寅朔、高麗使人乙相賀取文等一百餘、泊于筑紫、三月、遣

○大河側、通證に寺島氏曰蝦夷有二大河一名石刈河一急流飛レ石不レ可レ涉とあれど詳ならず
○仕宦矣、原本官に作るを北本に據て訂す宦は字書に仕也とあり
○令貪嗜、ホシメ欲しめなりツノマシを原本にツラマシと訓るはノの古體乃なるを寫誤れるにて津飲ましなるべし通證には蓋津嘗也猶言二口流涎一也と云り
○衫、抄裝束部に單衣釋名云衣無裏曰單（比止閉岐沼）と見え字書に衫は衣也また小襦也無袖端也とあり
○幣賂弁嶋、注に度嶋之別也とあり別なりとは別嶋の意なるべし
○能登臣、記に崇神天皇々子大入杵命能登臣之祖也とあり
○賊破、原本破を被に作る北本應本中本に據て改む通釋信友校本に據て賊の上に爲の字を補るは非なり
○高座、抄調度部伽藍具に高座仁王經云述二百高座一と見え圖書寮式に高座の用具を詳に擧ぐ

阿倍臣（闕名）率二船師一百艘一、伐二肅愼國一、阿倍臣以二陸奥蝦夷一、令レ乘二己船一、到二大河側一、於是渡嶋蝦夷一千餘屯聚海畔一、向レ河而營、々中二人進而急叫曰、肅愼船師多來將殺我等之故、願欲濟レ河而仕宦矣、阿倍臣遣レ船喚至兩箇蝦夷一、問二賊隱所一、與其船數、兩箇蝦夷便指二隱所一曰、船廿餘艘、卽遣レ使喚而不肯來、阿倍臣乃積二綵帛兵鐵等一於海畔一而令二貪嗜一、肅愼乃陳船師一、繫羽於木一、擧而爲レ旗、齊レ棹近來停於淺處一、從二一船裏一出二一老翁一、迴行熟視所レ積綵帛等物一、便換著單衫一、各提布一端一、乘レ船還去、俄而老翁更來脫置換衫一、并置提布一、乘レ船而退、阿倍臣遣二數船一使レ喚、不肯來、復於幣賂弁嶋一、食頃乞レ和、遂不肯聽（幣賂弁、度嶋之別也）、據二己柵一戰、于時能登臣馬身龍爲レ敵、被レ殺、猶戰未倦之間、賊破殺二己妻子一、夏五月辛丑朔戊申、高麗使人乙相賀取文等到二難波館一、是月有司奉レ勅造二一百高座一、納二袈裟一設二仁王般若之會一、又皇太子初造二漏尅一、使レ民知レ時、又阿倍引田臣（闕名）獻二夷五十餘一、又於二石上池邊一作二須彌山一、高如二廟塔一、以饗二肅愼四十七人一、又擧二國百姓一、無レ故持レ兵往還於道一、（國老言、百濟國失レ所之相乎、）秋七月庚子朔乙卯、高麗使人乙相

賀取文等罷歸、又都毗羅人乾豆波斯達阿欲歸本土、求請送使曰、願後朝於大國、所以留妻爲表、乃與數十人入于西海之路、

高麗沙門道顯日本世記曰、七月云々、春秋智借大將軍蘇定方之手、使擊百濟亡之、或曰、百濟自亡、由君大夫人妖女之無道、擅奪國柄、誅殺賢良、故召斯禍矣、可不慎歟、可不慎歟、其注云、新羅春秋智不得願於內臣蓋金、故亦使於唐捨俗衣冠、請媚於天子、投禍於隣國、而搆斯意行者也、伊吉連博德書云、庚申年八月、百濟已平之後、九月十二日放客本國、十九日、發自西京、十月十六日、還到東京、始得相見阿利麻等五人、十一月一日、爲將軍蘇定方等所捉百濟王以下、太子隆等諸王子十三人、大佐平沙宅千福國辨成以下卅七人并五十許人奉進朝堂、急引趍向天子、天子恩勅、見前放著、十九日賜勞、廿四日發自東京、

九月己亥朔癸卯、百濟遣達率、闕名沙彌覺從等來奏曰、或本云、逃來告難、今年七月、新羅恃力作勢、不親於隣、引搆唐人、傾覆百濟、君臣摠俘、略無噍類、或本云、今年七月十日、大唐蘇定方率船師軍于尾資之津、新羅王春秋智率兵馬、軍于恐受利之山、夾擊百濟、相戰三日、陷我王城、同月十三日、始破王城、恐受利山百濟之東堺也、於是西部

○納袈裟、抄調度部に納支佛三藏表云納袈裟一領納音奴答反字亦作納(俗云能不一云太比)また袈裟(俗云介佐)天竺語也此云無垢衣とあり納は納と通用す

○仁王般若之會、仁王護國般若經を講說する會なり

○漏尅、時計なり之を漏刻と稱するは晝夜十二時を四十八尅に分ち一時を四尅と定め銅壺に水を湛へ銅箭を四十八に刻みて壺中に之を立て管より水を漏し箭の顯れ出るを以て時尅を計るに因れり

○阿倍引田臣、比羅夫なり

○石上池、大和志に在山邊郡磯上村今呼大將軍池とあり

(七月)乙卯、原本己卯に作る庚子朔に己卯なし中本引一本に據て改む

○都毗羅人、原本毗を就に作る風本中本に據て訂す上に見ゆ

(注)道顯、天智紀に見ゆ當時の學僧なり

○春秋智、孝德紀大化三年に金春秋と見ゆ太宗武烈王と稱す

○借大將軍蘇定方、原本借を倩に作る北本應本中本に據て改む唐書列傳に蘇烈字定方以字行冀州武邑人云々率師討百濟とあり
○使擊百濟云々、中本使を挾に作る三國史記高麗太宗王七年百濟義慈王二十年の條に此事詳なり
○誅殺賢良、三國史記百濟義慈王十六年の條に王與宮人淫荒戕樂飲酒不止佐平成忠極諫王怒囚之獄中由是無敢言者とあり
○蓋金、天武紀三年に高麗大臣蓋金終於其國とある是なり
○庚申年、今年なり
○百濟已平、百濟義慈王の唐に降りしは七月十八日にて新羅大に置酒將士を勞せしは八月二日なり故に八月已平と云
○阿利麻等五人、五年七月の注に東漢長直阿利麻坂合部連稻積等五人とあり
○太子隆、百濟本紀には太子孝と見え隆は王子隆とあり太子は釋紀に私記曰古爾於留久古爾世之並百濟之語也とあり釋紀傍

恩率鬼室福信赫然發憤、據任射岐山、或本云、北任叙利山、達率餘自進據中部久麻怒利城、或本云、都々岐留山、各營一所、誘聚散卒、兵盡前役、故以棓戰、新羅軍破、百濟奪其兵、既而百濟兵翻銳、唐不敢入、福信等遂鳩集同國、共保王城、國人尊曰佐平福信、佐平自進、唯福信起神武之權、興既亡之國、冬十月、百濟佐平鬼室福信遣佐平貴智等、來獻唐俘一百餘人、今美濃國不破片縣二郡唐人等也、又乞師請救、并乞王子余豐璋曰、或本云、佐平貴智達率正珍也、唐人率我蛮賊、來蕩搖我疆埸、覆我社稷、俘我君臣、百濟王義慈、其妻恩古、其子隆等、其臣佐平千福國辨成孫登等、凡五十餘、於七月十三日、爲蘇將軍所提、而送去於唐國、蓋是無故持兵之徵乎、而百濟國遙賴天皇護念、更鳩集以成邦、方今謹願、迎百濟國遣侍天朝王子豐璋、將爲國主、云云、詔曰、乞師請救聞之古昔、扶危繼絶、自著恒典、百濟國窮來、歸我以本邦喪亂靡依、靡告、枕戈嘗膽、必存矜救、遠來表啓、志有難奪、可分命將軍百道俱前、雲會雷動、俱集沙喙、翦其鯨鯢、紓彼倒懸、宜有司具爲與之、以禮發遣云云、送王子豐璋及妻子與其叔父忠勝等、其正發遣之時、見于七年、或本云、天皇立豐璋爲王、立塞上爲輔、而以禮發遣焉、十二月丁卯

訓はコニセシムと訓り
○諸王子、子の字は釋紀に據て補ふ
○沙宅、姓なるべし
○千福國辨成、舊點に千福國辨成とあれど唐書三國史記等に千福と見えて國の字なしされば千福、國辨成と句讀すべきかされど國辨成もいかゞなり國は誤字か或は國の上下に脫字にてもあらむか
○奉進朝堂、唐書高宗紀に顯慶五年十一月戊戌蘇定方俘百濟王一以獻とあり
○恩勅、原本恩を息に作る北本應本中本に據て改む　○見前放者、東國通鑑に顯慶五年十一月蘇定方以義慈等一見帝責而宥之とあるを云　（九月）沙彌、名義集一に南山沙彌別行篇云此翻息慈謂息世染之情以慈濟群生也音義云沙彌二字古訛略也唐三藏云室利摩拏路迦此翻勤策男寄歸傳云授十戒已名室羅末尼譯爲求寂元亨釋書に國俗不全梵儀有妻子者在家稱沙彌云々とあり　○引攜、キイアハセテは率ゐ合せての意イは添へていふ辭　○（注）大唐蘇定方、中本蘇の上に大將軍の三字あり　○軍于尾資之津、百濟の屎山郡馬西良縣今の全羅北道沃溝郡舊邑面沃溝に近き海岸なるべし于の字は北本應本中本に據て補ふ　○恐受利山、下文に百濟の東堺とあり三國史記に開唐羅兵已過白江炭峴遣將軍堦伯帥死士五千出黃山與羅兵一戰四合皆勝之兵寡力屈竟敗堦伯死之とある炭峴是にて慶尙忠淸兩道の境なる秋風嶺なるべし　○東堺、原本堺を境に作る北本應本楓本に據て改む（以上注）　○西部、部曲の名　○恩率、官號なり　○鬼室福信、鬼室は氏の名なり錄右京諸蕃に百濟公因鬼神感和之義命氏謂鬼室廢帝天平寶字五年改賜百濟公姓とあり福信は史記に武王從子福信と見ゆ　○任射岐山、通證に東國通鑑所謂任存城山と云り忠淸道に在り　○（注）北任叙利山、原本叙を劍に作る北本中本に據て改む　○久麻怒利、通證に東國通鑑作熊津城とあり　○兵盡前役、兵器は前の役に盡きはてたりとなり　○棓、握之木の意手に握るばかりの木を云字書に棓は棒本字謂木杖也棒は杖也打也とあり　○百濟兵、原本百の字なし中本に據て補ふ　○尊曰、原本曰を月に作る應本中本に據て改む
（十月）片縣、抄國郡部に方縣に作る　○余豐璋、原本璋を障に作る中本及下文に據て改む　○（注）正珍、原本珍を改に作る北本應本中本に據て改む
○（注）其臣佐平、原本臣を巨に作り其下に王の字あり中本に據て訂す　○千福、原本及應本千を子に誤る北本中本に據て改む　○於七月、原本於の上に秋の字あり北本應本に據て削る（以上注）　○自著恒典、原本自著を倒置す小寺本に據て改む　○橡、通證に攝當作樣といひ集解には橡に改めたれど名義抄に橡俗歟スクフ、タスクとあり字類抄にも此字を舉げたれば舊に從て改めず　○沙喙、東國通鑑自沙に作れり　○翦其線鯢、原本線を縣に作る北本應本中本に據て改む線鯢は左傳の注に大魚之名以喩不義之人吞食小國とあり百濟を亡したる新羅を討伐するを云　○紓彼倒懸、孟子の注に倒懸猶困苦とありて百濟の困苦を緩め紓べむとなり紓は原本に緯とあれど緯は厚糾也と云へば改む紓は說文に緩也とあり　○具爲與之、

朔庚寅、天皇幸于難波宮、天皇方隨福信所乞之意、思幸筑紫、將遣救軍、而初幸斯備諸軍器、是歲、欲爲百濟將伐新羅、乃勅駿河國造船、已訖挽至績麻郊之時、其船夜中無故艫舳相反、衆知終敗、科野國言、蠅群向西飛踰巨坂、大十圍許、高至蒼天、或知救軍敗績之恠、有童謠曰、摩比邏矩都能、俱例豆例、於能幣陀乎、邏賦俱能理歌理鵝、美和陀騰能理歌、美烏能陛陀烏、邏賦俱能理歌理鵝、甲子騰和與騰美、烏能陛陀烏、邏賦俱能理歌理鵝、

中本爲を備に作る　○(注)忠勝、孝德紀白雉元年に百濟君豐璋其弟塞城忠勝と有　○塞上、皇極紀元年に塞上恒作レ惡とあり塞城忠勝と同人ならむ

(十二月)績麻郊、詳ならず績を北本應本楓本續に作る續績通用す　○科野國、信濃國なり　○巨坂、信濃國より美濃國惠奈郡に越る坂なり　○有童謠、此童謠はいと解き難し釋紀には初句より一字毎に一二三の符號を附け其符號によりて語を整へて之を解說せり然るに契沖以後之を非なりとして文字を轉到せず其儘にて解釋を試みたる人少からず契沖を始め荷田東滿伴信友橘守部等の諸氏は何れも文字のまゝに解釋せらる契沖の說は通證に、羽倉翁の說は集解に、伴氏の說は比古婆衣に、守部氏の說は稜威言別雜語考に見えたり然るに本居宣長翁は釋紀の轉到して讀るも由ありとて大體は之に據り甲子とあるが童謠の讀み初めなりとて解釋を試みられ其說は玉勝間三に見えたりされど之も穩當ならねば伴信友氏も之を信ぜずして別に比古婆衣に說を擧げ敷田氏の標注も同じく倒讀を排して文字のまゝに說き試み通釋には守部の說優れたりとて之に據りて解釋したれど解き得たりとも思はれず一々之を擧るは煩に堪へざれば主として釋紀の說を揭ぐ　○麻比邏矩都能、私記にツマヒラクノと讀み妻開也と云　○倶例豆例、ツクレレと讀み作也言ニ女之田作一也と云　○於能幣陀乎、原本能を社に作る北本中本に據て改むチノタヘチと讀み謂ニ小野田一と云　守部は於は弘の誤にて尾上田なりと云　○邏賦倶能理歌理鵝、カリカリノクラフと讀み雁々之食也と云守部も亦同じ　○美和陀騰能理歌、ミトワタノカリと讀み所名也雁也と云　○美烏能陛陀烏、チミノタヘと讀み謂ニ女田一也と云　此句は契沖の說に美を上の句につけ尾上田と解けり　○邏賦倶能理歌理鵝、カリカリノクラフと讀み雁々之食也と云　○甲子、私記曰義不ニ逆語一甲子謂ニ太子一也太子者諸子之長也故云ニ甲之子一也和興者吾也と云り玉勝間に此二字は次句より讀始むべき事を知らせたる標なりと云り　○美烏能陛陀烏、チミノタヘチと讀み謂ニ女田一也とあれど是も美は上の句に附け尾上田なと解くを可とす原本陛を階に作る北本應本中本に據て改む　○邏賦倶能理歌理鵝、前と同じくカリカリノクラフと讀み雁々之食也と云かくて一首の大意を述て齊明女帝也仍以ニ天下一喻ニ女之作田一如ニ鴈之食ニ稻實一了ヨ不祥遣ニ百濟救軍之事可ニ敗績之童謠也と云

【七年】大伯海、抄國郡部に備前國邑久郡於保久と見え國造本紀に大伯國造あり大伯は之に同じ　○大田姬皇女、天智天皇の皇女にて天武天皇の妃　○大伯皇女、天武天皇の皇女なり本紀に大來に作る　○石湯行宮、伊豫國溫泉郡にあり石湯は今の道後溫泉是なり

(三月)娜大津、原本娜を娜に作る中本に據て改む筑前國那珂郡にあり今の博多津なり　○磐瀨行宮、左馬寮式に筑前國驛馬石瀨五疋とあ

(辛酉)七年春正月丁酉朔壬寅、御船西征、始就ニ于海路一、甲辰、御船到ニ于大伯海一、時ニ大田姬皇女產レ女焉、仍名ニ是女一曰ニ大伯皇女一、庚戌、御船泊ニ于伊豫熟田津石湯行宮一、爾枳陀豆、三月丙申朔庚申、御船還至ニ于娜大津一、居ニ于磐瀨行宮一、天皇改ニ此名一曰ニ長津一、夏四月、百濟福信遣ニ使上レ表、乞ニ迎其王子糾解一、釋道顯日本世記曰、百濟福信獻書祈ニ其君糾解於東朝一、或本云、四月、天皇遷ニ居于朝倉宮一、五月乙未朔癸卯、天皇遷ニ居于朝倉橘廣庭宮一、是時、斬ニ除朝倉社木一、而作ニ此宮一之、故神忿壞ニ殿、亦見ニ宮中一鬼火一、由ニ是大舍人及諸近侍病死者衆、丁巳、耽羅始遣ニ王子阿波伎等一

り遠賀郡にあり
○(注)日本世記、原本記を紀に作る北本應本中本に據て改む
○東朝、我皇國を指す
(五月)朝倉橘廣庭宮、抄國郡部に筑前國下座郡下郡安佐久良上座准上とあり始め朝倉と云しを後に上下に分けて座の一字に古名を負せたり橘も地名なるべし
○朝倉社、神名式上座郡麻氏良布神社なるべし
○亦見宮中鬼火、原本宮及鬼火の二字なし中本及紀略に據て補ふ北本傍書火を女に作る
○大舍人、原本舍を倉に作る北本應本中本に據て改む
○耽羅、繼體紀二年に見ゆ
(注)辛酉年、今年なり
○越州、前に餘姚縣とあり邊にて今の紹興府なり
○檀岸山明、檀岸山は詳ならず明は釋紀に明讀南也とあり
○八夜、原本八を入に作る北本楓本中本に據て改む九日と八夜の意
○皇漢草直、釋紀に私記曰草讀加也人姓也とあれ

貢獻、

伊吉連博得書云、辛酉年正月廿五日還到越州、四月一日、從越州上路東歸、七日行到檉岸山明、以八日鷄鳴之時、順西南風、放船大海、々中迷途、漂蕩辛苦九日八夜、僅到耽羅之嶋、便即招慰嶋人、王子阿波岐等九人、同載客船、擬獻帝朝、五月廿三日、奉進朝倉之朝、耽羅入朝、始於此時、又爲智興傔人東漢草直足嶋所讒、使人等不蒙寵命、使人等怨徹于上天之神、震死足嶋、時人稱曰、大倭天報之近、

六月、伊勢王薨、秋七月甲午朔丁巳、天皇崩于朝倉宮、八月甲子朔、皇太子奉從天皇喪還至磐瀨宮、是夕、於朝倉山上有鬼、著大笠臨視喪儀、衆皆嗟怪、冬十月癸亥朔己巳、天皇之喪歸就于海、於是皇太子泊於一所、哀慕天皇、乃口號曰、枳瀰我梅能、姑哀之枳、舸羅儞、婆底底威底、舸矩野姑悲武謀、枳瀰我梅弘報梨、乙酉、天皇之喪還泊于難波、十一月壬辰朔戊戌、以天皇喪殯于飛鳥川原、自此發哀、至于九日、

日本世記云、十一月、福信所獲唐人續守言等至于筑紫、或本云、辛酉年、百濟佐平福信所獻唐俘一百六口、居于近江國犢田、庚申年、餘云福信獻唐俘、故今存注、其決焉、

ど通證に草直疑當作束直卽掬直と云り
○徹、原本撤に作る北本中本に據て改む（以上注）
（七月）崩于朝倉宮、大日本史に本書享年闕水鏡神皇正統記一代要記皇胤紹運錄皇年代略記並曰六十八とあり
（八月）奉從、原本從を徒に作る中本に據て改む
○有鬼云々、標注に是も朝倉の神の御所爲にて先に社木を伐りし時の神怒の解け給はぬなるべしと云
（十月）口號、クチツウタは口つ歌なり纖體紀七年には口唱とあり
○枳瀰我梅能云々、枳瀰我梅能は君が目のなり目とは面を云姑夏之枳柯羅儞は戀しき故になり婆底々威底は泊て丶居てにて一所に泊り給ふを云婆の字は原本婆に作る中本及釋紀に據て改む枳瀰我梅弘報梨は君が目を欲りなり君とは天皇を申奉れり此御歌は天皇の崩御を甚しく悲しみ慕ひ奉りて詠ませ給へるなり
○還泊于難波、北本應本還の字なし（十一月）飛鳥川原、大和國高市郡にあり
○（注）續守言、原本續を績に作る北本應本に據て改む天智紀二年にも唐俘續守言とあり
○槻田、抄國郡部に近江國栗本郡治田を發多と注す此地なり

日本書紀卷第廿六

【卽位前紀】天命開別天皇、通證に蓋誅に入鹿に定め日位に之美稱と云ひ集解に按天皇恭遜待レ時而登天位如有命所開故以爲諡也と云開は排開廣庭天皇の開に同じく天命を押開かせ給ふ意なるべし

○後五年、齊明紀卽位前紀に云

○素服、仁德紀卽位前紀に見ゆ喪葬令に凡天皇爲本服二等以上親喪賜錫紵義解に錫紵者細布卽用淺黑染也とあり

○蘇將軍、齊明紀に見えし蘇定方なり

○突厥、通證に韻會突厥世居金山工於鐵作金山狀如兜鍪俗呼兜鍪爲突厥因爲國號通鑑注曰秦漢曰匈奴唐曰突厥卽今韃靼とあり

○契苾加力、唐書契苾何力傳に鐵勒可汗之孫顯慶

日本書紀卷第廿七

（ヤマトフミノマキノツイデハタチアリナ、マキニアタルマキ）

天命開別天皇　天智天皇

天命開別天皇（アメミコトヒラカスワケノ）、息長足日廣額天皇（舒明）太子也、母曰天豐財重日足姫（皇極）天皇、天豐財重日足姫天皇四年、讓位於天萬豐日天皇（孝德）、立天皇爲皇太子、天萬豐日天皇、後五年十月崩、明年、皇祖母尊卽天皇位、七年七月丁巳崩、皇太子素服稱制、是月、蘇將軍與突厥王子契苾加力等、水陸二路、至于高麗城下、皇太子遷居于長津宮、稱聽水表之軍政、八月、遣前將軍大花下阿曇比羅夫連、小花下河邊百枝臣等、後將軍大花下阿倍引田比羅夫臣、大山上物部連熊、大山上守君大石等、救於百濟、仍送兵仗五穀、或本續此末云、別使大山下狹井連檳榔、小山下秦造田來津、守中護百濟、九月、皇太子御長津宮、以織冠授於百濟王子豐璋、復以多臣蔣敷之妹妻之焉、乃遣大

山下狹井連檳榔、小山下秦造田來津、率軍五千餘衛送於本鄕、於是豐璋入國之時、福信迎來、稽首奉國朝政、皆悉委焉、十二月、高麗言、惟十二月、於高麗國寒極浪凍、故唐軍雲車衝棚、皷鉦吼然、高麗士卒膽勇雄壯、故更取唐二壘、唯有二塞、亦備夜取之計、唐兵抱膝而哭、銳鈍力竭而不能拔、噬臍之耻非此而何、釋道顯云、言春秋之志正起于高麗、而先擊百濟、々々近侵甚苦急、故爾也、是歲、播磨國司岸田臣麻呂等獻寶劍、言於狹夜郡人禾田穴內獲焉、又日本救高麗軍將等、泊于百濟加巴利濱而燃火焉、灰變爲孔有細響、如鳴鏑、或曰、高麗百濟終亡之徵乎、

中爲汨江軍行軍大總督、與蘇定方及劉伯英、伐高麗、不克、龍朔初復拜遼東道行軍大總管、率諸蕃三十五軍、進討次鴨綠水、（節略）とあり　○遷居于長津宮、原本子を子に作る中本及紀略に據て改む此宮のこと齊明紀七年に出づ　○稱聽水表之軍政、水表は海外を云原本稱を稍に作る中本に據て改む　○前將軍、後將軍に對し前隊の將軍を云　○大花下、原本花を華に作る今諸本に據る下同じ　○河邊百枝、天武紀六年民部卿となる　○後將軍、後の部隊の將軍　○引田比邏夫臣、原本田を由に作る應本中本に據て改む　○守君大石、齊明紀四年有間皇子に薦して上毛野に流されし人　○兵仗、原本仗を杖に作る北本楓本中本に據て改む　○狹井連、天武紀十三年宿禰を賜ふ錄左京神別に佐爲連饒速日命六世孫伊香我色乎命之後也と見ゆ佐爲は狹井に同じ大和國城上郡の地名　○高麗言、原本麗の字なし北本應本中本に據て補ふ　○浪凍、浪は說文に浪水出樂浪と見ゆ、樂浪郡は今の京畿平安兩道の地なれば大同江なりとも鴨綠江なりとも云へど輿地勝覽に本國自有三浪水而古今衆所的知者則獨大同江とあれば此は大同江ならむ　○雲車、後漢書光武紀に雲車十餘丈に雲車卽樓車稱雲言其高也とあり　○衝棚、楓本中本棚を輞に作る同じく光武紀に爲地道衝棚撞城注に衝撞車也とあり通證に私記にコシキチツクルと訓るを非としツキクルマと訓べしと云　○吼然、吼は字書に牛鳴也とも虎聲とも注す雲車衝棚皷鉦など寒風の爲に自然に音を發するを云　○士卒、原本卒を率に作る中本に據て改む　○抱膝而哭、膝を抱きて獨自ら哭するを云　○噬臍之耻云々、唐兵の遠征を悔ゆるを云　○（注）釋道顯云、日本世記の文なり　○春秋、新羅王金春秋なり　○先擊百濟、原本擊を聲に作る中本引イ本に據て改む（以上注）　○岸田臣麻呂、大化二年紀に淮田臣に作る此氏の事同紀に注す原本麻呂を磨の一字に作る中本及釋紀に據て改む　○獻寶劍、播磨風土記佐用郡條に苫編部大猪土中を掘り寶劍を得て朝庭に獻りし事見ゆ是なり　○狹夜郡、佐用郡なり　○禾田、粟生なり粟を作れる畠を云風土記に圃彼地之墟とあるにて知るべし　○加巴利濱、詳ならず百濟の北なるべきか　○燃、原本然に作る北本應本中本に據て改む　○爲孔、積みたる灰に自ら孔を生じたるなるべし　○鳴鏑、字鏡に鏑奈利加夫良と注せり鏃の形無に似たるに穴を穿ち射る時空氣其穴に觸れて鳴るやうに作れるを云

【元年】十萬隻、原本隻を俟に作る中本及釋紀に據て改む
○章、抄調度部に唐韻云章、平也(賈波)柔皮也とあり今云なめし皮なり
○疏留城、集解に齊明天皇六年紀所謂怒受利山卽周留城也とあれど齊明紀に怒受利山百濟之東境也とあり然るに周留城は百濟と唐との交戰の條に見えて其西境なれば此說非なり按るに三國史記に支羅城或云周留城とある卽ち疏留にて今の忠淸南道扶餘なるべし
○輸、釋紀に私記曰輸可讀於止須穀梁傳輸者墜也とあり
○北國之人云々、鼠は子にして北方なり馬は午にして南方なり故にかく占ひしなるべし源平盛衰記に平淸盛の廐の馬尾に鼠の巢を作りしを安倍泰親の占ひしは之と能く似たり
○五月、原本五月の上に夏の字あり中本に據て削る
○大錦中、按に大錦は上下にて中なければこゝは大錦下とあるべきなり

(壬戌)元年春正月辛卯朔丁巳(廿七)、賜百濟佐平鬼室福信矢十萬隻、絲五百斤(カリ)、綿一千斤、布一千端、韋一千張、稻種三千斛、三月庚寅朔癸巳(四)、賜百濟王布三百端、是月、唐人新羅人伐高麗、々々乞救國家、仍遣軍將據疏留城、由是唐人不得略(カスムルコトヲ)其南堺、新羅不獲輸(イヅルコトヲ)其西壘、夏四月、鼠產於馬尾、釋道顯占曰、北國之人將附南國、蓋高麗破而屬日本乎、五月、大將軍大錦中阿曇比羅夫連等、率船師一百七十艘、送豐璋等於百濟國、宣勅以豐璋使繼其位、又予金策於福信、而撫其背、褒賜爵祿、于時豐璋等與福信稽首受勅、衆爲流涕、六月己未朔丙戌、百濟遣達率萬智等進調獻物、冬十二月丙戌朔、百濟王豐璋、其臣佐平福信等、與狹井連、(名闕)朴市田來津議曰、此州柔者、遠隔田畝、土地磽确、非農桑之地、是拒戰之場、此焉久處、民可飢饉、今可遷於避城、々々者、西北帶以古連旦涇之水、東南據深渠巨堰之防、繚以周田、決渠降雨、華實之毛、則三韓之上腴焉、衣食之源、則二儀之陾區矣、雖曰地卑、豈不遷歟、於是朴

市田來津獨進而諫曰、避城與敵所在之間、一夜可行、相近茲甚、若有不虞其悔難及者矣、夫飢者後也、亡者先也、今敵所以不安來者、州柔設置山險、盡爲防禦、山峻高而谿隘、守易而攻難之故也、若處卑地何以固居而不搖動、及今日乎、遂不聽諫而都避城、是歲、爲救百濟、修繕兵甲、備具船舶、儲設軍粮、是年也太歲壬戌、

○於百濟國、於の字は北本應本中本に據て補ふ　○豐璋、原本璋の下等の字あり衍なり考本に據て削る　○金策、孝德紀卽位前紀（一七〇頁）に見ゆ　○爵祿、字書に爵は封也とあり封祿を賜ふを云カツケモノは被物纏頭をカツケモノと云と意は同じ　○百濟王豐璋、原本王の字なし北本應本中本に據て補ふ　○（注）闕名、前文に積榔とあり　○朴市田來津、孝德紀大化元年に朴市秦遠に作れり　○州柔、唐書東國通鑑に周留城とあるは疏留城にて之と別なり州柔は北史百濟傳の百濟五方城の中西方刀先城とあるもの卽ち三國史記の豆串城、百濟の所夫里郡悅己縣にて今の忠淸南道靑陽郡定山面なり　○礮碡、字書に礮碡石地與墝埆同とあり瘠薄の地なり　○避城、中本辟に作る通釋に文獻備考を引て全羅道碧骨郡辟城縣今の金堤郡とあれど三國史記地理百濟部に西原一云臂城とある卽ち避城なるべし西原は今の忠淸南道淸州なり從て古連旦涇水は淸州錦江支流無心川なるべし　○周田、マトキは韓語なり　○上腴、原本腴を腰に作る北本應本に據て改む　○二儀、天地なり　○陾區、神武紀己未年に陾區をモナカと訓り陾は墺に通ず說文に陾四方之土可定居者也とあり、クムシラは字鏡に陾藏也久牟志良（名義抄には陾カクル）とあれば此の訓も其意なるべし　○亡者、原本亡を己に作る楓本中本に據て改む　○谿隘、原本隘を淫に作る中本に據て改む　○守易、易の字は考本集解に據て補ふ　○固居、原本固を國に作る中本北イ本に據て改む應本釋紀固に作る　○是年也、也は北本應本中本に據て補ふ　○壬戌、原本戌の下也の字あり諸本に據て削る

【二年】（癸亥）二年春二月乙酉朔丙戌、百濟遣達率金受等進調、新羅人燒燔百濟南畔四州、幷取安德等要地、於是避城去賊近、故勢不能居、乃還居於州柔、如田來津之所計、是月、佐平福信上送唐俘續守言等、三月、遣前將軍上毛野君稚子、間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣譯語、三輪君根麻呂、後將軍阿倍引田臣比羅夫、大宅臣鎌柄、率二萬七千人打新羅、夏五月癸

【二年】達率、率の字は北本應本中本に據て補ふ　○安德、蓋し德安の誤なるべし德安は現今の忠淸南道恩津郡なり　○避城、北本應本中本辟城に作る　○間人連、推古紀十八年にも見ゆ孝德紀には中臣を冠す　○中將軍、前後の將軍に對して云

○巨勢神前、神前は近江國にある巨勢氏にて神前に住みしより氏となれるならむ
○根麻呂、麻の字は北本應本中本に據て補ふ
○大宅臣、推古紀三十年に出づ
○打新羅、集解打を伐に改作る
○犬上君、君の字は北本應本中本に據て補ふ
○糺解、齊明紀七年に百濟王糺解とあり
○石城、百濟の所夫里郡珍惡山縣卽ち今の忠淸南道扶餘郡石城面なるべし
○沙鼻岐奴江、沙鼻は慶尙北道尙州なれば岐奴江も其附近なるべし
○可斬以不、原本可を所に作る中本に據て改む以は中イ本に據て補ふ
○腐狗、集解庸狗に作る
○醢首、史記宋世家の注に醢肉醬、字鏡に醢肉比志保、抄飲食部に爾雅注云醢、ヒシヽ比シ(保)宣醬也鹹醬曰肉醬魚醬皆呼爲醢不入藥用とあり
○謂諸將曰、北本應本謂の字なし
○盧原君臣、錄右京皇別に盧原公雅武孝命之後也

丑朔、犬上君闕名馳告兵事於高麗、而還見糺解於石城、糺解仍語福信之罪、六月、前將軍上毛野君稚子等、取新羅沙鼻岐、奴江二城、百濟王豐璋嫌福信有謀反心、以革穿掌而縛、時難白決、不知所爲、乃問諸臣曰、福信之罪既如此焉、可斬以不、於是達率德執得曰、此惡逆人不合放捨、福信卽唾於執得曰、腐狗癡奴、王勒健兒、斬而醢首、秋八月壬午朔甲午、新羅以百濟王斬己良將、謀直入國先取州柔、於是百濟知賊所計、謂諸將曰、今聞、大日本國之救將盧原君臣率健兒萬餘、正當越海而至、願諸將軍等應預圖之、我欲自往待饗白村、戊戌、賊將至於州柔繞其王城、大唐軍將率戰船一百七十艘、陣烈於白村江、戊申、日本船師初至者、與大唐船師合戰、日本不利而退、大唐堅陣而守、己酉、日本諸將與百濟王、不觀氣象、而相謂之曰、我等爭先彼應自退、更率日本亂伍中軍之卒、進打大唐堅陣之軍、大唐便自左右夾船繞戰、須臾之際、官軍敗績、赴水溺死者衆、艫舳不得迴旋、朴市田來津仰天而誓、切

齒而嗔殺數十人、於焉戰死、是時百濟王豐璋與數人乘船逃去高麗、九月辛亥朔丁巳、百濟州柔城始降於唐、是時國人相謂之曰、州柔降矣、事無奈何、百濟之名絕于今日、丘墓之所豈能復往、但可往於豆禮城、會日本軍將等、相謀事機所要、遂教本在枕服岐城之妻子等令知去國之心、辛酉、發途於牟豆、癸亥、至豆禮、甲戌、日本船師、及佐平余自信、達率木素貴子、谷那晉首、憶禮福留、并國民等至於豆禮城、明日發船、始向日本、

孫吉備建彥命景行天皇御世被遣東方俘毛人及兇鬼神到于阿倍廬原國復命之日以廬原國給之續紀四に廬原公柏守等賜朝臣姓とあり臣は名なり　○待饗白村、原本待を時に作る北本楓本中本に據て改む白村は唐書に白江口とあり　○陣烈、烈列通用す　○船師初至、原本船初師至とあり中本考本に據て訂す　○亂伍、原本伍を悟に作る諸本に據て改む　○大唐堅陣之軍、堅陣之の三字北本應本中本に據て補ふ　○際、原本除に作る諸本に據て改む　○相謂之、中本相語之に作る　○豆禮、百濟の冬老縣なるべし全羅南道寶城郡鳥城面附近なり　○枕服岐城、牟豆に近き地なるべく百濟の所非兮縣蓋し其地ならむか今の全羅南道長城郡森溪面なり　○牟豆、原本豆を互に作る北本應本中本に據て改む欽明紀十七年の彌氏と同じ地ならむ今の全羅南道高敬郡茂長面に近き地なるべし　○余自信、錄右京諸蕃高野造百濟國人余自信之後也とあり　○木素貴子、錄左京諸蕃に林連百濟國人木貴公之後也とあり同人なるべし　○谷那晉首、聖武紀に谷那庚受賜姓難波連と錄右京諸蕃高麗に難波連高麗好太王之後也とあり高麗人なりしが百濟に貫せしか　○憶禮福留、錄左京諸蕃に石野連百濟國人近速古王孫憶賴福留之後也とあり

【三年】天皇、通證に據上下例當作皇太子とあり本紀中下文七年卽位まで天皇と書ることなし此は誤れるなるべし　○大皇弟、類史には大を太に作れり皇太弟又太弟とも稱るは儲君に坐すが故なり此は天武天皇を申

三年春二月己卯朔丁亥、天皇命大皇弟、宣（甲子）增換冠位階名、及氏上民部家部等事、其冠有廿六階、大織、小織、大縫、小縫、大紫、小紫、大錦上、大錦中、大錦下、小錦上、小錦中、小錦下、大山上、大山中、大山下、小山上、小山中、小山下、大乙上、大乙中、大乙下、小乙上、小乙中、小乙下、大建、小建、是爲廿

す大日本史に本書例大凡立皇太子必再書於前紀某年立某皇子爲皇太子至嗣帝紀書曰某天皇某年立爲皇太子特至天智紀不書立皇太子至天武紀始曰天命開別天皇元年立爲東宮既與前書同異且其書大皇弟東宮大皇弟者名稱書法亦不明白とあり

○冠位階名、原本冠の下倍の字あり應本中本に據て削る

○氏上、氏族の長なり天武紀に氏上文武紀に氏助あり中古氏長者といへるが如く其氏の上たる家を定められしなり天武紀に物部雄君連忽發病而卒天皇聞之大驚云々賜氏上續紀二に詔甲子年定氏上時不所載氏令被賜姓者自伊美吉以上並悉令申とあり甲子年は卽ち今年なれば此時氏上を定め給ふのみならず氏姓を定め給ひしこと續紀の文にて知られたり

○長部、雜略紀廿三年に出づ

○家部、之を私部とも云り後世の家人と云に同じ

六階爲、改前花曰錦、從錦至乙加十階又加換前初位一階、爲大建小建二階、以此爲異、餘並依前、其大氏之氏上賜大刀、小氏之氏上賜小刀、其伴造等之氏上賜干楯弓矢、亦定其民部家部、三月、以百濟王善光王等居于難波、有星殞於京北、是春地震、夏五月戊申朔甲子、百濟鎭將劉仁願遣朝散大夫郭務悰等、進表函與獻物、是月、大紫蘇我連大臣薨、或本、大臣薨注五月、六月、嶋皇祖母命薨、冬十月乙亥朔、宣發遣郭務悰等、是日、勅中臣、內臣、遣沙門智祥賜物於郭務悰、戊寅、饗賜郭務悰等、是月、高麗、大臣蓋金終於其國、遺言於兒等曰、汝等兄弟、和如魚水、勿爭爵位、若不如是、必爲隣、咲、十二月甲戌朔乙酉、郭務悰等罷歸、是月、淡海國言、坂田郡人小竹田史身之猪槽水中忽然稻生、身取而收、日々致富、栗太郡人磐城村主殷之新婦床席頭端、一宿之間、稻生而穗、其旦垂穎而熟、明日之夜更生一穗、新婦出庭、兩箇鑰匙自天落前、婦取而與殷、々得始富、是歲、於對馬嶋、壹岐嶋、筑紫國等置防人與烽、又於筑

○小織、原本に脫す北本應本中本に據て補ふ
○大縫小縫、孝德紀に大繡小繡とあり縫も繡も縫物の義にて同じ紫以上は孝德紀大化三年及五年の制にして錦位は五年なる花位大小上下を上中下に增し山位以下も之に同じく大建小建は同紀三年なる建武を大小に分けたるなり　○加十階、薩摩本に六階とありといへど諸本何れも十階とあり釋紀に私記曰藤進士案云十當云爲七歟師說不許師又說此事愚心猶難入悟戸部藤侍郎案又與師說異也愚案甚同少卿之案有味耳師并進士案可謂難也と見え私記にも十階とあれば姑く舊に據る　○大氏之氏上賜大刀云々、大刀は抄調度部征戰具にも刀四聲字苑云似劍而一刃曰刀(大刀太知小刀賀太奈)とあり古語拾遺天武天皇御世の條に至淨御原朝改天下萬姓而分爲八等唯序當年之勞不本天降之績其一曰朝臣以賜中臣氏命以太刀其三曰宿禰以賜齋部氏命以小刀とあり氏に大小を稱せられたるは蓋部屬の多少に據れるなるべし　○定民部家部、栗田博士の說に孝德天皇の時臣連の部民を悉く公民と爲し此に至りて又民部家部を定め給ふは蓋彼大小の氏々に隸する民部家部を急に收め難き形勢を見給ひて姑くこを寬くし漸くに收めむと思ほしめして其制を定め給へるものなり天武紀四年二月に至て詔して甲子年(卽ち今年なり)諸氏被給部曲自今以後除之とあるにて見るべしとあり　○善光王、通證に王字疑衍とあり天武紀及持統紀には百濟王善光と見ゆ續紀廿七百濟王敬福傳に其先義慈王遣其子豐璋及禪廣寶入侍とある禪廣卽ち善光なり　○星殞、殞は字書に落也別作隕とありて意隕に同じウツと訓るはオツの誤なるべし　○百濟鎭將劉仁願、鎭將は事物紀原に通典曰鎭將後周之迦班隋亦置其職微矣とあり劉仁軌の傳に見ゆ　○朝散大夫、唐書百官志に從五品下曰朝散大夫六典に隋文帝置朝散大夫爲四品散官煬帝改爲從五品下とあり　○蘇我連、公卿補任に大紫蘇我連子臣字藏、在官三年一書云三月任卽薨、馬子大臣之孫、雄正子臣之子、右大臣石川麻呂之弟也とあり　○(注)或本云々、中本此八字なく或本在三月と本文の傍に朱書す　○嶋皇祖母命、敏達天皇の皇女田村皇女舒明天皇の御母に坐す諸陵式に押坂墓田村皇女在大和國城上郡舒明天皇陵內とあり今磯城郡城嶋村大字忍坂　○乙亥朔、原本朔の下戊寅の二字あり北本中本及紀略に據て削る　○官發遣、官は北本中本に據て補ふ　○蓋金、齊明紀六年に內臣蓋金とあり　○漢海、中本及紀略近江に作る　○小竹田史、錄和泉諸蕃に信太ショウ首百濟國人百年之後也とあり是なるべし　○猪槽、猪を飼ふに用ひし水槽なるべし　○致富、原本致を到に作る中本に據て改む　○磐城村主殿、詳ならず　○垂頴、カブシは頭伏(カブシ)なり稻の熟して穗の傾くを云　○鑰匙、抄居處部に四聲字苑云鑰陽具也楊氏漢語抄云鑰匙(門乃加岐)とあり　○壹岐島、北本應本此三字なし恐くは非なり　○置防人與烽、防人は孝德紀大化二年に注す烽は抄燈火部に說文云烽燧(峯遂二音度布比)邊有警則舉之とあり飛火なり烽候の事は繼體紀にも出づ　○水城、筑前國御笠郡に在り外寇の襲來に備ふる邊海の戍なり本文に築大堤貯水名曰水城とあるを通釋に海中に築出し大石を以て築き或は堤を高くして賊船を直下に伺ひ矢を屆かしめまた馬に乘りながら直に賊船に下ることなどにも便利ならしめたる一構の城と見えたり水に築立たるが故に水城とはいふものなるべしと云り

紫縠大堤貯水名曰水城

【四年】間人大后、舒明天皇の皇女にて孝德天皇の皇后なり諸陵式に龍田清水墓間人女王在大和國平群郡大和志に在龍田村南小吉田村と見ゆ今高市郡越智岡村大字車木にあり

(乙丑)四年春二月癸酉朔丁酉廿五、間人大后薨、是月、勘校百濟國官位階級、仍以佐平福信之功、授鬼室集斯小錦下、其本位達率復以百濟百姓男女四百餘人居于近江國神前郡、三月癸卯朔、爲間人大后度三百卅人、是月、給

○鬼室集斯、考に福信の功を賞せむとて位を進め給へば集斯は福信が子なるべしと云り
○答炑春初、原本初字を脱す北本中本に據て補ふ懷風藻には答本とあり
○長門國、長門の國始めて見ゆ
○憶禮福留、二年紀に出つ
○四比福夫、續紀九神龜元年賜二正七位上四比忠勇雄野連一と見ゆ
○大野及椽、通證に豐前國築城郡大野鄉楊木鄉なりと云へど郡鄉考に楊木はツイキと訓むべし郎築城なりとあり及椽と云に當らず
○沂州司馬上柱國劉德高、沂州は河南道なり明には山東兗州に屬す唐書百官志に司馬は行軍司馬掌弼二戎政一居則習二蒐狩一有役則申二戰守之法一器械糧糒軍籍賜予皆專馬注に武德元年改二贊治一曰二治中一太宗卽位曰二司馬一下州亦置、上柱國は司勳郎掌二官吏勳級一凡十有二轉爲二上柱國一視二正二品一とあり原本司馬の下馬一字衍れり中本に據て削る
○(注)右戎衛郎將上柱國、唐書百官志十六衛の注に顯慶五年改二左右領軍衛一曰二左右戎衛一とあり上柱國の下姓名を脱せり
○百濟將軍朝散大夫上柱國、朝散の散及上の字は中本に據て補ふ
○大閱、周禮中冬教二大閱一の注に謂大閱兵而習戰也とあり
○是歲、原本歲の字を脱す諸本に據て補ふ
○小錦、上中下を略したるなり下の分注亦同じ
○守君大石、齊明紀四年に見ゆ
○(注)大乙、原本大の下小の字あり應本中本に據て削る
○吉士岐彌、吉士は中本に據て補ふ

神前郡百濟人田秋八月、遣達率答炑春初築城於長門國、遣達率憶禮福留、達率四比福夫筑紫國、築大野及椽二城、耽羅遣使來朝、九月庚午朔壬辰、唐國遣朝散大夫沂州司馬上柱國劉德高等、等謂右戎衛郎將上柱國百濟將軍朝散大夫上柱國郭務悰、凡二百五十四人、七月廿八日、至于對馬、九月廿日、至于筑紫、廿二日、進表函焉、冬十月己亥朔己酉、大閱于菟道、十一月己巳朔辛巳、饗賜劉德高等、十二月戊戌朔辛亥、賜物於劉德高等、是月、劉德高等罷歸、是歲、遣小錦守君大石等大唐云々、等謂小山坂合部連石積、大乙吉士岐彌、吉士針間、蓋送唐使人乎、

【五年】始如、中本姑如に作る
○元從之功、皇極紀四年に見ゆ入鹿を誅する時に大に力を盡せるを云
○復租調、租と調とを免するを云字書に復に除也とあり

(丙寅)五年春正月戊辰朔戊寅、高麗遣前部能婁等進調、是日耽羅遣王子始如等貢獻、三月、皇太子親往於佐伯子麻呂連家、問其所患、慨歎元從之功、夏六月乙未朔戊戌、高麗前部能婁等罷歸、秋七月、大水、是秋、復

○乙相奄智、齊明紀六年に出づ郡は郷に同じ
○(注)二位玄武若光、通證に二位猶大使副使之類とあり
○縞素、西域記の注に縞素黑白也今世俗之謂也とあり
○癸亥年、二年なり
○知由、中本知を智に作り齊明紀に智踰とあり
【六年】合葬云々、異本大織冠傳裏書に前年丙寅八月葬齊明天皇とあり真幹云按に異本大織冠傳丁卯歲二月遷都于近江國而日本紀丁卯歲二月二十七日葬齊明帝可疑
○間人皇女、孝德天皇の皇后なれば大后と書すべきを間人皇女とせしは聞えず
○小市岡上陵、諸陵式に越智岡上陵飛鳥川原宮御宇皇極天皇在大和國高市郡とあり今高市郡越智岡村大字車木にあり按するに齊明天皇崩後七年なり是に至りて始て小市岡上陵に合葬し奉り又間人皇女を夫君孝德天皇磯長陵に合せ葬るべきに同時に齊明天皇の御陵に合葬せられしを思ふに由あ

租調、冬十月甲午朔己未、高麗遣臣乙相奄鄙等進調、大使臣乙相奄鄙、副使達相遁、二位玄武若光等、是冬、京都之鼠向近江移、以百濟男女二千餘人居于東國、凡不擇縞素、起癸亥年至于三歲、並賜官食、倭漢沙門知由獻指南車、

六年春二月壬辰朔戊午、合葬天豐財重日足姫天皇與間人皇女於小市岡上陵、是日、以皇孫大田皇女葬於陵前之墓、高麗百濟新羅皆奉哀於御路、皇太子謂羣臣曰、我奉皇太后天皇之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所費永代以爲鏡誡焉、三月辛酉朔己卯、遷都于近江、是時天下百姓不願遷都、諷諫者多、童謠亦衆、日々夜々失火處多、六月、葛野郡獻白鸚鵡、秋七月己未朔己巳、耽羅遣佐平椽磨等貢獻、八月皇太子幸倭京、冬十月、高麗太兄男生出城巡國、於是城內二弟、聞側助上大夫之惡言、拒而勿入、由是男生奔入大唐、謀滅其國、十一月丁巳朔乙丑、百濟鎭將劉仁願遣熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等、送大山下境部連石積等於筑紫都督府、己巳、司馬法聰等罷歸、以

ることなるべし
○太田皇女、天皇の皇女にて天武天皇の妃なり皇孫と申奉りしは皇祖母命の御陵に對してなり
○陵前之墓、大和志に俗呼二石冢一とあり
○御路、送葬の道を云
○皇太后、齊明天皇を申す天皇に續けて諡奉るべし

小山下伊吉連博德、大乙下笠臣諸石爲二送使一、是月、築二倭國高安城一、讚吉國山田郡屋嶋城、對馬國金田城一、潤十一月丁亥朔丁酉、以二錦十四疋、纈十九匹、緋廿四疋、紺布廿四端、桃染布五十八端、斧廿六、鉞六十四、刀子六十二枚一、賜二椽磨等一、

○石槨之役、石槨は字の如く石もて作れる城なり字書に棺は關也所二以掩一屍也、槨は外棺也葬有二木槨一也とあり木槨は外棺なるが石槨は石を以て玄室を作り其處に棺を納むるなり石室は土石を以て之を覆ひ其周圍には溝を廻らし城の如くなれば石城と云り其工事を石作と云し事姓氏錄石作連の條の記事にて明なり石槨之役とは即ち石作の工事を云　○遷都于近江、扶桑略記一代要記には正月に遷都とあり大織冠傳には三月に太子傳拾遺記には七年正月とあり、此宮の跡は滋賀郡錦部郷今の錦織村に御所内と稱する地あり其處なりと岡部東平云り　○諷諫、物に喩へて遠廻しに諫むるを云　○自鷄、抄羽族部に爾雅集注云鷄一豆波久良米)白脛小鳥也字鏡には鷄を豆波比良古と注し鳴鳥等をしか訓り　○耽羅遣、原本遣の字なし北本應本中本に據て補ふ　○太兄男生、東國通鑑高句麗寶藏王廿五年の條に高句麗泉蓋蘇文死子男生代爲二莫離支一初男生以二蔭補一中裏小兄遷二中裏大兄一知二國政一凡辭令皆主之進二中裏位頭大兄一及二蘇文死一男生代爲二莫離支一また高句麗男建自爲二莫離支一男生據二國内城一降二于唐一先是男生出按二諸部一使二其弟男建男産偕知二後事一或謂二二弟一曰男生惡二君等一又有告二男生一者曰二弟恐二兄奪一權欲拒之男生懼不歸男建自爲二莫離支一發兵討二男生一走保二國内城一遣二子獻誠于唐一求二内附一秋九月男生舉二哥勿南蘇倉巖等城一降附(三國史記に脫身奔唐ことを見ゆ)とあり寶藏王廿五年は天智天皇五年に當れり　○側助、齊明紀六年に引をキイと訓りキイタスクルは幸助ゝるなり　○熊津都督府、熊津は熊川に同じ唐より此地に都督を置て百濟を管せしめしなり　○熊山、熊津地方なり　○縣令、後漢書百官志に每二縣邑道一大者置二令一一人一千石とあり　○於筑紫都督府、大宰府なり於は中本に據て補ふ　○高安城、河内志に高安郡高安故城在二服部川村上方俗呼二志貴城一同國名所圖會に高安郡郡川村の上に在りと記し其地を高安山と稱し山上に大和の堺と標せり城趾今は大和の國内に在りと如此大和河内の堺なれば後に河内國に屬せしも此御世の頃には大和國なりしなるべし　○屋嶋、海上に突出たる要害の地にて名高き所なり　○金田城、通證に或曰下縣郡與良郷黑瀨城疑此と云り　○纈、抄布帛部に夾纈東宮切韵云釋氏曰纈結レ帛爲二文縁也とありユハタは結帛ユヒハタの意今のしぼり染なり　○緋、字書に絳色又赤練とあり赤き練絹なり　○桃染布、通證に當レ訓二阿良曾一本二江次第荒染萬葉集廣花綿アラソメと延喜衞門式衞士桃染布衫彈正式縫殿式に退紅(アラソメ)亦同訓とあり名義は荒染にて深き色に對して淺きを荒きと云しなるべし　○斧、抄調度部木工具に兼名苑注云斧(乎能一云與岐)とあり　○鉞、字書に鉞は大鎌也とあり内宮儀式帳に奈太二柄と見ゆ　○六十二、原本二を一に作る北本應本中本に據て改む

【七年】七年、本紀には壬戌年を元年として本年(戊辰)を七年とされど

七年春正月丙戌朔戊子、皇太子卽天皇位、或本云、六年歲次戊辰、丁卯三月卽位、壬辰、宴二群臣一於

天武紀に四年十二月天命開別天皇崩とあるに據れば此年を元年とするなり然るに此に七年とあるは舊記のまゝを記したるなるべし按るに先帝崩後此に七年に至るまで卽位し給はざりしを一代要記に天智天皇元年壬戌諒闇至孝不稱卽位經六年而卽位と云れど故あることなるべし

○皇太子卽天皇位、北本に天皇の二字なし

○(注)六年云々、貞幹が天智天皇外記に所引の異本大織冠傳日本決釋にも此と同じくて月は五月に係けたり

○服命、水本服を復に作る服復相通す

○(注)美濃津子娘、孝德紀に造媛とあり此に或本と云るは持統紀の始遠智娘の注に更名云々也とあるを云るなり

○鸕野皇女、原本皇字を脫す中本紀略に據て補ふ持統天皇に坐す

○飛鳥淨御原宮、天武天皇の宮なり天武紀に注す

○藤原、持統天皇の宮なり本紀に出つ

○啞、抄殘病部に說文云

内裏(オホウチニ)、廿三戊申、送使博德等服(カヘリゴトマヲス)命、二月丙辰朔、廿三戊寅、立古人大兄皇子女倭姬王爲皇后、遂納(メシイル)四嬪(ヨハシラノミメ)、有蘇我山田石川麻呂大臣女、曰遠智娘(ヲチノイラツメト)、或本云、美濃津子娘、生一男二女、其一曰大田皇女、其二曰鸕野皇女(ウノ)、及有天下(アモノアメノシタ)、居于飛鳥淨御原宮、後移宮于藤原、其三曰建皇子(タケルノトオヲシノ)、啞不能語(ハマコトナマトフコト)、或本云、遠智娘生一男二女、其一曰建皇子、其二曰大田皇女、其三曰鸕野皇女、或本云、蘇我山田麻呂大臣女曰茅渟娘、生大田皇女與娑羅々皇女、次有遠智娘弟、曰姪娘(メヒ)、生御名部(ミナベノ)皇女、與阿陪皇女、阿陪皇女及有天下、居于藤原宮、後移都于乃樂(ナラニ)、或本云、名姪娘曰櫻井娘、次有阿倍倉梯麻呂大臣女、曰橘娘、生飛鳥皇女與新田部皇女、次有蘇我赤兄大臣女、曰常陸娘、生山邊皇女、又有宮人生男女者四人、有忍海造小龍女、曰色夫古娘、生一男二女、其一曰大江皇女、其二曰川嶋皇子、其三曰泉皇女、又有栗隈首德萬女、曰黑媛娘、生水主皇女、又有越道君伊羅都賣、生施基皇子、又有伊賀采女宅子娘、生伊賀皇子、復字曰大友皇子、夏四月乙卯朔庚申、百濟遣末都師父等進調、十六庚午、末都師父等罷歸、五月五日、天皇縱獵(カリシタマフ)於蒲生野(カマフノニ)、于時太皇弟(ヒツギノミコ)、諸王(オホキミタチ)、內臣、及羣臣皆

瘖瘂(於布之)不能言也とあり

○(注)山田麻呂、原本山を小に作る應本中本に據て改む

○婆羅々皇女、上の鷸野皇女なり

○姪娘、元明紀に宗我嬪に作る

○阿陪皇女、應本楓本陪を倍に作る元明天皇に坐す天武紀には阿閇皇女に作れり

○乃樂、大和國添上下兩郡に亘れる地今の奈良市は其一部に過ぎず元明天皇より七代七十餘年間の皇都なり乃樂の名稱は崇神紀十年に官軍屯聚而蹢跙(フミナラス)草木因以號其山曰那羅山とあるより出でしなるべし

○倉橋麻呂、原本麻呂を磨の一字に作る中本類史に據て改む

○新田部皇女、天武天皇の妃と爲らせ給ふ

○山邊皇女、大津皇女の妃と爲り給ふ

○宮人、宮中に仕ふる婦人の意

○忍海造、忍海部は記に建豐波豆羅和氣王開化天皇の御子)者忍海部造

悉從焉、六月、伊勢王與其弟王接日而薨、未詳官位秋七月、高麗從越之路遣使進調、風浪高故不得歸、以栗前王拜筑紫率于時近江國講武、又多置牧而放馬、又越國獻燃土與燃水、又於濱臺之下、諸魚覆水而至、又饗蝦夷、又命舍人等爲宴於所々、時人曰、天皇天命將及乎、九月壬午朔癸巳、新羅遣沙喙級飡金東嚴等進調、丁未、中臣內臣使沙門法弁奏筆、賜新羅上臣大角于庚信船一隻、付東嚴等、庚戌、使布勢臣耳麻呂賜新羅王輸御調船一隻、付東嚴等、冬十月、大唐大將軍英公打滅高麗、高麗仲牟王初建國時、欲治千歲也、母夫人云、若善治國可得也、若不可得也、但當有七百年之治也、今此國亡者、當在七百年之末也、十一月辛巳朔、賜新羅王絹五十疋、綿五百斤、韋一百枚、付金東嚴等、賜東嚴等物各有差、乙酉、遣小山下道守臣麻呂、吉士小鮪於新羅、是日、金東嚴等罷歸、是歲、沙門道行盜草薙劍逃向新羅、而中路風雨、荒迷而歸、

稲羽忍海部之祖とあり　○色夫古娘、紹運錄には宮人と同人に記せり　○大江皇女、天武天皇の妃と爲らせ給ふ　○川嶋皇子、持統紀五年正月薨ず天武天皇の皇子にも御同名あり　○泉皇女、續紀二に遣泉内親王侍於伊勢齋宮同十一に二品泉内親王薨とあり　○栗隈首、山城國久世郡栗隈郷あり是に由あるべけれど姓氏錄に見えず天武紀十二年に栗隈首賜姓曰連とあり　○水主皇女、ミヌシと訓べし山城國久世郡水主郷に由ある御名なり續紀十二に三品水主内親王薨とあり　○越道君、原本越の字なし北本應本中本及紀略に據て補ふ　○施基皇子、續紀七に二品志貴親王薨天智天皇第七皇子寶龜元年追贈稱御春日宮天皇とあり光仁天皇の皇考に坐す　○伊賀采女宅子娘、原本娘の字を脫す中本に據て補ふ通證に信西國分日宅子媛伊賀國山田郡郡司之女也此腹生三子其一曰大友皇子其二曰阿閉皇子其三曰阿雅皇女今按此紀唯一皇子蓋脫文也とあり　○復字、復は中本に後に作る　○大友皇子、大鏡には天智天皇第四の皇子とあり後の弘文天皇に坐す　（四月）末都師父、原本末に作る北本中本に據て改む下同じ　○五月五日、甲戌朔戊子に當る　○蒲生野、近江國蒲生郡にあり九年紀に蒲生郡讀邇野とあり萬葉一に天皇遊獵蒲生野時額田王作歌皇太子（天武天皇を申す）答御歌とあるは此時の事なり此繼鵠は藥鷹なり　○太皇弟、原本太を大に作る類史に據て改む　○伊勢王、系詳ならず　○（注）未詳官位、原本本文とす中本に據て分注とす　（七月）高麗、高麗寶藏王二十七年　○越之路、こゝは若狹越前なり　○栗前王、天武紀に栗隈王とあり錄左京皇別橘朝臣の條に敏達天皇々子難波皇子男贈從二位栗隈王とあり　○拜筑紫率、卽ち大宰帥なり扶桑略記に之を始任大宰帥とせり　○講武、持統紀に兵士者每於二國四分而點其一令習武事とあり　○置牧、抄天武紀部田野類に尙書云菜夷爲牧八和名无万岐）とあり馬柵（ウマキ）の意　○燃土燃水、今の石炭及石油なり石油は之を臭水（クサウヅと云り臭き水なればなり　○濱臺、大織冠傳に濱樓とあるに同じ大津の内裏にて湖濱の眺望よき地に樓を造られしなるべし　○饗蝦夷、原本蝦の字を脫す中本に據て補ふ　○天命將及乎、敷田氏は上に落字あるか流言の意貫かずと云り　○九月、原本此上に秋の字あり衍なり故に削る　○沙喙級湌、原本喙を喙に作り級の字なし中本に據て改め補ふ　○金東嚴、新羅王の族なり　○大角干、東國通鑑新羅大宗王七年の條に贈戰死者官有差初置大角干以大將軍金庾信爲之在十七位之上とあり新羅最上の冠位なり干は原本干に作る三國史記に據て改む　○庚信、原本庾を庚に作る北本に據て改む　○船一隻、庚信に船を賜ふこと大織冠傳に見ゆ　○庚戌、通釋に此條は上の丁未の條の上にあるべしと云　○布勢臣、孝德紀大化二年に富制臣とあり　○英公、唐の李勣が高麗を敗り功を以て英に封ぜられし號なり唐書九十三李勣傳に見ゆ　○打滅高麗、唐書太宗紀貞觀十八年及三國史記等に詳なり　○仲牟王、錄右京諸蕃長背連及山城諸蕃高井造條に鄒牟王、三國史記に高句麗始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒とあり　○母夫人、ホリクシと訓るは韓語なるべし　○若不可得也、此五字原本分注とし若の下或本有の三字あり中本及釋紀に據て本文とす　○道守臣、錄左京皇別に道守朝臣波多矢代宿禰之後也天武紀十三年道守臣賜姓曰朝臣とあり　○於新羅、於の字は應本中本に據て補ふ　○盜草薙劍、熱田緣起に天命開別天皇七年戊辰新羅沙門道行盜此神劍將レ移二本國一竊祈入二于神祠一取レ劍裹袈裟逃去伊勢國二夜々聞二神劍自脫袈裟還二者本社一道行更還到二練禪藤請又裹袈裟逃到攝津國自二難波津一解纜歸レ國海中失レ度更亦漂二著難波津一託宣曰吾是熱田神劍也然被欺二妖僧一殆著二新羅一祈裹七條袈裟一脫出還二社後裹九條袈裟一甚難二解脫一于時吏民驚怪東西認求道行中心作念若棄去此劍則將免二捉搦之責一乃拋棄神劍劍不離身道行術盡力窮拜舉自首遠當二斬刑一云々と見ゆ　○風雨荒迷而歸、原本荒を芒に作り而の字なし北本應本中本及紀略に據て改め補ふ

【八年】三月、原本月の字を脫す北本應本中本に據て補ふ　○山科野、山城國宇治郡山科郷にあり此も藥鷹なり　○太皇弟、原本太を大に

（己巳）八年春正月庚辰朔戊子、以蘇我赤兄臣拜筑紫率、三月己卯朔己丑、耽羅遣王子久麻伎等貢獻、丙申、賜耽羅王五穀種、是日、王子久麻伎等罷歸、夏五月戊寅朔壬午、天皇縱鵠於山科野、太皇弟、藤原内大臣、及群

作る中本及類史に據て改む

○藤原内大臣、此に藤原内大臣と記ぜるは後より廻らして書けるなり此時未だ藤原の姓を賜はらず内大臣にも任ぜられざりしなり

○高安嶺、六年紀に出づ

○霹靂、楓本碩を霹に作る字書に碩與霹同とあり抄天地部に釋名云霹靂(和名加美波計)霹析也霹歷也所歷皆破析也とあり

○内大臣家、大和志に高市郡有藤原村即此とあり

○積善餘慶、易坤卦に積善之家必有餘慶とあり

○若有所須、字書に須は資也用也與需通とあり

○軍國、軍事と國務を云通證に如言千乘國とあれど聞えず

○何敢重難云々、通證に難患也とあり大織冠傳に即位二年冬十月稍羅況病遂至大漸帝臨私第親問所患云々即詔曰若有所思便可以聞大臣對曰臣既不敏敢當何言但其葬事願用輕易生則无益於軍國死何有勞

臣皆悉從焉、秋八月丁未朔己酉、天皇登高安嶺、議欲修城、仍恤民疲、止而不作、時人感而歎曰、寔乃仁愛之德不亦寬乎、云々、是秋、霹靂於藤原内大臣家、九月丁丑朔丁亥、新羅遣沙飡督儒等進調、冬十月丙午朔乙卯、天皇幸藤原内大臣家、親問所患、而憂悴極甚、乃詔曰、天道輔仁何乃虛說、積善餘慶、猶是無徵、若有所須、便可以聞、對曰、臣既不敏、當復何言、但其葬事宜用輕易、生則無務於軍國、死則何敢重難、云々、時賢聞而歎曰、此之一言、竊比於往哲之善言矣、大樹將軍之辭賞、詎可同年而語哉、庚申、天皇遣東宮大皇弟於藤原内大臣家、授大織冠與大臣位、仍賜姓爲藤原氏、自此以後、通曰藤原内大臣、

十六 辛酉、藤原内大臣薨、(日本世記曰、内大臣春秋五十薨于私第、遷殯於山南、天何不淑、不憖遺耆、嗚呼哀哉、碑曰、春秋五十有六而薨、)

十七 甲子、天皇幸藤原内大臣家、命大錦上蘇我赤兄臣、奉宣恩詔、仍賜金香鑪、十二月、災大藏、是冬、修高安城、收畿内之田稅、于時災斑鳩寺、是歲、遣小錦中河内直鯨等、使於大唐、又以佐平餘自信、佐平鬼室集斯等、男女七百

於百姓」とあり之に據る に重難の下に云々とある は元々の訛にはあらざるか　○大樹將軍、後漢書馮異傳曰異爲「人謙退軍中號爲「敕齊」每所「止舍諸將並座論功異常獨屏「樹下」軍中號曰「大樹將軍」とあり　○東宮大皇弟、五字釋にヒツギノミコと訓り　○大臣位、職原抄に孝德天皇御宇以「中臣鎌子連」爲「內大臣」天智朝擧爲「內大臣」云々此時其位在「左右大臣上」とあり鎌足は此に始て內大臣に昇進したるなれば內大臣の位と書すべきを內の字を略したるなり　○賜姓爲藤原氏、此の姓は氏を云り姓氏錄にはたゞ賜「藤原氏」とあり　○日藤原內大臣、原本內の字を脫す中本及紀略に據て補ふ　○內大臣薨、大織冠傳に十六日辛酉薨「于淡海之第」時年五十有六上哭之甚慟廢朝五日云々とあり　○(注)春秋五十、十の下六の字を脫せしなるべし　○遷殯於山南、釋紀遷を迺に作る山南は集解に按淡海國山也不知指何山」とあり大織冠傳に粤以「庚午閏九月六日」葬「於山階精舍」とあり山階精舍は山城志に宇治郡山階廢寺在「東野村」齊明天皇二年冬十月丙子鎌子建「山階寺於山州陶原家」とありされど其處に大臣の墓なければ後改め葬りしものなるべし元亨釋書に始め攝州阿威山に葬りしを大和國談峰に改葬すとあれば初め近江國の山南に殯し山階精舍に葬り阿威山に移し更に談峰に改葬せしなり阿威山は攝津國嶋下(今三嶋)郡の地にて鎌足が前に住みし三嶋の別業に近き地なり　○不愁遺耆、原本愁を整に作る應本中本愁に作れるに從ふ愁は左傳哀十六年に不「愁遺」一老」とあれば愁の訛なるべし　○碑、ヱリイシと訓るは鐫石なり喪葬令に凡墓皆立「碑記」具官姓名之墓」義解に碑者刻「石銘」文也とあり(以上注)　○奉宣恩詔、大織冠傳に詳なり　○田稅、神祇令義解に新輸曰「租經貯曰」稅也とあり　○河內直、欽明紀二年に見ゆ　○二千餘人、中本人の下に來の字あり

【九年】宣朝庭之禮儀、元正朝賀の儀を始め其他の朝儀を定め給ひしなるべし別式に載せたれば詳なることは知り難し　○行路之相避、儀制令に凡行路巷術賤避貴少避老輕避重續紀一に禁「正月往來拜賀之禮」如有「違犯」者依「淨御原朝廷制」決「罰之」但聽「拜「祖兄及氏上」者」などみえたり　○誣妄、字鏡に訛僞也謂「詐僞」也化也太波己止とあり　○妖僞、オコヅレは天武紀に妖言を訓り語義詳ならず　○二月造戶籍、戶籍の事

餘人、遷居「近江國蒲生郡」、又大唐遣「郭務悰等二千餘人」

九年春正月乙亥朔辛巳、詔「上大夫等」大射宮門內、戊子、宣「朝庭之禮儀」與行路之相避、復禁斷誣妄妖僞」二月、造「戶籍」斷盜賊與浮浪」于時天皇幸「蒲生郡」匱邇野」而觀「宮地」、又脩「高安城」積穀與鹽、又築「長門城」一、筑紫城」三月甲戌朔壬午、於「山御井傍」敷「諸神座」而班「幣帛」、中臣金連宣「祝詞」、夏四月癸卯朔壬申、夜半之後、灾「法隆寺」一屋無餘」大雨雷震、五月、童謠曰、于知波志能、都梅能阿素弭爾、伊提麻栖古、多麻提能伊鞞能、野鞞古能度珥、伊提麻志能、俱伊播阿羅珥茹、伊提麻西古、多麻提

能鞆能野鞆古能度珥、六月、邑中獲レ龜、背書申字、上黄下玄、長六寸許、秋九月辛未朔、遣阿曇連頰垂於新羅、是歳、造水碓而冶鐵、

は已に屢見えたれど更に嚴重に正く造れるなるべし後年まで庚午の年籍として保藏せられたり戸令に凡戸籍恒留五比其遠年者依次除近江大津宮庚午年籍不除とある是なり　○浮浪、日本靈異記に宇加禮比止と訓めり本籍地を離れ所定めず他鄕に浮浪し居るものを云　○賈邇野、原本賈を遣に作る中本に據て改む北本應本還に作るも亦賈の訛なり北本應本及紀略邇を迮に作るは途の訛歟今の日野町なり　○長門城、近藤清石云長門城は豐浦村大唐櫃山小唐櫃山にはあらじかと思ふさは達率答炑春は韓人にてそれが築く所なれば後世カラヒト山といひけむをカラヒツ山と訛り櫃山と文字を當てたならむといへり　○筑紫城、原本城の字を脱す中本紀略に據て補ふ　○山御井傍、通證に疑此近江滋賀郡長等山三井寺之地宜與天武紀上田前辨考三井寺之西岩有泉井見元亨釋書とあり伴信友の說亦同じ　○敷諸神座、通證に今按此如大嘗祭之式也蓋古者有此禮可以觀矣敷田氏標注にはこゝは神祇官を設けられたるなりと云り　○班幣帛、義解に班猶頒也とあり諸社の禰宜祝部等をこゝに召集へて供るべき幣帛を頒ちしなり忌部の文字は見えざれど之を頒ちしは忌部なり　○中臣金連、公卿補任に可多能古連之孫糠手子連之子也とあり　○宣祝詞、神祇令義解に謂宣者布也祝者贊辭也言以告神祝詞宣聞百官故曰宣祝詞同集解に中臣宣祝詞者時行事宣參集之社々祝部等也但依文宣百官可云耳と見えたり　○灰法隆寺、大和國平群(今生駒)郡舊斑鳩寺と云大和志に法隆寺名區也金堂講堂五級浮屠東院夢殿西圓堂其餘殿堂二十七宇僧院六十餘宇寺有廐戸皇子遺器翫物とあり一屋無餘とあれば現存の堂宇は再建せるなり　○大雨、原本大を火に作る北本應本中本及類史に據て改む　○童謠、守部云此に五月童謠曰とあるは記す後れたるなり此は四月壬申より以前に謠ひしなり　○于知波志能云々、打橋の橋爪の遊に出で坐せ子玉手の家の八重此外に出で坐しの悔は有らじそ出で坐せ子玉手の家は法隆寺を指せるなるべし釋紀に玉手也所名也とあり法隆寺の邊にもさる地名あるにや野鞆古能度珥は八重九重と云を省けるにやあらむといひ(守部の說)或は八重此所にて垣などの八重に周れる所を云といひ(標注)或は八重圍外(ヤヘカコミノト)かとも云へど(通釋)八重此外にて八重に取圍める此寺の外になるべし一首の意は火災のあるべければかく取圍める家の内にある子は外に出でて此災を免れよとの意なるべし但し集解には按蓋童謠之意勸天武天皇出家逃位也と云り　○申字、通證に按壬申之亂兆也と云ひ數田氏は申字は日に立點を加へたるにて日を貫くの意なり是は近江朝の亡ぶる兆なりと云　○上黄下玄、通證に天地易位之色也と云　○造水碓而冶鐵、原本治を冶に作る中本に據て改む水車に懸けて鐵を冶する機巧を爲れるなり

【十年】巨勢人臣、天武紀に人を比等に作る補任に巨勢毗登臣小德大海之男とあり　○命宣神事、中本命字なし神事は神語ヵコトなり舊事紀に天稚子命奏天神言詞とあり神代の古事を年の始に宣らしめ給ひしなるべし此事後に

十年(辛未)春正月己亥朔庚子、大錦上蘇我赤兄臣與大錦下巨勢人臣、進於殿前奏賀正事、癸卯、大錦上中臣金連命宣神事、是日、以大友皇子拜太政大臣、以蘇我赤兄臣爲左大臣、以中臣金連爲右大臣、以蘇我果安臣、巨勢人臣、紀大人臣爲御史大夫、御史、蓋今之大納言乎、甲辰、東宮太皇弟奉宣

は絶えたり
○是日、中本此二字なし
○太政大臣、此官を任ずることこの時を始とす令義解の古訓にオホイマツリコトノオホマヘツキミ抄職官部に於保萬豆岐美といひ後乃於保萬豆岐美といひ後にはオホキオホイマウチキミと呼べり職員令に太政大臣師範一人儀刑四海經邦論道燮理陰陽無其人則闕とあり
○紀大人臣、續紀三に正二位紀朝臣麻呂薨淡朝御史大夫正二位大人之子也とあり
○御史大夫、魏志武帝紀に漢罷三公官置丞相御史大夫とあり下の注の如く後の大納言なり
○(注)御史云々、集解に攝入とす大納言は抄繼官儀に令保伊毛乃萬宇須豆加佐職員令に大納言四人掌奏議庶事敷奏宣旨侍從獻替義解に納言王者喉舌之官也言納下言於上宣上言於下也とあり
○甲辰、通證に六日叙位始于此見公事根源とあり
○施行冠位法度事、注に

或本云、大友皇子宣命、施行冠位法度之事、大赦天下、法度冠位之名、具載於新律令、丁未、高麗遣上部大相可婁等進調、辛亥、百濟鎮將劉仁願遣李守眞等上表、是月、以大錦下授佐平余自信、沙宅紹明、法官大輔以小錦下授鬼室集斯、學職頭以大山下授達率谷那晉首、閑兵法木素貴子、閑兵法憶禮福留、閑兵法答炑春初、閑兵法炑日比子贊波羅、金羅金須、解藥鬼室集信、解藥以小山上授達率德頂上、解藥吉大尙、解藥許率母、明五經角福牟、閑於陰陽以小山下授餘達率等五十餘人也、童謠云、多致播那播、於能我曳多曳多、那例々騰母、陀麻爾農矩騰岐、於野兒弘爾農俱、二月戊辰朔庚寅、百濟遣臺久用善等進調、三月戊戌朔庚子、黃書造本實獻水泉、甲寅、常陸國貢中臣部若子、長尺六寸、其生年丙辰、至於此歲十六年也、夏四月丁卯朔辛卯、置漏尅於新臺、始打候時動鍾鼓、始用漏尅、此漏尅者、天皇爲皇太子時始親所製造也云々、是月、筑紫言、八足之鹿生而卽死、五月丁酉朔辛丑、天皇御西小殿、皇太子群臣侍宴、於是再奏田儛、六月丙寅朔己巳、宣百濟三部使人所請軍、

具載於新律令とあれば此は近江朝廷の令なるべし弘仁格序に至天智天皇元年制令二十二卷世人所謂近江朝廷之令也とあるに據れば令は卽位元年卽ち七年に成りしを是に至りて施行せられしなるべし

○上部、原本部を都に作る北本楓本中本に據て改む

○(注)法官大輔、法官は唐書百官志に見ゆ我式部に當れり大輔は次官なり

○以小錦下、四年紀に小錦下を授くとあれば下は上或は中の誤なるべし

○學職頭、卽ち大學頭なり

○炑日比子贄波羅、蓋二人ならむ

○金羅金須、之も二人か

○以小山上、原本小の上に上の字あり中本に據て削る

○吉大尙、續紀九神龜元年賜從五位上吉宜從五位下吉智首並吉田連と見ゆ

○角編牟、續紀二大寶元年八月勅云々惠蠟姓錄名兄麻呂とある錄は角と同音にて角氏卽ち錄氏なり

事、庚辰、百濟遣翌眞子等進調、是月、以栗隈王爲筑紫帥、新羅遣使進調、別獻水牛一頭、山鷄一隻、秋七月丙申朔丙午、唐人李守眞等、百濟使人等、並罷歸、八月乙丑朔丁卯、高麗、上部大相可婁等罷歸、壬午、饗賜蝦夷、九月、天皇寢疾不豫、或本云、八月天皇疾病、冬十月甲子朔庚午、新羅遣沙飡金萬物等進調、辛未、於內裏開百佛眼、是月、天皇遣使奉袈裟、金鉢、象牙、沈水香、栴檀香、及諸珍財於法興寺佛、庚辰、天皇疾病彌留、勅喚東宮引入臥內、詔曰、朕疾甚、以後事屬汝云々、於是再拜稱疾、固辭不受曰、請奉洪業付屬大后、令大友王奉宣諸政、臣請願奉爲天皇、出家脩道、天皇許焉、東宮起而再拜、便向於內裏佛殿之南、踞坐胡床、剃除鬢髮爲沙門、於是天皇遣次田生磐送袈裟、壬午、東宮見天皇請之、吉野、脩行佛道、天皇許焉、東宮卽入於吉野、大臣等侍送至菟道而還、十一月甲午朔癸卯、對馬國司遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道久、筑紫君薩野馬、韓嶋勝娑婆、布師首磐、四人從唐來曰、唐國使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、摠合二千人、乘船四十七隻、俱

と云是等の人々多くは大友皇子に侍して文學の御對手申し上げたるなり
○多致播那播云々、橘は己が枝々成れゝども玉に貫く時同じ緒に貫くなり成れゝは成りてあるにて實を結ぶをいひ學問才藝は各異なりと雖も榮爵に預る事は同じくて共に朝廷の臣列に貫せるを譬へたるなり通證に歌意言才藝各異而相共叙爵也蓋橘是異邦產故譬諸韓人也
といひ守部は異國の人を猥に採用して皇國の舊臣と同じ位階を授け給ふを密に皆めたるなりと云
○黃書造、錄山城諸蕃に黃文連出自高麗國人久斯那王也とあり天武紀十二年に黃文造賜姓曰連卜實は持統紀八年三月に鑄錢司に任ず
○水泉、原本泉を泉に作る釋紀に據て改む文選景福殿賦に作無微而不遂於水泉注に水泉水平也抄調度部造作具に漢語抄云准繩(美豆波加利)とあり
○中臣部、錄和泉神別に中臣部大中臣朝臣同祖天兒屋根命之後也とあり若

泊於比智嶋、相謂之曰、今吾輩人船數衆、忽然到彼、恐彼防人驚駭射戰、乃遣道久等豫稍披陳來朝之意、丙辰、大友皇子在內裏西殿織佛像前、左大臣蘇我赤兄臣、右大臣中臣金連、蘇我果安臣、巨勢人臣、紀大人臣侍焉、大友皇子手執香鑪、先起誓盟曰、六人同心、奉天皇詔、若有違者、必被天罰云々、於是左大臣蘇我赤兄臣等手執香爐、隨次而起、泣血誓盟曰、臣等五人、隨於殿下、奉天皇詔、若有違者四天王打、天神地祇亦復誅罰、卅三天證知、此事、子孫當絕、家門必亡云々、丁巳、災近江宮、從大藏省第三倉出、壬戌、五臣奉大友皇子盟天皇前、是日、賜新羅王絹五十匹、絁五十匹、綿一千斤、韋一百枚、十二月癸亥朔乙丑、天皇崩于近江宮、癸酉、殯于新宮、于時童謠曰、美曳之弩能、曳之弩能阿喻、阿喻擧曾播、施麻倍母曳岐、愛倶流之衛、奈疑能母滕、制利能母滕、阿例播倶流之衛、一於彌能古能、野陛能比母騰倶、比騰陛多爾、伊麻拖滕柯禰波、美古能比母騰矩、阿箇悟馬能、以喻企波々箇屢、麻矩儒播羅、奈

爾能都底舉騰、多拖尼之曳雞武、其三己卯、新羅進調使沙飡金萬物等罷歸、是歲、讚岐國山田郡人家有雞子四足者、又大炊省有八鼎鳴、或一鼎鳴、或二或三俱鳴、或八俱鳴、

子は名なり
○生年丙辰、齊明天皇二年なり
○至於此歲、於は中本に據て補ふ
(四月)漏尅、齊明紀六年に出づ
○始親、中本親を新に作る
(五月)西小殿、小殿はコアドノとあれどコヤスミドノと訓むべきか江次第に九月十一日小安殿行幸あり大極殿の後房なり
○田儛、北本にツヽマヒと訓り續紀十四に天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節田舞皇大神宮儀式帳に御刀代田耕始卽田耕歌且田儛畢由氣宮儀式帳に菅裁物忌父田儛仕奉とあり田を植る時に舞ひしが後宮中などにても用ひらるゝに至りしなるべし其所作詳ならねど後の田樂は田儛の遺風なるべし
(六月)百濟三部、上部中部下部を云なるべし
○羣卿子、釋紀に羣を郡に作れり
○筑紫帥、原本帥を師に作る北本に據て改む中本に率に作る此王七年紀に率とあり今又亦兄に代て再任せらる
○水牛、抄牛馬部に水牛文選上林賦注曰洗牛(今按又一名潛牛也見南越志)卽水牛也

日本書紀卷第廿七

能沈沒於水中者也唐韻云抗(音岡)水牛也とあり　○山鷄、本草和名に也末止利とあり　(九月)或本云、云は應本中本に據て改む　(十月)開百佛眼、開眼とは佛の眼を開く意眞俗佛事編に烏芻澀蹇軌中曰刻本尊乃至以彩色殿之像額間點朱或黃至來月一日開眼とあり　○金鉢、金の鉢なり抄僧坊具に鉢四聲字苑云鉢(博末反俗云波智)學佛道者食器也とあり　○梅檀香、倭名抄に雜香四十二種の中に擧ぐ梅檀は抄草木部に唐韻云梅檀(仙壇二音俗云善短)香木也とあり　○以後事屬汝云々、天武紀卽位前紀に勅東宮授鴻業とあり云々とあるは詔詞を省けるなり　○大后、皇后倭姫王を申す　○奉宣諸政、中本奉を奏に作る此東宮の奉答は天皇の御志大伴皇子にあるを察し給ひて吾は多病にして其任に堪へず皇位は大后に付屬し諸政は大友皇子をして奉宣せしめ給へと申されしなり　○內裏佛殿、所謂內道場なり　○次田、錄河內神別に次田連火明命兒天香山命之後也とあり是と同姓か　○大臣等侍送云々、北本に大臣以下十字なし略記に同月立大友太政大臣爲皇太子水鏡亦同じ懷風藻には大友皇子年甫弱冠拜太政大臣年二十三(信友は廿四の誤とす)立爲皇太子會壬申之亂天命不遂時年二十五とあり之に據るに七年戊辰に皇子年廿一にて太政大臣となり九年庚午に皇太子と成り坐るなり本書及水鏡略記等に異る也　(十一月)月生二日、月を見初めて二日と云ことなれば五日頃なり上代朔と云は月立にて月の見え初めたる日なれば合朔を上日とする事は支那曆に據りしものなり　○道久、中本楓イ本久を丈に作る下文亦同じ　○韓嶋勝娑婆、豐前國宇佐郡辛嶋鄕なり扶桑略記養老四年に辛嶋勝代豆米見ゆ勝は姓娑婆は名なり原本婆を娑に作る中本に據て改む　○布師首、錄左京皇別に布師首武內宿禰之後也とあり　○送使、原本使を脫す中本に據て補ふ　○比智嶋、詳ならず中本智を知に作る　○在內裏西殿、通證に內裏西殿後世所謂眞言院とあり中本內の上に於の字あり　○左大臣蘇我赤兄臣云々、此五人天皇の御志を承りて大友皇子を助け天武天皇を逐ひ奉りしなり　○四天王打、打は罰する意、四天王は崇峻紀卽位前紀に見ゆ　○卅三天、集解に大論曰昔摩伽陀國中有婆羅門名摩伽姓憍尸迦有福德大智慧知友三十二人共修福德命終皆生須彌山頂第二天上摩伽婆羅門爲天主三十二人爲輔臣喚其本姓故言憍尸迦淨名疏曰釋提桓因翻爲能作此間帝釋是迦葉佛滅後有一女人發心修塔復有三十二人發心助修修塔功德爲忉利天主其助修者而作輔臣君臣合之名三十三天とあり　○灾近江宮、伴氏云時勢によりて推考ふるに若は吉野の前坊に心よせある人の所爲には非ざりしか聊疑あり　(十二月)天皇崩、扶桑略記に十年立大友太政大臣爲皇太子十二月三日天皇崩同五日大友皇太子卽帝位生年二十五とあり水鏡も同じ又本紀に寶算を闕く一代要記水鏡には御年五十三神皇正統記正統錄皇年代略記紹運錄興福寺年代記一本如是院年代記には五十八とあり法王帝說には四十七とあり　○殯于新宮、大津宮は十一月丁巳に火災に罹りしかば假に新に造りし宮に坐し、なり故に新宮に殯すと云標注並に通釋に新に殯宮を造りたるなりとあれど殯宮の新に造るべき事は論を待ず此は新宮の內に殯宮を設けられしなり　○美曳之弩能云々、吉野川の年魚こそは嶋邊も宜しけれ水葱の下或は芹の下にては年魚も苦しく住み難るべしとなり吉野は上代はエシヌと云てヨシノとは云はざりしなり故に此にもミエシヌノエシヌとあり愛倶流之衞の愛は阿と通ひて嗚呼の意下の衞はよと同意の歎息の辭なり奈疑能母滕の滕は北本中本騰に作る下も同じ奈疑は水葱なり其形慈姑に似て俗に水葵亦澤桔梗とも云水葱も芹も多く濁川に生るものなり阿例播倶流之衞は吾は苦しるにて水葱芹の下に鮎の居るは苦しかるべしとなり此歌の意伴氏の說に天武天皇の吉野に入坐して辛楚困難し給ふこと猶ほ鮎の淸流に住まずして濁川の水葱芹等の下に住むが如く苦しみ給ふに譬へ諷せるなりと云り守部は鮎を以て大友皇子に譬へたりと云　○於彌能古能云々、臣の子の八重の紐解く一重だに未だ解かれば皇子の紐解くなり此謠の意は伴氏の說に天智天皇俄に世を去り給ひて世は紐の八重に結ぼれて解けぬが如く大臣等其一重をも未解きかぬる間に大海人皇子は既に兵を起し始め給ふ擧あるべしと諷せるなりと云り是も異說あり大友皇子を八重に取圍めるを解かむとするに譬へたりとも大海人皇子の軍の大津の圍を解くに譬へたりとも云　○阿箇悟馬能云々、赤駒の伊往き憚かる眞葛原何の傳て言直(タヾ)にし吉けむなり此謠の意は伴信友氏の說に吉野宮へ人を差遣はして治めむと思ほせるに其道には馬だにも往き難るばかりに葛のはびこりたる如く防禦ありと聞き猶豫し給へるは何人の流言を信じ給へるにか時を失はず直に物したらむぞ宜しかるべきものをとの意なりと云又守部は大海人皇子の表面のみ世を棄て佛道に入られしを刺り取飭らず眞實に有の儘ならば宜からむと云るなりとも云　○大炊省、職員令に宮內省に屬して寮とせり頭一人掌諸國春米雜穀分給とあり　○八鼎、抄器皿部に說文云鼎(阿之加奈倍)三足兩耳和五味寶器也とあれど此の鼎は釜なり卽ち金匙(カノ)なり是は大炊寮大八嶋竈神なり　○鳴、釜鳴の事此に始て見ゆ後々にも時々ありて式に鎭釜鳴祭あり此釜鳴は天下亂れむとするを諷せるなるべし

日本書紀卷第廿八

天淳中原瀛眞人天皇上　天武天皇

天淳中原瀛眞人天皇、天命開別天皇、同母弟也、幼曰大海人皇子、生而有岐嶷之姿、及壯雄拔神武、能天文遁甲、納天命開別天皇女菟野皇女爲正妃、天命開別天皇元年立爲東宮、四年冬十月庚辰、天皇臥病以痛之甚矣、於是遣蘇賀臣安麻呂、召東宮引入大殿、時安摩呂素東宮所好密顧東宮曰、有意而言矣、東宮於茲疑有隱謀而愼之、天皇勅東宮授鴻業、乃辭讓之曰、臣之不幸元有多病、何能保社稷、願陛下擧天下附皇后、仍立大友皇子、宜爲儲君、臣今日出家、爲陛下欲修功德、天皇聽之、卽日出家法服、因以收私兵器、悉納於司、壬午、入吉野宮、時左大臣蘇賀赤兄臣、右大臣中臣金連、及

【卽位前紀】天淳中原瀛眞人天皇、御幼名を大海人皇子と申し、より思ひ寄せて稱奉れる御名なり淳中原は海原なりと云或はヌは瓊にて海をほめて云るか瀛は海の奥なるべし眞人は美稱なり

○(注)淳中云々、此六字天皇の下にあるべき例なり中本雜を雛に作る

○岐嶷、原本嶷を凝に作る北本に據て改む綏靖紀卽位前紀に出づ

○天文遁甲、推古紀十年(一一一頁)に注す

○菟野皇女、持統天皇に坐す

○元年、天智天皇七年戊辰の年

○立爲東宮、天智紀に此事を脫す信友云天武天皇立太子の事本紀に天智の御世の元年に立爲東宮と記されたる天智紀に其事を漏らす然るに扶桑

大納言蘇賀果安臣等送之、自菟道返焉、或曰虎著翼放之、是夕、御嶋宮。癸未、至吉野而居之、是時聚諸舍人謂之曰、我今入道脩行、故隨欲修道者留之、若仕欲成名者、還仕於司、然無退者、更聚舍人而詔如前、是以舍人等半留半退、十二月、天命開別天皇崩、

略記水鏡に倭姫皇女立后と共に大海人皇子皇太子に立つと見ゆ天智紀には同年同月立后の事見ゆるのみ正月の條に戊子皇太子卽天皇位壬辰宴群臣於內裏と見えたるを鎌足傳に七年正月皇太子（卽天智天皇）卽天皇位云々於是皇太弟（天武天皇）以長槍刺貫數板帝驚大怒以將執害とあり卽ち執殺さむとさへし給ひたりけむを二月に皇太子に立て給ふべくもあらず然れどもさる過失をも宥め給ふとして鎌足公にぞ詔合せ給ひたりけむやがて其月戊寅に立皇后の時品つけて皇太弟と申すになし參らせけるを皇太子と書きなせるにて實は紹運要略紹運錄等天智七年戊辰爲皇太弟とあるぞ正しかるべき　○四年、楓本に十年とあり按るに此下十二月までの事は天智紀十年十月庚辰の條に載せられたるを此に四年とあるは此本紀が天智天皇七年を同元年としたるに據る此も亦當時の書にありしまゝを載せたるにて自ら前紀と違へるなり濫に改め難し（通釋の說）　○蘇賀臣安麻呂、中本賀を我に作る蘇我を蘇賀と書せるは履中紀二年に蘇賀滿智宿禰あり子石足の時姓を改めて石川朝臣となれり　○顧東宮、原本顧を領に作る北本中本に據て改む　○元有多病、有の字は北本應本中本に據て改む　○附皇后、原本附を陛に作る北本中本に據て改む　○宜爲儲君、天智紀に此事見えず　○收私兵器、天武天皇の御心遣ひし給ふこと至れりといふべし　○大納言蘇賀果安臣、天智紀十年には紀大人臣勢人臣と共に爲御史大夫とあり此紀に皆大納言と書せるは採り給へる記錄の異なるなり　○返焉、焉は北本中本に據て補ふ　○虎著翼放之、韓詩外傳に無爲虎傅翼將飛入邑擇人而食とあるに據て評せるなり　○嶋宮、大和國高市郡島莊村（今高市村大字となる）にあり　○至吉野而居之、吉野宮は應神紀雄略紀近くは齊明紀に行幸のこと見ゆれば其宮を修繕して坐せしなるべし

【元年】内小七位、内位の事始めて見ゆ但其名目は冠位制定の時より始りしならむ内臣は外位に對して尊常の位を云式部式に凡元正行列次第外位不得列內位上三代格に神龜五年奏五位已上子孫累世之冠蓋及明經秀才堪爲儒者卽叙內位自餘先叙外位積勞入內等とあり小七位は小建に當

（壬申）元年春三月壬辰朔己酉、遣內小七位阿曇連稻敷於筑紫、告天皇喪於郭務悰等、於是郭務悰等咸著喪服、三遍擧哀、向東稽首、壬子、郭務悰等、再拜進書函與信物、夏五月辛卯朔壬寅、以甲冑弓矢賜郭務悰等、是日、賜郭務悰等物、總合絁一千六百七十三匹、布二千八百五十二端、綿六百六十六斤、戊午、高麗遣前部富加抃等進調、庚申、郭務悰等罷歸、是

れり

(五月)郭務悰等罷歸、筑前娜大津より本國へ歸るなり云

○舍人朴井連、原本舍人の二字なく連を遣に作る

舍人は中本に據り連は北本應本中本に據て補ひ改む續紀二に榎井連小君に作る

○若不早避、原本早を畢に作る北本楓本應本に據て改む

○倭京、下文に倭古京とある是なり後飛鳥岡本宮なり云

(六月)村國連男依、世系詳ならず美濃國各務郡村國郷あり神名式に同郡村國神社續紀三に美濃國言村國連等志賣云々など見ゆれば美濃の人なるべし

○和珥臣君手、錄右京皇別に和邇部天足彦國押人命三世孫彦國葺命之後也とあり古くは和珥臣とのみ書せり

○身毛君廣、身毛君は雄略紀七年に見ゆ

○安八磨郡、美濃國安八郡是なり

○湯沐令、原本令を命に作る應本中本に據て改む

月、舍人朴井連雄君奏天皇曰、臣以有私事、獨至美濃、時朝庭宣美濃尾張兩國司曰、爲造山陵、豫差定人夫、則人別令執兵、臣以爲、非爲山陵、必有事矣、若不早避、當有危歟、或有人奏曰、自近江京至于倭京、處處置候、亦命菟道守橋者、遮皇大弟宮舍人運私粮事、天皇惡之、因令問察、以知事已實、於是詔曰、朕所以讓位遁世者、獨治病全身永終百年、然今不獲已、應承禍、何默亡身耶、六月辛酉朔壬午、詔村國連男依、和珥部臣君手、身毛君廣曰、今聞、近江朝庭之臣等爲朕謀害、是以汝等三人急往美濃國、告安八磨郡湯沐令、多臣品治、宣示機要、而先發當郡兵、仍經國司等、差發諸軍、急塞不破道、朕今發路、甲申、將入東、時有一臣、奏曰、近江群臣元有謀心、必告天下、則道路難通、何無一人兵、徒手入東、臣恐事不就矣、天皇從之、思欲返召男依等、卽遣大分君惠尺、黃書造大伴、逢臣志摩于留守司高坂王、而令乞驛鈴、因以謂惠尺等曰、若不得鈴、廼志摩還而復奏、惠尺馳之往於近江、喚高市皇子、大

津皇子逢於伊勢、既而惠尺等至留守司、擧東宮之命、乞驛鈴於高坂王、然不聽矣、時惠尺往近江、志摩乃還之復奏曰、不得鈴也、是日、發途入東國、事急不待駕而行之、僚遇縣犬養連大伴鞍馬、因以御駕、乃皇后載輿從之、逮于津振川、車駕始至、便乘焉、是時、元從者草壁皇子、忍壁皇子、及舍人朴井連雄君、縣犬養連大伴、佐伯連大目、大伴連友國、稚櫻部臣五百瀨、書首根摩呂、書直智德、山背直小林、山背部小田、安斗連智德、調首淡海之類、廿有餘人、女孺十有餘人也、卽日、到菟田吾城、大伴連馬來田、黃書造大伴、從吉野宮追至、於此時、屯田司舍人土師連馬手供從駕者食、過甘羅村、有獵者廿餘人、大伴朴本連大國爲獵者之首、則悉喚令從駕、亦徵美濃王、乃參赴而從矣、運湯沐之米伊勢國駄五十匹、遇於菟田郡家頭、仍皆棄米而令乘步者、到大野、以日落也、山暗不能進行、則壞取當邑家籬爲燭、及夜半、到隱郡焚隱驛家、因唱邑中曰、天皇入東國、故人夫諸參赴、然一人不肯來矣、將及

通證に謂湯沐邑命也とあり
○多臣品治、多臣は綏靖紀卽位前紀（卷上一〇二頁）に出づ品治は古事記の撰者安麻呂の父なり
○不破道、不破は美濃國不破郡なり軍防令に三關とあるを義解に伊勢鈴鹿美濃不破越前愛發とあり畿内の要路なり
○將入東、北本應本入の字なし伴氏云東とは大和にして專ら伊賀伊勢邊を指したる文なりそれより近江路を指して物し給ひ大津の都に向ひて情狀を明め給はむとて發ます由にて御言擧し給へるなるべし
○元有謀心、原本元を无に作る應本中本に據て改む
○必告天下、原本告を造に作る中本に據て改む
○大分君、記に神八井耳命者大分君等之祖也とあり
○黃書造、天智紀十年（二四二頁）に見ゆ
○逢臣、世系詳ならず
○留守司、大和の古京に置かれたる司なり
○高坂王、世系詳ならず

○高市皇子大津皇子、共に天皇の御子なり
○東宮之命、大海人皇子は去年東宮を辭給ひたれど如此云はしめ給ふなり
○皇后、持統天皇に坐す持統紀に從天淳中原瀛眞人天皇避雜東國鞠旅會衆遂興定謀云々とあり
○津振川、大和志に吉野郡北全字陀界村里津風呂在龍門莊疑是とあり今吉野郡龍門村津風呂
○草壁皇子忍壁皇子、共に天皇の御子なり
○佐伯連大目、佐伯連は崇峻紀卽位前紀に見ゆ大伴氏と同祖、天武紀十三年宿禰姓を賜ふ續紀に佐伯連大目封八十戶と連姓にせるは史の失なり
○大伴連友國、持統紀に贈大伴宿禰友國直大貳とあり
○稚櫻部臣五百瀨、原本百を十に作る北本應本中本に據て改む持統紀十年直大壹を贈らる　○書首根麻呂、書首は應神紀十六年に出づ根麻呂は續紀大寶元年には尼麻呂に作り慶雲四年十月戊子に文忌寸禰麻呂卒とあり同人なり　○山背直、神代紀瑞珠盟約章に見ゆ　○安斗連智德、錄山城神別に阿刀宿禰石上朝臣同祖饒速日命孫味饒田命之後也阿刀連同上とあり阿刀は安斗に同じ　○調首淡海、錄左京諸蕃に調連水海連同祖百濟國努理使主之後也云々億計天皇御世蠶織獻絁絹之樣仍賜調首姓とあり　○菟田吾城、神名式に大和國宇陀郡阿紀神社あり大和志に宇陀郡拾生村舊名明城(アキ)野とある是なり　○大伴連馬來田、本紀十二年六月大伴連望多麁とあり同人なり　○屯田司、仁德紀卽位前紀に見ゆ天皇東宮に坐し時の司なるべし　○土師連馬手、續紀五に從四位下土師宿禰馬手卒とあり　○甘羅村、大和志に宇多郡有葛村疑此とあれど地理合はず　○大伴朴本連、錄左京神別に榎本連道臣命十世孫佐豆彥之後也とあり　○美濃王、二年紀に以小紫美

横河有黑雲廣十餘丈經天、時天皇異之、則擧燭親秉式占曰、天下兩分之祥也、然朕遂得天下歟、卽急行到伊賀郡、焚伊賀驛家、逮于伊賀中山、而當國郡司等率數百衆歸焉、會明至莿萩野、暫停駕而進食、到積殖山口、高市皇子自鹿深越以遇之、民直大火、赤染造德足、大藏直廣隅、坂上直國麻呂、古市黑麻呂、竹田大德、膽香瓦臣安倍從焉、越大山至伊勢鈴鹿、爰國司守三宅連石床、介三輪君子首、及湯沐令田中臣足麻呂、高田首新家等參遇于鈴鹿郡、則且發五百軍塞鈴鹿山道、到川曲坂下、而日暮也、以皇后疲之暫留輿而息、然夜曀欲雨、不得淹息、而進行、於是寒之雷雨已甚、從駕者衣裳濕以不堪寒、乃到三重郡家、焚屋一間、而令爨寒者、是夜半、鈴鹿關司遣使奏言、山部王、石川王、並來歸之、故置關焉、天皇便使路直益人徵、

濃王拜造高市大寺司とあり傳詳ならず　○湯沐之米、湯沐の邑の租稅を云　○馱、上の租稅米を運ぶ駄馬なり　○郡家頭、郡家は郡司の居所、下にコホリノミヤケと訓り　○人野、山邊郡なり大和より伊賀の名張へ越る道に今も大野村大野寺あり宇陀郡の堺に近し　○隱郡、伊賀國名張郡なり　○唱邑中、原本唱を昌に作る北本應本中本に據て改む　○天皇入東國、邑中に唱へしめられし令なる故に天皇と宣給はしめ給ひしなるべし　○不肯來矣、原本不を於に作る應本中本に據て改む　○横河、伴信友の說に今長田川と、ふ川なるへしと云　○秉式云々、通證に天皇精祭遁甲之故也史記日者傳旋式索隱曰按式卽栻也旋轉也栻之形上圓象天下方法地用之則轉天綱加地之辰故曰旋式前漢書王莽傳天文郎按栻於前師古曰栻所以占時日天文郎今之用栻者也とあり　○伊賀驛家、通證に此疑今阿保驛と云　○逮于伊賀中山、中山は通證に在伊賀郡岡田村上河原村之間今中山寺之名存矣と云原本逮を還に作る北本中本に據て改む　○蒭蕘野、原本萩を荻に作る通證に蒭荻當作蒭萩音次秋倭名鈔爾雅注桜小木叢生有刺也和名太良とあり蒭は莉と同字、其地詳ならず同書に今云多羅尾與近江甲賀郡信樂鄉相接と云るも地理違へり　○積殖山口、伊賀國阿拜郡柘殖(ツミエ)鄉あり今の上中下柘植村にて加太越の山口なり　○自鹿深、鹿深は通證に近江甲賀郡此今所謂信樂也とあれど新釋に伊勢國鈴鹿郡鹿太越にて加太(カフト)は鹿深の轉れるなるべしと云るそよき信友校本に深の下に山の字を補ひたれど無くても通ず　○以遇之、覺に惠尺の告たるに據て高市皇子の近江より來ませるなり　○民直大火、民直は錄左京神別に天兒屋根命の後なると天穗日命の後なるとあれど此大火は續紀大寶三年七月に民忌寸大火とあり坂上氏と同祖なり　○赤染造德足、續紀十八に赤染造廣足等賜常世連姓錄左京諸蕃に常世連燕國王公孫淵之後也とあり　○大藏直、詳ならず　○坂上直、欽明紀廿一年に見ゆ　○古市黑麻呂、錄河內諸蕃に古市村生出自百濟虎王とあり　○竹田大德、錄左京皇別に竹田朝臣(武淳川別命の後)左京神別に竹田連(神魂命の後)あり何れなるか詳ならず　○膽香瓦臣安倍、錄左京神別に伊香連天兒屋命十世孫巨知人命之後也とあり　○大山、伊賀國柘植より伊勢國鈴鹿に越ゆる山にて加太越を云　○國司守、伊勢國守なり　○三宅連石床、三宅連は垂仁紀九十九年に見ゆ石床は九年紀に卒す　○三輪君子首、五年紀に子人とあり子首は名なり五年紀に卒す　○田中臣足麻呂、田中臣は推古紀三十一年に見ゆ蘇我稻目の後なり　○高田首、孝德紀白雉四年に見ゆ續紀王に贈正六位上高田首新家從五位上とあり　○川曲、伊勢國河曲郡是なり　○夜曀、原本曀を噎に作る中本に據て改む　○三重郡家、三重は伊勢國三重郡是なり　○鈴鹿關司、軍防令に三關者設鼓吹軍器義解に謂伊勢鈴鹿美濃不破越前愛發等とあり　○山部王、世系詳ならず　○石川王、同上　○路直益人、路直は錄右京諸蕃に路宿禰坂上大宿禰同祖とあり此同姓か

○迹太川、伊勢國朝明郡にあり通證に考地圖今朝開川南別有迹太川出海とあり五鈴遺響朝明郡迹保遙拜所の條に町屋川の上流は星川と稱し下は迹太河なりと云る說を非なりとし今の朝明川なるべしと云り　○望拜天照大神、タヨセニヲガミタマフのタヨセは倭訓栞に手寄の義にや類聚名物考には手寄にて手よりと云に同じと云惠

丙戌(廿六)、旦於朝明(アサケノ)郡迹太川(トホカハ)邊望拜(ベニタヨセニヲガミタマフ)天照大神、是時、益人到之奏曰、所置關者(ニハ)、非山部王石川王、是大津皇子也(ナリ)、便隨益人(ニマキテシメ玉フ)參來矣、大分君惠尺、難波吉士三綱、駒田勝忍人、山邊君安摩呂、小墾田猪手、塩部(ハセツカベノシキ)眞枳、大分君稚臣、根連金身、漆部(ウルシベ)友背之輩從之、天皇大喜、將及郡家、男依乘驛來奏曰、發美濃師三千人得塞不破道、於是天皇美雄依之務、既到

慶法師集神の社に舟よりゆく人の波の高ければたよせにみてぐら奉る所たよめる、たよせとは思はざらなむわたつうみにいのる心は神ぞ知るらむと見ゆ此事釋紀に私記曰按安斗智德日記云二十六日長時於朝明郡迹太川上而拜遥天照大神とあり

○益人到之、原本人の下に益の字あり衍なり北本應本中本に據て削る

○雜波吉士三綱、原本士を上に作る中本に據て改む

○駒田勝忍人、他に見えず勝は尸なればマサと訓むべし

○山邊君安麻呂、山邊君は雄略紀に見ゆ安麻呂は他に見えず

○小墾田猪手、舒明紀卽位前紀に小墾田臣見ゆ猪手は他に見えず

○逆部眠根、原本眠を賦に作る北本應本に據て改む逆部は系詳ならず眠根は他に見えず

○大分君稚臣、原本君を若に作る北本に據て改む

○蜾蠃金身、錄和泉皇別に根連布留宿禰同祖天足

郡家、先遣高市皇子於不破、令監軍事、遣山背部小田、安斗連阿加布、發東海軍、又遣稚櫻部臣五百瀨、土師連馬手、發東山軍、是日、天皇宿于桑名郡家、卽停以不進、是時、近江朝聞大皇弟入東國、其群臣悉愕、京內震動、或遁欲入東國、或退將匿山澤、爰大友皇子謂羣臣曰、將何計、一臣進曰、遲謀將後、不如急聚驍騎乘跡而逐之、皇子不從、則以韋那公磐鍬、書直藥、忍坂直大摩侶、遣于東國、以穗積臣百足、及弟五百枝、物部首日向、遣于倭京、且遣佐伯連男於筑紫、遣樟使主磐手於吉備國、並悉令興兵、仍謂男與磐手曰、其筑紫大宰栗隈王、與吉備國守當摩公廣嶋二人、元有隷大皇弟、疑有反歟、若有不服色、卽殺之、於是磐手到吉備國授符之日、紿廣嶋令解刀、磐手乃拔刀以殺也、男至筑紫、時栗隈王承符對曰、筑紫國者元戍邊賊之難也、其峻城深池臨海守者、豈爲內賊耶、今畏命而發軍、則國空矣、若不意之外有倉卒之事、頓社稷傾之、然後雖百殺臣、何益焉、豈敢背德耶、輙不動兵者、其是緣也、時栗隈王之二子三野王、武家王、佩劍立于側而無退、於是男

按劍欲進、還恐見亡、故不能成事而空還之、東方驛使磐鍬等將及不破、磐鍬獨疑山中有兵、以後之緩之行、時伏兵自山出、遮藥等之後、磐鍬見之知藥等見捕、則返逃走僅得脫、當是時、大伴連馬來田、弟吹負並見時、否以稱病退於倭家、然知其登嗣位者必所居吉野大皇弟矣、是以馬來田先從天皇、唯吹負留謂、立名于一時、欲寧艱難、卽招一二族及諸豪傑、僅得數十人、丁亥、高市皇子遣使於桑名郡家以奏言、遠居御所、行政不便、宜御近處、卽日、天皇留皇后而入不破、比及郡家、尾張國司守小子部連鉏鉤率二萬衆歸之、天皇卽美之、分其軍塞處處道也、到于野上、高市皇子自和暫參迎、以便奏言、昨夜、白近江朝驛使馳至、因以伏兵而捕者、則書直藥、忍坂直大麻呂也、問何所往、答曰、爲所居吉野大皇弟、而遣發東國軍、韋那公磐鍬之徒也、然磐鍬見兵起、乃逃還之、旣而天皇謂高市皇子曰、其近江朝、左右大臣及智謀群臣共定議、今朕無與計事者、唯有幼少孺子耳、奈之何皇子攘臂、按劍奏言、近江羣臣雖多、何敢逆天皇之靈哉、天皇雖獨、則

國彥押人命之後也とあり
金身は他に見えず
○漆部友背、原本友を支に作る北本應本中本に據て改む漆部は用明紀二年に見ゆ
○郡家、朝明の郡家なり五鈴遺響に朝明郡鵤村伊加留我神社より申酉一丁許に赭土の小山あり其麓に小祠あり是天武天皇頓宮地なりと云
○雄依之務、雄依は村國男依なり務はイサヲ、イサミと訓めるに據れば勞の誤か
○到郡家、伊勢の桑名の郡家なり
○東海軍、東海道の軍なり
○東山軍、東山道の軍なり釋紀に私紀曰安斗智德日記云令發信濃兵とあり
○桑名郡家、通證に勢陽雜記曰桑名郡矢田村有小祠相傳祭天武天皇此蓋頓宮跡也と云
○大皇弟、當時の稱にて書きしまゝ改められざりしなり
○韋那公磐鍬、韋那公は宣化紀元年に見ゆ
○書首藥、書直は舒明紀

（一四七頁）に見ゆ
○忍坂直大摩侶、忍坂直は皇極紀三年に見ゆ
○及弟五百枝、北本應本に及の字なし原本五の字を脱す下文に據て補ふ
○物部首日向、物部首は垂仁紀卅九年に見ゆ
○佐伯連男、續紀四に授二大倭守從五位下佐伯宿禰男從五位上一と見ゆ
○樟使主磐手、樟使主は系詳ならず原本磐の上に盤の字あるは衍なり北本應本中本に據て削る
○槃隈王、天智紀十年に以二槃隈王一爲二筑紫帥一とあり
○當麻公廣嶋、當麻公は用明紀元年に見ゆ
○大皇弟、中本此下に也の字あり
○到吉備國、原本吉の字を脱す北本中本に據て補ふ
○武家王、他に見えず
○緩之行、北本應本之の字なし
○吹負、始めて見ゆ十二年の紀に大伴連吹負卒以二壬申年之功一贈二大錦中位一とあり
○遠居御所、通證に遠居之御所也黄讀誤とあり

臣高市賴二神祇一之靈、請二天皇之命一、引二率諸將一而征討、豈有レ距乎、爰天皇譽之、携手撫レ背曰、慎不レ可レ怠、因賜二鞍馬一、悉授二軍事一、皇子則還二和蹔一、天皇於茲行宮興二野上一而居焉、此夜、雷電雨甚、則天皇祈之曰、天神地祇扶レ朕者、雷雨息矣、言訖卽雷雨止之、戊子、天皇往二於和蹔一檢校軍事一而還、己丑、天皇往二和蹔一、命二高市皇子一號令軍衆、天皇亦還二于野上一而居之、是日、大伴連吹負密與留守司坂上直熊毛議之、謂二一二漢直等一曰、我詐稱高市皇子、率二數十騎一自飛鳥寺北路出之臨レ營、乃汝內應之、既而繕兵於百濟家、自南門出之、先奏造熊令二犢鼻一而乘レ馬馳之、俾謂二於寺西營中一曰、高市皇子自不破至、軍衆多從、爰留守司高坂王、及興兵使者穗積臣百足等、據二飛鳥寺西槻下一爲レ營、唯百足居二小墾田兵庫一、運二兵於近江一、時營中軍衆聞二熊叫聲一、悉散走、仍大伴連吹負率二數十騎一劇來、則熊毛及諸直等共與連和、軍士亦從、乃擧二高市皇子之命一、喚二穗積臣百足於小墾田兵庫一、爰百足乘レ馬緩來、逮二于飛鳥寺西槻下一、有レ人曰、下レ馬也、時百足下レ馬遲之、便取二其襟一以引墮、射中二一箭一、因拔レ刀斬而殺之、乃禁二穗積

臣五百枝、物部首日向、俄而赦之置軍中、且喚高坂王、稚狹王而令從軍焉、既而遣大伴連安麻呂、坂上直老、佐味君宿那麻呂等於不破宮、令奏事狀、天皇大喜之、因乃令吹負拜將軍、是時、三輪君高市麻呂、鴨君蝦夷等、及羣豪傑者、如響悉會將軍麾下、乃規襲近江、因以撰衆中之英俊爲別將及軍監、初向乃樂、

○留皇后云々、通證に桑名至於熱田之海路謂間遠灘蓋天皇憶皇后故爲名云々と云り
○小子部連、雄略紀六年（卷上二六八頁）に見ゆ
○鉏鉤、原本鉤を釣に作る下文に據て改む
○野上、美濃國不破郡野上鄉是なり
○和蹔、美濃國各務郡にあり今の不破郡青野原なりと云
○則書直樂、則の字は北本應本中本に據て補ふ　○緩行、原本緩の下に之の字あり北本楓本に據て削る　○則、北本中本に據て補ふ　○爲所居吉野大皇弟云々、詭て天皇の御方なりと答へたるなり　○幼少孺子、原本幼の下小の字あり北本中本に據て削る此時草壁太子は十一歲大津皇子は九歲高市皇子は十八九歲に坐ましゝなり故にかく宣給へり　○天皇雖獨、四字の句なり獨の下に居の字を補へるは非なり　○則天皇、北本楓本則の字なし　○留守司、大倭舊京の留守司なり　○飛鳥寺、高市郡飛鳥村にあり　○臨營、營は留守司高坂王軍を興して屯み居る所なり下文に寺西營また據飛鳥寺西槻下爲營とも見ゆ　○百濟家、吹負が家なり今北葛城郡に百濟村あり　○秦造熊、原本秦を奏に作る北本應本中本に據て改む　○犢鼻、神代紀に見ゆ是は裸體を云近江より急ぎて馳至れるさまにものしたるなり集解に按令下脫著字と云　○穗積臣五百枝、物部首日向、二人共に興兵使なり　○稚狹王、詳ならず七年紀に三位稚狹王薨とあり　○大伴連安麻呂、續紀六に大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨帝深悼之詔贈從二位安麻呂難波朝右大臣大紫長德之弟之子也とあり　○坂上直老、此氏後に忌寸の姓となれり續紀一に贈直廣壹とあり　○佐味君宿那麻呂、原本佐を位に作る諸本に據て改む十四年紀に直廣肆佐味朝臣少（スクナ）麻呂に作る錄右京皇別に佐味朝臣上毛野朝臣同祖豐城入彥命之後也とあり　○三輪君高市麻呂、三輪君は崇神紀八年に見ゆ高市麻呂は續紀三に左京大夫從四位上大神朝臣高市麻呂卒贈從三位とあり懷風藻には從三位中納言と見えたり　○鴨君蝦夷、原本鴨の下茂の字あり北本應本に據て削る中本には鴨を甘茂に作る蝦夷は持統紀九年に以直廣參贈賀茂朝臣蝦夷并賜賻物一本位勤壹とあり　○因以、此二字北本應本中本になし　○別將及軍監、別將の傍訓に據れば別は副の誤ならむか、軍防令に凡將帥出征兵滿一萬人以上將軍一人副將軍二人軍監三人とあり軍監の下原本庚寅の二字あり集解に據て釋述義刪とあるに從ふ

秋七月庚寅朔辛卯、天皇遣紀臣阿閉麻呂、多臣品治、三輪君子首、置始連菟、率數萬衆、自伊勢大山越之向倭、且遣村國連男依、書首根麻呂、和珥部臣君手、膳香瓦臣安倍、率數萬衆、自不破出、直入近江、恐其衆

（七月）置始連菟、此氏孝德紀白雉五年に見ゆ續紀七に贈小錦上置始連宇佐支息正八位下虫麻呂賜田とあり
○伊勢大山、鈴鹿山なり但此なるは其山續きの鹿

太越なり
○以赤色著衣上、通證に荒井氏曰此後世笠標之所由起也とあり
○屯于莉萩野、于の字は北本應本中本に據て補ふ
○令守倉歷道、倉歷は近江國甲賀郡蔵部郷あれど此は伊賀國伊賀郡倉部なるべし
○犬上川、近江國犬上郡の中央を流るゝ川なり
○山部王云々見殺、山部王は此軍將に任ぜられ給ひしが變心して吉野方にならむと爲給へる事などのありて殺され給ひしにやあらむ
○羽田公八國、原本八を矢に作る北本及十二年紀に據て改む錄左京皇別に八多眞人出自誥應神皇子稚野毛二俣王とあり十二年十月紀に羽田公賜姓曰眞人朱鳥元年紀に羽田眞人八國卒以壬申年之功贈直大壹位とあり
○入越、八國が大津朝の將軍なりしを恥かしめ給はず更に將軍に拜して誠を盡めに遣はし給ひしなり
○玉倉部、記景行天皇の

與近江師難別、以赤色著衣上、然後別命多臣品治、率三千衆屯于莉萩野、遣田中臣足麻呂令守倉歷道、時近江命山部王、蘇賀臣果安、巨勢臣比等、率數萬衆將襲不破、而軍于犬上川濱、山部王爲蘇賀臣果安、巨勢臣比等見殺、由是亂以軍不進、乃蘇賀臣果安自犬上返刺頸而死、是時近江將軍羽田公八國、其子大人等率己族來降、因授斧鉞拜將軍、卽北入越、先是近江放精兵、忽衝玉倉部邑、則遣出雲臣狛擊追之、壬辰、將軍吹負屯于乃樂山上、時荒田尾直赤麻呂啓將軍曰、古京是本營處也、宜固守、將軍從之、則遣赤麻呂、忌部首子人令戍古京、於是赤麻呂等詣古京而解取道路橋板、作楯竪於京邊、衢以守之、癸巳、將軍吹負與近江將大野君果安戰于乃樂山、爲果安所敗、軍卒悉走、將軍吹負僅得脫身、於是果安追至八口而視京、每街竪楯疑有伏兵、乃稍引還之、甲午、近江別將田邊小隅越鹿深山、而卷幟抱鼓詣于倉歷、以夜半之、衝梅穿城、劇入營中、則畏己卒與足摩侶衆難別、以每人令言金、仍拔刀而毆之、非言金乃斬耳、於是足摩侶衆悉亂之、事忽起不知所爲、唯足摩

段に倭建命命到玉倉部之清水云々とあり
○出雲臣狛、續紀大寶二年八月授出雲臣狛從五位下とあり
○擊追之、下文に初將軍吹負向乃樂至稗田之日云々是時河內國司來目臣塩籠有歸於不破宮之情以集軍衆爰韓國到之、密聞其謀而將殺鹽籠、鹽籠知事漏乃自死焉とあるは此日の事なり合せ考ふべし
○壬辰、是より大和にての事なり
○荒田尾直赤麻呂、楓本中本赤を明に作る次も同じ錄和泉皇別に荒田尾直高魂命五世孫釵根命之後也とあり　○古京、飛鳥岡本宮　○宜固守、原本固を國に誤る中本楓一本に據て改む　○忌部首子人、續紀八に散位從四位上忌部宿彌子人卒とあり　○大野君果安、錄右京皇別に大野朝臣豐城入彥命四世孫大荒田別命之後也十三年紀に大野君賜姓曰朝臣とあり　○八口、詳ならず古京に近き所なるべし集解に八田に改作り城下郡の地名なりとす　○命、楓本金に作る字書に命は人在山上と注せり　○京、上に所謂古京なり　○田邊小隅、詳ならず　○鹿深山、原本鹿を麻に作る北本應本中本に據て改む　○抱鼓、原本抱を拖に作る北本應本中本に據て改む　○倉歷、上に命守倉歷道と見ゆ　○衒梅、應本及紀略梅を枚に作るクチキは口木なり釋紀に私記曰師說梅與枚同也字書に枚如箸軍士銜之禁其語也とあり　○卒、原本卒を率に作る諸本に據て改む　○足麻侶、原本摩を麻に作る諸本及下文に據て改む　○令言金、所謂暗號なり　○莉萩野營、上文に命多臣品治率三千衆屯莉萩野營とあり　○急到、原本急を忽に作る北本應本中本に據て改む　○男依等、上文二日の條に男依等自不破出直入近江とあり　○息長橫河、近江國坂田郡にあり續紀十二に從不破發至坂田郡橫川頓宮と見ゆ息長川は今能登瀨川と云湖の出口にては天川とも云橫河は後の醒井の宿なりとぞ　○鳥籠山、近江國犬上郡にあり萬葉四に淡海路乃鳥籠之山と詠み今鳥居本村の南大字原なる正法寺山を云とぞ　○是日、尙九日にて是より大和の事に係れり

侶聰知之獨言金、以僅得免、乙未、小隅亦進欲襲莉萩野營而急到、爰將軍多臣品治遮之、以精兵追擊之、小隅獨免走焉、以後遂復不來也、丙申、男依等與近江軍戰息長橫河破之、斬其將境部連藥、戊戌、男依等討近江將秦友足於鳥籠山斬之、是日、東道將軍紀臣阿閉麻呂等、聞倭京將軍大伴連吹負爲近江所敗、則分軍以遣置始連菟、率千餘騎而急馳倭京、

○壬寅、これより近江の事なり
○安河、近江國甲賀郡に源を發し野洲郡を經て湖水に注ぐ故に野洲川と云近江第一の長流なり
○獲、生擒なり

壬寅、男依等戰于安河濱大破、則獲社戶臣大口、土師連千嶋、丙午、討栗太軍追之、辛亥、男依等到瀨田時大友皇子及群臣等共營於橋西而大成陣、不見其後、旗幟蔽野埃塵連天、鉦鼓之聲聞數十里、列弩亂發、

○社戸臣大口、孝德紀大化元年に阿倍渠曾倍臣と見ゆ
○栗太軍、栗太は近江國栗太郡是なり栗太軍は近江方の軍なり云
○瀨田、近江國栗太郡にあり
○群臣等、略記に亦率數萬兵とあり
○營於橋西、勢田橋の西なり
○旗幟蔽野、以下十六字後漢書光武紀に據れり列弩以下十字亦同じ
○列弩、抄調度部に兼名苑注云弩(於保由美)黃帝造也とあり
○大分君稚臣、八年紀に大分君稚見卒當壬申年大役爲先鋒之破瀨田營由是功贈外小錦上位とあり
○將軍智尊、原本將の字なし北本應本に據て補ふ
○粟津岡、粟津は勢多橋の西にあり
○三尾城、近江國高嶋郡にあり繼體紀卽位前紀に見ゆ
○大養連五十君、孝德紀大化二年に見ゆ
○谷直鹽手、錄山城諸蕃に谷直漢師建王之後也と

矢下如雨、其將智尊率精兵以先鋒距之、仍切斷橋中須容三丈置一長板設有踢板度者、乃引板將墮、是以不得進襲、於是有勇敢士曰大分君稚臣、則棄長矛以重擐甲、拔刀急蹈板度之、便斷著板綱以被矢入陣、衆悉亂而散走之、不可禁、時將軍智尊拔刀斬退者、而不能止、因以斬智尊於橋邊、則大友皇子左右大臣等、僅身免以逃之、男依等卽軍于粟津岡下、是日、羽田公矢國、出雲臣狛、合共攻三尾城降之、壬子、男依等斬近江將犬養連五十君、及谷直鹽手於粟津市、於是大友皇子走無所入、乃還隱山前、以自縊焉、時左右大臣及群臣皆散亡、唯物部連麻呂且一二舍人從之、初將軍吹負向乃樂至稗田之日、有人曰、自河內軍多至、則遣坂本臣財、長尾直眞墨、倉墻直麻呂、民直小鮪、谷直根麻呂、率三百軍士、距於龍田、復遣佐味君少麻呂、率數百人屯大坂、遣鴨君蝦夷率數百人守石手道、是日、坂本臣財等次于平石野、時聞近江軍在高安城而登之、乃近江軍知財等來、以悉焚稅倉皆散亡、仍宿城中、會明臨見西方、自大津丹比兩道軍衆多至、顯見旗幟有人曰、近江將壹伎史韓國之

師也、財等自高安城降、以渡衛我河、與韓國戰于河西、財等衆少不能距、先是、遣紀臣大音令守懼坂道、於是財等退懼坂道而居大音之營、是時、河內國司守來日臣鹽籠有歸於不破宮之情、以集軍衆、爰韓國到之、密聞其謀而將殺鹽籠、鹽籠知事漏、乃自死焉、經一日、近江軍當諸道多至、卽並不能相戰、以解退、是日、將軍吹負爲近江所敗、以獨率一二騎走之、逮于墨坂、遇逢菟軍至、更還屯金綱井、而招聚散卒、於是聞近江軍至自大坂道、而將軍引軍如西、到當麻衢、與壹伎史韓國軍戰葦池側、時有勇士來日者、拔刀急馳直入軍中、騎士繼踵而進之、則近江軍悉走之、追斬甚多、爰將軍令軍中曰、其發兵之元意非殺百姓、是爲元凶、故莫妄殺、於是韓國離軍獨逃也、將軍遙見之令來日以俾射、然不中、而遂走得免焉、將軍更還本營、時東師頻多臻、則分軍各當上中下道而屯之、唯將軍吹負親當中道、於是近江將犬養連五十君自中道至之留村屋、而遣別將廬井造鯨、率二百精兵衝將軍營、當時麾下軍少以不能距、爰有大井寺奴名德麻呂等五人從軍、卽德麻呂等爲先鋒以進

あり
○走無所入、懷風藻に時經亂離悉從煨燼とあれは近江京は兵火に罹りし故に入らせ給ふべき所も無りしならむ
○山前、廟陵記に山前長等山之前也とあり今の三井寺の地なり
○日絵、此天皇御終焉の地及御陵所は上にも云る如く山前にて別所村に在り陵墓一覽にも滋賀郡別所村塚字龜つかと稱す元は三井寺山內の地なりとぞ其地は天皇崩給ひにければ與多王計ひ給ひて先づ御骸を其地に葬奉り置きて天武天皇三年に至て遺詔の如く其陵地に圓城寺三井寺を建立させて與多王に司り奉仕しめ給へるなり
○物部連麻呂、五年紀に大乙上にて爲斬羅大使十年紀に授小錦下位續紀に養老元年三月癸卯左大臣正二位石上朝臣麻呂薨帝深悼惜焉爲之罷朝百姓追慕無不痛惜焉人臣泊瀨朝倉朝廷大連物部目之後雞波朝衛部大花上宇麻呂之子也とあり
○初將軍吹負云々、是よ

り立返りて又大和にての事を記せるなり下文によりて推考ふるに七月庚寅朔に當れり

○稗田、神名式大和國添上郡賣太神社稗田村にあり今平和村大字稗田なり

○軍多至、近江の軍なり

○坂本臣財、坂本臣は安康紀に見ゆ財は二年紀に大錦上坂本財臣卒由壬申年之勞贈小紫位とあり

○長尾直眞墨、系詳ならず

○倉墻直麻呂、姓氏錄に椋垣朝臣あれど異姓なり氏族志に按坂上系圖引姓氏錄藏垣氏系出志努子刀禰又有無姓者見外記日記又見除目大成鈔蓋皆是族也と云り

○民直小鮪、六月に出づ

○龍田、神武紀戊午年に出づ龍田より河内へ越ゆる今の龍野越なり

○大坂、大和國葛上郡大坂鄕にあり記垂仁の段に大坂戸とある是なり

○鴨君、中臣鴨を甘茂に作る

○石手道、集解に按河内志曰間道岩室イハヤ嶺葛下郡堺至山田二十町蓋

射之、鯨軍不能進、是日、三輪君高市麻呂、置始連菟、當上道戰于箸陵、大破近江軍而乘勝、兼斷鯨軍之後、鯨軍悉解走、多殺士卒、鯨乘白馬以逃之、馬墮泥田不能進行、則將軍吹負謂甲斐勇者曰、其乘白馬者、盧井鯨也、急追以射、於是甲斐勇者馳追之比及鯨、々急鞭馬、馬能拔以出泥、卽馳之得脫、將軍亦更還本處而軍之、自此以後、近江軍遂不至、先是軍金綱井之時、高市郡大領高市縣主許梅、儵忽口閉而不能言也、三日之後、方著神以言、吾者高市社所居名事代主神、又牟狹社所居名生靈神者也、乃顯之曰、於神日本磐余彥天皇之陵奉馬及種々兵器、便亦言、吾者立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉、今且立官軍中而守護之、且言、自西道軍衆將至之、宜慎也、言訖則醒矣、故是以便遣許梅而祭拜御陵、因以奉馬及兵器、又捧幣而禮祭高市身狹二社之神、然後、壹伎史韓國自大坂來、故時人曰、二社神所教之辭適是也、又村屋神著祝曰、今自吾社中道軍衆將至、故宜塞社中道、故未經幾日、盧井造鯨軍自中道至、時人曰、卽神所教之辭是也、軍政既訖、將軍等擧是三、

神教言而奏之、卽勅登進三神之品以祠焉、

此とあり
○平石野、河内志に平石嶺在平石村上方葛下郡堺とあり今南河内郡に平石あり白木村と稱す　○登之、京極本に登を發に作ると云　○焚稅倉、原本稅の上に秋の字あり北本に據て削る　○仍宿城中、高安の空城に入りて宿れるなり　○會明、二日辛卯なり　○大津、式に河内國丹比郡大津神社あり河内志に在丹下宮邑今稱大宮とあり今南河内郡高鷲村なり　○丹比、河内國丹比郡なり原本丹を舟に作る北本楓本中本に據て改む　○兩道、高安郡より西方に當れり　○壹伎史韓國、壹伎史は舒明紀四年に見ゆ　○衞我河、河内志に在志紀郡とあり　○紀臣大音、傳詳ならず　○令守懼坂道、原本令を合に作る北本應本中本に據て改む懼坂は萬葉六に手向爲等恐乃坂爾幣奉とある恐乃坂にて略解に之を大和より河内へ越ゆる坂なりとす　○退懼坂道、原本道の字なし釋紀に據て補ふ　○來目臣鹽籠、來目臣は孝德紀大化元年に見ゆ鹽籠は詳ならず　○經一日、中一日を隔てゝなり卽ち癸巳四日　○以解退、大音等が戰に堪へずして近江の軍解退せるなり　○率一二騎走之、上文に癸巳將軍吹負僅得脫身と見えし時の事なり　○墨坂、大和國宇陀郡なり神武紀崇神紀に見ゆ同郡萩原の西にありて伊賀伊勢へ越ゆる坂路なり　○金綱井、集解に據下文蓋高市郡地名高市郡有飛鳥井井谷井遊部井桑原井秀泉井御蔭井等此時井施鐵索故有此名と云り抄天地部水土類に辨色立成云桔槔、加奈都奈爲)鐵索井也とあり　○將軍、吹負なり　○當麻衢、當麻は大和國葛下郡なり其舊趾は大和志に今葛下郡長福寺村有衞池廣三十畝卽衞舊趾とあり今北葛城郡當麻村に當麻寺あり　○葦池、大和志に葛下郡葦田池在王寺村廣三百三十餘畝とあり　○俾財、俾は衍ならむ　○本營、集解に按據前文本營卽高市郡岡本とあり　○上中下道、集解に按據後文上道城上郡、中道城下郡、下道高市郡と云　○村屋、城下郡の地名なり式に城下郡村屋坐彌富都比賣神社あり今磯城郡川東村大字森屋あり其附近をかけて云　○廬井造鯨、姓氏錄に見えず鯨も詳ならず　○衞將軍營、原本衞を衛に作る應本楓本中本に據て改むこれも高市郡なり　○大井寺、詳ならず按に敏達紀元年に百濟大井家あり是は河内國錦部郡百濟鄕にあり今其地に大井村あれば其地に在りし寺なるべし　○箸陵、倭迹々姬命の御墓なり(崇神紀十年に見ゆ)大和國磯城郡織田村大字箸中にあり　○本處、高市郡の本營　○高市縣主、記に天津日子根命者高市縣主之祖也(姓氏錄亦同じ)とあり　○高市社、原本社を杜に作る北本楓本中本に據て改む神名式に大和國高市郡高市御縣坐鴨事代主神社志に在高殿村(今鴨公村大字高殿)今稱大宮とあり　○牟狹社、北本牟を身に作る神名式に大和國高市郡牟佐坐神社志に在瀨村(今畝傍町大字見瀨)今稱境原天神とあり　○生靈神、原本靈を雷に作る應本及釋紀に據て改む(北本には雷をミタマと訓み中本には靈歟と傍書す)伴氏の說に生靈は生產日神に同じく事代主神と共に神祇官に坐御巫祭神八座の中なりと云り　○顯之、神意を顯すか云　○立皇御孫命云々、皇御孫命は神より天皇を申奉らせ給ふ稱なり天皇の吉野を發し給へるより二神共前後に立ちて守護し奉り不破に送り奉りて還り坐しぬとなり　○而守護之、原本而の字なし中本に據て補ふ現在も亦御軍の中に立ちて守護し奉り給ふとなり　○自西道云々、近江方の壹伎史韓國が西道より至らむ事を豫め示し給へるなり　○祭拜御陵云々、是は金綱井の營にて吹負か計ひて捧幣せしなり　○村屋神、神名式に城下郡村屋坐彌富都比賣神社大和志に在藏堂村今稱天王とあり藏堂は今川東村の大字となり森屋と隣接す　○宜塞社中道、道は上文に上中下の道とある中道なり　○軍政既訖、此時の亂治りて後の事を因に此に載せられたるなり　○登進三神之品以祠、三神は上の高市牟狹村屋三社の神、品を登進とは當時の恒例の祭典を更めて此度の守護の報賽に其品を登進て祭り給へる由なるべし當時神に位階を授け給へる事は未だあらず

○辛亥、廿二日也前に廿二日壬子迄の事を記し遡て大和にての事を記したるが其記事訖りし故に更に辛亥と日を擧げ以下日

辛亥、將軍吹負既定倭地、便越大坂往難波、以餘別將等各自三道進至于山前屯河南、卽將軍吹負留難波小郡、而仰以西諸國司等、令進官

次を逐て記したるなり
○往難波、大坂を越えて河内に入りそれより難波に往きしなり
○以餘別將、上の大和にての條の注に吹負拜將軍是時三輪君高市麻呂云々及群書傳者云々爲別將軍監とある人々なり原本將の下に軍の字あり北本中本に據て削る
○自三道進、上に見えたる上中下の道より近江に進み入たるなり一說には三道とは一は難波、一は山城、一は伊賀よりなるべしと云り
○卽將軍留難波小郡、卽及留の字は北本應本中本に據て補ふ小郡は孝德紀大化三年に見ゆ
○以西諸國、難波以西の國々なり
○官鑰驛鈴傳印、官鑰は國郡の諸庫の鍵なり驛鈴傳印は國司に附ぜられし驛鈴傳印にて使を遣し兵器糧食を輸送するには最も必要のものなれば一時之を官に返上せしめて近江方に應ずることを得ざらしめられしなり
○筱浪、原本筱を筱に作る類史に據て改む應本中

鑰驛鈴傳印、癸丑、諸將軍等悉會於筱、筱、此云佐々、浪、而探捕左右大臣及諸罪人等、乙卯、將軍等向於不破宮、因以捧大友皇子、頭而獻于營前、八月庚申朔甲申、命高市皇子宣近江群臣、犯狀則重罪八人坐極刑、仍斬右大臣中臣連金於淺井田根、是日、左大臣蘇我臣赤兄、大納言巨勢臣比等、及子孫、并中臣連金之子、蘇我臣果安之子悉配流、以餘悉赦之、先是尾張國司守少子部連鉏鉤匿山自死之、天皇曰、鉏鉤有功者也、無罪何自死、其有隱謀歟、丙戌、恩勅諸有功勳者而顯寵賞、九月己丑朔丙申、車駕還宿伊勢桑名、丁酉、宿鈴鹿、戊戌、宿阿閉、己亥、宿名張、庚子、詣于倭京而御嶋宮、癸卯、自嶋宮移岡本宮、是歲、營宮室於岡本宮南、卽冬遷居焉、是謂飛鳥淨御原宮、冬十一月戊子朔辛亥、饗新羅客金押實等於筑紫、卽日、賜祿各有差、十二月戊午朔辛酉、選諸有功勳者增加冠位、仍賜小山位以上各有差、壬申、船一隻賜新羅客、癸未、金押實等罷歸、是月、大紫韋那公高見薨、

本篠に作る筱浪は志賀の地方の總名なり

○捧、應本及釋紀になし

（八月）八月、按に扶桑略記に八月天皇幸二于野上宮一立二年號一爲二朱鳥元年一大宰府獻二三足赤雀一仍爲二年號一とあり水鏡亦同じ然れど年號の事は未だ徧く天下に行はれざりしが故に此紀には漏したるなるべし續紀九神龜元年の詔に白鳳以來朱雀以前年代玄遠とあれば年號のありしこと明なり

○淺井田根、淺井は近江國の郡名田根は郡に田根郷あり今田根村（東淺井郡）と云其處なるべし北本應本及類史には根の字なく中本及紀略本書に同じ

○果安之子、父果安は軍中に死せり

○配流、令義解に凡配流之人官位皆悉追取とあり此所に出たる人々は天智紀十一年の誓盟に與りし者なり然るを此五人の中紀大人臣一人は此に見えず紀中にも記せる事なきは御軍の事起れる頃より竊に吉野に心を寄せ時を窺ひて逃匿れて在りしなるべく紀氏系圖に大口臣子大人大納言天武十五六二薨とあるを詳なる證なると長等の山風に云（九月）阿閉、原本阿を河に作る北本應本中本に據て改む伊賀國阿拜郡にあり地理志料に阿閉郷は敢國神社所在の地にて後の一宮郷なりと云一宮郷は一宮千歳佐那具外山の諸村なれば此の御舊蹟は蓋佐那倶附近なるべし　○名張、伊賀國名張（今名賀）郡に名張町あり其地なるべし　○飛鳥淨御原宮、大和國十市高市兩郡古迹考に高市郡上屋村は淨御村なり人皇四十代天武天皇の皇居也とあり今の高市郡高市村大字上居村なり　○移嵩本宮、嶋宮に三宿して此宮に移り給へり嵩本宮は大津に遷都の後離宮として遺し置かれたるべし　○各有差、二年紀にも二月乙酉有二勳功一人等賜二爵有一差とありかくて壬申役に出でし人々の官位を進め食封を賜ふこと持統紀に見ゆ

日本書紀卷第廿八

【二年】(二月)壇場、高御座なり
○草壁皇子尊、通證に當時特貴故曰尊稱作日下太子又曰日並皇子文武元正之皇考也萬葉には日雙斯皇子命又日並皇子ともあり御追號の事は續紀廿一に天平寶字二年八月日並知皇子命追崇尊號奉稱岡宮御宇天皇と見ゆ
○大田皇女、天智天皇の皇女
○大來皇女、齊明紀七年に大伯に作る續紀二に大寶二年十二月大伯内親王薨とあり
○大津皇子、持統紀即位前紀に皇子大津謀反發覺賜死とあり
○大江皇女、天智天皇の皇女

日本書紀卷第廿九

ヤマトフミノマキノツイデハタチアマリコノマキニアタルマキ

天淳中原瀛眞人天皇下　天武天皇

二年(癸酉)春正月丁亥朔癸巳、置酒宴群臣、二月丁巳朔癸未、天皇命有司設壇場、卽帝位於飛鳥淨御原宮、立正妃爲皇后、后生草壁皇子尊、先納皇后姉大田皇女爲妃、生大來皇女與大津皇子、次妃大江皇女、生長皇子與弓削皇子、次妃新田部皇女、生舍人皇子、又夫人藤原大臣女氷上娘、生但馬皇女、次夫人氷上娘、弟五百重娘、生新田部皇子、次夫人蘇我赤兄大臣女大蕤娘、生一男二女、其一曰穗積皇子、其二曰紀皇女、其三曰田形皇女、天皇初娶鏡王女額田姬王、生十市皇女、次納胷形君德善女尼子娘、生高市皇子命、次完人臣大麻呂女櫻媛娘、生二男二女、其一曰忍壁皇子、其二曰磯城皇子、其三曰泊瀨部皇女、其四

曰託基皇女、乙酉、有勳功人等、賜爵有差、三月丙戌朔壬寅、備後國司、獲白雉於龜石郡而貢、乃當郡課役悉免、仍大赦天下、是月、聚書生、始寫一切經於川原寺、夏四月丙辰朔己巳、欲遣待大來皇女于天照大神宮、而令居泊瀨齋宮、是先潔身、稍近神之所也、五月乙酉朔、詔公卿大夫及諸臣連并伴造等曰、夫初出身者、先令仕大舍人、然後選簡其才能、以充當職、又婦女者、無問有夫無夫及長幼、欲進仕者聽矣、其考選准官人之例、癸丑、大錦上坂本財臣卒、由壬申年之勞、贈小紫位、

○長皇子、續紀六に靈龜元年六月一品長親王薨天武天皇第四之皇子也とあり　○弓削皇子、續紀一に文武天皇三年七月弓削皇子薨天武天皇之第六皇子也とあり。　○新田部皇女、天智天皇の皇女　○舍人皇子、續紀十二に天平七年十一月知太政官事一品舍人親王薨賜太政大臣親王天淳中原瀛眞人天皇第三皇子也同廿二に天平寶字三年六月詔曰今以後追皇舍人親王宜稱崇道盡敬皇帝とあり也仁私記序には第五子とあり　○但馬皇女、續紀四に和銅元年六月三品但馬內親王薨天武天皇之皇女也とあり　○新田部皇子、續紀十二に天平七年九月一品新田親王薨天淳中原瀛眞人天皇之第七子也とあり　○大蕤娘、續紀九に神龜元年七月夫人正三位石川朝臣大蕤比賣薨とあり北本應本中本大を太に作る　○穗積皇子、續紀六に靈龜元年七月知太政官事一品穗積親王薨天武天皇第五子也とあり　○紀皇女、萬葉十二に紀皇女竊嫁高安王とあり　○田形皇女、續紀十に神龜五年三月二品田形親王薨天淳中原瀛眞人天皇之皇女也とあり　○鏡王女額田姬王、原本女字なし北本應本中本及紀略　據て補ふ鏡王は系詳ならず集解に疑舒明天皇孫とあり額田姬王は始め天武天皇にめされて十市皇女を生み後又天智天皇の妃となられたり　○十市皇女、天皇の御長女なり天武天皇の未だ皇子に坐しゝ時の皇女にて大友皇子に嫁ぎ給ひて葛野皇子を生給へり然るに壬申の年密に御書もて吉野宮に告し給ふ事あり此事を扶桑略記に世傳大友皇子之妃是天武天皇女也故竊以謀事隱遁消息也と記せり本紀七年に薨ず　○曾形君德善、原本曾を凶月の二字に作る北本應本中本に據て改む曾形君は神代紀に見ゆ　○高市皇子命、持統紀四年太政大臣同十年に後皇子尊薨とあり此皇子も儲位に坐しければ前の皇太子草壁皇子に對へて後皇子尊と稱せるなりされば此に尊とあるべきに命と書けるに就きては伴氏の說あり　○完人臣、崇峻紀三年に見ゆ　○嬪媛娘、原本欟を擬に作る北本中本及類史に據て改む欟は字鏡集に欟穀同カヂと見ゆ　○忍壁皇子、續紀には刑部萬葉には忍坂部に作る續紀三に慶雲二年五月三品忍壁親王薨天武天皇之第九皇子也とあり　○磯城皇子、朱鳥元年八月加二百戶と見えたるのみ天智天皇の皇子に施基皇子あり續紀には志紀又は志貴親王とあり混ふべからず　○泊瀨部皇女、續紀十四に天平十三年三月三品長谷部內親王薨天武天皇之皇女也とあり此皇女の事萬葉二に見ゆ　○託基皇女、續紀十八に天平勝寶三年正月一品多紀內親王薨天武天皇之皇女也とあり　(三月)龜石郡、抄國郡部に備後國神石郡加女志とあり　○書生、學令に凡書學生以寫書上中以上者聽貢義解に其書生唯以筆迹巧秀爲宗不下以習解字標爲業與唐法異也とあり　○一切經、推古紀に見ゆ　○川原寺、大和國高市郡川原村にあり孝德紀白雉四年に見ゆ　(四月)欲遣侍大來皇女云々、年中行事秘抄に天武天皇白鳳元年四月十四日以大來皇女獻伊勢神宮依合戰願とあり舒明天皇以來五代齋宮を奉らせ給はざりしを再興せさせ給へるなり　○泊瀨齋宮、大和志に

城上郡泊瀬齋宮古蹟在泊瀬氣比坂下とあり是後世野宮の櫃輿なり齋宮に關する事は齋宮式に詳なり　（五月）五月、原本此上に夏字あり衍なれば削る　○出身、宮仕のことなり選叙令に凡秀才出身上上第正八位上、上中正八位下云々とあり　○大舍人、職員令左右大舍人寮の義解に謂大舍人是供奉之人云々とあり　○選簡其才能、其の字は應本中本及類史に據て補ふ　○當職、其才能に適當なる官職を云　○無夫、原本夫を吏に作る北本中本に據て改む　○欲進仕者聽矣、後宮職員令に凡諸氏氏別貢女皆限三十以下十三以上雖非氏名欲自進仕者聽とあり　○考選、品定なり　○准官人之例、原本官を宮に作る北本應本中本に據て改む　○贈小紫位、贈位なり

（閏六月）沙宅昭明、天智紀十年昭を紹に作る　○外小紫位、位の内外に就ては元年紀内小七位の下に云り　○大佐平位、佐平は齊明紀に見ゆ（附錄參照）　○久麻藝都羅宇麻、通證に三王子之名釋爲二人恐不是とあり　○韓阿飡、原本阿を河に作る北本中本に據て改む　○大舍、新羅官名（附錄參照）　○一吉飡、同上　○韓奈末、原本末を未に作る中本に據て改む　○（注）調使、原本使を訣に誤る北本應本に據て改む　○貴于寶眞毛二人の名、北本于を干に作る　（八月）紀臣阿閇麻呂、原本麻呂を臣の一字に作る元年七月辛卯の條に紀臣阿閇麻呂と見え本紀三年二月にも紀臣河閇麻呂卒とありこに據て改む

閏六月乙酉朔庚寅、大錦下百濟沙宅昭明卒、爲人聰明叡智、時稱秀才、於是天皇驚之、降恩以贈外小紫位、重賜本國大佐平位、壬辰、耽羅遣王子久麻藝、都羅、宇麻等朝貢、己亥、新羅遣韓阿飡金承元、阿飡金祇山、大舍霜雪等賀騰極、并遣一吉飡金薩儒、韓奈末金池山等弔先皇喪（云調使）其送使貴于寶、眞毛、送承元薩儒於筑紫、戊申、饗貴于寶等於筑紫、賜祿各有差、卽從筑紫返于國、秋八月甲申朔壬辰、詔在伊賀國紀臣阿閇麻呂等、壬申年勞勳之狀而顯寵賞、癸卯、高麗遣上部位頭大兄邯子、前部大兄碩于等朝貢、仍新羅遣韓奈末金利益、送高麗使人于筑紫、戊申、喚賀騰極使金承元等中客以上廿七人於京、因命大宰詔耽羅使人曰、天皇新平天下、初之卽位、由是唯除賀使、以外不召、則汝等親所見、亦時寒波嶮、久淹留之、還爲汝愁、故宜疾

○上部位頭大兄郡子、上部は方名位頭大兄は官位なり郡子は楓本傍注に交本寒師とありと見ゆ　○碩寸、中本活字本寸を干に作る　○波嶮、中本波を涙に作る　○其爵者大乙上、廿六階の第十九階なり國王及使者に同階の位を賜ふこと不審なり大乙上は使者に賜ひし階か考ふべし　○更以錦繡云々、集解に按大乙上第六位也黑冠以車形錦裁冠之緣言錦繡潤飾者是也とあり

（十一月）筑紫大郡、詳ならず持統紀に筑紫小郡見ゆされば難波の大郡小郡と同じく筑紫にも大郡小郡を置かれしならむ

（十二月）大嘗、略記には十一月大嘗會丹波播磨供奉其事とありて月違へり神祇令に凡大嘗者毎世一度とあり此なるは御一代一度の大嘗なり大嘗は北本右傍にオホナヘ、オホヘ左傍にオホニヘ私記とあり釋紀前田本にオホニヘ私記說（板本によオホムベ）とあり私記の訓正しかるべし記傳にニヘは新饗ニヒアヘ）を約めたるにて新稻を以て饗ヲ（する意なりと云　○播磨丹波、此二國は所謂悠紀主基の國なり　○紀臣訶多麻呂、下に堅麻呂とあり　○高市寺、大和志高市郡古蹟に廢大官大寺小山村東礎石尙存云々此寺元廣瀨（へ北葛城）郡百濟村に在りて熊凝道場とも百濟大寺とも云り後平城に移して大安寺と云　○知事、通證に代醉編曰梵云羯磨陀一此云知事僧壇嚢抄曰都維那翻云寺護又云知事とあり　○（注）大官、原本官を宮に作る北本應本楓本に據て改む　○小僧都、此に始て見ゆ應本小を少に作る　○佐官、僧尼令佐官の義解に謂僧綱之錄事也とあり　○有四佐官、通證に就高市大寺而言とあり　○太歲、原本太を大に作る北本應本中本に據て改む

【三年】百濟王昌成、續紀廿七天平神護二年六月百濟王敬福の傳に義慈王

歸、仍在國王、及使者久麻藝等肇賜爵位、其爵者大乙上、更以錦繡潤飾之、當其國之佐平位、則自筑紫返之、九月癸丑朔庚辰、饗金承元等於難波、奏種々樂、賜物各有差、冬十一月壬子朔、金承元罷歸之、壬申、饗高麗、邯子、新羅薩儒等於筑紫、大郡、賜祿各有差、十二月壬午朔丙戌、侍奉大嘗中臣忌部及神官人等、并播磨丹波二國郡司、亦以下人夫等悉賜祿、因以郡司等各賜爵一級、戊戌、以小紫美濃王、小錦下紀臣訶多麻呂、拜造高市大寺司、今大官大寺是時知事福林僧由老辭知事、然不聽焉、戊申、以義成僧爲小僧都、是日、更加佐官二僧、其有四佐官始起于此時也、是年也太歲癸酉、

（癸酉）三年春正月辛亥朔庚申、百濟王昌成薨、贈小紫位、二月辛巳朔戊申、

紀臣阿閉麻呂卒、天皇大悲之、以勢壬申年之役、贈大紫位、三月庚戌朔丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、卽貢上、由是大國授小錦下位、凡銀有倭國、初出于此時、故悉奉諸神祇、亦周賜小錦以上大夫等、秋八月戊寅朔庚辰、遣忍壁皇子於石上神宮、以膏油瑩神寶、卽日勅曰、元來諸家貯於神府寶物、今皆還其子孫、冬十月丁丑朔乙酉、大來皇女自泊瀨齋宮向伊勢神宮、

の子禪廣其子昌成とあり
敬福の父なり
○贈小紫位、原本贈を賜に作り小の上此の字あり
北本應本に據て訂す
(二月)贈大紫位、原本贈を賜に作る北本應本に據て改む
(三月)忍海造、神功紀天智紀に出づ
○銀始出、三代實錄十一に大宰府言對馬嶋銀穴在下縣郡自高山底穿鑿巖石四十許丈云々神名式に下縣郡銀山上神社銀山神社あり銀は下縣郡より出でしなり ○亦周、原本周を同に作る中本及紀略に據て改む (八月)膏油、職員令主油司義解に謂肉脂爲膏自餘爲油兵庫式に猪膏五合瑩刀料胡麻油一合洗刷料などあり ○卽日、原本日を曰に作る北本應本中本に據て改む ○神府、神庫なり垂仁紀八十七年に神庫此云保玖羅とあり ○今皆、原本今を令に作る北本應本中本に據て改む (十月)大來皇女、原本女を子に作る北本應本中本及紀略類史に據て改む ○自泊瀨齋宮云々、齋宮式に凡齋內親王在京潔齋三年卽每朔日著木綿鬘參入齋殿遙拜大神云々齋終之後乃向伊勢大神宮とあり三年の潔齋終て伊勢に參向せられしなり

【四年】大學寮、オホツカサとあれど中本にフムヤとあるが當れり職員令に大學寮頭一人掌簡試學生及釋奠事學生四百人掌分受經業とあり
○陰陽寮、抄職官部に於牟夜宇乃豆加佐とあり
○外藥寮、典藥寮を云職員令に內藥司は中務省に屬し典藥寮は宮內省に屬す故に內藥司に對して外

四年春正月丙午朔、大學寮諸學生、陰陽寮、外藥寮、及舍衞女、墮羅女、百濟王善光、新羅仕丁等、捧藥及珍異等物進、丁未、皇子以下百寮諸人拜朝、戊申、百寮諸人、初位以上進薪、庚戌、始興占星臺、壬子、賜宴群臣於朝廷、壬戌、公卿大夫、及百寮諸人、初位以上、射于西門庭、亦是日、大倭國貢瑞雞、東國貢白鷹、近江國貢白鴉、戊辰、祭幣諸社、二月乙亥朔癸未、勅

大倭、河內、攝津(中)、山背、播磨、淡路、丹波、但馬、近江、若狹、伊勢、美濃、尾張等、國曰、選所部百姓之能歌男女、及侏儒伎人而貢上、丁亥、十市皇女、阿閇(元明)皇女、參赴於伊勢神宮、己丑、詔曰、甲子年諸氏被給部曲者、自今以後除之、又親王諸王及諸臣、并諸寺等所賜、山澤嶋浦、林野陂池、前後並除焉、十九癸巳、詔曰、群臣百寮、及天下人民莫作諸惡、若有犯者隨事罪之、廿三丁酉、天皇幸於高安城、是月、新羅遣王子忠元、大監級飡金比蘇、大監奈末金天沖、弟監大麻朴武麻、弟監大舍金洛水等、進調、其送使奈末金風那、奈末金孝福、送王子忠元於筑紫、三月乙巳朔丙午、土左大神以神刀一口進于天皇、十四戊午、饗金風那等於筑紫、卽自筑紫歸之、十六庚申、諸王四位栗隈王爲兵政官長、小錦上大伴連御行爲大輔、是月、高麗遣大兄富于、大兄多武等朝貢、新羅遣級飡朴勤脩、大奈末金美賀進調、

藥寮と稱す　○舍衞女、孝德紀白雉五年に見ゆ　○墮羅女、通證に疑墮羅當作都貨羅見孝德紀齊明紀とあり　○百濟王善光、原本光を先に作る北本應本楓本及類史に據て改む卽禪廣王なり　○捧藥、通證に延喜式元日獻屠蘇酒尙藥執御盞奉女孺昇殿令藥司童女先嘗然後供御次白散度嶂散三朝而畢公事根源曰御藥儀式始于弘仁中今按當以此紀爲始也云々とあり　○進薪、釋紀にミカマギは私記說とありミカマギは御竈木なり御竈にて燒く木を云年中行事歌合に御薪正月十五日御薪と申は百官悉薪を奉るなり假令ば是も民の肩を休めむ爲に宮內省に納られけるなり雜令に凡文武官人每年正月十五日並進薪長七尺以二十株爲一擔江次第に年中所用御薪諸司并五畿內國司供進見主殿寮式とあり年中御竈にて燒く木を初位以上の百官悉く之を進獻するなり　○占星臺、天文卽ち日月五星二十八宿及風雲の氣色等を窺ひ察する臺なり　○賜宴群臣、子日の宴なり文德實錄齊衡四年(天安元年)正月禁中有曲宴預之者不過公卿近侍數十人昔者上月之中必有此事時謂之子日態也今日之宴脩舊迹也と見ゆる子日の始なるべし　○射于西門庭、是れ正月射禮なり此事は孝德天皇九年正月七日に行はれしを始とす天智天皇九年正月十七日にも行はれたり西宮記北山抄江次第等には正月十八日を定日とす代々多少の沿革ありしなり　○白鷹、抄羽族部に鷹廣雅云一歲名之黃鷹二歲名之撫鷹三歲名之靑鷹白鷹俗說鷹白者不論雌雄皆名之良太賀とあり　○白鵠、抄羽族部に鵠本草云鵠一名鳶(和名度比)とあり　○祭幣諸社、年中行事秘抄に史記曰天武天皇四年二月甲申祈年祭延喜式有祝

詞とあり本紀二月に此事見えされど是れ正しく祈年祭の奉幣なるべし通證に祈年穀奉幣の始とするは非なり祭は奉の誤なりと云る說あれど下文にも同く祭幣とあれば輙く改めず　(二月)淡路、原本淡を渉に作る北本應本中本及類史に據て改む　○能歌男女、通證に此蓋采二其國曲一也と云り萬葉古今等に東歌部を立てられたる皆其國風なり十四年九月の詔に凡諸歌男歌女笛吹者卽傳二口子孫一令レ習二歌笛一と見えたるは其優秀なるものを後世に傳ふる方法を講ぜられしなり　○侏儒伎人、侏儒は武烈紀に見ゆ同紀に倡優をも訓り俳優の態を侏儒に爲さしむるなり伎人は琴笛をよくし歌舞に長じたる人を云是等の人々を貢らしめ給ひし十三國は何れも畿內及都に近き國なり　○甲子年、天智天皇三年　○諸氏被給部曲云々、天智紀二年に命二大皇弟一定二氏上民部家部等事一とある民部家部を云　○親王諸王、親王の名此に始て見ゆ繼嗣令に凡皇兄弟皇子皆爲二親王一以外並爲二諸王一とあり推古紀十三年に大臣及諸王諸臣と見え上代に諸王と稱せしは皇親の總稱なりしを後に天皇の御子等兄弟姉妹を親王と稱し自餘を諸王と申して五世を限とし或は六七世迄も王名を廢せざるもあり繼嗣令に自二親王一五世雖レ得二王名一不レ在二皇親之限一と云り　○莫作諸惡、水本には諸惡莫作とあり　○高安城、天智紀六年に見ゆ　○大監、新羅の官號　○級食、同上　○金比蘇、原本比を此に作る北本應本中本及釋紀に據て改む　○弟監、新羅の官號　○大麻、同上大奈麻の略稱(附錄參照)　○送使、原本送を逐に作る北本應本中本に據て改む　(三月)土左大神、神名式に土佐國土佐郡土佐坐神社同國風土記に土佐郡々家西去四里有二土佐高賀茂大社一其神名爲二一言主尊一也云々一說曰大穴六道尊子味鉏高彥根尊也とあり今の國幣中社土佐神社なり　○神刀一口云々、集解に蓋祠官奉二神語一而獻之とあり　○諸王四位、集解に諸王の二字を傍注の攙入とす　○栗隈王、原本隈を限に作る北本應本中本に據て改む天智紀七年に出づ　○兵政官長、兵政官は後の兵部省にて長は卿なり　○大伴連御行、續紀二に大寶元年正月大納言正廣參大伴宿禰御行薨帝甚悼惜之云々贈二正廣貳右大臣一御行難波朝右大臣大紫長德之子也とあり

(四月)當摩公廣麻呂、原本麻を摩に作る下文に據る本紀十四年に卒す　○久努臣麻呂、原本努を奴に作る北本應本中本に據て改む下文に直廣肆阿部久努朝臣麻呂とあり　○貸稅、孝德紀大化二年に貸稻とあり雜令に其規程見ゆ　○三等、上戶中戶下戶を云通證に此上戶中戶下戶を猶言上農中農小農とあり尙田令義解に詳なり　○仍、原本乃に作る北本應本中本及類史に據て改む　○小紫、年中行事祕抄此下に上字あり

夏四月甲戌朔戊寅五、請僧尼二千四百餘而大設齋焉、辛巳八、勅、小錦上當摩公廣麻呂、小錦下久努臣麻呂、二人勿使朝參、壬午、詔曰、諸國貸稅、自今以後、明察百姓、先知富貧、簡定三等、仍中戶以下應與貸、癸未、遣小紫美濃王、小錦下佐伯連廣足、祠風神于龍田立野、遣小錦中間人連大蓋、大山中曾禰連韓犬祭大忌神於廣瀨河曲、丁亥、小錦下久努臣麻呂坐對捍詔使、官位盡追、庚寅、詔諸國曰、自今以後、制諸漁獵者、莫造檻穽、及施機槍等之類、亦四月朔以後、九月卅日以前、莫置比滿沙伎理梁、且莫食牛馬犬猿雞之完、以外不在禁例、若有犯者罪之、辛

○風神、龍田神社をいふ　神名式に大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座並名神月次新嘗とあり　立野村龍田に鎮座せらる　此御祭の起源は崇神天皇の御世なること祝詞式風神祭の條に明なり　○間人連大蓋、原本連大の二字を脱す北本應本中本及紀略に據て補ふ　○曾禰連韓犬、原本犬を大に作る北本應本中本に據て改む　錄右京神別に曾根連神饒速日神六世孫伊香我色雄命之後也とあり　○大忌神、廣瀨神社を云　神名式に大和國廣瀨郡廣瀨坐和加宇加乃賣命神社名神大月次新嘗とあり廣瀨郡河合村に鎮座せらる　其起源は廣瀨緣起に當社者人皇十代崇神天皇御宇大和國廣瀨郡河合村出現給と見えたり　○廣瀨河曲、大和志に廣瀨川、初瀨、百濟、葛城、鳥見四水會于河合日廣瀨川流至葛下平群二郡界爲龍田川とあり龍田川の上流にて其下流は大和川なり河曲は河の曲れる所を云河の打合ふ所は自ら灣曲を爲す故に河曲と云り　○久努臣、原本久を文に作る應本中本及類史に據て改む　○對捍詔使、名例律八虐の六に大不敬對捍詔使而無人臣之禮とあり　○官位盡追、原本盡を書に作る北本應本中本に據て改む　○檻穽、原本穽を牽に作る北本應本中本に據て

卯、三位麻績王有罪流于因播、一子流伊豆嶋、一子流血鹿嶋、丙申、簡諸才藝者給祿各有差、是月、新羅王子忠元到難波、六月癸酉朔乙未、大分君惠尺病將死、天皇大驚、詔曰、汝惠尺也、背私向公、不惜身命、以遂雄之心、勞于大役、恒欲慈愛、故爾雖既死、子孫厚賞、仍騰外小紫位、未及數日、薨于私家、秋七月癸卯朔己酉、小錦上大伴連國麻呂爲大使、小錦下三宅吉士入石爲副使、遣于新羅、八月壬申朔、耽羅調使王子久麻伎泊筑紫、癸巳、大風、飛沙破屋、丙申、忠元禮畢以歸之、自難波發船、己亥、新羅高麗二國調使饗於筑紫、賜祿有差、九月壬寅朔戊辰、耽羅王姑如到難波、冬十月辛未朔癸酉、遣使於四方覔一切經、庚辰、置酒宴群臣、丙戌、自筑紫貢唐人卅口、則遣遠江國而安置、庚寅、詔曰、諸王以下、初位以上、每人備兵、是日、相摸國言、高倉郡女人生三男、十一月辛丑朔癸卯、有人登宮東岳、妖言而自刎死之、當是夜直者、悉賜爵一級、是月、大地動、

改む檻は字類抄にヲリと訓み神功紀にはウナヤと訓りヲリは居(ヲリ)の義ウナヤは呻吟(ウナ)屋の義ならむか穽は獣穴なり和爾雅にオトシアナと注せり　○機槍、フムハナチと訓るは蹈發(フミハナ)ちの意にて此處を蹈めば彼處の機動きて獣の陷るより付たる名なれども是は神武紀なる機にて世にいふオトシなりされば機槍はオシと訓べきなりと云　○比滿沙伎理梁、詳ならず通證に遮隙之義荀子注石絶水爲梁所以取魚とあり敷田氏は隙挾(ヒマサキ)の延語にて四月より九月の間は魚水上に浮び之を漁るに透間の狹き梁を架け小魚迄も盡すまじきとの意なりと云り北本應本中本滿を彌に作る是非決め難し　○牛馬犬猿雞之完、牛馬は人に代りて勞働し、犬は夜を守り雞は曉を告げて人を益する故に之を愛護し猿は人に甚だ類するに依て之を殺すに忍びざるなるべし法苑珠林畜生部述意に犬勤夜吠雞競曉鳴牛弊田農馬勞行陣又猿類人故不食見涅槃經と見え佛經の影響もあるべけれど我國は神代より近世に至るまで此等の肉を食ひしことの書に見えしは少く鹿肉と魚類の外は食はざる事全浙兵制錄にも見えたり　○三位、紫冠なり　○麻績王、世系詳ならず　○流于因幡、因幡國なり萬葉一には麻績王流于伊勢國伊良虞島云々とありて伊勢國とす標注には因幡は式に伊勢國壹志郡稻葉神社あり此地なりと云り　○血鹿嶋、肥前國松浦郡にあり　(六月)背私向公、原本向を同に作る北本應本中本に據て改む　○以遂雄之心、集解に雄下原有之字衍として削れるに從ふべし　○勞于大役、壬申の役を云　○原賞、原本厚を原に作る北本應本中本に據て改む　(七月)大伴連國麻呂、應本伴を津に作る　○三宅吉士、十二年紀九月に三宅吉士賜姓曰連　(八月)久麻伎、上文に久麻藝とあり　○忠元、二月來りし新羅國王の子　(十月)貢唐人卅口、是歲唐兵と戰ひて俘虜とせし人々なるべし　○遠江國、城飼郡に鹿城鄕(加良古)あり此時の唐人を置きし地ならむと云今同國小笠郡(舊城東郡)に鹿城鄕あり內田村となれり　○初位以上、此時未だ初位の稱なければ大建小建をかく云しか　○高倉郡、後に高座郡と書す　○生三男、生の上に一の字を脫せるか　(十一月)直者、トノキは殿居なり文選の注に直謂宿禁中備非常とあり

【五年】百寮拜朝、原本寮の下に朔の字あり北本應本中本に據て削る　○襠、推古紀に見ゆ　○腰帶、石帶なり衣服令に一品以下五位以上金銀裝腰帶六位烏油(クロツクリ)腰帶長束要領抄に腰帶或云宛腰とあり　○脚帶、雄略紀卽位前紀に見ゆ　○机杖、机と杖となり机は抄調度部に几西京雜記云漢制天子玉几公侯皆以竹木爲几(於之萬都岐)今案几屬又有脇息之名所出未詳とあり　○中的者、者の字は類史に據て補ふ

(丙子)五年春正月庚子朔、群臣百寮拜朝、癸卯(四)、高市皇子以下、小錦以上、大夫等、賜衣袴褶(ハカマヒラオビ)腰帶(ヒラビ)脚帶(アユヒ)及机杖(オシマツキ)、唯小錦三階不賜机、丙午、小錦以上、大夫等賜祿(ツカフ)各有差、甲寅(十五)、百寮初位以上進薪、卽日、悉集(ウコナヘ(北)マキツドヘ)朝廷賜宴、乙卯(十六)、置祿射(キヤフ)于西門庭中的者則給祿有差、是日、天皇御嶋宮宴之、甲子(廿五)、詔曰、凡任國司者、除畿內及陸奥長門國、以外皆任大山位以下人、二月庚午朔(廿四)、癸巳、耽羅客賜船一艘、是月、大伴連國麻呂等至自新羅、夏四月戊戌朔(四)、辛丑、祭龍田風神、廣瀨大忌神、倭國添下郡鰐積吉事貢瑞鷄、

○除畿内云々、畿内は皇都の守衛を兼ね陸奥は邊要の地長門は西海の關門なれば他國より重きが故なり
○大山位、大山は後の五位に准ず
（二月）庚午朔、原本朔の下に拜の字あり中本に據て削る
○鰐積、詳ならず集解に按鰐積氏卽阿曇氏略和阿仁之始終音則爲阿都美とあれどいかゞあらむ
○瑞雞、原本瑞を端に作る諸本及類史に據て改む
○冠、抄羽族部に冠野王案鷄頭上有毛冠（冠讀佐賀）鳥冠也とあり
○鮑波郡、抄に大和國平群郡鮑（郡郷考云鮑の誤）波郷阿久奈美あり
○才能長、イサセは詳ならず
○礪杵郡、美濃國土岐郡あり　○紀臣阿佐麻呂、集解に按阿佐麻呂蓋近江朝人配流在於美濃也非大人及阿閉麻呂之族續紀養老二年有無位紀臣龍麻呂等十八人賜朝臣姓蓋是此歟也とあり　（五月）進調過期限、賦役令に凡調庸物每年八月中旬起輸近國十月三十日中國十一月三十日遠國十二月三十日以前納訖其調糸七月三十日以前輸訖とあり　○飢之、水本集解之を乏に作る下同じ　○欲賣子、通證に賣子爲奴婢也とあり　○南淵山、大和國高市郡にあり　○細川山、同郡細川村にあり萬葉七に南淵之細川山立檀云々、今同郡高市村大字細川あり淨御原宮に近き地なればなり　○燒折、野を燒き木を折るを云原本折を析に作る北本應本中本に據て改む　（六月）栗隈王、原本隈を限に作る應本中本及紀略に據て改む　○物部雄君卒、前紀に朴井連とあり中本卒の傍注に御本薨とあり　○贈内大紫位、原本贈を賜に作る北本應本中本に據て改む　○捧幣帛云々、臨時祭式に祈雨神祭八十五座を載せたり

其冠似海石榴華、是日、倭國飽波郡言、雌鷄化雄、辛亥、勅、諸王諸臣、被給封戸之稅者、除以西國、相易給以東國、又外國人欲進仕者、臣連伴造之子、及國造子聽之、唯雖以下庶人、其才能長亦聽之、己未、詔美濃國司曰、在礪杵郡紀臣阿佐麻呂之子、遷東國卽爲其國之百姓、五月戊辰朔庚午、宣、進調過期限、國司等之犯狀云々、甲戌、下野國司奏、所部百姓遇凶年、飢之欲賣子、而朝不聽矣、是月、勅禁南淵山細川山、並莫芻薪、又畿内山野元所禁之限、莫妄燒折、六月、四位栗隈王得病薨、物部雄君連忽發病而卒、天皇聞之大驚、其壬申年從車駕入東國以有大功、降恩贈内大紫位、因賜氏上、是夏、大旱、遣使四方捧幣帛、祈諸神祇、亦請諸僧尼祈于三寶、然不雨、由是五穀不登、百姓飢之、

(七月)百寮、原本百の下姓の字あり中本に據て削る
○有星云々、慧星なり
○長七八尺、長の字は北本應本中本に據て補ふ
(八月)内命婦、仁德紀四十年に出づ
○食封、孝德紀大化二年に出づ
○大解除、此の解除は慧星に因て臨時に行はれしなりといへど下に爲新嘗卜國郡とあれば此祭を行ふにつきての解除ならむ
○被柱、被具なり原本祓を拔に作る北本應本中本に據て改む
○布一常、賦役令義解に布一丈三尺是爲一常とあり常キタは段(キタ)に同じ
○刀云々、神祇令に凡諸國須大祓者每郡出刀一口皮一張鐵一口及雜物等戸別麻一條とあり
○鑼、通證に當作鑼とあり
○矢一具、三代格延喜二十年の文に大祓料物矢二具の分注に以十隻爲一具とあり
○死刑沒官三流、死刑は

秋七月丁卯朔戊辰、卿大夫及百寮諸人等、進爵各有差、甲戌、耽羅客歸國、壬午、祭龍田風神、廣瀨大忌神、是月、村國連雄依卒、以壬申年之功贈外小紫位、有星出于東、長七八尺、至九月竟天、八月丙申朔丁酉、親王以下、小錦以上、大夫、及皇女姫王、内命婦等、給食封各有差、辛亥、詔曰、四方爲大解除、用物則國別國造輸被柱、馬一匹、布一常、以外郡司、各刀一口、鹿皮一張、鑼一口、刀子一口、鎌一口、矢一具、稻一束、且每戸麻一條、壬子、詔曰、死刑、沒官、三流、並除一等、徒罪以下、已發覺、未發覺、悉赦之、唯既配流不在赦例、是日、詔諸國以放生、是月、大三輪眞上田子人君卒、天皇聞之大哀、以壬申年之功贈内小紫位、仍諡曰大三輪眞上田迎君、九月丙寅朔、雨不告朔、乙亥、王卿遣京及畿内、拔人別兵、丁丑、筑紫大宰三位屋垣王有罪、流于土左、戊寅、百寮人及諸蕃人等、賜祿各有差、丙戌、神官奏曰、爲新嘗卜國郡也、齋忌云踰既、則尾張國山田郡、次次、此云須岐也、丹波國訶沙郡、並食卜、是月、坂田公雷卒、以壬申年功贈大紫

死罪沒官は官を沒するを云ふ三流は遠中近流なり獄令に凡流人應配者依罪輕重各配三流とあり

○並除一等、中本除を降に作る死刑以下各等級あり死刑には絞斬、沒官に除名免官免所居官、三流に近中遠あれば其情狀に因て一等を減ずるを云　○徒罪以下、徒罪は一年より三年に至り半年を一等として五等あり以下は杖罪笞罪なり　○放生、始て見ゆ魚鳥等の生き物を放ち其生命を全うせしむるを云放生會は養老四年隼人討伐の事あり其後宇佐八幡宮にて行はれたるを始とす政事要略廿三に見ゆ　○大三輪眞上田子人君、上卷には三輪君子首に作る　○大三輪眞上田迎君、北本應本には輪の下に神の字と云る說もあれどいかゞあらむ臣下に諡を賜へること此に始て見ゆ　（九月）不告朔、年中行事歌合に告朔は論語にいへるは月毎に朔を廟に告ぐといへり吾朝の儀は百官の行事上日をしるして月毎に天子の御覽するなりされば告朔の文をみそなはすと申心なりとあり　○按人別兵、原本按を授に作る北本應本中本に據て改む人毎に所持の兵器を調査するを云　○屋垣王、原本垣を恒に作る北本應本中本及類史に據て改む　○神官、神祇官なり　○爲新嘗卜國郡、按に二年十二月大嘗侍奉者に爵祿を賜ふ事見えたれば此は毎年の大嘗祭とのみありて新嘗祭の文字見えざれば此に新嘗とありても當時は其區別なかりしかば傍訓にはオホニヘと訓り　○齋忌、延喜大嘗祭式に凡在京齋場者豫分設兩處悠紀在左主基在右と見え同じ柴垣の內に距ての籬を結ひ其東西に相並びて兩殿を造り其殿にて天皇御親ら神祇を祀らせ給ふことなるが悠紀殿に供ずる御飯御酒の稻は主基國にて調進す故に悠紀國主基國と稱するなり其語義は悠紀は齋清にて齋み清むる意主基は次にて齋清に次ぐ意なりとも或はスヽギの義なりとも云るがすがすがしく清き意なるべし祭神其他に就ても種々說ありて此には盡し難し　○山田郡、後春日井郡に併せらる　○訶沙郡、丹後國加佐郡なり當時は未だ分國以前なりしが故にたゞ丹波國とあれど和銅六年四月分國の後は丹後國に屬す　○食卜、令義解に凡卜者必先墨畫龜然後灼之兆順食墨是爲卜食とあり　○坂田公雷、詳ならず　（十月）宴群臣、類史歲時部二孟に出づ二孟とは二孟旬儀とて夏の孟月卽ち四月、冬の孟月十月の朔に行はるゝ儀なり公事根源に是は天子夏冬の季の改る初めに臣下に御酒をたび政を聞食す義なりと云　○祭幣帛於相新嘗、相新嘗

位冬十月乙未朔、置酒宴群臣、丁酉、祭幣帛於相新嘗諸神祇、甲辰、以大乙上物部連麻呂爲大使、大乙中山背直百足爲小使、遣新羅、十一月乙丑朔、以新嘗事不告朔、丁卯、新羅遣沙飡金清平請政、并遣級飡金好儒、弟監大舍金欽吉等進調、其送使奈末被珍那、副使奈末好福、送清平等於筑紫、是月、肅愼七人從清平等至之、癸未、詔近京諸國而放生、甲申、遣使於四方國說金光明經、仁王經、丁亥、高麗遣大使後部主博阿于、副使前部大兄德富朝貢、仍新羅遣大奈末金楊原、送高麗使人於筑紫、是年、將都新城、而限內田薗者、不問公私、皆不耕悉荒、然遂不都矣、

は卽ち相嘗祭なり相嘗の幣帛に預り給ふ諸の神祇に幣帛を奉らしめ給ふを云水本に相の下に嘗の字を加へて相嘗と新嘗の兩祭としたれど此に相新嘗とあるは神祇令に仲冬上卯相嘗祭義解に謂大倭大神穴師恩智意富葛木鴨紀伊國日前神等類是也とある是なり新嘗は下卯日にあるべきものなれば同時に其幣帛を奉らるべきにあらず此祭も書に見えたるは之が始なれど必しも此御代に始まれるにあらず四時祭式に相嘗祭神七十一座とありて其神名を一々に擧げ幣帛の品目も一社毎に擧げたり相嘗の訓はアヒニヘと訓べしアヒニヘのアヒは神嘗大嘗に對して云るなり諸神に先だちて神宮に新穀を奉り幣帛を奉らしめ給ふを神嘗と云ひ之に次ぎて朝廷にて最も厚く崇敬し給ふ諸神に新穀を奉り幣帛を奉らしめ給ふ是れ相嘗なりアヒは諸神に相共に奉幣せしめ給ふを云ニヘは新嘗と書けるが如く新穀を以て饗するを云　○山背直百足、元年紀に山背直小林あり　○小使、原本小を少に作る北本中本に據て改む　○遣新羅、應本中本遣の下に於の字あり　(十一月)不告朔、今月新嘗祭あるにつきて止められしなり　○級飡、原本級を汲に作る釋紀に據て改む　○金好儒、原本儒を濡に作る北本應本に據て改む　○主博、高麗の官號の主簿なるべし集解に博を簿に改めたり　○阿于、原本阿を河に作る北本應本中本及釋紀に據て改む　○新城、大和志添下郡古蹟に新城宮新木村とあり今生駒郡郡山町大字新木なり　○然遂不都矣、然の字は北本中本に據て補ふ原本此下に或本無是年以下都以上學字注十一月上の十七字を分注す(北本には都の上に不の字ありて學の字なし)應本中本には此分注なし傍注なること明なれば削る

【六年】南門、類史には西門に作る

(二月)多禰嶋、大隅國熊毛郡に屬す三代格に天長元年停多禰嶋隼人大隅國とあり

(四月)桟田史、原本枝を村に作る北本應本に據て改む楓本中本及類史釋紀には材に作る村田材田は所見なく桟田は舊事紀天孫本紀に物部十市根大連之子止志奈連公杭田連等祖とあり此同族か考ふべし

○指斥乘輿、原本斥を庠に作る中本及類史に據て改む名例律八虐の六大不敬の注に指斥乘輿情理切害云々とあり乘輿は主上なり敢て尊號を指斥せざるなり

(戊辰)六年春正月甲子朔庚辰、射于南門、二月癸巳朔、物部連麻呂至自新羅、是月、饗多禰嶋人等於飛鳥寺西槻下、三月癸亥朔辛巳、召新羅使人清平、及以下客十三人於京、夏四月壬辰朔壬寅、桟田史名倉坐指斥乘輿、以流于伊豆嶋、乙巳、送使被珍那等饗于筑紫、卽從筑紫歸之、五月壬戌朔、不告朔、甲子、勅大博士百濟人率母授大山下位、因以封卅戸、是日、倭畫師音檮授小山下位、乃封廿戸、戊辰、新羅人阿飡朴刺破從人三口、僧三人、漂著於血鹿嶋、己丑、勅、天社地社神稅者三分之、一爲擬供神、二分給神主、是月、旱之、於京及畿內雩之、六月壬辰朔乙巳、大地震動、是月、詔東漢直等曰、汝等黨族之、自本犯七不可也、是以從小墾田御

世、至于近江朝、常以謀汝等爲事、今當朕世、將責汝等不可之狀、以隨犯應罪、然頓不欲絶漢直之氏、故降大恩、以原之、從今以後、若有犯者、必入不赦之例、秋七月辛酉朔癸亥、祭龍田風神、廣瀨大忌神、八月辛卯朔乙巳、大設齋於飛鳥寺、以讀一切經、便天皇御寺南門而禮三寶、是時、詔親王諸王及群卿、每人賜出家一人、其出家者、不問男女長幼、皆隨願度之、因以會于大齋、丁巳、金清平歸國、卽漂著朴刺破等付清平等、返于本土、戊午、耽羅遣王子都羅朝貢、九月庚申朔己丑、詔曰、凡浮浪人、其送本土者、猶復還到、則彼此並科課役、冬十月庚寅朔癸卯、丙小錦上河邊臣百枝爲民部卿、丙大錦下丹比公麻呂爲攝津職大夫、十一月己未朔、雨不告朔、筑紫大宰獻赤烏、則大宰府諸司人賜祿各有差、且專捕赤烏者賜爵五級、乃當郡々司等加增爵位、因給復郡內百姓以一年之、是日、大赦天下、己卯、新嘗、辛巳、百寮諸有位人等賜食、乙酉、侍奉新嘗神官及國司等賜祿、十二月己丑朔、雪、不告朔、

（五月）大博士、通證に卽大學博士也職原抄大學寮の條に博士一人明經道之標官也中古以來清中兩家依位次任之號大博士とあり

○牽母、原本母を丹に作る北本應本中本に據て改む

○倭畫師、錄左京諸蕃に大岡忌寸出自魏文帝之後安貴王五世孫勤大一惠尊亦工繪才天命開別天皇御世賜姓倭畫師亦高野天皇神護景雲三年依居地改賜大岡忌寸姓也とあり

○從人、原本從を徒に作る楓本中本に據て改む

○天社地社、崇神紀七年に天社國社とあるに同じ

○神稅、神祇令に凡神戶調庸及田租者並充造神宮及供神調度其稅者一准義倉義解に准義倉者不出舉也とあり

○雩、祈雨祭なり禮記月令に仲夏大雩注に雩吁嗟求雨之祭也とあり

（六月）大地震動、原本地の字なし類史に據て補ふ

○七不可、崇峻紀五年皇極紀四年孝德紀大化元年

等多考すべし東漢直等は賊臣蘇我氏に黨して屢々不軌を犯せるを云　○謀汝等、汝等が所行を見て慮り給ふなり　○從今、原本從を徒に作る北本應本中本に據て故む　(八月)賜出家一人、其緣邊の人僧となることを願はゞ各一人を許し給ふなり　○金清平、原本金を全に作る北本中本に據て改む　○朴刺破、原本刺を判に作る中本及上文に據て改む北本應本破の下に伎の字あり　(十月)民部卿、職員令に民部卿一人掌諸國戸口名籍賦役孝義優復蠲免家人奴婢橋道津濟渠池山川藪澤諸國田事とあり　○攝津職大夫、職員令に攝津職帶津國大夫一人掌祠社戸口簿帳云々とあり延曆十二年三月職を停めて國司とす　(十一月)大宰、類史には宰の下に府の字あり　○赤烏、治部式祥瑞に上瑞とす　○各有差、有の字は應本中本及類史に據て補ふ　○新嘗、神祇令仲冬下卯大嘗祭義解に若有三卯時以中卯爲祭日とあり卯日新嘗を行ふこと此に始て見ゆ　○賜食、式に己日召五位以上給饗とある是なり　○侍奉、原本侍を待に作る應本中本及紀略に據て改む　○神官及國司等、神官は神祇官なり大寶令の制度にては國司等毎年の新嘗に預ることなけれど此御世の頃迄は悠紀主基の國を卜定し國司も之に仕奉りしなるべし

【七年】齋宮、神功紀に皇后選吉日入齋宮とある齋宮に同じ　○倉梯河上、大和國十市郡にあり齋宮の古蹟は大和志に在所未詳と云り　(四月)平旦、寅の時は午前四時　○警蹕、ミサキオヒは御前追なり繼體紀元年に見ゆ　○命蓋、蓋(キヌガサ)は行幸の時に必ずこれを用ひさせ給ふなりこれが準備を命じ既に御發輦あらせ給はむとし給ひしを云　○十市皇女卒然、原本十を千に卒を平に作る諸本及紀略に據て改む　○鹵簿、行幸の行列なり宮衛令の義解に鹵楯也簿文籍也言簿列楯鹵以爲部隊也とあり　○霹靂、抄神祇類に釋名云霹靂和名加美波計

(己卯)七年春正月戊午朔甲戌、射于南門。己卯、耽羅人向京、是春、將祠天神地祇、而天下悉祓禊之、竪齋宮於倉梯河上。夏四月丁亥朔、欲幸齋宮卜之、癸巳食卜、仍取平旦時。警蹕既動、百寮成列、乘輿命蓋、以未及出行、十市皇女卒然病發薨於宮中。由此鹵簿既停、不得幸行、遂不祭神祇矣。己亥、霹靂新宮西廳柱。庚子、葬十市皇女於赤穗。天皇臨之、降恩以發哀。秋九月、忍海造能麻呂獻瑞稻五莖、每莖有枝、由是徒罪以下悉赦之。三位稚狹王薨之。冬十月甲申朔、有物如綿、零於難波、長五六尺、廣七八寸、則隨風以飄于松林及葦原。時人曰甘露也。己酉、詔曰、凡內外文武官、每年史以上屬官人等、公平而恪勤者、議其優劣、則定應進階、正月上旬以前、具記送法官、則法官按定、申送大辨官、然緣公事以出使

之日、其非眞病及重服、輙緣小故而辭者、不在進階之例、十二月癸丑朔己卯、臘子鳥蔽天、自西南飛東北、是月、筑紫國大地動之、地裂廣二丈、長三千餘丈、百姓舍屋、每村多仆壞、是時百姓一家有岡上、當于地動夕、以岡崩處遷、然家既全而無破壞、家人不知岡崩家避、但會明後、知以大驚焉、是年、新羅送使奈末加良井山、奈末金紅世、到于筑紫、曰、新羅王遣級飡金消勿、大奈末金世々等、貢上當年之調、仍遣臣井山送消勿等、俱逢暴風於海中、以消勿等皆散之不知所如、唯井山僅得著岸、然消勿等遂不來矣、

析也靈歷也所歷皆破析とありカムトキは神解の義雷の解け墮るを云　○新宮、五年の紀に將都新城とある新城に造らせ給ひし宮殿なるべし　○赤穗、大和志に廣瀨郡仁基墓十市皇女在赤部村とあり　(九月)瑞稻、治部式に嘉禾を中瑞とす　○稚狹王、世系詳ならず　(十月)七八寸、北本應本八の字なし　○甘露、治部式祥瑞に甘露美露也神靈之精也凝如脂其甘如飴とありて上瑞とす　○內外文武官、考課令義解に依公式令在京諸司爲京官自餘皆爲外官又五衞府軍團及諸帶仗者爲武自餘並如文とあり　○每年、北本年々に作る　○史以上屬官人等、史は主典なり屬官人は考課令の義解に謂次官以下とあり　○送法官、法官は式部なり天智紀十年に見ゆ　○按定、義解に謂計考結階とあり　○大辨官、職員令に左大辨一人掌管中務式部治部民部受付庶事紀判官內署文案勾稽失知諸司宿直諸國朝集云々右大辨一人掌管兵部刑部大藏宮內餘同左大辨とありオホトモヒは大伴ひにて諸司諸國の官人を伴ひ率ゐて政を申す義なり　○重服、忌服に重輕の別あり重服は父母の喪を云　(十二月)臘子鳥、北本應本臘を鵞に作る抄羽族部に楊氏漢語抄云鶺子鳥(俗云阿止利)辨色立成云鵞背鳥(和名同上一云胡雀)箋注に今俗呼遏止利漢名未詳とあり　○蔽天、原本蔽を弊に作る中イ本に據て改む　○級飡、原本級を汲に作る北本應本に據て改む　○以消勿等、集解には以の字を衍とす

【八年】正月之節云々、此事文武紀元年並に儀制令を參考すべし

(庚辰)八年春正月壬午朔丙戌、新羅送使加良井山、金紅世等向京、戊子、詔曰、凡當正月之節、諸王諸臣及百寮者、除兄姉以上親、及己氏長、以外莫拜焉、其諸王者、雖母非王姓者莫拜、凡諸臣亦莫拜卑母、雖非正月節復

准此、若有犯者隨事罪之、己亥、射于西門、二月壬子朔、高麗遣上部大相桓父、下部大相師需婁等朝貢、因以新羅遣奈末甘勿那、送桓父等於筑紫、甲寅、紀臣堅麻呂卒、以壬申年之功贈大錦上位、乙卯、詔曰、及于辛巳年、撿挍親王諸臣及百寮人之兵及馬、故豫貯焉、是月、降大恩恤貧乏、以給其飢寒、三月辛巳朔丙戌、兵衛大分君稚見死、當壬申年大役、爲先鋒之、破瀨田營、由是功贈外小錦上位、丁亥、天皇幸於越智、拜後岡本天皇陵、己丑、吉備大宰石川王病之薨於吉備、天皇聞之大哀、則降大恩云々、贈諸王二位、壬寅、貧乏僧尼施綿布、夏四月辛亥朔乙卯、詔曰、商量諸有食封寺所由、而可加加之、可除除之、是日定諸寺名也、己未、祭廣瀨龍田神、五月庚辰朔甲申、幸于吉野宮、乙酉、天皇詔皇后及草壁皇子尊、大津皇子、高市皇子、河嶋皇子、忍壁皇子、芝基皇子曰、朕今日與汝等俱盟于庭、而千歲之後欲無事、奈之何、皇子等共對曰、理實灼然、則草壁皇子尊先進盟曰、天神地祇及天皇證也、吾兄弟長幼并十餘王、各出于異腹、然不別同異、俱隨天皇勅、而相扶無忤、若自今以後、不如此盟

(二月)大相桓父、原本父を欠に作る應本中本に據て改む下同じ
○紀臣堅麻呂、北本應本中本堅を竪に中本麻を摩に作る
○辛巳年、十年なり

(三月)兵衛、軍防令に凡兵衛者國司簡郡司子弟強幹便於弓馬者郡別一人貢とあり
○稚見死、稚見は上文に稚臣とあり通證に死は卒に作るべしと云
○越智、高市郡なり今も越智村並に北越智村あり
○後岡本天皇陵、齊明天皇の御陵なり北越智村にあり
○吉備大宰、集解に按吉備國之國九州と衝故置大宰以諸王鎮焉とあり國守の上に大宰を置き遙に大宰府を援引して中國を監せしめられしなるべし
○施綿布、中本施の下に絕の字あり
(四月)定諸寺名、定額の寺を定められしなるべし

○河嶋皇子、原本河を阿に作る諸本に據て改む此皇子は天智天皇の御子に坐す
○芝基皇子、天智天皇の皇子なり
○庭、吉野宮の庭なり
○證也、皇極紀四年（一六六頁）に乞垂審察を訓り
○不別同異、原本別を列に作る北本應本中本に據て改む
○同產、中本產の下に而の字あり
○襟、原本にアリノヒモとあるはミソノヒモの誤なり
（六月）大伴杜屋連、父祖詳ならず
（七月）葛城王、詳ならず敏達天皇の御子に同名あれど天皇崩御より此に九十四年を經たれば其とは慥に言ひ難し
（八月）諸氏貢女人、後宮職員令に凡諸氏氏別貢女皆限二年三十以下十三以上云々とある是なり
○迹驚淵上、大和志に城上郡迹驚淵在二白川村一（今磯城郡初瀬村大字白川）とあり
○細馬、駿馬なり
○迹見驛家、城上郡にあ

者、身命亡之、子孫絶之、非忘非失矣、五皇子以次相盟如先、然後天皇曰、朕男等各異腹而生、然今如一母同產、慈之則披襟抱其六皇子、因以盟曰、若違茲盟、忽亡朕身、皇后之盟、且如天皇、丙戌、車駕還宮、己丑、六皇子共拜天皇於大殿前、六月庚戌朔、氷零、大如桃子、壬申、雩乙亥、大錦上大伴杜屋連卒、秋七月己卯朔甲申、雩、壬辰、祭廣瀨龍田神、乙未、四位葛城王卒、八月己酉朔、詔曰、諸氏貢女人、己未、幸泊瀨以宴、迹驚淵上、先是詔王卿曰、乘馬之外、更設細馬、隨召出之、卽自泊瀨還宮之日、看群卿儲細馬於迹見驛家道頭、皆令馳走、庚午、縵造忍勝獻嘉禾、異畝同穎、癸酉、大宅王薨、九月戊寅朔癸巳、遣新羅使人等返之拜朝、庚子、遣高麗使人、遣耽羅使人等返之、共拜朝廷、冬十月戊申朔己酉、詔曰、朕聞之、近日暴惡者、多在巷里、是則王卿等之過也、或聞暴惡者也、煩之忍而不治、或見惡人也、倦之匿以不正、其隨見聞以糺彈者、豈有暴惡乎、是以自今以後、無煩倦、而上責下過、下諫上暴、乃國家治焉、戊午、地震、庚申、勅制僧尼等威儀、及法服之色、并馬從者、往來巷閭之狀、甲子、

新羅遣阿飡金項那、沙飡薩𦸗生朝貢也、調物、金銀鐵鼎、錦絹布皮、馬狗騾駱駝之類十餘種、亦別獻物天皇々后太子、貢金銀刀旗之類各有數、是月、勅曰、凡諸僧尼者常住寺內、以護三寶、然或及老、或患病、其永臥陜房、久苦老病者、進止不便、淨地亦穢、是以自今以後、各就親族及篤信者、而立一二舍屋于間處、老者養身、病者服藥、十一月丁丑朔庚寅、地震、己亥、大乙下倭馬飼部造連爲大使、小乙下上寸主光欠爲小使、遣多禰嶋、仍賜爵一級、是月、初置關於龍田山、大坂山、仍難波築羅城、十二月丁未朔戊申、由嘉禾以親王諸王諸臣、及百官人等、給祿各有差、大辟罪以下悉赦之、是年、紀伊國伊刀郡貢芝草、其狀似菌、莖長一尺、其蓋二圍、亦因播國貢瑞稻、每莖有枝、

り今磯城郡城嶋村大字外山あり櫻井に近し此地なり

○縵造、十二年紀に縵造賜姓曰連とあり錄大和蕃別に縵連出自百濟人狛之後也とある是か舊事紀天孫本紀に奄智縵連三川紀連城縵連比尼縵連など見ゆるは物部氏の裔なり別なるべし

○大宅王、系詳ならず

（十月）威儀、裝束の狀を云

○法服之色、僧尼令に凡僧尼聽著木蘭青碧皂黃及壞色等衣餘色及綾羅錦綺並不得服用とあり

○阿飡、原本阿を河に作る北本應本中本に據て改む

○錦絹、絹の字は北本應本中本に據て補ふ

○騾、抄牛馬部に驢說文云驢（字佐岐无末）似馬長耳騾驢父馬母所生也とあり　○駱駝、推古紀七年に見ゆ　○陜房、玉篇に陜不廣也亦作狹とあり中本には陜を狹に作る　○間處、空閑の地を云

（十一月）倭馬飼部造連、姓氏錄に見えず十二年九月倭馬飼造賜姓曰連とあり連は名なり　○上寸主光欠、寸は村の省文なり錄左京諸蕃に上村主陳思王植之後也とあり光欠は名なり楓本中本欠を父に作る　○遣多禰嶋、高麗に遣されたるにあらじか多禰嶋へ大使小使を遣す事は似つかはしからず誤あらむか　○龍田山、大和志に平群郡關屋址在立野村天武八年始置關于此天文八年改立野關錢事見信貴山寺目錄とあり　○大坂山、原本坂を江に作る北本應本楓本に據て改む中本には枝に作る古くは葛上郡に屬せしが後葛下郡に屬す今北葛城郡下田村の西に逢坂あり其西に關屋（二上村大字）あり此より河內へ越ゆる大坂といふ二上山の北に接す今穴虫越と稱す　○羅城、三代實錄貞觀十三年十月の條に稱羅城者是周之國門唐之京城門云々今謂之羅城門其義未詳但大唐六典注云自大明宮夾東羅城複道經通化門磴道而入興慶宮焉今案其文勢蓋此羅列之意乎とあり集解に訓蒙字會曰郭俗稱羅城由之觀之羅周羅綱羅之義謂羅城門者郭城門也とあり外郭に羅ッラナれる意なり　（十二月）由嘉禾以、類史禾を樂に作るは訛なり以は集解に衍として削る　○大辟罪以下、獄令義解に辟者罪也死刑爲大辟とあり　○伊刀郡、伊都郡なり

【九年】向小殿、集解に按謂向向于正殿也謂小對正也江家次第所謂小安殿大極殿之後房卽此とあり
○大殿、大極殿を云
○忌部首首、元年七月紀に忌部首子人とあると同人にて首の上に子の字を補ふべきかと思へど十年三月紀にも首とあれば舊に從ふ
○色弗、持統紀四年に色夫知に作る
○活田村、倭名抄に八田部郡生田鄕是なり今神戸市に屬す
(三月)鹿角、原本鹿を麟に作る北本中本に據て改む
○其角、其の字は北本中本に據て補ふ
○麟角獸、抄毛群部に麒麟瑞應圖云麒麟(亦作騏驎)仁獸也牡曰麒牝曰麟とあり治部式祥瑞に之を大瑞とす
(三月)白巫鳥、字鏡には鴉を訓み倭名抄に漢語抄云巫鳥之止々とあり本朝食鑑林禽の部に鴉訓之止々或今訓阿於之鴉似雀而色亦略同頭背有斑眉頰稍黃白有斑云々

(辛巳)九年春正月丁丑朔甲申、天皇御于向小殿宴王卿於大殿之庭、是日、忌部首首賜姓曰連、則與弟色弗共悅拜、癸巳、親王以下至于小建、射南門、丙申、攝津國言、活田村桃李實也、二月丙午朔癸亥、如鼓音聞于東方、辛未、有人云、得鹿角於葛城山、其角本二枝而末合有完、完上有毛、毛長一寸、則異以獻之、蓋麟角歟、壬申、新羅仕丁八人、返于本土、仍垂恩以賜祿有差、三月丙子朔乙酉、攝津國貢白巫鳥、(巫鳥、此云芝苔々、)戊戌、幸于菟田吾城、夏四月乙巳朔甲寅、祭廣瀨龍田神、乙卯、橘寺尼房失火以焚十房、己巳、饗新羅使人項那等於筑紫、賜祿各有差、是月勅、凡諸寺者、自今以後、除爲國大寺二三以外、官司莫治、唯其有食封者、先後限三十年、若數年滿三十則除之、且以爲、飛鳥寺不可關于司治、然元爲大寺而官司恒治、復嘗有功、是以猶入官治之例、五月乙亥朔、勅絁綿絲布、以施于京內廿四寺各有差、是日、始說金光明經于宮中及諸寺、丁亥、高麗遣南部大使卯問、西部大兄俊德等朝貢、仍新羅遣大奈末考那、送高麗使人卯問等於筑紫、乙未、大錦下秦造綱手卒、由壬申年之功、贈大錦上位、辛丑、

腹白脛微赤帶黃聲短而小轉とあり
○(注)此云芝苔々、原本云を言に作る中本に據て改む
○菟田吾城、元年紀に見ゆ
(四月)乙巳朔、原本巳を脱す北本中本に據て補ふ
○橘寺、大和志に在高市郡橘村(今高市村大字橘)菩提寺一名橘寺とあり
○官司恒治、原本司の字なし北本應本中本及類史に據て補ふ
○復嘗有功、集解に按壬申之年大伴連弟吹負拔高坂王飛鳥寺西槻下營蓋此時有援官軍之功也と云り
(五月)說金光明經于宮中、通證に大極殿御齋會起于此とあり
○南部大使、小山田氏は使恐くは兄の誤と云り
○秦造綱手卒、持統紀十年に五月甲辰大錦上秦造綱手賜姓爲忌寸とあり此に卒とあるに合はず誤あるべし
○星川臣麻呂、錄大和皇別に星川朝臣武内宿禰之

小錦中星川臣麻呂卒、以壬申年之功贈大紫位、六月甲辰朔戊申、新羅客項那等歸國、辛亥、灰零、丁巳、雷電之甚也、秋七月甲戌朔、飛鳥寺西槻枝自折而落之、戊寅、天皇幸縣犬養連大伴家、以臨病、卽降大恩云々、是日、雩之、辛巳、祭廣瀨龍田神、癸未、朱雀在南門、庚寅、朴井連子麻呂授小錦下位、癸巳、飛鳥寺弘聽僧終、遣大津皇子、高市皇子而弔之、丙申、小錦下三宅連石床卒、由壬申年功贈大錦下位、戊戌、納言兼宮內卿五位舍人王病之臨死、則遣高市皇子而訊之、明日卒、天皇大驚、乃遣高市皇子、川嶋皇子、因以臨殯哭之、百寮者從而發哀、八月癸卯朔丁未、法官人貢嘉禾、是日始之三日雨、大水、丙辰、大風折木破屋、九月癸酉朔辛巳、幸于朝嬬、因以看大山位以下之馬於長柄杜、乃俾馬的射之、乙未、地震、己亥、桑內王卒於私家、冬十月壬寅朔乙巳、恤京內諸寺貧之僧尼及百姓而賑給之、一每僧尼各絁四匹、綿四屯、布六端、沙彌及白衣各絁二匹、綿二屯、布四端、十一月壬申朔、日蝕之、甲戌、自戊至子、東方明焉、乙亥、高麗八十九人返于本土、是當後岡本天皇(齊明)之喪而弔使留之未

後也敏達天皇御世依居地賜星川臣とあり十三年紀に朝臣を賜ふ應本中本麻呂摩に作る　(六月)項那等、原本項を須に作る北本應本及上文に據て改む　(七月)縣犬養連大伴、縣の字は前紀及十四年九月紀に據て補ふ此人續紀に大寶元年正月卒と見ゆ　○朱雀在南門、續紀卅八に桓武天皇延曆四年五月先是皇后宮赤雀見仍下所司令撿圖牒孫氏瑞應圖曰赤雀者瑞鳥也王者奉上儉約動作應天時則見とあり南門は皇城の南門にて朱雀門なり、在は原本有に作る類史に據て改む　○弘聽、中本聽を聰に作る　○而弔之、而の字は北本應本中本に據て補ふ　○納言、此に大小を言はざるは此時其區別未だ無かりしにや　○宮內卿、職員令に宮內省卿一人掌出納諸國調雜物春米官田及奏宣御食產諸方口味事とあり　○舍人王、詳ならず　(九月)朝嬬、大和志葛下郡古蹟に朝嬬行宮朝妻村(今南葛城郡葛城村大字朝妻)とあり　○長柄杜、同郡長柄村にあり今南葛城郡吐田鄉村字長柄なり長柄はナガエと訓むべきを轉じてナガラとも呼べり　○馬的、抄術藝部に楊氏漢語抄云馬射(字末由美今案馬射卽騎射也)とあり兵器考に之を以て騎射の始とす　○桑內王、詳ならず　(十月)一毎僧尼、北本應本每の字なし　○各絁四匹、原本各を冬に作る北本應本中本に據て改む　○白衣、俗人を云　○絁二匹、原本匹を疋に作る北本應本に據る下同じ　(十一月)興藥師寺、北本に興を立に作る藥師寺は大和志に高市郡藥師廢寺在木殿村礎石尙存天武天皇建後遷于平城右京また添下郡佛刹の條に藥師寺在砂村一名西京寺天武天皇九年十一月建文武天皇二年十月移寺高市郡岡本鄉養老中復移于此云々とあり　○惠妙、上文に同名の僧あり大化元年紀に以惠妙法師爲百濟寺々司白雉五年の細注に僧惠妙於唐死とある是なり元亨釋書誤て此二人を一人とす　○習言者、通證に釋兼方按通事之類今按此習倭語者也とあり　○草壁皇子、子の下尊の字を脫せしか

還者也、戊寅、詔百官曰、若有利國家寬百姓之術者、詣闕親申、則詞合於理、立爲法則、辛巳、雷於西方、癸未、皇后體不豫、則爲皇后誓願之、初興藥師寺、仍度一百僧、由是得安平、是日、赦罪、丁亥、月蝕、遣草壁皇子訊惠妙僧之病、明日、惠妙僧終、乃遣三皇子而弔之、乙未、新羅遣沙飡金若弼、大奈末金原升進調、則習言者三人、從若弼至、丁酉、天皇病之、因以度一百僧、俄而愈之、辛丑、蒭子烏蔽天、自東南飛、以度西北、

【十年】頒幣帛云々、天皇の御病を祈奉りし報賽なるべし　○宴之、公事根源に之を以て七日の節會の始めなるべからむと云り類史も之を七日の節會に收めた

十年春正月辛未朔壬申、頒幣帛於諸神祇、癸酉、百寮諸人拜朝廷、丁丑、天皇御向小殿而宴之、是日、親王諸王引入內安殿、諸臣皆侍于外、安殿共置酒以賜樂、則大山上草香部吉士大形授小錦下位、仍賜姓曰

り
○内安殿、外安殿に對して云り通證に内安殿疑謂小安殿とあれど向小殿を小安殿とすれば別なるべし大安殿の大極殿なることは明なれど其他は詳ならず
○外安殿、内に對したる名稱
○草香部吉士、原本士を志に作る中本に據て改む清寧紀即位前紀に見ゆ
○難波連、十四年六月紀に難波連賜姓曰忌寸とあり難波忌寸は錄河内皇別に大彦命之後也とあり
○境部連、孝德紀白雉四年に出づ
（二月）大極殿、皇極紀（一六五頁）四年に出づ
○朕今更欲定律令、天智天皇の朝に制定せられしを更に刪定せむと思し立せ給ひしなり欲定律令改法式とは律令法式を改定せむと欲すとの意なるを文を互にしたるものなるが律令の意は明白なれど法式とは何を指せるか通證には今按法式謂法禮格式也とあり格は其時々に定めらるべきものなれば此には要なけれど令

難波連、辛巳、勅境部連石積封六十戸、因以給絁卅匹、綿百五十斤、布百五十端、鑊一百口、丁亥、親王以下、小建以上、射于朝廷、己丑、詔畿内及諸國、修理天社地社神宮、二月庚子朔甲子、天皇皇后共居于大極殿、以喚親王諸王及諸臣、詔之曰、朕今更欲定律令、改法式、故俱修是事、然頓就是務、公事有闕、分人應行、是日、立草壁皇子尊爲皇太子、因以令攝萬機、戊辰、阿倍夫人薨、己巳、小紫位當麻公豐濱薨、三月庚午朔癸酉、葬阿倍夫人、丙戌、天皇御于大極殿、以詔川嶋皇子、忍壁皇子、廣瀨王、竹田王、桑田王、三野王、大錦下上毛野君三千、小錦中忌部連首、小錦下阿曇連稻敷、難波連大形、大山上中臣連大嶋、大山下平群臣子首、令記定帝紀及上古諸事、大嶋子首親執筆以錄焉、庚寅、地震、甲午、天皇居新宮井上、而試發鼓吹之聲、仍令調習、夏四月己亥朔庚子、祭廣瀨龍田神、辛丑、立禁式九十二條、因以詔之曰、親王以下、至于庶民、諸所服用金銀珠玉紫錦繡綾、及氈褥冠帶、并種々雜色之類、服用各有差、辭具有詔書、庚戌、錦織造小分、田井直吉麻呂、次田倉人、椹足（椹、此云武知）石勝、川内

は大綱を擧げたるものにて式之に伴はざれば實際事務を執り難ければ式も定められしなるべく儀式禮法も日常必要のものなれば之も同時に調査せしめられしなるべし

○阿倍夫人、原本倍を部に作る諸本に據て改む集解に按天智天皇妃阿倍倉梯麻呂女橘媛とあり

○當麻公豐濱、上に漏れたり

（三月）廣瀬王、父祖詳ならず續紀九に養老六年正月廣湍王卒とあり

○竹田王、同じく詳ならず續紀四（和銅元年三月）に竹田王爲刑部卿とあり

○桑田王、紹運錄に敏達天皇の孫にて彦人大兄皇子の男とあり

○三野王、上に見ゆ

○上毛野君三千、八月丁丑卒す

○忌部連首、九年正月に見ゆ

○中臣連大嶋、下文及持統紀には藤原又葛原ともあり中臣系圖に糠手子大連公一男右大臣金二男許米許米之子卽大嶋祭主中納言直大貳神祇伯とあり

直縣、忍海造鏡、荒田能麻呂、大狛造百枝、足坏、倭直龍麻呂、門部直大嶋、完人造老、山背狛烏賊麻呂、并十四人、賜姓曰連、乙卯、饗高麗客卯問等於筑紫、賜祿有差、五月己巳朔己卯、祭皇祖御魂、是日、詔曰、凡百寮、諸人恭敬宮人、過之甚也、或詣其門、謁己之訟、或捧幣以媚於其家、自今以後、若有如此者、隨事共罪之、甲午、高麗卯問歸之、六月己亥朔癸卯、饗新羅客若弼於筑紫、賜祿各有差、乙卯、雩之、壬戌、地震、秋七月戊辰朔、朱雀見之、辛未、小錦下采女臣竹羅爲大使、當摩公楯爲小使、遣新羅國、是日、小錦下佐伯連廣足爲大使、小墾田臣麻呂爲小使、遣高麗國、丁丑、祭廣瀨龍田神、丁酉、令天下悉大解除、當此時、國造等各出祓柱奴婢一口而解除、閏七月戊戌朔壬子、皇后誓願之、大齋、以說經於京內諸寺、八月丁卯朔丁丑、大錦下上毛野君三千卒、丙子、詔三韓諸人曰、先日復十年調稅既訖、且加以歸化初年俱來之子孫、並課役悉免焉、壬午、伊勢國貢白茅鵄、丙戌、遣多禰嶋使人等貢多禰國圖、其國去京、五千餘里、居筑紫南海中、切髮草裳、粳稻常豐、一蒔兩收、土毛支子莞

○平群臣子首、詳ならず
○帝紀及上古諸事、帝紀は帝皇の本紀なり古事記序に諸家之所レ賫帝紀及本辭とあるを下文に帝皇日繼及先代舊辭と書けり此に上古諸事とある卽ち先代舊辭なり
○天皇居新宮井上、原本居の字天皇の上にあり北本中本に據て改む新宮は新城に新に造られし宮なるべし
○試發、試樂なり
(四月)夏四月、原本夏の字なし集解に據て補ふ
○禁式、禁制なり
○珠玉、職員令內藏寮の義解に自生爲レ珠作爲レ玉とあり
○氈褥、同義解に撚レ毛爲二褥席一者也とあり
○錦織造、錄河內諸蕃に錦織連百濟國速古大王之後也とあり
○田井直、舊事紀天孫本紀に物部金弓連公田井連等祖とあり
○次田倉人、姓氏錄に次田連に作る天智紀十年(一四三頁)に見ゆ
○椹足石勝、二人の名なり
○(注)武矩、原本矩を規

子及種々海物等多、是日、若弼歸レ國、九月丁酉朔己亥、遣二高麗新羅一使人等、共至之拜朝、辛丑、周芳國貢二赤龜一、乃放二嶋宮池一、甲辰、詔曰、凡諸氏有レ氏上未レ定者、各定氏上而申送于理官、庚戌、饗二多禰嶋人等一于飛鳥寺西河邊、奏二種種樂一、壬子、彗星見、癸丑、熒惑入レ月、冬十月丙寅朔、日蝕之、癸未、地震、乙酉、新羅遣二沙喙一吉飡金忠平、大奈末金壹世一貢調、金銀銅鐵錦絹、鹿皮細布之類各有レ數、別獻二天皇々后太子一金銀、霞錦、幡皮之類各有レ數、庚寅、詔曰、大山位以下、小建以上人等各述二意見一、是月、天皇將レ蒐於廣瀨野、而行宮構訖、裝束既備、然車駕遂不レ幸矣、唯親王以下及群卿、皆居二于輕市一、而撿挍裝束鞍馬、小錦以上大夫皆列坐於樹下、大山位以下者、皆親乘之、共隨二大路一、自レ南行レ北、新羅使者至而告曰、國王薨、十一月丙申朔丁酉、地震、十二月乙丑朔甲戌、小錦下河邊臣子首遣二筑紫一饗二新羅客忠平一、癸巳、田中臣鍛師、柿本臣猨、田部連國忍、高向臣麻呂、粟田臣眞人、物部連麻呂、中臣連大嶋、曾禰連韓犬、書直智德、并壹拾人、授二小錦下位一、是日、舍人造糠虫、書直智德、賜レ姓曰レ連、

に作る中本に據て改む　○川内直、欽明紀二年に見ゆ　○忍海造、三年紀に見ゆ　○荒田能麻呂、前紀元年七月壬辰に荒田尾直赤麻呂見ゆ之と同姓ならば荒田の下に尾直の二字脫せしなり荒田尾直は姓氏錄に見えず通釋に荒田尾直として引るは荒田直にて皇別と云るも神別の誤なり　○大狛造、錄河内諸蕃に大狛連高麗國人伊利斯沙禮斯之後也、大狛連高麗國溢士福貴王之後也とあり此に連を賜ひたるは百枝と足坏との二人なり　○倭直、既に出づ記傳に欽明紀迄は國造とのみありて直とはなきを此にかくあるは何れの御代より直の姓にはなりけむと云　○門部直、孝德紀に見ゆ次の十二年紀に門部直賜姓曰連とあれば此に連を賜ひしは大嶋のみなり　○完人造、完人臣と同祖なり崇峻紀二年に見ゆ　○山背狛、錄山城諸蕃に狛造出自高麗國主夫連王之後也とあり　(五月)皇祖、集解に按皇祖皇祖父謂押坂彦人皇子蓋非歷代帝皇故別祭之疑是日或忌辰也とあり　○宮人、女官を云　○謁、内謁なり說文に告也請也とあり　○甲午、原本甲子に作る北本應本中本に據て改む　(七月)采女臣竹羅、欽明紀卽位前紀に見ゆ竹羅は下文筑羅に作る　○廣足、原本廣なし北本應本に據て補ふ　○奴婢一口、天下の大解除を行はせ給ふにつき其祓物として國造をして之を出さしめらるゝなり五年八月の大解除には馬一匹布一常を出さしめられしが今度は奴婢を出さしめられしにて其趣旨は同じ　(八月)丙子、此一條丁丑の條と入替れり集解には正したれど姑く舊に據て改めず　○多禰國、六年紀に云り　○去京五千餘里、雜令に凡度地五尺爲步三百步爲里とあり　○一薑兩收、原本薑を菹に兩を雨に作る北本楓本に據て改む中本菹を殖に作る一度苗を殖て兩度收獲あるを云一年に兩度の收獲あるなり今も臺灣は然なりと云　○支子、字鏡に久知奈之と注す抄染色具には梔子を充てゝ木實可染黃色者也とあり　○莞子、抄草木部に唐韻云莞(漢語抄云於保井)可以爲席者也玉篇に莞似藺而圓可以爲席とあり　(九月)赤龜、治部式祥瑞に神龜を大瑞とし史記に神龜者天下之寶也與物變化四時變色居而自匿伏而不出則有大兵入則兵散とあり　(十月)細布、麁布に對して云　續紀六に和銅七年二月上總國言去京遙遠貢調極重請代細布顚省貧擔延喜主計式に凡諸國輸調細布二丁成端と見ゆ　○霞錦、原本錦霞に作る朱鳥元年四月の條に霞錦とあるに據て改む霞の棚引たる狀を彩れる錦ならむ推測の說あれど明解なし　○蒐、字鏡集名義抄等にカリと注せり段注說文一下に經傳多以爲春獵字とあり春獵を云るがそれより汎く狩の事に用ふるに至れり　○廣瀨野、大和志に行宮古蹟在廣瀨郡大野村(今北葛城郡河合村大字大野)とあり　○輕市、高市郡にあり　○國王薨、新羅文武王なり　(十二月)田中臣、元年紀に見ゆ　○柿本臣猨、錄大和皇別に柿本朝臣天足彦國押人命之後也敏達天皇御世依家門有柿樹爲柿本臣氏とあり十三年紀十月柿本臣賜姓曰朝臣續紀四に從四位下柿本朝臣佐留卒とあり　○田部連、舒明紀元年に見ゆ　○高向臣、舒明紀卽位前紀に見ゆ　○粟田臣眞人、推古紀十九年に見ゆ續紀八に正三位粟田朝臣眞人薨とあり　○壹拾人、原本壹を臺に作る應本中本に據て改む十人とあれど一人足らざるは古くより脫せるか諸本悉く同じ　○舍人造、舊事紀天神本紀に饒速日命天降從者に舍人造あり是か

(十一年)大山上、原本上の字を脫す應本中本に據て補ふ　○壬子、北本壬午に作る　○氷上夫人、二年紀に夫人藤原大臣女氷上娘とあり　○赤穗、大和志に高津笠墓氷上夫人在廣瀨郡赤部村とあり

(壬午)十一年春正月乙未朔癸卯、大山上舍人連糠虫授小錦下、位乙巳、饗金忠平於筑紫、壬子、氷上夫人薨于宮中、癸丑、地動、辛酉、葬氷上夫人於赤穗、二月甲子朔乙亥、金忠平歸國、是月、小錦下舍人連糠虫卒、以壬申年之功贈大錦上位、三月甲午朔、命小紫三野王、及宮內官大夫等、遣于新

城令見其地形、仍將都矣、乙未、陸奥國蝦蛦廿二人賜爵位、庚子、地震、丙午、命境部連石積等、更肇俾造新字一部四十四卷、己酉、幸于新城、辛酉、詔曰、親王以下百寮諸人、自今已後、位冠及褌褶脛裳莫著、亦膳夫采女等之手繦肩巾（肩巾、此云比例）、並莫服、是日、詔曰、親王以下至于諸臣、被給食封、皆止之更返於公、是月、土師連眞敷卒、以壬申年功贈大錦上位、夏四月癸亥朔辛未、祭廣瀨龍田神、癸未、筑紫大宰丹比眞人嶋等貢大鍾、甲申、越蝦夷伊高岐那等、請俘人七十戸爲一郡、乃聽之、乙酉、詔曰、自今以後、男女悉結髮、十二月卅日以前結訖之、唯結髮之日、亦待勅旨、婦女乘馬如男夫、其起于是日也、五月癸巳朔甲辰、倭漢直等賜姓曰連、戊申、遣高麗大使佐伯連廣足、小使小墾田臣麻呂等、奏奉使旨於御所、己未、倭漢直等男女悉參赴之、悅賜姓而拜朝、

（三月）小紫三野王、小紫は諸臣の位なれば誤あるべし　○宮內官大夫、上に宮內卿と見えたるに同じ　○境部連石積、孝德紀白雉四年に坂合部磐積見ゆ同人にや　○新字、詳ならず釋紀に私記曰師說此書今在圖書寮但其字體似梵字未詳其字所准據也とあり日文傳に之を引て神代文字なりとし數田氏標注にも是は古く使用せる支那字に對して新字とは云るなめれど實は神代文字なり造とは四十四卷を撰作りしことなり世に榊辻峠杣迚込働等の字は此時に製りしにやと云ふ說あれど四十四卷と云に合（カナ）はずと云へど輒く定め難しよく考ふべし　○襌、マヘモは前裳なるべし其制は詳ならず抄裝東部に襠襠本朝式云襠襠各一條（襠讀知波夜）今案未詳）とあれど後のチハヤと云ものとは異なるべし　○脛裳、抄行旅具に本朝式云脛巾（俗波々伎）とあり脛著（ハギハキ）の義なるべし下にも男夫著脛裳婦女垂髮于背猶如故とあり　○采女等之、原本等之の二字重複す應本中本に據て削る　○手繦、神代紀寶鏡開始章に注す　○肩巾、領巾なり崇神紀十年に出づ　○食封皆止之云々、五年四月の勅に諸王諸臣被給封戶之稅者除以西國相易給以東國とありしを是時に至りて實行し給はむとて從來の封戶を盡く公に返さしめ給ひしなるべし　○是月土師連、原本師の下連の上に喚王卿等於殿前以下十二月壬申朔乙亥遣筑紫防人等襲薄海に至る四百五十七字あり是は十四年九月紀の文誤りて此に出しものにて北本應本中本に無し故に削る　（四月）丹比眞人嶋、此氏宣化紀に見ゆ嶋は持統紀四年右大臣と爲り續紀二に大寶元年七月壬辰薨す宣化天皇玄孫多治比王の子也とあり　○大鍾、原本鍾を鐘に作る北本中本に據て改む字

書に鐘は樂器なり又鍾は琴名なりともあり又鐘鍾通ずともあれば何れとも定め難し　○俘人七十戸、原本十を千に作る北本應本に據て改む　○男女悉結髮、集解に按始制庶人首飾とあり男女の古風の髮の狀を盡く改めたるなり十三年に至りて女年四十以上は任意として此制を緩め十五年には婦女垂髮于背猶如故と云て再び舊に復せられたり　○婦女乘馬、集解に古婦人乘馬不跨鞍至于此始有制跨乘與男子同とあり　○麻呂等奏、原本等の字なく奏を奉に作る北本中本に據て補ひ訂す

（六月）助有卦婁毛切、二人の名か　○大古昂加、通證に大古疑當作大兒とあり原本昂を昂に作る諸本に據て改む　○男夫始結髮、原本夫を女に作る北本應本中本に據て改む應本中本始の下之の字あり　○漆紗冠、原本紗を沙に作る北本應本中本及釋紀に據て改む漆紗は字の如く漆塗りの紗なり正統記に上下漆ぬりの頭巾を著ることはこの時よりぞ始まるとあり　○殖栗王、紹運錄に厩戸皇子男とあり　（七月）大隅、當時は日向國の一郡にて未だ一國とならず　○阿多、薩摩國阿多郡なり　○相撲、隼人式に大衣者擇諸代內署左右各一人注に大隅爲左阿多爲右また分陣應天門外之左右とあり常に左右に

六月壬戌朔、高麗王遣下部助有卦婁毛切、大古昂加、貢方物、則新羅遣大那末金釋起、送高麗使人於筑紫、丁卯、男夫始結髮、仍著漆紗冠、癸酉、五位殖栗王卒、秋七月壬辰朔甲午、隼人多來貢方物、是日、大隅隼人與阿多隼人相撲於朝廷、大隅隼人勝之、庚子、小錦中膳臣摩漏病、遣草壁皇子尊、高市皇子、而訊病、壬寅、祭廣瀨龍田神、戊申、地震、己酉、膳臣摩漏卒、天皇驚之大哀、壬子、摩漏臣以壬申年之功贈大紫位及祿、更皇后賜物亦准官賜、丙辰、多禰人、掖玖人、阿麻彌人、賜祿各有差、戊午、饗隼人等於飛鳥寺西、發種々樂、仍賜祿各有差、道俗悉見之、是日、信濃國吉備國並言、霜降、亦大風、五穀不登、八月壬戌朔、令親王以下及諸臣、各俾申法式應用之事、甲子、饗高麗客於筑紫、是夕、昏時、大星自東度西、丙寅、造法令、殿內有大虹、壬申、有物形如灌頂幡而火色、浮空流北、每國皆見、或曰入越海、是日、白氣起於東山、其大四圍、癸酉、大地動、戊寅、

分れて奉仕せり之を左右に分ちて相撲せしめられしなり
○阿麻彌、齊明紀三年に海見島とある是なり
(八月)大星、北本應本大の字なく紀略火に作る大星は流星なるべし
○造法令、十年紀に更欲定律令改法式とありしが此に至りて造り畢りしなるべし文武紀に所謂淨御原朝廷令是なり
○虹、抄天地部に毛詩注云蝃蝀(和名爾之)虹也とあり萬葉十四には努自と見ゆ
○戊寅、集解に此條甲戌の下にあるべしと云り
○詔禮儀言語之狀、詔の下に定などの字脫せしなるべし禮儀をウヤハヒと訓るはウヤはウヤ〳〵しのウヤなり其に業(ナリ)ハヒ幸ハヒなどのハヒのつきたるなり禮は字類抄にはウヤとよみ字鏡集名義抄にはウヤマフと注せり
○族姓、標注に姓に尊卑あり氏に貴賤ありて賤は內位に叙し難き故に此詔ありと云り
○景迹、考課令に凡定官人景迹功過義解に景

亦地震、是日平旦、有虹當于天中央以向日、甲戌、筑紫大宰言、有三足雀、癸未、詔禮儀言語之狀、且詔曰、凡諸應考選者、能撿其族姓及景迹方後考之、若雖景迹行能灼然、其族姓不定者、不在考選之色、己丑、勅爲日高皇女(更名新家皇女)之病、大辟罪以下、男女并一百九十八人皆赦之、庚寅、百四十餘人出家於大官大寺、九月辛卯朔壬辰、勅、自今以後、跪禮匍匐禮並止之、更用難波朝廷之立禮、庚子日中、數百鶴當大宮以高翔於空、四尅而皆散、冬十月辛酉朔戊辰、大餔、十一月庚寅朔乙巳、詔曰、親王諸王及諸臣、至于庶民、悉可聽之、凡糺彈犯法者、或禁省之中、或朝廷之中、其於過失發處、卽隨見聞、無匿蔽而糺彈、其有犯重者、應請則請、當捕則捉、若對捍以不見捕者、起當處兵而捕之、當杖色乃杖一百以下、節級決之、亦犯狀灼然、欺言無罪、則不伏辨、以爭訴者、累加其本罪、十二月庚申朔壬戌、詔曰、諸氏人等、各定可氏上者而申送、亦其眷族多在者、則分各定氏上、並申送於官司、然後斟酌其狀而處分之、因承官判、唯因少故、而非己族者、輒莫附、

像也猶言狀迹也とあり　○行能、考課令に功過行能義解に善惡爲行才藝爲能とあり　○一百九十八人、人の字は北本應本中本及紀略に據て補ふ　○出家於大官大寺、略記には十二年に入る　(九月)跪禮、續紀慶雲元年正月の條には停百官跪伏禮とあり跪き伏して禮するを云祝詞萬葉に十六自物膝折伏とある是なり　○匍匐禮、通證に舊唐書倭傳曰其訴訟者匍匐前地史范睢傳膝行蒲伏今俗有波伊留之語蓋匍匐入也とあり　○難波朝廷之立禮、孝德紀には見えざるが立禮は唐朝の制に倣ひしなり　○鵡、鶴に同じ抄羽族部に鶴(都流)似鵠長喙高脚とありオホトリは鶴を訓り但し字鏡集にはオホトリと訓り　○四尅、漏刻は一時(今の二時間)を四尅に分ちたり故に第四尅なば時の終と訓るなり　(十月)大餔、清寧紀四年に出づ　(十一月)糺彈犯法者、非違を糺彈するは彈正臺の職掌なり　○禁省、禁中を云　○起當處兵、當界の軍團の兵を云　○杖色、名例律に見ゆ色は色目なり　○節級、通證に謂有品節等級也とあり　(十二月)官司、治部省を云　○官判、太政官の判決なり　○輙莫附、集解に按一氏族之中他有小故欲爲其族者少故蓋謂毋黨妻黨疎遠者とあり

【十二年】

○大八洲、原本洲を州に作る北本應本及類史に據て改む

○一則以喜、原本喜を嘉に作る類史に據て改む

○小墾田儛、釋紀に兼方按之推古天皇小墾田宮朝所製之樂歟とあり儛は原本に舞に作る諸本及類史に據る

(三月)僧正僧都律師、僧正僧都は推古紀卅二年に律師は敏達紀六年に注す僧綱の官を任命せし始なり

(癸未)十二年春正月己丑朔庚寅、百寮拜朝廷、筑紫大宰丹比眞人嶋等貢三足雀、乙未、親王以下及群卿、喚于大極殿前而宴之、仍以三足雀示于群臣、丙午、詔曰、明神御大八洲日本根子天皇勅命者、諸國司國造郡司及百姓等諸可聽矣、朕初登鴻祚以來、天瑞非一二多至之、傳聞、其天瑞者、行政之理、協于天道則應之、是今當于朕世、每年重至、一則以懼、一則以喜、是以親王諸王、及群卿百寮、并天下黎民、共相歡也、乃小建以上給祿各有差、因以大辟罪以下皆赦之、亦百姓課役並免焉、是日、奏小墾田儛、及高麗、百濟、新羅、三國樂於庭中、二月己未朔、大津皇子始聽朝政、三月戊子朔己丑、任僧正、僧都、律師、因以勅曰、統領僧尼如法云々、丙午、遣多禰使人等返之、夏四月戊午朔壬申、詔曰、自

○統領僧尼如法云々、此に僧尼令に見えたる文どものありしなるべし

(四月)英用銀錢、こゝに銀錢を止めて專ら銅錢を用ひよとあれど銀錢銅錢何れもいかなるものなりしか詳ならず

(六月)大伴連望多、昨の子にて上文は馬來田に作れり

○弔、原本予に作る中本に據て改む

○贈大紫位、續紀に內大紫に作る

○發皷吹葬、皷吹を用ひて送葬することは古代の禮なれど之を賜ふは異邦の制の移れるなるべし賜ふべき皷吹の數は喪葬令に詳なり

○高坂王薨、元年六月紀に出づ中本及紀略、薨を卒に作る

(七月)鏡姫王、始は天智天皇にめされ後には鎌足公の室となれり

○安居、五雜俎卷二に四月十五日天下僧尼就禪刹搭挂謂之結夏又謂之結制蓋方長養之辰出外恐傷草木虫蟻故九十日安居至七月十五日始盡散去謂之解夏又謂

今以後、必用銅錢、莫用銀錢、乙亥、詔曰、用銀莫止、戊寅、祭廣瀨龍田神、六月丁巳朔己未、大伴連望多薨、天皇大驚之、則遣泊瀨王而弔之、仍舉壬申年勳績、及先祖等每時有功、以顯寵賞、乃贈大紫位、發皷吹葬之、壬戌、三位高坂王薨、秋七月丙戌朔己丑、天皇幸鏡姫王之家訊病、庚寅、鏡姫王薨、是夏、始請僧尼、安居于宮中、因簡淨行者卅人出家、庚子、雩之、癸卯、天皇巡行于京師、乙巳、祭廣瀨龍田神、是月始至八月旱之、百濟僧道藏雩之得雨、八月丙辰朔庚申、大赦天下、大伴連男吹負卒、以壬申年之功贈大錦中位、九月乙酉朔丙戌、大風、丁未、倭直粟隈首、水取造、矢田部造、藤原部造、刑部造、福草部造、凡川內直、川內漢直、物部首、山背直、葛城直、殿服部造、門部直、錦織造、縵造、鳥取造、來目舍人造、檜隈舍人造、大狛造、秦造、川瀨舍人造、倭馬飼造、川內馬飼造、黃文造、蓆集造、勾筥作造、石上部造、財日奉造、湼部造、穴穗部造、白髮部造、忍海造、羽束造、文首、小泊瀨造、百濟造、語造、凡卅八氏、賜姓曰連、冬十月乙卯朔己未、三宅吉士、草壁吉士、伯耆造、船史、壹伎史、娑羅々馬飼造、菟野馬

飼造、吉野首、紀酒人直、采女造、阿直史、高市縣主、磯城縣主、鏡作造、并十四氏賜姓曰連、丁卯、天皇狩于倉梯、十一月甲申朔丁亥、詔諸國習陣法、丙申、新羅遣沙飡金主山、大那末金長志進調、十二月甲寅朔丙寅、遣諸王五位伊勢王、大錦下羽田公八國、小錦下多臣品治、小錦下中臣連大嶋、并判官、錄史、工匠者等、巡行天下而限分諸國之境堺、然是年不堪限分、庚午、詔曰、諸文武官人、及畿內有位人等、四孟月必朝參、若有死病不得集者、當司具記申送法官、又詔曰、凡都城宮室非一處、必造兩參、故先欲都難波、是以百寮者各往之請家地、

之解制(節略)とあり僧侶が陰暦四月十五日より同七月十五日まで卽ち一夏九旬の間禁足して靜に家に籠り居ることを安居とも結夏とも云　○百濟僧道藏、續紀八養老五年六月戊戌の詔に百濟沙門道藏寔惟法門袖領釋道棟梁と見ゆ　(八月)男吹負卒、元年六月紀に弟吹負とあり馬來田の弟なり　○倭直、十年紀四月に倭直龍麻呂に連を賜へり此時倭氏悉く連を賜りしなり　○栗隈首、原本隈を隅に作る中本に據て改む系詳ならず通證には可美眞手命之後也と云り　○水取造、錄右京神別に水取連神饒速日命六世孫伊香我色乎命之後也とあり　○矢田部造、推古紀廿三年に出づ　○藤原部造、原本藤を敢に作る藤の草體より轉訛せしものなり應本中本及釋紀に據て改む藤原部は允恭紀十一年に出つ續紀廿に改藤原部姓爲久須波良部と見え錄和泉皇別に葛原部豐城入彥命三世孫大御諸別之後也とあり　○刑部造、舊事紀天孫本紀に物部石持連公刑部造等祖とあり　○禍草部、記上卷に天津日子根命者三枝部造等之祖也とあり　○凡川內直、中本川を河に作る神代紀瑞珠盟約章上に天津彥根命の後とあり　○川內漢直、王仁の末なり　○物部首、垂仁紀に見ゆ天足彥國押人命の後なり錄山城未定雜姓に饒速日命の後なる物部首あり　○山背直、神代紀瑞珠盟約章に見ゆ　○葛城直、劍根命之後なり　○殿服部造、詳ならず錄大和神別に服部連天穗中主命十一世孫天御梓命之後也とあり其同族か　○門部直、孝德紀及本紀十年四月に出づ　○錦織造、十年四月紀に見ゆ　○綾造、八年八月紀に見ゆ　○鳥取造、天湯河桁命の後なり垂仁紀廿三年に出づ　○來目舍人造、原本來を未に作る北本應本に據て改む來目氏は皇別(武內宿禰の後)と神別(高皇產靈尊の後)とありて來目舍人は何れか詳ならず　○檜隈舍人造、錄左京神別に檜前舍人造火明命十四世孫波利那乃連公之後也とあり　○大狛造、十年四月紀に出づ　○秦造、融通王の後なり雄略紀十五年に出づ　○川瀨舍人造、錄和泉神別に川瀨造神魂命五世孫天道根命之後也とあり　○倭馬飼造、系詳ならず　○川內馬飼造、同上　○黃文造、天智紀及本紀元年六月に黃書造と見えたり　○蘆集造、錄大和未定雜姓に蘆集造天津彥根命之後也とあり　○勾筥作造、系詳ならず勾は大和國高市郡の地名なり職員令宮內省に筥陶司(ハコツクリ)あり是に緣ある氏か　○石上部造、系詳ならず　○財日奉造、詳ならず中本には財の下に造の字のありて財造日奉造二氏とす財造は氏族志に聖武帝時有越前江沼郡主帳財造住田と見え日奉造は錄右京神別に日奉連見ゆ財造と日奉部造と二氏とせば三十八氏と云るに合はず考ふべし　○塑部造、上に見ゆ　○穴穗部造、系詳ならず雄略紀十九年に置穴穗部とあり　○白髮部造、淸寧紀三年白髮部武國押稚(淸寧)天皇御名

を後世に傳むが爲に置かせ給ひし部曲なれば皇別神別諸蕃ありしなるべし　○忍海造、七年紀に出づ　○羽束造、錄攝津皇別に羽束首天足彦國押人命男彦姥津命之後也と見え又攝津神別に羽束も見ゆ　○文首、書首に同じ應神紀十六年に出づ　○小泊瀨造、神八井耳命の後なり原本瀨の字を脫す北本應本中本に據て補ふ　○百濟造、姓氏錄に百濟公(百濟國酒王の後)見えて百濟造又は連は見えず　○語造、錄右京神別天語連天日鷲命之後也とあり　(十月)三宅吉士、四年七月紀に出づ　○草壁吉士、十年正月紀に草香部吉士に作る　○伯耆造、原本伯を泊に作る應本中本に據て改む國造本紀に伯岐國造の祖は兄多毛比命兒大八木足尼と見ゆ其同族か　○船史、欽明紀十四年に出づ　○壹伎史、欽明紀四年に見ゆ　○娑羅々馬飼造、娑羅々は河內國讃良郡是なり靈異記に河內國更荒(サララ)郡馬甘(ウマカヒ)里も見ゆ上文川內馬飼造の同族か　○菟野馬飼造、菟野は河內國讃良郡鷓鴣野邑なるべし　○吉野首、神武紀戊午年八月に出づ　○紀酒人直、詳ならず記に景行天皇段に神櫛王者木國之酒部阿比古之祖とあれど同氏にはあらじ　○采女造、詳ならず錄右京神別に采女朝臣和泉神別に采女臣あり何れも饒速日命の後とあり別姓なるべし　○阿直史、應神紀十五年に見ゆ　○高市縣主、元年七月に出づ　○磯城縣主、神武紀二年に出づ　○鏡作造、神代紀上に見ゆ　○倉梯、大和國十市郡　(十一月)詔、原本治に作る應本中本に據て改む　○習陣法、原本陣を陳に作る應本中本紀略に據て改む持統紀に遣陣法博士等教習諸國と見ゆ　(十二月)伊勢王、父祖詳ならず　○羽田公八國、上に元年七月に矢國に作れり　○巡行天下而、而の字は北本應本に據て補ふ　○諸國境堺、成務紀に隔山河而分國縣とあり其後允恭天皇の御世造立國境之標孝德紀にも宜觀國々堺堺或書或圖持來奉示國縣之名來時將定等ありしを此御世に更に改定め給ひしなり　○四孟月、春夏秋冬の初の月を云　○欲都難波云々、これ後の難波宮の始なり

【十三年】三野縣主、清寧紀卽位前紀に出づ三野は河內國若江郡(今中河內郡)の地名なり　○內藏衣縫造、齊明紀二年に大藏衣縫造の下に注す　(二月)陰陽師、職員令に掌占筮相地とあり　○視占、原本占を古に作る諸本に據て改む　(二月)宇閇直、姓氏錄に載せず續紀十三に於(ウ)ご忌寸人主、同四十に於宿禰乙女等見ゆれど系詳ならず　○白海石榴、白椿なり按に紀中ツバキに海石榴を充て新撰字鏡を始め其他椿を充てたり抄草木部椿

(甲申)十三年春正月甲申朔庚子(十七)、三野縣主、內藏衣縫造、二氏賜姓曰連、丙午(廿八)、天皇御于東庭、群卿侍之、時召能射人、及侏儒、左右舍人等射之、二月癸丑朔丙子(廿四)、饗金主山於筑紫、庚辰(廿八)、遣淨廣肆廣瀨王、小錦中大伴連安麻呂、及判官、錄事、陰陽師、工匠等於畿內、令視占應都之地、是日、遣三野王、小錦下采女臣筑羅等於信濃、令看地形、將都是地、歟、三月癸未朔庚寅(八)、吉野人宇閇直弓貢白海石榴、辛卯(九)、天皇巡行於京師而定宮室之地、乙巳(廿二)、金主山歸國、夏四月壬子朔丙辰(五)、徒罪以下皆免之、甲子(十三)、祭廣瀨大忌神、龍田風神、辛未(二十)、小錦下高向臣麻呂爲大使、小山下都努臣牛

廿爲小使、遣新羅、閏四月壬午朔丙戌、詔曰、來年九月必閱之、因以教百寮之進止威儀、又詔曰、凡政要者軍事也、是以文武官諸人務習用兵及乘馬、則馬兵并當身裝束之物、務具儲足、其有馬者爲騎士、無馬者爲步卒、並當試練、以勿鄣於聚會、若忤詔旨、有不便馬兵、亦裝束有闕者、親王以下逮于諸臣、並罰之、大山位以下者可罰杖、々之、可杖々之、其務習以能得業者、若雖死罪、則減二等、唯恃己才、以故犯者、不在赦例、又詔曰、男女並衣服者、有襴無襴、及結紐長紐、任意服之、其會集之日、著襴衣而著長紐、唯男子者有圭冠、冠而著括緒褌、女年四十以上、髮之結不結、及乘馬縱横、並任意也、別巫祝之類不在結髮之例、壬辰、三野王等進信濃國之圖、丁酉、設齋于宮中、因以赦有罪舍人等、乙巳、坐飛鳥寺僧福揚以下獄、庚戌、僧福揚自刺頸而死、五月辛亥朔甲子、化來百濟僧尼及俗人、男女并廿三人、皆安置于武藏國、戊寅、三輪引田君難波麻呂爲大使、桑原連人足爲小使、遣高麗、

の下に楊氏漢語抄云海石榴(和名豆波岐式文用之)とあり箋注に按酉陽雜俎云山茶似海石榴山茶卽茶梅今俗呼左々无花者則海石榴爲豆波岐爲允と云り

(四月)徒罪、唐書に用刑有五其三曰徒徒者奴也蓋奴辱之量其罪之輕重有年數而捨とあり其刑期は一年以上三年以下にて之を五等に區別す

○都努臣、雄略紀九年に見えたる角臣に同じ

(閏四月)進止威儀、進退作法を云

○當身、其身なり

○勿鄣、通證に鄣與障同と云

○減、原本咸に作る北本應本中本に據て改む

○故犯、吏學指南に知而犯之(謂之故)とあり

○有襴無襴、凡そ衣に襴を著けたると著けざるとあり束帶並に衣冠の袍は襴あり倭名抄に袍は著襴之袷衣也とある是なり又同書に襴衫(須曾豆介乃古路毛一云奈保之能古路毛)とありナホシノコロモは直衣なり直衣も衣冠と同じく襴あり故にスソツケノコロモとも云狩衣淨衣の類は襴なし是無襴の衣なり有襴は唐制に摸するもの無襴は固有の制なり

○結紐長紐、結

紐は胸の開かざる爲に紐著て結びし也長紐は其紐の長く垂れたるを云ひ結紐は短くして垂れざるを云　○圭冠、諸本ハシハカウフリとあるを中本の一つの訓にハシハアルカムリと訓り釋紀に私記云師說今之烏帽子也と云ひ集解に按烏帽之狀似圭故名說文圭瑞玉上圓下方とあり伊勢貞丈氏の說に漆紗冠は圭冠の事にて卽ち今の烏帽子なりと云ひ秋齋閑語四にも侍烏帽子は古の圭冠にて昔は上下を通はして著たるなり圭冠は上をすべ括りて著せし物故はしばるの心にてはしばと訓するなるべしと云ひ通釋には端を括りてある冠の義なり彼禮冠の如囊冠と形の異なるを云るなるべしと云り　○括緒褌、續紀二に直冠以上皆白縛口(ク、リクチ)袴勤冠以下者白脛裳とあり括緒袴は袴の端を紐にて括るを云ひ卽ち指貫なり抄裝束部に奴袴(左師奴奴乃波賀萬)とある是なり　○不在紀髮之例、通證に今按祭祀謹用古禮也とあるが如し　○福揚、應本中本揚を楊に作る下同じ　○下獄、中本下を入に作る　(五月)三輪引田君、續紀廿九に大和國人從七位下大神引田公足人賜姓大神朝臣とあり大神朝臣と同族なり　○桑原連、錄左京諸蕃に桑原宿禰漢高祖七世孫萬德使主之後也とあり

(十月)改諸氏之族姓、我國は建國以來族制々度の行はれし國にて諸家職業を世々にし同一血族の人々相集りて一部落をなし其宗家たる人之が統率して朝廷に奉仕せり伴造是なり伴造とは團體をなして公家に仕奉るの意なり伴造には各統領たる人あり之をカバネと云其部の根幹なりカバはカブにてカブは頭なり統領を云其統領は中臣にありては連といひ忌部にありては首といひ猿女にありて君といひ大伴にありて宿禰と云り氏の名と同じく姓カバネに姓の字は當らざれど慣例に依て用ふ)の稱も其數の多かりしを此に至りて八種と定めら

六月辛巳朔甲申、雩之、秋七月庚戌朔癸丑、幸于廣瀨、戊午、祭廣瀨龍田神、壬申、彗星出于西北、長丈餘、冬十月己卯朔、詔曰、更改諸氏之族姓、作八色之姓、以混天下萬姓、一曰眞人、二曰朝臣、三曰宿禰、四曰忌寸、五曰道師、六曰臣、七曰連、八曰稻置、是日、守山公、路公、高橋公、三國公、當麻公、茨城公、丹比公、猪名公、坂田公、羽田公、息長公、酒人公、山道公十三氏賜姓曰眞人、辛巳、遣伊勢王等定諸國界、是日、縣犬養連手繦爲大使、川原連加尼爲小使、遣耽羅、壬辰、逮于人定、大地震、舉國男女叫唱不知東西、則山崩河涌、諸國郡官舍、及百姓倉屋、寺塔神社、破壞之類不可勝數、由是人民及六畜多死傷之、時伊豫湯泉沒而不出、土左國田苑五十餘萬頃、沒爲海、古老曰、若是地動未曾有也、是夕、有鳴聲、如鼓聞

于東方、有人曰、伊豆嶋、西北二面、自然增益三百餘丈、更爲一嶋、則如皷、音者、神造是嶋響也、甲午、諸王卿等賜祿、

れ眞人は皇胤に限りて之を賜ひ朝臣以下は皇胤にも神胤にも蕃別の人々にも賜ふことに定められ從來の如く必しも其氏につきたるものとせず一般に功あれば之を昇進せしむる制を立てられしなり是に於て自ら其性質を變ずるに至れり　○一曰眞人、姓氏錄序に眞人は是皇別之上氏也とあり美稱なり此姓は此時新に設けられしなるべし是より以前には見えず　○二曰朝臣、貴み親める稱なりもとアソミといひしを後アソンと訛れりアソミは我兄臣ァセオミの意なり釋紀に私記曰師說帝王相親之詞也言我身隨添之臣也と云り　○三曰宿禰、原本日字を脫す北本應本中本に據て補ふ釋紀に私記曰昔稱皇子爲大兄又稱近臣爲少兄也宿禰之義取於少兄也とあり　○四曰忌寸、義詳ならず集解に按忌寸者今來也諸蕃歸化所賜姓也とあり又倭諸技藝於諸道各可爲師者謂難波藥師河內書師之類非稱道師とあり此姓後にも見えず又賜ひし事もあらず記傳に道師臣稻置等の姓を賜ひしことも見えず又右の八姓の餘の姓も此後も猶多し然れば一度かく定め給ひしかども全くは其如くもあらで止みぬることなるべしと云り　○守山公、錄左京皇別に守山眞人敏達天皇々子難波王之後也とあり　○路公、同上　○高橋公、姓氏錄高橋朝臣（大稻輿命之後）亦高橋臣あれど其にはあらじ系詳ならず　○三國公、繼體天皇々子椀子皇子の後　○當麻公、用明天皇々子麻呂古王の後　○茨城公、詳ならず錄和泉皇別に茨木造豐木入彥命之後とあれど異なり　○丹比公、宣化皇子賀美惠波王の後　○猪名公、宣化天皇々子火焰皇子の後　○坂田公、繼體天皇々子仲王の後　○羽田公、應神天皇々子稚野毛二俣王の後　○息長公、同上　○酒人公、繼體紀に菟皇子是酒人公之先也とあり　○山道公、原本此三字を脫す北本應本中本に據て補ふ錄左京皇別に山道眞人息長眞人同祖稚野毛二俣王之後也とあり　○定諸國界、十二年十二月に諸國の境堺を定められしが此に至りて竣れるなり　○懸犬養連、元年六月紀に出づ　○川原連、錄河內諸蕃に河原連陳思王植之後也とあり　○人定、下學集に人定亥時也とあり　○倉屋、類史倉を舍に作る　○爲一嶋、釋紀所引日本後紀に淳和天皇天長九年五月庚戌伊豆國言上三嶋伊古奈比咩神二前預名神此神奏深谷摧高巖平造之地二十町許作神宮二院池三處云々また續日本後紀に承和七年九月伊豆國言賀茂郡有造作嶋本名上津嶋此嶋坐阿波神是三嶋大社本后也云々とあるは此時の事なりと云るが豆州志稿に賀茂郡白濱村にて伊古奈比咩神社所在の地と云り然るに此に伊豆嶋西北二面とあれば地理合はず有人曰といひて傳聞を記せるものなれば方角に誤あるか考ふべし　○造是嶋響、北本嶋の下に暗の字あり

（十一月）大三輪君、上に出づ　○大春日臣、春日臣は崇峻紀卽位前紀に出づ大春日朝臣の姓を賜ひしは桓武天皇延曆廿年なれば此紀と齟齬す　○阿倍臣、孝元紀に出づ　○巨勢臣、繼體紀に出づ　○膳臣、景行紀に出づ

十一月戊申朔、大三輪君、大春日臣、阿倍臣、巨勢臣、膳臣、紀臣、波多臣、物部連、平群臣、雀部臣、中臣連、大宅臣、粟田臣、石川臣、櫻井臣、采女臣、田中臣、小墾田臣、穗積臣、山背臣、鴨君、小野臣、川邊臣、櫟井臣、柿本臣、輕部臣、若櫻部臣、岸田臣、高向臣、完人臣、來目臣、犬上君、上毛野君、角臣、星川、

臣、多臣、胷方君、車持君、綾君、下道臣、伊賀臣、阿閑臣、林臣、波彌臣、下毛野君、佐味君、道守臣、大野君、坂本臣、池田君、玉手臣、笠臣、凡五十二氏賜姓曰朝臣、庚戌、土左國司言、大潮高騰、海水飄蕩、由是運調船多放失焉、戊辰、昏時七星俱流東北則隕之、庚午、日沒時、星隕東方、大如瓮、逮于戊天文悉亂、以星隕如雨、是月、有星孛于中央、與昴星雙而行之、及月盡失焉、倭葛城下郡言、有四足雞、亦丹波國氷上郡言、有十二角犢、

○紀臣、同上
○波多臣、應神紀に出づ
○物部連、崇神紀に出づ
○平群臣、雄略紀に出づ
○雀部臣、錄左京皇別に雀部朝臣建內宿禰之後也とあり
○大宅臣、反正紀に出づ
○粟田臣、原本粟を栗に作る中本に據て改む推古紀に出づ
○石川臣、北本川を田に作る石田臣は垂仁紀に五十日足命是石田君之始祖也と見えしのみにて他に所見なければ誤なるべし
○櫻井臣、舒明紀卽位前紀に出づ　○采女臣、上に出づ　○田中臣、同上　○小墾田臣、舒明紀に出づ　○穗積臣、開化紀に出づ　○山背臣、神代紀に出づ　○小野臣、雄略紀推古紀に出づ　○川邊臣、天智紀に出づ　○櫟井臣、錄左京皇別に櫟井臣彥姥津命五世孫米餅搗大使主命之後也とあり　○柿本臣、上に出づ　○輕部臣、錄和泉皇別に輕部倭日向建日向八綱多命之後也雄略天皇御世獻加里乃郡仍賜姓輕部君とあり　○若櫻部臣、履中紀に出づ　○岸田臣、孝德紀天智紀に出づ　○高向臣、舒明紀に出づ　○完人臣、十年紀崇峻紀に出づ　○來目臣孝德紀元年紀に出づ　○犬上君、原本犬を大に作る北本應本中本に據て改む景行紀天智紀に出づ　○上毛野君、崇神紀に出づ　○角臣、九年紀雄略紀に出づ　○星川臣、上に出づ　○多臣、綏靖紀に出づ　○胷形君、神代紀に出づ　○車持君、履中紀に出づ　○綾君、景行紀に出づ　○下道臣、應神紀雄略紀に出づ　○伊賀臣、孝元紀宣化紀に出づ　○阿閑臣、顯宗紀に出づ　○林臣、皇極紀に出づ　○波彌臣、原本彌を禰に作る北本應本中本及釋紀に據て改む記中卷に波多八代宿禰者波美臣之祖とあり　○下毛野君、崇神紀に出づ　○佐味君、元年紀に出づ　○道守臣、錄田城皇別に道守臣武波都良和氣命之後也とあり天智紀に出づ　○大野君、元年紀に出づ　○坂本臣、安康紀に出づ　○池田臣、錄左京皇別に池田朝臣彈城入彥命十世孫佐太公之後也とあり　○玉手臣、錄右京皇別に玉手朝臣武內宿禰男葛木曾頭日古命之後也とあり　○笠臣、仁德紀天智紀に出づ　○船多、原本此下にまた船多の二字あり北本應本中本に據て削る　○放失、原本放を投に作る北本中本に據て改む集解沒に作る　○瓮、抄器皿部に瓮亦作瓮雜色立成云比良加)瓦器也爾雅云瓮謂之缶(訓保度岐)延喜主計式に瓮受三斗また受一斗などあり　○戊、原本戊を戊に作る應本中本に據て改む戊は戌の刻なり　○孛于中央、隋書天文志に妖星孛星彗之屬也偏指曰彗芒氣四出曰孛孛者孛然非常惡氣所生也とありヒコロヘリは詳ならず或はヒロゴレリの訛ならむといひ又は比日(ヒコロヘリ)の義にて其光芒の日光の如きに依りていへるなりとも云　○昴星、抄天地部に昴星(和名須波流)六星火神也とあり倭訓栞に昴星は此星の形勢をもて名づくるなるべし江戸にむつら星といひ東國に九曜の星といふと云り　○月盡、ツゴモリは月籠なり晦を云　○失焉、原本此の下に是年詔伊賀以下役年免調に至る廿五字あり中本に或本自是年至犢在末と云ひ原本の傍書にも交本是年以下犢已上可在末十四年之前歟とあるに從つて下文皆咸赦焉の下に移す

十二月戊寅朔己卯、大伴連、佐伯連、阿曇連、忌部連、尾張連、倉連、中臣酒人連、土師連、掃部連、境部連、櫻井田部連、伊福部連、巫部連、忍壁連、草壁連、三宅連、兒部連、手繦丹比連、靱丹比連、漆部連、大湯人連、若湯人連、弓削連、神服部連、額田部連、津守連、縣犬養連、稚犬養連、玉祖連、新田部連、倭文連、倭文、此云二シトリノ一、之頭於利、氷連、凡海連、山部連、矢集連、狹井連、爪工連、阿刀連、茨田連、田目連、小子部連、菟道連、猪使連、海犬養連、間人連、舂米連、美濃矢集連、諸會臣、布留連、五十氏賜姓曰宿禰、癸未、大唐學生土師宿禰甥、白猪史寶然、及百濟役時、沒大唐者、猪使連子首、筑紫三宅連得許、傳新羅至、則新羅遣大奈末金物儒、送甥等於筑紫、庚寅、除死刑以下、罪人皆咸赦焉、是年詔伊賀伊勢美濃尾張四國、自今以後、調年免役、役年免調、

（十二月）大伴連、神代紀に出づ　○佐伯連、錄左京神別に佐伯宿禰大伴宿禰同祖道臣命七世孫室屋大連公之後也とあり　○阿曇連、神代紀に出づ　○忌部連、同上　○尾張連、神代紀宣化紀に出づ　○倉連、錄和泉神別に椋連火明命男天香山命之後也とある是なるべし　○中臣酒人連、錄左京神別に中臣酒人宿禰大中臣朝臣同祖天兒屋根命十世孫巨狹山命之後也とあり　○土師連、神代紀垂仁紀に出づ　○掃部連、孝德紀に出づ　○境部連、火明命の裔と大彦命の裔との二氏あり何れとも定め難し雄略紀に注す　○櫻井田部連、應神紀崇峻紀に出づ　○伊福部連、錄左京神別に伊福部宿禰火明命之後也とあり　○巫部連、錄右京神別に巫部宿禰福饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也また和泉神別に巫部連雄略天皇御體不豫因レ茲召二上筑豐國奇巫一令二眞漑椋大連率一巫仕奉一仍賜二姓巫部連一とあり　○忍壁連、十二年紀に刑部に作る　○草壁連、孝德紀に出づ　○三宅連、垂仁紀に出づ　○兒部連、錄左京神別に子部火明命三世孫建刀米命之後也とあり　○手繦丹比連、原本繦の下に連の字あり北本吉本中本に據て削る、此氏は錄河內神別に襷多治比宿禰火明命十一世孫殿諸足尼命之後也男兒男庶其心如一女故賜二襷爲一御膳部一次弟男庶其心勇健其力足レ制二十千軍衆一故賜二靱號一四十千健彦一因負二姓靱負一とあり　○靱丹比連、靱のことは上の手繦連に注ぜるが如し　○漆部連、用明紀元年紀に出づ　○大湯人連、集解に按姓氏錄左京神別天孫額田部湯坐連天津彦根命子明立天御影命之後也云々大湯人連則湯坐連也と云り　○若湯人連、錄左京神別に若湯坐連石上同祖、また攝津神別に若

渭坐宿禰神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也河内若渭坐連膳杵磯丹杵穗命之後也とあり　○弓削連、雄略紀に出づ　○神服部連、錄和泉神別に綺連津守連同祖天香山命之後也天孫本紀に建田背命神服部連等祖とあり　○額田部連、神代紀に出づ　○津守連、神功紀皇極紀に出づ　○縣犬養連、錄左京神別に縣犬養宿禰神魂命八世孫阿居太都命之後也とあり孝德紀に出づ　○稚犬養連、皇極紀に出づ　○玉祖連、神代紀天孫降臨章に出つ　○新田部連、齊明紀に出づ　○倭文連、神代紀孝德紀に出づ　○(注)倭文云々、神代紀には斯圖梨とあり　○氷連、孝德紀に出づ　○凡海連、崇神紀に出づ錄右京神別に凡海連海神綿積命男穗高見命之後也とあり　○山部連、顯宗紀に出づ　○矢集連、錄左京神別に箭集宿禰伊香我色雄命之後也　○狹井連、天智紀に出づ　○爪工連、錄左京神別に爪工連神魂命之子多久都玉命三世孫天仁木命之後也また和泉神別に爪工連多久豆玉命之後也雄略天皇御世造紫蓋爪工井奉飾御座仍賜爪工連姓とあり　○阿刀連、元年紀に安斗と見えたる同じ　○茨田連、仁德紀繼體紀に出づ　○田口連、皇極紀に出づ　○小子部連、雄略紀及元年紀に出づ　○菟道連、錄山城神別に宇治宿禰饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也とあり　○小治田連、吉本中本に據て補ふ小治田連は錄左京神別に小治田宿禰石上同祖(神饒速日命之後也)欽明天皇御代依墾開小治田鮎田賜小治田大連とあり　○猪使連、安寧紀に見ゆ　○海犬養連、皇極紀に出づ凡海連と同祖　○間人連、天玉櫛彥命の後にて推古紀に出づ　○春米連、錄左京神別に春米宿禰石上同祖神饒速日命五世孫伊香我色雄命之後也とあり仁德紀十三年に置春米部とあり此氏の起源なり　○美濃矢集連、矢集の二字は北本中本に據て補ふ矢集連は上に見ゆ美濃國可兒郡に矢集鄕あれば此は美濃に住みし矢集氏なるべし　○諸會連、詳ならず　○布留連、錄大和皇別に布留宿禰市本朝臣同祖天足彥國押人命七世孫米餅搗大使主之後也とあり垂仁紀に出づ　○日猪史、姓氏錄に漏る欽明紀卅年に膳津檢定白猪田部丁籍云々賜姓爲白猪史古注に膳津者王辰爾之甥也とあり　○筑紫三宅連得許、記中卷に神八井耳命者筑紫三家連之祖とあり　○是年、以下四十八字原本十一月の末にありしを中本所引の或本に據て此に置く

【十四年】拜朝庭、原本拜を朔に作る北本應本中本に據て改む

○明位二階、明大一位明廣一位明大二位明廣二位之を二階とす

○淨位四階、淨大一位淨廣一位淨大二位淨廣二位淨大三位淨廣三位淨大四位淨廣四位之にて淨位四階なり如此定められしかど此御世には明位を賜はりし人なく淨位を親王に賜ひしのみなり文武天皇の御世に至りて明位を親王の階淨位を諸王の階と定めらる其後官位令に親王の品位を定めて諸王に

(乙酉)十四年春正月丁未朔戊申、百寮拜朝庭、丁卯、更改爵位之號、仍增加階級、明位二階、淨位四階、每階有大廣、并十二階、以前諸王已上之位、正位四階、直位四階、勤位四階、務位四階、追位四階、進位四階、每階有大廣、并四十八階、以前諸臣之位、是日、草壁皇子尊授淨廣壹位、大津皇子授淨大貳位、高市皇子授淨廣貳位、川嶋皇子、忍壁皇子、授淨大參位、自此以下、諸王諸臣等、增加爵位各有差、二月丁丑朔庚辰、大唐人、百濟人、高麗人、并百四十七人賜爵位、三月丙午朔己未、饗金物儒於筑紫、卽從筑

區別せられたり
○有大廣、原本廣を麼に作る中本に據て改む此大廣をば大寶令に至りて正從と改められたり故に倭名抄に正をばオホイ從をばヒロイと訓りオホイは大ヒロイは廣なり
○淨廣壹、諸王以上の位十二階の第六級に當れり壹貳叁等の字は之を大字と云ひ唐制に倣ひしなり公式令に凡公文悉作眞書凡是籠帳科罪計贓過所抄牓之類有數者爲大字とある是なり
(三月)京職大夫、令制左京職右京職を置き其長官は何れも大夫と稱す
○辛檀努、孝德紀に紫檀に作る
○信濃國、原本濃を農に作る諸本に據て改む
(四月)牟婁湯泉、齊明紀三年に見ゆ
○庚子、北本應本中本及類史庚寅に作る恐らくは非ならむ庚寅は十五日なり原本傍書には壬寅とあり壬寅は廿八日
(五月)讓位于父、公卿補任に粟田朝臣眞人左大臣嶋一男とあり父は嶋を云

紫歸之、仍流著新羅人七口附物儒還之、辛酉、京職大夫直大參巨勢朝臣辛檀努卒、壬申、詔、諸國每家作佛舍、乃置佛像及經、以禮拜供養、是月、灰零於信濃國、草木皆枯焉、夏四月丙子朔己卯、紀伊國司言、牟婁湯泉沒而不出也、丁亥、祭廣瀨龍田神、壬辰、新羅人金主山歸之、庚子、始請僧尼安居于宮中、五月丙午朔庚戌、射於南門、天皇幸于飛鳥寺、以珍寶奉於佛而禮敬、甲子、直大肆粟田朝臣眞人讓位于父、然勅不聽矣、是日、直大參當麻眞人廣麻呂卒、以壬申年之功贈直大壹位、辛未、高向朝臣麻呂、都努朝臣牛飼等、至自新羅、乃學問僧觀常、雲觀、從至之、新羅王獻物、馬二疋、犬三頭、鸚鵡二隻、鵲二隻、及種々寶物、六月乙亥朔甲午、大倭連、葛城連、凡川內連、山背連、難波連、紀酒人連、倭漢連、河內漢連、秦連、大隅直、書連、并十一氏賜姓曰忌寸、秋七月乙巳朔乙丑、祭廣瀨龍田神、庚午、勅定明位已下、進位已上之朝服色、淨位已上並著朱華、波泥孺、朱華、此云ニ正位深紫、直位淺紫、勤位深綠、務位淺綠、追位深蒲萄、進位淺蒲萄、辛未、詔曰、東山道美濃以東、東海道伊勢以東、諸國有位人等、並免課役、八月

○至自新羅、十三年四月に發せしなり
○雲觀、中本水本靈觀に作る
（六月）大倭連、倭直に同じ椎根津彦の後なり
○葛城連、十二年紀に出づ、凡川内連、山背連亦同じ　○難波連、十年紀に出づ　○紀酒人連、十二年紀に出づ　○倭漢連、十一年紀に出づ　○河内漢連、十二年紀に出づ秦連亦同じ　○大隅直、錄大和神別に大角隼人出自火闌降命之後也とあり大角は大隅に同じ　○書連、十二年紀文連に作る　（七月）勅、原本初に作る北本應本中本に據て改む　○朝服、衣服令に禮服朝服見ゆ朝服は朝參の服にて後の束帶なり此時は未だ禮服なば定められざりし故に此に載せられず　○朱華、萬葉十一に翼酢（ハネス）色乃赤裳同八に唐棣とあり詩召南の注に奥李也一名雀梅論語には郁李也と注せり郁李は本草啓蒙にニハウメとよみ首夏花咲き白色紅邊にて遠くよりは薄紅色に見ゆと云　○深紫、字の如くフカムラサキとも訓むべけれどコキムラサキとよめる方勝れり　○蒲萄、衣服令義解に蒲萄者紫色之最淺者也とあり　（八月）川原寺、高市郡川原村にあり

甲戌朔乙酉、天皇幸于淨土寺、丙戌、幸于川原寺、施稲於衆僧、癸巳、遣耽羅使人等還之、

（九月）宴于舊宮、岡本宮を云九月九日なれば重陽宴なるべし
○宮處王、詳ならず
○廣瀨王、上に出づ
○難波王、持統紀六年に出づ
○竹田王、上に出づ
○彌努王、上に三野王に作る
○路眞人迹見、續紀大寶二年從四位下路眞人登見卒とあり
○筑紫、西海道なり
○巡察、此に六人を六道に使者として遣されしは即ち巡察使なり其職掌は職員令太政官の條に巡察使掌、巡察諸國、權於内外官取情正灼然者充とあり

九月甲辰朔壬子、天皇宴于舊宮安殿之庭、是日、皇太子以下、至于忍壁皇子、賜布各有差、甲寅、遣宮處王、廣瀨王、難波王、竹田王、彌努王於京及畿内、各令挍人夫之兵、戊午、直廣肆都努朝臣牛飼爲東海使者、直廣肆石川朝臣虫名爲東山使者、直廣肆佐味朝臣少麻呂爲山陽使者、直廣肆巨勢朝臣粟持爲山陰使者、直廣參路眞人迹見爲南海使者、直廣肆佐伯宿禰廣足爲筑紫使者、各判官一人、史一人、巡察國司郡司及百姓之消息、是日、詔曰、凡諸歌男、歌女、笛吹者、卽傳己子孫、令習歌笛、辛酉、天皇御大安殿、喚王卿等於殿前、以令博戲、是日、宮處王、難波王、竹

○大安殿、大極殿なり
○博戯、僧尼令義解に双六樗蒲之類也とあり
○縣犬養宿禰大侶、北本大の下麻の字あり集解には侶をトモと訓て元年紀六月作大伴と注ぜり
○藤原朝臣大嶋、十年紀に中臣連大嶋とあり
○羆皮、類史羆を熊に作る
○山羊、カモシシなり
（十月）常輝、類史輝を耀に作る
○優婆塞、翻譯名義集に優波塞優波夷肇曰義名信士男信士女淨名疏此云清淨士清淨女亦云善宿男善宿女雖在居家持五戒男女不同宿とあり
○益田直金鍾、原本直の字なし北本應本中本に據て改む父祖詳ならず
○令煎白朮、白朮は字鏡に平介良と注し萬葉十四にウケラとあり葉は一葉或は三葉、花は白し本草綱目に久服輕身延年不餓云々とあり天皇の御病を愈し奉らむ爲に之を採らしめ給ひしにはあらざるか原本煎を並に作る應本中本に據て改む

田王、三國眞人友足、縣犬養宿禰大侶、大伴宿禰御行、境部宿禰石積、多朝臣品治、采女朝臣竹羅、藤原朝臣大嶋、凡十人賜御衣袴、壬戌、皇太子以下、及諸王卿并四十八人、賜羆皮山羊皮各有差、癸亥、遣高麗國使人等還之、丁卯、爲天皇體不豫之、三日誦經於大官、大寺、川原寺、飛鳥寺、因以稲納三寺各有差、庚午、化來高麗人等賜祿各有差、冬十月癸酉朔丙子、百濟僧常輝封卅戸、是僧壽百歲、庚辰、遣百濟僧法藏、優婆塞益田直金鍾於美濃、令煎白朮、因以賜絁綿布、壬午、遣輕部朝臣足瀨、高田首新家、荒田尾連麻呂於信濃、令造行宮、蓋擬幸東間溫湯歟、甲申、以淨大肆泊瀨王、直廣肆巨勢朝臣馬飼、判官以下并廿人、任於畿內之役、己丑、伊勢王等、亦向于東國、因以賜衣袴、是日、說金剛般若經於宮中、十一月癸卯朔甲辰、儲用鐵一萬斤送於周芳摠令所、是日筑紫大宰請儲用物、絁一百疋、絲一百斤、布三百端、庸布四百常、鐵一萬斤、箭竹二千連、送下於筑紫、丙午、詔四方國曰、大角、小角、鼓吹、幡旗、及弩拋之類、不應存私家、咸收于郡家、戊申、幸白錦後苑、丙寅、法藏法師、金鍾、獻白

○荒田尾連麻呂、元年紀に荒田尾赤麻呂あり同姓ならむ
○東間温湯、信濃國筑摩の温泉なり筑摩は倭名抄に豆加萬と訓り今松本市より一里許の地に淺間温泉あり是ならむ
○畿内之役、行幸せられむとするにつきて畿内を守らしめ給ふなるべし
○向于東國、行幸あるべき爲なるべし

朮煎、是日、爲天皇招魂之、己巳、新羅遣波珍飡金智祥、大阿飡金健勳請政、仍進調、十二月壬申朔乙亥、遣筑紫防人等飄蕩海中、皆失衣裳、則爲防人衣服、以布四百五十八端給下於筑紫、辛巳、自西發之地震、丁亥、絁綿布以施大官、大寺僧等、庚寅、皇后命以、王卿等五十五人賜朝服各一具、

○是日、原本日を月に作る前十一年の錯簡文及北イ本に據て改む　(十一月)儲用鐵、十一年の錯簡及北本應本には錢とあれど恐らくは非ならむ　○周芳總令所、持統紀に伊豫惣領續紀一文武四年に筑紫惣領周芳總令も同じかるべし水戸訂本には總領とあれど姑く諸本に據る　○是日、原本此二字なし應本中本に據て補ふ　○庸布、孝德紀に注す　○常、上に注す　○箭竹二千連、矢に作る竹にて抄調度部征戰具に箭釋名云笑(音矢夜)其體曰箭(音幹夜賀良)とあり連は通證に今亦云幾連猶云幾束也とあり　○大角小角、抄調度部に征戰具に角兼名苑注云角(楊氏漢語抄云大角波良乃布江小角久太乃布江)本出胡中或云出吳越以象龍吟也通證に波良寶螺所謂螺角是也久太管也と云り　○弩、同書に弩兼名苑注云弩(於保由美)とあり　○拋、原本枕に作る北本應本及釋紀に據て改む推古紀に注す　○郡家、ミヤケと訓むは古訓なり後字音にてグムゲと呼べり郡政を掌る所なり　○白錦後苑、所在詳ならず應本白を自に作り諸本苑を菀に作る菀苑通ず　○招魂、釋紀に兼方按今鎮魂祭卽此とあり丙寅は廿四日にて下の寅なれば此は毎年行はるゝ鎮魂祭ならむ　○波珍飡、原本珍を彌に作る中本に據て改む　(十二月)四百五十八端、八の字は北本應本中本に據て補ふ　○絁綿布以、水本以の字絁の上に置く、されど下文の皇后命以も同じ文體なれば改めず

【朱鳥元年】無端事、釋紀に兼方案之今世何々(チソナッ)歟とあり卽ち謎々なり
○蓁揩御衣、四時祭式に宮主蓁擂(ハリスリ)袍とありこれなハギスリともいふは蓁を棒に通はせたるなり萬葉七に住吉之遠里小野之眞榛以須禮留衣乃盛過去とある榛は俗にハ

朱鳥元年春正月壬寅朔癸卯、御大極殿而賜宴於諸王卿、是日、詔曰、朕問王卿以無端事、仍對言得實必有賜、於是高市皇子被問以實對、賜蓁揩御衣三具、錦袴二具、并絁廿疋、絲五十斤、綿百斤、布一百端、伊勢王亦得實、卽賜皂御衣三具、紫袴二具、絁七疋、絲廿斤、綿四十斤、布四十

ンノ木と稱し其の樹皮を以て染めたる御衣なり
○皂御衣、クリソメは湿(クリ)染也と通證に云り栗色に染めたる御衣なり
○百濟新興、原本濟の字なし北本應本中本に據て補ふ
○白馬璃、抄珍寶部に廣雅云馬腦(俗音女奈宇)石之次ノ玉也とあり
○知事佐官、二年紀(二六八頁)に出づ
○以俗供養々之、元亨釋書資治表に天武天皇十五年召三綱及大官寺知事佐官并九比丘以俗供供之非禮也君子曰以鳥養鳥古之鑑乎とあり養をクレキと訓るは食物のみならず人に物を與ふるをくれると云クレに同じされればくれるといふは雅俗に渉れる語と聞えたり
○甲寅、此二字應本なし
○廿餘人、原本廿の字なし北本應本中本及類史に據て補ふ
○陰陽師、職員令に陰陽師六人掌占筮相地
○兵庫職、職員令に左兵庫寮右兵庫寮頭一人掌左右兵庫儀仗兵器安置得所出納曝涼及受事覆奏

端。是日、攝津國人百濟新興獻白馬璃。庚戌、請三綱律師、及大官大寺、知事佐官、并九僧、以俗供養之、仍施絁綿布各有差。辛亥、諸王卿各賜袍袴一具。甲寅、召諸才人博士陰陽師醫師并廿餘人、賜食及祿。乙卯、酉時、難波大藏省失火、宮室悉焚。或曰、阿斗連藥家失火之、引及宮室。唯兵庫職不焚焉。丁巳、天皇御於大安殿、喚諸王卿賜宴、因以賜絁綿布各有差。是日、問群臣以無端事、則當時得實、重給綿絁。戊午、宴後宮。己未、朝廷大餔。是日、御々窟殿前、而倡優等賜祿有差、亦歌人等賜袍袴。庚申、地震。是月、爲饗新羅金智祥、遣淨廣肆川內王、直廣參大伴、宿禰安麻呂、直大肆藤原朝臣大嶋、直廣肆境部宿禰鯛魚、直廣肆穗積朝臣虫麻呂等于筑紫。二月辛未朔甲戌、御大安殿、侍臣六人授勤位。乙亥、勅選諸國司、有功者九人授勤位。三月辛丑朔丙午、大弁官直大參羽田眞人八國病、爲之度僧三人。庚戌、雪之。乙丑、羽田眞人八國卒、以壬申年之功贈直大壹位。夏四月庚午朔丁丑、侍醫桑原村主訶都授直廣肆、因以賜姓曰連。壬午、爲饗新羅客等、運川原寺伎樂於筑紫、仍以皇后宮之私、

事とあり
○是日、中本此下に天皇の二字あり
○絁綿、原本綿絁に作る中本及類史に據て改む
○御窟殿、集解に下文設齋宮中御窟院蓋謂御窟者猶御座謂燕居之宮室也と云り類史に御の字なし
○歌人、職員令に雅樂寮歌師四人掌教歌人歌人三十人とあり
○金智祥、原本祥を淨に作る中本及上下の文に據て改む
○淨廣肆、原本淨字なし中本に據て補ふ
○川内王、應本川を河に作る系詳ならず
(四月)桑原村主、原本原の字なし北本應本中本に據て補ふ
○伎樂、推古紀廿年(一二五頁)に注す
○五千束、原本千を十に作る北本應本中本に據て改む
○細馬、孝德紀大化二年(一八八頁)に出づ
○犬二狗、通證に狗當レ作レ口日本紀略犬子二口とあれど一乘院本紀略には見えず集解は狗を頭に

稲五千束ヲ納ニ于川原寺一、戊子、新羅ノ進調、從ニ筑紫一貢上、細馬一疋、騾一頭、犬二狗、鏤金器、及金銀、霞錦、綾羅、虎豹皮、及藥物之類并百餘種、亦智祥健勳等別獻物、金銀、霞錦、綾羅、金器、屏風、鞍皮、絹布、藥物之類、各六十餘種、別獻ニ皇后皇太子及諸親王等一之物各有レ數、丙申、遣ニ多紀皇女、山背姫王、石川夫人於伊勢神宮一、五月庚子朔戊申、多紀皇女等、至レ自ニ伊勢一、是日、侍醫百濟人億仁病之臨レ死、則授ニ勤大壹位一、仍封ニ一百戶一、癸丑、勅之大官大寺封ニ七百戶一、乃納ニ稅卅萬束一、丙辰、宮人等增ニ加爵位一、癸亥、天皇體不安、因以於ニ川原寺一說ニ藥師經一、安居于宮中一、戊辰、饗ニ金智祥等筑紫一、賜祿各有レ差、卽從ニ筑紫一退之、是月、勅遣ニ左右大舍人等一掃清諸寺堂塔一、則大赦天下、囚獄已空、六月己巳朔、槻本村主勝麻呂賜レ姓曰レ連、仍加ニ勤大壹位一、封ニ廿戶一、庚午、工匠、陰陽師、侍醫、大唐學生、及一二官人、并卅四人授ニ爵位一、乙亥、選ニ諸司人等有功廿八人一、增ニ加爵位一、戊寅、卜ニ天皇病一、祟ニ草薙劍一、卽日、送ニ置于尾張國熱田社一、庚辰、雩之、甲申、遣ニ伊勢王及官人等於飛鳥寺一、勅ニ衆僧一曰、近者朕身不和、願賴ニ三寶之威一、以身體欲レ得ニ安和一、

是以僧正僧都及衆僧應誓願、則奉珍寶於三寶、是日、三綱律師、及四寺和上、知事、并現有師位僧等、施御衣御被各一具、丁亥、勅遣百官人等於川原寺、爲燃燈供養、仍大齋之悔過也、丙申、法忍僧、義照僧、爲養老、各封卅戶、庚寅、名張厨司災之、

改む　○鏤金器、字の如し鏤は字鏡に刻也金乃知利婆女とあり　○霞錦、釋紀に霞色之錦とあり通證に杜陽雜編曰女王國有明霞錦練水香麻爲之光耀夸馥五色相間而美麗過中國之錦とあり次なるも霞錦なるを原本轉倒せり之に據て改む　○屏風、通證に三禮圖曰屏風之名出于漢世禮明堂位註今屏風扆遺象也とあり　○多紀皇女、天皇の皇女、文武紀に當耆皇女に作る　○山背姫王、詳ならず集解には紹運録を引て按押坂彦人大兄子舒明天皇弟有山城王蓋其女也とあり　○石川夫人、同書に按二年紀夫人蘇我赤兄大臣女大蕤娘蘇我石川同姓卽此と云り　(五月)體不安、中本體の上に始の字あり　○藥師經、藥師瑠璃光如來七佛本願功德經二卷なり　○金智祥等、原本祥を詳に北本群に作る應本中本に據て改む　○左右大舍人、職員令に左右大舍人各八百人とあり　(六月)槻本村主、原本村を材に作る應本楓本に據る後漢獻帝の後なり　○崇草薙劍、原本崇を崇に作る中本に據て改む通證に熱田古記天智時國人捕獲道行國司道連奏納劍于帝宮とありされば天智大皇七年僧道行觸冒以來禁中に奉藏し奉れるかとも思はるゝが新撰和漢合圖には天武天皇十三年村雲劍自熱田宮被置內裏と見えたり伴信友氏は之を證として道行觸冒以來宮中に奉藏したりと云るは根據なき說なりと云り　○送置于尾張國熱田社、熱田社鎭座紀に朱鳥元年五月庚子賜可奉還神劍於尾張國勅爲甲辰有神與帝神約矣六月戊寅卜帝御病復爲崇神劍故卽日勅而奉還熱田宮爲此時更改經營大宮及別宮諸神社矣十二月辛巳奉遷新宮以前下之永賞旨始勤行之とあり　○以身體、原本以の字一字衍れり北本應本に據て削る　○四寺、詳ならねど大官大寺川原飛鳥の三寺に一寺を加へしならむ元亨釋書に四方和尙に作る　○和上、慧苑音義に和上按五天雅言和上謂之塢波陀耶然彼土流俗謂之殟(烏沒切)社于闐疏勒乃云鶻社今此方訛音謂之和上云々言塢波者此云近也陀耶者讀也言此尊師爲弟子親近習讀之者也舊云親教師者是也とあり上の字を用ふるは律宗にして他は皆尙の字を用ふと云　○師位僧、通證に傳燈大法師位傳燈法師位之類とあり　○御被、抄裝束部に說文云衾(布須万)大被也四聲字苑云衾被別名也とあり　○燃燈供養、燈火を燃して衆生の罪過を懺悔するを云　○悔過、翻譯名義集に懺摩此翻悔過應法師云此云忍謂容恕我罪也とあり　○庚寅、通證に當丙申互換と云　○名張厨司、名張は伊賀國名張郡なり通證に按厨司奉御贄所とあり

(七月)己亥、原本己を乙に作る干支を推すに己亥の誤なること明なり故に訂す　○脛裳、上に出づ　○垂髮于背、十一年紀に此風を禁められしかど又古の風に復し給へるなり

秋七月己亥朔庚子、勅、更男夫著脛裳、婦女垂髮于背猶如故、是日、僧正僧都等參赴宮中而悔過矣、辛巳、詔諸國大解除、壬寅、半減天下之調、仍悉免徭役、癸卯、奉幣於居紀伊國國懸神、飛鳥四社、住吉大神、丙午、請

通證に今俗謂之須邊良加之云々と云り
○徭役、通證に美由伎蓋自征(ミユキ)と云り吏學指南曰科調曰徭工作征戍曰役とあり
○國懸神、神名式に紀伊國名草郡國懸神社(今海草郡宮村秋月)とあり天照大神の前御靈を祀り現に官幣大社たり
○飛鳥四社、神名式に大和國高市郡飛鳥坐神社四座是なり
○住吉大神、式に攝津國住吉郡住吉坐四座とあり此社の事神功紀に出づ
○藏庸舍屋、庸を納むる所なり
○詔曰、類史免官物の條に載せたり
○乙酉年、昨年なり
○改元、此年朱鳥の出でたるを瑞として改元し給へるなり其は此紀に漏れたれど扶桑略記に十五年大倭國進赤雉仍七月改爲朱鳥元年とあり
○(注)阿訶美菩利、原本菩を苦に作る北本應本に據て改む
○名宮云々、原本宮を官に作る諸本に據て改む記傳に此飛鳥はトブトリと

一百僧讀金光明經於宮中、戊申、雷光南方而一大鳴、則天災於民部省藏庸舍屋、或曰、忍壁皇子宮失火延燒民部省、癸丑、勅曰、天下之事不問大小、悉啓于皇后及皇太子、是日、大赦之、甲寅、祭廣瀨龍田神、丁巳、詔曰、天下百姓由貧乏而賃稻及貨財者、乙酉年十二月卅日以前、不問公私、皆免原、戊午、改元曰朱鳥元年、朱鳥此云阿訶美菩利、仍名宮曰飛鳥淨御原宮、丙寅、選淨行者七十人以出家、乃設齋於宮中御窟院、是月、諸王臣等爲天皇造觀音像、則說觀世音經於大官大寺、八月己巳朔、爲天皇度八十僧、庚午、度僧尼幷一百、因以坐百菩薩於宮中、讀觀世音經二百卷、丁丑、爲天皇體不豫祈于神祇、辛巳、遣秦忌寸石勝奉幣於土左大神、是日、皇太子、大津皇子、高市皇子、各加封四百戶、川嶋皇子、忍壁皇子、各加百戶、癸未、芝基皇子、磯城皇子、各加二百戶、己丑、檜隈寺、輕寺、大窪寺、各封百戶、限卅年、辛卯、巨勢寺封二百戶、九月戊戌朔辛丑、親王以下逮于諸臣、悉集川原寺、爲天皇病誓願云々、丙午、天皇病遂不差、崩于

訓むべしこれをアスカと訓は非なり其故は朱鳥の祥瑞の出來たるためで給ひて年號をも然改め給ひ大宮の名にも其朱雀を取て飛鳥云々と名づけ給へるなりアスカといはむは本よりの地名なれば殊更に仍名宮曰など云べき由なきを思ふべしと云り○宮中御窟院、上の御窟殿に同じ○觀音像、中本觀の下に世の字あり翻譯名義集に阿那婆婁吉低輸此云觀世音能所圓融有無兼暢照窮正性察其本末故稱觀也世音者是所觀之境也云々とあり

（八月）觀世音經二百卷、原本世の字なし北本應本中本及紀略に據て補ふ觀音經は法華經第八の普門品を云○土左大神、土佐國土佐郡土佐神社を云○皇太子、原本皇の上に天の字あり北本應本中本に據て削る○檜隈寺、大和志に高市郡檜隈廢寺檜前村故跡今存十三層石浮圖とあり○輕寺、大和志に高市郡輕廢寺在大歌留村屬東

正宮、戊申、始發哭、則起殯宮於南庭、辛酉、殯于南庭、卽發哀、當是時、大津皇子謀反於皇太子、甲子平旦、諸僧尼發哭於殯庭、乃退之、是日、肇進奠、卽誄之、第一大海宿禰菖蒲誄壬生事、次淨大肆伊勢王誄諸王事、次直大參縣犬養宿禰大伴摠誄宮內事、次淨廣肆河內王誄左右大舍人事、次直大參當摩眞人國見誄左右兵衞事、次直大肆采女朝臣筑羅誄內命婦事、次直廣肆紀朝臣眞人誄膳職事、乙丑、諸僧尼亦哭於殯庭、是日、直大參布勢朝臣御主人誄太政官事、次直廣參石上朝臣麻呂誄法官事、次直大肆大三輪朝臣高市麻呂誄理官事、次直廣參大伴宿禰安麻呂誄大藏事、次直大肆藤原朝臣大嶋誄兵政官事、丙寅、僧尼亦發哀、是日、直廣肆阿倍久努朝臣麻呂誄刑官事、次直廣肆紀朝臣弓張誄民官事、次直廣肆穗積朝臣虫麻呂誄諸國司事、次大隅阿多隼人、及倭河內馬飼部造各誄之、丁卯、僧尼發哀之、是日、百濟王良虞代百濟王善光而誄之、次國々造等隨參赴各誄之、仍奏種

種、歌舞、ヲ

明寺邑とあり
○大窪寺、北本窪を玖書の二字に作る大和志に高市郡大窪廢寺大久保村故址尚有觀音堂とあり
○巨勢寺、大和志に葛上郡巨勢廢寺古瀬村礎石尚在卽是とあり
○崩于正宮、大日本史に本書享年闕一代要記皇胤紹運錄並曰壽六十五と
○大津皇子謀反、此の事持統紀卽位前紀に見ゆ
○肇進奠、字書に奠薦也とあり殯宮に移し奉りてより肇めて御饌を奠りて誄詞を奏したるなり崩御以來第七日なり
○大海宿禰、通證に與凡海同今按天皇元名大海皇子則是爲乳母家故誄壬生事也と云へり言蒲は續紀二に大寶元年二月凡海宿禰麁鎌に作る
○壬生事、御產生の御事なり ○當摩眞人國見、中本摩を麻に作る ○是日云々、通證に前日誄禁中事次日誄天下政と云へるはさることなり ○布勢朝臣御主人、持統紀十年に大納言阿部朝臣御主人とあり ○石上朝臣麻呂、北本應本麻を摩に作る續紀七に和銅元年三月左大臣正二位石上朝臣麻呂薨云々泊瀨朝倉朝廷大連物部之後難波朝衛部大華上宇麻古之子也とあり ○大三輪朝臣高市麻呂、北本應本麻を摩に作る持統紀に中納言直大貳三輪朝臣高市麻呂とあり續紀三に左京大夫從四位上大神朝臣高市麻呂卒云々大花上利金之子也と云る如く大三輪或は三輪又大神と書けれど皆同氏なり ○理官事、治部省の事なり ○兵政官事、兵部省の事なり ○僧尼亦、北本應本亦の字なし ○阿倍久努朝臣、續紀五に和銅五年十一月阿倍朝臣宿麻呂の上言に久努朝臣は阿倍氏の正宗なるが居處に緣て別氏となれりと見ゆ ○刑官事、刑部省の事なり ○民官事、民部省の事なり ○虫麻呂、北本應本麻を摩に作る ○大隅阿多隼人、隼人に關係の事に就て誄び奉りしなるべし ○倭河內馬飼部造、馬飼の事に關して誄び奉りしなるべし ○百濟王良虞、續紀十二に百濟王良虞卒とあり善光の子なり

日本書紀卷第廿九

【即位前紀】高天原廣野姫天皇、鸕野皇女と申奉るより廣野と稱へ廣といへるより高天原と冠らせて御德の廣大に坐す由を稱へ奉れるなり

○少名鸕野讃良皇女、北本少を小に作る少名とあれど後迄も此御名にて坐しゝなり鸕野は河内國讃良郡の地名なり御母遠智娘の父蘇我石川麻呂の食邑なれば遠智娘其地に住て天皇も此地に生坐しに因りて御名としたるなるべし

○遠智娘、天智紀七年二月に出づ

○雞帝王女云々、以下十三字は後漢書郭皇后紀の文に據れり有二母儀德一とは天下の母たる御德のまします云

○大津宮、齊明紀五年七月同七年三月に見えたる

日本書紀卷第卅

高天原廣野姫天皇　持統天皇

高天原廣野姫天皇、少名鸕野讃良皇女、天命開別天皇第二女也、母曰遠智娘、更名美濃津子娘也　天皇深沈有大度、天豐財重日足姫天皇三年、適天淳中原瀛眞人天皇、爲妃、雖帝王女、而好禮節儉、有母儀德、天命開別天皇元年、生草壁皇子尊於大津宮、十年十月、從沙門天淳中原瀛眞人天皇、入於吉野、避朝猜忌、語在天命開別天皇紀、天淳中原瀛眞人天皇元年夏六月、從天淳中原瀛眞人天皇、避難東國、鞠旅會衆、遂與定謀、廼分命敢死者數萬、置諸要害之地、秋七月、美濃軍將等、與大倭桀豪、共誅大友皇子、傳首詣不破宮、二年、立爲皇后、皇后從始迄今、佐天皇定天下、每於侍執之際、輒言及政事、多所毗補、朱鳥元年九月、戊戌朔丙午、天淳中原瀛眞人天皇崩、皇后臨朝稱制、

大津宮卽ち長津宮を云近江の大津宮にはあらず　○沙門、出家の稱なるを墓漢淫佛よりかく記されたるか　○鞠旅、旅は軍旅なり鞠は養なり　○大倭桀豪、集解に傑豪に作り水戸本豪桀に作る壬申紀に吹負留謂立名于一時欲寧艱難卽招一二族及諸豪桀僅得數十人とあり吹負を主とし其他の人々と共に吉野方として功を立たる人々を云ふ　○臨朝稱制、卽位し給はずして萬機を司り給ふを云神功皇后の攝政と同じ狀なり此時皇太子（草壁皇子）直に御代嗣がせ給ふべきを御母皇后の嗣がせ給ひけるは世の改れる時を窺ひて近江の朝廷に心よせたりし輩の心の御心もとなく又さらぬ方にも御世を危み給ふ事の機もありしなるべし又天智天皇天武天皇の御世に始め給ひし制の未だよく行はれ難き事どものありて萬に御うしろめたく思ぼしければ暫く御親ら御世しろしめして後に皇太子を御位に卽け奉り給はむとの御慮なりしなるべしと云り

（十月）謀反發覺、此謀反を告しは河島皇子なり懷風藻に河島皇子始與大津皇子爲莫逆之契及大津謀逆島則告變とあり　○八口朝臣、錄左京皇別に箭口朝臣宗我石川宿禰四世孫稻目宿禰之後也とあり　○中臣朝臣臣麻呂、大中臣系圖に意美麻呂とありて可多能祐大連の曾孫にて父は國足なり又續紀五に和銅四年閏六月乙丑中納言中臣朝臣意美麻呂卒とあり　○巨勢朝臣多益須、續紀五和銅三年六月大宰大貳巨勢朝臣多益須卒とあり　○帳內、親王の舍人を云雄略紀卽位前紀に見ゆ　○礪杵、姓氏錄に洩れたり系詳ならず　○賜死、大津皇子新羅僧行心に欺かれて謀反を圖り有爲の才を抱きながら空しく死を賜りたるをい

冬十月、戊辰、朔己巳、皇子大津謀反發覺、逮捕皇子大津、并捕爲皇子大津、所註誤直廣肆八口朝臣音檟、小山下壹伎連博德、與大舍人中臣朝臣臣麻呂、巨勢朝臣多益須、新羅沙門行心、及帳內礪杵道作等卅餘人、庚午、賜死皇子大津於譯語田舍、時年廿四、妃皇女山邊被髮徒跣、奔赴殉焉、見者皆歔欷、皇子大津、天淳中原瀛眞人天皇第三子也、容止墻岸、音辭俊朗、爲天命開別天皇所愛、及長辨有才學、尤愛文筆、詩賦之興、自大津始也、丙申、詔曰、皇子大津謀反、註誤吏民帳內不得已、今皇子大津已滅、從者當坐皇子大津者皆赦之、但礪杵道作流伊豆、又詔曰、新羅沙門行心、與皇子大津謀反、朕不忍加法、徙飛驒國伽藍、十一月丁酉、朔壬子、奉伊勢神祠皇女大來、還至京師、癸丑、地震、十二月丁卯朔乙酉、奉爲天淳中原瀛眞人天皇、設無遮大會於五寺大官、飛

たく悲めること懷風藻に詳なりまた大津皇子被死之時磐余池陂流涕御作歌萬葉三に見ゆ　○譯語田、大和國城上郡にあり皇子の邸は此地にありしなり　○皇女山邊、天智天皇の皇女にて同紀七年に出づとあり　○詩賦之興自大津始、かくあれど我國詩賦の興の始は尚ほ大友皇子なるべき由懷風藻大友皇子の傳に見ゆされど大友皇子は半途にして世を逝まし大津皇子之に繼て盛に其事を興し給ひしかばかく書けるなるべし此事今昔物語古今集序等に詳なり　○徒飛驛國伽藍、原本徒を徒に作る通證集解に據て改む　○皇女大來、大津皇子の同母姉なり此皇女も皇子の謀反に竊に御心を合せられたりと察せらるゝ歌萬葉二に見えたりされば此皇女の還り坐るは事發覺し皇子刑せられ給ひしかば皇女も齋宮を罷られ給ひしなるべし　○大官、原本官を宮に作る北本中本及類史に據て改む大官大寺なり　○飛鳥、法興寺　○川原、弘福寺　○小墾田豐浦、一寺なり集解に按大和志高市郡廣嚴寺在豐浦村故又名豐浦寺此謂小墾田豐浦者推古天皇之宮稱小墾田宮在豐浦村故知兩名併稱焉とあり　○坂田、用明紀二年に見ゆ　○孤獨、戸令義解に十六已下而無父爲孤也六十一以上而無子爲獨とあり　○高年、八十以上のものを云　○三國、水本三の下に韓の字を補ふ

鳥川原、小墾田豐浦、坂田、壬辰、賜京師孤獨高年布帛各有差、閏十二月、筑紫大宰獻三國高麗百濟新羅百姓男女、并僧尼六十二人、是歲、蛇犬相交、俄而俱死、

○被髮徒跣、總て取繕はぬ狀を申せり　○第三子也、懷風藻には長子とあり　○墻岸、三國名臣傳贊に天骨疎朗墻岸高峻とあり　○詩賦之興自大津始、かくあれど我國詩賦の興の始は尚ほ大友皇子なるべき由懷風藻大友皇子の傳に見ゆされど大友皇子は半途にして世を逝まし大津皇子之に繼て盛に其事を興し給ひしかばかく書けるなるべし此事今昔物語古今集序等に詳なり　○徒飛驛國伽藍、原本徒を徒に作る通證集解に據て改む　○皇女大來、大津皇子の同母姉なり此皇女も皇子の謀反に竊に御心を合せられたりと察せらるゝ歌萬葉二に見えたりされば此皇女の還り坐るは事發覺し皇子刑せられ給ひしかば皇女も齋宮を罷られ給ひしなるべし　○大官、原本官を宮に作る北本中本及類史に據て改む大官大寺なり　○飛鳥、法興寺　○川原、弘福寺　○小墾田豐浦、一寺なり集解に按大和志高市郡廣嚴寺在豐浦村故又名豐浦寺此謂小墾田豐浦者推古天皇之宮稱小墾田宮在豐浦村故知兩名併稱焉とあり　○坂田、用明紀二年に見ゆ　○孤獨、戸令義解に十六已下而無父爲孤也六十一以上而無子爲獨とあり　○高年、八十以上のものを云　○三國、水本三の下に韓の字を補ふ

【元年】奉膳、職員令内膳司に奉膳二人掌總知御膳進食先嘗事抄聯官部に内膳司宇知乃加之波天之官また長官内膳司曰奉膳とあり　○紀朝臣、原本紀を乳に作る中本に據て改む天武紀朱雀元年九月に見ゆ　○膳部、職員令内膳司に膳部四十人掌造御膳とあり　○樂官、原本官を宮に作る北本楓本中本に據て改む　○篤疾、釋紀に私記曰案爾雅曰篤固也倉頡篇曰癃

（一元）元年春正月丙寅朔、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、納言布勢朝臣御主人誄之、禮也、誄畢、衆庶發哀、次梵衆發哀、於是奉膳紀朝臣眞人等奉奠、々畢、膳部采女等發哀、樂官奏樂、庚午、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、梵衆隨而發哀、庚辰、賜京師年自八十以上、及篤癃、貧不能自存者絁綿各有差、甲申、使直廣肆田中朝臣法摩呂、與追大貳守君苅田等、使於新羅、赴天皇喪、三月乙丑朔己

病也とあり篤疾に同じ戸令に殘疾廢疾篤疾と區別し惡疾癲狂二支廢兩目盲如し此之類皆爲篤疾とあり
○貧不能自存者、老疾或は貧窮にして自ら生活すること能はざるものを云
(三月)賦田受稾、字書に賦は給與也稾は賜穀也とあり
○縵、原本縵を漫に作る北本楓本中本に據て改む時花を風流に糸に貫て鬘とせるものなり內藏寮式大神祭有忍冬花鬘一萬葉に百合花鬘あり又翻譯名義集七に俱蘇摩此云華摩羅云鬘應法師云西域結鬘師多用蘇摩羅華一行列結之以爲條貫無間男女貴賤皆此莊嚴或首或身以爲飾好正法念云生天華鬘在額と見ゆ
○新羅人、中臣本人の字なし
(五月)筆人大隅阿多魁帥、天武紀朱鳥元年八月に出づ魁帥は首領なり
(七月)負債者、原本債を倩に作る北本中本及類史に據て改む職員令刑部省義解に徵財曰債也受貸不償曰負とあり

卯、以投化高麗五十六人、居于常陸國、賦田受稾、使安生業、甲申、以花縵進于殯宮、此日御蔭、是日、丹比眞人麻呂誄之、禮也、丙戌、以投化新羅人十四人、居于下毛野國、賦田受稾、使安生業、夏四月甲午朔癸卯、筑紫大宰獻投化新羅僧尼、及百姓男女廿二人、居于武藏國、賦田受稾使安生業、五月甲子朔乙酉、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、於是隼人大隅阿多魁帥、各領己衆互進誄焉、六月癸巳朔庚申、赦罪人、秋七月癸亥朔甲子、詔曰、凡負債者、自乙酉年以前物、莫收利也、若既役身者、不得役利、辛未、賞賜隼人大隅阿多魁帥等三百卌七人、各有差、八月壬辰朔丙申、嘗于殯宮、此日、御青飯也、丁酉、京城耆老男女、皆臨慟哭於橋西、己未、天皇使直大肆藤原朝臣大嶋、直大肆黃書連大伴、請集三百龍象大德等於飛鳥寺、奉施袈裟、人別一領、曰、此以天淨中原瀛眞人天皇御服所縫作也、詔詞酸刻、不可具陳、九月壬戌朔庚午、設國忌齋於京師諸寺、辛未、設齋於殯宮、甲申、新羅遣王子金霜

○乙酉年、天武天皇十四年にて三年前なり
○利、利息なりコノシロは子代の意
○各有差、原本各一字衍れり北本中本に據て削る
(八月)嘗于殯宮、嘗は新嘗祭の嘗に同じ前文に奉奠とあると同じく御饌を供ふるを云
○青飯、魚鳥の肉を用ひずして專ら菜蔬を用ふるを云之をヒジキオホノと訓るは葬禮私考(栗田博士)に喪葬令集解に古記を引て生目天皇の孽圓目王の妻伊賀比自支和氣の女が殯殿の事を司れる事を云て凡天皇崩時者比自支和氣等到殯所供奉其事云々の事ありしによりて御世〳〵の殯宮に奉れる御飯を比自支飯と名けられたるなるべしと云り ○書老男女、戸令に六十一爲老六十六爲書とあり ○龍象、祖庭事苑に智度論云龍象言其力大龍水行中力大象陸行中力大今以鉅禪碩師比之龍象とあり ○大德、釋氏要覽に智度論云梵語娑檀陁秦言大德律中多呼佛爲大德增輝記云行滿德高曰大德とあり ○酸刻、原本刻を割に作る釋紀に據て改む字書に悲痛曰酸刻痛也とあり極めて悲しきを云 (九月)國忌齋、職員令治部省の義解に國忌謂先皇崩日とあり天武天皇は前年九月九日崩じ給ひしにより て周忌の齋會を行ひ給ひしなりハテは最終の義なり (十月)大内陵、二年十一月紀に出づ (十二月)爲饗新羅勅使、集解に羅の下に人の字を補ふ
○太歲、原本太を大に作る前例に據て改む

林、級飡金薩摹、及級飡金仁述、大舍蘇陽信等、奏請國政、且獻調賦、學問僧智隆附而至焉、筑紫大宰便告天皇崩於霜林等、卽日、霜林等皆著喪服、東向三拜、三發哭焉、冬十月辛卯朔壬子、皇太子率公卿百寮人等、并諸國司國造、及百姓男女、始築大内陵、十二月辛卯朔庚子、以直廣參路眞人迹見爲饗新羅勅使、是年也太歲丁亥、

【二年】春正月、原本春の字なし中本類史及紀略に據て補ふ
○適殯宮而慟哭焉、通證に以上與元年同文蓋先皇在殯未葬皇太子居喪行禮故元日必哭殯宮至此三年矣是孝之至也とあり
(二月)每取國忌日云々、取は當なり每年先皇の崩日に齋會すべしとの意なり

(戊子)二年春正月、庚申朔、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、辛酉、梵衆發哀於殯宮、丁卯、設無遮大會於藥師寺、壬午、以天皇崩奉宣新羅金霜林等、金霜林等乃三發哭、二月庚寅朔辛卯、大宰獻新羅調賦、金銀、絹布、皮、銅鐵之類十餘物并別所獻佛像、種種彩絹、鳥馬之類十餘種、及霜林所獻、金銀、彩色、種種珍異之物、并八十餘物、己亥、饗霜林等於筑紫館、

賜物各有差、乙巳、詔曰、自今以後、毎取國忌日、要須齋也、戊午、霜林等罷歸、三月己未朔己卯、以花縵遣于殯宮、藤原朝臣大嶋誄焉、夏五月戊午朔乙丑、以百濟敬須德那利、移甲斐國、六月戊子朔戊戌、詔、令天下繫囚極刑減本罪一等、輕繫皆赦除之、其令天下皆半入今年調賦、秋七月丁巳朔丁卯、大雩、旱也、丙子、命百濟沙門道藏請雨、不崇朝遍雨天下、八月丁亥朔丙申、嘗于殯宮、而慟哭焉、於是大伴宿禰安麻呂誄焉、丁酉、命淨大肆伊勢王奉宣葬儀、辛亥、耽羅王遣佐平加羅來獻方物、九月丙辰朔戊寅、饗耽羅佐平加羅等於筑紫館、賜物各有差、冬十一月乙卯朔戊午、皇太子率公卿百寮人等與諸蕃賓客、適殯宮而慟哭焉、於是奉奠奏楯節儛、諸臣各擧己先祖等所仕狀、遞進誄焉、己未、蝦夷百九十餘人負荷調賦而誄焉、乙丑、布勢朝臣御主人、大伴宿禰御行、遞進而誄焉、直廣肆當麻眞人智德、奉誄皇祖等之騰極次第、禮也、古云日嗣也、畢葬于大內陵、十二月乙酉朔丙申、饗蝦夷男女二百一十三

(五月)夏五月、原本夏の字なし通釋に從て補ふ

(六月)輕繫、トラヘヒトノカロキハと訓むべし中本に繫輕に作る

(七月)沙門道藏、天武紀十二年七月に見ゆ

○不崇朝、毛詩鄘風に崇朝其雨大全に崇終也從日至食時爲終朝とあり

(九月)筑紫館、大宰府にある館なり

(十一月)楯節儛、釋紀に私記曰師說今之吉十舞也以楯爲節度故名また職員令雅樂令集解に別記云楯臥舞十人五人士師宿禰等五人文忌寸等有著甲并持刀楯とあり又代實錄貞觀元年十一月十九日に見ゆ

○遞進、原本遞を逓に作る通證集解に據て改む下同じ

○遞進而誄、而の字は北本中本に據て補ふ

人於飛鳥寺西槻下、仍授冠位、賜物各有差、

○當麻眞人智德、續紀五に和銅四年五月當麻眞人智德卒とあり
○謄極次第、御代〳〵の日嗣知看し、天皇等の御次第より當今天皇の相承給へるまでの御事を具に申して誄し奉れるなり智德は皇別なれば此誄を仕奉らしめしならむ ○古云日嗣也、通證に恐五字當作分註とあり ○大内陵、諸陵式に檜隈大内陵在大和國高市郡大和志に在五條野村西俗呼圓山又名東明寺冢岩窟廣八尺許深九尺許内有雙石棺、陵墓要覽に高市郡高市村大字野口字王墓とあり (十二月)各有差、原本各の字なし北本中本に據て補ふ

(己丑)三年春正月、甲寅朔、天皇朝萬國于前殿、乙卯、大學寮獻杖八十枚、丙辰、詔曰、務大肆陸奥國優嗜曇郡城養蝦夷脂利古男麻呂與鐵折、請剔髮爲沙門、詔曰、麻呂等少而閑雅寡欲、遂至於此蔬食持戒、可隨所請出家修道、庚申、宴公卿賜袍袴、辛酉、遣新羅使人田中朝臣法麻呂等還自新羅、壬戌、詔出雲國司上送遭値風浪蕃人、是日、賜越蝦夷沙門道信佛像一軀、灌頂幡、鍾鉢各一口、五色綵各五尺、綿五屯、布一十端、鍬一十枚、鞍一具、筑紫大宰粟田眞人朝臣等獻隼人一百七十四人、并布五十常、牛皮六枚、鹿皮五十枚、戊辰、文武官人進薪、己巳、賜官人等食、辛未、天皇幸吉野宮、甲戌、天皇至自吉野宮、二月甲申朔丙申、詔、筑紫防人滿年限者替、己酉、以淨廣肆竹田王、直廣肆土師宿禰根

麿、大宅朝臣麿、藤原朝臣史、務大肆當麻眞人櫻井、穗積朝臣山守、中臣朝臣臣麿、巨勢朝臣多益須、大三輪朝臣安麿、爲判事、三月癸丑朔丙子、大赦天下、唯常赦所不免、不在赦例、夏四月癸未朔庚寅、以投化新羅人居于下毛野、乙未、皇太子草壁皇子尊薨、壬寅、新羅遣級飡金道那等、奉弔瀛眞人天皇喪、并上送學問僧明聰、觀智等、別獻金銅阿彌陀像、金銅觀世音菩薩像、大勢至菩薩像各一軀、綵帛錦綾、甲辰、春日王薨、己酉、詔諸司仕丁一月放假四日、五月癸丑朔甲戌、命土師宿禰根麻呂、詔新羅弔使級飡金道那等曰、太政官卿等奉勅奉宣、二年遣田中朝臣法麿等、相告大行天皇喪、時新羅言、新羅奉勅人者、元來用蘇判位、今將復爾、由是法麿等不得奉宣、赴告之詔、若言前事者、在昔難波宮治天下天皇崩時、遣巨勢稻持等告喪之日、翳飡金春秋奉勅、而言用蘇判奉勅、卽違前事也、又於近江宮治天下天皇崩時、遣一吉飡金薩儒等奉弔、而今以級飡奉弔、亦違前事、又新羅元來奏云、我國自日本遠皇祖代並舳不干檝奉仕之國、而今一艘亦乖故典也、又奏云、自日本遠

良）箋注に逸周書大匡篇注可食之菜曰蔬按說文無蔬字古只作疏廣本作和名蔬菜久佐非良恐非是とあり

○庚申宴公卿、七日の節會なり

○遣新羅、原本遣の字なし集解に據て補ふ

○越蝦夷、原本夷を蝦に作る北本中本に據て改む

○五尺、通釋に尺を疋に改めたれど所據なし

（二月）滿年限者替、軍防令に防人の年限は三年とあり其年限滿つれば交代せしむるを云

○竹田王、天武紀に出づ

○藤原朝臣史、史又不比等に作る鎌足の第二子なり

○當麻眞人櫻井、續紀靈龜元年二月の條に從四位下當麻眞人櫻井卒とあり

○中臣朝臣臣麿、原本に朝臣の二字なし北本中本に據て補ふ卽位前紀に出づ

○大三輪朝臣安麿、續紀六和銅七年正月の條に兵部卿大神朝臣安麻呂卒とあり

○判事、通證に此謂判事者恐總判決朝廷政事之

職名也云々とあり後世の參議大辨の職なるべし

(三月)大赦常赦、大赦は常赦より一段重き罪を赦すを云常赦は常體の赦にて天下一般なり曲赦は其國其所に限る赦なり非常大赦とは罪不殘赦を云

(四月)草壁皇子尊薨、天武天皇は朱鳥元年九月に崩ぜられ持統天皇の卽位せられしは四年正月なれば其間は事實上此尊の御世なりしなり然るに卽位前紀臨朝稱制の注に述べたるが如き理由にて御母の皇后政治を總覽せられたり故に日嗣の並に御世を知食したるに准へて尊の御諡を日並知皇子尊と稱し奉りしなり

○瀛眞人天皇、水本此上に天淳中原の四字を補ふ

○金銅觀世音、金銅の二字北本になし恐くは衍

○春日王、詳ならず紹運錄に天智天皇の御孫施基皇子の男に春日王あれど此王卒去の事續紀一に見えたれば別なり

○放假、假は暇なり假寧令に凡在京諸司每六日並給休假一日とあり之に准へて知るべし

○太政官卿等奉勅云々、此詔詞宣命文なりしを漢文に改めしものなるべし

(五月)奉宣、奉勅も奉宣も同じ事のやうなれど宣命の體よりかく重れて書けるなり

○二年、釋紀に當作元年とあり此事元年正月に出たれば二は元の誤なるべし

○大行天皇、癸辛雜識に韋昭云大行者不返之辭崩未有謚故稱大行とあり

○蘇判、新羅第三等の官なり

○巨勢稻持、此人孝德天皇の御喪を告げしこと紀に洩れたれど位は猶下がりけむを證に引出たり

○翳飡、通釋に之を新羅第二等の官なる伊飡なるべしと云り金春秋は大化三年我國に質たりし時大阿飡(第五等官)たりしが孝德帝崩御の時翳飡として弔使たりしなるべし

○一吉飡、原本吉を告に作る中本に據て改む七等官なり

○級湌、八等官なり

(六月)皇子施基、詳ならず

○宿禰麿、天武紀十四年に少麻呂とあり

○羽田朝臣齊、續紀二大寶元年六月の條に以正五位上波多朝臣牟胡閇任造乘師寺司とあり

○(注)齊、原本なし集解に據て補ふ

○伊余部連馬飼、錄右京神別に伊與部高媚卒須比命三

皇祖代、以清白心仕奉、而不惟竭忠宣揚本職、而傷清白、詐求幸媚、是故調賦與別獻、並封以還之、然自我國家遠皇祖代、廣慈汝等之德不可絕之、故彌勤彌謹、戰々兢々、修其職任、奉遵法度者、天朝復益廣慈耳、汝道那等奉斯所勅、奉宣汝王、六月壬午朔、賜衣裳筑紫大宰等、癸未、以皇子施基、直廣肆佐味朝臣宿那麿、羽田朝臣齊、此云卒五閉勤廣肆伊余部連馬飼、調忌寸老人、務大參大伴宿禰手拍、與巨勢朝臣多益須等、拜撰善言司、庚子、賜大唐續守言薩弘恪等稻各有差、辛丑、詔筑紫大宰粟田眞人朝臣等、賜學問僧明聰觀智等爲送新羅師友綿各一百四十斤、乙巳、於筑紫小郡設新羅弔使金道那等、賜物各有差、庚戌、班賜諸司令一部廿二卷、

世孫天辭代主命之後也とあり馬飼は懷風藻に皇太子學士と見えたり　○調忌寸老人、懷風藻に大學頭とあり　○大伴宿禰手拍、續紀六和銅六年九月造宮卿大伴宿禰手拍卒とあり　○撰善言司、通證に今按此臺撰集古今嘉言可爲鑑者と而奏聞之司也とあり　○筑紫太宰、原本に筑紫の二字なし北本中本に據て補ふ　○筑紫小郡、天武紀二年に筑紫太郡あり其處に云り　○令一部、天武紀十年二月の條に朕今更欲定律令改法式云々同十一年八月の條に造法令とある卽ち是なり弘仁格序に至天智天皇元年制令二十二卷世人所謂近江朝廷之令也とあるを併せ思ふに天智の御世の令を先朝に改定せられ是に至りて班ち賜ひしなるべし此書世に傳はらざるは惜むべき事なり

(七月)娑羅、抄器皿部に唐韻云鈔鑼(二音與沙羅同俗云沙布羅今案或說云新羅金椀出新羅國後人謂之雜羅者新之訛也正說未詳)銅器也とあり又正字通に鈔鑼藥銅爲之形如盆大者聲揚小者聲殺と見えたり　○僞兵衞、軍防令に凡兵衞者國司簡郡司子弟强幹使弓馬者郡別一人貢とあり僞兵衞は國司の簡點を經ず詐僞を以て上り來りしものなるべし僞をカスキと訓るは掠め暗ます意なり　○柏原、錄左京神別に柏原連伊香我色平命之後也とあり　○生部連、姓氏錄に見えず系詳ならず皇極紀三年に大生部氏あり同姓ならむ　○八釣魚等、等の下恐らくは物の字を脫するか　(八月)八月、原本八の上秋の字あり衍なれば削

秋七月壬子朔、付賜陸奥蝦夷沙門自得所請金銅藥師佛像、觀世音菩薩像、各一軀、鍾、娑羅、寶帳、香爐、幡等物。是日、新羅弔使金道那等罷歸。丙寅、詔左右京職及諸國司、築習射所。辛未、流僞兵衞河內國澁川郡人柏原廣山于土左國、以追廣參授捉僞兵衞廣山兵衞生部連虎。甲戌、賜越蝦夷八釣魚等各有差。八月辛巳朔壬午、百官會集於神祇官、而奉宣天神地祇之事。甲申、天皇幸吉野宮。丙申、禁斷漁獵於攝津國武庫海一千步內、紀伊國阿提郡那耆野二萬頃、伊賀國伊賀郡身野二萬頃、置守護人。淮河內國大鳥郡高脚海。丁酉、賞賜公卿各有差。辛丑、詔伊豫摠領田中朝臣法麿等曰、讚吉國御城郡所獲白鷰、宜放養焉。癸卯、觀射。潤八月辛亥朔庚申、詔諸國司曰、今冬戶籍可造、宜限九月紀捉浮浪其兵士者、每於一國四分、而點其一令習武事。丁丑、以淨廣

る
○神祇官、此に始めて見えたれど神祇伯は上に見えたれば此官は古くよりありしこと言ふまでもなし此に天神地祇の事を奉宣せられし理由は明ならねど明年正月卽位に先だち此事ありしなるべし
○武庫海、攝津國武庫郡にあり
○一千歩、一歩は雜令に度レ地五尺爲二歩一とあり
○阿提郡那耆野、阿提郡は大同元年七月安諦郡を改て在田郡とすとあり今の在田郡なり那耆野は倭名抄に在田郡奈郷あり是か　○伊賀郡身野、記に師木津日子命者伊賀三野稻置之祖とあり今の美濃波多村蓋是なり　○高脚海、今も南北高石村あり高脚海は萬葉集以下の歌集に多く見ゆ　○伊豫摠領、摠領の事は天武紀十四年十一月に見ゆこれ當時の國司大國に宰として數國を兼知するを云伊豫の總領は卽ち四國の管領なり　○御城野、讃岐國に三木郡あり　(**潤八月**)紀摠浮浪、此事天智紀九年にも見ゆ戶籍を造て浮浪者を整理せられしなり　○四分而點其一、此兵制は大寶令制の時も亦同じ　○通前、五年の條を參考するに通前二百戶とあるべし　(**九月**)石上朝臣麿、四年正月には物部とあり　○給送位記、位記を賜はる事此に初て見ゆ此は筑紫に在任する人々に賜はるべき位記なり五年二月にも授二官人位記一と見ゆ　○新城、標注に三代實錄十二に大宰府司於二城山四天王院一轉二讀金剛般若經云々一とある地にて大宰府より筑後に越ゆる處の山なりと云りなほよく考ふべし　(**十月**)高安城、河內國高安郡　○下毛野朝臣子麿、續紀四和銅二年十二月式部卿大將軍下毛野朝臣古麻呂卒とあり　○奴婢云々、賤れ免して良と爲すを云　(**十一月**)己卯、原本卯を丑に作る中本に據て改む　○於市中云々、原本市中を中市に作る類史に據て改む通證に今按以二矛戟弓劍戈一爲二五兵一疑二兵是弓劍槍也とあり殊更に市中にて褒美あるは石成が名譽を人に知らしめむが爲なるべし　(**十二月**)雙六、抄術藝部に雙六象名苑云雙六一名六采(〈〈)按簿亦是也簿音博俗云須久呂久)とあり延喜彈正式に雙六者不論二高下一一切禁斷と見ゆ

○武庫海、攝津國武庫郡にあり
○一千歩、一歩は雜令に度レ地五尺爲二歩一とあり
○阿提郡那耆野、阿提郡は大同元年七月安諦郡を改て在田郡とすとあり今の在田郡なり那耆野は倭名抄に在田郡奈郷あり是か　○伊賀郡身野、記に師木津日子命者伊賀三野稻置之祖とあり今の美濃波多村蓋是なり　○高脚海、今も南北高石村あり高脚海は萬葉集以下の歌集に多く見ゆ　○伊豫摠領、摠領の事は天武紀十四年十一月に見ゆこれ當時の國司大國に宰として數國を兼知するを云伊豫の總領は卽ち四國の管領なり　○御城野、讃岐國に三木郡あり　(**潤八月**)紀摠浮浪、此事天智紀九年にも見ゆ戶籍を造て浮浪者を整理せられしなり　○四分而點其一、此兵制は大寶令制の時も亦同じ　○通前、五年の條を參考するに通前二百戶とあるべし　(**九月**)石上朝臣麿、四年正月には物部とあり　○給送位記、位記を賜はる事此に初て見ゆ此は筑紫に在任する人々に賜はるべき位記なり五年二月にも授二官人位記一と見ゆ　○新城、標注に三代實錄十二に大宰府司於二城山四天王院一轉二讀金剛般若經云々一とある地にて大宰府より筑後に越ゆる處の山なりと云りなほよく考ふべし　(**十月**)高安城、河內國高安郡　○下毛野朝臣子麿、續紀四和銅二年十二月式部卿大將軍下毛野朝臣古麻呂卒とあり　○奴婢云々、賤れ免して良と爲すを云　(**十一月**)己卯、原本卯を丑に作る中本に據て改む　○於市中云々、原本市中を中市に作る類史に據て改む通證に今按以二矛戟弓劍戈一爲二五兵一疑二兵是弓劍槍也とあり殊更に市中にて褒美あるは石成が名譽を人に知らしめむが爲なるべし　(**十二月**)雙六、抄術藝部に雙六象名苑云雙六一名六采(〈〈)按簿亦是也簿音博俗云須久呂久)とあり延喜彈正式に雙六者不論二高下一一切禁斷と見ゆ

【四年】大盾、卽位式に宮門に大盾を樹る事の起源は古語拾遺に詳なり大嘗祭には之を神楯と云
○天神詔詞、神祇令に凡踐祚之日中臣奏二天神之詔詞一義解に謂以二神代之

肆河內王爲二筑紫大宰帥一、授二兵仗一及賜レ物、以直廣壹授二直廣貳丹比眞人嶋一、增二封一百戶一、通レ前九月庚辰朔己丑、遣二直廣參石上朝臣麿、直廣肆石川朝臣虫名等一於筑紫、給二送位記一、且監二新城一、冬十月庚戌朔庚申、天皇幸二高安城一、辛未、直廣肆下毛野朝臣子麿奏、欲レ免二奴婢陸佰口一、奏可、十一月己卯朔丙戌、於二市中一褒二美追廣貳高田首石成之閑一於三兵一賜レ物、十二月己酉朔丙辰、禁斷雙六、

(後賀)四年春正月戊寅朔、物部麿朝臣樹二大盾一、神祇伯中臣大嶋朝臣讀二天神壽詞一畢、忌部宿禰色夫知、奉下上神璽劍鏡於皇后、皇后卽天皇位、公卿百寮羅列、而拜而拍レ手焉、己卯、公卿百寮拜朝、如二元會儀一、丹比嶋眞

古事爲萬壽之寶詞也とある是なり中臣氏必ずこれを奏するを以て中臣壽詞とも云其全文台記別記康治元年十一月大嘗會記に出づ平田家にて出版せる祝詞正訓に之を載す

○忌部宿禰色夫知、續紀二に正五位忌部宿禰色布知卒詔贈從四位上とあり

○神璽劍鏡、神祇令義解に凡踐祚之日忌部上神璽之鏡劍とあり

○皇后卽天皇位、原本后の字なし北本中本に據て補ふ

○拍手、天皇を拜み奉りて手を拍つなり拍手は上代よりの禮にして神事はもとより天皇を拜し奉りて手を拍つことは上古は常の事なりき出雲國造を任ずる時國造が貢幸物を賜はりて拍手する事儀式延喜臨時祭式に見ゆ

○如元會儀、正月元日の儀の如しとなり

○丹比嶋眞人、今年七月右大臣に任ぜられ十年十月には奧杖を賜へり

○布勢御主人朝臣、十年の祭に大納言阿部朝臣御主人とあり續紀三大寶三

人與布勢御主人朝臣奏賀騰極、庚辰、宴公卿於內裏、甲申、宴公卿於內裏、仍賜衣裳、壬辰、百寮進薪、甲午、大赦天下、唯常赦所不免不在赦例、賜有位人爵一級、鰥寡孤獨篤癃貧不能自存者、賜稻、蠲服調役、丁酉、以解部一百人併刑部省、庚子、班幣於畿內天神地祇、及增神戶田地、二月、戊申朔壬子、天皇幸于腋上陂、觀公卿大夫之馬、戊午、新羅沙門詮吉、級飡北助知等五十人歸化、甲子、天皇幸吉野宮、丙寅、設齋於內裡、壬申、以歸化新羅韓奈末許滿等十二人、居于武藏國、三月丁丑朔丙申、賜京與畿內人、年八十以上者嶋宮稻人廿束、其有位者、加賜布二端、夏四月丁未朔己酉、遣使祭廣瀨大忌神與龍田風神、癸丑、賜京與畿內者老男女五千卅一人稻人廿束、庚申、詔曰、百官人、及畿內人、有位者限六年、無位者限七年、以其上日、選定九等、四等以上者、依考仕令、以其善最功能、氏姓大小、量授冠位、其朝服者、淨大壹已下廣貳已上黑紫、淨大參已下廣肆已上赤紫、正八級赤紫、直八級緋、勤八級深綠、務八級淺綠、追八級深縹、進八級淺縹、別淨廣貳已上、一冨一部之綾羅

年閏四月の條に右大臣從二位阿部御主人朝臣薨と見ゆ　○甲申、此一條七字中本になし　○蠲服調役、賦役令に凡應免課役者皆待蠲符至然後注免とあり　通證に蠲符今所謂諸役御免除之札也と見えたり　○解部、職員令刑部省に大解部十人掌問鬪爭訟中解部廿人掌同大解部少解部卅人掌同中解部とあり大同元年に廢せらる　○併刑部、原本併を拜に作る類史に據て改む　○神戸田地、神社の封戸と神田となり　(二月)腋上陵、大和國葛上郡にあり推古紀廿一年に見ゆ　(三月)嶋宮、高市郡嶋莊村　(四月)耆老男女、原本男を書に作る集解に據て改む書は戶令義解に凡男女六十一爲老六十六爲耆とあり　○上日、上とは出勤するを云出勤の日數なり　○選定九等、考課令に凡內外文武官初位以上每年當司長官考其屬官應考者皆具錄一年功過行能並集對讀議其優劣定九等第と見ゆ　○考仕令、令の考課令なり　○善最、此事考課令に見ゆ善は善事なり之を四つに區別して四善と稱す最は勝也優也又軍功上曰最下曰殿とあり勤務の優秀なるを云之を四十二最に區別せり　○功能、考課令に功過行能と見え義解に職事條理爲功公務廢闕爲過善惡爲行才能爲能とあり　○朝服、參朝の服なり衣服令に禮服朝服制服と區別して記載せり　○黑紫、孝德紀及衣服令に深紫とあり　○赤紫、衣服令に淺紫に作れり　○一區一部一區二部、原本區を富に作る北本中本に據て改む通證に富與幅通用倭名抄訓能と云て幅なりとし集解には幅に改作れり部は舊訓にツホと訓りツホは一坪又は一壺と云も同じく別に一區劃をなせる意にて所謂窩なり一幅に大きく一窩あるを一區一部といひ一幅に二窩あるを一區二部と云るにて綾羅の紋の大小を云なるべし　○上下通用綺帶白袴、原本上の字の上に綺あり中本及集解に據て改む綺は抄布帛部に綺(一云於利毛能又一訓加無波太)似錦而薄者也とあり帶袴等の事は衣服令に詳なり　(五月)安居、天武紀十二年に出づ　(六月)泊瀨、城上郡

(七月)丹比嶋眞人、原本嶋の字なし北本中本に據て補ふ　○遷任、原本遷を還に作る北本中本に據て改む下同じ　○蓋昔者云々、以下十一字集解に私記の攙入とす　○如常、從前の如しとなり拜禮の事は儀制令延喜彈正臺式等に詳なり

等、種々聽用、淨大參已下直廣肆已上、一區二部、綾羅等、種々聽用、上下通用綺帶白袴、其餘者如常、戊辰、始祈雨於所々、旱也、五月丙子朔戊寅、天皇幸吉野宮、乙酉、百濟男女廿一人歸化、庚寅、於內裏始安居講說、六月、丙午、朔辛亥、天皇幸泊瀨、庚午、盡召有位者、唱知位次與年齒、

秋七月丙子朔、公卿百寮、人等始著新朝服、戊寅、班幣於天神地祇、庚辰、以皇子高市爲太政大臣、以正廣參授丹比嶋眞人爲右大臣、并八省百寮皆遷任焉、辛巳、大宰國司皆遷任焉、壬午、詔、令公卿百寮、凡有位者、自今以後、於家內著朝服、而參上未開門以前、蓋昔者到宮門、而著朝

服乎、甲申、詔曰、凡朝堂座上見親王者如常、大臣與王、起立堂前、二王以上下座而跪、己丑、詔曰、朝堂座上見大臣、動坐而跪、是日、以絁絲綿布奉施七寺安居沙門三千三百六十三、別爲皇太子奉施於三寺安居沙門三百廿九、癸巳、遣使者祭廣瀨大忌神與龍田風神、八月乙巳朔戊申、天皇幸吉野宮、乙卯、以歸化新羅人等居于下毛野國、九月乙亥朔、詔諸國司等曰、凡造戸籍者、依戸令也、乙酉、詔曰、朕將巡行紀伊之故、勿收今年京師田租口賦、丁亥、天皇幸紀伊、丁酉、大唐學問僧智宗、義德、淨願、軍丁筑紫國上陽咩郡大伴部博麻、從新羅送使大奈末金高訓等、還至筑紫、戊戌、天皇至自紀伊、冬十月甲辰朔戊申、天皇幸吉野宮、癸丑、大唐學問僧智宗等至于京師、戊午、遣使者詔筑紫大宰河內王等曰、饗新羅送使大奈末金高訓等、准上送學生士師宿禰甥等送使之例、其慰勞賜物、一依詔書、乙丑、詔軍丁筑紫國上陽咩郡人大伴部博麻曰、於天豐財重日足姬(舒明)天皇七年救百濟之役、汝爲唐軍見虜、洎天命開別(天智)天皇

○王、一世の王なり
○二王以上、二王は一世の王に對して二世の王なり
云通證に蓋謂天子二等以上之親也と云り以上は以下の誤なるべし
○動坐而跪、これは甲申の詔よりも大臣の禮を輕くし給へるなり動坐は下坐よりも輕きこと儀制令義解等に見ゆ
○七寺、詳ならず
○三千三百六十三、六十三の下年中行事秘抄に口の字あり通釋は考本に據りて人の字を補ふ下文の三百二十九の下も亦同じ
(九月)諸國司等、原本司の字なし集解に據て補ふ
○京師田租口賦、原本京を貢に作る中本及類史に據て改む口賦は他に見えざれど人毎に輸す調なるべし續紀三慶雲三年二月の條に準、令亦及畿內人身輸調と見えたるは是ならむ
○軍丁、通釋に續紀二十五(天平寶字八年九月)の詔に一二乃國仁軍丁乎乞兵發之武、解云兵士を軍にたゝすなと云とあり
○上陽咩郡、筑後國上妻

郡なり
（十月）大伴部博麻、類史に博麻呂とあり下同じ
○送使之例、天武紀十三年に見ゆ
○泊、原本泊に作る楓本に據て改む
○氷連老、孝德紀白雉四年に氷連老人に作る
○筑紫君薩夜麻、天智紀十年に薩野馬に作る
○元寶兒、原本寶を寶に作る中本及類史に據て改む
○任博麻計、北本任を依に作る
○及至曾孫、田令に凡功田大功世々不絕上功傳三世中功傳二世下功傳子とあり
○三族、父族母族妻族なり
○藤原、大和國高市郡大原村

（十一月）行元嘉曆與儀鳳曆、元嘉曆は宋元嘉二十年（允恭天皇三十二年）何承天造る儀鳳曆は一に麟德曆と稱す唐麟德二年（天智天皇四年李淳風造り儀鳳中（天武天皇五年より七年の間）に我國に傳へたり故に儀鳳曆と云

【五年】親王、通證に此

三年、土師連富杼、氷連老、筑紫君薩夜麻、弓削連元寶兒四人、思欲奏聞唐人所計、緣無衣粮、憂不能達、於是博麻謂土師富杼等曰、我欲共汝還向本朝、緣無衣粮、俱不能去、願賣我身以充衣食、富杼等任博麻計得通天朝、汝獨淹滯他界、於今卅年矣、朕嘉厥尊朝愛國賣己顯忠、故賜務大肆、幷絁五匹、綿一十屯、布卅端、稻一千束、水田四町、其水田及至曾孫也、免三族課役、以顯其功、壬申、高市皇子觀藤原宮地、公卿百寮從焉、十一月甲戌朔庚辰、賞賜送使金高訓等各有差、甲申、奉勅始行元嘉曆與儀鳳曆、十二月癸卯朔乙巳、送使金高訓等罷歸、甲寅、天皇幸吉野宮、丙辰、天皇至自吉野宮、辛酉、天皇幸藤原觀宮地、公卿百寮皆從焉、乙丑、賞賜公卿以下各有差、

（辛卯）五年、春正月癸酉朔、賜親王、諸臣、內親王、女王、內命婦等位、己卯、賜公卿飲食衣裳、優賜正廣肆百濟王余禪廣、直大肆遠寶、良虞、與南典、各有差、乙酉、增封皇子高市二千戶、通前三千戶、淨廣貳皇子穗積五百戶、淨

下諸王の二字脱せしならむと云り
○内親王女王内命婦、内親王は此に始て見ゆ通證に學山錄曰、唐從漢魏制、天子姉爲長公主、女爲公主、然則稱皇女爲内親王、皇朝所創也とあり又此に内親王以下に位を賜ふ事是女叙位の始なり（女叙位の事は公事根源に見ゆ）
○公卿、原本公を八に作る諸本及類史に據て改む
○余禪廣、天智紀天武紀に善光に作る余は氏なり
○遠寶、續紀十一天平六年三月に散位從四位下百濟王遠寶卒とあり
○良虞、禪廣の二子なり
○南典、元明紀に百濟王南天爲備前守とあり聖武紀天平九年九月に正四位上百濟王南典授從三位とあり
○穗積五百戸、通前何戸とあるべきなり
○皇子川嶋、原本皇子の二字なし北本中本に據て補ふ
○筑紫史益、錄左京諸蕃に筑紫史陳思王植之後也とあり
○大宰府典、職員令に大

大參皇子川嶋百戸、通前五百戸、正廣參右大臣丹比嶋眞人三百戸、通前五百戸、正廣肆百濟王禪廣百戸、通前二百戸、直大壹布勢御主人朝臣、與大伴御行宿禰、八十戸、通前三百戸、其餘增封各有差、丙戌、詔曰、直廣肆筑紫史益拜筑紫大宰府典、以來、於今廿九年矣、以清白忠誠、不敢怠惰、是故賜食封五十戸、絁十五匹、綿廿五屯、布五十端、稻五千束、戊子、天皇幸吉野宮、乙未、天皇至自吉野宮、二月壬寅朔、天皇詔公卿等曰、卿等於天皇世、作佛殿經藏、行月六齋、天皇時々遣大舍人問訊、朕世亦如之、故當勤心奉佛法也、是日、授宮人位記、三月壬申朔甲戌、宴公卿於西廳、丙子、天皇觀公私馬於御苑、癸巳、詔曰、若有百姓弟爲兄見賣者從良、若子爲父母見賣者從賤、若准貸倍沒賤者從良、其子雖配奴婢、所生亦皆從良、夏四月辛丑朔、詔曰、若氏祖時、所免奴婢、既除籍者、其眷族等、不得更訟言我奴婢、賜大學博士上村主百濟大稅一千束、以勸其學業也、辛亥、遣使者祭廣瀨大忌神與龍田風神、

宰府大典二人掌受事上抄勘署文案檢出稽失讀申公文少典二人掌同大典とあり
○五十戸、原本十を千に作る北本中本に據て改む

（二月）天皇世、天武天皇の御世なり天は恐らくは先の誤なるべし　○月六齋、崇峻紀卽位前紀に三度をミヨリと訓りムヨリは六度なり雜令に凡月六齋日公私皆斷殺生義解に六齋八日十四日十五日二十三日廿九日三十日とあり　○宮人、楓本に宮を官に作る　（三月）若有百姓弟云々、父兄の爲に賣られて奴婢となりしもの、處分法に就ての詔なり大化元年紀を參看すべし　○准貸倍、通證に貸倍謂貸借之利倍也とあり金品を借り其利子の爲に良民が奴婢と爲り賤民とせられしものは免して良民たらしめよとなり　（四月）氏祖時、先祖時と云に同じ　○既除籍者、先祖の時に既に奴婢を免して其籍を除きたるものには其一類を我奴婢と云ことを得ずとなり　○大稅、神祇令義解に謂租稅者並是田賦（賦は斂也とあり官に收むる物卽ち貢物を云）唯新輸曰租經貯曰稅也とあり田令に段租稻二束二把町租稻廿二束とある是田租なり之を貯へて公用に充つるを稅と云稅は之を區別して大稅粃穀郡稻とす賦役令義解に凡官稻之源出自田租卽分爲三一曰大稅二曰粃穀三曰郡稻とある是なり大稅は後專ら正稅と稱す正稅は每國本穎（本穎とは國司田租をば不動倉とて猥に使用せざる官倉に貯積して之を基本とするを云）を置き公田を作る輩に每年之を貸與へ利稻を取り之を以て公用に充つるを云

（六月）六月、通證に或曰庚子朔蓋脫文とあり
○郡國四十、四十は郡國の數を云
○雨氷、原本氷を水に作る神武紀皇極紀に據て改む
○戊子、干支を推すに此月戊子なし子を午に誤れる例多ければ恐くは戊午卽十九日の誤なるべし通釋申に改めしは據なし
（七月）御馬山、抄國郡部に宇和郡三間鄕あり此鄕の內にあるべし
○三斤八兩、雜令に權衡二十四銖爲兩十六兩爲斤義解に以粗黍中者百

丙辰十六、天皇幸吉野宮、壬戌廿二、天皇至自吉野宮、五月辛未朔十一、褒美百濟、淳武微子壬申年功、賜直大參、仍賜絁布、

六月、京師及郡國四十、雨氷、戊子、詔曰、此夏陰雨過節、懼必傷稼、夕惕迄朝憂懼、思念厥愆、其令公卿百寮人等、禁斷酒宴、攝心悔過、京及畿內諸寺梵衆、亦當五日誦經、庶有補焉、自四月雨至于是月、己未、大赦天下、但盜賊不在赦例、秋七月、庚午、朔壬申、天皇幸吉野宮、是日、伊豫國司田中朝臣法麻呂等獻宇和郡御馬山白銀三斤八兩、緋一籠、丙子、宴公卿、仍賜朝服、辛巳、天皇至自吉野、甲申十五、遣使者祭廣瀨大忌神與龍田風神、八月己亥、朔癸卯五、觀射、辛亥十三、詔十八氏大三輪、雀部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日、上毛野、大伴、紀伊、平群、羽田、阿倍、

黍重爲銖とあり
○鈷、通證に釋曰未練白銀也今案字書鈷與鉸同小釘也恐當作鈷鈷金璞也とあり
（八月）癸卯觀射、此四字原本になし類史七十二射禮部に據て補ふ
○（注）紀伊平群羽田、伊以下の五字原本阿曇の下にあり北本中本に據て此に移す
○墓記、諸家の本系帳氏文の類なり原本墓を墓に作る釋紀に據て改む
○須波、神名式に信濃國諏訪郡南方刀美神社一座（名神大）とあり建御名方神及妃八坂刀賣神を祭る
○水內、神名式に信濃國水內郡健御名方富命彥神別神社（名神大）とあり建御名方神と御子彥神別神を祭るこの神社は今の善光寺の地に坐しが明治に至りて其東方假寢岡に遷し祀り現に縣社となる
（九月）音博士、職員令に音博十二人掌教音とあり
○薩弘恪、類史恪を格に作る
○書博士、職員令に書博士二人掌教書とあり

佐伯、采女、穗積、阿曇、上進其祖等墓記、辛酉、遣使者祭龍田風神、信濃須波、水內等神、九月己巳朔壬申、賜音博士大唐續守言、薩弘恪、書博士百濟末士善信、銀人廿兩、丁丑、淨大參皇子川嶋薨、辛卯、以直大貳贈佐伯宿禰大目、并賜賻物、冬十月戊戌朔、日有蝕之、乙巳、詔曰、凡先皇陵戶者置五戶以上、自餘王等有功者置三戶、若陵戶不足、以百姓充、免其傜役、三年一替、庚戌、畿內及諸國置長生地各一千步、是日、天皇幸吉野宮、丁巳、天皇至自吉野、甲子、遣使者鎭祭新益京、十一月戊辰朔辛卯、大嘗、神祇伯中臣朝臣大嶋讀天神壽詞、壬辰、賜公卿衾、乙未、饗公卿以下至主典、并賜絹等、各有差、丁酉、饗神祇官長上以下、至神部等、及供奉播磨國因幡國郡司以下、至百姓男女、并賜絹等各有差、十二月戊戌朔己亥、賜醫博士務大參德白珍、咒禁博士木素丁武、沙宅萬首銀人廿兩、乙巳、詔曰、賜右大臣宅地四町、直廣貳以上二町、大參以下一町、勤以下至無位、隨其戶口、其上戶一町、中戶半町、下戶四分之一、王等亦准此、

○皇子川嶋薨、懷風藻に川島皇子淡海帝第二子也志懷温裕局景弘雅始與大津皇子爲莫逆之契及大津謀逆嶋則告變朝廷嘉其忠正云々位終浄大參時年三十五とあり　○佐伯宿禰大目、天武紀元年に出づ　○賻物、字書に賻は以財助喪也とあり　(十月)先皇陵戸云々、諸陵式に凡山陵者置陵戸五烟令守之有功臣者置墓戸三烟云々とあり　○長生地、釋紀に兼方按禁斷殺生之所也とあり　○新益京、詳ならず釋紀に私記新益音讀梓藤原宮地也とあり　(十一月)朔辛卯、此三字原本になし通證に據て補ふ　○大嘗、御一代一度の大嘗祭なり天皇の卽位は四年正月なりしかゞ障ることありて今年行ひ給ひしなるべし　○衾、抄裝束部に說文云衾(布須万)大被也とあり　○神祇官長上、長上は番上卽ち當番の日ありて出勤する人に對して日々出勤する人俗に常詰の人を云　○神部、職員令神祇官に神部二十人とあり　○供奉云々、卜定せられし悠紀主基の國郡なり　(十二月)咒禁博士、職員令典藥寮に咒禁博士二人掌教咒禁生とあり　○右大臣、多治比眞人嶋　○大參、直大參の略　○戸口、其家の人數を云　○上戸、田令の義解に謂凡戸上中下者計口多少隨時量定其餘條稱上々戸中々戸等亦准此例也とあり人數の多少に依て區別す

【六年】至自高宮、高宮は大和國葛上郡にあり自は原本になし北本中本に據て補ふ

(二月)諸官、諸司と云に同じ

○賜陰陽博士、原本賜の字なし北本中本に據て補ふ

○銀人廿兩、北本中本人の字なし

○中納言、納言は元年の條に見えたれど中納言は此に始めて見ゆ

(三月)留守官、太政官式に凡行幸應經旬者云々有勅付留守官とあり

○覽其冠位云々、辭表を捧呈するを云

○神郡、其一郡悉く神領となれるを云當時の神郡は度會多氣の二郡なり

○志摩、此國此に始て見ゆ

六年春正月丁卯朔庚午、增封皇子高市二千戸、通前五千戸、癸酉、饗公卿等、仍賜衣裳、戊寅、天皇觀新益京路、壬午、饗公卿以下至初位以上、癸巳、天皇幸高宮、甲午、天皇至自高宮、二月丁酉朔丁未、詔諸官曰、當以三月三日將幸伊勢、宜知此意備諸衣物、賜陰陽博士沙門法藏、道基、銀人廿兩、乙卯、詔刑部省、赦輕繫、是日、中納言直大貳三輪朝臣高市麿上表敢直言、諫爭天皇欲幸伊勢妨於農時、三月丙寅朔戊辰、以淨廣肆廣瀨王、直廣參當麻眞人智德、直廣肆紀朝臣弓張等、爲留守官、於是中納言三輪朝臣高市麿脫其冠位、擎上於朝、重諫曰、農作之節、車駕未可以動、辛未、天皇不從諫、遂幸伊勢、壬午、賜所過神郡、及伊賀、伊勢、志摩國造等冠位、并免今年調役、復免供奉騎士、諸司荷丁、造行宮丁今年

○毎所到行、原本に所の字なし北本中本に據て補ふ
○詔賜、原本賜を令に作る類史に據て改む
○男三束、原本三を二に作る諸本及類史に據て改む
（四月）大伴宿禰友國、詳ならず
○四畿内、大和山城河内攝津なり此後元正天皇の御世に河内を割て和泉國を置き其時より五畿内となる
○賜鍬、親王以下諸臣田を作るは皇國の古風にて神代よりの事なればかく鍬を給へるなり
○繫囚見徒云々、獄に囚はれて現に服役するものを悉く罪を赦すを云徒の字は北本中本に據て補ふ
（五月）阿胡行宮、志摩國英虞郡にあり此の行幸の時の歌萬葉一に見ゆ
○雜徭、賦役令義解に凡調庸之外國中諸事不論大小總爲雜徭也とあり
○大夫謁者云々、大夫以下十一字は後漢書順帝紀

調役、大赦天下、但盜賊不在赦例、甲申、賜所過志摩百姓男女年八十以上稲人五十束、乙酉、車駕還宮、毎所到行、輙會郡縣吏民、務勞賜作樂、甲午、詔免近江美濃尾張參河遠江等國供奉騎士戸、及諸國荷丁、造行宮丁、今年調役、詔賜天下百姓困乏窮者、稲男三束、女二束、夏四月、丙申、朔丁酉、贈大伴宿禰友國直大貳、并賜賻物、庚子、除四畿内百姓爲荷丁者、今年調役、甲寅、遣使者祀廣瀬大忌神與龍田風神、丙辰、賜有位親王以下至進廣肆難波大藏鍬各有差、庚申、詔曰、凡繫囚見徒一皆原散、五月、乙丑、朔庚午、御阿胡行宮、時進贄者、紀伊國牟婁郡人阿古志海部河瀨麿等兄弟三戸、復十年調役雜徭、復免挾抄八人今年調役、辛未、相摸國司獻赤烏鵄二隻言、獲於御浦郡、丙子、幸吉野宮、庚辰、車駕還宮、辛巳、遣大夫謁者祠名山岳瀆請雨、甲申、贈文忌寸智德直大壹、并賜賻物、丁亥、遣淨廣肆難波王等鎮祭藤原宮地、庚寅、遣使者奉幣于四所伊勢、大倭、住吉、紀伊大神、告以新宮、閏五月、乙未、朔丁酉、大水、

の文に據れり謁者は漢書の注に郎周之行人也とあり使者といふに同じ岳は五岳瀆は四瀆なり此文に據れば支那風の祈雨法を行はれしが如くにも見ゆれど漢文の潤飾にて常に祈雨あらせらるゝ神社に奉幣せしめ給ひしなるべし

○文忌寸、上文には書直とあり

○大倭、神名式に山邊郡大和坐大國魂神社あり

○住吉、攝津國住吉神社

○紀伊、神名式に紀伊國名草郡日前神社國懸神社とある是なり

（閏五月）循行、原本循を修に作る北本及類史に據て改む

○稟貸、通證に稟給也貸與也とあり

○觀成、續紀五に觀成法師爲二大僧都一とあり

○鉛粉、今のオシロイなり事物紀原に周文王時女人始傳鉛粉一博物志に紂燒鉛作粉謂之胡粉一とも見えて支那に於ける鉛粉の起源は古し抽容飾具には粉文選好色賦云著粉則大白（粉之路岐毛能）と見え次に白粉關元

遣使循行郡國、稟貸災害不能自存者、令得漁採山林池澤、詔令京師及四畿內、講說金光明經、戊戌、賜沙門觀成絁十五匹、綿卅屯、布五十端、美其所造鉛粉、丁未、伊勢大神奏天皇曰、免伊勢國今年調役、然應輸其二神郡赤引絲卅伍斤、於來年當折其代、己酉、詔筑紫大宰率河內王等曰、宜遣沙門於大隅與阿多、可傳佛教、復上送大唐大使郭務悰爲御、近江大津宮天皇所造阿彌陀像、六月甲子朔壬申、勅郡國長吏、各禱名山岳瀆、甲戌、遣大夫謁者、詣四畿內請雨、甲申、賜直丁八人官位、美其造大內陵時勤而不懈、癸巳、天皇觀藤原宮地、秋七月、甲午朔乙未、大赦天下、但十惡盜賊不在赦例、賜相摸國司布勢朝臣色布智等、御浦郡少領、姓名、與獲赤烏者鹿嶋臣橡樟位及祿、服御浦郡三年調役、庚子、宴公卿、壬寅、幸吉野宮、甲辰、遣使者祀廣瀨與龍田、辛酉、車駕還宮、是夜、熒惑與歲星、於一步內乍光乍沒、相近相避四遍、八月癸亥朔乙丑、赦罪、己卯、幸飛鳥皇女田莊、卽日還宮、九月癸巳朔辛丑、遣班田大

式云白粉卌斤（白粉云波布邇こと見ゆシロキモノは白き物にてオシロイなるが延喜典藥式に供御白粉料糯米一石五斗と見えて米の粉なり次に白粉俗にハフニと云るもの鉛粉なるべし箋注に按闕弘景注本草粉錫云卽今化鉛所作胡粉也輔仁調爲波布邇則知波布邇卽胡粉と云りされば古くは白粉に兩種あり米粉と鉛粉とを併用せしが後に鉛粉を專ら用ふるに至りしなり　○大神・原本太神に作る北本に據て改む　○免伊勢國今年調役、按に今年三月農時に當りて行幸あり百姓の勞苦せるによりて大神宮司調役を免ずる事を奏請せしなるべし　○應輸、原本應の字なし、北本中本及類史に據て補ふ　○二神郡、多氣度會の二郡　○赤引絲、儀式帳に明曳御調絲とあり赤引絲とは生絲の最も光澤美しきを云アカラは明らヒキは光る意なり神衣を織る料なり　○當折其代、神衣祭は四月にて其料に用ふる今年の絲は已に輸せるを以て來年度に於て之を免すべしとなり　○己酉、原本己を乙に作る集解通釋に從て改む　（六月）長吏、漢書高帝紀注に長吏謂縣令長とあり　○秋七月、原本秋を冬に作る北本中本に據て改む　（七月）十惡、隋書刑法志に謀反謀大逆謀叛惡逆不道大不敬不孝不睦不義內亂とあり名例律にある八虐は此四より不睦內亂の二項を除るなり　○（注）闕姓名、原本闕を國に作る北本中本及類史に據て改む　○服御浦郡三年調役、北本中本三を二に作る服は復に同じ　○熒惑、天武紀十年に出つ　○歲星、歲星は說文に木星也越歷二十八宿宣徧陰陽十二月一次とあり抄天地部に明星兼名苑云歲星一名明星此間云阿加保之とあるを箋注に誤とし、爾雅に明星謂之后明郭璞注太白星也とあるを引べしと云り太白星は金星なり　（九月）神寶書、集解に按蒐錄諸神社等所傳神寶一書也とあり　○木印、古き社には木印の存するもの往々あり是も其類なるべし　○日蛾、集解に按蛾微少之物非可獻者蓋蛾蟲誤耳と云り　○箭飯神、神功紀十三年に出つ　○通前、此下に戶數を脫す　（十月）田田史御形、姓氏錄に山田宿禰山田造田連等見ゆと同氏なるべし尙此人の請歌懷風藻萬葉集等に見ゆ　（十一月）朴億德、下文に億を憶に作る　○息長眞人老、續紀元に稻錦五年冬十月丙辰從四位上息長眞人老卒とあり　○川內忌寸連、錄河內諸蕃に河內忌寸山代忌寸同祖魯國白龍王之後也とあり　（十二月）紀伊、上に見えたるに同じ　○兔名足、神名式に大和國添上郡宇奈多理坐高御魂神社（大月次相嘗新嘗）とあり大和志に宇奈多理神社在法華寺村今曰楊梅天神と見ゆ

夫等於四畿內、丙午、神祇官奏上神寶書四卷、鑰九箇、木印一箇、癸丑、伊勢國司獻嘉禾二本、越前國司獻白蛾、戊午、詔曰、獲白蛾於角鹿郡浦上之濱、故增封箭飯神廿戶、通前、冬十月壬戌朔壬申、授山田史御形務廣肆、前爲沙門學問新羅、癸酉、幸吉野宮、庚辰、車駕還宮、十一月辛卯朔戊戌、新羅遣級飡朴億德、金深薩等進調、賜擬遣新羅使直廣肆息長眞人老、務大貳川內忌寸連等祿各有差、辛丑、饗祿新羅朴億德於難波館、十二月辛酉朔甲戌、賜音博士續守言、薩弘恪、水田人四町、甲申、遣大夫等奉新羅調於五社伊勢、住吉、紀伊、大倭、菟名足、

【七年】皇子長、原本子の字なし北本中本に據て補ふ

○服黃色衣奴皂衣、衣服令に制服无位（義解に庶人服制亦同也）皆皂纁頭巾黃袍烏油腰帶白韈皮履朝廷公事卽服之家人奴婢樣墨衣とありて大略同じ

○船瀨、船を停泊せしむる所を云祝詞式遣唐使奉幣詞に船居とあるに同じ船瀨を造ること此後も屢見えたるが法鏡は船瀨を作りし功あるを以て水田を賜ひしなるべし但し其は何處の船瀨なりけむ詳ならず

○踏歌、年中行事秘抄に仁和五年正月十四日踏歌記云議者多稱踏歌者新年之祝詞累代之遺美也歌頭以延喜禁中言吹以新聲年一と見え年中行事歌合に大方京洛の游士の聲よく物歌ふをめして年始の祝の詞を作て舞を舞せられけるなりと見えたり踏歌の文字は四時纂要に唐觀燈士人作踏歌唱之歌曰長安少女踏春遊一とあるに據れり亦之アラレハシリといふ由は釋紀に私記曰今俗曰阿良禮

己巳、七年春正月、辛卯朔壬辰、以淨廣壹授皇子高市、淨廣貳授皇子長與皇子弓削、是日、詔令天下百姓服黃色衣、奴皂衣、丁酉、饗公卿大夫等、癸卯、賜京師及畿內有位年八十以上人、衾一領、絁二匹、綿二屯、布四端、乙巳、以正廣參贈百濟王善光、并賜賻物、丙午、賜京師男女年八十以上、及困乏窮者布各有差、賜船瀨沙門法鏡水田三町、是日、漢人等奏踏歌、二月、庚申朔壬戌、新羅遣沙飡金江南、韓奈麻金陽元等來赴王喪、己巳、詔造京司衣縫王等收所掘尸、己丑、以流來新羅人牟白毛禮等卌七人、付賜憶德等、三月庚寅朔、日有蝕之、甲午、賜大學博士勤廣貳上村主百濟食封卌戶、以優儒道、乙未、幸吉野宮、庚子、賜直大貳葛原朝臣大嶋賻物、壬寅、天皇至自吉野宮、乙巳、賜擬遣新羅使直廣肆息長眞人老、勤大貳大伴宿禰子君等、及學問僧弁通、神叡等絁綿布各有差、又賜新羅王賻物、丙午、詔令天下勸殖桑紵梨栗蕪菁等草木、以助五穀、夏四月庚申朔丙子、遣大夫謁者、詣諸社祈雨、又遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神、辛巳、詔、內藏寮允大伴男人坐贓、降位二階解見任

走一師說此歌曲之終重稱萬年阿良禮一今改曰二萬歲樂一是古語之遺也とあるが如く歌曲の終毎に必萬年阿良禮と重ねて稱ふるより起れるなるべし

官、典鎰置始多久、與菟野大伴亦坐贓、降位一階解見任官、監物巨勢邑治、雖物不入於己、知情令盜之故、降位二階解見任官、然置始多久有勤勞於壬申年役之故赦之、但贓者依律徵納、五月己丑朔、幸吉野宮、乙未、天皇至自吉野宮、癸卯設無遮大會於內裏、六月己未朔、詔高麗沙門福嘉還俗、壬戌、以直廣肆授引田朝臣廣目、守君苅田、巨勢朝臣麿、葛原朝臣臣麿、巨勢朝臣多益須、丹比眞人池守、紀朝臣麿七人、

(二月)饗、饗賜優賞と云に同じ　○葛原朝臣大嶋、通證に私記曰葛原藤原也懷風藻大納言とあり　○紵、抄調度部織機具麻苧の下に周禮注苧(和名加良無之)麻屬とあり內藏式年料の中にも見ゆ　○蕪菁、抄菜蔬部に蔓菁蘇敬本草注云蕪菁北人名之蔓菁(和名阿乎奈)蔓菁根、毛詩云菜葑菲無以下體(和名加布良)注云下體根莖也とあり　(四月)巫贓、原本贓を賊に作る北本及類史に據て改む下同じ　廣韻に納賄曰贓とあり　○見任官、現在任ぜらるゝ所の官なり　○典鎰、職員令に中務省大典鎰二人掌出納管鎰少典鎰二人とあり鎰鑰相通ず　○置始多久、萬葉十六に暮立之雨云々夕附日云々右歌二首小鯛王宴居之日取琴登時必先吟詠此歌也其小鯛王更名置始多久美斯人也とあり　○菟野大伴、姓氏錄に宇奴首宇奴造宇努連など見えたり　○監物、職員令に中務省大監物二人掌監察出納請進管鑰中監物四人少監物四人とあり是をオロシモノツカサと訓るは鍵を固むるをオロスと云へればなり　○巨勢邑治、續紀神龜元年六月に中納言正三位巨勢朝臣邑治薨とあり　○依律徵納、唐律疏議名例に詳なり　(五月)五月、原本五を王に作る諸本に據て改む　(六月)己未朔、原本朔の下に己未の二字あり衍なり故に之を削る　○壬戌、原本戌を成に作る楓本中本に據て改む　○引田朝臣廣目、續紀大寶三年六月の條に從五位上引田朝臣廣目爲齋宮頭兼伊勢守とあり　○守君苅田、元年紀に出づ　○巨勢朝臣麿、續紀七養老元年正月中納言巨勢朝臣麻呂薨小治田朝小德大海之孫飛鳥朝京職直大參志丹之子也とあり　○葛原朝臣臣麿、中臣朝臣臣麿なり卽位前紀に見ゆ　○巨勢朝臣多益須、卽位前紀に見ゆ　○丹比眞人池守、續紀天平二年八月大納言多治眞人池守薨左大臣正二位嶋之第一子也とあり　○紀朝臣麿、續紀三慶雲二年七月に大納言紀朝臣麻呂薨近江朝御史大夫正三位大人之子也とあり

(九月)多武嶺、大和國城上郡、齊明紀七年に田身嶺に作る　○設無遮大會於內裏、通證に拾葉集云明月香清御身嶺に作る

秋七月、戊子、朔甲午、幸吉野宮、己亥、遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神、辛丑、遣大夫謁者詣諸社祈雨、癸卯、遣大夫謁者詣諸社請雨、是日、天皇

原天皇崩之後八年九月九日奉爲御齋會之夜夢裡習賜御歌一首見前紀一乃此時之事也とあり　○原遺、遺の字恐らくは誤字なるべし　○蚊屋忌寸、續紀卅二寶龜三年四月に坂上氏と同祖にして阿智使主の後なること見えたり　(十月)淨冠至直冠、原本に直冠を直官に作る通證集解に從て改む　○鞍馬、此下に一匹の二字を脫せしなるべし　(十一月)佐平等、等の下恐くは脫字あるべし　○善往、續紀二に善往法師爲大僧都とあり　○試飲、北本中本飲の下に服の字あり　○益須郡、野州郡なり　○醴泉、抄飲食部に醴四聲字苑云醴(音禮和名古佐介)一日一宿酒也とあり延喜治部式祥瑞に醴泉美泉也其味美甘狀如醴酒とありて大瑞とす支那にては禮記禮運に天降膏露地出醴泉また本草綱目水の部に時珍曰醴薄酒也泉味如醴故名出無常處王者德至淵泉時代昇平則醴泉出可以養老と見ゆ　○引田朝臣少麿、續紀八養老四年正月大納言阿倍朝臣宿奈麻呂薨後岡本朝臣筑紫大宰帥大錦上比羅夫之子也とあり　(十二月)陣法博士、通證に今無此目今所謂軍學者也とあり

【八年】

○奏踏歌、原本奏の下に請の字あり北本及類史に據て削る　○唐人、數田氏の說に前

至自吉野、八月戊午朔、幸藤原宮地、甲戌、幸吉野宮、戊寅、車駕還宮、九月丁亥朔、日有蝕之、辛卯、幸多武嶺、壬辰、車駕還宮、丙申、爲淨御原天皇(天武)設無遮大會於內裏、繫囚悉原遣、壬寅、以直廣參贈蚊屋忌寸木間、幷賜賻物、以褒壬申年之役功、冬十月丁巳朔戊午、詔、自今年始於親王下至進位、觀所儲兵、淨冠至直冠、人甲一領、大刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、鞍馬、勤冠至進冠、人大刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、如此預備、己卯、始講仁王經於百國、四日而畢、十一月丙戌朔庚寅、幸吉野宮、壬辰、賜耽羅王子佐平等、各有差、乙未、車駕還宮、己亥、遣沙門法員、善往、眞義等、試飲近江國益須郡醴泉、戊申、以直大肆授直廣肆引田朝臣少麿、仍賜食封五十戶、十二月丙辰朔丙子、遣陣法博士等、教習諸國、

(甲午)八年春正月乙酉朔丙戌、以正廣肆授直大壹布勢朝臣御主人、與大伴宿禰御行、增封人二百戶、通前五百戶、並爲氏上、辛卯、饗公卿等、己亥、進

御薪、庚子、饗百官人等、辛丑、漢人奏踏歌、五位以上射、壬寅、六位以下射、四日而畢、癸卯、唐人奏踏歌、乙巳、幸藤原宮、卽日還宮、丁未、以務廣肆等、位授大唐七人與肅愼一人、戊申、幸吉野宮、三月甲申朔、日有蝕之、乙酉、以直廣肆大宅朝臣麻呂、勤大貳臺忌寸八嶋、黃書連本實等、拜鑄錢司、甲午、詔曰、凡以無位人任郡司者、以進廣貳授大領、以進大參授小領、己亥、詔曰、粤以七年歲次癸巳、醴泉涌於近江國、益須郡、都賀山、諸疾病人停宿益須寺、而療差者衆、故入水田四町、布六十端、原除益須郡今年調役雜徭、國司頭至日、進位一階、賜其初驗醴泉者、葛野羽衝、百濟土羅々女、人絁二匹、布十端、鍬十口、乙巳、奉幣於諸社、丙午、賜神祇官頭至祝部等、一百六十四人絁布、各有差、夏四月甲寅朔戊午、以淨大肆贈筑紫大宰、率河內王、并賜賻物、庚申、幸吉野宮、丙寅、遣使者祀廣瀨大忌神、與龍田風神、丁亥、天皇至白吉野宮、庚午、贈律師道光賻物、五月癸未朔戊子、饗公卿大夫於內裏、癸巳、以金光明經一百部送置諸國、必取毎年正月上玄讀之、其布施以當國官物充之、六月、癸丑朔庚申、河內、

文に漢人といひ此に唐人といふは文のみ皆當時來朝の支那人なりと云り

(三月)大宅朝臣麻呂、三年紀(三二二頁)に出づ

○臺忌寸八嶋、臺直同祖孝德紀に出づ

○黃書連本實、天智紀十年(三四二頁)に出づ

○鑄錢司、此司此に初て見ゆ倭名抄に樹漸乃司と訓めり續紀一に文武天皇三年始置鑄錢司以直大肆中臣朝臣意美麻呂爲長官とあり此時も大宅麻呂は長官たりしなるべし

○任郡司、原本任を仕に作る諸本に據て改む

○都賀山、未詳

○諸疾病人、原本人の字なし中本及集解に據て補ふ

○益須寺、詳ならず

○頭平目、抄職官部に長官察目頭國目守、佐官國目目とあり

○神祇官頭、頭は後の伯なり

○祝部、神祇官の神部を云通證に謂諸社祝部とあるは然らず

(四月)丁亥、中本亥を未に作り集解に卯に作る

丁卯は十四日なり據るべきが如し
○贈律師道光、通釋に贈を賜に作る道光は孝德紀白雉四年に見ゆ
（五月）上玄、玄は弦の省文なり抄天地部に弦月釋名云弦（此間云由美波里有上弦下弦）月半之名也其形一旁曲一旁直若張弓弦也と云ひ和爾雅に七八日爲上弦廿二三日爲下弦とあり御齋會は正月八日に始まれば上弦と云り
（六月）更荒郡、讃良郡なり欽明紀廿三年に出づ
○小領、類史に小を少に作る
○刑部造、天武紀十二年に賜姓爲連とあり
（七月）巡察使、天武紀十四年に出づ
（八月）皇女飛鳥、天皇の御妹にて忍坂部皇子の妃なり續紀一文武天皇四年四月淨廣肆明日香皇女薨天智天皇之女也とあり（十月）弟國部弟目、原本部を郡に作る中本に據て改む弟國部は三代實錄陽成紀にも見ゆ系詳ならず（十一月）殊死、吏學指南に殊死漢律斬刑也とあり（十二月）遷居藤原宮、通證に私記曰氏族略記曰藤原宮在高市郡鷺栖坂北萬葉集有藤原宮御井歌鴨祐之曰此歌奉稱皇居之四域者也とあり

【九年】九年、此年より大化の年號を用ひたりとせる傳あり
（閏二月）閏二月、中本閏を閏に作る
（三月）新羅、此時孝昭王四年なり

國更荒郡獻白山鷄、賜更荒郡大領小領位人一級、并賜物、以進廣貳賜獲者刑部造韓國、并賜物、秋七月癸未朔丙戌、遣巡察使於諸國、丁酉、遣使者祀廣瀨大忌神、與龍田風神、八月壬子朔戊辰、爲皇女飛鳥、度沙門一百四口、九月壬午朔、日有蝕之、乙酉、幸吉野宮、癸卯、以淨廣肆三野王拜筑紫大宰、冬十月辛亥朔庚午、以進大肆、賜獲白蝙蝠者飛驛國荒城郡弟國部、弟目、并賜絁四匹、綿四屯、布十端、其戶課役、限身悉免、十一月辛巳朔丙午、赦殊死以下、十二月庚戌朔乙卯、遷居藤原宮、戊午、百官拜朝、己未、賜親王以下、至郡司等絁綿布各有差、辛酉、宴公卿大夫、

（九年）九年春正月庚辰朔甲申、以淨廣貳授皇子舍人、丙戌、饗公卿大夫於內裏、甲午、進御薪、乙未、饗百官人等、丙申、射、四日而畢、閏二月己卯朔丙戌、幸吉野宮、癸巳、車駕還宮、三月戊申朔己酉、新羅遣王子金良琳、補命薩

○金良琳、琳は北本傍書に或本作麻とあり
○補命、通證に疑官名とあり
○薩飡、新羅第八等の官
○韓奈麻、原本麻を琳に作る中本及釋紀に據て改む官名なるべけれど詳ならず
○文忌寸博勢、續紀一文武天皇二年四月遣務廣貳文忌寸博士等八人于南嶋とあり
○下譯語、錄河内諸蕃に下曰佐漢高祖男齊悼惠王肥之後也また續紀八元正紀に少初位下河内手人大兄賜下譯語姓と見えたり
○多禰、原本禰を彌に作る中本に據て改む
○蠻、通證に唐書南蠻傳曰有十姓白蠻五姓烏蠻多禰嶋在西南故曰蠻云々とあり

（四月）賀茂朝臣蝦夷、天武紀元年に鴨君に作る
○文忌寸赤麿、原本麿の下に等の字あり北本に據て削る
○（注）本位大山中、按に此位は天智紀三年の制なり其後改めて冠位を賜はらざりしなり（五月）西槻下、藤原宮の西槻下か天武紀元年に飛鳥寺西槻下とあれば此も飛鳥寺の三字脱ちたるにもあるべし（六月）賞賜、集解に按賞字衍と云り　○病疾、古令に癡瘂侏儒朕脊折一支廢如此之類皆爲廢疾養解に謂病疾也廢於人事故曰廢疾也とあり　○小野朝臣毛野、續紀六和銅七年四月中納言兼中務卿小野朝臣毛野薨小治田朝大德冠妹子之孫小錦中毛人之子也とあり（八月）至自吉野、原本此下に九月乙巳朔の五字あり通釋に據て削る　○行獄、現在獄にある者を云るなれど此句いかゞ或は

飡朴强國等、及韓奈麻金周漢、金忠仙等、奏請國政、且進調獻物、（十一）己未、幸吉野宮、（十四）壬戌、天皇至自吉野、（廿二）庚午、遣務廣貳文忌寸博勢、進廣參下譯語諸田等於多禰、求蠻所居、夏四月戊寅朔丙戌、遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神、甲午、（十七）以直廣參、贈賀茂朝臣蝦夷、并賜賻物、本位勤以直大肆贈文忌寸赤麿、并賜賻物、本位大山中五月丁未朔己未、（十二）饗隼人大隅、（廿一）丁卯、觀隼人相撲於西槻下、六月丁丑朔己卯、遣大夫謁者、詣京師及四畿内諸社請雨、（十六）壬辰、賞賜諸臣年八十以上、及痼疾各有差、（十八）甲午、幸吉野宮、（廿六）壬寅、至自吉野、秋七月丙午朔戊辰、遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神、（十六）辛未、賜擬遣新羅使直廣肆小野朝臣毛野、務大貳伊吉連博德等物、各有差、八月丙子朔己亥、（廿四）幸吉野、乙巳至自吉野、（四）戊申、原放行獄徒繫、（六）庚戌、小野朝臣毛野等發向新羅、冬十月乙亥朔乙酉、（十一）幸菟田吉隱、丙戌、至自吉隱、十二月甲戌朔戊寅、（五）幸吉野宮、（十三）丙戌、至自吉野、賜淨大肆泊瀨王賻物、

行は在の誤にもあらむか（十月）冬十月、原本冬の字なし例に據て補ふ　○菟田吉隈、大和志に城上郡猪飼山在吉隈村上方山多楓樹幸菟田吉隈卽此とあり（十二月）泊瀬王、天武紀十四年（三〇六頁）に出づ

【十年】南典、五年紀に出づ（三月）二槻宮、齊明紀二年九月に兩槻と見ゆ　○賜蹈度嶋、原本賜の字なし北本中本に據て補ふ　度嶋は齊明紀四年に出づ　○志良宇叡草、原本宇を守に作る北本楓イ本に據て改む（四月）風速郡、倭名抄に風早郡とあり　○皮石郡、倭名抄に合志郡とあり加波志と注す　○壬生諸石、錄河內皇別に壬生臣大宅臣同祖天足彦國押人命之後也とあり　○久苦唐地、集解に按天智天皇七年救百濟之役沒入于唐者とあり（五月）大錦上秦造綱手云々、集解に按天武天皇九年紀曰大錦下秦造綱手卒由壬申年之功贈大錦上位由是觀之此賜忌寸追贈也蓋詔下脫贈字と云り　○尾張宿禰大隅、續紀廿天平寶字元年十二月太政官奏曰從九位上尾治宿禰大隅壬申年功田三十町云

（西甲）十年春正月、甲辰、朔庚戌、饗公卿大夫（十一）、甲寅、以直大肆授百濟王南典（十五）、戊午、進御薪（十六）、己未、饗公卿百寮人等（十八）、辛酉、公卿百寮射於南門、二月、癸酉、朔乙亥、幸吉野宮（十三）、乙酉、至自吉野、三月、癸卯朔乙巳、幸二槻宮（十二）、甲寅、賜越度嶋蝦夷伊奈理武志與肅愼志良宇叡草、錦袍袴、緋紺絁斧等、夏四月壬申、朔辛巳、遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神（廿七）、戊戌、以追大貳授伊豫國、風速、郡物部藥、與肥後國皮石郡壬生諸石、并賜人絁四匹、絲十絇、布廿端、鍬廿口、稻一千束、水田四町、復戶調役、以慰久苦唐地、己亥、幸吉野宮、五月、壬寅、朔甲辰、詔大錦上秦造綱手、賜姓爲忌寸、乙巳、至自吉野、己酉、以直廣肆授尾張宿禰大隅、并賜水田四十町（十三）、甲寅、以直廣肆贈大狛連百枝、并賜賻物、六月辛未、朔戊子、幸吉野宮（廿六）、丙申、至自吉野、秋七月辛丑、朔、日有蝕之、壬寅、赦罪人（八）、戊申、遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神、庚戌、後皇子尊薨（高市）、八月庚午朔甲午、以直廣壹授多臣品治、并賜物、褒

美元從之功與堅守關事、九月庚子朔甲寅、以直大壹贈若櫻部朝臣五百瀨、幷賜賻物、以顯元從之功、冬十月己巳朔乙酉、賜右大臣丹比眞人奥杖、以哀致事、庚寅、假賜正廣參位右大臣丹比眞人資人一百廿人、正廣肆大納言阿倍朝臣御主人、大伴宿禰御行、並八十人、直廣壹石上朝臣麿、直廣貳藤原朝臣不比等、並五十人、十一月己亥朔戊申、賜大官大寺沙門弁通食封四十戸、十二月己巳朔、勅旨講讀金光明經、毎年十二月晦日、度淨行者一十人、

（ナリハジメヨリシタガヒタテマツレリント）（オイテマカルーノ廿二）（モノ申スツカサ）（ニハ二）（ツカヒビト）（セシムオコナヒビト）（ミコトノリノ）

々と見ゆ　○大狛連百枝、天武紀十年に出つ　（七月）後皇子尊薨、高市皇子の事にて後とは先に薨給へる草壁皇子に對して云るなり扶桑略記に十年七月太政大臣高市薨年四十三とあり通證に考「懷風藻葛野王傳」此時將建爲儲位」故曰「後皇子」曰「尊」記者寓「其意」也と云　（八月）多臣品治、天武紀元年（一四九頁）に見ゆ　○守關事、不破道を守りし事天武紀元年に見ゆ　（十月）輿杖、輿と杖となり輿に乘り宮門に出入し杖つく事を許し給ふなり　○致事、禮記內則に七十致事とあり致仕に同じ、されど此時已に仕を返して身を退けしには　○假賜、資人を假し賜ふ意なるべし　○正廣參位、通證に位字恐衍とあり　○資人、崇峻紀卽位前紀に出つ　○大納言、此二人大納言となりし年月未詳　○阿部朝臣御主人、元年紀布制朝臣とあり　○大伴宿禰御行、續紀二大寶元年正月大納言正廣參大伴宿禰御行薨云々難波朝右大臣大紫長德之子也とあり　○石上朝臣麿、續紀七養老元年三月朝衛部大華上宇麻之子也と見ゆ　（十一月）弁通、續紀五に弁通法師爲「少僧都」とあり　（十二月）講讀、北本中本活字本講を緣に作る

【十一年】戊戌朔、原本なし通證に從て補ふ　○公卿大夫、原本公卿の二字なし北本中本及類史に據て補ふ　（二月）二月丁卯朔、釋紀に私記引「王子伝別記」曰文武天皇少名珂瑠皇子天武天皇皇太子草壁皇子尊之子也持統天皇十一年

（丁酉）十一年春正月戊戌朔甲辰、饗公卿大夫等、戊申、賜天下鰥寡孤獨篤癃、貧不能自存者稻各有差、癸丑、饗公卿百寮、二月丁卯朔甲午、以直廣壹當麻眞人國見爲東宮大傅、直廣參路眞人跡見爲春宮大夫、直大肆巨勢朝臣粟持爲亮、三月丁酉朔甲辰、設無遮大會於春宮、夏四月丙

（ヒトリウドアツエビト）（ミコノミヤノオホカシヅキト）（ミコノミヤツカサノカミト）（シヒツスケト）（ケ玉フ）（カギリナキ（中））

春二月丁卯朔壬午立爲皇太子とありされば此下に壬午皇太子を立つる文脫せしなるべし ○當麻眞人國見、天武紀朱鳥元年に出づ ○東宮大傅、東宮職員令に傅一人掌以道德輔導東宮とあり ○路眞人跡見、天武紀十四年に迹見とあり ○春宮大夫、春宮職員令に春宮坊大夫一人掌吐納啓令宮人名帳考叙宿直事とあり ○亮、東宮職員令に亮一人とあり

(四月)滿選者、選は考選なり其人の考を計りて位を叙するを云選叙令に凡初位以上以六考爲限六考中々進一階叙云々其考未滿而以理解及考在中下以下者不在進限とあるを云

(六月)五位以下、原本下を上に作る類史に據て改む

(七月)常嬰盜賊、水本に常嬰を當綾の誤とす集解には嬰金の二字を誤て一字としたるものにて金は金環、嬰は纓なり金環を纓らすとは、卽ち鐶の事にて鐶にて繫ぐ意なりとし、木村正辭博士は鐶は嬰金の二合字にて誤にはあらずといはれたり

(八月)乙丑朔、續紀甲乙朔に作る ○禪天皇位、皇國にて禪位といふこと此に始まれり ○皇太子、文武天皇なり

寅朔己巳、授滿選者、淨位至直位、各有差、壬申、幸吉野宮、己卯、遣使者祀廣瀨與龍田、是日、至自吉野、五月丙申朔癸卯、遣大夫謁者、詣諸社請雨、六月丙寅朔丁卯、赦罪人、辛未、詔讀經於京畿諸寺、辛巳、遣五位以下掃灑京寺、甲申、班幣於神祇、辛卯、公卿百寮始造爲天皇病所願佛像、癸卯、遣大夫謁者、詣諸社請雨、秋七月乙未朔辛丑、夜半、赦常嬰盜賊一百九人、仍賜布人四常、但外國者、稻人廿束、丙午、遣使者祀廣瀨與龍田、癸亥、公卿百寮設開佛眼會於藥師寺、八月乙丑朔、天皇定策禁中、禪天皇位於皇太子、

日本書紀卷第卅

此識語は慶長活字本の卷尾にありしを其まゝ載せたるなり、之を一讀するに、楓山本の奥書を簡略にせるものにて、據る所の寫本の由來を明かにせり、之を北野本應永本の奥書と對照すれば、各種寫本の系統自ら明かにして、此書研究上裨益するところ少からず

此寫本者、當初安貞二年、兼賴校雌諸本、正應之中、神祇權大副卜部兼方筆之、收于石室、以來、永仁正四位下行神祇權大副兼山城守卜部仲季、嘉元甲辰沙彌蓮惠、康永壬午神祇權大副兼員轉書之云云、至永正之頃、内大臣實隆公以件本、親睠書訂朱墨點、今據内相公本、鏤梓廣傳于世、恐活板之徒、多誤刁刀陶陰矣、庶幾莫貽誚於余焉、

慶長十五庚戌仲夏念八　　洛汭野子三白誌

寛文九己酉年正月吉辰

武村市兵衛昌常
村上勘兵衛元信
山本平左衛門常知
八尾甚四郎友春

御本云

日本書紀、歷代之古史也、　元正天皇養老年中、一品舍人親王、太朝臣安麻呂、奉勅撰之、吾朝撰書迄奏覽、以是爲權輿者耶、君臣共以莫不窮此書矣、按　應神天皇以還至　繼體天皇御宇、異域典經多以雖來朝、不解其義、徒經三百有餘歲矣、　推古天皇御宇、聖德太子察三才之源、達三國之起、故始以漢字附神代之文字傍、於于爰吾邦人浸得識量典經之旨、非至聖誰敢成此綜哉、蓋神道者、爲萬法之根柢、儒教者爲枝葉、佛教者爲花實、彼二教者皆是神道之末葉也、雅以枝葉顯其本原、然則異曲同工者歟、頃學儒佛者夥、而知神書者鮮矣、物有本末、事有終始、何棄本取末焉、於神國爭疏神書乎、萬機之政、尙以神事爲最第一、但神代事理既幽微、非理不通、欽惟

陛下寬惠叡智之餘、後世惜其流布之不廣、遂命鳩工、於是始壽諸梓矣、舊本頗純駁不一、求數本考正之、去其駁而錄其純、用之國而及之天下、則以成熙皞之治、以紹神尊之統、保瑞穗之地、千五百秋、將必有賴

於斯焉、

慶長己亥姑洗吉辰　正四位下行少納言兼侍從臣清原朝臣國賢敬識

以勅本板行

日本書紀所見宮都並山陵一覽

尊號	宮都	山陵
神日本磐余彥尊	畝傍橿原宮 大和國高市郡	畝傍山東北陵 奈良縣高市郡畝傍町
神渟名川耳尊	葛城高丘宮 大和國葛上郡	桃花鳥田丘上陵 同上
磯城津彥玉手看尊	片鹽浮孔宮 大和國高市郡	畝傍山西南御陰井上陵 同上
大日本彥耜友尊	葛城宮 大和國高市郡	畝傍山南纖沙谿上陵 同上
觀松彥香殖稻尊	掖上池心宮 大和國葛上郡	掖上博多山上陵 奈良縣南葛城郡三室村
日本足彥國押人尊	掖上宮 大和國葛上郡	玉手丘上陵 奈良縣南葛城郡掖上村
大日本根子彥太瓊尊	黑田廬戸宮 大和國城下郡	片丘馬坂陵 奈良縣北葛城郡王寺村
大日本根子彥國牽尊	輕境原宮 大和國高市郡	劍池嶋上陵 奈良縣高市郡畝傍町
稚日本根子彥大日々尊	春日率川宮 大和國添上郡	春日率川坂本陵 奈良市油坂町

神武	綏靖	安寧	懿德	孝昭	孝安	孝靈	孝元	開化

尊	號	宮	都	山	陵
御間城入彥五十瓊殖尊	崇神	磯城瑞籬宮	大和國山邊郡	山邊道上陵	奈良縣磯城郡柳本村
活目入彥五十狹茅尊	垂仁	卷向珠城宮	大和國城上郡	菅原伏見東陵	奈良縣生駒郡都迹村
大足彥忍代別尊	景行	纒向日代宮	大和國城上郡	山邊道上陵	奈良縣磯城郡柳本村
稚足彥尊	成務	志賀高穴穗宮	近江國滋賀郡	狹城盾列陵	奈良縣生駒郡平城村
足仲彥尊	仲哀	穴門豐浦宮	長門國豐浦郡	惠我長野西陵	大阪府南河內郡藤井寺村
氣長足姬尊	神功	磐余若櫻宮	大和國十市郡	狹城盾列陵	奈良縣生駒郡平城村
譽田天皇	應神	輕嶋明宮	大和國高市郡	惠我藻伏岡陵	大阪府南河內郡古市村
大鷦鷯天皇	仁德	難波高津宮	攝津國東生郡	百舌鳥耳原中陵	大阪府堺市舳松村
去來穗別尊	履中	磐余稚櫻宮	大和國十市郡	百舌鳥耳原南陵	大阪府泉北郡神石村
瑞齒別尊	反正	丹比柴籬宮	河內國丹比郡	百舌鳥耳原北陵	大阪府泉北郡向井村
雄朝津間稚子宿禰天皇	允恭	遠飛鳥宮	大和國高市郡	惠我長野北陵	大阪府南河內郡道明寺村

尊號	宮都	山陵
穴穗天皇	安康	石上穴穗宮 大和國山邊郡	菅原伏見西陵 奈良縣生駒郡伏見村
大泊瀨幼武天皇	雄略	泊瀨朝倉宮 大和國城上郡	丹比高鷲原陵 大阪府南河內郡高鷲村
白髮武廣國押稚日本根子天皇	清寧	磐余甕栗宮 大和國十市郡	河內坂門原陵 大阪府南河內郡西浦村
弘計天皇	顯宗	近飛鳥八釣宮 大和國高市郡	傍丘磐坏丘南陵 奈良縣北葛城郡下田村
億計天皇	仁賢	石上廣高宮 大和國山邊郡	埴生坂本陵 大阪府南河內郡藤井寺村
小泊瀨稚鷦鷯天皇	武烈	泊瀨列城宮 大和國上城郡	傍丘磐坏丘北陵 奈良縣北葛城郡志津美村
男大迹天皇	繼體	磐余玉穗宮 大和國十市郡	三嶋藍野陵 大阪府三嶋郡三嶋村
廣國押武金日天皇	安閑	大和勾金橋宮 大和國高市郡	古市高屋丘陵 大阪府南河內郡古市村
武小廣國押盾天皇	宣化	檜隈廬入野宮 大和國高市郡	身狹桃花鳥坂上陵 奈良縣高市郡畝傍町
天國排開廣庭天皇	欽明	磯城嶋金刺宮 大和國山邊郡	檜隈坂合陵 奈良縣高市郡坂合村
淳中倉太珠敷天皇	敏達	譯語田幸玉宮 大和國十市郡	河內磯長中尾陵 大阪府南河內郡磯長村

尊	號	宮	都	山	陵
橘豐日天皇	用明	池邊雙槻宮	大和國十市郡	河內磯長原陵	大阪府南河內郡磯長村
泊瀨部天皇	崇峻	倉梯宮	大和國十市郡	倉梯岡陵	奈良縣磯城郡多武峰村
豐御食炊屋姬天皇	推古	小墾田宮	大和國高市郡	磯長山田陵	大阪府南河內郡山田村
息長足日廣額天皇	舒明	高市岡本宮	大和國高市郡	押坂內陵	奈良縣磯城郡城嶋村
天豐財重日足姬天皇	皇極	飛鳥板蓋宮	同上		
天萬豐日天皇	孝德	長柄豐崎宮	攝津國西生郡	大坂磯長陵	大阪府南河內郡山田村
天豐財重日足姬天皇（皇極天皇重祚）	齊明	後飛鳥岡本宮	大和國高市郡	越智岡上陵	奈良縣高市郡越智岡村
天命開別天皇	天智	大津宮	近江國滋賀郡	山科陵	京都府宇治郡山科村
天淳中原瀛眞人天皇	天武	飛鳥淨御原宮	大和國十市郡	檜隈大內陵	奈良縣高市郡高市村
高天原廣野姬天皇	持統	藤原宮	大和國十市郡	同上	

書紀所見冠位並位階表

冠位表

(一)推古天皇十一年	(二)孝德天皇大化二年	(三)孝德天皇大化五年	(四)天智天皇三年
十二階	十三階	十九階	廿六階
冠色	服色		
大德	大織	大織	大織
小德	小織	小織	小織
紫			
大仁	大繡	大繡	大縫
小仁	小繡	小繡	小縫
青		深紫	
大禮	大紫	大紫	大紫
小禮	小紫	小紫	小紫
赤		淺紫	
大信	大錦	大花下上	大錦下中上
小信	小錦	小花下上	小錦下中上
黃		眞緋	
大義	大青	大山下上	大山下中上
小義	小青	小山下上	小山下中上
白		紺	
大智	大黑	大乙下上	大乙下中上
小智	小黑	小乙下上	小乙下中上
黑		綠	
	建武	立身	大建
			小建

位階表

(一)天武十四年	(二)持統四年
親王諸王十二階諸臣四十八階	十四階
服色	服色
親王諸王十二階 明大廣一、二	
淨大廣一、二、三、四	淨大廣一、二
朱華	黑紫
	淨大廣三、四
諸臣四十八階 大廣一、二、三、四	正
深紫	赤紫
直大廣一、二、三、四	直
淺紫	緋
勤大廣一、二、三、四	勤
深綠	深綠
務大廣一、二、三、四	務
淺綠	淺綠
追大廣一、二、三、四	追
深葡萄	深縹
進大廣一、二、三、四	進
淺葡萄	淺縹

天武天皇紀賜姓一覽

天武天皇十三年十月己卯朔、詔して諸氏の姓を改めて、眞人・朝臣・宿禰・忌寸・道師・臣・連・稻置の八種とし、系統の尊卑、功績の大小を考査して、朝廷より之を賜ふことゝ定め給へり。之より先十二年九月、倭直以下三十八氏に連の姓を、同十月三宅吉士以下十四氏に同じく連の姓を賜はり、十三年二月には三野縣主・內藏衣縫造二氏に亦同じく連を賜はれり。姓を賜ふことかく繁くなりては、從來の制度のまゝにては甚だ煩はしく、且つ孝德天皇大化改新の後は、氏族の制も從來と大に趣を異にするものあるに至りしを以て、茲に至りて舊制を改めて八種とし、總べて之を朝廷より賜ふことゝせられたり。然るに其數甚だ多くして、閱讀に不便なるを以て、此に之を抄出して、姓毎に種族に依りて之を列叙し、閱覽に便ならしむると共に、當時に於ける氏族の消長をも知らしめむと欲して、之を附錄とす。

一、眞人

	氏	種族	賜姓年月	出自
一	守山公（モリヤマ）	皇別	十三年十月	守山眞人、敏達天皇皇子難波王之後（左京）
二	路公	同	同	路眞人、同上（左京）
三	三國公	同	同	三國眞人、繼體天皇皇子椀子王之後（左京又右京にも見ゆ）
四	當麻（タギマ）公	同	同	當麻眞人、用明天皇皇子麻呂古王之後（右京）
五	丹比（タヂヒ）公	同	同	多治比眞人、宣化天皇々子賀美惠波王之後（右京）
六	猪名（イナ）公	同	同	爲奈眞人、宣化天皇々子火焰王之後（右京）
七	坂田公	同	同	坂田公、繼體天皇々子仲王之後（右京）
八	羽田公	同	同	八多眞人、應神天皇々子稚野毛二俣王之後（左京）
九	息長（オキナガ）公	同	同	息長眞人、同上（左京）
十	酒人公	同	同	酒人眞人、繼體天皇々子兎王之後（大和）
十一	山道公	同	同	山道眞人、息長眞人同祖、左京又右京にも見ゆ）
十二	高橋公	同	同	皇別なること疑なけれど出自詳ならず
十三	茨城（ムバラキ）公	同	同	

二、朝臣

	氏	種族	賜姓年月	出自
一	大春日臣	皇別	十三年十一月	大春日朝臣、孝昭天皇々子天帶彥國押人命之後（左京）
二	阿倍臣	同	同	阿部朝臣、孝元皇子大彥命之後（左京）
三	巨勢臣	同	同	巨勢朝臣、孝元天皇々子彥太忍信命孫武內宿禰命之後（右京）
四	膳（カシハデノ）臣	同	同	膳臣、大彥命之後（和泉）○高橋朝臣、天武天皇十二年改膳臣賜高橋朝臣
五	紀臣	同	同	紀朝臣、武內宿禰之後（左京）
六	波多臣	同	同	八多朝臣、同上（右京）
七	平群臣	同	同	平群朝臣、同上（右京）
八	雀（サヽキ）部臣	同	同	雀部朝臣、同上（左京）
九	大宅（オホヤケノ）臣	同	同	大宅臣、孝元皇子天足彥國押人命之後（山城又河內皇別に見ゆ）
十	粟（アハ）田臣	同	同	粟田朝臣、孝昭天皇々子天帶彥國押人命曾孫（山城）
十一	石川臣	同	同	石川朝臣、孝元皇子彥太忍信命之後（左京）
十二	櫻井臣	同	同	櫻井朝臣、同上（左京）
十三	田中臣	皇別	十三年十一月	田中朝臣、稻目宿禰之後（右京）
十四	小墾（ヲハリ）田臣	同	同	小治田朝臣、同上（右京）
十五	小野（ヲノ）臣	同	同	小野朝臣、彥姥津命五世孫米餅搗大使主命之後（左京）
十六	川邊（カハベ）臣	同	同	川邊朝臣、武內宿禰之後（右京）
十七	櫟（イチヰ）井臣	同	同	櫟井臣、彥姥津命五世孫米餅搗大使主命之後（左京）
十八	柿（カキノ）本（モトノ）臣	同	同	柿本朝臣、天足彥國押人命之後（大和）
十九	輕（カル）部（ベノ）臣	同	同	輕部、豐城入彥命男八綱田命之後（和泉）
二十	若櫻部（ワカサクラベノ）臣	同	同	若櫻部朝臣、磐鹿六獵命之後（右京）
廿一	岸（キシ）田（タノ）臣	同	同	岸田朝臣、武內宿禰之後（右京）
廿二	高（タカ）向（ムコノ）臣	同	同	高向朝臣、同上（右京）
廿三	宍（シヽ）人（ヒトノ）臣	同	同	宍人朝臣、大稻輿命之後（右京）
廿四	來（ク）目（メノ）臣	同	同	久米朝臣、稻目宿禰之後（右京）
廿五	犬上君	同	同	犬上朝臣、日本武尊之後（左京）
廿六	上毛（カミツ）野君	同	同	上毛野朝臣、崇神天皇々子豐城入彥命之後（左京）
廿七	角（ツヌノ）臣	同	同	角朝臣、紀角宿禰之後（左京）

	氏	種族	賜姓年月	出自
廿八	星川臣	皇別	十三年十一月	星川朝臣、武内宿禰之後（大和）
廿九	多（オホノ）臣	同	同	多朝臣、神八井耳命之後（左京）
三十	車持君	同	同	車持公、豐城入彦命之後（左京）
卅一	綾君	同	同	日本武尊男武卵王之後（紀）
卅二	下（ッ）道臣	同	同	下道朝臣、大日本根子彦太瓊天皇子稚武彦命之後（左京）
卅三	伊賀臣	同	同	伊賀臣、彦屋主田心命（大彦命孫）之後（右京）
卅四	阿閇臣	同	同	阿閇朝臣、大彦命之後（河内）
卅五	林臣	同	同	林朝臣、武内宿禰之後（左京）
卅六	波（ハ）禰（ミ）臣	同	同	波多八代宿禰波美臣之祖（記）
卅七	下（ッ）毛野君	同	同	下毛野朝臣、崇神天皇々子豐城入彦命之後（左京）
卅八	佐（サ）味（ミ）君	同	同	佐味朝臣、同上（右京）
卅九	道（チ）守（モリノ）臣	同	同	道守朝臣、武波都良和氣命之後（山城）
四十	大野君	同	同	大野朝臣、豐城入彦命四世孫入荒田別命之後（右京）
四十一	坂本臣	同	同	坂本朝臣、紀朝臣同祖角宿禰男自城宿禰之後（左京）
四十二	池田君	皇別	十三年十一月	池田朝臣、豐城入彦命八世孫佐太公之後（左京）
四十三	玉手臣	同	同	玉手朝臣、武内宿禰男葛木曾頭日古命之後（右京）
四十四	笠臣	同	同	笠朝臣、孝靈皇子稚武彦命之後（右京）
一	大三輪君	神別	十三年十一月	大神朝臣、大國主命之後（大和）
二	物部連	同	同	崇神紀七年に物部連祖伊香色雄と見ゆ（紀）
三	中臣連	同	同	藤原朝臣、天兒屋根命之後、大中臣朝臣、同上（左京）
四	采（ウネ）女（メノ）臣	同	同	采女朝臣、神饒速日命之後（右京）
五	穗（ホ）積（ツミノ）臣	同	同	穗積朝臣、伊香色雄命之後（左京）
六	山背臣	同	同	山背朝臣、天津彦根命之後
七	鴨（カモノ）君	同	同	賀茂朝臣、大神朝臣同祖大國主神之後（大和）
八	曾（ムナ）方（カタ）君	同	同	宗形朝臣、大神朝臣同祖吾田片隅命之後（右京）

三、宿禰

	氏	種族	賜姓年月	出自
一	草壁連（クサカベノ）	皇別	十三年十二月	日下部宿禰、開化天皇々子彥坐命之後（山城）
二	新田部連（ニヒタベノ）	同	同	新田部宿禰、安寧天皇皇子磯城津彥命之後（左京）
三	茨田連（マムタノ）	同	同	茨田宿禰、彥八井耳命之後（河內）
四	小子部連（チヒサコベノ）	同	同	小子部宿禰、多朝臣同祖神八井耳命之後（左京）
五	猪使連	同	同	猪使宿禰、安寧天皇々子志紀都比古命之後（左京）
六	布留連（フルノ）	同	同	布留宿禰、柿本朝臣同祖天足彥國押人命七世孫米餅搗大使主命之後（大和）
一	大伴連	神別	十三年十二月	大伴宿禰、天押日命之後（左京）
二	佐伯連（サヘキノ）	同	同	佐伯宿禰、道臣命七世孫室屋大連公之後（左京）
三	阿曇連（アヅミノ）	同	同	安曇宿禰、海神綿積豐玉彥命子穗高見命之後（右京）
四	忌部連（イムベノ）	同	同	齋部宿禰、天太玉命之後（右京）
五	尾張連	同	同	尾張宿禰、火明命廿七世孫阿曾連之後（左京）
六	倉連	同	同	椋連、火明命男天香山命之後と同族か（和泉）
七	中臣酒人連	同	同	中臣酒人宿禰、天兒屋根命之後（左京）
八	土師連	神別	十三年十二月	土師宿禰、天穗日命十四世孫野見宿禰之後（和泉）
九	掃部連（カニモリ）	同	同	掃部連、振魂命四世孫天忍人命之後（左京）
十	境部連（サカアヒベノ）	同	同	坂合部宿禰、火明命八世孫邇倍足尼之後（左京亦右京に見ゆ）
十一	伊福部連（イフキベノ）	同	同	伊福部宿禰、火明命之後（左京）
十二	巫部連（イチコベノ）	同	同	巫部宿禰、神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後（右京）
十三	忍壁連（オサカベノ）	同	同	物部連同祖（天孫本紀物部イ持連公刑部造等祖）
十四	兒部連（コベノ）	同	同	子部、火明命五世孫建刀米命之後（右京）
十五	手繦丹比連（タスキノ）	同	同	襷多治比宿禰、火明命十一世孫殿諸足尼之後（河內）
十六	靫丹比連（ユキノ）	同	同	靫丹比連、襷多治比宿禰同祖（河內）
十七	漆部連（ヌリ）	同	同	漆部連、饒速日命之後（天孫紀に見宿禰命漆部等祖）
十八	大湯人連（オホユヒト）	同	同	記垂仁段に定大湯坐若湯坐とあり二氏同族なるべし
十九	若湯人連（ワカユヒト）	同	同	若湯坐連、神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後（攝津）
二十	弓削連（ユゲ）	同	同	弓削宿禰、天日鷲命之後（左京）
廿一	神服部連（カムハトリノ）	同	同	綺連、津守連同祖天香山命之後（和泉）

	氏	種族	賜姓年月	出自
廿二	額田部連	神別	十三年十二月	額田部宿禰、明日名門命三世孫天村雲命之後（右京）
廿三	津守連	同	同	津守宿禰、火明命八世孫大御日足尼之後、攝津）
廿四	縣犬養連	同	同	縣犬養宿禰、神魂命八世孫阿居太都命之後（左京）
廿五	稚犬養連	同	同	若犬養宿禰、火明命十六世孫尻調根命之後（河內）
廿六	玉祖連	同	同	玉祖宿禰、高皇產靈命十三世孫大荒木命之後（右京）
廿七	倭文連	同	同	委文宿禰、角凝魂命之後（河內）
廿八	氷連	同	同	氷宿禰、石上同祖神饒速日命之後（左京）
廿九	凡海連	同	同	凡海連、綿積命男穗高見命之後（右京）
三十	山部連	同	同	久米直同祖、久米直は高御魂命八世孫味耳命之後
卅一	矢集連	同	同	矢集宿禰、石上同祖伊香我色雄命之後（右京）
卅二	狹井連	同	同	佐爲宿禰、同上（山城）
卅三	爪工連	同	同	爪工連、神魂命男多久豆玉命之後（左京）
卅四	阿刀連	同	同	阿刀宿禰、石上同祖神饒速日命之後（左京）
卅五	田目連	同	同	多米宿禰、神魂命廿二世孫意保止命之後（右京）

	氏	種族	賜姓年月	出自
卅六	菟道連	神別	十三年十二月	宇治宿禰、伊香我色雄命之後（右京）
卅七	小治田連	同	同	小治田宿禰、石上同祖饒速日命之後（左京）
卅八	海犬養連	同	同	海犬養、綿積命之後（右京）
卅九	間人連	同	同	間人宿禰、神魂命五世孫玉櫛比古命之後（左京）
四十	春米連	同	同	春米宿禰、石上同祖饒速日命之後（左京）
四十一	美濃連	同	同	美努連、角凝魂命三世孫天湯川田奈命之後（河內）
一	三宅連	蕃別	同	三宅連、天日桙命之後（右京）
一	櫻井田部連		同	詳ならず
二	諸會臣		同	

四、忌寸

	氏	種族	賜姓年月	出自
一	難波連	皇別	十四年六月	難波忌寸、大彥命之後（河內）
二	紀酒人連	同	同	酒人造、日下部連同祖（日本紀不見）彥坐命之後（河內）

	氏	種族	賜姓年月	出自
一	大倭連	神別	十四年六月	大和連、神知津彦命之後（攝津）
二	葛城連	同	同	葛木忌寸、高御魂命五世孫劔根命之後（大和）
三	凡川內連	同	同	凡河內忌寸、天穗日命之後（攝津）
四	山背連	同	同	山背忌寸、天津彦根命之後（山城）
五	大隅直	神別未定	同	大隅隼人と同祖、火闌降命の後か考ふべし
一	倭漢連	蕃別	同	和朝臣、百濟都墓王十八世孫武寧王之後（左京）
二	河內漢連	同	同	河內忌寸、山代忌寸同祖魯國白龍王之後（河內）
三	秦連	同	同	秦忌寸、太秦公同祖融通王之後（左京）
四	書連	同	同	文忌寸、漢高皇帝之後（左京）

五、連

	氏	種族	賜姓年月	出自
一	宍人造	皇別	十年四月	宍人朝臣、大彦命之後（左京）
二	忍海造	同	十年四月十二年九月	建豐波豆羅和氣王者忍海部造祖（記）
三	藤原部造	皇別	十二年九月	葛原部、豐城入彦命三世孫大御諸別命之後（和泉）
四	來目舍人造（クノトネリノ）	同	同	久米朝臣、武內宿禰之後（右京）又久米直は神別高皇產靈の後
五	羽束造（ハツカシノ）	同	同	羽束首、天足彦國押人命の後（攝津又神別にも見ゆ）
六	小泊瀨造（ヲハツセノ）	同	同	神八井耳命之後（記）
七	草壁吉士（クサカベノ）	同	十二年十月	十三年十二月賜宿禰（一）天足彦國押人命之後（二）饒速日命之後（神別）
八	物部首	同？	十二年九月	饒速日命之後（天孫本紀に物部金弓連公田井連祖）
一	忌部首	神別	九正月年	十三年十二月賜宿禰
二	田井直	同	十四年月	次田連、火明命兒天香山命之後（河內）
三	次田	同	同	門部連、牟須比命兒安牟須比命之後（大和）
四	門部直	同	十年四月十二年九月	十四年六月賜忌寸
五	倭直	同	十年四月十二年九月	水取連、饒速日命六世孫伊香我色雄命之後（右京）
六	水取（モヒトリノ）造	同	十二年九月	矢田部連、伊香我色雄命之後（左京）
七	矢田部（ヤタベノ）造	同	同	物部石持連公之後（天孫本紀）
八	刑部（オサカベノ）造	同	同	

	氏	種族	賜姓年月	出自
九	福草部造（サキクサベ）	神別	十二年九月	天津日子根命之後（記）
十	凡川内直（オフシカフチノ）	同	同	十四年六月賜二忌寸一
十一	山背直（ヤマシロノ）	同	同	同
十二	葛城直	同	同	同
十三	殿服部造	同	同	服部連、天御桙命之後（大和）
十四	鳥取造	同	同	鳥取連、天角己利命三世孫天湯河板擧命之後（山城）
十五	檜隈舍人造（ヒノクマノ）	同	同	檜前舍人連、火明命之後（右京）
十六	川瀨舍人造（カハセノトネリノ）	同	同	川瀨造、天道根命之後（大和）
十七	語造（カタラヒノ）	同	同	天語連、天日鷲命之後（右京）
十八	伯耆造（ノ）	同	十二年十月	伯耆國造同族兄多毛比命之後（右京）
十九	吉野首（ヨシノノ）	同	同	吉野連、加彌比加尼之後（大和）
二十	采女造（ウネメノ）	同	同	采女連、饒速日命六世孫伊香我色雄命之後（和泉）
廿一	高市縣主（タケチノ）	同	同	高市連、天津彦根命之後（左京）
廿二	磯城縣主（シキノ）	同	同	志貴連、石上同祖日子湯支命之後（大和）
廿三	鏡作造（カヾミツクリ）	同	同	石凝姥命鏡作上祖（紀神代上）
廿四	三野縣主	神別	十三年正月	美努連、角凝魂命三世孫天汜川田奈命之後（河内）
廿五	舍人造	同	十二年十月	饒速日命天降供奉五部造の中に舍人造見ゆ（天孫本紀）
廿六	蓆集造（コモツノ）	同	十二年九月	薦集造、天津彦根命之後（大和未定）
一	錦織造（ニシゴリノ）	蕃別	十年四月十二年九月	錦部連百濟速古王之後（河内）
二	川内直	同	十年四月	河内連、百濟都慕王男陰太貴首王之後（河内）
三	大狛造	同	十年四月十二年九月	大狛連、高麗國人伊利斯沙禮斯之後（河内）
四	山背狛（ノ）	同	十年四月	狛造、高麗國主夫連王之後（山城）
五	書直	同	十年十二月	十四年六月賜二忌寸一
六	倭漢直	同	十一年五月	同
七	川内漢直（カフチノアヤノ）	同	十年十二月	同
八	縵造（カツラノ）	同	同	縵連、百濟人狛之後（大和）
九	秦造（ハタノ）	同	同	十四年六月賜二忌寸一
十	黃文造（キブミノ）	同	同	黃文連、高麗國人久斯那之王後（山城）
十一	文首（フミノ）	同	同	書直同祖、十四年六月賜二忌寸一

	氏	種族	賜姓年月	出自
十二	三宅吉士	蕃別	十二年十月	十三年十二月賜宿禰
十三	船史	同	同	船連、太阿郎王三世孫智仁君之後（右京）
十四	壹伎史	同	同	伊吉連、長安人劉楊雄之後（左京）
十五	阿直史	同	同	百濟阿直岐者阿直岐史始祖（應神紀）
十六	內藏衣縫造	同	十三年正月	阿知使主之後（應神紀集解に據る）
一	荒田	未詳	十四年月	未詳
二	栗隈首	同	十二年月	同
三	倭馬飼造	同	同	同
四	川內馬飼造	同	同	同
五	勾筥作造	同	同	同
六	石上部造	同	同	同
七	財日奉造	同	同	同
八	涅部造	同	同	同
九	穴穗部造	同	同	同
十	白髮部造	未詳	十二年月	未詳
十一	百濟造	同	同	同
十二	裟羅々馬飼造	同	十二年月	同
十三	菟野馬飼造	同	同	同
十四	紀酒人直	同	同	同
十五	桑村主	同	朱鳥元年四月	同
十六	槻本村主	同	朱鳥元年六月	同

以上計

眞人。皇別十三、

朝臣。皇別四十三、神別八、未定一

宿禰。皇別六、神別四十、蕃別一、未定一

忌寸。皇別二、神別五、蕃別四

連。皇別八、神別廿六、蕃別十六、未定十六

書紀關係三韓官位一覽

日本書紀を讀む毎に煩はしく思はるゝは、三韓の官位氏名なり。其の意義明かならざるが故に、官位なるかはた氏名なるか、其の區別だに決し難きものあり。之に加ふるに四國悉く其の官位の名稱を異にするが故に甚だ紛れやすく、一々參考書を披見せざるを得ず。此は何人も同じことならむと思ひて、標注を加ふるにあたりて、一々某國第何等の官なりと注したれど、かく注するは煩はしきのみならず、紙面を費すこと亦鮮からず、是を以て其の名の繁出するものは某國の官名なりと、簡單に注したるもの尠からず、されど其の處々にて注したるのみにては聯絡なく、全豹を知り難ければ、此に之を一覽表に作りて國毎に其の根據となるべき官名をば古書に據りて之を揭げ、書紀に見えたる官名をば其の下に記載せり。然るに其の名稱の一致せざるものあり、其の正否は輙く決め難けれど、書紀に記す所は其の當時の實錄、又は百濟本記等彼の國の舊記に據りて編修せるものにて、三國史記東國通鑑等支那の史書に據りて編纂したるものに比すれば、寧ろ正確なりと信ぜらるゝものも少からず、されど之を詳細に比較し對照して決定することは容易の業にあらざれば、之を他日に讓りて此には單に其の概要を擧ぐるに止めたり。

(一)　任　那

任那の官位は、三國志魏志東夷傳弁辰條及三國遺事駕洛國記等に見ゆれど、小國なれば他國の影響を受けしにや、早くより固有の官名を失ひて、新羅の官名を用ひしものゝ如し。今之を日本書紀と對照するに、書紀に見ゆるものは三國史記及び漢史に見えざれば、之を考定すること能はず、されど書紀に見ゆる旱岐は干と同一なることは、梁書新羅傳に新羅の干を旱支と書せるにて明かにして、其の干は後世元代の汗と同じく北方蒙古の君

號なることは言ふを俟たず、されば對照の資料とはならざれど、多少參考ともなるべきかと思ひて、此に之を掲ぐ。

(イ) 官職一

三國遺事駕洛國記　魏志弁辰條　書紀所見

一、我刀干（我躬干）　一、臣智　旱　岐　神功紀六十二年加羅國王己本旱岐、欽明紀二年卒麻旱岐

二、汝刀干（汝諧干）　次旱岐　欽明紀二年安羅次旱岐

三、彼刀干（彼藏干）　二、險側　下旱岐　同上多羅下旱岐及同五年條安羅下旱岐

四、五刀干（五常干）　上首位　欽明紀二年加羅上首位

五、留水干（留功干）　三、樊濊　二首位　欽明紀五年多羅二首位

六、留天干（留德干）

七、神天干（神道干）　四、殺奚

八、五天干（五能干）

九、神鬼干（臣貴干）　五、邑借

○上段括弧内の名稱は、駕洛國首祖首露王の時改稱せし者なり。

○中段臣智以下の事魏志に弁辰亦十二國又有諸小別邑各有渠帥大者名臣智其次有險側次有樊濊次有殺奚次有邑借とあり但し臣智、邑借は馬韓にもあり。

○神功紀六十二年に己本旱岐と見ゆるは王名とあれど、梁書新羅傳に子賁旱支とあると同じく之も官名ならむか。

(ロ) 官職二

角干
阿叱干
級干　新羅の職位を取りて置ける者なり新羅の部參照すべし

○角干以下は駕洛國記に九干改稱の條下に、取雞林職儀置角干阿叱干級干之秩其下官僚以周判漢儀而分定之とあり

(二) 百濟

百濟の官位は古爾王二十七年（神功皇后攝政六十年）に制定したる由、三國史記に見ゆ。其名稱の漢史に見えたるは、周書を以て始とし、其後代々の史に載す。今三國史記及周書に據りて此に之を掲ぐ。

(イ) 官職

一、佐平　一品五人

内臣佐平（掌宣納事）　大佐平　敏達紀十二年大佐平

内頭佐平（掌庫藏事）　上佐平　欽明紀四年上佐平沙宅己婁

内法佐平（掌禮儀事）　中佐平　同紀二年下部中佐平麻奇

衞士佐平（掌宿衞兵事）　下佐平　同紀四年下佐平木尹貴

朝廷佐平（掌刑獄事）　內佐平　皇極紀元年內佐平岐味

兵官佐平（掌外兵馬事）　以上等位未詳

二、達率二品　欽明紀十三年達率怒唎斯致契

三、恩率三品　敏達紀十二年恩率德爾

四、德率四品　欽明紀四年德率鼻利莫古

五、杆率五品　同紀九年中部杆率掠葉禮

六、奈率六品　同紀二年前部奈率鼻利莫古

七、將德七品　同紀十一年將德久貴、安閑紀元年下部脩德嬌德孫とある脩德は將德なるべし

八、施德八品　欽明紀四年物部施德麻加可牟

九、固德九品　同紀十年固德馬次文同四年護德己州己婁とあるは固德に同じかるべし

一〇、季德十品　同紀十五年季德己麻次

一一、對德十一品　同紀十五年對德進陁、安閑紀元年上部都德己州己婁とあるは對德なるべし

一二、文督十二品

一三、武督十三品　內頭　顯宗紀三年內頭莫古解

一四、佐軍十四品　領軍　同領軍古爾解

一五、振武十五品　參官　敏達紀十二年參官

一六、克虜十六品

（ロ）行政區劃

畿內

上部　安閑紀元年上部都德己州己婁

前部　欽明紀二年前部奈率鼻利莫古

中部　同中部奈率木劣昧淳

下部　同下部中佐平麻鹵

後部　孝德大化元年鬼部達率意斯

○周書百濟傳に百濟者（中略）治固麻城（中略）都下有萬家分爲五部、

○孝德紀に見ゆる鬼部は、三國史記を始め諸書に所見なし、故に假に後部の下に收む、

畿外

東方（日得安城）欽明紀十五年東方領物部莫哥武連

南方（日久知下城）

中方（日右沙城）

西方（日刀先城）

北方（日熊津城）

○周書百濟傳に、百濟者（中略）治固麻城其外更有五方（中略）各有方領以達率爲之郡（一方十郡、將三人以德率爲之、

(三) 高麗

高麗の官位は、冊府元龜に、高句麗後漢時其國置官有相加、對盧、沛者、古鄒大加、古鄒大加高句麗掌賓客之官大鴻臚也主簿、優一作于台使者、皂衣、先人、一說大官有大對盧、次有太大兄、大兄、小兄、意俟奢、烏拙、太大使者、小使者、褥奢、翳屬、仙人、并褥薩、復有內評外評、分掌內外事焉と見え、其最も古く見えたるは後漢書東夷傳なるが、諸書に載するところ異同少からず、北史唐書には、大對盧を第一とし太大兄を第二とせるに、隋書には太大兄を第一として對盧を第四とし、其の他名稱にも異同あるは、時代に依りて改定せられし所もあるべしと雖も、對盧を第四とせるが如きは、恐らくは筆者の誤なるべし。今此に一々其正否を論ずる遑なければ、北史東夷傳及三國史記を擧げて、書紀に所見の官名を其の下に注せり。

(イ) 官職一 (北史東夷傳)

一、大對盧
二、太大兄
三、大兄
四、小兄
五、意俟奢
六、烏拙
七、太大使者
八、大使者
九、小使者
一〇、褥奢
一一、翳屬
一二、仙人

(ロ) 官職二 (三國史記職官志)

一、主簿　天武紀五年後部主簿阿子
二、大相　天智紀十年上部大相可婁
三、位頭大兄、從大相　天武紀二年上部位頭大兄郡子
四、小相、狄相
五、小兄

天智紀六年高麗大兄男生、天武紀二年前部大兄碩千
○大兄男生は舊訓オホエとあり東國通鑑寶藏王廿五年の條に據るに、男生は初め中裏小兄にして後中裏大兄に進み、次に中裏位頭大兄となるとあり

天武紀九年南部大使(者)卯問

六、諸　兄
七、先　人
八、自　位

（八）行政區劃

内部（舊桂婁部）黄部
東部（舊順奴部）左部（青部上部）天智紀十年上部大相可婁
南部（舊灌奴部）前部（赤部）天武紀九年南部大使卯問、天智紀五年前部能婁
西部（舊消奴部）右部（白部下部）天武紀九年西部大兄俊德、同八年下部大相師需婁
北部（舊絶奴部）後部（黑部）天武紀五年大使後部主博阿子

○右は後漢書高勾麗傳の唐章懷太子注に據り、下の括弧内の名稱は推定によりて補へるものなり

○括弧内の舊某部とあるは、五部の起因となれる高勾麗の貴人五族（三國時代）の名稱なり、南北朝以後地方行政區劃たる五部に變じたるものなり

○尚ほ都下にも五部ありしなるべし

（四）新羅

新羅の官位は、儒理王九年（垂仁天皇六十二年）に制定せられしものにて、三國史記職官志に新羅官號因時沿革不同、其名言唐夷相雜、其曰侍中郎中等者皆唐官、其名義若可考、曰伊伐飡伊飡等者皆夷言、不知所以言之之意、當初之施設、必也職有常守、位有定員、所以辨其尊卑、待其人才之大小云々、儒理王九年置十七等と云ひて伊伐飡以下の名稱を擧げ、次に上大等（或云上臣）法興王十八年（繼體天皇二十五年）始置、大角干太宗王七年（齊明天皇六年）滅百濟論功、授大將軍金庾信大角干、於前十七等之上加之非常位也、太大角干文武王八年（天智天皇七年）滅高句麗、授留守金庾信以太大角、賞其元謀也と見え、之に依りて其の沿革の大略を知るを得べし。今同志に據りて左に之を掲げ書紀に所見の文を其の下に注す。

（イ）官職一

一、伊伐飡（或云伊罰干、干伐飡、角干、角粲、舒發翰、舒弗邯）
二、伊尺飡（或云伊飡）
三、迎　飡（或云迎判・蘇判）

持統紀三年翳飡金春秋
王族所持統紀三年蘇判位任官

四、波珍飡（或云、海干、破彌干）　天武紀十四年波珍飡金智祥神功紀卽位前紀微叱己知波珍干岐孝德紀大化三年上臣大阿飡金春秋

五、大阿飡　天武紀二年阿飡金祇山

六、阿　飡（或云阿尺干、阿粲）自二重阿飡一至二四重阿飡一　同紀一吉飡金薩儒

七、一吉飡（或云乙吉干）　孝德紀大化四年沙喙部沙飡金多遂、持統紀九年補命薩飡朴强國

八、沙　飡（或云薩飡、沙喙干）　齊明紀元年及飡彌武

九、級伐飡（或云汲飡、及伐干）　欽明紀廿二年久禮叱及伐干

一〇、大奈麻（或云大奈末）自二重奈麻一至二九重奈麻一　天武紀七年大奈末金世々

一一、奈　麻（或云奈末）自二重奈麻一至二七重奈麻一　欽明紀廿一年彌知己知奈末　奈麻禮—繼體紀廿三年夫智奈麻禮、奚奈麻禮　韓奈末—持統紀四年新羅韓奈末許滿

一二、大　舍（或云韓舍）　欽明紀廿二年奴氏大舍

一三、舍　知（或云小舍）

一四、吉　士（或云稽知、吉次）

一五、大　烏（或云大烏知）

一六、小　烏（或云小烏知）

一七、造　位（或云失沮知）

○書紀中に見ゆる任那の官名なる干岐次旱岐等は干を斯く呼びしものなるべし、そは梁書新羅傳に新羅の諸干を記して其官名有二子賁旱支（神功紀六十二年加羅國王己本旱岐は是なるべし按ずるに是伊伐飡か）齊旱支（蘇判か）謁旱支（阿尺干か）壹告支（乙吉干か）奇貝旱支二（奈貝の誤にて奈麻か）とあるにて知るべし

（ロ）官職二

上　大　等（或云上臣）　繼體紀廿三年上臣伊叱夫禮智干岐

大　角　干（或云大舒發翰）　天智紀七年上臣大角干庾信

太大角干（或云太大舒發翰）

（八）官職三

大　監　天武紀四年大監級飡金比蘇人監奈末金天沖

○兵部、大監二人眞平王四十五年初置、太宗王十五年加二一人一景德王改爲二侍郎一、惠恭王復稱二大監一位自二舍知一（武官の條に據る）至二阿飡一爲之

弟　監　同紀同年弟監大麻朴武麻弟監大舍金洛水

○同、弟監二人眞平王十一年置、太宗王五年改爲二大舍一景德王改爲二郎

中、惠恭王復稱大舍一位自舍知至奈麻一爲之

侍郎

（一）執事省典大等二人景德王六年改爲侍郎一位自奈麻至阿湌一　孝德紀大化四年侍郎二人

（二）兵部大監二人景德王改爲侍郎一　同　同　未詳

（二）行政區劃

及梁部（舊楊山部）

沙梁部（三國遺事云梁或作涿）　推古紀十八年沙喙部奈末竹世士

（舊高墟部）

漸梁部（或云牟梁部）（舊大樹部）

本彼部（舊于珍部）

漢祇部（舊加利部）

習比部（舊明活部）

○儒理王九年改六部之名、仍賜姓楊山部爲及梁部、（中略）明活部爲習比部、

○梁書新羅傳に、其俗呼城曰健牟羅其邑在內曰啄評在外曰邑勒亦中國之言郡縣也國有六啄評五十二邑勒とあり、六啄評は六部を指せるものなるべきも、啄評の文字は三國史記に見えず、但日本書紀の古訓に中部をシウホウと訓るものあれば、評は部の表音文字なるべきか

○三國遺事卷一辰韓の條に、崔致遠（高麗）云辰韓本燕人避之者故取涿水之名稱所居之邑里云沙涿漸涿等（羅人方言讀涿音爲道故或作沙梁梁亦讀道）とあり、此涿水云々の說の眞僞は暫く措くも、新羅人の方言に邑里を涿字（或は梁字）にて現はし、之を道と發音せることは信ずるを得べし、此の涿梁或は宅（音何れも道）は今朝鮮の地名に附する洞と同じきか、

書紀所見韓國地名略攷

佐伯義明

一、任那

(一) 任那

名稱 任那は日本にて呼べる名にて、○垂仁紀二年に下韓(アルシカラクニ)任那之政とあり任那を又下韓とも云へるか支那の史書には辨辰(後漢書韓傳)弁辰(魏志東夷傳)の稱を以て現れ、三國史記には加耶(或作伽耶)所謂六伽耶是也とあり。任那の稱は御間城(崇神)天皇の御名に負へるなるべく、(○垂仁紀二年注・天皇詔阿羅斯等曰、改汝本國名、負御間城天皇御名、便爲汝國名)加耶は蓋し慶尙北道星州附近なる伽耶山の名に因れるなるべし。

境域 三國遺事駕洛國記に「國稱大駕洛、又稱伽耶國、卽六伽耶之一也、餘五人各歸爲五伽耶主、東以黃山江、西南以滄海、西北以地理山、東北伽耶山南而爲國尾、」とあるは任那の全域○時代により差異あり を示せるものなるべし。黃山江は洛東江にして、地理山は智異山なれば、今の慶尙南道の內、東は洛東江、西は蟾津江にて限られし地、その全境域なりしなるべし。

(二) 任那十國

○欽明紀廿三年注に總言任那、別言加羅國・安羅國・斯二岐國・多羅國・卒麻國・古嗟國・子他國・散半下國・乞飡國・稔禮國、合十國とあり

【一、加羅(カラ)】

附、意富加羅

日本府の所在地なり。朝鮮の史書には伽耶・加落・駕洛と記され、魏志には弁辰狗耶國(弁辰傳・弁辰十二國の一)とあり。其位置は新羅の金海小京、高麗の金州の地、卽ち現今の慶尙南道金海郡金海面金海なり、○三國史記地理志一・金海小京、古金官國(一云伽落國、一云伽耶)、自始祖首露王、至十世仇亥王、以梁中大通四年、新羅法興王十九年、率百姓來降、以其地爲金官郡、文武王廿年、永隆元年、爲小京、景德王改名金海京、今海州、又垂仁紀二年の注に意富加羅とあるも此の加羅なるべし、○三國遺事駕洛國記・國稱大駕洛、又稱○神功紀四十九年、伽耶國、卽六伽耶之一也(荒田別鹿我別以下諸將)集于卓淳、擊新羅、而破之、因以平定比自㶱・南加羅・喙國・安羅・多羅・卓淳・加羅七國)

【二、安羅】三國史記（地理志一）に「咸安郡、法興王以大兵滅阿尸良國（一云阿羅加耶）以其地爲郡」とある阿羅加耶なるべし。今の慶尙南道咸安郡咸安面咸安の地なり（○魏志東夷傳弁辰の條に弁辰安邪國とあるも是なるべし（十九年始見））

【三、斯二岐】新羅の推火郡西火縣の地ならむか。然りとせば今の慶尙南道昌寧郡靈山面靈山の地なるべし（○三國史記地理志一・密城郡、本推火郡、領縣五、尙藥縣本西火（○欽明紀二年、夏四月縣、景德王改名今靈山縣（安羅次旱岐夷呑奚・大不孫・久取柔利・加羅上首位古殿奚・卒麻旱岐・散半奚旱岐兒・多羅下旱岐夷他・斯二岐旱岐兒・子他旱岐等與任那日本府吉備臣往赴百濟俱聽詔書））

【四、多羅】三國史記（地理志一）に「江陽郡、本大良（一作耶）州郡、景德王改名、今陝州」とある大良州なるべし。今の慶尙南道陝州郡陝州面陝州の地なり（○神功紀四十九年始見）

【五、卒麻】詳ならねど、他の任那諸國の位置より推定するに或は巨濟嶋の內ならむか（○魏志東夷傳の定漕馬國は卽ち卒麻ならむか（○欽明紀二年始見））

【六、古嵯】附、久嵯

文獻備考（郡縣沿革）に固城郡（古小伽耶國後爲古自郡（新羅））とある古自郡なるべし。今の慶尙南道固城郡固城面固城の地なり

欽明紀五年には久嵯とあり。（○魏志東夷傳の弁辰古資彌凍國も此地なるべし（○欽明紀五年・十一月日本吉備臣・新羅下旱岐大不孫・久取柔利・加羅上首位古殿奚・卒麻君・斯二岐・散半奚君兒・多羅・一首位訖乾智・子他旱岐・久嵯旱岐仍赴百濟））

【七、子他】文獻備考（郡縣沿革）に康州（本居烈州一名居陁（新羅））とある居陁卽ち子他なるべし。今の慶尙南道晉州郡晉州の地なり（○欽明紀二年始見）

【八、散半下】附、散半奚

詳ならざれども三國史記に江陽郡の領縣三岐縣とある地ならむか。然りとせば今の慶尙南道陝州郡三嘉面三嘉なるべし。欽明紀二年及五年には散半奚に作れり（○三國史記地理志一・江陽郡本大良（一作耶）州郡景德王改名今陝州領縣三三岐縣本（○欽明紀三支縣（一云麻杖）景德王改名今因之（二年始見））

【九、乞　飡】蓋し魏志東夷傳（弁辰）の古淳是國にして、三國史記（地理志一）の東萊郡本居漆山郡とある地ならむか。然りとせば今の慶尙南道東萊郡なるべし（○欽明紀廿三年以外見えず）

【十、稔　禮】附、荷山（ノムレ）　欽明紀五年に見ゆる荷山（○三月、臣嘗聞新羅每春秋多聚兵甲、欲襲安羅與荷山）にして、その位置は安羅（咸安）と加羅（金海）の間なるべし。思ふに慶尙南道昌原郡東面自如附近ならむ（○欽明紀廿三年以外見えず）

（三）其他の地名

【卓（トク）淳（ジュン）】附、喙淳　此地新羅に近く、（○神功紀四十九年・（我軍）俱集于卓淳擊新羅破之）喙・己呑・加羅に近く（○欽明紀二年・任那境接新羅恐致卓淳等禍：注等謂喙・己呑・加羅）又久禮山・安羅に近き（○欽明紀五年・新羅春取喙淳仍擯出我久禮山戎而近安羅處安羅耕種近久禮山處新羅耕種）地なり。然るに久禮山は慶尙南道宜寧郡嘉禮面なれば、卓淳は咸安郡漆原面の地に求むべきものゝ如し。欽明紀五年に喙淳とあるも同じ。（○神功紀四十六年・遣斯麻宿禰于卓淳國）

【比（ヒ）自（シ）炑（ホ）】文献備考（郡縣沿革）に火王郡（本比自火郡一云比斯麻伐羅）とある地にして、今の慶尙南道昌寧郡昌寧面昌寧の地なるべし（○神功紀四十九年始見）

【南（アリヒシノカ）加羅（ラ）】附、南迦羅　此の地常に喙・己呑と並擧せられて、此の兩地に近しと見ゆれば、京釜線勿禁驛（喙の故地）の南、龜浦附近（慶尙南道梁山郡）の地なるべきか。推古紀八年には南迦羅とあり（○神功紀四十九年始見）

【喙（トク）】喙は己呑と共に加羅に近くして新羅との境際にありと云ふ（○欽明紀二年・與新羅境際而被連年攻敗：喙・己呑居加羅任那無能救援由是見亡）境際は卽ち洛東江（舊黃山江）なれば、此の二地は何れもその沿岸の地なるべく、慶

倚南道樂山郡上西面附近の地、京畿線勿禁驛の邊りを喙の地とすべきか（○神功紀四十九年始見）

【己吞】附、己答

喙の北方、今日の三浪津附近の地か。欽明紀二年には己答ともあり（○繼體紀廿一年・近江毛野臣欲往任那復爲興建新羅所破南加羅喙己呑合任那）

【古奚津】

忱彌多禮を南海嶋と見、古奚津をその上陸地とせば、今の南海郡古縣面の地を以て之に充つべきか。（○神功紀四十九年仍移兵西廻至古奚津屠三南蠻忱彌多禮以賜百濟）

【忱彌多禮】

三國史記（地理志一）に「南海郡、神文王初置轉也山郡、海中嶋也」とある轉也山郡卽ち忱彌多禮なるべし。今の慶尙南道の南海嶋なり。（○神功紀四十九年始見）

【比利】附、辟中布彌支牛古

比利以下の四邑詳ならねど古奚津に近き地なるべく、思ふに南海嶋對岸の地ならむか（○神功紀四十九年・於是其王肖古及王子貴須亦領軍來會時比利辟中布彌支牛古四邑自然降服）

【意流村】附、州流須祇

此の地も詳ならねど同じく古奚津に近き南海嶋對岸の地と見るべきか（○神功紀四十九年・是以百濟王父子及荒田別木羅斤資等共會意流村注今云州流須祇）

【多沙城】附、帶沙帶沙江

三國史記（地理志一）に「河東郡本韓多沙郡」とある地にして、今の慶尙南道河東郡河東面河東卽ち是なり（○神功紀五十年・增賜多沙城於百濟爲往還路驛）又繼體紀（七・八年）に見ゆる帶沙も此の多沙と同一地なるべく、從て帶沙江（繼體紀九年）は今の蟾津江を以て之に充つるを得べし（○繼體紀七年・以己汶帶沙賜百濟國○同九年・物部連率舟師五百直詣帶沙江）

【哆唎】附、下哆唎下哆呼利

紀中單に哆唎とあるは下哆唎縣を意味するものゝ如く、○欽明紀廿三年・大將軍紀男麻呂宿禰將兵出哆唎副將河邊臣瓊缶出居曾山西欲圍新羅攻任那之狀此の居曾山卽ち今の昌原なれば此の哆唎は下唎と解せらるべし雄略紀に見えし下哆呼利縣亦下哆唎と同一なるが如し。而

して此の下哆呼利縣の別邑なる久麻那利（○雄略紀廿一年注・久麻那利者任那下哆呼唎縣之別邑也）の地は慶尙南道昌原郡熊川面なれば下哆唎は蓋し同郡馬山府附近の地と見るべきか（○繼體紀六年・哆唎國守押山奏、此四縣（上哆唎・下哆唎・沙陀・牟婁）近連百濟、遠隔日本）

【上哆唎】下哆唎の位置より考ふるに蓋し慶尙南道昌原郡班城附近の地なるべきか（○繼體紀六年）

【沙陀】附、牟婁

此の二縣の位置考へ難し（○繼體紀六年）

【久麻那利】久麻那利（○雄略紀廿一年注）は卽ち繼體紀廿三年に見えし熊川にて、（○熊川の韓語訓を假名書きにせし者なり）今の慶尙南道昌原郡熊川面の地その故地なるべし。尙百濟にも久麻那利あり參看すべし（○雄略紀廿一年注・久麻那利者任那國下哆呼唎縣之別邑也）

附、熊川

【沙都嶋】我が國の遣將物部連此の嶋に至りて伴跛人の叛けるを聞き直詣帶沙江（繼體紀九年）とあれば、今の蟾津江（卽ち帶沙江）口に近き嶋なるべし。（○繼體紀九年・物部連是月到于沙都嶋、傳聞伴跛人懷恨銜毒恃弱縱虐故物部連率舟師五百直詣帶沙江）

【汶慕羅】原注に嶋名也とあり。此も亦蟾津江口附近の嶋なるが如し。（○繼體紀九年・物部連等怖逃遁僅存身命泊汶慕羅）

【多沙津】加羅多沙津と見えたれば、地勢上より考ふるに黃山江口の地ならむか。（○繼體紀廿三年・百濟王曰、夫朝貢使者恒避嶋曲、每苦風波、因茲濕所、賚請以加羅多沙津爲臣朝貢津路）

【久斯牟羅】三國史記（地理志一）に「義安郡本屈自郡」とある屈自郡卽ち久斯牟羅にして、今の慶尙南道昌原面昌原の地なるべし。（○繼體紀廿三年・毛野臣次于熊川、本云次于任那久斯牟羅）

附、己叱己利城居曾山

又己叱己利城（繼體紀廿三年）の己利は背許等のコホリと同じく韓語の「邑」の義にして、久斯牟羅の牟羅は韓語の「山」の義なりとせば、己叱は卽ち久斯にして要するに同名なるべく、更に欽明紀（廿三年）に見えし居曾山も亦同地と見るを得べし

金官以下の四村は詳にし難けれども、按ずるに慶尙南道昌原に近き洛東江沿岸の地に之を求むべきものゝ如し。而して委陀は知多と同じきか。（○繼體紀廿三年（斯羅）上臣抄掠四村注・金官・背伐安多・委陀是爲四村）

【金官】

附、背伐　安多　委陀

【多々羅】

附、須那羅　知多　費智

同前。（○繼體紀廿三年注・一本云多々羅・須那羅・知多・費智爲四村也）但し此の四村後に新羅の地名として現れ、文字にも異同あり。今左に示すべし。

○多々羅・須那羅・知多・費智（繼體紀廿三年注）

○多々羅・須奈羅・和陀・發鬼（敏達紀四年）

○多々羅・素那羅・委陀・費知鬼（推古紀八年）

【伊斯枳牟羅城】

詳ならねど思ふに下の牟雌枳牟羅城と同じきか（○繼體紀廿四年・遣調吉士奉勅守伊斯枳牟羅城）

【背評】

附、能備己富里

詳ならねど、繼體紀（廿四年）に毛野臣聞百濟兵來迎討背評とあり。毛野臣は此時久斯牟羅（卽ち昌原）に居りしものなれば、昌原附近の地なるべし。原注に背評地名亦能備己富里とある能備己富里は同地の異名か、又は地を異にするか考え難し。

【久禮牟羅城】

附、久禮山

久禮牟羅（○繼體紀廿四年（百濟新羅二國圖度便地淹留弦晦築城而還號曰久禮牟羅城）は欽明紀に見えし久禮山なるべし。久禮山は喙淳に近く、（○欽明紀五年・新羅

【騰利枳牟羅】

附、布那牟羅
牟雌枳牟羅
阿夫羅
久知波多枳

【乞徳城】

春取喙淳（仍擯出我久禮山戎）而遂有之、洛東江に近し（○欽明紀五年新羅・安羅兩國之境有大江水要害之地也、吾欲據此峰築六城（中略）久禮山之五城庶自投兵降首卓淳之國亦復當興）按ずるに今の慶尙南道宜寧郡嘉禮面附近の地ならむか。

此の五城詳にし難けれど久禮山に近くして、洛東江に沿ひし地に在りしものゝ如し。欽明紀（五年）に久禮山之五城とあるも是なるべきか。（○繼體紀廿四年（自久禮牟羅）還時觸路拔騰利枳牟羅・久知波多枳五城）

（百濟）師進至于安羅營乞徳城（○繼體紀廿五年注）と見ゆれば、慶尙南道咸安（卽ち古の安羅）附近の地なるべし。

二、百濟

(一) 百濟

名稱　百濟は紀中或は扶餘（○繼體紀廿三年）と稱せらる。蓋し百濟は扶餘種にして王姓亦扶餘なればなり。支那の史籍には古くは伯濟國（後漢書韓傳・魏志東夷傳）と見え、晉書、宋書等に至りて百濟の名稱あり。

境域　今の京畿（後之を失ふ）忠淸・全羅の三道の地に亘りしものゝ如し。

(二) 其の地名

【辟支山】

附、避城

辟支山は天智紀（元年）に見えし百濟の一時の都なる避城と同じく、○古代朝鮮の都邑には皆山城あれば辟支山は避城山城の意なるべし避城は三國史記（地理志四・百濟）に西原一云臂城一云子谷とある臂城なるべし。されば新羅の西原京、卽ち今の忠淸北道淸州郡四州面淸州の地ならむ。今淸州の東に山城趾あるは蓋し辟支山の故地ならむか（○神功紀四十九年・千熊長彦與百濟王二登辟支山盟之）

【古沙山】

北史に古沙城とある（○百濟傳・其（百濟）都曰居拔城亦曰固麻城其外更有五方中方曰古沙城東方曰得安城南方曰久知下城西方曰刀先城北方曰熊津城）是なるべく、完山州高山縣、卽ち今

の全羅北道全州郡高山面の地と見て可なるべし。（○神功紀四十九年・復登二古沙山一共居二磐石上一時百濟王盟之曰云々）

【谷那鐵山】（コクナ　テツノムレ　カネ）

附、谷那（コクナ）

谷那鐵山（○神功紀五十二年・臣（百濟）國以西有二水源一出二自谷那鐵山一）は應神紀（八年注）に見ゆる谷那と同地なるべく、谷那は文獻備考（郡縣沿革）に欲乃郡とある地なるが如し。欲乃郡は今の全羅南道谷城郡谷城の地なり。

【峴南】（ケム　ナム）

峴南は卽ち山南にて、智異山（慶尙南道河東・山淸・咸陽三郡の境に在り）南の意なるべし。故に應神紀（八年注）に「百濟記云、阿花王立无レ禮於貴國一故奪二我忱彌多禮及峴南支侵谷那東韓之地一」とあるは「峴南の支侵谷那」の意に解すべきものならむ。（○應神紀八年始見）

【支侵】（シ　シム）

谷那に近き地なるべく、三國史記（地理志四）に支潯州支潯縣本只彡村とある地なるべし。（○魏志東夷傳馬韓五十四國中にも支侵國の名あり）（○應神紀八年始見）

【東韓】

應神紀八年には單に「東韓之地」とあれど、十六年には「東韓者甘羅城・高難城・爾林城是也」と注せり。されば此は全羅南道羅州附近の地域を汎稱せしものならむか。（○應神紀八年始見）

【甘羅城】（カン　ラノ　サシ）

詳にし難し（○應神紀十六年始見）

【高難城】

文獻備考（郡縣沿革）に「勿奈兮郡一云水入」とある地なるべし。全羅南道務安郡務安なり。（○應神紀十六年始見）

【爾林城】

文獻備考（郡縣沿革）に「爾陵夫里郡一云竹樹夫里・又仁夫里」とある地なるべし。全羅南道和順郡綾州なり。（○顯宗紀三年に之を高麗の地とせるは誤れり）（○應神紀十六年始見）

【倉下】

雄略紀（廿年）に「高麗王大發軍兵伐盡百濟、爰有少許遺衆聚居倉下」とあり。されば三國史記の文（次條所引）に「蓋鹵王出門西走」とあるに據て、漢城（廣州）の西方の地にヘスオトに類似の地名を求むるに平准押縣あり。○三國史記地理志二・長堤郡分津縣本高勾麗平准押縣・景德王改名今通津縣今の京畿道月串面通津なり。或は此の地ならむか。（○雄略紀廿年始見）

【尉禮】

附、漢城

三國史記に據るに、尉禮は欽明紀に見えし漢城なるが如し。○雄略紀廿年注百濟記云蓋鹵王乙卯年冬、狛大軍來攻二城、七日七夜王城陷落遂失尉禮國王及大后王子等皆沒敵手。○百濟本紀・蓋鹵王廿一年・秋九月麗王巨璉（長壽王）帥兵三萬來圍王都漢城（中略）王窘不知所圖領數十騎出門西走麗人追而害之。○欽明紀十三年・百濟棄漢城與平壤新羅因此入居漢城（今新羅之牛頭方尼彌方也）漢城は三國史記（地理志二）に漢州本高勾麗漢山郡新羅取之景德王改爲漢州今廣州」とある地にして今の京畿道廣州府なり。百濟は先づ此の地に都し、之を失ひて熊津に移り（文周王）更に聖王に至りて泗沘（所夫里）に移れり。

【久麻那利】

附、久麻怒利城　熊津

久麻那利○齊明紀六年に久麻怒利城とあるも同じは天智紀（六年）及び北史（東夷傳）唐書（百濟傳）等に見ゆる熊津城なるべし。其の地は三國史記に據るに○地理志三・熊州本百濟舊都唐高宗遣蘇定方平之置熊津都督府羅文武王取其地有之神文王改爲熊川州置都督景德王十六年改名熊州今分州新羅の熊川州（又熊州）高麗の分州今の忠淸南道公州なり。然るに此の久麻那利を「任那國下哆呼利縣之別邑」と注したるは（○雄略紀廿一年）任那の熊川（○繼體紀廿三年）と誤りしものなるべし。

【帶山城】

三國史記（地理志四）に古四州帶山縣本大尸山（郡）とある地なるべし。此

の大尸山郡は高麗の泰山郡○三國史記地理志三・大山郡本百濟大尸山郡景德王改名今泰山郡にして、文獻備考（郡縣沿革）に據るに今の全羅北道井邑郡泰仁面泰仁の地なり（○顯宗紀三年・紀生磐宿禰跨據任那交通高麗將西上三韓築帶山城距守東道斷運粮津令軍飢困）

【馬津城】

馬津城は三國史記に獨山城とある地ならむか。○欽明紀九年・馬津城之役・注・正月辛丑高麗率衆圍馬津城○三國史記百濟本紀聖王廿六年（卽ち欽明天皇九年）春正月高勾麗王平成與濊謀攻漢北獨山城）獨山城は其位置詳にし難けれども、京城附近の地と見て可なるものゝ如し。

【得爾辛】

蓋し馬津城に近き地ならむか。（○欽明紀九年・冬十月遣三百七十人於百濟助築城於得爾辛）

【平壤】

三國史記（地理志二）に「漢陽郡、本高勾麗北漢山郡一云平壤眞興王爲州置軍主、景德王改名、今楊州舊墟」とある平壤にて、京畿道京城府の地なり。

【百合野塞】

今の平壤に對して南平壤と稱せらる。（○欽明紀十二年・百濟聖明王親率衆往伐高麗獲漢城之地又進軍討平壤）

欽明紀（十四年）に「冬十年百濟王子餘昌○明王の子威德王なり悉發國中兵向高麗國築百合野塞」とあるを、三國史記（百濟本紀威德王元年）に「冬十月高勾麗大擧兵來攻熊川城、敗衂而歸」とあると同一記事と見れば、○威德王元年は欽明天皇十五年なれば一年の差あり百合野は今の忠淸南道公州（百濟の熊川卽ち熊津）附近の地なりしなるべし。

【東聖山】

前條に同じく公州附近の地なるべきか。（○欽明紀十四年・其（百濟）偏將打蛟疾鬪追却高麗王於東聖山之上）

【彌氏】

附、牟豆

按ずるに三國史記（地理志三）に武靈郡茂松縣本百濟松彌知縣とある地ならむか。松彌知縣は全羅南道高敞郡茂長面附近の地なり（○欽明紀十七年・遣筑紫大君率勇士一

【尾資之津】

千衛(百濟王子惠)彌氏(注・彌氏津名)又天智紀(二年)に見ゆる牟豆も蓋し同地なるべし。

三國史記を參照するに錦江(卽ち白江)附近の地なるが如し。○百濟本紀義慈王廿年(唐將)蘇定方引軍自城山濟海至國西德物島興首(百濟臣)曰、白江炭峴我國之要路也宜簡勇士往守之使唐兵不得入白江又聞唐(新)羅兵已過白江炭峴遣將軍堦伯出黃山與(新)羅兵戰堦伯死之於是合兵禦熊津口瀕江屯兵定方出左涯乘山而陣與之戰我(百濟)軍大敗定方將步騎直趨員都城(節略)按ずるに百濟の屎山郡馬西良縣、今の全羅北道沃溝郡舊邑面沃溝の邊の海岸ならむか。(○齊明紀六年注・蘇定方率船師軍尾資之津)

【怒受利山】

三國史記に炭峴或は沉峴とある山なるべきか。○百濟本紀義慈王廿年・興首(百濟臣)曰、白江炭峴(或云沉峴)我國之要路也宜簡勇士往守之使(新)羅人未得過炭峴云々大臣等曰羅軍升炭峴由徑而不得並兵擊之(節略)然りとせば慶尙・忠淸兩道の境なる秋風嶺と見て可なるべし。文獻備考(山川考)に忠淸北道陰城郡陰城面に炭峴(今沈峴)あれど此とは異なるが如し。(○齊明紀六年・蓬山・注・或本云北任劍利山)

【都々支留山】

詳ならざれど公州に近き地なるべし。久麻那利の條參照。(○齊明紀六年・蓬麻怒利城・注・或本云都々支留山)

【加巴利濱】

考へ難し。(○天智紀卽位前紀日本救高麗軍將等泊于百濟加巴利濱)

【疏留城】

三國史記(地理志三)に支羅城或云周留城とあると同地なるべく、此の支羅或は周留城に百濟の福信及僧道琛が王子豐を擁して據りし地○百濟本紀義慈王廿年・福信嘗將兵乃與浮屠道琛據周留城迎古王子扶餘豐嘗質於倭國者立之爲王にして、百濟の巢穴と稱せられ、○百濟本紀義慈王廿年(唐龍朔二年)劉仁願(唐將)曰周留城百濟巢穴群聚焉唐將等の攻伐の目標となりし地なり。而してその位置は白江○扶餘より下流の錦江を云の附近なり。○百濟本紀(唐龍朔二年)劉仁軌等帥水軍及粮船自熊津江(公洲を中心とせる錦江を云)往白江以會陸軍同

趨周留城遇倭人白江口四戰皆克然るに百濟の都（廿六代聖王以後）所夫里（○卽ち泗沘）亦白江の沿岸に在り。ソフリ、ソル、スル音相近く位置相似たるより見れば、之を同一地と考へて可ならむか。然りとせば周留城卽ち疏留城は忠淸南道扶餘郡扶餘面扶餘の地なるべし。（○天智紀元年・唐人新羅人伐高麗高麗乞救仍遣軍將據疏留城）

【州柔】

三國史記（地理志四）に悅己縣（一云豆陵尹城、一云豆串城、一云尹城）とある豆串城なるべし。今の忠淸南道靑陽郡定山面の地なり。今白谷里に古城趾あるは州柔の遺跡ならむか。○北史百濟傳に見ゆる百濟五方の中西方曰刀先城とあるも此の豆串城と見て可ならむ（○天智紀元年・此州柔肯遠隔田畝土地磽角非農桑之地是拒戰之場此焉久處恐可飢饉今可還於避城）

【古連旦徑】

避城の位置（○忠靑北道淸州郡四州面淸州）より考ふるに、此は錦江の支流なる美湖川の枝川、無心川なるべし。（○天智紀元年・避城者西北帶以古連旦徑之水）

【安德】

三國史記に據るに蓋し德安の誤ならむ。○天智紀二年・二月新羅人燒播百濟南畔四州并取安德等要地○新羅本紀文武王三年（卽ち天智天皇二年）二月欽純天存領兵攻取百濟居列城又攻居勿城沙平城降之又攻德安城德安は三國史記に得安縣本德近支（地理志四・都督府十三縣の一）、また德殷郡本百濟德近郡（地理志三）とある地にて、忠淸南道恩津郡なるべし。

【石城】

文獻備考に據るに、○文獻備考（郡縣沿革）百濟珍惡山縣、新羅石山縣、高麗石城縣、李朝石城郡所夫里郡珍惡山縣、卽ち今の忠淸南道扶餘郡石城面なるべし。（○天智紀二年・犬上馳告兵事於高麗而還見糺解於石城）

【白村江】

附、白村

支那及び朝鮮の史籍には白江と見え錦江の扶餘附近より下流を指して云ふ稱なり。（○天智紀二年・大唐軍將率戰船一百七十艘陣烈於白村江）又白村（○同紀・我欲自往待饗白村）は文意より按ず

るに白村江の略なるが如し。

【豆禮城】百濟の最南の港なり。按ずるに冬老縣の地に之を求むべきか。然りとせば全羅南道寶城郡烏城面附近の地なるべきなり。（○天智紀二年・國人相謂之曰州柔降矣事無奈何百濟之名絶于今日丘墓之所豈能復往但可往於豆禮城會日本軍將等相謀事機所須）

【枕服岐城】牟弖（卽ち彌氐）に近き地なるが如ければ、（○天智紀二年・遂敎本在枕服岐城之妻子等令知去國之心辛酉發途於牟弖）所非兮（兮又作芳）縣蓋し其地ならむか。所非兮縣は今の全羅南道長城郡森溪面の地なり。

【熊山縣】詳にし難けれども熊津（忠淸南道公州）附近に置かれし縣なるが如し。（○天智紀六年・熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰）

三　新羅

(一)　新羅

名稱　支那の史籍には古くは辰韓・秦韓（後漢書韓傳・魏志東夷傳）の稱を以て現れ、梁書に始めて新羅と見えたり。而して魏志東夷傳弁辰の條に弁辰十二國と共に列擧せられたる辰韓十二國中に斯盧國とあるは卽ち斯羅にして、日本名シラギも蓋し斯盧の音より出しなるべし。

境域　大約現今の慶尙南道・同北道の地域に當れり。

(二)　其の地名

【阿利那禮河】現今の何河に當れるか詳にし難けれど新羅王の誓言（○神功紀攝政前紀・新羅王波沙寺波旬之曰阿利那禮河返以之逆流及河石昇爲星辰）中に現れしを見れば、按ずるに或は洛東江（當時の黃山江）にてもあらむか。

【蹈鞴津】附、多々羅　多々羅原

草羅城の位置（慶尙南道梁山郡梁山面）より考ふるに蓋し洛東江口の地なるが如し。而して多々羅または多々羅原（○繼體紀廿三年）等の地名はこれより

【草羅城】（サワラノサシ）
附、匝羅（サクツラ）

少しく上流の地點ならむか。（○神功紀五年（襲津彦）詣新羅、次于蹈鞴津、拔草羅城、還之）文獻備考（郡縣沿革）に良州（本歌良州）とある歌良州なるべし。卽ち現今の慶尙南道梁山郡梁山面梁山の地なり。又雄略紀（九年の詔）に見えたる匝羅は蓋し同地ならむ。（○神功紀五年）

【沙比新羅】（サヒシラノ）
附、沙鼻城

文獻備考（郡縣沿革）に尙州（古沙伐國）とある沙伐國なるべく、今の慶尙北道尙州郡尙州面尙州附近ならむ。今其の東北に沙伐面あり。又天智紀（二年）に見ゆる沙鼻城（及び三國史記地理志四に見ゆる沙阜城）も同地なるべし。（○神功紀四十七年臣（百濟）等失道至沙比新羅、則新羅人捕臣等禁固固）

【筑足流城】（ツクソクルノサシ）
附、都久斯岐城（ツクシキノ）

按ずるに文獻備考（郡縣沿革）に笠山（一作園山）とある笠山の地に非ざるか。此地今の慶尙北道醴泉郡龍宮面龍宮の地にして、新羅高麗の境に近く、往時の交通路に當れり。又注に都久斯岐城とあるは蓋し其の別稱ならむか（○雄略紀八年・高麗王卽發軍兵、屯聚筑足流城、或本云都久斯岐城、遂歌舞興樂、於是新羅王夜聞高麗軍四面歌舞、知賊盡入新羅地）

【刀伽】（トカ）
附、古跛（コヘ）・布那宇羅（フナウラ）

詳にし難けれど此の三城加羅に近き地なるが如く、洛東江沿岸に存せしものゝ如し。（○繼體紀廿三年・遂於所經拔刀伽・古跛・布那宇羅三城）

【函山城】（カムレノサシ）

三國史記に管山城とある地なるべく、○欽明紀十五年（百濟王上表曰）有至臣帥軍以六月二至來以十二月九日遣攻斯羅臣先遣東方領物部某領其方軍士攻函山城、以月九日酉時焚城拔之○新羅本紀眞興王十五年（卽ち欽明天皇十五年）秋七月百濟王明禮（百濟本紀の聖王、書紀の聖明王なり）與加良來攻管山城、管山城は文獻備考（郡縣沿革）の管城郡（本古尸山）にて、今の忠淸北道沃川郡ならむ。今その近くに環山あり。

【久陀牟羅塞】（クタムラノソコ）

三國史記（地理志一）に永同郡本吉同郡とある吉同郡には非るか、然りと

せば忠清北道永同郡永同面永同の地なるべし。（○欽明紀十五年（餘昌）遂入新羅國築久陀牟羅塞）

【佐知村（スキリ）】

欽明紀（十五年）に新羅の佐知村飼馬奴苦都（更名谷智）が百濟の明王を弑せしことを記したるを三國史記（新羅本紀眞興王十五年）の記事に比するに「裨將三年山郡高干都刀急擊弑百濟王」とあり。苦都卽ち都刀なれば佐知村は三年山郡に關係ありと見るを得べし。然るに三國史記（地理志一）に三年郡本三年山郡の領縣に淸川縣本薩買縣あり。佐知は或は此の薩買の音を寫したるには非るか。薩買縣は今の忠淸北道淸川郡の地なり。（○欽明紀十五年：新羅謂佐知村飼馬奴苦都曰苦都賤奴也卽王名主也今使賤奴殺名主）

【阿羅波斯山】

詳にし難けれども、當時の交通路より考ふるに、今日の釜山附近の地なるべし。（○欽明紀二十二年：新羅築城於阿羅波斯山以備日本）

【岐怒江】

沙鼻（卽ち沙比新羅、慶尙北道尙州）岐怒江二城（○天智紀二年：前將軍毛野君稚子等取新羅沙鼻岐怒江二城）とあるより推せば、慶尙北道尙州附近の地なるが如し。

四、高麗

(一) 高勾麗

名稱 支那の史籍には漢書に高句驪縣（地理志玄菟郡）その位置は今の奉天省興京附近）とあるが初見なり。此は扶餘族の一派なる高勾驪族の名に因れるものにして、此の高勾驪族が次第に南下して高勾麗國を起せるなり。後漢書以下には高勾驪（後漢書・魏志・晉書・宋書等）勾驪（後漢書東夷傳）高麗（宋書帝紀・南齊書東南夷傳）等の稱を以て記載され、三國史記には高句麗と稱せられたり。書紀には高麗又は狛と記して何れもコマと訓めるが、狛は支那の史書の狛（又貊・貉・貊とも記さ

る）の誤られしものなるべく、貊及び穢等は高勾麗内に在りし異姓族なり。而して字書を按ずるに貊は熊に似たる獸なりと云、○康熙字典・貊大如貓狀頗似熊韓語にて熊はコムなり。コマ（狛・高麗）は卽ち是なるべし。

境域　漢の玄菟・樂浪二郡の地、卽ち黃海道・平安道・江原道・咸鏡道の地を占めたるものゝ如し。

（二）其の地名

○高麗は百濟と境を接し、且つ絕えず南下せる故紀中の高麗地名は本百濟の地にして後高句麗のものとなれるもの多く、其等は百濟の條に載せたれば、此には元來高勾麗の地と考へらるゝ「比津留都」の一地のみか擧ぐ。

【比津留都】　欽明紀の記事（○廿三年注・一本云六十一年大伴狹手彥連共百濟國斬却高麗王陽香於比津留都）に類似の事實を三國史記中に求むるに、聖王廿八年（欽明天皇十一年）春正月遣將軍達己領兵一萬攻取高勾麗道薩城（百濟本紀）とあり。按ずるに道薩城は文獻備考（郡縣沿革）に主夫吐郡童子勿縣（一云嶐山縣）とある地と見て可なるが如し。然りとせば此は今の京畿道通津附近の地ならむ。

五、伴跛

（一）伴跛

名稱　此の國名繼體紀（七年・八年）に見えしのみにて他に見えず。（○七年紀（百濟）奏云「伴跛國略奪臣國己汶之地」）

境域　其の境域も詳ならねど、紀中に現れし地名より推定するに、全羅南道求禮郡一帶の地を本據とせしものゝ如し。

（二）其の地名

【己汶】　三國史記（地理志四）に支潯州己汶縣本今勿あり。此の地なるべけれど其の位置詳ならず。按ずるに帶沙（慶尙南道河東郡河東・任那の部參照）に近き地なるべきを以て、（○繼體紀七年・以己汶帶沙賜百濟

國に）全羅南道求禮郡長文面の地と見て可ならむか。

【子呑】此も帶沙に近き地なるべければ、（○繼體紀八年・伴跛築城於子呑帶沙）蓋し今の慶尙南道河東郡古田面の地ならむか。又繼體紀廿一年に見えし己呑（任那の部參照）とは異なるべし。

【滿奚】此の地も子呑・帶沙に近しと推せらるれば、（○繼體紀八年・伴跛築城於子呑帶沙而連滿奚置烽候邸閣以備日本）蟾津江（卽ち帶沙江・任那の部參照）口の地に之を求むべきものゝ如し。

【爾列比】附、麻須比　按ずるに此の兩地も蟾津江に近き地ならむか。（○繼體紀八年・復築城於爾列比麻須比）

【麻且奚】附、推封　此の兩地は蓋し晉州に近き地なるべきか。そは繼體紀（八年）の文に築城於爾列比麻須比而續麻且奚推封聚士卒兵器以逼新羅とあるより考ふるに、南江（洛東江支流）の支流なる德川江は晉州附近にて南江に合流すれば、新羅に備ふる爲には地形上此の德川江と蟾津江の間の地に築城すべきに非ずや。（○慶尙道と全羅道の境の南方には智異山ありて交通し難し）故に晉州附近の地と考ふるなり。

六、耽羅

名稱　支那の史籍には躭牟羅（隋書百濟傳）躭牟羅（北史百濟傳）とあり。三國史記（百濟本紀）には躭羅と見ゆ。（○繼體紀二年・耽羅人初通百濟國）

境域　朝鮮半島の南方海上（我五島列島の西方）なる濟州島卽ち其の地なり。

七、浿水

浿水に三說あり。(一)は史記朝鮮傳等に見えし浿水にして、此は今の鴨綠江なりとせらる。(二)は唐書・高麗傳等に見えし（其君居平壤城亦謂長安城漢樂浪郡也贏隨山屈繚爲郭南涯浿水王築宮其左）浿水にして、今日の大同江なり。○高麗の王都平壤は（卽ち今の平壤なり）(三)は三國史記に見えし○百濟本紀始祖溫祚王・沸流謂弟溫祚曰、吾等徙在此鬱々如病贅不如奉母氏南遊卜地別立國都遂與弟率羣類渡浿帶二水至彌鄒忽同十三年・遂畫定疆場北至浿河南限熊川西窮大海東極走壤浿又は浿河にして、此は今日の黃海道の禮成江、或は京畿道の臨津江と考へられたり。而して紀中（天智紀）に見えし浿水は高麗城下（卽ち平壤）に近きものなるべければ第二に擧げたる大同江と見るべきものゝ如し。（○天智紀卽位前紀・七月・蘇將軍（唐將蘇定方）與突厥王子契苾加力等水陸二路至于高麗城下、十二月高麗言、惟十二月、於高麗國寒極浿凍、故唐軍雲車衝橹鼓鉦吼然高麗士卒膽勇雄壯故更取唐二壘唯有二塞亦備夜取之計）○尙注意すべきは浿を單

昭和十五年五月十五日印刷
昭和十五年五月二十日發行

豫約頒價 金二圓

東京市淀橋區西大久保一丁目三七三番地
編纂者 佐伯有義

東京市麴町區有樂町二丁目三番地朝日新聞社
發行者 櫻木俊晃

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者 小坂孟

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 大日本印刷株式會社

不許複製

增補 六國史

貳卷

（日本書紀卷下）

發行所 東京 大阪 朝日新聞社

嚴南堂書店
TEL.(261)0.396
東京・神田神保町二ノ二

PURCHASED FOR THE

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

FROM THE

CANADA COUNCIL SPECIAL GRANT

FOR

FAR EASTERN STUDIES

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03027 8147